

Fate/Grand Order 白
銀の刃

藤渚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

さあさあ、お立ち会いお立ち会い！

片や数多の戦場を駆け抜け、白き夜叉と畏怖された男。

片や幾^{いく}十^そもの世界を跳躍した、人類最後の希望と呼ばれた少年。

交わることのなかった世界の彼等が出会った時、この変貌した江戸を舞台に繰り広げられます。一世一度の大活劇を、皆々様どうぞご笑覧あれ！

※この物語は、『Fate／Grand Order』と『銀魂』の両作品によるクロスオーバー小説となっております。作品名・執筆者も同名で、pixiv様のほうにも掲載させていただいております。

目次

序章

【零】 ハジマリの始めに | 1

【壹】 万事屋銀ちゃん (I) | 10

【壹】 万事屋銀ちゃん (II) | 37

【貳】 邂逅 (I) | 64

【貳】 邂逅 (II) | 88

【貳】 邂逅 (III) | 115

【貳】 邂逅 (IV) | 143

【貳・伍】 緞帳は、静かに上がる

162

第一夜 常夜の江戸

【参】 常夜の国 (I) | 179

【参】 常夜の国 (II) | 201

【参】 常夜の国 (III) | 225

【参】 常夜の国 (IV) | 250

【参】 常夜の国 (V) | 274

【肆】 幽暗の暁 (I) | 300

【肆】 幽暗の暁 (II) | 327

【肆】 《其の一》「銀さんと行くよ」

353

【肆】 《其の二》「桂さんについていくね」

| 365

【肆】 《其の三》「高杉さん、よろしくお

願います…！」 | 380

【伍】 曖昧模糊 (I) | 393

【伍】 曖昧模糊 (Ⅱ) | 420

【伍】 曖昧模糊 (Ⅲ) | 445

【伍】 曖昧模糊 (Ⅳ) | 471

【伍・伍】 糸繰りの傀儡は、破滅を舞う

502

第二夜 影鬼

【陸】 赤い紅い、桜の下で (Ⅰ)

536

【陸】 赤い紅い、桜の下で (Ⅱ)

568

【七】 暗雲 (Ⅰ) | 595

【七】 暗雲 (Ⅱ) | 622

【捌】 再会そして、契約 (Ⅰ)

650

【捌】 再会そして、契約 (Ⅱ)

676

【捌】 再会そして、契約 (Ⅲ)

700

【捌】 再会そして、契約 (Ⅳ)

726

【捌】 再会そして、契約 (Ⅴ)

751

【捌・伍】 暮夜 | 769

【玖】 恒道館の朝 (Ⅰ) | 794

【不定期閑話 銀さんと××】

銀さんと藤丸 | 816

銀さんと藤丸 其の二 ————— 822

銀さんと藤丸 其の三&お知らせ

831

銀さんとアストルフオ 質問回答編

837

銀さんと藤丸+ α 小喃詰合わせ

850

銀さん?と藤丸+ α 祝・万聖節前夜

祭

————— 869

銀さんと万事屋+ α チキチキ冬祭り

————— 898

銀さん+ α と藤丸 カルデアカカオ祭

り (I)

————— 925

銀さん+ α と藤丸 カルデアカカオ祭

り (II)

————— 938

銀さん+ α と藤丸 カルデアカカオ祭

り (III)

————— 961

序章

【零】ハジマリの始めに

——『鬼』は哭く。

かつての過ちにより、喪つたものに追いつきながら。

夜の帳に覆われ、陽光を奪われたこの街を、唯一見下ろすは異形を象つた月。

——『鬼』は駆ける。

かつて喪くしたものを、今度こそ己が手で取り戻す為に。

特異点と化した闇夜の街・かぶき町を奔走するは、皆のカツチヨイ〜イ万事屋・銀さんこと坂田銀時！

アゝンド、人理継続……うんたら機関？カルデアのマスター、藤丸立香！

そして、彼らのとつても愉快で愉快的仲間達とが繰り広げる物語が、今始まろうとしている。

さあさあ、お立会いお立会い！

片や数多の戦場を駆け抜け、白き夜叉と畏怖された男。

片や幾十もの世界を跳躍した、人類最後の希望と呼ばれた少年。

交わることのなかった世界の彼等が出会った時、この変貌した江戸を舞台に繰り広げられます一世一度の大活劇を、皆々様どうぞご覧あれ！

F a t e / G r a n d O r d e r

白銀の刃

「つてオイイイイイ!! 誰が愉快な仲間達だコラア!! しかも何で二回言った!!」

「大事な事は二回言うつて昔つから言われてんだろ、これから読んでくれる優しくいい皆にもしつかり覚えてもらわねえと。なつ定春?」

「わんつ。」

「つーか何であらすじを銀さんが担当してるんですか? 折角最初の方カッコいい感じだったのに色々台無しになってんだろ!」

「おいコラ天パ! 主役はお前だけじゃねーだろヨ、肝心の藤丸はどこやったアルか!!」

「あいつならさつき、『あ、ヤバい。部屋のこたつのコンセント抜いてないかも……多分大丈夫だと思うけど、もし忘れてたらフランに怒られちゃうな』つて言い残して一旦カルデアに戻ってつたぜ。なつ定春?」

「く〜ん。」

「なにしてんの藤丸くん!! そんなの誰かに頼めばいいでしょう!!」

「あの新八、おめえも思春期真っ盛りの男児なら分かんだろ。ああいう年頃の奴つてのは、他人に見られたくない秘密の一つや二つ抱えても可笑しくねえの。藤丸だつてマシユに見られたら困るもん部屋に置いてるかもしれないねえじゃん。例えばほら、他者から

したらドン引きするような内容のエロ本とか。なっ定春?」

「わう?」

「何でさつきから定春に同意を求めてんです? そうしないと喋れないんですか?」

「ここでの俺達の表現方法は全部活字だからな。万が一途中でフラツといなくなつた奴がいたとしても、読み手側はそんなの分かんねえだろ? だからこうしてこまめに存在の有無を確認してんだよ。なっ定春?」

「わんっ。」

「それはそうとして銀ちゃん、藤丸がそんな如何わしいドエロ本持つてるわけねーヨ。その童貞眼鏡じゃあるめえし。ねっ定春?」

「わおん! (コクリ)」

「コクリじゃないよ定春!! つか神楽ちゃん何で知って……………あ、ちよつと違うんです。違いますから。そそそそそんな本持つてませんから。だから神楽ちゃん……………やだなあ、銀さんまでそんな顔しないでくださいよう。仮に持つてたとしても、それは僕の私物ではなく友達が部屋に忘れてつて……………つて、二人ともどこ行くの? 活字表現だからいまいち伝わりにくいけど、僕が目を離して数秒しか経つてないのに二人との距離が凄く遠くなつたね? ええええ待つて! 待つて!! だつてまだ注意事項の説明もしてないし、藤丸君だつて戻つてきてないし! あつちよつ、嘘? どこに行くんだよ二人とも!! ひそひそ

話しながら欽ちゃん走りで離れてかないで！眼鏡しかとりえのない僕をここに一人置いていったってどうしようもないだろ？ねえ待って！置いてかないで！！お願いいい300円あげるからああああ………!!」

「やつほくおまたせーやつぱり消し忘れたこたつにうつかり冷え切った足を突っ込んでそのまま出てこられなくなつたマスターの代わりに僕が来たよ！……え？誰だつて？僕はシャルルマーニュ十二勇士の一人、弱くても頼ってくれると嬉しいライダーのサーヴァント、アストルフオだ！もう知ってる人も初めましての人もよろしくね☆」

「わんっ。」

「つて、あれれ？定春くんだけかい？銀ちゃんや他の皆は？」

「わうう、わふっ。」

「ふんふん、あらすじの紹介はもうしてくれただね。どうもありがとう！（ナデナデ）」

「くぅんくぅん（スリスリ）」

「よし、銀ちゃん達があらずじをかつこよく説明してくれたみたいだし、ここからは僕と定春くんとの注意事項の説明を簡潔に進めていこう！これから読むっていう人は是非目を通してね！」

「わふっ、わふっ。」

「ええと、まずこの物語は『Fate／Grand Order』と『銀魂』の二作品によるクロスオーバーです。なので双方のキャラクター同士の絡みがガッツリあるよ！」

「わんっ。」

「基本ギャグメインで進めていくお話だけど、僕らや銀ちゃん達が戦ったりする場面もあるよ。その中で激しい暴力、あと怪我をして流血する描写もあつたりするから、苦手な人は気をつけて！」

「くぅん……。」

「それとね、双方の原作には無いオリジナルな設定もあるらしいんだって？どんなのだ

ろうね?」

「わおんっ。」

「それとそれと、原作が原作だから微妙な下ネタ……とかも入っちゃみたい、だよ?やだなあくもう♪」

「わう?」

「あと、この物語でのF G Oサイドの時間軸は第1部クリア後の1. 5部、『英霊剣豪七番勝負』が終わった辺りなんだ。なので多少のネタバレ要素も含まれると思うから、苦手な人は本っ当に注意してね!」

「わんわんっ!」

「……さて、こんな感じでいいかな?もうすぐ本編も始まっちゃうみたいだし、もたもたしてると皆に置いてかれちゃう!」

「わうっ!!」

「ここに取り残されると本編に出られなくなっちゃうかも!大変く台詞だけの役回りです終わるなんてゴメンだよ!急ごう定春くん!」

「わんわん!」

「ここまで熱心に読んでくれた皆、どうもありがとう!さあ、『F a t e / G r a n d

Order 白銀の刃』！いよいよ始まるよ！物語の進み具合は中の人の頑張り次第だから、僕にはどうなるのか分からないけども、どうぞよろしくね〜！」

「わんっ！」

「銀さ〜ん！アストルフォ〜！いやあゴメンごめん、冷えた足をちよつとだけ暖めようと思っただけなのに、やっぱりこたつには勝てなかつたよ……………って、あれ？何で皆いないの？あらすじは？注意事項の説明は？え？俺がこたつという魔物に獲り込まれてる間に全部終わったの？マジでか……………あ、じゃあせめて自己紹介だけでも——え、何？そんな時間はない？どうせ本編の初っ端から出番なんだからそこでやれ？いやいや、確かにプロローグの後にすぐ出番なだけどさあ、一応主人公なんだし簡潔にでもしたほうがいいんじゃないかなあ。だつてさ、銀さんだつて自己紹介したんでしょ？さつき……………はい？やつてないの？エロ本の話して新八君に追われながらさつきと

本編に戻っていった………そ、そうなんだ。というか、どんな流れであらすじからエロ本の話題になるんだろう………は？そんなことよりもうすぐ本編始まる？うわああああそれ早く言ってよおお!!ここまで来るのに片道結構かかったのに………急がないと？さつきグラサンかけた変なニート風の男が『主人公になれたら実質それニート脱出できんじゃね？だつて要は主人公つて職じゃんそれ』つて歓喜しながら俺不在のカルデアに向かつていった？冗談じゃねーよ!!どこぞのMADAOか知らない奴に主人公の座奪われて堪るもんかああ!!ええと、あのつ、ここまで長つたらしい台詞連ねて全部読んでくれてる人がいるかも分かんないけども、また本編の方でお会いしましょう！それでは最後に名前だけ、藤丸立香でした——つて待つて！今行く！今行くから出口閉めないでえええええつ!!」

【壺】 万事屋銀ちゃん（Ⅰ）

——目を開けると、一面の茜色だった。

山も、畑も、道脇のあばら家も、鬼灯の色に染まっている。

目の前を通り過ぎていく、二匹の赤蜻蛉。

番が飛んで行つた先には、二つの小さな影が並んで歩いていた。

ふわり、ふわり。柔らかい。でもくすぐつたい。

長く伸びた亜麻色の髪が、風に靡いて頬を掠める。

身を委ねた大きな背中から伝わってくる温もりに、花の香とは違う、優しい匂いに心から安堵する。

ふと、前方にいた一人が足を止め、猫じやらしを片手にこちらへと駆け寄ってくる。高い位置で結わえた髪が、振動でびよこびよこ揺れていた。

満面の笑顔で、ぱくぱくと口を動かす少年。

だがその声を、よく聞き取ることが出来ない。

するともう一人も体を反転させ、睨みつけるような顔つきで歩み寄ってくる。

両の吊り目を更に吊り上げ、何かを怒鳴るその少年の怒りの矛先は、どうやら背負われている自分の方に向けられているようだ。

だが、先程の少年と同様に、伝えてくる言葉の中身を捉えることが出来ない。

何故、どうして——

微睡んだ意識の中で、唐突に不安に駆り立てられる。

もしかすると、彼らの声が『聞こえない』のではなく、『思い出せない』から………だから彼らの伝えてくる言葉の意図が理解出来ないのではないだろうか。

ならば、何故思い出せないのだろう。

この感覚はまるで、幾月………否、幾年もの間、その声を聞いていないかのようで——

「、——。」

不意に、声をかけられる。

とても温かで、陽光のような声が紡いだそれは、名前だったのだろうか。

わだかたま
蟠つていた胸中の不安は、熱に触れた氷のように少しずつ溶けていった。

——いつしか夕日は山々の間へとその姿を隠し、橙の空に夜色の帳が下ろされようとしている。

徐々に低くなつていく気温が身に沁みていく中で、掴まった背中から伝わってくる温かさが心地良い。

——こうして過去の記憶を再生するのも、もう何回目になるだろうか。

何度も繰り返していくうちに、記憶の断片は幾つも朧気になっていく。気がつけばもう、あちこちツギハギだらけになってしまった。

もう、どこからが妄想で、どこからが本当の記憶なのかも分からない。

——それでも、それでもせめて、この暖かな記憶が、紛れもない真実であるならば。

この大切な人と、大切な友とまた一緒に、

夕焼け空の下の帰り道を、共に歩くだけの些細な幸せでも、

——どうか永遠とわに、続いてくれますように。

*
*
*
*
*

灰色の空から、しんしんと積っていく白い雪。窓から見える景色は、雪で覆われた山々と地面が延々と広がるばかり。

あゝ雪だね、冬だもんね〜と寒そうな景色を窓から眺めながら、こたつに身体を入れて温もりを感じつつ、テーブルの真ん中に置いてあるみかんを食すのが、日本の冬の粹な過ごし方というもの。

だが、今が冬だからという理由で雪が降っているわけではない。そう、ここは一年間を通してずっと雪が降り続けているのである。

標高6000mの雪山、その地下に作られたこの施設は、『人理継続保障機関・カルデア』。未来における人類社会の存続を保障する為に世界各国が共同で設立した特務機関であり、主にその工房は地下に存在する。

『カルデアス』により観測された人類史の未来、それは2016年に人類が滅亡するという残酷な結果の証明だった。これを阻止すべく、カルデアに所属するスタッフを始め、『マスター』と称される存在に召喚され、その者と契約を交わした頼もしい英霊――

―サーヴァント達は、影響を及ぼそうとする様々な過去の特異点事象の特定、そして介入し未来を修正すべく、日夜激しい業務や戦闘に励んでいるのであった。

そんなカルデアの一角、無人の廊下に響き渡る、ツターンツターンツと床を蹴る音。ついでに鼻唄のBGMもつけながら、曲がり角からひよっこりと現れたのは、スキップをする一人の少年だった。

彼の名は藤丸^{ふじまる}立香^{りっか}。このカルデアに所属しているサーヴァント達を使役する存在……『マスター』である。

一見どこにでもいるような平々凡々の印象を受ける彼だが、これまで様々な危機を幾度も乗り越えてきているのだ。神々の闘いや世界の崩壊、宇宙からの来訪者やらデットヒートなサマーレース、果てはハロウィンに出現したチエイテピラミット姫路城メカエリチャン……今日^{こんにち}までにおいても、彼と彼の仲間達によって修復された特異点は数知れず。

そんな多忙の彼であるが、今日は任務という任務は殆ど無く、いわばオフの日なのである。久々にゆったりとした一日を過ごせることに嬉しさを隠しきれず、自然と浮足立っていた。

今日は何をして過ごそうかな？読みかけの本を読むのもいいし、誰かとお喋りするのも楽しい。あ、でも一日中ベッドの上でぐうたらゴロゴロして怠惰に過ごすのも魅力的

だよなく……などと様々なプランを頭の中で巡らせていると、ぐう、と腹の虫が間抜けな声で鳴いた。

そうだ、その前に朝ごはん朝ごはん。今日の献立はなんだろうなと期待に胸を膨らませ、スキップしながら角を曲がった時だった。

「フオウツ。」

甲高い声鳴き声が聞こえたのと、藤丸の視界が真っ白いものに覆われたのはほぼ同時。

突如顔面にダイブしてきたモフモフとしたものに、「へぶつ」と声が漏れる。

「フオウさん、廊下は走ってはいけませんよ……あつ、先輩！」

顔にへばりついている小動物を剥がすと、せわしない足音と共に現れた声の主の姿を
確認する。

「あ、おはようマシユ。フオウ君もおはよう。」

小走りで駆けてきた眼鏡の少女……マシユ、そして腕に抱いた白い小動物、フオウに藤丸はにこやかに挨拶を返した。

「おはようございます、先輩。これからフオウさんと起こしに行こうと思っていたところでした。」

「そっかー、ところでマシユは朝ごはん食べた？今から食堂に行こうと思ってただけ

ど、よかったら一緒に行かないかい？」

「いいえ、私も朝食はまだなんです。是非ご一緒させてくださいー！」

藤丸の手からフオウを受け取りながら、マシユは微笑みを浮かべ嬉しそうに答える。

マシユ——マシユ・キリエライト。このカルデアに所属しており、英霊と融合した『デミ・サーヴァント』の少女

盾の能力を持つクラス・シールドであり、戦闘においても果敢に奮闘する頼もしい存在……のだが、現在は自身の魔術回路がONに出来ない状態であり、殆ど戦う機会は無い。とはいっても藤丸のために貢献したいという熱意は変わらず、戦闘に加わる場面はなくともオペレーターとして遠方にいる藤丸を助けたりなど、やっぱり頼もしい後輩なのである。

そして彼女の腕の中で丸くなっている小動物……鳴き声をそのままに名前もフオウ。マシユによく懐き、カルデアを徘徊するこの生き物はリスなのか狐なのか、はたまた猫なのか。皆に『君』やら『さん』やらをつけてよく呼ばれており、その愛くるしさと白いモフモフとした魅惑のボディで癒される者達は数知れず。うーんやはりモフモフは素晴らしきかな。

「そういえば先輩、随分ご機嫌な様子でしたね。何かとても良い事がありましたか？」

「え、そう？そんなウキウキしてた？」

「はい。先程もあその角を曲がってこられた際、軽やかなステップと鼻唄が聞こえてきたもので。」

「フオウフオウ。」

「おおう、恥ずかしいところを目撃されてしまったな。まあ、俺が浮足立ってたのは久々の休みだというのもあるけど……………」

照れ臭そうに頬を掻きながら、藤丸は利き手を前へと伸ばす。

すると、その手は画面の外——漫画でいうところのコマの外、TVだとブラウン管の向こう、そんな空間の中へと突き抜けていった。

「せ、先輩!!」

「ドフォーウ!!」

目の前で起きたありえないミラクルに、開いた口が塞がらないマッシュとフオウを他所に、藤丸は突っ込んだ手を動かして何かを漁っている。

活字だから場面上上手く想像出来ない、だって?——いいか、イメージしろ。己の想像力を膨らませるんだ。使えるものは何でも使おう、漫画の枠線を引き千切る作品だってあるじゃないか。

暫くガサゴソした後、「お、あったあった」と呟いた藤丸がゆつくりと腕を引き抜く。

その手に握られていたのは、FGOプレイヤーの方々なら見慣れているであろう、黄色

いりボンの赤い箱。

「先輩……その箱はもしや……………」

「これ？プレゼントボックスだよ。APとか経験値の横で、中身が入っているとピヨコピヨコ動いてるやつ。」

「いつもそうやって受け取っていらっしやっただけですか?! 私、初めて知りました……………」

驚愕の事実に啞然とするマシユの前で、藤丸は意気揚々とりボンを解いていく。

「今日はログイン7日目だから、ボーナスはお楽しみみの呼符ちゃん……………」

パカリと蓋を開け、中身とご対面を果たした藤丸。だがしかし、箱を見下ろしたままの表情は笑顔のまま固まっている。

「……………先輩?」

お楽しみみの呼符ちゃんに出会えたというのに、一体どうしたのだろう……………まるでビデオの一時停止のように動かなくなった藤丸を心配し、マシユは彼の手にある空いた箱へと目を移した。

「……………、これは……………っ!!」

* * * * *

「え、何？貰った呼符がいつものと違う、だって？」

所変わって、ここはカルデア内のある工房。

様々な魔術関連のアイテムが並ぶその奥から、ひよつこりと顔を覗かせる一人の美女。

彼女もまたこのカルデアに所属するサーヴァントであり、その正体は名も高き『レオナルド・ダ・ヴィンチ』。通称ダヴィンチちゃんである。

クラスは魔術師であるキャスター。美人で聡明、何でも出来ちゃう万能英霊……え？レオナルド・ダ・ヴィンチは男性であるのに、このレオナルド・ダ・ヴィンチはどうして女性なのか、だって？えー本人からの説明によると、彼女……もとい彼は自身の人生の最高傑作である『モナ・リザ』の美しさに大変心酔し、現界の際にその美しい姿を自分自身のもので具現化し召喚されたとかなんとか。

外見はモデルの絵画そのものの艶麗な美女であるが、肝心の中身は生前と何ら変わらない。つまりは見た目はモナ・リザ、頭脳や心はオツサンと、まるで薬を飲まされて縮

んだ某名探偵のような状態である。

「はいはい、長々とした説明ご苦労。それで、君達はこの天才ダヴィンチちゃんに、そのおかしな呼符を確かめてもらいたいとやってきたわけだ。」

うんうんと頷くダヴィンチちゃんの向く先には、並んで怪訝な顔をした藤丸とマシユが立っていた。

「で、その呼符は具体的にどこがおかしいんだい？」

「うーん………詳しいことは、直接見てもらったほうが早いかも。」

そう言う藤丸は蓋を開け、軽やかな足取りで工房の奥から出てきたダヴィンチちゃんへと箱を差し出す。

「どれどれ」と興味津々に中身を覗くダヴィンチちゃん。すると彼女の顔も先程のマシユと同様、驚愕が広がっていった。

「………これは………つ！！」

——強張った顔の額を、冷たい汗が伝い落ちる。そんな、ありえない、と呟くダヴィンチちゃんの声は、微かに震えているようだった。

ごくり、誰となく生唾を飲み込んだ音が、静寂に響き渡る。やがてダヴィンチちゃんは、自らの手を恐る恐る箱へと入れた。

皆が固い表情で見守る中、彼女の手に握られていたのは……

「……銀色だね、これは。」

そんなド直球なダヴィンチちゃんの感想に、銀色だよねーと藤丸が返した。

彼女が箱から取り出したそれは、たった一つで聖晶石3個分の役割を果たすという、(運さえあれば) お目当てのあの英霊を召喚出来ちゃう夢のチケット・呼符……なのだが、今まさに問題となっているのはその外観である。

形や大きさ、重さまでには紛うことなきお馴染みの姿であるが、ダヴィンチちゃんが手にしているその呼符は、あの輝かしい高級感溢れるゴールドではなく、何故か銀色。そう、シルバーなのだ。

工房のライトを反射し、キラキラと白く光る呼符を観察しながら、ダヴィンチちゃん は声を漏らした。

「いや〜あこれはこれは、こんなの初めて見るね。きつとカルデア始まって以来だ、うん。」

「あの、ダヴィンチちゃん………思いの外反応が薄くはないですか？先程あんなに驚かれて、肩まで戦慄かせていらっしやっただというのに。」

「ああ、あれね。読んでる側に緊張感を持たせようかと思っただけ。シリアス満載な雰囲気

気を漂わせてからの、一転して気の抜けた展開に思わず拍子抜けしちやつてる的なりアクシジョンを期待してるんだけどなあ。」

「恐らく皆さん、何も言わずに呆れているのではないかと私は思うのですが……ねえフオウさん？」

「フオウ、フオウ。」

言葉の中に溜息を交え、マシユは腕の中のフオウに同意を求める。一方藤丸はというと、ダヴィンチちゃんの机の引き出しをおもむろに開け、ガサゴソと中を探っていた。

「で、藤丸君はさつきから何をしているのかな？」

「ダヴィンチちゃん、ペン貸して。オレンジのやつ。」

「先輩、何をなさるおつもりですか？」

「ははーん。さては君、そのオレンジペンを使って呼符を元の金色に変えようと考えているね？」

ニヤリと不敵に笑うダヴィンチちゃんに見事に凶星を突かれ、硬直した藤丸の半開きの口から「う、」とくぐもった声が漏れる。

「……何故オレンジ色のペンを使うと、金色に変えることが出来るのですか？」

「それはだねマシユ、銀色の上にオレンジを塗ることによって色が金に変わるからだよ。因みに最近君が藤丸君とよく遊んでいる折り紙の金だつて、あれは元々——」

「ダヴィンチちゃんっ、ストオオオオオッブ!!」

突如伸びてきた藤丸の手により口を塞がれ、ダヴィンチちゃんの言葉はそこで遮られてしまう。目をぱちくりさせるダヴィンチちゃんに、血相を変えた様子の藤丸が小声で訴えかける。

「駄目だよダヴィンチちゃん!! マシユはね、あの金の折り紙を本物の金だつて信じてるんだから! 確かに俺もその事実を言おうとも思ったよ……でもさ、俺の目の前で楽しそうに顔をキラキラさせた上に、「凄いです先輩! 金は貴重だから折り紙の袋に一枚ずつしか入っていないんですね、私感動しました!」なんて言われたら、それは違うよなんでもう言えないじゃないやん? 今時こんな子、サンタクローズの存在を未だ疑わない高校生ばかりに貴重じゃないやん? だから頼むよ、その口から告げようとしている残酷な事実を黙って呑み込んでくれないか? どうかマシユには、綺麗な夢を見させ続けてあげたいんだ……!」

空いた手で乱暴に涙を拭い、固く拳を握る藤丸。彼の後ろでは、事情を知らないマシユが聞こえないやりとりに首を傾げていた。

「成程なるほど、君のマシユへの想いは充分に理解したよ。」

「うおおおっ?! まだ口塞いでんのにどうやって喋ってんの?! はっ、まさかオナラで……!」

「ここらこら、天才はオナラなんてするもんか。」

「いや、天才もするから。生き物としての生理現象だからね。」

「ともかく万能英霊の私にかかれば、こんな具合に腹話術を以って会話をすることも容易いのだ。てなわけでそろそろ手を放してくれないかい？ぶつちやけ息が苦しいんだけど。」

ああ、ゴメンごめんと藤丸は慌てて手を剥がす。漸く新鮮な空気を吸えたダヴィンチちゃんは深呼吸をした後、二人の方へと体の向きを変えた。

「んで、この呼符は何で銀色なんだろう？5枚集めたら金の呼符と交換出来るとかいう期待を持ってここに来たんだけど。」

「そんなチヨコのエンゼルのような仕様は実装してませーん。まあ何だ、エラー品なのかもよく分からないけど、これが呼符であることに変わりはない。だったら試しにこれを使って一度召喚を行ってみたらいいじゃないか？」

「ええ……でもこれ、大丈夫なの？」

「そうですね、ダヴィンチちゃん！もしものことがあつたら先輩が危険な目にあうかもしれないじゃないですか！」

「まあまあ落ち着いて、無論その召喚には私も立ち会おう。この未知なる呼符でどんなサーヴァントが喚ばれてくるのか、是非この目で確かめてみたいものだからね。」

「ダヴィンチちゃん……前もって言っておくけど、召喚されるのは必ずしもサーヴァントってわけじゃあないからね。この間だって☆3の礼装だったし、その前だって……更にその前、見事に爆死したこともあったっけなあ……ははは。」

徐々に低くなっていく声に比例して、藤丸の周りにどんよりと暗い影が差していく。ずるずるとその場にしゃがみ込み、床にのの字を書く藤丸の頭や肩から、ぽつぽつとキノコらしきものが生えてきているようにも見えた。

「だ、大丈夫ですよ先輩！特にこれといった根拠はありませんけど、今日はきつとどなたか素晴らしい英霊の方々が先輩の声に応えてくれます！」

藤丸の腕を掴んで立ち上がらせ、励ましの言葉をかけながらマシユはキノコを採っていく。後輩の健気な言動に胸を打たれ、「ありがとう……」と藤丸は彼女に小さく礼を言った。

「さあ、そうと決まれば準備に取り掛かるるか！」

「おー！と言いたいところだけど……ダヴィンチちゃん、その前に朝ご飯いつてきてもいい？まつすぐここに来たもんだからまだ食べてなくてさ……。」

ぐー、と工房内に響く間抜けな空腹の音は、藤丸とマシユの腹ペコストマックから鳴らされたもの。バツが悪そうに頭を掻く藤丸と思わず赤面するマシユに、出端を挫かれたダヴィンチちゃんは「仕方ないなあ」と苦笑するしかなかった。

* * * * *

守護英霊召喚システム・フェイト。

カルデアの誇る発明の一つで、先の聖杯を巡るサーヴァント同士の戦い・聖杯戦争においての英霊召喚を元に作られた召喚式。

今はシールダー・マシユの宝具である盾を触媒とし、サーヴァントの召喚を行う………のであるが、現実はそうも甘くない。

召喚の代価として一回につき支払われる虹色に輝く結晶・聖晶石。そして先程何度も名前の出た呼符。新たな戦力となる頼もしい仲間を求め、彼らに会いたいという強い願いを胸に抱いていても尚、その英霊が召喚に応えてくれる可能性は限りなく低いのである。こちらが幾ら呼びかけようと、数多の聖晶石や呼符が消えていこうとも………嗚呼、どうして、何で俺のカルデアには来てくれないんだコンチキショーツ!!

「ちよつと藤丸君、勝手に地の文使って心の鬱憤を吐きださないの。」

「あ、バレた?」

「文章だから読んでる方は分からないけど、さつきからご飯粒つけたままのその口がずっと動いてたからね。」

ダヴィンチちゃんの指摘で慌ててご飯粒を確認しようとする藤丸に、「先輩、どうぞ」とフォウを肩に乗せたマシユがさりげなくティツシユパーパーを渡す。

彼女に礼を言い、受け取ったそれで口元を拭いながら、藤丸はいそいそと召喚式の確認をするダヴィンチちゃんの背中を見つめていた。

「よし、準備は万端だ。さあ藤丸君、早速例の銀色の呼符で試してみたまえ。」

「……ねえダヴィンチちゃん。俺さつき朝飯の納豆かき混ぜながら考えてみたんだけどさ、この呼符つてもしかして新しいアイテムだったりしないのかな？もしかすると銀枠サーヴァント or 概念礼装確定ガチャチケットだったり……。」

「なーにこの期に及んでも弱気な事言ってるんだい！そんなアイテム出てたら工房にいる私が知らないわけがないだろう？ほら、かき混ぜた納豆みたいに粘った根性で！いざトライだよ！あと服に乾いた納豆の粒もついてるから早く取った！」

ダヴィンチちゃんの再指摘により慌てて納豆の粒を確認しようとする藤丸よりも早く、新たなティツシユパーパーを持ったマシユのいち早い発見により乾ききつてしおしおになった納豆の粒は回収された。本当に出来た後輩だなあ、うん。

「……よし。では藤丸立香、行きますー！」

些か腰が引けている自身を奮い立たせるように、大きな声を張り上げる藤丸。

ダヴィンチちゃんからあの銀の呼符を受け取り、暫しそれを眺めてみる。普段の金色とは異なり、白銀に輝く呼符。一度使用すると消失してしまうので、こうしてみると使ってしまうのも何だか勿体無いような気もする。

「……藤丸立香、行きますっ！」

もう一度声を張り上げる。今度こそは召喚に臨もうと。

再び銀の呼符を眺めて考える……不安が消えたわけではない。しかし同時に、これを用いたらどんなものが召喚されるのだろうかという沸き立つ好奇心も、あの時納豆をかき混ぜながら藤丸は感じていた。

「……藤丸、行きまーすっ！！」

再び声を張り上げる。本当に今度こそこの呼符で召喚に臨むべく。

そして言うまでもなく銀の呼符を見つめ――

「フオウフオーウツツ！！」

甲高い声と同時に、ドカツと鈍い音と共に後頭部に走る衝撃。

苛立ちを含んだようなその鳴き声は、「いつまでやっとなじや早うせんかワレエエエツ！！」という怒声にも聞こえた。

「ぶっぶっぶっ！！」

いい加減痺れを切らしたフォウの一撃がクリーンヒットし、藤丸は前のめりに倒れかける。

「フォウさんっ!?先輩、大丈夫ですか!?!」

よろめく足を立て直し、なんとか体勢を立て直す。何とか転倒を回避したことに安堵の息を吐き、ふと利き手の違和感に気がつきそちらに目を落とした。

「あ。」

呼符がない。そう理解したと同時に、藤丸の頭上が青白く光りだした。

展開された複数の光の球が、円を描いて回転し始める。それは正に呼符が用いられ、召喚が行われた合図。

やがて回転の後に出現したのは、三本の光の環。それは召喚されるものがサーヴァントであることの証でもあり、見守る藤丸やマシユ、ダヴィンチちゃんも期待に胸を弾ませる。

光の環が縮小した後、中央に巨大な光の柱が立つ。それが消えれば召喚した英霊のクラスカードが回転しながら現れる……現れる、はずなのだが。

「……………あれ?」

おかしい……………長い、光の柱が留まっている時間がやたらと長い。

いつまで経っても煌々と輝きを失わない光の柱に、ダヴィンチちゃんも首を傾げる。

「おやおや、これは一体どういう事だろうね？」

「もしや、エラー品を使用したことによるバグ……ということはないでしょうか？」

「フオウ？」

「まさか、藤丸君から預かった後にあの呼符を調べたけど、他におかしな点は——
——あつ。」

ダヴィンチちゃんの声で、皆の目は彼女の向いている前方へと一齐に向けられる。

光の柱が形状を変え、巨大な球体へと変化していく。その球は拡大や縮小を繰り返した後、パアッ！とまるで風船が弾けた際のような大きな音を立て、突如爆ぜた。

「な……っ！！」

目の前で起きた出来事に、ただ呆然とする一同。

「フオウ！フオウッ！」

だが惚けた彼らの意識を我に返したのは、頭上を向いたフオウの一声だった。

「……………先輩、ダヴィンチちゃん！あれを！」

マシユが指さす先——そこにあったのは、自分達の頭上で宙に浮き、くるくると回転する4枚のクラスカード。

いずれもその色は銀色。だが藤丸達が普段見慣れている色とはどこか違い、光沢を放っているようにも思える。

藤丸は目を凝らし、カードに描かれた図柄を確認する……………1枚目は剣士、セイバー。2枚目は狂戦士、バーサーカー。3枚目は騎兵、ライダーだ。そして4枚目――

「先輩、危ない!!」

「へ？」

叫ぶようなマシユの声に戸惑う間も無く、藤丸の立つ場所に広がる影。

ヒュルルル、と風を切る音が近付いていることから、何かが落下してきていることに漸く気付いたが時すでに遅し。

「ぶぎやっ!!」

視界が白いもこもこしたものに覆われた刹那、とてつもない重力に押し潰される藤丸。

降ってきた『それ』の下敷きになった彼の耳には、「せんぱーいっ!!」と身を案ずる後輩の声がやたらと遠くに聞こえた、ような気がした。

「……………これは一体……………!!」

あの時マシユはしつかりと見ていた。あの時空中のクラスカードが光り輝き、その姿が変形していった光景を。

目を見開き、驚愕するマシユの前に突如落下し、藤丸を下敷きになっているもの——それは、白い大きな犬。

もこもことした真つ白の毛に勾玉のような形の眉、赤い首輪をしたこの巨大犬の背中には、よく見ると誰かが乗っている。

片手に董色の番傘を握り、サーモンピンクの髪色をした頭には変わった形の髪飾りが二つ、赤いチャイナ服を着たその少女は、「んあ？」と気の抜けた声を発して伏せていた顔を上げた。澄んだ蒼色の瞳をマシユに向ける、その少女の顔立ちはとても愛らしい。だが口端についた乾いた涎の跡が何とも間拔けな印象を与えた。

「……お前、誰アルか？」

少女の発した第一声に、思わずマシユは硬直してしまふ。

何と答えたらよいのか分からず、互いの間に流れる沈黙の合間に「わんっ」と巨大犬が鳴いた。

「あの、貴女は——」

漸く勇気を振り絞り、発したマシユの声を遮ったのは、バシャーンツ!!と辺りに響く

激しい水音。

「ぶわっ!!冷たっ!!痛いっ!!何だ何だあっ!!」

音の方に振り向くと、少し離れた先で頭にバケツを被り、全身水浸しになった眼鏡の少年が、狼狽えた様子で辺りを見回している。どうやら尻を強打したらしく、何度も手で摩っているようだった。

「ダヴィンチちゃん、これは——」

事態を把握しきれず、ただ困惑するマシユはダヴィンチちゃんに縋ろうと彼女の立つ方角を向く。

それに気がついたダヴィンチちゃんは、緊迫した様子で彼女に向かって叫んだ。

「駄目だ!マシユ、こっちを見るんじゃないっ!」

「えっ——」

その時、マシユは見てしまった。

ダヴィンチちゃんの足元に、うつ伏せにして倒れている男性の姿を。

——その人物のズボンが下穿きごとずり下がり、露わになつてゐる筋肉質で健康的な肌色の、尻を。

「つきやあああああああ!!」

悲鳴を上げ、赤面した顔を両手で覆い隠すマシユ。

直ぐ様背中にも隠れるマシユに、「だから見るなつて言つただろー」と苦笑するダヴィンチちゃん。

すると悲鳴に反応したうつ伏せの男性が、突つ伏していた床からむくりと顔を上げる。きよろきよろと辺りを見回す動きに合わせ、男の天然パーマ気味な銀髪……白髪? が微かに揺れた。

ふと男がこちらに振り向く。死んだ魚のような目を暫く向けていたが、脱力しきつたその顔が瞬時に驚愕と焦りの色に塗り替えられる。

「つきやあああああああ!! えつちよつ何これ!! おたくら誰!! つーかここ何処だよ!! つていうか見ないで!! 俺を見ないでえええええええええ!!」

驚きやら恥ずかしいやらで、ぎやあぎやあと騒ぎ立てる男の声と同調するように、眼鏡の少年とチャイナ少女の声も辺りに響き渡る。

おいどうなんてんだこりや!! 知りませんよってか臭!! 僕めっちゃ雑巾臭い!! うわっ ホントだ近寄んなヨ眼鏡! わんわーんっ! 本当だお前臭っ! ちよっうつるからあんま こっち来んな! んだとおゴラア!! ケツ丸出しのアンタにそこまで言われる資格ねえ よっこれでも喰らえ!! ぎゃあああこの野郎雑巾投げやがったっ!! やりやがったな駄目ガネ!! ぶっ飛ばしてヤルヨ! わおーんっ!

「……うーん、これは正に驚きの一言だね。」

うんうんと一人頷くダヴィンチちゃんの隣で、呆気にとられるフオウと共に眼前の喧騒をただ眺めるマシユ。

彼女が立ち上がった巨大犬の下から姿を見せ、「助ケテく…」とか細かい声で救助を求める藤丸を発見するまで、あと三秒。

《続く》

【壺】万事屋銀ちゃん（Ⅱ）

時計が告げる時刻は、そろそろ9時を回ろうとしている。

ここカルデアの食堂を訪れる者の姿も疎らになりつつある頃、設置されたテーブルの一角に藤丸達はいた。

「ほーん。未来を取り戻す為に人理の修復を、ねえ……。」

ダヴィンチちゃんによる一通りの解説をすっかり理解したんだかしてないんだか。あの銀髪天パの男は相変わらず死んだ魚のような目で、向かいに座る藤丸を見たまままぐ。

彼の両隣には彼と同時に出現したチャイナ娘と、あの後藤丸にシャワーとTシャツ（白地にExtra Attackと書いている）を借りて小綺麗になった眼鏡の少年が、それぞれ椅子に腰掛けている。因みにあの巨大犬はというと、彼らの後ろで背中に丸くなったフォウを乗せ、退屈そうに欠伸をしていた。

「んで、その7つの特異点から7つの玉を無事集めたお前らが、神龍に願って人類滅亡の未来を阻止したってわけか。そりや凄えや、まるでジャンプ漫画の主人公みてえな話だ

ぜ。」

「みたいっていうか、それもう只のドラオンボールだよな？俺ガンドは打てるけどかめはめ波は無理だからね？それに玉も集めてないし神龍に願ひ叶えてももらってないし。」

口端を引きつらせ困惑する藤丸に、「それにしても……」と眼鏡の少年が横から切り出す。

「ダヴィンチちゃんさんの説明を受けても、いまいちピンと来ないですよね。サーヴァント？のことといい、時間を超えて旅をしたことといい……それに僕らの知らない世界で人類が滅びかけてたとか、そんな大変なこと全然知りませんでしたし。」

「まあ、私達も何度かそんな経験はしてるけどナ。大体は少年漫画独特の努力とか根性で何とかなつたみたいな感じアルけど。」

「でも、そんな大変な状況を幾度も回避することに成功できたのは、ここにいる藤丸立香先輩やカルデアの皆さん、それに召喚に応えてくださったサーヴァントの皆さんが身を粉にして頑張つてくださったお陰なんです。」

「これマシユや、自分を抜いちやいかんよ。藤丸君がここまで来られたのも、君の甲斐甲斐しい協力あつてこそだろ。ねえ藤丸君？」

ダヴィンチちゃんに話を振られると、傾けた湯呑みから口を離れた藤丸はうんうんと

何度も頷いた。

「で、でも……今の私は、以前のように先輩と共にレイシフトを行う事も出来ません。先輩のお側で戦う事の出来ない私が、到底お役に立っているとは——」

「そんなことないよ。確かに前みたくずつと一緒にいられないのは少し寂しいけど、マシユをもう危険な目に合わせることはないんだもの。それにマシユのサポートがあつてこそ、俺は今でも頑張れるんだから！」

太陽のよう、という比喩がとても当てはまりそうな、屈託のない藤丸の笑顔。マシユは暫し呆けていたものの、少し遅れて頬を赤く染め「ありがとう、ございます……」と小さく言った。これが漫画とか絵であれば、この二人の周りにはファンシーなお花とかキラキラしたオーラとか、そういったイイ雰囲気を表すオプションが飛んでいるところだろう。

「……………おいおい、俺らはリア充の乳繰り合いを見せつけられるために、こんなとこに喚ばれたつてののか？こちとら結野アナのブラック占い途中にして、CMの合間に便所済ませたところだつたつてのによ。」

「ああ、だからさつき尻丸出しだったんですね。僕は雑巾がけの途中でしたよ、被ったあの水も終わりがけだったから相当汚れてましたし。」

「私はTV空いたら楽しみにしてた昼ドラのSP観る予定だったのにヨ、やってらん

ねーぜコンチキショー。」

目の前の三人が揃って鼻の穴に指を突っ込み、各々が吐き出す恨み言と苛立ちの籠った視線を感じ取り、藤丸とマシユはハッと我に返る。

「まあまあ落ち着いて、そうカツカしなさんな……さて、それじゃあまずは君達の名前を教えてもらおうか?」

「えー、さつき名乗っただろうがヨ。耄碌もろろくしてもう忘れたアルか駄貧乳ダウインチ?」

「酷い当て字だなあ、ダヴィンチだよダヴィンチ。この形もサイズも申し分ない、豊満なバストが目に入らないのかい? 確かにさつき我々には名前を教えてくださいたけども、呼んでる側には君達が名乗った描写シーンがまだ本文こっちでは無いから分かんないんだよ。」

「あんな神楽ちゃん、大分いいとも思うけど、この小説で銀魂初見の人もいるかもしれない。そりゃあジャンプで連載10年以上やってるし、アニメも大ヒットだし、実写映画もやったから銀魂知らない人いんのかヨーとかお前言い出すだろうけど、せっかくのクロスオーバーなんだから始めの自己紹介とかそういうところはしっかりやらねえと。てなわけで初登場から女性の前で尻を丸出しにするという愚行を犯していたあの銀髪野郎は俺、銀魂の主人公・坂田銀時です。プロローグの方でも名前出っつから振り仮名とかいらねえよな? そんな難しい字でもねえし。」

「もう銀ちゃん……あ、さつきの白髪天パのことアル。銀ちゃんがさつき名前出した

チャイナガール、皆のアイドル・可愛い神楽ちゃんだヨ！んでこのおつきいワンコが定春ネ！」

「くああ〜……。。」

「ちよつとちよつと！こない加減な自己紹介がありますか！前の回の藤丸君達との差がありすぎだろ！大体、せつかくのクロスオーバーなんですよ？いくら計画性がなくてプロットもろくに立てずに勢いだけで書いてるからって、ここまで雑でいいのかよ！！」

「あ、あとこのさつきから騒がしいツツコミしてる奴が新八だからな。志村新八。」

「眼鏡が本体のドルオタ童貞眼鏡、新八アル。皆、覚えられたら覚える感じでいいアルよ。」

「おいしいいっ！！何だよこの酷い扱い！！僕にだって自己PRさせてくれたっついでしょ！例えばあの、ほら、実写版のキャストは菅○将○だとか！！え？んなもん個性じゃなくて虎の威を借る狐だって？うっせーな分かってんだよそんなこと！！」

「……まずいな。このままだと俺達の培ってきた個性が、突然登場した彼らの強すぎるキャラに掻き消されてしまう……。行こうマシユ、ダヴィンチちゃん、俺達もあの流れに乗っていい加減な感じの自己紹介をするんだ！」

「はい、先輩！」

「つてこらく！君達まであのぐだぐだな流れに飛び込んだら、余計収集がつかなくなるだろうが！ここまで台詞オンリーでしか進んでないし、文章書くのサボってるよアイツ」と思われる前に一旦落ち着きたまえ。ほら、皆さつさと席に戻った戻った。」

(珍しく真面目な)ダヴィンチちゃんに叱責を受け、喧嘩に発展しそうになつていた銀髪天パ……銀時と二人の少年少女も、席を立とうと中腰の姿勢のまま固まつた藤丸も、すごくすごと椅子に座り直した。

「さて、名前も分かったことだし、次に君達のクラスの確認作業に入らせてもらおうよ。」
「クラス？私や新八は番外編だとクラスは3年Z組ネ。」

「組み分けのクラスじゃなくてね、サーヴァントのクラスだよ。英霊つてのは大きく分けて7つのクラスに分けられている。剣士、セイバー、弓兵、アーチャー、槍兵、ランサー、騎兵、ライダー、魔術師、キャスター

アサシン、バースーパー、暗殺者、狂戦士……あと例外に『エクストラクラス』と呼ばれるものもあるけど、これはまた置いておいてと。先程君達の名前を聞いた時に、一緒にデータも取り込ませてもらつてね。そこから詳しい内容の解析を行ったんだ。ああ、でも難しいことは考えなくてもいい。恐らく君達は自分のクラスが何だか分かつていない状態だろうから、今から言う自身のクラスを覚えてくれさえすればいいんだ。」

ダヴィンチちゃんは持つていたタブレット端末を指で数回操作した後、前へと向き直り口を開いた。

「まずは坂田銀時君、君は……うん、間違いなくセイバーだね。」

「セイバー……ってことは劍士か。確かに普段から劍は振り回してつけど、それでセイバーってのもなーんか普通過ぎてつまんねえな。」

頬を膨らせ、銀時が腰から抜いたのは一本の木刀。柄の部分に『洞爺湖』とかかれたその刀に、藤丸は目を輝かせ「かつこいい……！」と呟いた。

「おつ？ 藤丸……って言ったつかけか。この木刀の良さが分かるたあ、中々見どころあるじゃねえの。流石は人類最後のマスターだけあるな。」

「いや、それ人類最後のマスター関係ないですよきつと……さて、じゃあ銀さんの次は僕ですね——」

「ええと、次は神楽ちゃんだね。」

「あ、あれ？ 違ったか、恥ずかしいなもう。」

「おめでどう神楽ちゃん！ 君は狂戦士、バーサーカーだ！」

「キャツフオオオオイ！ 何だかよく分かんないけど、響きがカツコいいから嬉しいアル！」

「いいなー神楽、銀さんのセイバーと取っ換えねえ？ 300円あげるから。」

「銀さん、サーヴァントのクラスは早々簡単に取り換えられるものじゃないと思いますけど……よし、いよいよ僕だな！ ああ緊張しちゃう——」

「そして定春君、君はライダーだね。動物型のサーヴァントもこのカルデアには何もいるから、珍しい事ではないよ。」

「わんっ。」

「……定春のが先だったか。まあ順番なんてどうでもいいけどね！別に悔しくなんてないもんね!!あれ?でもライダーってのは乗り手のことですよ、定春はいつも神楽ちゃん乗せてるけど、何かに乗ってることはあんまりないような……。」

「新八、お前は普段から定春の何を見てるんだよ。アイツだつてちよくちよく乗ってることもあるだろ?ほら、盛りのついた雌犬とか——」

そこまで言いかけた銀時のアブノーマルな台詞は、「でえつつくしよい!!」と不意に発せられた藤丸のやたらとデカイクシャミにより阻まれ、その如何わしい内容が無事マシユの耳に届くことはなかった。

「さあて、長らくお待たせしたね新八君。」

「まさかここまで焦らされるとは思ってませんでしたけどね……はっ!これはもしかすると僕だけ他の皆とは違う、そのエクストラなクラスだったり……!!」

淡い期待を胸に抱き、逸る鼓動を抑えながら新八はダヴィンチちゃんの口元が動くのをじっと待つ。

「さあ最後だ、志村新八君のクラスは——」

指で画面をスクロールし、表記されたデータを読み上げようとしたその時、ピーという電子音と共に画面が真っ黒になり、『ERROR』の文字が何度も点滅を繰り返す。

「……ありや？」

「ダヴィンチちゃん、どうかしましたか？」

「んー、端末の調子がおかしくてね……悪いけど新八君、君のクラスの公表は後でにしても構わないかい？」

「えっ……あ、はい。」

何度も画面やスイッチを弄るも、反応がないことに溜息を吐くと、ダヴィンチちゃんはタブレットをテーブルに置いてしまう。

期待していただけに新八の落胆も大きく、その落ち込みようは隣に座る銀時が茶化すことなく、彼の背中をポンポンと優しく叩いてあげる程であった。

「えー、では気を取り直して……先程説明した通り、ここは人理継続保障機関・カルデアだ。詳しい場所はまだ言えないんだけどね。知りたかったら二章のプロローグまでゲームを頑張ってくれたまえ。それにしても、君達の話してくれた文明の発達した江戸に、宇宙からの異人・天人あまんとの存在……それに、坂田銀時ねえ。」

「あ？俺の名前がどうかしたか？」

「いやね、君とよく似た名前……坂田金時の方だったら、こちらの世界の史実に残って

いるからね。このカルデアには未召喚だけど、バーサーカーの英霊として座にも登録されているし。」

「金時か……その名あ、聞くと嫌な事思い出さず。」

「?……銀時さん、金時と会ったことあるの?」

藤丸の問いに、銀時は眉間に皺を寄せたまま、首を横に振る。

「いや、金時は金時でも、多分お前らの知らないほうの金時だな……あの金髪ストレートプラモ野郎にや、散々酷い目に合わされたっけなあ。」

「そういえば、神楽ちゃんも天人なんです。夜の兎と書いて、夜兎族やとっていう戦闘部族なんです。」

「おうよ、天人でサーヴァントになれた奴あアタイくらいなもんよ!」

「そうなのですか?どこから見ても宇宙人には見えないので驚きました……それにしても、夜の兎という名前は、神楽さんにお似合いですね。とっても可愛らしいです。」

「そ、そうアルか……へへっ。」

マシユの言葉に、神楽は頬を染め照れ笑いを浮かべる。女子同士の微笑ましいやり取りに場の空気がほっこりした後、ダヴィンチちゃんは話の続きを始めた。

「兎に角だ。君達がいた世界は、どうやら我々のいる世界とは史実なんかも大まかに異なるらしい。平行世界とは違う、恐らく君達は『本来は決して交わることのない世界』か

ら、何らかの形で召喚された超特異なサーヴァントなんだよ。それにさつき分かったんだけど、どうやら君達の英霊の座は登録されていない。だが現に銀時君達は、こうしてサーヴァントとなってカルデアに召喚されている……何が何だか分からなくて、こちらもお手上げ状態だ。」

ふふ、と大きく息を吐き、ダヴィンチちゃんは両手を上げ頭を振ってみせる。

「ちよ、ちよつとダヴィンチちゃん。さらつと凄いいこと言つてなかつた？ 銀時さん達がこことは交わらない世界の存在で、しかも座に登録されてないのに召喚された英霊だつて？」

「そんなこと、現実的にありえるのでしょうか？ 何か特殊な方法でもないか——あつ。」

不意に、あることを思い出したマシユは無意識に声を上げる。その意図にいち早く気付いたダヴィンチちゃんは「そう」と呟く。

「どうやらあの銀の呼符、本当に只のエラー品じゃなかつたようだ……ああもう、こんな事ならもつとよく調べておくんだった！」

爪を噛み、本気で悔しがるダヴィンチちゃんの姿に、詳しい事情を知らない銀時達三名は、ただポカンと口を開けていることしか出来なかつた。

「あー……つまり俺らはここに喚ばれた時点で、知らんうちにそのサーヴァントつてや

つになっちまつてるってことでもいいのか？」

「はい。どうやらこちらの手違いで皆さんを召喚してしまったようで………本当に、申し訳ございません。」

沈んだ声で謝罪し、こちらに深々と頭を下げてくるマシユを、新八が慌てて制する。

「いやいや、そんなに謝ることないよマシユさん！確かに多少は驚いたけども、別に僕達そんなに怒ってませんし。ねえ銀さん、神楽ちゃん？」

「まあ、サーヴァントって何かかつこいい響きだしな。いいじゃねえか、未来を取り戻す為にここで戦うつてのも、中々悪かあないぜ。」

「私は毎日お腹いっぱい卵かけご飯が食べられれば問題ないアル。腹が空かない日々が送れるんならサーヴァントでもタコクラゲにでもなつてやるネ。なー定春？」

「わうう………？」

特に気にも留めない様子の彼らの言葉は、落ち込み気味だったマシユの表情に少しずつ明るさを取り戻させていく。

ポン、と肩に手を置かれ、隣を見ると親指を立てた藤丸が、キラーン☆と白い歯を輝かせ笑っていた。

「今までどんな困難も超えてきた俺達だ。今更予想外のことが起きたつて、皆と一緒に何とかなるよ。マシユ！」

「皆さん……先輩……！」

吹雪が止み、雲の隙間から差しした陽光が窓から食堂へと入り、藤丸達の姿を照らす。それは、まるで希望の光。そうだ、自分達は今日こんにちまであらゆる問題も障害も乗り越えてきたじゃないか。異世界からの来訪者がなんだ！世界設定がなんだ！そんなもん気にしたら前になんか進めないじゃないか！だってこれはクロスオーバー作品なんだから！！

「てなわけで。カルデアにようこそ！銀時さん、新八さん、神楽ちゃん、定春君！」

「んな堅つ苦しくなくていいぜ、銀さんで構わねえよ。」

「僕も『さん』付けはなくていいですよ、藤丸君とは実年齢も近そうですし。」

「応ヨ！末永くよろしくアル！藤丸！」

「Z………」

「あのー、盛り上がってるところ悪いんだけど——」

「よーし、まずは皆の分の種火を確保しないと！貯蓄はボックスガチャの時に集めたのが充分にあるからね、たらふく食わせて最終再臨まで一気に持って行ってやる！」

「種火って何アル？食えるもんアルか?!」

「ねえ、藤丸君ってば——」

「そうだ、ピースとモニュメントと素材のチェックもしないと！一つでも欠けてたら大

変だからな！」

「先輩？先程からダヴィンチちゃんが呼んで——」

「そうと決まれば早速工房へダッシュだ！皆、俺についてきてー！」

勢いよく椅子から立ち上がり、意気揚々に食堂の出口へと駆け出す藤丸。しかし舞い上がるあまりに周囲への注意を怠り、ぐつすと眠りこける定春の後ろ足に躓き、そのまま前へと倒れていった。

「せつ、先輩!!」

ベシヤツ！と派手な音を立て、床に顔面を強打した藤丸は「ぶえっ」とくぐもった声を上げる。

慌てて駆け寄ったマシユと新八に助け起こされると、藤丸は赤く腫れた額を押さえながらゆっくりと上体を起こした。

「お……俺は一体何を……？」

「あれだけエキサイトしてた記憶を一回の転倒で忘れるなんざ……藤丸、お前も中々だな。」

呆気にとられる銀時。ふと、彼の前をダヴィンチちゃんがおもむろに通り過ぎていく。彼女は藤丸の前にしやがみ込むと、とてもバツが悪そうな顔で彼に言った。

「すまない藤丸君………銀時君達はね、カルデアのサーヴァントにはなれないんだよ。」

「……………へ？」

言葉の意味が理解出来ず、目を点にする藤丸に、ダヴィンチちゃんは続けて説明をする。

「君の使役するサーヴァント達の霊基基点が、ここカルデアになつてゐることは知つてゐるだろう？ そのように、彼らの霊基の基点になつてゐるところはどうやら別になつてゐるようなんだ。このままだと銀時君達も長らくは現界出来ないだろうし、だからホームズと話し合つた結果、シバを使つて彼らの基点となつてゐる場所を探し出して、誤召喚した四人を送還することに決定してゐるんだ……………あれ？ 藤丸君、もしかして泣いてる？ あー……………もつと早く言えばよかつたね〜ごめんよ、だからお願いそんな静かに泣かないで〜つ。」

* * * * *

「……おい藤丸、いつまで拗ねてんだよ。」

管制室に繋がるカルデアの廊下を歩く、銀時と膨れっ面の藤丸。

あれから暫くした後、藤丸が医務室で怪我の治療を施してもらっていた時に、管制室から彼と銀時達を呼び出すアナウンスが流れた。どうやら先程ダヴィンチちゃんが言っていた、近未来観測レンズ・シバが銀時達の霊基基点を特定し、そこへ送り届けるためのレイシフト準備が整ったらしい。

新八はクリーニングが終わった服を取りに行くため、神楽は定春がいつの間にか仲良くなった大きな青い狼と首なしの騎士と遊んでから行くと言げ、別々に管制室へと向かうことにしていた。

あれから一向に機嫌の治らない藤丸に、銀時はどう声をかけてやろうかと、懸命に思考を巡らせていた。

「まあ、その何だ……レイシフト？つてやつにお前もついてくるんだろ？よかつたらお前も俺らのいる万事屋に来てみつか？」

「……万事屋？」

「ああ。俺と新八と神楽、それと定春で『万事屋銀ちゃん』つて名前でも屋やつてんだ。事務所兼自宅だからよ、時間があんなら茶の一杯でも出してやるさ。」

「……うん。」

返答はするものの、顔は常に下を向いたまま。そんな彼の態度にやきもきした銀時は、「だああくもうっ！」と中々の声量で叫んだ。

「お前はいつまでそうしてんだよ！さっきだって見ただろ、お前を慰めてる時のマシユのあの面^{ツラ}。納得がいなくなてうじうじすんのはてめえの勝手だけだよ、周りにいる奴にまで余計な心配かけんじゃねえっての。分かったか？」

「……………めん。」

「謝んのは俺じゃねえだろ、後でちゃんとマシユとダヴィンチに向かって頭下げとけ。」

「うん……………ありがとう、銀さん。」

少しずつ、出会った最初の時に見せた明るさを取り戻していく藤丸に安堵し、にっこりと笑う彼に銀時も笑みを零した。

「あーあ、でもやっぱり銀さん達ともう離れちゃうなんて寂しいな。もっと時間があつたら、俺の旅してきた思い出とかも皆に話せたのに。それに……………」

藤丸が、おもむろに足を止める。数歩進んだ先で彼が隣にいないことに気付いた銀時も歩くのを止め、振り向いた。

「藤丸……………」

「ねえ銀さん……………万事屋は頼まれたら何でも依頼を引き受けてくれるんだったよね？」

「……………ああ、報酬次第だけだな。」

「だったら、さ……もしカルデアの技術が今より向上して、銀さん達のいる世界とリンクすることが出来たらさ……その時は、俺の召喚に応えてくれる？」

そう問い掛けを投げる藤丸。少し寂し気な笑顔を湛える彼の元に、銀時は無言で近付き、がっしりとした手を頭の上に乗せた。

「……そんなときやあ、新八と神楽と定春も連れてくからな。依頼料、きつちり四人分用意しとけよ。」

「……うん！」

「あ、あとスイーツもたらふくな。銀さん的にはホールのケーキとかパフェもたつくさん用意しといてほしい。」

「えええ……銀さん、糖尿気味なのに大丈夫なの？ さつき新八君に聞いたよ。」

「げっ、余計な事言いやがってあの眼鏡。いーのいーの、銀さん甘いもん食わないと生きてけないし、それにサーヴァントになれば多少は糖尿も抑えられんじゃね？」

「うーんどうなんだろう、後でダヴィンチちゃんにでも聞いてみようかな……。」

唸り声を出して考え込みながら、藤丸が曲がり角を曲がったちようどその時、ゆらりと向こう側で黒い何か動いた。

カツ、カツと足音のする方を見やると、廊下の奥から一人歩いてくる男の姿を確認する。黒い帽子に黒いマントの出で立ちの彼の正体を、藤丸はよく知っていた。

「アヴェンジャー
復讐者！」

明るい声でそう呼ばれると、男は顔をこちらへと向ける。髪の間から覗くぎらついた琥珀色の目に殺意のようなものを感じ取り、銀時の手は少しずつ腰の木刀へと伸びていく。

そんな彼の様子を察したのか、アヴェンジャーと呼ばれた男の牙の並ぶ口元から、くぐもつた笑いが聞こえた。

「そう警戒するな、異界のセイバーよ。貴様らの噂は既にカルデア中に広まっている。もう間もなく元の世界へ送還されると聞いたのでな、どんな連中かと今しがたその顔を拝みにいつてきたところだ。」

また数歩、アヴェンジャーは前へと進む。彼が藤丸の横を通り抜けようとした時、その足が止まった。

「……忠告しておこう、我が主^{マスター}よ。これより貴様が赴こうとしているは修羅が道、待ち受けるは大なる災厄だ。様々な困難や試練という怪物が、貴様を呑み込めんと大口を開けていることだろう。」

「……アヴェンジャー？」

「だが忘れるな、貴様の側には常に仲間がいるということを……何時如何なる状況にお

いても、彼らを信じよ。それだけは心に留めておけ。」

去り際に頭をポンと叩かれ、アヴェンジャーは曲がり角の向こうへと姿をくらます。遠くなつていく足音を聞きながら、藤丸と銀時は呆然と突つ立っていた。

「……何なんだ？あの黒マントは。」

「彼はこのカルデアのサーヴァント、復讐者……巖窟王、エドモン・ダンデスだよ。色んな機会で俺の事を助けてくれたりするんだけど……さっきの忠告の意味は一体何

なんだろう？」

顎に手を当てて考えながら、藤丸は再び銀時と共に歩き出す。

「待ち受けるは修羅の道……大いなる災厄……うーん、どういうことだつてばよ。」

「さーな。氣いつけて歩かねえと、うっかり犬のウ○コ踏むぞつてことじゃねえの？」

「ええ……アヴェンジャー、そんなちやっちい警告してくるかなあ……あ。」

ふと気がつけば、いつの間にかそこは管制室の大きな扉の前。二人が近付くと、扉は自動的に開き彼らの中へと招き入れた。

「あつ。せんぱーい！」

藤丸を迎えたのは、レイシフト準備を行うため先に中にいたマシユだった。彼女の後ろを歩くのは、食堂の赤い弓兵から貰ったクッキーを口いっぱい頬張る神楽だ。

「マシユ、さっきはごめんね。俺もう大丈夫だから。」

「いいえ、先輩が元氣になられて何よりです。」

「あつ、何だよ神楽く旨そうなもん食ってんじやん、銀さんにもちようだいよ。」

「ふいふあネ、ふおれふあふあひふおファル（嫌ネ、これは私のアル）」

後ろの二人がクツキーを巡って醜い争いを繰り広げている間に、藤丸とマシユは管制室内へと進んでいく。

「神楽ちゃんもいるってことは、もう皆揃ってるのかな？」

「ええ、皆さんもういらつしやいますよ。ですが……」

と、何故が眉間に皺を寄せるマシユ。藤丸がそんな彼女の様子に首を傾げた時、管制室に二つの声が響いた。

「仔犬くっ！遅いじゃないのもくうっ！」

「やつほくマスター！こつちこつちく！」

「……うん？」

気のせいかな？と思いつつも、好奇心から藤丸は声のした方を見やる。

するとそこには嬉しそうに色紙を持つ新八の姿、そして彼の隣に立つシヨッキングピンの髪の少女と、こちらは淡いピンク色の髪を三つ編みに結った少女：のような少年、それと定春の毛並みを整える忍者風の黒髪の少女と、新たに増えた三名のメンバーの姿があった。

「んもう、どれだけ待たせるのよ！まあ、この眼鏡ワンコと話しているのもいい時間潰しにはなっただけね。」

頭頂から生えた黒い角に、長く伸びた黒い尻尾のこの可愛らしい少女もまた、このカルデアのサーヴァントである。

監獄城チエイトという名の槍を使うランサーである彼女の真名は、その名も高きエリザベート・バートリー。通称エリちゃん。かつて己の美貌の為に600人以上もの少女達を惨殺し、その生き血を身体に浴びたとされる、血の伯爵夫人と呼ばれた存在……なのだが、この姿は彼女が結婚する前の14歳のもの。自称アイドルを名乗っており、本人曰く特技は歌らしいのだが、本人曰く、である。その実態は壊滅レベルの音痴。是非今度ジャ○アンを呼んで対決させてみたいのだが。え、駄目？死人が出る？

あと彼女が呼んでいる眼鏡ワンコとは、恐らくその色紙を眺めてご満悦な新八の事だろう。彼女がアイドルであることを知った彼がサインをねだったのが、或いはエリザベートがくれたものなのだろうか。いずれにせよ、最推しアイドル・寺門通がいるというのに、これは裏切りにはならないのだろうか疑問なところ。

「あつ、その人が銀ちゃんだね！こんにはは！初めまして！僕アストルフオだよ！」

もう既に名乗ってしまったけども、解説の為もう一度。一見可憐な少女のような見た目この少年、調べによるとプロローグの方でもう出番があつたようだが。念のためこ

ここで詳しい解説もさせてくださいな。

彼の名はアストルフオ。イングランド王の息子にして、ちよつと理性が蒸発気味なシヤルルマーニユ十二勇士の一人である。ライダーのサーヴァントであり、主に幻馬・ヒポグリフに跨つて戦場を駆け抜ける。因みに普段から女性の衣装を着ているのには、色々と理由があるんだとか。色々とね。

「エリザベート、アストルフオ……何でここに？」

「ふふん、決まつてるじゃない。仔犬と一緒に、この眼鏡ワンコ達のいる『かぶき町』とやらに行くためよ。ああ……一度行つてみたかったの！仔犬の雑誌を読んだり、実際に新宿に行つてきたつていうオルタのジャンヌとセイバーに話を聞いてから、ずうつと羨ましかつたのよ！闇夜に輝くネオン街なんて素敵じゃない！だから、ね？アタシも連れてつて〜マスターっ！」

「僕もエリちゃんとおんなじ理由だよ。マスターの護衛も兼ねて、皆で銀ちゃん達をお見送りしようと思つて！」

「どこからそんな話を……あつ。」

藤丸の脳裏に甦るのは、先程の巖窟王との会話の一部。

噂が漏れて伝わった結果がこれか……と藤丸が頭を抱えているすぐ横で、神楽とのクツキー争奪戦（一個だけでもぎ取つてきた）を終え戻つてきた銀時の周りを、アストル

フオがぐるぐると回りながら興味津々に彼を観察していた。

「……それで、君はどうしてここに？」

何とか気を取り直し、藤丸は定春の隣に立つ黒髪忍者少女——加藤段蔵に問い掛ける。

彼女は絡繰からくりのサーヴァントであり、そのクラスも忍者らしくアサシン。幻術師・果心居士により創り出され、サーヴァントとなる以前は初代風魔小太郎の元におり、彼から多様な忍術を搭載されている他、身体に内蔵してある様々な武器などを駆使して戦う。因みにロケットパンチも出来る。んんんロマンだね。

「はい。実は段蔵が特に任務もなく廊下を歩いていた際、そちらのアストルフオ殿に呼び止められました——」

「そう、僕が段蔵ちゃんも誘ったんだよ！彼女ここに来てからまだ日も浅いし、親睦を深めるためにも一緒にマスターの護衛やろうよってね！」

「……すみません先輩、あまり大人数になるとご迷惑になると思っただのですが、エリザベートさんとアストルフオさんが聞かなくて……。」

「んんん……どう銀さん？そちらが迷惑でなければいいんだけど。」

「おお、俺は全然構わねえぜ。結野アナの放送に間に合う時間に帰れるってんなら、何人来ようと構やしねえよ。まあ、お登勢のババアがちいとうるせえかもしんねえけどな、

そこは気にすんな。」

「うわーい！ありかとう銀ちゃん！」

アストルフオのハグを受け、にへらくと頬を緩ませる銀時も満更ではない様子。彼にアストルフオの性別を伝えるべきかと藤丸は悩んだが、まあ幸せならOKだろう。

『さて皆、揃ったかな？これより銀時君達の霊基基点・江戸へのレイシフトを開始するよ。』

ダヴィンチちゃんのアナウンスが管制室に響き渡ると、マシユを始め他のスタッフ達もいそいそと配置に着き始める。

「それでは先輩、皆さん、お気をつけて………銀時さん達も、どうかお元気で。」

「ああ、いつてくるよ。マシユ。」

「色々世話んなったな。いつか遊びに来いよ、いちご牛乳飲ましてやつから。」

「マシユさん、ダヴィンチちゃんさん、カルデアの皆さんも色々とありがとうございまして。お元気で！」

「マシユマロ、駄貧乳ダヴィンチ、ばいばいヨ。」

「わおーんっ！」

「それじゃ、ちよつと行ってくるわね。仔犬のことは私達に任せなさい。」

「いつてきまーすっ！お土産待っててね〜！」

「それでは、行ってまいります。小太郎様にもよろしくお伝えください。」

『アンサモンプログラム スタート。 霊子変換を開始します。』

『レイシフト開始まで、あと3、2、1……』

『全工程 完了。』

『レムナントオーダー 実証を開始します。』

レイシフトを行っている最中、とある職員のインカムに小さなノイズが混ざった。無機質な音の向こうに、微かに何かか聞こえるような気がするも、彼の集中力はそこから背けられてしまう。

それは、泡が弾ける音よりも小さい、何者かの囁きだったとしても、彼は最後までそれに気付くことはなかった。

『……………後は……………頼み、ましたよ……………銀時。』

《続く》

【式】邂逅（I）

「よっ。ほっ、うおううおうっ、おおおおあ……っ!!」

藤丸は、一人戦っていた——今まさに固い地面へと引つ張り込もうとしている、地球の重力と。

こんなことになるんなら、変に格好つけようとポーズなんかとるんやなかった……：片足のみで自身の全体重を支えながら、藤丸は自らの行いを猛烈に悔いていた。

迂闊に首も動かせない状態だが、周囲が夜のように暗いことは理解できる。他の皆は無事に着いたのだろうか？安否を確認するために声を張ろうと息を吸い込む。だが今下手に力を入れると、うっかりバランスを崩しかねない。

このままやれるのか——いいや、やらねばなるまい。だって俺はカルデアの……：人類最後のマスター、藤丸立香なんだから！

いや、それカルデアのマスターあんまり関係ないからね？と画面外辺りからかダヴィンチちゃんがやんわり突っ込みを入れてきたような気がしたが、気にしないことに

した。さてと、とりあえずは体勢を戻さないと、宙に浮く片足を少し動かしたとき、ぐらりと上半身が大きく傾いた。

あつあつやばいこれ。やつぱり下手な事するもんじやないな。えっちよつ、ヤバイよやばいよコレ。誰か、どなたぞ手を貸してくれまいか——

とうとうバランスを保てなくなつた藤丸の体は、後ろへと大きく倒れていく。地面との激突を覚悟し、衝撃に備え強張らせた彼を、覚えのある感覚のがつしりとした二本の腕が支えた。

「あつ、銀さん……。」

「つたく、何がどうなりや橋の欄干にグ○コのポーズで立つてるなんつー状態になんだよ……うええ、にしてもまだ何かフラフラしてる感じすんな。」

「大丈夫？レイシフト酔いしたならこれ飲みなよ。俺は効いた試し無いけど。」

「だろうな。お前が差し出してるその錠剤、あからさまに箱にヨーグ○ットつて書いてるし。あーでも食いたいから、一個ちようだい。」

中身を出し、同時に口へと放り込む藤丸と銀時。広がる甘さを舌で堪能していると、バタバタと複数の足音が慌ただしくこちらへと向かつて来るのが聞こえた。

「マスター！大丈夫っ？」

「あつ、銀ちゃんも藤丸も何食べてるアルか？いいなく私にもちようだいヨ。」

「わんわんっ。」

「全く、姿が見えないと思つたらなんてトコに現れてんのよ！危なく川に落ちちやうとこだったじゃないっ！」

駆け寄るアストルフオに神楽と定春、そして尻尾を振り上げプリプリと怒るエリザベート。そして最後尾にいた段蔵は藤丸の姿を確認すると、「ご無事で何よりです、マスター」と安堵の息と共に吐いた。

「……………んん？んんん？」

口の中でヨーグ○ツトを転がしながら、きよろきよろと辺りを見回す神楽。彼女を始め、そこにいる皆もまた、周囲の状況を漸く呑み込み始める。

「おいおいおい、どうなつてんだよこりやあ？話と違うじゃねえか。」

藤丸を起こし、銀時が見上げた空は——星の輝きも一つとして無い、一面の黒。

銀時達の要望に合わせ、レイシフトの到着する時間帯を明るいうちの午後に設定した筈であった。

だがしかし、この景色は何なのだろう……………空ばかりでなく、街もが深い紺色に染まる景色はまるで、夜そのもの。電柱の照明や軒先に取り付けられた提灯などのぼんやりとした明かりだけが、闇夜を淡く照らしていた。

「え……………えええ？何、これ……………」

「そりやこつちの台詞だぜ。これじゃあ神楽のドラマも、俺の結野アナもとつくに終わっちまってんぞ。」

「いやんっ！公共の場でお尻の穴だなんて、何て卑猥なこと言い出すのよこの白モジャはっ！」

「いや違うから、結野アナのアナは女子アナのアナで——」

「きやああっ！乙女の恥ずかしい穴を連呼するだなんて破廉恥極まりないわ!!この変態天パっ!!」

「あつぶね!!馬鹿でけえ尻尾ぶん回してんじゃねえつこのトカゲ娘!!」

エリザベートと銀時による喧騒が響く傍ら、藤丸は現在の状況を確認しようと、腕に取り付けた通信機を起動する。

「もしもしマシユ、ダヴィンチちゃん、聞こえる……?もしもし!」

……返事はない。展開された電子スピーカーから流れるのは、ザー……という砂嵐の音のみ。

「あれ……おつかしいなあ。」

何度通信ボタンを押しても、応答してくる様子は見られない。首を傾げる藤丸の元に、段蔵とアストルフォが近付いてくる。

「マスター、どうしたの?」

「ん、ちよつと通信機の調子が悪くてさ。それに見てよコレ、時計もかなりズレてるみたいだし……弱ったなあ、これじゃあカルデアと連絡が取れないよ。」

「ええっ!? それは大変だあ! おお、いつ通信機君、どこか悪いのかい? そうだ、もしかすれば叩いたら治つたり——」

手刀を構えるアストルフオが言い終わるのも待たずして、藤丸は通信機を庇う格好のまま、段蔵と共に彼から距離を取った。いくら華奢な外見であろうと、アストルフオも立派なサーヴァント。彼にとつては軽い一撃だとしても、こんな精密機械はいとも簡単に粉々のビスケットと化してしまうだろう。

「ええ、駄目? 残念だなあ……そうだ! 段蔵ちゃんなら同じ機械同士だし、ちやちやつと治せたりしないかな?」

「え? その……段蔵も絡線ではありませんが、生憎修理などの機能は備わっておりませぬ……こんな時にお役に立てず、申し訳ございません。」

「いやいや、段蔵は悪くないよ。もしかすると電波の具合が悪いとか、そんな問題かもしれないし」

落ち込む段蔵を励ましてはいるものの、藤丸自身もまた内心の焦りを隠せないでいた。見知らぬ世界で彼女達のサポートを受けられないのは、正直不安が大きい。だが今自分が言ったように電波状況が悪いか、或いはカルデア側が立て込んでいるのかもしれない

ないなど、あらゆる可能性を頭の中に巡らせた後、藤丸は大きく深呼吸をした。

「……よーし、一旦落ち着こう。それじゃあ皆、ちゃんといるか？とりあえず点呼とろう点呼。はい横一列に並んでく。」

「わーい恒例の点呼だ〜！僕一番っ！」

「あつズルいアル！何事にも一番は譲らないアルヨ！」

駆け出すアストルフオの後を追いかけていく神楽の背中を見送りながら、銀時は近くにいた段蔵の側に寄り、こっそりと耳打ちをする。

「……なあ、おたくのマスターっていつもこんなことしてんの？」

「そうですね……段蔵はカルデアに召喚されてまだ日は浅いのですが、マスターはレイシフトを行った際は、必ずこうして全員の無事を確認しておられるようです。稀に一人か二人欠けていることがあるようですので。」

「稀に欠けてるって何？失敗して他の次元に飛ばされてるとか？おたくの設備は本当に大丈夫なのかよ！！」

「心配はご無用です、銀時殿。段蔵が聞いた限りでは、不明になる方々はそのような大きな問題には巻き込まれておりませぬ。精々藪の中に頭から突っ込んでいたり、畑に頭から突っ込んでいたり、湖の真ん中に頭を突っ込んでいたり、その程度です。」

「何で全員頭からイってんの？最後に至っては完璧にスケ○ヨじゃん！」

「因みにこの間、段蔵が初めて任務に参加致しました際には、マスター自身が羊の群れの中に頭から突っ込んでおられた。ということもございましたが、まあ今となつては良き思ひでとして、段蔵の中の記憶メモリーに刻まれております。」

「そんなの良き思ひでにしないでえっ！てか何で藤丸自身がそんなことになつてんの!! 銀さんもうあの子に人類の命運託すの不安でしようがないんだけど!」

淡々と答える段蔵に対し怒涛の突っ込みを連発した後、銀時は大きく溜息を吐いた。

「はあ……段蔵ちゃんよ、ここ来る前もアイツと色々と話もしたけど、俺あ藤丸あいつが世界を救つたタマにやあどうも見えねえんだよなあ……なんつーか、威厳やオーラなんかも殆ど感じやしねえ。これじゃあまりに——」

「普通過ぎる、と仰いたいんですよね? 銀時殿は。」

突如言葉を遮られたことに驚き、銀時は段蔵を見る。彼女は瞬きまばた一つすることなく、黄金の瞳をこちらへと向けていた。怒らせてしまっただろうか……とよぎつた不安はほんの一抹、絡繰の少女の口許は緩く弧を描いていた。

「……ええ、その通りです。段蔵がカルデアの方々から伺つた藤丸立香マスタという人物像は、彼が至つて普通の少年ということ。優れた魔術の才もなければ高名な家柄の血も引いてはいない、カルデアからの魔力支援を受けてはいるものの、その本質は彼がどこにでもいる……このような世界を巡る戦いの渦中などにいる筈のない、少し鈍臭くて心の優

しい、平々凡々な男子だということも。」

段蔵の視線は、銀時から藤丸へと移されていく。定春に押し掛かれそうになり「ギャーツ！」と悲鳴を上げている彼を見つめる段蔵の眼差しは、とても柔らかなものであった。

「……かつて段蔵は、母であったこともありました。マスターの母代わりになりたい、などと大それたことは申しませぬが……本来であれば何の縁などもない、血に塗れた戦場に赴くことは、彼がマスターである故に是非もない事だと承知しているのですが……やはり、どうも胸が痛みます。」

霊核のある辺り——胸元に手を当て、そう語る段蔵の声に、銀時は詰まるものを感じながらも、彼女の話すことに耳を傾けていた。

「あー……えつとな、段蔵。」

「はい、何でしょう?」

「その、俺あ母ちゃんなんてモンをよく知らないで生きてきたけどよ……ああくんな顔すんなって!別に天涯孤独だったわけじゃねえよ、俺を拾って面倒見てくれた人がいたからな。」

「親代わりの方、ですか……?」

「まあ、その話は機会があつた時にでも……とにかくだ。藤丸が大層なモン背負つてここまで歩いてきたつてことは、お前の話でよく分かつた。でもアイツだつて、目の前に広がる現実が全部生温かいものだとは思つちやいねえだろ。例え命の危険に晒されることになるうと、あえてそこに片足突つ込んで傷だらけになつたとしても、それは自分自身で選んだ道だ。何度だつて血反吐吐いて、歯あ食いしばつて、あいつは傷だらけになりながらも立ち上がつてきたんだろ……藤丸が平々凡々な極普通のガキだつて？馬鹿言つてんじゃねえよ。アンタの目にやあ、藤丸がまだ無知な子どもに見えんのかい？」

「……いいえ。段蔵はカルデアを出る際に、各部位の点検をしつかりと施していただきました。段蔵の視覚に不備などがなければ、今認識しているのは立派な男子おのこの姿にござりまする。」

お互いの顔を合わせ、ニンマリとほくそ笑む銀時と段蔵。「ちよつとく早く来なさいよ〜！」と呼ぶエリザベートの声に反応し、そそくさと足を動かした。

「……まあ、でも藤丸だつてまだ思春期真つ盛りのがキだし、母親に甘えたい時だつてあるだろうよ。とりあえずそんなときや優しく抱きしめてやればいいんじゃないやねえの？段蔵ちゃんの母性溢れるダイナマイトなボディに抱擁されりやあ、藤丸どころか他の男だつて一発陥落——」

「その発言は『せくしやるはらすめんど』と捉えてもよろしいのでしょうか？ 銀時殿。」
「待つて待つて、銀さんが悪かった。だから指こっちに向けるのやめて？ 絶対そつからマシガン的なものとか出てくるでしょ？ そういうのばっかり作つてる知り合っているから何となく分かるもん。」

「あれ？ 銀ちゃんたら、段蔵ちゃんともう仲良くなつてる。」

「抜け目ねえ奴だなホント。もうドスケベ忍者を誑し込んだのかヨ、このムツツリ助兵衛。さつちゃんに言いつけんゾ。」

「どうぞご勝手に、別に俺あのDMとはなんでもねえし。俺のがストーカーされてるから被害者だし。」

「はいはい、それじゃあ点呼取るよ。右端の人から番号と名前言つてね。じゃあどうぞ。」

藤丸が手を出し合図をすると、一番端に立つアストルフオが大きく息を吸い込んだ。
だ。

「はいはい！ 一番、アストルフオです！」

「二番、可愛い神楽ちゃんアル！」

「それじゃ三番、未来の国民的アイドル・エリちゃんよ☆」

「フォーウツ、フォウフォウ。」

「わんっ、わんわんっ。」

「えー六番、銀さんでゝす。」

「七番、加藤段藏にござりまする。」

「えーと、ひのふのみ……………あれ、一人足りなくない？」

「ちよつと仔犬、アンタまた自分を入れ忘れてない？」

「へ……………あ、そつか。」

「んも〜マスターつてば、そこんとこお約束なんだから〜。」

「つたく鈍臭えな、しつかりしろよ藤丸〜。」

あははは〜と談笑に華やぐ一同。しかしその和やかな空気を切り裂くかのように、
「待たんかいいいいいっ!!」と鋭い突っ込みが水飛沫と共に川から上がった。

着地と共に重くなった服や髪から水滴か迸り、血走った眼でこちらを睨み付けるその
人物に藤丸は思わず怯んでしまう。

「おお新八、何でずぶ濡れになつてんだ？」

「あ、あれ？もう正体明かしちゃうの？銀さん。」

「だつて、そこに至るまでの細かい描写書くの面倒くせーんだもん。第一読んでる側の
奴らはもう大体気付いてるだろ。あれ〜そーいや新八どこいった？とか、何で点呼で一
人だけイングリッシュなの？とかさ。」

「銀ちゃん、こつちにも新八いるネ。大分ちつきくなつたけどちゃん眼鏡もかけてるヨ。」

「あくホントだ、肩乗りサイズのモフモフした生物だけど、頭に本体引つかかっているし。よかつたなあ新八、随分とコンパクトなサイズになったじゃねえか。」

「新八ココ!!僕が新八だから!!本体は眼鏡じゃねえって散々言つてんだろおお!!皆が来る少し前に川に落ちたんですよ!すぐに気付いて助けてくれると思つたのに、原稿8ページ目に到達しても誰一人リアクションを起こしてすらくれないから、痺れを切らして自分から出てきましたっ!ああもう虚しいつたらねえよ!!」

上着の袖を絞る度に、ボタボタと重い音を立てて地面に落ち、吸い込まれていく大量の水。アストルフオも加勢し服の水分を抜いていく傍らで、藤丸は小さくなつた新八……もとい、新八の眼鏡を頭に乘せたフオウの前にしゃがむ。

「ありやりや、フオウ君ついてきちゃつたのかい?」

「フオウ。」

フオウはぶるぶると頭を振るい（その際に吹き飛びそうになつた眼鏡は直ぐ様回収した）、藤丸の腕を伝い彼の肩へと登っていく。今頃マシユも心配してるだろうなく、と慌てふためく後輩の姿を想像し、思わず少し笑ってしまった。

「さてと、これで漸く全員揃つてるのが確認できたけど、これからどうしよつか?」

「そうだな………とりあえず万事屋に來いよ。こつからそう遠くねえし、まずは少し休んでからにしようぜ。」

「そーそー、腹も減ったしナ。」

「銀さん、それなら風呂と洗濯機も貸していただけると助かります………あ、あと着替えに何か一枚も。」

藤丸から眼鏡を受け取り、開けた視界から今の自分の状態を改めて確認する新八。不機嫌なままの彼の上着の袖は、端が地面についてしまう程に伸び切っていた。

「新八君………どしたの？それ。」

「ごつめーん！僕のせいなんだ、絞るのに思いつきり力入っちゃってさあ。」

明るいつトーンの声で詫びるアストルフオだが、両手を合わせ懸命に謝るその姿に悪意は欠片も感じられない。まして純粋な善意からの失敗なので、怒るなど以ての外。というか怒れるわけがない、だって笑顔が………じゃないや、笑顔もこんなにも可愛いのだから。

「まさかあの細腕から、あんな怪力が生まれるなんてね………ごめんなさい、サーヴァント舐めてました。」

腕を動かす度にひらひらとはためく自身の服を見下ろし、バレたら姉上に叱られる………と小さく呟く新八に、藤丸と銀時は同情の眼差しを送ると同時に、というかその服

の生地どうなってるの？といった疑問も胸中に抱き、しかしそつと仕舞った。

「え〜っ！ちよつと仔犬、アタシと繁華街に行くんじやなかったのお？煌びやかな都会のネオンは？それらをバックに開催される、エリちゃんSPライブの話はあつ？」

詰め寄るエリザベートを窘めながら、あれ？ライブの話なんてしたっけ？と藤丸は自身の記憶を遡ろうと試みる。

まあ、そんな約束の真偽はともかく、今この子ライブつつたよな？まさかあの阿鼻叫喚、被害者続出エトセトラなあの凶悪対人宝具を、この江戸でもぶつ放そうと考えているだろうか……否、もしかしたらレイシフトについてきた目的だって、市街観光の他にこのことも入っていたに違いない……などと考えながら、目の前で頬を膨らせているドラゴン娘に笑顔を向けつつも、内心は何とか帰るまでにライブの話は忘れてもらう。と今からその為の策を必死に練り始める藤丸であった。

「まあまあエリちゃん、今は皆で銀ちゃんとの万事屋さんに行こうよ。濡れたままだとパチ君も可哀想だしさあ。」

「むう〜、しょうがないわね………全くもう、手のかかる眼鏡ワンコだこと。」

「新八殿。もし宜しければ、段蔵が後でそちらのお召し物を直します。裁縫の心得はございます故。」

「うう………ありがとうございます、段蔵さん。」

各々の閑談が飛び交う中、銀時の「おい、そろそろ行くぞー」という呼びかけにより、皆はその場から足を進め彼の背中を追いかけた。

藤丸が銀時の背中に追いついたその時、ゴウツと風を切る音と共に、大きな影が上空から差した。

「うわあ……っ！」

空を見上げた藤丸は、感動のあまり思わず声を上げる。視界を覆いつくさんばかりの大きさを誇るそれは、巨大な船であった。よく見ると他にも小型のものが数機、あちらこちらに飛んでいる船が夜空でもしっかりと確認出来る。

足を止めずに進んでいると、少しずつ高い建物が視界に入ってくる。本来であれば幕末であるこの時代には到底ありえない、高層ビルやタワーがいくつも立ち並び、色鮮やかなイルミネーションの施されたそれらに、エリザベート達は目を輝かせた。

「きやあつ何あれ!!キラキラしてんじやない!」

「わあっ!凄いですー!いつ!」

びよんびよんと跳ね、はしやぎ回るエリザベートとアストルフオの背中を眺めていると、不意に新八がぼそりと呟く。

「……ほんの二十年くらい前まではね、この国も『侍の国』なんて呼ばれてたんだよ。」

「え……?」

「でも天人あまんとが来てからは、何もかも変わってしまった。侍達の居た空も、地上も………ここはどこもかしこも、異人達がふんぞり返つて歩いてるのが当たり前になつて………ここはね、そんな国なのさ。」

そう言つて寂し気に笑う新八。彼に続き、銀時もそつと口を開く。

「………だがなあ、悪い事ばかりでもねえんだぜ。生活は何かと便利になつたし、美味しいスウィーツもぐーんと幅が広がつたしな。それに………色んな物事を経てからの『今』があつから、こうして三人と一匹で万事屋やれてんだよ。」

歯を見せて笑う銀時の背中に、神楽がおもむろに抱きついてくる。満面の笑顔の彼女と、少し照れ臭そうに笑う新八の三人の姿を、藤丸は羨望の眼差しで見つめていた。

「あつ、ねえねえ！何だか向こうが賑やかだよ！」

アストルフオが指差した曲がり角の先からは、ぼんやりと差し込む灯りと人の話し声が聞こえてくる。

「お、もうここまで来たアルか。そこ曲がりやあ万事屋はすぐそこネ。」

狭い路地を潜り、何度も定春と壁にプレスされそうになりながらも、やつとの思いで藤丸は広い道に出ることに成功する。

鼻先を掠める香と酒の匂いに顔を上げると、自分達がいるそこが飲み屋やスナックが密集した通りであることを理解した。

先程の物寂しい風景からは一転し、ちよんまげやらロン毛やら着物やらスーツやら、時代背景など知ったことかと様々なジャンルの服装をした人々や、恐らく天人であろう異形の姿の面々も皆入り交じる光景は、まるで出来の良いSF映画を見ているようである。小規模の集会の中で談笑する声や、客寄せをする男性の元気な声などが響き渡るそこは、とても活気の溢れる場所となっていた。

「わあ〜！お祭りみたいで楽しいね、マスター！」

両手を広げくると回り、はしやくアストルフオはとてもご機嫌な様子。どうやらこの街が大層気に入ったようである。通常であれば周囲から浮きまくりの彼の甲冑や、エリザベートのドラゴン角&尻尾も、藤丸の肩に乗っている不思議生物フォウだって、天人が蔓延る街中では違和感など仕事を放棄し、周囲の人々だって全く気に留める様子もない。こういうところはSFって素晴らしい。

たまに柄の悪そうな者達もいるため、すれ違う際にぶつかからないようにと細心の注意を払っていた時、「もうすぐ着くぞ」と銀時が藤丸に言った。

「ねえねえ、銀ちゃん万事屋ってどんなところなの？こんな街の中にあるんだったら、どーんとおつきなとこだったりする？」

「まさか、立派な一戸建てなんて夢のまた夢さ。下の階でスナックやってる婆の建物の、上をちよいと使わせてもらってんだ。」

「えっ、まさか豚小屋じゃないでしょうね……まあお似合いっちゃやお似合いだけど。」

「んなわけねえだろ！俺らを豚だと言いてえのかトカゲ娘えっ！」

「んもう、アタシはトカゲじゃなくてドラゴンよ！ド・ラ・ゴン！それにエリちゃんだつて何度も言ってるでしょこの白モジャ！」

ぎやいぎやいと言い争う銀時とエリザベート。この二人は相性が悪いのではないかとハラハラしながら見守っていたその時、先頭を歩いてきた新八が不意に足を止めた。

「わふっ。」

定春がぶつかつても、新八は反応もせず微動だにしない。動きを止めた集団を人々が避けて歩く中、神楽と銀時も彼の異変に気がついた。

「おい新八、どうした？こんなところで止まってんじゃねえよ。」

「ぱっつあん、犬のウ○コでも踏んだアルか？」

銀時達の声にも、新八は応えない。皆の気が彼に集中する中、新八が漸く口を開いた。
「……無いです。」

「は？何が？将来への希望か？」

鼻をほじる銀時のボケにも、いつものキレのある突っ込みは返ってこない。ツツコミマスターの彼に限ってこれは一大事だと、小指を鼻に突っ込んだままの銀時も青ざめる。

「し、新ちやくん……………何がないのかな？」

刺激しないよう、恐る恐る声をかける銀時。すると新八の手がゆつくりと上がり、人差し指があるところを示した。

「見てください……………無いんですよ、万事屋の看板が。」

「……………は？」

新八の発したその一言が、銀時も神楽も、藤丸達だつてすぐには呑み込めなかった。

藤丸が新八の差した先を目で辿ると、そこは街灯りの中に建つ二階建ての一軒家。下の階には明かりが灯っており、『スナックお登勢』と書かれた看板が目を惹いた。

だが新八を始め、遅れて銀時と神楽、そして定春までもが口をあんぐりと開け凝視しているのは、その建物の二階である。彼らの言う看板が何のことかは分からないが、外階段から登れるようになっていてそこは、出入り口らしきところはあるものの、脇に掛けてある提灯も何となく薄汚れており、お世辞にも人が住んでいるといった雰囲気はまるで感じられない。

「確かに豚小屋じゃあなかつたけど……………アンタ達、まさかここに住んでるの？」

「……………ぬ。」

戦慄く銀時の口から漏れたそれは、言葉なのか音なのか。どっちつかずに理解の出来ない藤丸達は、「ぬ？」と首を傾げて聞き返す。

「……ぬあんじやこりやあああああああつ!!」

突如響き渡る、銀時の大絶叫。びりびりと空気を震わせる程の音量に周囲の者達も思わず振り向き、彼の最も近くにいた藤丸は両手で耳を塞いだ。

「ひゃうつ……!!ちよつと、いきなり何なのよ白モジャ!!」

驚きのあまり上げた尻尾をそのまま振り回し、プンスコと怒るエリザベートに目もくれることなく、銀時を先頭に万事屋の三人と一匹は揃って駆け出す。

彼らが目指したのは万事屋……だったらしい建物の一階にある先程のスナック。あまりに勢いよく扉を開け放ったため、バァンツ!!と凄まじい音の後に扉が少し軋んだ。

「おいババア!!てめえ一体どういうつもりだよ!!」

銀時の怒鳴り声に藤丸とサーヴァント達も慌てて駆け出し、外れかけた扉から店内を覗く。

「な……何だいアンタ達?」

カウンターや丸椅子、酒瓶などが並ぶ店内はどこにでもありそうな普通のスナックで、椅子に腰掛け煙草を吹かしていた初老の女性が、突然の来客に目を丸くしていた。彼女の隣に立つメイド風の女性も、テーブルを拭いていたと思わしき布巾を持った猫耳

の女性……あまりに濃ゆい顔と眉に、コレを生物学的に雌と位置付けていいのか微妙なビジュアルではあるが。まあとりあえず逸れた話を戻して、とにかく店の中にいたこの三人は、ぎやあぎやあと騒ぎ立てる万事屋一行をぼかんとした様子でただ見ていた。

「何だもこーしたもねえよ！何してくれてんの？！何許可なく俺の万事屋銀ちゃん撤去しちゃつてくれてんだよお！！」

「そうですよお登勢さん！何も無断で外すことないじゃないですか！まあ、怒りの元と言えば、一番の心当たりは銀さんが滞納しまくってる家賃だと思えますけどね！」

「酷いネババア！私達だって頑張つて仕事してるアルよ！まあ一番悪いのは銀ちゃんだけどナー！」

「わんっ！わんわんっ！」

「てめえら何さらつと人のこともデイスつちやつてんの？！定春は何て言ったか知らねえけど、この流れだと絶対銀さんの悪口だよね？！ね？！」

「(……………あれ？何だろう?)」

喧騒を遠巻きに見ていた藤丸だったが、ふとここで違和感を覚える。

新八がお登勢と呼んだあの女性、そして店内にいる二名も、彼らの態度から知り合ひであることが伺える。だか実際に彼女達の反応はどうだろう、銀時達の怒号に対し反論

もせず、黙って聞いている……というよりは、その氣迫に圧倒され竦んでいるようにしか見ええない。

「（それにあの表情、あれじゃまるで——）」

「オイテメエラ!! マダ開店前ダツテノニウルセーゾコノ猿共!!」

と、ここで声を荒らげたのはあの濃ゆい顔の猫耳の女性。片言で反論し、持っていた布巾を彼らに向かって投げつける。程よく水気を含んだ布巾は弧を描いて宙を舞い、ひらりと避けた銀時の後ろにいた藤丸の顔面に直撃した。

「ぶへっ!」

「うわおっ! マスター大丈夫!?!」

一瞬視界が真っ白になり、すぐにアストルフオの手が濡れた布（若干臭い）を取り払うと、あの一瞬の間に猫耳の女性は神楽へと詰め寄り、互いにメンチを切り合っていた。

「大体ココハ、オメーラミタイナ餓鬼ガ来ルトコロジヤネーダヨ! 酒ノ味モエロスモマダ分カラネエオ子チャマハ、下ニ毛エ生ヤシテカラ出直シナ!!」

「あんだとゴルア! つーかお前、喋る度にカタカナばかりで入力しにくいんだヨ!! こちとら何回打ち間違えてっと思っただけ?! 投稿し終わった後も間違いがないか、こっちは気掛かりで夜も眠れないアル!」

「コレ書イテル奴の言イ分ナンテ知ルカアアア!! オメーガ不器用ナダケダロ! 強ク生き

口!!」

最早何の言い争いになっているのか、第三者からすれば微塵も分からない。それにして、カタカナばかりの文打った後だと普通に文章を打ち込むことがこんなにも快適だと改めて思い知らされるなあ。

「ちよいとキャサリン、もうおよしよ。」

と、ここで見かねたお登勢がキャサリン……猫耳の女性の肩を掴み、彼女を諫める。そんなお登勢にキャサリンはぐうの音も出ず、舌打ちをして神楽から離れた。

「アンタらもだよ。こっちはまだ営業前でね、これ以上訳の分からない難癖つけてくるんなら、警察を呼ばせてもらうからね。」

「……………は？」

ここで漸く、銀時達も彼女らの様子がいつもと違うことに気がつく。

日常より口は悪くとも、明らかに棘のある物言い。そしてこちらを睨む彼女らの目は、敵意にも似たものを感じられる。

そしてその違和感は、お登勢が発した一言により確信へと変わった。

「……………というか、誰なんだい？アンタら。」

《
続
く
》

【式】邂逅（Ⅱ）

「ぶえつつつくしよい!!」

気温が下がり、冷え込む江戸の寒空に、神楽の豪快なくしやみが響き渡る。

先程の賑やかさとは打って変わり、ここは人気がない空き地。何も無い草原に土管が三つ積んである、あの、アレだ。ドラ○もんでよく見かけるような感じのやつをイメー
ジしてもらいたい。

その後、スナックお登勢を追い出された藤丸達は行く当てを失い、やむなくこの場所へと流れついていた。徐々に寒くなっていく空気から身を守るため、揃って定春のもふもふボディにしがみついていた。

「ただ、段蔵ちゃん！一番寒そうな恰好だけど平気？もうちよつと定春くんにくつついときなよー！」

「心配はご無用です、アストルフオ殿。段蔵は絡繰ゆえ、暑さや寒さはそれほど感じませぬ。」

「さささ、寒いぃっ！何でアタシ達がこんな目に合わなきゃなんないのよ〜！」

「んなもん俺が聞きたいわ、まったく………にしても、定春いて本当よかったなあ。一家に一匹定春様様だぜ。」

寒さに身を震わせる銀時の言葉に、「わんっ」と定春が返す。垂れる鼻水を啜る彼に、藤丸はポケットから取り出したちり紙を渡した。

「銀さん、ハイこれ。少年漫画の主人公が鼻垂らしてたら格好がつかないよ?」

「おう、サンキュ………つか藤丸、何でそんな薄着で平気なワケ?」

「ふっふっふっ。実は今俺が着てるコレは、只の制服なんかじゃないのさ。カルデアが誇る発明の一つ、魔術礼装だからね。戦闘の際は勿論、こうしてレイシフトした先々の環境にもバッチリ対応できる優れモノだよ。」

「ふーん、つまりお前だけはちつとも寒くないと。羨ましいなあオイ(ずぼっ)」

「ア、ッ!!ちべたいいい!!隙間から手エ突っ込まないでよ銀しゃああんっ!!」

藤丸の絶叫が響く中、体操座りのまま動かない新八が、青くなつた唇を動かした。

「………それで、僕達これからどうするんですか?」

一同の視線が、彼へと集中する。暫くの沈黙が流れた後、銀時が大きく溜息を吐いた。「はいはい分かったよ、銀さんが謝ってくりゃあいんだろ? たくあのババア、他人のフリする作戦だなんて、回りくどいやり方しなくなつていいじゃねえかつての。」

「忘れたフリ……？あれがフリには到底見えなかつたけど？」

素直な疑問を口にする藤丸に、フオウを腕に抱いた神楽が眉を顰めて答える。

「ババアはあの通り、口は乱暴だけど相手を傷つけるようなことは絶対にしないネ。さつきのアレもきつと、キャサリン達と考えた作戦か何かに違いないアル。」

「フオウ？」

「それだけお登勢さんの堪忍袋が、もう限界だつたつてことだよ。銀さんの家賃滞納があまりに酷いから。」

「だーもうウルセエな！前回に続いてまだいびりやがって！俺だつてなあ、まさかこんなことになるたあ思つてもなかつたつての！！」

「付かぬ事をお伺いしますが……：銀時殿、その家賃というのは如何程溜めこんでいらつしやるのですか？」

「……え？」

段蔵の何気ない問い掛けに、思わず硬直する銀時。暫し目を泳がせた後に、両手の指をこちらに何本か立ててみせた。

「えーと……：銀さん、それは金額？未払いの期間とかだつたら日数かな？月数かな？まさか年数なんてことはないよねえ？」

「あのねー白モジヤ、課金は家賃までつて格言もあるの。家賃は払わなきゃいけないの

よ義務なのよ？」

「因みにその人、僕らの給料も未払いのまま大分経ってますからね。全く、いつそ僕だけでもカルデアで雇ってほしかったくらいですよ。」

「あつ、じゃあパチくん来る？ん〜でも一人だけじゃ寂しいから、やつぱり皆に来てほしいなあ。枕投げとかやつたら面白そうだし！」

「フオウ、フオウツ。」

「枕投げやりたいアル！なつ定春！」

「わんつ！」

「でもこのままだと、今日布団で寝られるかも問題だけどね……。」

藤丸が何気なく呟いたその一言により、場の空気はどんよりと重くなる。恨めしさの籠った視線を背に受け、いたたまれなくなった銀時は「だくもうっ！」と叫んで立ち上がった。

「仕方ねえ、とりあえず家賃は後で必ず払うとか説得して、今日だけは何とか中に入れてもらうよう頼んでくつからよ！ほら行くぞテメエら！」

「え〜、僕ら寒いんでここで暖取ってますから、一人で行ってきてくださいよ。」

「そうネ。元はと言えば銀ちゃんがいつまでも家賃払わないのが悪いんだからヨ。」

「てめーらなあ！〜こういう一大事だからこそ、従業員総出で土下座覚悟で行こうとして

んじゃねえかよ！それでも銀魂ついてんのかア!!」

「あー……金のほうしかついてないや。」

「あははく僕も僕も！」

「藤丸、わざわざ確認しなくてもお前についてないとエライことに——え？アストルフオ、お前………えっ？」

さりげなく重大な事実を告白されたことに困惑するも、神楽の「はよ行ってこんかい寒いんじゃああっ!!」という怒声と共に背中を蹴り飛ばされ、銀時は空き地の柵を超えた辺りまで吹き飛ばされた。

「いってえなバカヤロー!!ちったあ加減しねえかこのゴリラ娘——」

痛む背中を摩りながら体を起こしたその時、不意に視界が暗くなった。

「あつ——銀さん危ない！」

「へっ？」

藤丸の注意も間に合わず、喉から出た間抜けな声と同時に上げた頭が認識したのは、すぐ目の前まで迫っていた人影。

向こうも道端に飛び出してきた銀時の存在に気がつくのが遅れ、次の瞬間両者は派手な音を立てて衝突した。

「わ………っ！」

「ぶへっ!!」

尻から地面へと着地した両者の元に、藤丸を始め一同も重い尻……もとい腰を上げて駆け寄ってくる。

「銀さん、大丈夫!」

「痛ででで……おいコラア!ちゃんと前見て歩けやこの——」

——ふわり。

「……………え?」

鼻先を掠めたのは、花の香とは違う……優しい匂い。

知っている。自分はこの匂いを知っている。途端、銀時の表情が一変した。

「?……………銀、さん?」

彼の異変に皆が気づき始めるのも、そう時間は掛からなかった。新八が不安げに名前を呼ぶも、当の本人は全くの応答が無い。両の目は見開かれ、半端に開いた口元は微か

に戦慄している。

「……………つ、いたたた……………」

と、不運にも銀時と衝突をしてしまった相手が、小さく声を発する。

やや低めの音から男性であることが分かったと同時に、何度が点滅を繰り返す電柱の照明灯によって、その姿が明らかになった。

一見だと男性とは分かり難い、中性的な容姿に透き通るような肌。

そよ風に靡く、長く伸びた亜麻色の髪。

開いた瞼の下から覗く瞳は、穏やかな光を湛えている。

着ている着物はかなりの上物であるものの、肌や髪と同様に土埃で薄汚れ、所々が破れている。しかしそのような身なりであっても、どこか気品を感じさせる印象が損なうことはなかった。

「……………なん、で、」

掠れた声で、銀時が呟く。それは彼の傍にいなければ聞こえない程の声であった。無論、それが正面のこの男性の耳に届いているわけもなく、彼は自分を見ている大勢の視

線に暫し呆けていたものの、すぐに我へと返り体を起こす。

「あの、ごめんなさい……お怪我はありませんか？」

銀時を心配し、男性は手を差し伸べ声を掛ける。

『——おやおや、どうしました？銀時。』

大切な記憶の中と、眼前にいるこの男との声が、完全に合致する。

「俺は、この姿を知っている」

「俺は、この声を知っている」

「俺は……この男を知っている」
ひと

「あ、アンタ——!!」

銀時が口を開いたその時、遙か遠方からバタバタと聞こえてくるせわしない音。それが複数人の足音と人の声だと藤丸が理解した直後、男性の顔がみるみるうちに青ざめていった。

「つすみません、急いでおりますので……失礼致します!」

近付いてくるそれらからまるで逃げるように、男性は忙しなくその場から駆け出す。

「あつ、おい!!」

呼び止める銀時の声も既に届かず、亜麻色の髪を揺らしながら男性は暗がり消えていった。

呆気にとられていたのも束の間、大勢の足音が一瞬消えた直後、複数の人影が自分たちの上空を屋根伝いに飛んでいく。

「きやあつ!何よアレ!!」

暗がりでのその姿は確認出来ないものの、彼らが駆けていくその方角が、先程の男性が走っていったのと同じだと気がついたその時、素早く身を起こした銀時がそちらへと真つ先に走り出していった。

「ちよつ、銀さん!」

「銀ちゃん!!待ってヨ銀ちゃん!」

新八と神樂の呼び声にも応えることはなく、その姿は路地の奥へと消えていく。

「マスター、僕達も行くこう！」

アストルフオの言葉に強く頷き、銀時の姿を完全に見失ってしまわないよう、藤丸達も全速力でその場から駆け出した。

* * * * *

闇に染まった江戸の街、人気のない長屋の屋根の上に立つのは、御徒士おかちぐみ組風の恰好をした数名の男達。

彼らは暫し辺りを見回すものの、対象の姿が確認出来ないことを悟ると、手にした錫杖を鳴らしながら、再び屋根の上を駆けてその場から離れていく。

足音と金属音が遠くなり、またも静寂に包まれる中、路地の裏にある物置の扉がゆつくりと開かれた。

「……………」

隙間から頭を出し、周囲を窺っているのはあの男性。右、左、また右、そして上と、かなり慎重に辺りを警戒した後、安堵の息を吐く。かといってまだ安心は出来ない、また彼らが戻ってくる可能性だって零ではないのだ。意を決し、男性は狭い物置の中から体を外へと出した。

「——っ!!」

扉を閉めたその時、突き刺さるような視線をどこからか感じる。顔を上げ、また周囲をよく見回したその時、屋根の上にひっそりと立つ人影を発見する。

その人物がこちらに向けているものが、銃口であると気付いた時には既に遅く、ドーンッ、と乾いた音が閑静な街の中に響き渡った。

「あっ……く、う……っ!!」

数秒遅れ、右の足に走る激痛。立つこともままならず、男性はその場にしゃがみ込む。シャン、シャンとあの軽快な金属音が近付いてくる。先程立ち去ったと思っていたあの御徒士組風の男達が再び現れ、動けなくなっている男性を取り囲んだ。

「早く縛れ、もたもたしていると『傷が塞がって』しまう。」

逃れようと僅かに動く男性を押さえ、一人がそう指示を出すと、別の一人が縄を手にして男性へと近付いていく。両手首を後ろ手に縛り上げられると、男性は観念した様子で抵抗をやめた。

「こいつめ、散々手間を掛けさせおつて……！」

一人が苛立つた様子で男性を蹴り上げようとした時、隣にいたもう一人が慌てて制する。

「馬鹿、やめろ!!足を射ただけでも不味いというのに、このようなことが『あの方』に露見すれば、我々も只では済まないぞ!!」

「……ちつ。」

悔し気に舌を鳴らし、彼が足を引つ込めたのを確認すると、他の御徒士組風の男達も胸を撫で下ろす。

「よし、さっさと連れていくぞ。」

一人が言うのと、男性の近くに立つ数名が彼へと手を伸ばしていく。そのうちの一つが彼の顎を掴み、その相手と強引に目を合わせられる。被った笠の下から覗く、虚空を映しているかのような無機質な目に、恐怖に見開かれた瞳が微かに揺らいだ。

「いくら逃げようと無駄な事よ……『あの方』の眼がある限り、貴様がこの江戸から逃れることなど不可能だ。」

淡々と呟くその声に、抗えない状態に、自然と身体が震えてしまう。腕や肩を乱暴に掴まれ起こされると、彼はギュツと固く目を瞑った。

「……………おおおおおおおつ!!」

突如、夜闇に轟いた雄叫びに、御徒士組風の男達は驚き周囲を警戒する。

暗がりで見界の利かない男達の上空に、一つの影が躍り出た。

「な……………っ!!」

漆黒の中で、跳ねた銀色の髪が僅かな光を集め、輝きを放っている。

勢いを伴って振り下ろされた刀——否、あれは木刀だ。青白い霧状のものを纏った

それが何なのかを瞬時に理解した数名が、思わず飛び退く。

刹那、落雷にも似た轟音と衝撃が、彼らの眼前で巻き起こる。数名が吹き飛ばされ、土

や石やらが飛び散った。

朦々と立ち込めた土煙が晴れると、大きく抉れた地面の中央に、あの男はいた。伏せた顔を擡もたげ、こちらを睨みつける紅の双眸は、凄まじい怒気に満ちている。畏怖しきつた者のうちの一人が、「……………鬼だ」と小さく呟いた。

「ほあちやああああつ!!」

「そ〜おれっ!」

続いて奇襲をかけてきたのは、軽快な動きで暗闇を跳躍する神楽とエリザベート。片や番傘を、片や奇怪な形状の槍を構え、二人の少女は男達目掛け果敢に突進してくる。

「な……何だ、こいつら!」

突然の猛攻に狼狽える彼等の周りを、遅れて到着した数名が更に囲む。銀時の姿を兇見した藤丸は、定春の背中から身を降ろした。

「銀さんっ!」

「藤丸……すまねえ、ちよつくら手え貸してくれねえか?」

銀時が皆まで言わずとも、藤丸は強く頷きを返す。固く握った右手の拳に刻まれた、令呪が熱く輝いた。

「……敵性反応を検知。マスター、戦闘状態への移行の許可を。」

「マスター、指示をちょうだい! 僕らは君のサーヴァントだ!」

「ああ……カルデアのマスター・藤丸立香が命ずる! 銀さんを援護、そしてあの人の救助を最優先だ!」

藤丸の声に、彼の従える三騎は笑みを浮かべ、力強く頷く。

「さあて……万事屋銀ちゃん with カルデアご一行、いざ参らんっ!!」

どこのブ○ゾンだよ!! という新八の突っ込みも喧騒に流れていく中、戦闘の火蓋は

切つて落とされる。御徒士組風の男達も、各々錫杖や刀を構え応戦する。

「……つて、え？待つてよ、僕だけ丸腰なだけで？武器になるもの何にも持つてないんだけど？！てか何で銀さんも神楽ちゃんも普通に木刀と傘持つてんの？どどど、どうしよう神楽ちゃん！！」

「落ち着けヨ新八、武器もサーヴアントの一部だつて駄貧乳も言つてたアル。私もよく分かんないけど戦うゾゝつて気合い入れたら、何か出てきたネ。」

「ホントに？！そんないい加減な感じで出てきてくれるの？！」

「いいから早くやつてみるヨロシ、童貞パワーで何とかなんだろうヨ。」

「誰が童貞だアアツ！！……つて、ええええ！！本当に刀が出てきた……ていうかこの流れだと、僕が武器を展開出来たのは童貞馬鹿にされたから、みたいな流れになつてない？童貞パワーで出来ちやつた的な流れになつてるよね！！ねえつ！！」

虚しく響いた新八の叫びも、「ほあたあああつ！」と神楽が気合をこめて吹き飛ばした敵兵の断末魔の中に掻き消えていった。

「どけええええつ！！」

銀時の渾身の一撃が、複数の敵兵をまとめて薙ぎ払う。

だが向こうも相当の手練れのようにであり、また数も多いため、銀時は未だあの男性の元へと辿り着けないでいた。

「くっそー！邪魔だあつてめえら!!」

先程の一撃から、どうにも身体が思うように動かない……もどかしさから苛立ちが募り、剣の振りが荒くなる。その隙をついて向こうも攻撃を仕掛けてくるので、間一髪避けるのが精一杯だった。

「（もう少し……もう少しで、届くつてのに……っ!!）」

遮るもの全てが鬱陶しい。到達出来ない自分自身の力量さえ、鬱陶しくて仕方がない。

——何故、存在し得ない『彼』が此処にいるのか。そんな疑問は今の銀時の脳内には掠めもしない。だが、かつて取り戻したかったもの……そして、自身の選択によって喪^{うしな}ったものが、今日の前に在^あるのだ。

今度こそ、取り戻す。

阻むモノは、全て切り伏せる。

もう——手を伸ばしても届かなかった、『あの時』とは違うのだ。

「——『松陽』おとおおおおつ!!」

白銀の鬼——銀時の咆哮が、びりびりと空気を震わせる。

するとその声に応えるようにして、拘束された男性——銀時が『松陽』と呼んだ彼は、痛む体をゆつくりと起こす。

その薄い唇が、声にならない『松陽』という単語を、何度も何度も呟いた。

「ぐああつ!!」

その時、『松陽』の脇にいた御徒士組風の男が一人、膝から崩れ落ちるようにして倒れる。続いて一人、また一人と次々に倒れていく光景に、『松陽』も銀時も目を丸くする。そして最後の一人が地に伏せた時、その背後から現れたのは、煌びやかな装飾の施された馬上槍ランヌスを片手に構えたアストルフオであった。

「宝具・『触トラップ・オブ・アルカリアれれば転倒!』」ってね。弱い僕でも君達くらいの相手なら、先つちよでツンツンするだけでこの通りさ!」

「アストルフオ……！」

彼の名を呼ぶ声が、自然と歓喜に昂揚する。そんな銀時にアストルフオはピースサインを返すと、その手で『松陽』を抱え肩に担いだ。

「わっ、わあっ！！」

突然、しかも自分より華奢な少年に持ち上げられ、『松陽』は唯一自由の利く足だけをジタバタと動かす。

「うわわっ、だ〜い丈夫だよ！僕らは君を助けに来たんだ。」

アストルフオの明るい調子に敵意は微塵も感じられず、『松陽』の抵抗はピタリと止む。しかし未だに不安げな眼差しを向ける彼に、アストルフオはニッコリと笑った。

「んじゃ、今から君を抱えて走るけど、舌噛むから喋っちゃ駄目だよ？」

その問い掛けに無言で頷く『松陽』。その様子を確認したアストルフオは馬上ランス槍を靈体化させると、『松陽』を横抱きに抱え直した。

「マスター！こっちはOKだ！」

アストルフオの声に、離れた場所で応戦していた藤丸は笑みを浮かべ、親指を立てる。そして大きく息を吸うと、アストルフオに負けなくらいの大声量を張り上げた。

「全員っ、撤収ウウウウツッ!!」

その細身の何処に一体そんなパワーを秘めているのか、付近にいた敵兵達は一

様に耳を塞いだ。

それを合図に一同は領き、御徒士組風の男達から一斉に距離を置く。

「ま、待てつ!!逃がさんぞ貴様ら!!」

追いかけようとする男達、だがそこに神楽の傘の先端と段蔵の指から放たれた銃弾の雨が降り注ぐ。

怯んだ一瞬の隙に、段蔵は紙に包まれた小型の球体を幾つか取り出す。指から発した火花で導火線に火を付け、地面へと投げつけたその時、破裂音と共に白い煙が周囲一帯を覆った。

「くそつ、小賢しい真似を……!!」

煙幕で視界を阻まれていても、向こう側から聞こえる騒がしさが遠のいていくのに、対象が確実に逃亡を行っている事実が嫌でも伝わってくる。

錫杖を振り回し早急に煙を散らすも、藤丸達の姿はやはり既にそこには無かった。

「追うぞ!奴等の逃げた方角なら検討がつく、急ぎ目的の回収を——」

「あく、やめとけやめとけ。」

気の抜けた、気怠さを湛えた声と共に、彼らの前に男が一人降り立つ。

夜だというのに、その手には大きめの番傘。ぼさぼさに伸びた長髪の上から頭を掻く

その男は、眠たげな目で彼らを見渡しながら口を開く。

「あれだけの数のサーヴァントと一気に殺りあうなんざ、俺だつて骨が何本もイツちまうぜ。そういうや、連中を仕切つてる妙なガキも一人いたな……成程、あれがカルデアのマスターつてわけか。」

指で顎を撫でながら、にやりと男は一人笑む。その顔と眼の奥に蠢く底知れぬモノに、男達は鳥肌が立った。

「よし、一旦俺らも退くぞ。」

「はっ?しかし対象の回収がまだ——」

彼の言葉は、顔にめり込んだ番傘の男の拳により強制的に中断される。吹き飛んだ体は物置へと衝突し、壊れた木の破片の中で動かなくなっていた。

「……撤退する、つったよな?お前らも聞こえなかつたか?」

ぎよろりと動いた目玉が捉えた男達は、皆一斉に頭を横へと振る。中にはあまりの恐怖に涙目になっている者までいた。

「よし、お前から先に行つて『お上』に報告しとけ。俺あまだ野暮用があるからよ。」

「りよ……了解しました!」

逃げるように、といった表現がぴつたりな程に、御徒士組風の男達は一目散にその場から去っていく。

間抜けな後ろ姿を鼻で笑い、男は番傘を肩に担ぐと、大きな欠伸を一つした。

「にしても、連中までサーヴァントになつてゐるたあな……さて、仕事サボつて道草食つてる『クッガキ団長』を、そろそろ回収してこねえと。」

* * * * *

「もう……追いかけて、こないよね……？」

「ぜえぜえと息づく新八の横で、段蔵は自身の眼に搭載された望遠スコープ（暗視モードON）で、周囲を見渡す。

「……辺りに反応はありません、皆様、どうぞご安心を。」

「よ、よかつたあ……。」

力が抜け、崩れていく藤丸の体を、アストルフオが慌てて支える。各々が疲弊しきつた身を、逃げ延びたこの河川敷で休ませていた。

「きやつ!!ちよつと眼鏡ワンコ、あんな鼻血出てんじゃない!」

「あ……逃げる途中、何度かこの伸び切った袖を踏まれたからね、そんな時一回顔面から

「転んだもんで……。」

「道理で袖に新しい模様がが増えてると思ったアル、よく見れば定春とフオウの肉球までしっかりあるヨ。」

「わんっ。」

「フオウツ。」

「あーもう、みつともないわね！とつととこれで拭きなさいな。」

見かねたエリザベートが手渡したのは、私物の白いハンカチ。こういうツンツンな女の子の不意に見せる優しさが、男心にグツとくるのだ。新八も例外でなく、受け取ったハンカチの柔らかさとはんのり香るいい匂いに、思わず目頭が熱くなる。

「あ……ありがとう、エリちゃん！」

「ふふん、アイドルとしてフアンは大切にしないとね……あ、それと拭いたらすぐに渡してちょうだい、鉄分ならこの際ソレでも構わないわ。」

「え？今なんて？」

そんなやり取りが傍らで繰り広げられている一方、藤丸はアストルフオの膝枕という特等席から頭を起こし、銀時の背中を見る。彼は『松陽』を縛っている縄を解こうと、一人躍起になっていた。

「くそっ、この……解けやしねえ！」

一刻も早く、こんな忌々しいものから解放してやりたいのに……固い結び目に苦戦し、徐々に募る苛立ち。そんな銀時の様子を、『松陽』は何度も振り向きながら心配している。

見かねた藤丸が立ち上がり、彼の元に近付いて肩を叩こうとしたその時、背後の気配を察した銀時がぐるりと勢いよく振り向いた。

こちらを睨みつけるような眼差しを向けられ、立ちすくむ藤丸。だが銀時もそこにいるのが彼だと分かった途端、すぐに警戒を解いた。

「あつ……すまねえ、お前だったか。」

「いいよ別に。それより解けそうにないの？その縄。」

「ああ、多分こりやあ縄抜け出来ないようにしてんな……。」

頭を乱暴に掻き、溜息を吐く銀時。苦戦する彼の元に、散らばっていた他の面子もぞろぞろと集まってきた。

「銀時殿、よろしければこちらをお使いください。」

段蔵が懐から取り出し、彼に手渡したのは苦無だった。銀時は彼女に礼を言うと、刃先で慎重に縄を切っていく。

「い……っ！」

縄を少し引いた時、『松陽』の顔が僅かな痛みに歪む。

「……悪い、痛かったか？でももうちよいで解いてやるから、我慢しててくれよ？松陽。」

なるべく心配をかけないよう、柔らかな口調で声を掛ける銀時。そんな彼の様子がいつもと違うことに、新八と神楽も薄々気がついていた。

「銀さん……その人つてまさか——」

新八が全てを言うのを待たずして、『松陽』の腕を拘束していた縄は解け、地面へと落ちていった。

漸く自由になった両腕、擦れて痛む箇所を手で擦った後、『松陽』は銀時へと向き直る。「皆さん、巻き込んでしまい申し訳ありません……でも、助けていただき本当にありがとうございます。」

柔和な笑みを湛え、深々と頭を下げてくる彼に、銀時を始め一同もつられて礼をしよう。

「あー、その……何でここにいんのか、何で追われてたのかとか、詳しいことは後にして………無事でよかつたな、松陽——おわっ!!」

正面へと向き直った銀時に、突然『松陽』がずいっと顔を近づけてくる。驚いて仰け反る銀時の後頭部が、背後にいた藤丸の額にゴチンツと音を立てて激突した。

「いっただあああつ!!何すんの銀さんっ!!」

「痛ででで!! おまつどんだけ石頭なんだよ!! ヒビ入ったんじゃねコレ!!」
足をばたつかせ、激痛に悶える両者。その喧騒に負けないように声を張り上げ、「あ……!」とおもむろに『松陽』が切り出した。

「貴方の仰っている、その『松陽』というのは……もしや私のことでしょうか?」

「……………は?」

あまりのことに、一瞬だけ理解が遅れる。

銀時も、その場にいる誰もが、彼の突拍子もない一言に凍り付いていた。

「し、松陽……………何言ってるんだ? お前……………」

動揺に笑みは引きつり、自然と声も震えだす。悪い冗談に違いないと自分に言い聞かせるが、『彼』がそんなつまらないことを言い出す人間ではないことも、銀時はちゃんと知っていた。

しかし、今日の前にいる彼はどうかろう……………その姿、その声までもが、銀時の記憶に
いる『彼』そのものであるが、きよろきよろと落ち着きなく周囲を見回している様子や、
以前には見せたこともなかった不安げな表情が、銀時の中に言いようのない違和感を生

み出す。

「……………なあ、お前……………『吉田松陽』なんだよな?」

銀時は意を決し、核心に迫った質問をぶつけた。

すると、『彼』は一瞬目を丸くした後、食い入るように銀時の顔を見つめ続ける。だが暫く経過すると、『彼』は静かに首を横に振り、絞り出すような声でこう言い放った。

「……………ごめんなさい。私、分からないんです。自分の事も、自分の名前も……………貴方の事も。」

冷え切った寒空の下、河川敷に流れる音は流れる水のせせらぎのみ。

悲し気に俯く『恩師の姿をした何か』を前に、言葉を失った銀時は、ただ呆然としていることしか出来なかった。

《
続
く
》

【式】邂逅（Ⅲ）

「いいアルか？ 転げ落ちないよう、しっかりと掴まつてるヨロシ。」

神樂の言いつけに頷き、松陽は定春の背中に恐る恐る腰を下ろす。伏せていた巨体が彼女の合図で立ち上がると、案の定バランスを崩した松陽が後ろへと仰け反った。

「わっ！とと……大丈夫ですか？」

「す、すみません……ありがとうございます。」

間一髪支えに入つた新八により、難を逃れた松陽は彼に礼を述べ、定春の背中に横向きで座る姿勢を安定させた。

「わあ……っ！」

少し高くなつた視界に、目を輝かせた松陽は感嘆の声を上げる。歩く振動で触れた箇所から伝わってくる、もふもふとした毛並みも心地良かった。

「ふふん、定春の背中は私の特等席アル。今日は特別にお前に貸してやるネ、感謝しろヨ？」

「わんっ。」

「はい！ありがとうございます、神楽さん。」

向けられた笑顔は眩しく、嫌味や邪なものは微塵も感じられない。一瞬きよんとした神楽も、先程までの自身の態度が急に恥ずかしくなり、ぼつが悪そうに染まつた頬を搔く。

「さ……さん、は要らないネ。もつと碎けた呼び方がいいアル。」

「そうですか？なら………神楽ちゃん、で如何でしょう？」

「うむ、それでいいアル！」

むふ、と満足気に鼻を鳴らす神楽。そんな彼女の隣で、新八は何か言いたげに松陽を見ている。

「おい新八、何もじもじしてるアル。おめーも松陽に名前呼んでほしいんだろ？」

「えっ!!えと、その………はい。」

「ふふつ。それでは、新八君とお呼びしてもよろしいですか？」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

「くーん……。」

「定春君、背中に乗せてくださってありがとうございます。重いでしょうけども、どうかよろしくお願ひしますね？」

「わんっ、わんっ！」

互いの顔を見合わせ、微笑み合う三人と一匹。少し先を歩く藤丸達も、胸の内がほっこりと温まる光景に笑みを零した。

「いやあ尊い、尊いねえ……。」

「マスターが両手を合わせるその想い、絡繰の段蔵でもよく理解出来る気がいたしまする……。」

「フオウ、ンキユツ。」

「だよねー、尊いよねえ。尊みMAXだよねえ。」

「アンタ、ちゃんと意味分かってその言葉使つてんでしようね……あら？」

エリザベートが何気なく見やった先に、一人先頭を歩く銀時の後ろ姿。団欒する新八達にもくれることなく、一定の歩幅で進んでいく彼の背中に、エリザベートは早足で近寄つていった。

「ちよつと、白モジャ。」

エリザベートが声を掛けると、銀時はいつもの死んだ魚のような目をエリザベートへ向ける。

「あ……なんだ、おめえか。」

「なんだ、とはご挨拶ね。それよりなあに？さつきからポーつとしちゃって、髪の毛だけじゃなくお頭むの中までクルクルパーになっちゃったのかしら？」

けらけらと笑われ、小馬鹿にした態度をとる彼女に、先刻までの銀時なら食って掛かっていただろう。だが彼は特に言い返してくる素振りも見せず、再びぼんやりした様子で歩いていくだけだった。

「……んもう何よ、つまんない男ね！」

すっかり鼻白んでしまったエリザベートは、去り際にあっかんべーを銀時にお見舞いし、そそくさと藤丸達の元へと戻っていつてしまふ。

再び一人となった銀時、川沿いに建ち並ぶ家屋の向こうに煌く街灯りを眺める彼だが、その景色は頭の中に入ってなどいかなかった。

「(……………一体、どうなつてやがんだ。)」

振り向いた彼の眼に映るのは、新八や神楽と楽し気に会話をする松陽の姿。彼らの話や反応に向けられる笑顔は、銀時の記憶の中に在るものと何一つ変わらない。

笑顔だけでなく、容姿、声、仕草……出会つてからほんの僅かの間でも、彼の『吉田松陽』である要素を多々認識している。ならば、この男は自分の恩師である『吉田松陽』なのだろうか……しかし銀時は、どうしてもそれを事実と肯定出来ないでいた。

「(そんな筈はねえ、だつてそうだろ……………松陽^{せんせい}は『あの時』、俺が——)」

唐突に、脳裏で再生される過去の記憶。

曇天の空の下、多くの敵兵に囲まれる自分。

縛られ、囚われた二人の友の間を通り、向かったのは背を向けた恩師の元。刀を構えた自身の手が震える……嫌だ、嫌だ。この人を喪うしないたくない。

ゆつくりと、こちらに振り向く彼の口が、小さく言葉を紡いだ——。

『』。

「……さん、銀さん！」

耳元で張り上げられた声に驚き、そこで我に返る。隣を見ると、新八が呆れた様子でそこに立っていた。

「もう、何ぼんやりしてるんです？ さっきから何度も呼んでるのに。」

「あ………悪い、考え事してた。」

「考え事って………ひよつとしなくても、松陽さんのことですよね？」

的を射た新八の指摘に、うっ、と低く声を洩らす銀時。あからさまに凶星だという分かりやすい反応に、新八は溜め息を吐いた。

「全く、僕らには話してくれたことなんてなかったから、あくまで僕の推測ですけど……大切な人なんですよね？あの人、銀さんにとつて。」

「……分からねえ。もしかしたら、よく似た別人って可能性もあるし。第一、あいつはもういねえ筈なんだよ。だつてのにまた俺の前に現れて、しかも記憶を失つてるだあ？んな漫画みてえな展開、そう簡単に受け入れられっかよ。」

「銀さん、まさか松陽さんを疑つてるんですか……？どうして、だつてさつきはあんな必死に、一人突つ走つてまで助けに行つてくれたじゃないですか?!」

「でけえ声だすんじゃないよ、うるせえな……さつきのはアレだ。あいつがあんまり似てたから、そいで頭に血が上つた勢いに任せたままによ。つーか疑うも何も、冷静になつて考えてみりや、まずあいつが俺の知つてる先生だつていう確証が今んとこ無いからな。それに記憶がねえつても、俺らを嵌めるための芝居かもしれないねえ——」

「ほあたたあああああつ!!」

威勢のいい掛け声が続いて、背中に走る衝撃。本日二度目となる神楽のカンフー・キックを受けた銀時は、「ホイコーローっ!!」と豚肉とキャベツを炒めた中華料理名のよいうな声を上げ、数メートルの距離を転がっていくと、その先にいた藤丸を撥ね飛ばす。

突然の衝撃に「ショウロンポーっ!!」と豚肉を小麦粉の皮で包んで蒸しあげた包子のような悲鳴を上げて、暫く宙を舞つた藤丸は落下の既の^{すんで}ところを段蔵に受け止められ

なきを得た。因みにこれを書いてる奴は、今お腹がとても空いている。天津飯が食べた
い。

「いつてええエエ……こんのクソガキてめえ!! 転がった末に藤丸跳ね飛ばしちまった
じゃねえかよ!! 一体何がしたかったの?! 人間ボーリング!!」

頭に大きなたんこぶを抱え、怒鳴りながら体を起こした銀時。しかしそんな彼の
前に、拳をポキポキと鳴らした神楽が鬼の形相で仁王立ちしていたので、流石に銀時もそ
れ以上は何も言えなくなる。

「銀ちゃん……今言ったこと、すぐに取り消せヨ。」

「か、神楽ちゃん……? 何故にそんなお怒りになつてんのかな……?」

紅蓮の炎の如きオーラを背中から放出する神楽。まるで不動明王を連想させる彼女
の迫力に圧倒され、銀時は思わずたじろぐ。

「神楽ちゃん、言いたいことは分かるけど少し落ち着いて——」

「うっせえメガネ! こんな時に餅なんてついてらんないアル! 一人で正月気分迎えてろ
ヨ!!」

「お約束の聞き間違いだなオイ! 誰も餅の話はしてねえっつーの!!」

「新八君、餡子と豆打ずんだならここにあるよ!」

「だから餅の話は、つてそれどつから出したの藤丸君?!」

ツツコミをかます新八に構うことなく、銀時のすぐ正面まで迫ってきた神楽は、未だ地面に尻をついたままの銀時の胸倉を掴むと、青筋を浮かべた額を近付け、激しく怒鳴りつけた。

「いつまで拗ねてんだヨおめーは!! 忘れられたことがそんなにシヨツクだったアルか!! 確かに私達、銀ちゃんからなんにも聞いてないから、銀ちゃんの大切だった『松陽』の事は何にも知らないアル……でもな、この松陽が銀ちゃんの知ってるほうであつてもなくて、好きで大切な人の事を忘れる奴なんか、いるワケねーだろ!!」

暗い路地に響く騒ぎに、只事でない事に気付いた藤丸達も慌てて駆け寄ってくる。ふと銀時が向けた視線が、定春の上に乗った松陽とぶつかる。よく知った顔が浮かべるその表情は、銀時の知らないものであつた。

「それに、松陽さつき私と新八に言つたネ……もしかしたら自分が実は凄く悪い奴だつたり、思い出したいくないくらい辛くて悲しい思い出があつたりだとか、忘れてたほうがずっとマシだったこともたくさんあるかもしれない。けれどそれも全部ひつくるめて自分という存在があるから、ちゃんと記憶を取り戻したいんだって………それによつてたヨ。きつと銀ちゃんは凄く大切な人だつたに違いないから、一番に思い出すように頑張るって。」

「……………」

その一言に、銀時の目が見開かれる。

記憶が無いのだろうか？覚えてなどいないのだろうか？それなのに、何故そんなことを言うのか……銀時には、全く理解出来なかった。

すると、定春の上からやや危なっかしい動作で降りてきた松陽が、おもむろにこちらへと歩いてくる。銀時の胸倉から手を離れた神楽と入れ替わり、呆然とする銀時の前にしやがみ込んだ。

『坂田』さん……私はまず、貴方にお礼を申し上げたいのです。」

松陽の手が、銀時のものと重ねられる。伝わってくる感触と温度は、かつて自分が体験したものと、何一つ変わらなかつた。

「私は、目覚めた時から既に、一切の記憶を失つておりました。なので先程の方々に追われる身となつている理由も、未だよく分からないのです……自分自身の素性も、名前すら思い出せない。行く宛ても、頼つていい方も知らぬまま彷徨っているうちに、私の目に映る景色は皆、色褪せて見えませんでした。」

掌を握つた松陽の手が、微かに震えているのが伝わってくる。それでも伏せた顔を上げ、彼は精一杯微笑んでいた。

「でも、坂田さんが私のことを『松陽』と呼んでくださったあの瞬間……色を失つた私の世界が、一瞬にして鮮やかに輝きだしたような気がしたんです。でも、坂田さんの反応

を見る限り、私とその『松陽』さんである確たる証拠が無いのは、何となくお察しできました。それでも……………それでも、私は嬉しかった。例えそれが勘違いからのものだろうと、誰かが『私』を『私』として認識してくださることで、孤独に押し潰されてしまいそうだった私の心は、暗闇の中から救われたのです……………本当に、ありがとうございます。」

……………温かい。手を介して伝わってくる体温が、記憶の中の『彼』と同じ声と口調で語る、彼の言葉が。

「あの、坂田さん……………」

「へっ!!お、おうっ。」

「痴おしがましいことは百も承知しているのですが……………もし宜しければ、私の記憶が戻るまでの間だけでも、貴方の大切な方のお名前をお借りしてもよいでしょうか?初めて耳にした時から、とても感動していたんです。ああ、なんて優しい響きなんだろうと……………それに、皆さんがその名で呼んでくださる度に、胸の内がほかほかと温かくなるんです。それがとても不思議で、とても心地良くて……………」

銀時は瞠目する。名を貸すことに否定的な思いや感情は無い。だが目の前で嬉しそ

うに話している、無垢という言葉をそのまま人型にしたような今のこの男に、『吉田松陽』という重荷なまえを一時でも背負わせることはあまりに酷ではないかと、銀時は迷つていた。

だが彼のそんな複雑な思考も、左右から割り込んできた両者によつて阻まれる。

「ねっ銀ちゃん、いいでしょ？ちよつとの間だから、私からもお願いアル！」

「銀ちゃん、僕からもお願いするよ！ねっ？」

「ぐえええ分かつた分かつた!!だから手え放せつてお前ら！首締まる締まるっ!!」

割り込んできた夜兔娘の怪力と、細身は外見ばかりの男の娘の秘めたる剛力に襟首を掴まれ、半ば強引に了解の返答を絞り出すと、二人は同時に手を放し「やったあ！」とハイタツチをした。

「……ちっ。あくもう、悩んでんのも馬鹿馬鹿しくなつてきた。」

ぼりぼりと頭を掻き、銀時は正面へと向き直る。師の姿をしたこの男を改めて前にし、緊張していないなどと言えば嘘になるだろう。こちらを見ては目を逸らす銀時に、松陽は小首を傾げた。

「そんじや……俺のほうから一つだけ、条件がある。」

「はい、私に出来ることであれば何なりと！」

「おーい駄目だよ、内容聞くまで何でもするとか言つちや。悪い奴の前で絶対そういう

台詞言うんじゃねえぞ……その、俺の呼び方のことなんだけだよ。」

暫くの間目を泳がせ、口をモニユモニユさせながら赤くなつた頬を搔いていた銀時だったが、漸く意を決し松陽に向かつて云つた。

「坂田さんじゃなくて……名前で呼んでくれないか、俺のこと。」

真つ直ぐに見据える紅の瞳に垣間見えるは、僅かな期待。

彼が松陽である真偽は未だ分からずとも、彼の——松陽せんせいの優しい声に、もう一度名を呼んでほしい。それが、今の銀時が望むことだった。

暫し目をばちくりさせていた松陽だったが、その表情がぱあつと輝いたのは数秒後であつた。

「はい！それじゃあお名前前で呼ばせていただきますね、銀時『さん』！」

想像していたのとは違う答えに思わず肩を落としそうになるも、にこにこ笑う松陽の様子は心底から嬉しそうで、まあいいか、などと思つてしまう銀時であつた。

「……ねえ、ずっと端から見てて思ったけど、白モジャが拗ねてた原因つてこの松陽？に忘れられてたからつてこと？」

「べつ、別に拗ねてねえし！勝手に勘違いしないでよね!!」

「いえ、段蔵の眼に映っていた先程までの銀時殿は、まるで悪態をつき駄々をこねる幼子のようにありました。」

「んがっ!! 段蔵までそんなこと……。」

「ねーねー松陽さん、僕はアストルフオっていうんだ! よろしくね!」

「アストルフオ、くん……ええと、『さん』のほうがいいのでしょうか? すみません、あなたはとても可愛らしいのですが、一見だとどちらかよく分からないもので……。」

「おお、アストルフオの本質をこんな早くに見抜くとは……あ、俺は藤丸立香です。よろしくお願いますね、松陽さん。よかつたら餡子か豆打食ずんだべません? しまうタイミング失った上に地味に重いんですコレ。」

続々と皆が周りに集まり始め、賑やかというよりは少し騒がしい。しかしその真ん中で、自身に与えられた仮初の名を口にされる度に、笑顔が華やぐ松陽を眺めていた銀時の頬も、自然と綻んだ。

「それで銀さん、僕らは一旦また万事屋……だったところ引き返す形でいいんですよね?」

「あ? そういうことになったんだっけか?」

「アンタがさつきそう言ったんでしょ? ちゃんと覚えててくださいよ。」

「んー、ヘル○エイク○野のこと考えてたら忘れてたわ。」

「誰だよヘル○エイク○野って?! んな無理に流行に乗ろうとしなくても!」

「ハール○エイク！ハール○エイク！」

「ああもう、神楽ちゃんまで便乗してこなくていいから！」

「ヘー○シエイク！ハールシエ○ク！」

「うるっせえんだよお前からアアっ！！話が前に進まねえだろうがっ！！あと隠すならちゃんと隠せやオラアアっ！！」

新八の手が藤丸から皿に山盛りに盛られた餡子と豆打ずんだを搔つ攫い、それらを銀時と神楽の顔面に叩きつけたことにより、ぐだぐだ展開に繋がりそうな空気は何とか収束された。

「でも眼鏡ワンコ、今戻ったってまたあの妖怪みたいな奴らに追い出されるだけなんじゃない？」

「妖怪みたいって……確かに否定はしないけど、中々言う事キツイねエリちゃん。本当はね、僕の家でもある道場に案内したいとも考えたけど……こんなに大勢連れて行ったら、姉上が何て言うか不安で。」

「そーだなー、おめえの姉ちゃんおつかねえし。」

「姉御には悪いけど、丹精込めて作ったあの暗黒物質ダークマターを松陽達には食わせられないアルよ。」

交互に餡子と豆打ずんだを手掴みで口に入れ、もっしやもっしやと頬張る銀時と神楽の言い

分も否定できず、新八は大きく溜息をつく。

「とにかく、ここで時間を無駄に潰しても埒が明きませんし、こうなったら銀さんを踏みつけてでも土下座させて、お登勢さんから許しを頂くしかないですね。」

「そだねー。銀ちゃんには悪いけど、どこかで休めるところを探さないと松陽さんの怪我也——あれ？」

ふと、アストルフォが不可思議なことに気がつく。松陽の身に着けている着物はあちこちが破れ、特に右足の辺りには一際大きな裂け目が出来ていた。これはよつほどの大怪我をしているに違いないと、アストルフォは彼の脚部に目を落とす。だがそこから覗くのは、少し泥に汚れた白い地肌だけ。この箇所その他にも幾つか確認してみるものの、松陽の体に外傷などは一切見当たらなかった。

「ねえ松陽さん、どこも怪我とかしてない？痛いところかない？」

「痛いところ、ですか？そういえば、先程逃げる時に足を——おや？」

自身の足を見た松陽もまた、射られた右足の傷が無くなっていることに、ここで漸く気がつく。

「……おかしいですね、確かに私はあの時……あれ？」

どうしたのだろう、まるで霽もやがかかっているかのようにな、その記憶だけが上手く思い出出すことが出来ない。

「松陽さん、大丈夫……?」

頭を押さえ、俯く松陽を心配するアストルフオ。彼らの様子に気付いた銀時も空になった皿を地面へと置き、「おい…」と声を掛けようとした時だった。

『キヤアアアアアアア!!』

突如暗夜に響き渡ったのは、甲高い女の聲。

続いて段々と大きくなっていくせわしない足音に、その場の空気が一気に張り詰める。

「今の……悲鳴、だよな?」

藤丸の疑問に誰かが答えるより早く、こちらに近付く足音の正体が現れた。

「助けて……助けてくださいっ!!」

女だった。声からして、先程悲鳴を上げたのはこの女性に間違いないだろう。着の身着のままと言った恰好の彼女は、藤丸達の姿を発見すると、涙と鼻水で化粧の崩れた顔をこちらに向けた。

「あつ、おい藤丸!」

銀時の制止も聞かず、女性の元へと駆け出す藤丸。その乱れた服装から、暴漢にでも

襲われたのかと推測する。とりあえず彼女の身柄を保護しようと、藤丸は女性に声を掛けた。

「大丈夫ですか!」

「あ……よかった、よかつ——」

こちらへと向かつて来る藤丸の姿に安堵し、女性が緩めた口元を開いた時だった。

びしゃつ、

生臭い赤い液体が、噴水のように女の口から飛び出す。

頬に飛び散る生温かい感覚は、冷えた気温の中で徐々に温度を失っていった。

「……………え?」

呆然とする藤丸の目が映したのは、びくびくと痙攣する女性の顔——ではなく、露わになった乳房の間から突き抜けた、血に塗れた異形の手。

「見るなっ!!」

銀時の手が、新八と神楽の目元を瞬時に覆い隠す。同時に松陽も自身の背後へと追いやり、目の前の惨事を見せるまいとした。

ずるり、とその手が引き抜かれたと同時に、支えを失った女性の身体は地面へと崩れ

落ちていく。物言わぬむくろ軀となった彼女を踏みつけ、背後にいた『それ』は姿を現す。

頭から被る汚れた布の下から、ぎらついた眼光でこちらを睨んでいる。口角を吊り上げた口元は大きく裂け、黄ばんだ色の鋭い歯が並んでいた。

だが藤丸が凝視するのは、目の前のおどろおどろしい魔物の姿ではない。尖った爪を食い込ませ、それが握りしめているものは……今しがたまで生者だった女の、温かな心臓だった。鮮血に塗れたそれはまだ赤味を保っており、魔物は掴む手を高く掲げると、滴る赤い雫を口で受け、何度も喉を鳴らした。

「マスター危ない!!後ろっ!!」

アストルフオの声で我に返り、振り返った時は既に遅かった。背後にいたのは先のものとはほぼ酷似した姿の魔物。気がついた時にはそれが振り回した棍棒らしきものが直撃し、腹部に激痛が走る。そして襲ってきた衝撃に、藤丸の身体は大きく吹き飛んだ。

「が……っ!!」

家屋の壁に背中を打ち付け、そこにもたれかかるようにして倒れる藤丸。額から伝ってくる液体は、先程頬についた返り血と同じ温度をしている。不快な鉄臭さに口内のものを吐き捨てると、睡の中に血が混ざっていた。

「仔犬……っ!!アンタ達、よくもやってくれたわね!」

激昂したエリザベートは愛用の槍を展開し、二匹の魔物へと突進していく。だが彼女

の行く手を、突如目の前に降りてきた複数の影が阻む。

「ちよつ……何よ、こいつら!!」

女の臍物を扶つたのと似た者、般若の顔をした女、白いざんばら髪を振り乱した赤い小鬼など、様々な姿形の魔物達が各々刀や槍、または毒々しい色の爪などを構え、彼女を睨めつける。

同時に、辺り一帯を覆う程の禍々しい妖気が漂う。それは段蔵の過敏なセンサーだけではなく、銀時達までもが感じ取れる程濃いものであった。

「な………何ですか、あれ!!」

銀時の腕を退け、そこから見た光景に新八は絶句する。彼だけではない、その場の誰もが、家屋の屋根の上やら塀の上やら、果ては河川敷からぞろぞろと姿を現す数多の魔物達に、皆一様に言葉を失った。

「……ねえ銀ちゃん、この人達もかぶき町の住人なの?なんか僕達を殺る気満々な雰囲気なんだけど。」

「んなわけねえだろ!火事と喧嘩は江戸の華たあ言うが、出会い頭に殺意剥きだしてくるような奴は銀さん知りません!あれ、よく考えたら周りに何人かいたかも?」

「そんなことより、この状況どうするんです?!早く藤丸君を助けないと……!!」

狼狽し叫ぶ新八の視線の先には、頭部からの流血で白の制服を汚し、ぐつたりとする

藤丸の姿。彼の血の匂いに反応した魔物の何匹かが、ゆらりゆらりと近寄っていった。

「藤丸君……!!」

咄嗟に後ろから身を乗り出し、駆け出そうとする松陽を、銀時が慌てて止めに入る。

「松陽、アンタはここにいろ。定春の傍を絶対に離れるんじゃねえぞ。いいな?」

「銀時さんっ、でも——」

「大丈夫ネ、藤丸は私達が助けるアル!定春、フオウも松陽を頼むぞ!」

「わんっ!」

「フオウフオウ!」

一二匹の返事を聞き届け、皆一斉に得物を展開し、魔物の群れ目掛け駆け出す。

「あれ?ちよ、また僕だけ武器が展開出来ないよ!!どうなってるのコレ!!」

「おーいぱつつあん、大事な場面だぞ。しっかりするネこの童貞ヤローがよ。」

「え、アンタ童貞だったの?まあ今更驚くことでもなさそうだけど。」

「エリちゃんまでそんなことっ!!皆して童貞童貞馬鹿にしやがってチツキショー!!つて、あれえええエエまたこのタイミングで刀出ちやったよおおおっ!!やっぱり僕の力の出所つて童貞からなの?!ねえ?!」

本日二度目となる童貞……じゃねーや新八の悲痛の叫びも、段蔵が魔物に向け放った噴進弾の爆発音によって掻き消されていった。

「おらあああああつー！」

木刀を叩きつけ、合間に拳や蹴りも入れ、銀時は次々と魔物を片付けていく。少しの休息もあつたお陰か、感じていた倦怠感は大分薄れ、この好機を逃さんとばかりに銀の侍は猛威を振るっていった。

「えいつーやあああつー！」

こちらも負けてはおらず、アストルフオの振るう馬上槍ランスが、まとめて魔物を薙ぎ払う。吹き飛ばされ、息絶えた者達はその姿を塵と変え、霧散していった。

しかし、一体倒せばまた一体、十体倒せばまた十体と、次から次に湧いて出てくるのでキリがない。いくらサーヴァントであっても、この状況には流石に疲労が募っている。

「はあ、はあ………こいつら全然減らないアル、無限に湧き出て嬉しいのはご飯とお金だけで充分ネー！」

「んもくう鬱陶しいわね！こうなったらアタシの宝具で一網打尽にしてやるわ！」

「わくっ！待ってまってエリちゃん！それだけは駄目くっ！！」

マイクに見立てた自身の槍を地面に突き立てようとしたが、即座に反応したアストルフオに羽交い絞めにされ、「なんでよく！」と手足&尻尾を振りながら抗議するエリザベートの姿を、事情を知らない新八と神楽はただ不思議そうに眺めていた。

「しかし、エリザベート殿の言う事も最もです……このまま長丁場が続くとなれば、こちらの魔力が続きませぬ。」

段蔵の言う通り、もしこのまま悪戯に魔力と体力を消耗し続けければ、いずれ必ず動きは停止してしまう。そこをこれだけの数の魔物達に襲われてしまえば、一貫の終わりだ。

アストルフオは周囲を警戒しながらも、前方に目を配る。そこには奮戦する銀時の勇姿が映るものの、あの勢いを保ったままでは恐らく長くは持たない。せめてマスターである藤丸から魔力を供給出来れば……そう思った時、彼の視界の隅で動くものがあった。

「……マスターっ!!」

アストルフオの呼び声に、皆の視線は一点に集中する。立ち上がろうと踏ん張る彼の頭からぼたぼたと垂れ落ちる赤が、出血がまだ治まっていないことを明確にさせた。

「馬鹿っ!! 動くなっつての!!」

すかさず駆け寄ろうとする銀時、だがそうはさせまいと、またも群がってくる魔物達。「ちっ……邪魔だああああっ!!」

木刀を握る手に力が籠る。徐々に刀身に纏わりついていく青白い霧に、彼は気付いてはいない。そのまま刀を横に大きく振った刹那、巻き起こった衝撃波に多くの魔物が巻

き込まれ、吹き飛んでいった。

「ううおやおお！なんだコレ！！すげえもん出たぞ！！」

放った本人が一番驚愕する向こうで、「銀ちゃん凄いネ！」と神楽が感嘆の声を上げていた。

「よっし、このまま一気に飛ばしていくぜ！」

意気軒昂の勢いを増したまま、銀時は駆け出そうと足を踏み出す。だがその足に上手く力が入らず、銀時はその場に崩れ落ちた。

「あ……あれ？」

続いて全身を襲う倦怠感。先程の比ではない、木刀の支えが無ければ起き上がっていない姿勢を保てない程だ。

「銀さん！上っ！！」

新八の声に顔を上げると、あの布を被った魔物が刀を振り翳していた。避けようにも身体が言う事を聞いてくれない。襲い来る一撃を覚悟した時、「ギイツ！！」と濁った鳴き声を上げて魔物が仰け反り、塵と化した。

「……………よっし、当たったあ……………」

利き手を拳銃の形にして、息衝きながらも藤丸は微笑む。しかし手傷を負った状態で魔力による弾丸を放ったのが堪え、力なく膝をついてしまった。

「藤丸君っ!!」

彼を助け起こそうと、咄嗟に走り出す松陽だったが、ぐんつと強い力で後ろに引つ張られる。

「わうっ、わうう〜……!」

「ンキュ〜ツ!」

振り向くと、松陽を行かせまいと羽織の裾を噛む定春とフオウの姿。健気にも神楽の言いつけを守る二匹に引き留められている間に、魔物達の標的は銀時から藤丸へと変更される。

「マスター! 逃げてえ!!」

「何してるのよ仔犬! 早く立ち上がりなさいよっ!!」

急かされずとも分かっている、だが身体が思うように動かないのだ。貧血によつて徐々にぼんやりとする視界の向こうで、異形の群れがこちらに歩いてくるのが見えた。

「藤、丸……っ!!」

彼の元に行こうとする銀時も、未だ動くことが出来ないでいる。他の仲間達も、魔物のあまりの多さに近寄ることすら出来ないでいた。

「あ……。」

目の前まで来た般若の女が、手刀を構えこちらを見下ろしている。紅の差した口許で

ニイ……と不気味に笑っていた。

「マスター!! 駄目だ、やめてっ!! マスタあああああつ!!」

アストルフオの悲鳴が響く中、般若の女は藤丸に向け、手刀を振り下ろした。

——ぶしゆ、と肉を断つ音を耳で聞き、襲い来るであろう激痛に備え藤丸は固く目を瞑る。

しかし藤丸に齎もたらされたのは、体を包まれる感覚と柔らかな温もり、そして覚えのある……花の香とは違う、優しい匂い。

「……………え?」

背中に回された手から、少しずつ力が抜けていく。藤丸は声を震わせ、身代わりとなったその人物の名を叫んだ。

「なん、で……………どうして……………松陽さんっ!!」

遠くの方で、残されたままになっている羽織とこちらを交互に見ながら、定春とフォウが懸命に吠えている。

徐々に凭れ掛かる彼の、なんと軽いことか。絹のような髪の間からは、着物ごと大きく裂かれた背中が覗いていた。

「あれ……？」

だがここで、藤丸はふと疑問を覚える。これだけ大きな傷を負っていても、松陽が出血している様子はないのだ。もう一度彼の背中に目をやると、やはりそこは赤く染まつてなどいない——否、そこから漏れ出ているのは血液ではなく、淡い光。

闇夜に映えるその光が徐々に小さくなり、やがて完全に消滅するまでのその光景を、藤丸を始め皆が呆然としながら見ていた。

「……藤丸、君……お怪我は、ないですか……？」

消え入りそうな松陽の声で、藤丸は我に返る。彼の身体が触れる箇所から、僅かに震えが伝わってきた。

「ごめん、なさい……銀時さんの言いつけ、破って……しまいました。定春君とフオウさんも……あんなに私を、止めようとしてくれたのに……とんだ悪い人です、ね……私……私……」

「松陽、さん……」

「でも……少しだけ、悪い人になったお陰で……貴方をこう、して……守ることが出来た……それだけは、本当に……よかった……」

痛みに喘ぎ、何度も言葉詰まらせながらも、藤丸に心配をかけまいと、松陽はその顔にずっと笑みを湛え続けていた。

熱くなった目頭から零れた雫が、彼の着物に染み込んでいく。そのまま気を失いずると崩れ落ちていく松陽の身体を、藤丸はしっかりと両手で抱えた。

「嘘、そんな……松陽さん……!!」

「いやあああつ!!松陽つ、起きてヨ松陽!!」

立ち尽くす新八の横で、神楽が涙目になつて悲鳴を上げる。あまりに突然のことに各々が愕然とする中、銀時も例外ではなかった。

「松、陽……。」

限界まで見開かれた両の眼で、傷を負つた恩師の背中をただ眺めていることしか出来ない自分に激憤し、強く握つた拳からは血が滲みだしている。

「くそっ……くそっくそおおおっ!!動け……さっさと動けつてんだよおおっ!!」

憤り、焦燥、苛立ち。腹の底から湧き上がる感情を、自分自身へとぶつける。木刀を杖代わりにし、重い身体を何とか持ち上げた。

「——っ!!」

いつもの高さに戻つた視界で彼が見たものは、藤丸と松陽に目掛け、同時に飛びかかる魔物達。

他の者達は、阻まれすぐに迎えそうにない。即座に駆け出そうとする銀時だが、やはり足を踏み出すだけで猛烈な眩暈めまいが訪れ、まともに動けない。

「く……っ!!」

松陽を抱え、近くに落ちていた箒を構えて応戦しようとする藤丸。魔物達の刃や牙は、すぐそこまで迫っていた。

「——松陽せんせいっ!!藤丸うううっ!!」

《続く》

【貳】邂逅（Ⅳ）

「……え？」

その声は、誰が発したものは分からない。

藤丸も、銀時も、新八も、神楽も、三騎のサーヴァント達も、そして敵意剥き出しの魔物達でさえ、あまりのことに空いた口が塞がらなかった。

「……何これ？」

どーんつ、と圧倒的存在感を放ち、目の前に立ちはだかる白い巨体に、藤丸は率直な疑問を零す。すると声に反応したのか、『それ』はこちらに振り向いた。固く閉じた黄色い大きな嘴くちばしの上に並ぶ、パツチリと開いた丸い大きな目に見つめられ、藤丸はすっかり畏縮する。

「おまつ……………Q〇太郎じゃねえかつ!!」

「〇マル入れた意味イイツ!! 肝心などこ全然隠せてねえだろつ!! それにアレはエリザベスですよー!」

「エリーー! 何でここにいるアルか!!」

銀時達の会話から察するに、どうやらこの白いペンギンの様な不思議生物はオ〇Q……じやなかった、エリザベスというらしい。だが名前が分かったところで、この状況が呑み込めたわけではない。ただ啞然とする藤丸の前に、エリザベスは何やらごそごそと弄もよほり、あるものを彼に見せる。

白い木の板に『もう大丈夫だ、ここは任せろ』と書かれたそれは、俗に言うプラカードと呼ばれるもの。示された言葉の意味が理解出来ずに困惑していたその時、魔物達が再び襲い掛かってくる。

「!!……危なっ——」

藤丸が叫ぶよりも早く、エリザベスは魔物達へと果敢に突進していく。刀や牙を?き出すそれらに微塵も臆することなく(というか表情が変わらないので感情が判りづらい)、エリザベスは持つていたプラカードを反転させると、『うおおおお!!』と書かれた面で先頭の一体を殴り倒した。続いて二体、三体目と次々にプラカードで殴打し撃退するエリザベスの雄姿を呆然と眺めていた時、不意に藤丸の体が持ち上げられる。

「うおおっ!!」

突然のことに驚き、短い悲鳴が開きつ放しだった口から飛び出す。腹部に腕を回された状態で抱えあげられ、首だけを動かす形で見上げると、そこにいたのはもう一体のエリザベス。但しただこちらは正面にいるものとは外見が少し異なり、黒いストレートヘアの

かつらを装着していた。

「えっ——おうっ!! おおおおおオオオっ!!」

かつらエリザベスは左右の手に藤丸と松陽を抱えると、その場から大きく跳躍した。見た目からは想像も出来ない程軽やかな動きで、魔物達の間を通り抜けていくエリザベスを、藤丸は悲鳴を上げながら凝視する。

だが同時に彼の目を奪ったのは、風圧でひらひらとはためく白い布……布なのかコレ? の下からチラチラと覗いている、ペンギンの足を模したような黄色い靴を履く、太く黒い脛毛すねに覆われた筋骨隆々の二本足。ファンシー……ともいえないが、マスコットのなキヤラクターにはあるまじきソレを見てしまった藤丸が言葉を失っている間に、かつらエリザベスは定春達の元へと辿り着いていた。

「わんわんっ!」

「フオウツ、フオウツ!」

「マスター!! 松陽さんっ!!」

着地した藤丸を真っ先に迎えたのは、アストルフオの猛烈な抱擁であった。愛い奴よのくなどと思っているのも束の間、恐らく無意識のうちに腕に力が入っているようで、徐々に首回りを締められていく感覚に驚怖し、彼の背中を叩いて制止を促した。

「藤丸君! 大丈夫っ!!」

「仔犬っ！アンタ酷い血じゃない、美味しそ……じゃなかった、早く止血しないと！」
神楽と協力して銀時を担いできた新八と、段蔵に続いてエリザベートもこちらに駆け寄ってくる。どさくさに紛れて何か聞こえたような気がしたが、まあ気にしない方向で。

「松陽……っ!!」

自身の体がよろめくのも構わず、銀時は新八から離れ、未だ意識の戻らない松陽の元へと早足で向かっていく。かつらエリザベスから受け取った松陽の、あまりの軽さに驚きつつも、触れた背中に濡れた感覚がないこと、そして血色の良い顔と規則的な呼吸を繰り返していることに、一先ず安堵の息を吐いた。

「エリザベス、本当に助かったよ！ありがとう！」

「かつこよかつたぞエリー！痺れたアル！」

心からの感謝を述べる新八と神楽に、かつらエリザベスは先程のエリザベスと同様に言葉を発しはせず、返事の代わりにグツと親指(?)を立ててみせる。

「むむむ……あんた、アタシとエリザベリじゃない？言っておくけど、アイドルの座は絶対に渡さないだからねっ！」

敵対心を？き出すエリザベートに、『ご心配なくお嬢さん、私はゆるキャラ枠狙いなので』と書かれたプラカードを掲げるかつらエリザベス。そこへ間髪入れずに銀時が声を

上げる。

「おいQ〇郎！てめえがいるってことは、まさか『あいつ』もここに……いや待てよ？そのうざってえ黒い長髪……まさかお前か？お前なんだな？」

距離を締め詰めてくる銀時に、かつらエリザベスはふるふると首を横に振る。その度に長い髪の毛先が何度も頬に当たり、目を逸らし白を切るような態度と相俟つて銀時を苛立たせた。

「あああもうっ相変わらさうざいんだよこのロン毛エツ!!てかいつまでQ〇郎のフリしてんだオメーは!!暑苦しいからさっさと脱げやこの馬鹿ツ——」

銀時の怒声は、突如背後に迫った殺気により遮られる。振り向いたそこには、刀やら棍棒を振り翳す数体の小鬼の姿。

「やべ……っ!!」

撃退しようと木刀を握るも、やはり上手く力が入らない。「銀さん……!!」と藤丸が遠くで叫ぶ声が聞こえた。

避けるには間に合わない……ならば止む無しと、松陽を抱える側と反対の腕を頭上に構えた時であった。

——ひらり、ひらり

閉じかけた瞼の隙間から覗いたのは、幽暗に映える光の粉。

見開かれた銀時の眼前を通過したそれらは、琥珀色に輝いた蝶だった。

どこかで見た覚えのあるような気が……などと考えている間に、数匹の蝶は闇の中を優雅に舞い踊る。

小さな躰が小鬼の鼻先まで到達したその時、空気を震わせる程の爆破音が轟いた。

「うおおおおおっ ！！」

突如その身を膨らせ、炎を纏って爆ぜた蝶。既のところまで迫った火を避けるべく、

銀時は大きく仰け反る。前髪先端が少しだけ焼け、鼻先に焦げ臭い匂いが漂った。

『ギイイイイイイイツ！！』

炎に巻かれた小鬼達は翻筋斗打ち、耳に残る不快な悲鳴を上げる。その場に倒れ伏す個体もいる中で、数体の輩は堪らず河川敷を駆け下り、川へと飛び込む。しかし琥珀の焔は消えることなく、寧ろより激しく燃え盛り、その身が灰となるまで小鬼を焼き尽くした。

「な……………何だあ？」

銀時の呟きに、答える者はいない。誰もが今の彼と同様に、開いた口が塞がらない状態だからである。

すると立ち尽くす彼らの間を縫い、あの琥珀の蝶がひらひらと飛んでいく。その数を増やした蝶達が一箇所に集まり、一つの大きな塊を形作る。

それが人型を模していると、誰しもが気がついた刹那——四散した光の蝶の中から、一人の男が現れた。

「くくっ……何だ銀時イ？てめえともあろう奴が、こんな連中相手に苦戦してやがんのかい。」

笑いを含んだ声は、彼が手にしている煙管キセルの煙と同じ匂いを燻らせている。

周囲を飛び交う蝶の淡い光に照らされ、黒地に金の唐草模様をした羽織がぼんやりと暗夜に浮かぶ。彼の纏う紅桔梗の着物にも、よく似た蝶が描かれていた。

「お……お前、何で……っ！」

驚愕した銀時の声に、男は紫煙を吐き出した後にゆっくりと振り向く。人形の様には艶やかな髪と整った容姿、それと左の眼を包帯で覆った彼の深碧しんぺきの色をした右目が放つ妖しい光に、銀時を除いた一同が見惚れると同時に恐懼きょうくした。

「……ほう。どうやら一人、サーヴァントおれたちとは違う奴が混じってるみてえだな。」

不敵に嗤い、男がこちらへと歩いてくる。草履の裏で砂利を踏む音が近付き、藤丸は恐る恐る顔を上げた。

「おい。」

「ひっ、ひゃい!!」

男の右目が放つ鋭い眼光に慄おのき、思わず声が裏返ってしまふ。彼の頭部の傷に布を当てていた段蔵も、利き手に仕込んだ刃を構え男を睨みつけている。

「手の甲に刻まれたソレ……成程、てめえが『マスター』ってやつか。」

「は、はい……えっと、藤丸立香トイイマス。カルデアノますたーデス……。」

あまりの緊張に、自己紹介の後半が片言になってしまった藤丸。あまりに素っ頓狂な様子の彼に、男は暫しきよとんとした後、低く笑う。

「これはこれはどーも。そちらさんがわざわざ名乗ってくれたんだ、『俺達』もそれに応えてやらねえと……なあ、『ツラ』?」

男が呟いた最後の言葉と同時に、彼へと襲い掛かってくる魔物達。危ない、と藤丸が

叫ぶよりも早く、更にその背後より現れた介入者の猛攻撃によって、奇襲をかけようとした魔物は皆塵と消えた。

「え、エリザベス……？」

引きつった声で名を呼ぶ新八の視線の先で、華麗な着地を決め降り立つ血染めのプラカードを持ったあのエリザベス。だが、何やら様子がおかしい。折れかけたプラカードを投げ捨て、こちらも返り血で汚れた裾（？）に手を掛けたかと思いきや、エリザベスは皆の視線など気にすることなく、突如それを捲り上げたのだ。

「——『ツラ』じゃない、桂だ。」

喧騒の中でも聞き取れる、低く凜とした声。取り払われたエリザベスの被り物の下から現れた長髪が、さらりと揺れた。

「おまつ………ツラ、ツラじゃねえか！」

「ツラじゃなああいつ！桂だと今申したばかりであろうがこのうつけめっ!!」

彼の姿を見るなり、叫ぶ銀時。そんな彼に桂と名乗った男が間髪入れずに放ったドロップキック。

華麗に跳んだ桂の足は見事クリーンヒットし、「アツチモモヤマっ!!」と叫んで大きく吹き飛んだ銀時の手から離れた松陽を、包帯の男がすかさず受け止める。

「……………」

包帯の男は何も言うことなく、抱きかかえた松陽の眠る顔を眺め続けている。暫くすると踵を返して歩き出し、着いたのは定春とフォウの元。

「わうう……………」

困惑する定春の胴体に、包帯の男は松陽の身体を凭れさせる。自身の羽織を脱ぎ、松陽に掛けてやる手つきは、まるで壊れ物を扱うかのよう。外見からは予想もつかない穏やかな眼差しに、二匹は目を丸くした。

「…………事が済むまで、この人を頼むぞ。」

その言葉や態度に、威圧のようなものは微塵も感じられない。真つ直ぐな瞳に秘められた想いを感じ取り、「わんっ!」「フォウッ!」と二匹は了解の返事をした。

「あれっ?ちよつと待つてください…………そつちに桂さんがいて、じゃあこつちのエリザベスは——」

新八が振り向いたと同時に、かつらエリザベスはポンツと音を立て消滅した。跡形も残らないその場所を呆然と眺める彼に、横から現れた桂が説明を加える。

「ああ、それは俺がエリザベスをモデルに造った、いわば式神というやつだな。ほんの勢

いで試してみたのだが、中々可愛らしい仕上がりであつたらう？」

「え？式神？アンタ今式神つて言いませんでした？一体どういう——」

すると困惑する新八の声を遮るように、やや離れた所から銀時の怒声が聞こえてくる。

「つてえなコノヤロー!!こちとら負傷して鉛みてえに重い体酷使してんに、何この仕打ち!!」

「何が負傷だこの馬鹿者め!単に魔力切れを起こしているだけではないか!」

「へ?何、魔力……切れ?」

聞き慣れない単語に首を傾げていると、桂は何やら懐を漁りながらこちらへと近寄ってくる。

「仕方ない……銀時、これを食べ。一時凌ぎではあるが空よりはマシであろう、多少は回復するぞ。」

ずい、と鼻先に差し出されたのは、包みを開いた黄色い菓子。漂うまろやかな香りに、それが何であるかを察した銀時は顔を顰める。

「ツラくくん……俺、『んまい棒』ならチョコ味とかシユガーラスク味とかさ、甘いやつがいいんだけど——」

「ええいつ!俺の持ち合わせはこの昆捕駄呪のみだ!いいから文句を言わずにとつとと

喰らえっ!!」

強引に捻じ込まれたうま……もとい、んまい棒は案の定喉の息子に直撃し、銀時は激しく咳き込む。そんな彼の苦悶などいざ知らず、ちやつかり自分もんまい棒を貰っていたアストルフオは「美味しーねコレ!」と笑顔で駄菓子^はを食^はんでいた。

「さて、と……確か藤丸君、と言ったな?」

不意に声を掛けられ、藤丸は思わず硬直する。先程の雰囲気からは想像も出来ない、落ち着きの払った声色で桂は続けた。

「本来ならば、君にこの世界について色々と話をしたところなのだが………どうやら、こちらの片付けから済ませるのが先決らしい。」

桂の見据える先には、未だ数を保ったままの魔物の群れ。溜め息を零す彼の隣に、煙管を啜えた包帯の男が並ぶ。

「あの……貴方がたは一体………?さつきの様子からだ、もしかすると銀さんの知り合い、なんですか……?」

動揺を保ったまま、藤丸が疑問をぶつける。すると二人は同時に振り向き、弧を描く口許を動かした。

「申し遅れた、異界のマスター殿よ………俺の名は桂小太郎。魔術師^{キャスター}クラスのサー

「相変わらず阿呆だな、てめえは。折角得たクラスをヤクルコ一つで易々手放せるかってんだ……業務用サイズで考えといてやる。」

「安っ!! それでいいのアンタ?! っていうかそんなに乳酸菌飲料飲んだら確実にお腹壊すわよ!!」

「僕もヤ○ルトだーい好き! 何本だつて飲んじやうよ!」

「アストルフオ殿、ヤ○ルトは摂取する本数に詳しい限度は定めてはおられませぬが、理想は一日一本を継続的に飲むことだそうです。それと抗生物質を服用されてる御方は、物質がヤ○ルト菌を殺してしまわないよう、30分ほどお時間を置いて摂取されると良いと、段蔵は学習いたしております。」

前半に漂っていたシリアスはどこへやら、いつものぐだぐだとした空気が場に流れ始めるのを苦笑しながら感じていた時、肌で分かるほどの凄まじい殺気と怒気に、藤丸の肩が跳ねた。

「あ、ヤベ。すっかり忘れてたわ。」

銀時がそう呟いたのが引き金になったのか、散々焦らされ放置された魔物達は気色の悪い雄叫びを上げながら、湧き上がる殺意のままにこちらへと突進してくる。

「さて、と……本来ならば、君にこの世界について色々と話をしたところなのだが……どうやら、こちらの片付けから済ませるのが先決らしい。」

「ツラ、その台詞さつきも言つてたアル。使い回すんじゃねーヨ。」

「銀時、それに藤丸……つったな。てめえらにも後で聞きてえことが山ほどある。カルデアとやらのこと、サーヴァントについて、それに……。」

煙管を口から離し、彼……高杉は銀時達の後方に目をやる。意識の戻る様子のない松陽を、定春は言いつけ通りにしっかりと囲い守っていた。

「銀時、もう動けるな？ならば我々を手伝ってもらおう。」

桂、続いて高杉が一步、二歩と進んでいく度、砂が立てる僅かな音も喧かまひしい声に掻き消される。

高杉が、煙管を持った手を軽く振る。すると握っていた鉄の菅が、ほんの一瞬でその姿を二寸ほどの長さの刀へと変えた。

続いて桂は両の掌を強く合わせる。パンツ、と乾いた音を響かせ、離れたそこから現れたのは、若葉色の和紙に包まれた一本の巻物。紐を解き、開いた紙面に記された内容を指でなぞると、墨で書かれた黒い文字や絵が淡く光を放ち、浮き上がって宙に浮いた。

「た、高杉……ツラ……？」

眼前で繰り広げられる光景に理解が追いつかず、皆が動揺を隠せない。銀時が名を呟くその声に、桂はお決まりの台詞を返した。

「ツラじゃない、桂だっ！」

勢いのままに振るった手から、弾となった光が前方目掛け飛んでいく。すると光弾は飛行しながら形を変えていき、やがて複数のエリザベスの姿となって具現化したそれは、魔物達の前に立ちはだかった。突然現れた白いUMA的な生き物にたじろぐ敵に向かい、ロングヘアやらオネエ系やらゴ○ゴ風などといった個性豊かなエリザベス達が、各々プラカードやガトリング砲を用いて応戦する姿に、皆が呆気にとられる。

「うわ〜可愛いっ！エリザベスがいっぱいだあ！」

目を輝かせるアストルフオに、桂は振り向きざまに微笑み親指を立てる。続いて二、三本と巻物を展開していく彼の傍らで、高杉がこちらに接近してくる魔物を一太刀のもとに次々と切り伏せていった。

『シヤアアアアッ!!』と奇声を上げ、般若が高杉目掛け襲い掛かる。だか彼の刃がそれを斬るよりも早く、横からの一撃が般若を吹き飛ばした。

「おっとお、悪いね高杉君。獲物横取りしちやったかなあ？」

「はっ、さつきまで魔力切れでへばってた奴とは思えねえ働きたな。」

木刀を肩に担ぎ、挑発的な笑みを浮かべる銀時に、高杉は苛立った様子も見せず嗤笑する。

「……で、俺らは何をすればいい？」

「察しがよくて助かるぜ、『白夜叉』殿……………奴らを一匹残らず河川敷の方へ追いやれ、

そこで一気にカタを付ける。」

「りよーかい、つと……………だそうだぜ、お前ら！」

銀時が叫ぶや否や、彼の背後から飛び出してくる一行。構えた得物を振るい、魔物達へと突っ込んでいった。

「だ、段蔵ちゃん……………これちよつと恥ずかしいんだけど。」

「マスター、どうかご辛抱を。貴方にもしものことがあれば、カルデアの皆様申し訳が立ちませぬ。」

怪我人である藤丸は万全でない為、段蔵の背におぶさる形で皆と共に進軍している。サーヴァントといえど女子におんぶされるのは流石に気恥ずかしく、赤面する藤丸を他所に、段蔵は両手が塞がった状態にも関わらず、足技と絡繰を駆使して敵を一掃する姿は何とも清々しい光景であった。

「ほあちやああアアっ！」

「えーいっ！吹き飛びなさいっ！」

皆の奮戦により、魔物達の数は徐々に減少していく。だが高杉の言った通りに河川敷へと追いやった頭数もかなりのもの。一体どのようなようにして片付けるといふのだろうか疑問に思う藤丸の横で、アストルフオが最後の一体を吹き飛ばした。

「……………よし、これで全部だな。」

集められた魔物達の遙か前方に立つのは、広げた青の巻物を宙に浮かせ不敵に笑う桂。全ての殺気が彼へと向けられた時、足元から光が放たれた。

『ガ、ガアアアアアアアッ!!』

光は筋を描き、やがて巨大な八角形が地面へと展開された時、それは結界となつて魔物達を陣の中へと拘束する。苦しみ悶える化物達、そんな彼らの上空を舞う、無数の蝶。

「高杉、今だ!」

叫ぶと同時に展開したのは、赤の巻物。桂の指が紙面をなぞると、魔物達の上にデジタルのタイマーがカウントを刻んだ球型の爆弾が幾つも現れた。

「——爆ぜろ。」

パキン、と高杉が奏でた指鳴りと共に、全ての爆弾のタイマーが0を示す。

凄まじい爆発音が轟き、地面を揺らし、結界内で爆発した蝶と爆弾によつて生まれた煉獄の炎が、醜く慟哭を叫ぶ魔物達を焼き尽くしていく。

「す……凄……い……。」

天へと高く伸びる巨大な火柱に、藤丸はただ圧倒される。ポカンと口を開けたままの一同の元に、一仕事を終えた桂と高杉が戻ってくる。

「ふーう……やはり加減をせずに魔力を使用するのもいいものだ、スカツとした気分になる。」

「お前さん、穏健派名乗るの止めたらどうだい……さてと。」

高杉の刀が霞となり、代わりに手が握っているのは愛用の煙管。ひらひらと一羽の蝶が火皿に止まると、細い煙が立ち昇り始めた。

燃え盛る炎に照らされ、紫煙を吐きながら高杉は妖艶に微笑む。

「それじゃあ、お互い情報交換としようじゃねえか。なあ銀時……それに、カルデアのマスターさんよお？」

《《続く》》

【式・伍】 緞帳は、静かに上がる

其れは突如として現れ、宵の江戸を照らしだす。

天まで昇る程に燃え上がった焰ほむらの柱を、誰もが刮目し騒ぎ立て、街には吃驚きつきように溢れかえっていた。

ある者は火事だと騒ぎ立て、ある者は災禍の前兆と嘆き崩れ落ち、ある者は神の怒りであるとその場で膝をつく。

——しかし、競競きょうきょうとする人々が溢れるこの国にて、朱く燃える炎の柱を嬉々として眺める、兵達つわものの姿もまた、そこにはあつた。

* * * * *

「はっ、は……っ！」

所々が切れかかった蛍光灯の明かりの下を、忙しく駆ける男が一人。同じ黒の制服を着た者達とすれ違う度、皆面おもてを上げて彼の後ろ姿を見遣り、興味を失くすとまた視線を戻す。

跳ねた黒髪を揺らし、勢いもそのままに角を曲がった時、ドンツと何かにぶつかってしまふ。

「うわっ!!」

後ろ向きに倒れる体、だがそんな彼の手を掴んだ者により、無事に尻餅は回避された。

「つとと……すみません、ありがとうございます(ぎ)ございました！」

男は体勢を直し、掴んでくれたその手の主に深々と頭を下げる。

「……………」

手の主であるその男は、何も語らない。覆面に覆われた口元は動かされた様子も見られず、代わりに立てた人差し指を左右へと振り、気をつけるよう向かいの男に注意を促す。

男は再度頭を下げると、再び小走りで廊下を駆け出す。彼の背中が奥へと消えていくのを、覆面の男は無言のままで見守り続ける。

その男の丸く縮れた山吹色の髪が、廊下の薄暗さの中によく映えた。

「おーおー！こりやすげえな！」

とある室内、開け放たれた襖から見える巨大な火柱の姿に、ゴ……男がはしゃいだ声を上げる。高身長に顎髭を蓄えたゴリ……男だが、目を輝かせ嬉々とする姿はまるで、無邪気な子どもそのものだ。

そんな彼に呆れた視線を送るのは、彼と同じ色・そして型の黒い制服を着た男。

「あのなあ、はしゃいでる場合かよ？警察官が喜んでいい事案じゃねえだろ。」

懐から出したマヨネーズを模した形のライターで、彼は煙草の先端に火を点ける。鋭い紺青の眼光に、ゴリラ……は「ひっ」と短い悲鳴を上げた。

「わ、分かっているよう……それより、さつきから何なのコレ？名前を伏せるどころか、思いつくそゴリラって言っちゃってるじゃん？今の俺達、漫画とかアニメでいうところの鼻から下しか映ってない状態みたいなものなのにさ、正体バレしそうな呼び方とか大丈夫なの？」

「仕方ねーだろ、こ……ゴリさん。敢えて名前出さねえように小説書くほど、面倒で難

しいことはねえんだよ。」

マヨライターの男が頷きながら語る後方で、むくりと起き上がる人影が一つ。その場にいる彼らよりは年若いその青年は、大きな目が描かれたアイマスクを外すと、欠伸をし開いたままの口を動かす。

「マヨライターの言う通りですぜい。それに今更ゴリラ呼びが何です？この時点で勤のいい奴等は、俺達がとづくに誰だかもう分かっている頃だと思えますし。ねえゴリラ局長？」

「だからってゴリラはなくないゴリラは!!折角カツチョよく登場しようと、今話まで頭ン中で必死にプラン練つてたのにさー!もう地の文でゴリラだってことほぼバラしちゃってんじやん!お前らに至っては名前ですら呼んでくれないしいっ!!」

地団駄を踏み、ほぼ涙目で怒るゴリラ（もう隠すのも面倒臭い）に構うのを止め、二人は襖の向こうの空を見上げる。ただ天へと昇り、燃え盛る炎の柱。それが人の手によつて生み出されたものではない事を、遠く離れたこの場所においても、彼らは理解していた。

「きつ、局長!副長!」

パアンツ、と襖を開け放つ音と、唐突に響く声。

三名の視線が集中する先に立っていたのは、あの廊下を走っていた黒髪の男だった。

「はあ、はあ……あれ？隊長までいらつしやったんですか？」

「あ？いちや悪いのかい？つーか何だよその呼び方、違和感ありありでキモいから、やっぱりいつもみてえに呼んでくれや。ほら、おき——」

「ああああ駄目ですつて!!この回は名前出しちゃいけないって言われてるんですからあつ!!」

危ないところまで出かけていたアイマスクの青年の声を、慌てて遮る黒髪の男。だが伝える要件が急であることを思い出すと、慌てて口を開いた。

「大変です！河川敷の辺りで火災があつたつて、何件も通報が……!!」

「おう、こつからでもぼつちり見えるからなあ……さて、と。」

不意に、ゴリラの顔つきが一変する。床に置いた上着を拾い、両の袖に腕を通した彼の纏う雰囲気は、先程までのちやらかしたものではなくなっていた。

彼に続いて二人の男達も、刀やバズーカ砲など各々の得物を手に立ち上がる。

「おい、各隊の連中に急ぎ伝えておけ。現場に向かうぞ。」

マヨライターの男の指示に「は、はいっ!」と了解の返事をし、黒髪の男は再び来た廊下を走っていく。

遠ざかっていく足音を聞きながら、男達はもう一度炎の柱に目をやった。

「やれやれ、こんな大事起おわごとこしてくれやがったのは、一体どこのどいつですかねイ？」
 「案外、『今の俺達と同じ』連中かもしれないな。だとすれば、かなりの苦戦を強いられる可能性もあるやもしれんぞ？」
 「ハッ、関係ねえさ。人間だろうと化け物ばだろうと、悪人なら必ずふん縛つてとつ捕まえる……………それが俺達、『真選組』だろ？」

不敵に嗤う男の、紺青の眼が妖しく光る。

彼の両隣に立つ二人の顔にも、同じ笑みが浮かんでいた。

* * * * *

民家や商店などが並ぶ賑やかな市街から少し離れた、とあるビルの上に彼女はいた。長い黒髪を靡かせ、対照的な色の白い隊服に身を包んだその女性が食はんでいるのは、

某有名なあの、もちもちしたドーナツ。足元に置いた箱の中には同じものがまだ数個残っており、それが風で飛ばされないうる足で器用に押さえながら、彼女は表情一つ変えることなく、高く上がる炎の柱を眺めている。

「……全く、探しましたよ。」

背後から響いたのは、低い男の声。しかし女性は反応を示さない。彼が敵ではないことを知っているから。

振り向きもしない彼女に軽く溜息を吐くと、男は静かに歩き出した。女性の着ているものと似た形の白い制服を纏った男の、右目に掛けた片眼鏡モノクルから眺める景色もまた、暗夜の江戸を照らす巨大な焰を映し出している。

男は女性の隣に立つと、屈んで彼女の足元のドーナツの箱に手を伸ばす。が、「えつち」と呟いた彼女の足がそれを阻み、箱を遠ざけてしまう。

「えつち、つて貴女ねえ……それにそのドーナツは私が買い与えたものですけど?」「もう貰ったから、これは全部私のものだもん。」

最後の一口となったドーナツを口に放り、もごもごと話す女性に、男は二度目の溜息。そんな彼の前で、彼女は自分の元へ引き寄せたドーナツの箱を両手で持ち上げると、男の前にずいっと差し出した。

「だから、食べたい時はちゃんと私の了解を得て。エリートなんだからそれくらい基本

でしよう?」

淡々とした、しかし強い口調でそう言った女性に、一驚した男は暫しの間無言になるも、ふ、とその口元を僅かに綻ばせる。

「……そうですね、大変失礼致しました。ではそちらのドーナツ、一つ頂いてもよろしいですか?」

「うむ、よろしい。でもポ〇・デ・リングは全部私のだから。」

そう念を押した女性の持つ箱の中には、四つあるうちの三つがそのポ〇・デ・リングであるため、選択肢なんてないじゃないですかと心の中で呟きながら、男性はドーナツを手を取った。

一口食べると、口内に広がる甘味ともさもさした食感。飲み物が欲しいとまたも心の中で呟いた時、追加のポ〇・デ・リングを啜える前に女性が彼に尋ねる。

「ねえ、やつぱりアレ……どう考えても人の仕事じゃないわよね?」

差した指が示すのは、やはりあの燃え盛る火柱。彼女の言う通り、あれは恐らく……否、確実に人間の為せる行いではないだろうと、男もまた確信していた。

「どうする?これだけ派手だと『あの人』にも見えてると思うけど。」

「そうですね……まあでも、とりあえず連絡はしておきましょう。それが我々が『あのお方』から与えられた任でもありますし。」

男はドーナツを反対の手に持ち返ると、折り畳み式の携帯電話を取り出す。ピツピツと微小の電子音を鳴らしながらメールを打つ彼の携帯の画面を、女性は脇からこっそりと覗き見る。

「……またそんな読みにくいメール送るの？」

「読みにくくなんてないでしょう。なんせエリートが打つメールですよ？」

「だって私は読みにくいし。それに何て返したらいいか、考えてる間にその事なんか忘れちゃうし。」

「貴女の場合、返信してくれない理由はそれだけじゃあないでしょう……よし、つと。」
 連絡の文書を仕上げ、男の親指が『送信』のボタンを押す。データとなって飛んでいくであろう辺りを見上げながら、女性はドーナツを一口噛んだ。

* * * * *

「ん〜……いい眺めっ。」

ひとけ
 人気のない、廃屋となった建物の最上階。

放置された机やら椅子、コンクリートの欠片やらが散らばる床の上に、数十本の団子の串が新たに追加されている。

ここで一人団子を食しながら、江戸の空に浮かぶ紅蓮の炎を眺めていたのは、珊瑚色の髪を三つ編みに結わえた青年。異国のデザインをした黒い服に身を包んだ彼が、もう何本目になるか分からない団子を口に含み、もしやもしやと咀嚼する度に跳ねた髪……いわゆるアホ毛がひよこひよここと愉快に踊った。

「ええと、確かこういう時は何て叫ぶんだっけ……そうだっ、たくまやくー！」
「たくまやく、じゃねえだろ。このすつとこどつこい。」

火柱の方角目掛け声を張る青年の後頭部に、突如振り下ろされる何者かの手刀。だがその手を青年が即座に掴んだことにより、奇襲は未遂に終わった。

「やあ、お疲れ様。お団子食べる？」
「結構。俺あ疲れた時は、甘いもんより酒なの。」

残念、と呟いた青年は、掴んだもの……大きめの番傘を肩に担いだ、無精髭の男の手を放す。一見ただ握っていただけのようにも見えるその行為が、実は骨が軋む程にとんでもなく力が籠められていた事實は、掴まれていた彼しか知りえない。

「で、仕事はもう片付いたの？別に俺がいなくても大丈夫そうだったから、こうしてサボ……休憩してたけど。」

「お前さんの休憩は一日何時間あるんだつつの……残念だが、目標はあとちよつと
のところで取り逃がしたよ。」

頭を掻きながら吐き捨てるように放つ男の言葉に、青年は団子を口に啜えたまま、丸く開いた目を彼に向ける。

「……どうしたの？お前が仕事ミスるなんて、調子悪かった？大丈夫？揉む？」

「別に、ただ予想外の邪魔が入ってなあ……つか、揉むって何？何を揉ませる気？」

「やっただあ、何想像してんの？やらしく。そんなの、調味料と白菜を一緒に入れた袋に決まってるじゃん。」

「おーおー、あつという間に美味しい浅漬けの出来上がり、つか！何で仕事に疲れた挙句お手軽クッキングやらされなきやいけねえんだよ！余計ストレス溜まるっての！」

大声と疲れから若干痛む頭を押さえ、男は深く溜息を吐く。そんな彼を氣遣うことなく、青年は団子の無くなった串を放りながら、話を続けた。

「にしても、失敗したのによく無事でいられたね？『あの人』全然怒ってなかったの？」
「怒ってなかった、つていやあそいつは嘘になる。現にこの件の報告に言った時、目の前で五人くらいの首が刎ね飛んだからな……だが『お上』の言う事にや、暫くは目標を野放しにしておいてもいいんだとよ。いつの世も、上に立つ連中の考えてることってのは、まるで分かる気が知れねえぜ。」

「あははっ。にしても五人かあ、いつもの『彼』にしては大分少なく済んだほうじゃないかな……………で、その予想外の邪魔つてのは何？お前があっさりと退いてくるってことはさ……………よつぽどの強者がそこにはいた、ってこと？」

青年の声のトーンが、徐々に落ちていくのを男は聞き逃さない。食べ終わった団子の串を手で弄んでいる彼の青い両の瞳には、既に別の色が染まりつつあった。

「そうさな、いきなりバラしても面白みはねえ。だからヒントをくれてやらあ……………その連中は皆、お前さんが恐らく今一番戦いたいと願つてる奴等だよ。しかも全員、『俺達と同じ』ときたもんだ。」

「……………！」

男の言葉に、青年の手がピタリと止まる。首だけ動かしてゆっくりこちらを向いた彼の表情は、まるで長い間欲しかった玩具おもちゃをサプライズでプレゼントされた時の幼子おさなごそのもの。まあ、今もそれと似たような状況ではあるような気もするのだが。

「……………ふーん、そっか。『彼等』も漸くここに来たんだ……………そっか、そうかそうか。ふっ、ふっふっ……………！」

ばき、と乾いた音が響き、青年は自分が無意識に串を折ってしまったことに気付く。突如もたらされた驚喜に、込み上げる嬉しさを抑えきれない。楽し気に笑う彼の表情かおは、極上の獲物を前にした獣そのものであった。

「ああ、楽しみだな！早く会いたいなあ！今の俺達が『彼等』と殺り合ったらどうなるんだらう？きつと簡単には死にくくなってるだらうから、前よりも加減はしないで思いつきり死合えるんだらうな……ああ、こんなに嬉しい事があるなんて、気紛れで『あの人』の傍に就いてて本当に良かったあ！」

満面の笑みを浮かべ、歡喜する青年。だがその瞳の中に渦巻く狂気は、益々色濃さを増していく。目の前で徐々に変貌する青年の様子に、只どうすることも出来ないでいた男は再び溜息を零すと、青年から逸らした眠たげな眼を、遙か向こうで朱く燃える火柱へと向けた。

* * * * *

とくとく、とくとく。

顔の大きさ程もある、大きな漆塗の盃さかづきに注がれているのは、噎むせ返るほどに強い、甘い香りの果実酒。

こちらも大きな酒壺を台へと置き、長く鋭い爪の生えた手が盃を掴むと、それは主である男の口へと運ばれていく。

喉を鳴らす音が、広い室内に響き渡る。華やかな装飾が施されたこの広間にいるのは、果実酒を搔つ喰らうこの男と、彼から少し離れた位置に一人佇む、白黒の袈裟に似た衣装を纏った、からす鳥面の男の二人のみ。

彼らの足元には、首と胴体が離れ離れになった御徒士おちやくみ組風の恰好をした男達の亡撃が、夥しい鮮血と共に転がっていた。

「……ああ、やっと来たか。」

酒を飲み干し、男が呟く。盃が避けたことで明らかになった彼の頭部には、紅色の角が二本、額から突き出るように生えていた。うつすらと笑みを浮かべ開いた口には尖った歯が並んでいる。豪華絢爛な着物を纏う彼の、外見こそは人に近い姿をしているものの、どうやらこの男は『鬼』らしい。

そんな彼の声と同時に、装飾の施された扉が開く。部屋に入ってきたのは、骸と同じ服を着た数名の者達。失礼します、と言いかけた言葉は、床に広がる凄愴な光景を目撃したことにより、悲鳴へと変わった。

「血生臭くて酒が不味くなる、早く片づけろ。」

鬼の指示に、逆らう者も異を唱える者も、誰一人としていない。彼らは自らの震える

身体に鞭打ち、時には込み上げる嘔吐感を必死に堪えながらも、無残な姿となった同朋達を抱え、冷たい石の床に零れた血を拭った。

「ああ、体のほうは『いつもの』ところに忘れず持つていけ……頭は捨てるなり魔物の餌にするなり、弔いの為と持ち返るなり好きにしろ。」

「は……はい………失礼、致しました……っ!!」

冷然とした鬼の態度と微笑に、男達は震える声で退室を述べた後、逃げるように部屋を後にした。

——静けさを取り戻し、再び広間を静寂が包む。

ふと鬼は、相も変わらず佇立ちよりつしている烏面の男へと目を向ける。眼前に屍が転がってようと、『かつての部下達』が歎歎きよきしながら仲間の骸を片付けていようと、この男は微動だにしない。その表情の変化も、目元まで覆う面と深々と被った笠のせいで、客観的にはよく分からない。

こんな人形のような男を観察していても、只つまらないだけだと悟った鬼は、盃を酒壺と共に置くと、開け放った窓へと赴く。

彼の視線の先にあるものは……やはりあの巨大な焔の柱であった。

「………火事と喧嘩は江戸の華、とは言ったものだ。しかし、陽光ひかりを失ったこの国を、一時いつときでもこんな形で照らそうとはな……。」

肘をつき、眺める彼の顔に笑みが浮かぶ。その微笑が心からの感情であるのか、知りえる者はここにはいない。

「——さてさて、これで役者は総すべて揃った。お前に与えられた僅かな自由の中で、そいつ等と演じる滑稽で愚劣な『おままごと』を吾われに見せてくれよ………なあ、松陽？」

さあさあ、お立ち会いお立ち会い。

次々と変異の起こるこの江戸の国にも、漸く演者が揃い踏み。

——そう。
舞台^{ステージ}の緞帳は、静かに上げられたのだった。

《序章・完》

第一夜 常夜の江戸

【参】常夜の国（I）

『——お前は、何の為に剣を取る？』

いつの日からか、聞こえてくるようになった『声』。

其れは日常の中で、血に塗れた戦場の中で、ふとした瞬間とぎに頭の中に響いてくる。

『——お前は、何を護る為に此処に立つ？』

何度も、何度も『それ』は、同じ問いを繰り返して投げかける。

……そんなもの、端はなから決まっているさ。

居場所も、恩師も、大切だったものを何もかも奪われたあの日から、剣こいっを取り立ち上がったんだ。

そして、心の中で固く誓う……どれだけ時間ときが流れようと、どれだけ己が傷つこうと、必ず——全てを、取り戻すと。

『——お前は、何の為に戦う？』

もう何度目になるか分からない問い掛けに、何度だって同じ答えをぶつけてやる。

決まっている。『俺』が、戦う理由わけは——

* * * * *

「ほう………して君達は数多の特異点を跳躍し、人類の未来を救うことができた、ということか。」

一 通り終えた藤丸の説明を反芻し、桂は何度も頷く。彼の隣にいる高杉はこちらを一瞥すると、またすぐに前方に目を向け、一定の歩幅で歩き続ける。

—— 先程の激戦の後、案の定騒ぎを聞きつけた人々が、続々と河川敷に集まりつつあった。警察や奉行所の者達に來られては堪らないと、一行は逃げるようにしてその場を離れたのであった。

途中エリザベートが躓^{つまず}き、それを桂が助け起こし、アストルフオの足が新八の伸び切った袖を踏んづけ、藤丸をおぶったままの段蔵が仰け反った新八を器用に支え、更にエリザベートの尻尾に躓いた銀時が転倒する横を、高杉がせせら笑って通過し、一方で

神楽とフオウと松陽を乗せた定春の大きな前足が新八の袖を踏み、それによつて大きく倒れた彼が前方で喧嘩に突入する寸前の銀時と高杉をも巻き込み、三人揃つて地面と熱い……否、痛い接吻を交わす羽目になつたりと。

そんなてんやわんやの逃走劇を小半刻ほども繰り広げた彼らは、此処かぶき町の大通りまで何とか戻つてくることが出来たのである。

数時間前に銀時達が訪れた時よりも、行き交う人々の数はやや多くなっている。そんな中を巨大な犬と奇怪な風貌の集団が歩けば、好奇の視線は嫌でも彼らへと注がれた。

「^{ひとま}先ずそちらの事情は分かつた。しかし何だ、その若さで多くのサーヴァントを召喚し束ね、しかも人理の崩壊まで防ぐとは……君は大層優秀なマスターとみえるな、藤丸君。」

桂のその言葉に、嫌味などは全く含まれていない。だが藤丸はそれを素直に嬉しいという気持ちで受け取れず、付着した血痕を隠す為にと貸してくれたアストルフオのマントを握りしめ、気まづい思いのままに返答する。

「いや、俺はそんな大した奴じゃないですよ。実際のところ、カルデアからの補助もなければ碌^{ろく}に魔術だつて使えないし、サーヴァントの皆が守つてくれなきや、とつくに死んでたつて可笑しくないんだ……それに……。」

ふと、何気なく目をやった銀時は気付いてしまう。マントを握る藤丸の手が指まで白

くなり、それが僅かに震えていることを。

彼の心情を察したものの、どう声を掛けてよいかも分からず困惑していたその時、「ちゅうもーくっ！」とアストルフオが声を上げた。

「はいはいはーい！それじゃあここで新しく加わった二人に、改めて僕らの自己紹介とはいかがか！」

拳を上げ、ついでに片足も折り曲げて可愛らしいポーズを取り、アストルフオがそう高らかに告げる。唐突も唐突、いや本当にいきなりだなオイと誰かが突っ込みそうなほどの急展開に、一同はポカンと口を開けていた。

「いや、いやいやいや！突然何を言い出すのよこの子は！！大体今この空気の中で自己紹介やれとか可笑しくない？お前の理性はどこまで蒸発しちやってんの！！水分抜けきって塩的な何かが精製出来るわあっ！！」

「あ、アストルフオ君の理性が蒸発して出来た塩だって……！！いくらで売ってくださいませんかね？」

「新ハイ………お前のそれには私もドン引きアル。」

「だって、この二人が銀ちゃんの友達ならさ、僕だって早く仲良くなりたいたもん！それにしても、これって凄いいことじゃないかい？三人とも同じ先生の元で学び育て、しかもその先生である松陽さんがいるこの世界に揃ってサーヴァントとしてまた出会っ

ちやうだなんて！まさに旅は世につれ世は旅につれ、つてね！」

最早何を言っているのか理解できないのは、目の前で可愛い笑顔を浮かべている彼の、ギリギリ形を保っているであろう理性が更に蒸発しようとしているせいなのか。突っ込む気力すら湧いてこず、乾いた笑いを浮かべる銀時の横を通過していくアストルフオ。彼がすれ違いざまに銀時へと向けたのは、不敵な微笑と軽快なウインクであった。

その態度が伝える無言のメッセージを捉え、銀時は心の中で呟く伝わらない言葉の代わりに、歯を見せて一笑する。その反応に満足したアストルフオもまた笑みを浮かべ、桂と高杉の元へと歩いていった。

「それじゃ、トップバッターはこの僕！シャルルマーニュ十二勇士の一人、真名はアストルフオだよ！サーヴァントのクラスはライダーさ。今はカルデアに所属していて、マスターはこの藤丸立香君なんだ！というわけでよろしくね！ツラ君、スギっち！」

「……………は？」

勿怪な顔^{もっけ}で同時に発した声が、偶然にも重なる。吹き出し笑い転げる銀時を睨んだ桂と高杉の視線は、そのままアストルフオへと向けられる。

「ええと、アストルフオ……………殿？俺はツラじゃない、桂だ！」

「あ、あくまでその固有の台詞は貫き通すんだな……………あく腹イテツ。」

「銀時、後で覚えてろ……んなことより何だ？その頓痴とんち気な呼び方は。」

「え？可愛いかな〜と思つて。それにこういうキャラクター特有のあだ名みたいなものは早めに決めておいた方が、書く側としてもストーリーを進行しやすくしていいから。だからさ、これから君のことスギつちって呼んでもいいよね？ねっ？ねっ？」

「アストルフオ、そのスギつちって呼び方がいいアルな。私も今からそう呼ばせてもらうネ。なっ、スギつち！」

ずいつ、と鼻がつきそうな距離まで顔を近付けてくる神楽とアストルフオに、思わず高杉は面食らう。向けられる二人分の純真な瞳の眩しさに耐えきれず、高杉は顔を顰めた後、大きく溜息を吐いて「……好きにしろ」とぶつきらぼうに答えた。

「……すみません高杉さん、うちの神楽ちゃんまで大変失礼な事を……。」

「新八、別に謝る必要なんてねえだろ。だつてこくん可愛いあだ名つけてもらったんだしい？よかつたじゃねえの〜なあスギつち？」

ニタニタと腹の立つ笑みを浮かべ、高杉の肩に手を置く銀時。その顔面にスギつちからの裏拳がお見舞いされるのはこの0.5秒後で、彼が地面へと倒れ痛みにもんどりうつのは、それから2秒後のことであつた。

「それじゃあ次はアタシ、クラスはランサーにしてサーヴァント界の超☆絶アイドル（なる予定）、血の伯爵夫人ことエリザベート・バートリーよ！気軽にエリちゃんと呼んで

ね♪あ、サインを乞うなら今のうちよ？いずれプレミアがつくこと間違いなしなんだから！」

振りまく愛嬌にウインクまでサービスすると、桂達を挟んで彼女の向かいにいた新八が「エリちゃんっ！」と何処からか持ち出したサイリウムを激しく振り、ラブコールを送っていた。

「せっかくだし、アタシもアストルフオみたい固有の呼び方を決めさせてもらおうかしら……そうねえ、じゃあ黒い艶やかな髪は貴方はツバメ、綺麗なお顔に包帯を巻いた貴方なんて、黒猫がびったりじゃなくて？」

「妙なあだ名の次は猫呼ばわりか……もう好きにしてくれ。」

「エリちゃん殿、猫はどちらかという俺のほうが適役だぞ！かつて銀時と共に呪いで猫になったことだつてあるし、それにその時の俺は黒い猫であつたからな！」

「おーおー、よかつたじゃんお前ら。二重にあだ名つけてもらうなんてそうそうあるもんじゃねえぞ？まあツラは逃げ足なんか鳥みてえにすばしっこいし、高杉クンも可愛い可愛い子猫ちゃんだからびったり——」

漸く起き上がった銀時の顔面に、またも炸裂する両者の裏拳。今度は二人分なので痛みも二割増しになり、またも地面へと倒れバタバタと足を動かす銀時に、「自業自得ですよ」と新八の冷たい一言が振ってくる。

「では最後に私です。 クラスはアサシンにして、室町時代の妖術師・果心居士様の手により造られた絡繰、真名を加藤段蔵と申します……それにしても、エリザベート殿がお付けになったツバメに黒猫というのは、そのどちらも幸運を呼び寄せることで有名な生き物ですね。お二方はご不満な様子ではありませんが、段蔵個人は大変好ましいものと思っております。」

にこやかに微笑む段蔵の言葉に揃って目を丸くした二人は、その後すっかり拍子抜けしてしまい、それ以上の不満を漏らすことはなくなる。

痛みに悶える最中、銀時は顔を押しさえた手の隙間から伺う。その視線の先にいたのは、アストルフォと神楽のはしゃぐ二人を背中に匿う藤丸の姿。青筋を浮かべ詰め寄る高杉を手で制する彼の顔に浮かぶ表情は苦笑いであるものの、先程までの消沈した様子はもう見られず、銀時は少しだけ安堵した。

「フォウ、フォウッ。」

そんな周囲の賑わいに紛れるようにして、フォウが甲高く鳴く。小さな前足がてしてしと叩くのは、定春の背中の上で未だ眠ったままの松陽の頬。

「（こら）フォウ君、無理に起こすのはよくないよ。」

藤丸がやんわり注意すると、フォウは上げたままの前足を下げ、「キュウウ…」と小さく鳴き、そして松陽の上から跳躍すると、再び起き上がったばかりの銀時の頭の上に着

地する。

「……え、ちよつと何この子？俺の頭は休憩スポットじゃないんですけど？」

「いいじゃない、白モジヤの髪なら掴まりやすくして落ちる心配もないし。」

「同じ白のモフモフだから、銀ちゃんのこと仲間だと思つてんじゃない？ね〜フオウ君？」

「ンキュツ。」

アストルフオの声に應えるように鳴き、フオウは銀時の天然パーマへと顔を埋める。僅かに揺れるふわふわの尻尾に、熱い眼差しを送る者がいた。

「ず……ズルいぞ銀時!!俺だつてフオウ殿のもふもふを、もふもふををを……!!」

「桂さん？ちよ、涎よだれすごいですよ。」

「おつと、つい魅了されて口が開きつ放しに……いかにいかに（ゴシゴシ）」

「つてオイイイイイッ!!人の伸びた袖で拭いてんじやねええっ!!」

新八の怒号が辺りに轟くそんな中、不意に高杉が口を開いた。

「ところで……そろそろ、教えちゃくれねえかい。銀時。」

凜と響いたその声に、その場の空気に緊張が走る。彼が皆みなまで語らずとも何を言いたいのか、直ぐに察した銀時は気まずさから中空を見ていたが、暫くして大きく息を吐く。

「えーと、さ………実のところ、俺もよく分かんねえのよ。だからあんま込み入った質問

は無しな。」

そうして銀時は、ゆっくりと口を開く。桂や高杉を含め、皆の意識が彼へと集中していった。

「……………多分、こいつは松陽なんだろう。だけどそれを断定することは、今の俺にやあ出来ねえ。」

「先生ではない、だと……………銀時、それは一体どういうことだっ！」

核心に触れない銀時の物言いに焦燥し、思わず桂は声を荒げる。反応した通行人の何名かが振り向き、視線に気づいた桂は身を縮め、「……………すまない」と小さく謝罪した。

「まあ、ツラがもどかしくなるのも無理はねえ……………なあ銀時、俺達やお前さんの口からどんな真実が飛び出ようが、それくらい受け止められる心構えなんざとうに出来てるつもりだ……………だから早く話してくれねえか？いまここにいて、松陽先生の姿をした男のことを。」

高杉は定春の歩く振動で崩れかかった羽織を、松陽の体へと掛け直してやる。寝苦しいのか、時折小さく唸る松陽を見つめる彼の右目は、どこか悄然とした光を湛しやうぜんえていた。「銀さん……………もし話しにくかったら、俺が話そうか？」

「さんきゅー藤丸。でもな、お前にやそんな負担背負わせらんねーよ。こういう大事なことは、やっぱ俺が言わねえと。」

自分を気遣う藤丸に礼を言うと、銀時は大きく深呼吸をし、意を決して桂と高杉に言い放った。

「この松陽はな、どうやら記憶がないらしい。俺が出会った時には自分の名前に自分の事、それに……………それに、俺のことすらも分からないと言われた。」

「!!……………馬鹿な、先生が記憶を……………っ!!」

銀時の告げた事実には、桂は目を見開き激しく動揺する。一方の高杉はというと、特に狼狽した様子もなく、こちらに顔を背けたまま平然としているようであった。

「見ての通りに姿形もそうなんだが、声までも松陽そのものだったさ。だけど記憶を失ってるせいかな、俺が知ってるアイツとは大分違う感じがした……………それに、今のアイツは普通じゃねえ。いや、元々松陽は普通じゃなかったんだけどよ……………ああクソツ、どう説明したらいいか分かんねえわ。」

上手く出来ない自分への苛立ちに、銀時は頭を乱暴に掻く。ただ彼の手が掻いているのは自身の頭部ではなく、そこに乗っているフォウの胴体であるため、ガシガシと軽く爪を立てられた乱暴なマッサージに、小動物は「フォウオウオウツ」と揺さぶられながら声を上げていた。

「銀時、つまり貴様はこう言いたいのではないか……………記憶を失った状態にある今の松陽先生は、俺達と同じ『人ならざる者』になっているのではないかと。」

少し落ち着きを取り戻した桂は、自身の推測を銀時に投げかける。彼は少し首を捻った後、「そうかもしんねえ……」と呟くように答えた。

「もしこの松陽先生が、俺達と同じくサーヴァントになつてるとすれば、本来ならばいる筈のないこの人が存在していることにも合点がいく……だが、記憶が無くなつていてというのがどうも理解出来ぬな。召喚された時のバグなのか、或いは別の要因でもあるのか……第一、今ここにいる松陽先生が本当に吉田松陽であるという確証は、まだ無いということなのであろう？」

その問いに無言で頷く銀時を確かめた後、桂はそのまま黙考してしまう。高杉を含め、彼らがこのようなりアクションを取るだろうということは、銀時も薄々は感じていた……ともあれ、ここから二人にどう説明したらよいものか。

桂の言つた通り、ここにいる松陽が嘗ての恩師であつたと確実に言い切れる自信も根拠も、今の銀時には無い。それでも先程手を包んでくれたあの温かな感覚は、幼い頃に松陽がよく施してくれた時の記憶を思い起こさせてくれる程に酷似していたのだ。

上手い言い分が思いつかずに首を捻つたその時、「ちよつと待ってヨ！」と先に口を開いた者がいた。

「り、リーダー……？」

桂が恐惶し、額に汗を伝らせそう呼ぶのは、ずんずんとこちらへ近付いてくる神楽で

あつた。彼女は桂と高杉の前に躍り出ると同時に、大きく吸い込んだ息を言葉にして吐き出した。

「ツラ、スギっち！この松陽は悪い奴じゃないアル！記憶が無くなってるから、銀ちゃんや二人が知つてた松陽じゃなくなってるかもしれないけど……でも、今の松陽だつて凄くいい奴なんだヨ？笑顔も手も温かくて、凄く優しくいい匂いもして……松陽は男だけでも、私ちよつとだけ……ちよつとだけ、マミーのことを思い出しちゃったネ。」

心悲し気な笑みを浮かべ、それでも神楽は続ける。途中で彼女に鼻先を摺り寄せてきた定春を撫でる手つきは、とても物柔らかなものであつた。

「それに、松陽はさつき身を挺してまで藤丸を庇つてくれたアル。自分だつて痛くて怖い思いもしたつていうのに、よっぽど強くて優しい奴じゃなきゃ、あんな真似出来っこないネ！」

「先生が、藤丸君を……？」

驚愕する桂の視線の先で、俯いたままの藤丸は顔を上げることが出来ず、目も合わせることが出来ないでいる。

「……………神楽ちゃんの言つた通りです。俺を庇つてくれたばかりに、松陽さんを危険な目に合わせてしまつて……………本当に、ごめんなさい。」

謝罪を紡ぐ声が、徐々に震えていく。胸の内から溢れる慙愧ざんきの念に唇を噛んでいた時、ふと藤丸の肩を叩いた手が一つ。

「……………高杉、さん……………」

泣きそうになっている面おもてを上げれば、いつしか隣に立つ高杉の姿。目を丸くする藤丸を睨ねめつけながら、高杉は彼に対して口を開く。

「なあ藤丸よ、先生は自らの意思でお前さんを庇ったのかい？それとも……………てめえの指示があつたから、それに従つて盾役となつたのか？」

薄く開いた右目から漏れる眼光に震えながらも、藤丸は前者の答えに少し考えてから「多分……」と小さく呟いて頷き、後者は激しく首を横に振り否定の意を強く示した。

「そうかい……………なら、それでいい。」

藤丸の反応を理解し、満足した様子に頷いた高杉は再び、今度は先程よりも軽く彼の肩を叩く。続いて体の向きを変えた高杉は、松陽を乗せた定春の元へと戻り、規則的に寝息を立てるその顔をもう一度見遣る。温かさを感じる眼差しの中には、疑心の念が薄らいでいるようにも感じられた。

「記憶を失くしても、この人は先生としての性分を忘れちゃいなかった。つてこつたな……………」

呟いた口元を綻ばせ、伸ばした手で松陽の頬にそつと触れる。そこから伝わる温かさ

にじんわりと胸の内が熱くなり、高杉は少しだけ唇を噛み締めながら、夢い微笑を浮かべた。

「……………ねえ銀さん、つかぬ事をお伺いしますが。」

「おう、どうした藤丸？」

「もしかしてでもないけど、高杉さんつてさ……………松陽さんのこと、好きだったたりした？」

「した、つつーか現在進行形で大好きだぞ、アイツ。第一ガキの頃から松陽にべつたりだったし、俺らという時以外はもう常に松陽の傍から離れようとしなかったからな。」

「へー、あんなおっかない人でも、そういう可愛い時期があつたんだあ。」

「おうよ、あん時の晋ちゃんは可愛かったのなんのつて。いつ頃だっけかな？ありや確か夏の日の真夜中だったなあ、俺とツラと三人して怪談話した後には、晋ちゃんが怖い夢見たからつてベソかきながら、枕抱えて松陽の寢床に——」

「ほーう、やけに楽しそうじゃねえか？お二人さんよお。」

談笑する彼らの背後に突如現れた、凄まじい程の殺気。

ぞくりと鳥肌が立ち、振り向いたと同時に両者の視界が黒に覆われる。

「お前さんらが好き勝手話してんのは、ゼーんぶ聞こえてんだよ。人の昔話ほじくり返してそんなに面白いかね？え？」

痛む箇所を摩りながら、銀時は間髪入れずに口を挟む。

「大好きって……まあ、その、否定はしねえけどさ。実際俺にとつちや親代わりになってくれた人だし。」

「何と……では先刻に銀時殿が申されていた、拾つて面倒を見てくださつた方というのは、この松陽殿であつたのですね。」

合点がいつたと何度も頷く段蔵の言葉に、銀時の頬がみるみるうちに赤くなる。まるで林檎飴のように耳まで染まっていく彼の顔を、くすくすと笑う桂と高杉の表情からは、張り詰めた雰囲気は当に無くなつていた。

「あ、ねえねえ。そういうええツバメと黒猫は誰に召喚されたのよ？松陽を喚よんだマスターはアンタ達と同じだと、てつきりそう思つてたけど？」

「いいや違う。そもそも俺もヅラも、誰にどんな目的で喚よび出されたかなんて分かつちやいねえよ。」

不意に切り出されたエリザベートの疑問に答えたのは、またいつものポーカーフエイスを張り付けた高杉であつた。桂を除き彼女を始めとした一同は、彼の答えに開いた口が塞がらない。

「マスターが分からぬ、つて……そんなことがあるんですか!!」

「ああ、今しがた高杉が言つた通りだ。俺とこ奴はつい三日程前、この世界にサーヴァン

トとして召喚された身なのだが、肝心のマスターがいらない状態でな……まあ、いわゆる野良サーヴァントというやつだ。」

驚愕する新八に対して、しれっと桂は表情ひとつ変えることなく答える。

「なあ藤丸、サーヴァントつてマスターがいなくても顕現とか出来んの？んなお手軽感覚でポンポン喚びだしていいもんなの？」

「ん……本当はサーヴァントの召喚なんて、簡単に出来るもんじゃないんだけどね。だつて普通に使い魔を呼ぶとは訳が違うし、魔術師の素質も無い俺がサーヴァントを召喚出来るのだつて、カルデアからの支援を受けているからであつて……まあ、そのカルデアとも今は通信が出来ない状態で参つてんだけだよ。」

溜め息交じりに零しながら、藤丸は通信機を装着した腕を徐に上げる。電源を入れ、展開される画面を見ながら『通信』のボタンを押してみるも、やはり電子スピーカーから聞こえてくるのは砂嵐の音だけ。

大きく落胆の息を吐いたその時、桂が物珍しそうに覗き込んでくる。

「藤丸君、その絡線は何なのさ？」

「ああツラさ……桂さん、これはカルデアとの通信を行うための機械ですよ。でもここに來てから何だか調子が悪いみたいで……今もそうなんですけど、時計だつて大幅にズレちゃつてるんですよ。」

ほら、と藤丸が指差したのは、展開された画面に表示されたデジタル時計。すると桂はそれと『何か』を交互に見やり、そして顔を顰め口を開く。

「……いいや藤丸君、その時計は狂ってなどいいぞ。」

「え……っ？」

思わず目を丸くする藤丸に対し、桂はある方向を指で指し示す。その先にあつたのは一軒の電化製品が並ぶ店で、表側には何台ものテレビが並べられている。それら全てが同じニュース番組を放映している画面の右端に映る数字を見比べ、藤丸は驚愕した。

「そんな……。」

びったりだった。時間も、分数が変わるタイミングまでも。

では、さっきのは一体何だったのだろう……自分達がここにレイシフトしてきたばかりの時、確認した時刻は確かに午後15時頃であつた筈。なのにこの江戸の街は先程と変わらず今も、夜の闇に覆われているではないか。

どうも納得がいかず時計とテレビを何度も睨む藤丸を不思議そうに眺めた後、桂が切り出した。

「さて、話題を戻すでしょう……それで銀時、俺達はこれから何処へ向かつておるのだ？ とりあえず落ち着いた場所で先生を休ませて、それから話し合おうと提案したのは貴様であつたらう。」

「あ？あー……一応アテはあるにはあるんだが、ちよいと面倒なことになってるっていうか………おつ、そうだ！」

不意に頭上に現れた電球が光り、自らの掌を拳で叩きながら、銀時はぐるりと身を反転させる。

「なあなあツラ、高杉！お前ら隠れ家的なところあつたら？こんだけ人数もいるんだし、俺んちみてえな狭苦しいとこなんかより、そつちに案内してくれたほうがいいんじゃないかな？つて銀さん思うんだけど!!」

これでもかど開いた目を輝かせ、銀時は期待の眼差しで二人を見つめる。彼の頭の上では、桂の腕を離れ再び定位置についたフォウが、先程の電球にじやれついていた。

「隠れ家的、というか寧ろ隠れ家なのだが………その、何だ………」

だが、桂の反応がどうもおかしい。こちらから目を逸らし、曖昧な返事をするばかりだ。そんな歯切れの悪い彼に変わつて、高杉がはつきりとした口調で答えた。

「残念だが銀時、そいつあ無理だ。」

「はあ？何でだよ、松陽の一大事でもあるんだぞ。」

「んな事は、てめえに言われなくても分かつて………第一そんな場所とこがありや、とつくに先生を保護してやがらあ。」

眉を顰め、吐き捨てるように高杉は呟く。彼を含め桂までもが気まずげな態度をとつ

ていることに、銀時は言いようのない違和感を覚える。

「そういや、すつげえ今更になるけど……何で対立してたお前らが、一緒になつて行動してたの？」

「……………」

「ツラ、お前んとこの攘夷党の連中はどうした？あのオ○Qだつて、式神じゃなく本物はどこに行ったんだよ？」

「……………」

「高杉……………お前だつてそうだ。鬼兵隊はどうした？ツラも含めてテロリストのお前らが、こんな街中堂々と歩いてること自体おかしいんじゃないの？なあっ!!」

「……………」

銀時の質問に、両者は固く口を結んだまま答ええない。

次々と生まれる疑問が、まるで泉の水のように溢れ出して止まらない。募る焦りと苛立ちをぶつけようと、大きく息を吸い込んだその時、不意に辺りが騒がしくなった。

《続く》

【参】常夜の国（Ⅱ）

「あら、何かしら？向こうが騒がしいわね。」

一同の視線が向けられる先は、とある店の前に出来た人ばかり。近付いて確認しようとするも、集まる人に阻まれ覗くことすら出来ない。

「んー、よく見えないアル。なあスギっち、肩車してヨー！」

「やなこつた、こんな往来のど真ん中で小っ恥ずかしい。」

「あく神樂ちゃんズルい！じゃあ僕はおんぶがいい！」

「おい……やらねえって今言つたばかりなんだが。」

「お前ら、あんま無茶言うんじゃねえよ。いくらサーヴァントでも自分とほぼ身長変わんねえ奴なんか持ち上げたりしたら、こいつの只でさえ低い身長が重さでもつと縮んで

——

銀時が全て言い終えるのを待たずして、高杉の蹴りが彼の脛にクリーンヒットする。向こう脛、所謂^{いわゆる}弁慶の泣き所に走る激痛に悶える銀時を余所に、皆の関心は相変わらず人混みの中心部へと向けられていた。

「ではマスター、ここは段蔵が確認致しましょう。首を伸ばして視覚情報をズームすれば簡単に——」

「うーん、いいアイデアだとは思うんだけどね。それはそれでまた別の騒ぎが起きちゃうから却下で。」

中の様子を確認するべく、藤丸が懸命に案を捻っている間にも、神楽やアストルフオを始めとした特に何も考えていない面子は、密集する人を強引に押し退けずいずいと中へと入っていつてしまい、それを見た藤丸も考えることを放棄し、自身もまた彼女らに続くのであった。

「……………あれは……………っ！！」

彼の数メートル先にある、もう一つの人ばかり……………伸びた鼻やら角やらの異形の風貌をしていることから、恐らく皆天人あまんとなのだろう。そんな柄の悪い男達に囲まれ、壁へと追いやられている人物に、人と人の中から顔を覗かせた銀時は見覚えがあった。

「ちよつと銀さん、あの囲まれてる人つてまさか、たまさんじゃないですか……………！！」

新八が名を叫んだその女性……………否、女性型の機械ロボットは、彼らにとつて見知った存在であり、漸く人混みから顔を出した藤丸にとつては、そういえばさつき濃ゆい顔の猫耳女に布巾（若干臭かった）をぶつけられたあのスナックに居たな〜くらいの認識であった。松葉色の髪を結び、メイド風の衣装に身を包んだ彼女は男達に怯むことなく、

無機質な瞳で彼らから目を離さないまま、酒瓶の入った袋を両腕でしっかりと抱え言い放つ。

「退いていただけませんか、お使いの途中ですの。」

「だーかーらあ、俺らが重そうなのその荷物を持ってやるって言ってるんだろ？」

彼女……たまの逃げ場を塞ぐようにして、鮫のような顔の天人は鱗に覆われた手を壁につき、にやにやと笑う。

「そうそう、人の親切は素直に受け取ったほうがいいぜ？お嬢さん。」

「まあ手間賃といっちゃなんだが、その袋の中の酒をちびつとばかし味見させてもらうがな。」

「おいおい、この人数で味見なんかしたら一瞬ですつからかんになっちゃうだろうが！」
天人達の下品な哄笑が、一帯に響き渡る。野次馬の中には止めに入ろうかと踏み出す者もいたが、数人の男達に睨まれると、すっかり意気消沈し人の間へと隠れてしまう。
「嫌だわ、また天人が問題起こしてる……あの女の子も可哀想に。」

「全くいい迷惑だよ。何故だかは知らんが、連中はあの化け物に襲われることはない。だからといってああして図に乗られちゃあな、これじゃあ化け物も天人も厄介者であることに変わりないぜ。」

不意に聞こえてきた男女の会話に、藤丸は思わず目を丸くする。もう少し詳しく内容

を知りたいと聞き耳を立てようとしたその時、人混みの中心に変化が現れた。

「あの、もうよろしいでしょうか？ 貴方がたにこのお酒は渡せませんし、何度も言いますがお使いの途中ですので。」

たまは臆することなく、鮫男の脇をすり抜けると、男達の間から出ようと足を急がせる。だが彼女の細い腕を、鰐わにに似た顔の天人が乱暴に掴んだ。

「おっと、俺らに逆らうつてのかい？ てめえみたいな機械女がらくた、この場で解体バラして売っ払っちまってもいいんだぜ？」

「おいおい勿体ねえだろ、折角の美人だつてのに。それなら只の鉄の塊にしちまうよりもっと『別の事』に使うほうがもっと役に立つと思うぜえ。」

「それもそうだな、ガッハハハハハハハ！」

再び響く、不快極まりない笑い声。顔を顰めたたまが腕を掴む手を振り払おうとしたその時、不意にその手から力が抜けるのを感じた。

「は……————あああっ！！」

彼女の耳と視覚が遅れて認識したのは、鰐顔の天人の悲鳴と、彼が横へと大きく吹き飛んでいく光景。他の天人をも巻き込み、先程たまが追いやられていた壁へと激突し、木製のそれを派手な音と共に破壊した。

「ん……だ、誰だゴラあっ！！」

驚愕する鮫男の、叫ぶ声が上がる。すると巻き起こった疾風と共に、たまと彼らの間に姿を現したのは、高い位置に結わえた長い黒髪を揺らす少女。

ガシンツ、と音を立て、宙を舞った少女の両手がワイヤーを辿って、元の彼女の腕へと戻る。瞬き一つせずに眼前の輩を睨みつける彼女の形相は、憤怒に満ちた不動明王そのものであった。

「ひつりな、何だこいつは!!」

怯えた悲鳴に答えることなく、彼女はくるりと体を反転させると、尻餅をついたまへと手を差し伸べた。

「大丈夫ですか? お怪我は、ありませんか?」

「あ……………貴女はもしや、先程の……………」

表情には出ないものの、内心では驚愕するたまの脳裏に甦る記憶。数刻前、自身の務めるスナツクを訪れた輩の中に、確か彼女がいたような気が……………いや、確実にいた。うん。

その場で言葉を交わすことはなかったものの、彼女が人間ではない……………自身と同じ絡繰であるということを感じ、また向こうも同じことを思っていると、何となくそう感じたのであった。

「はっ。俺らの仲間をいきなりぶつ飛ばすとは、とんだご挨拶だねえ? お嬢さん。」

「……黙れ、その薄汚れた息を吐き散らす口を閉させ。女だからと、絡繰だからと彼女を罵り辱める資格など、外道に堕ちた貴様らには微塵も無い。」

「なっ……なんだとつこのアマ!!」

たまに向けたものとは正反対の、鋭い眼光と侮蔑を含んだ言葉に、額に青筋を浮かべた天人達から次々と怒号が上がる。

「こりや大したもんだ。身体だけじゃなく威勢までイイとはな。」

「だがな、喧嘩を売る相手はよく選んだほうがいいぜえ? でないと……ヒドイ目にあっちゃつても知らないよおお!!」

数名の輩が、各々剣やら銃器やらを持つて一斉に襲い掛かってくる。段蔵も仕込み刀を展開し、応戦しようとした時であった。

「酷い目に合うのはっ!」

「てめえらだアアアっ!!」

威勢のいい掛け声と共に、彼らと段蔵達の間躍り出る影。驚愕などする間も与えられず、それらが一斉に放った傘やら槍やら木刀やらの強烈な一撃が、突進してきた天人達を全て吹き飛ばした。

「やつほー! お節介の僕が助太刀にきたよ!」

「おう段蔵、主人公の俺を差し置いてイイとこ取りしてんじゃねーぞ。」

「フオウツ、フオウフオウツ。」

「そうアル、ヒロインの私を放置して目立とうなんてそうはいかないネ！重要なことだからもう一回言うぞ、ヒロインは私アルよ！」

「そして当然、アイドル枠はこのアタシ！そこんとこキツチリ覚えておいてね。にしても、何て下賤な連中なの！全員まとめてフアラリスの雄牛に放り込んでやりたいわ！」

「皆様……！」

頼もしさ溢れる仲間達の姿に、段蔵の胸の内は熱くなる。

突如現れた乱入者に天人達は僅かに怯んだものの、「ぶっ殺せエツ!!」と鮫男が上げた声に呼応した他の天人も一斉に襲いかかる。多勢に無勢であるのは明らかであるものの、銀時達は臆することなく喊声かんせいを上げて立ち向かっていった。

「ふあらしす……？ふむ、聞き慣れぬ単語だな。後で調べてみるとしよう。」

「ツラさん、もしもグロ耐性が無いのでしたらそれは絶対に検索してはいけませんよ？この小説を読んでくれてる皆もだよ？俺も書いてる奴も責任なんて取らないからね!! いいか絶対だぞ!!警告はしたからなっ!!」

「藤丸君、ツラじゃない桂だ！」

「そんなことより、勢いで突っ込んできちゃったけど大丈夫なのか……？あの人（？）

達、一応民間人なんじゃ——」

「マスター！こいつら倒すと魔術髓液落とすよ〜！」

「ひやつはあああつ！狩れエ!! 一匹残さず全部狩りつくせエエつ!!」

「……おい。藤丸の奴、人相まで変わってねえか？一体アイツに何があつたつてんだ？」

「銀ちゃん。カルデアのマスターの仕事はね、人理の修復だけじゃないんだよ………僕等サーヴァントをより強くしてくれるために、必要な素材をゲットするべくクエストの周回に日夜明け暮れているんだ。何十回、何百回と同じステージをぐるぐる回り続けても、エネミーが確実にアイテムを落つことしてくれるなんて保障は無いんだけどね………まあ、3ターン以内でちやちやつとステージをクリアしたりなんかする人もいるけど、僕らのマスターは不器用なところあるから、編成の段階で躓いちやつて。」

ヒヤッハー!!と叫びながら天人達に魔弾をぶつ放す藤丸を遠巻きに眺め、銀時とアストルフオは苦笑する。よく見ると藤丸の頭がモヒカン刈りになっているような気もするが、きつと気のせいだよ。気のせい気のせい。

「おい、何だよこいつら!!馬鹿みてえに強えじゃねえか!!」

次から次へと倒されていく仲間を前に、青ざめた顔の一人が悲鳴を上げる。刃は届く前にへし折られ、当たらない弾を打ち続ける銃ごと沈められ、ペンギンのような生き物にプラカードで殴られ、彼らと銀時達との戦闘力の差は火を見るよりも明らかであつ

た。

「くそっ！こうなったらさっきのクラクリ女を人質に——あ？」

首を動かした鮫男の目の前を、数匹の琥珀の蝶が舞い踊る。一羽が男の尖った鼻先に停まると、熱を感じたと共にジユツと肌が焼ける微かな音。それに続いて焦げ臭さが辺りに漂った。

「熱いつ!!アチチチツ!!な、何だよこりやあ!!」

鼻先の蝶を追い払ったのも束の間、光の蝶は次々と鮫男へと群がっていく。

「ひっ!!来るな、来るんじゃないやねえ!あ、うわああああア!!」

両の手を大きくばたつかせ、半狂乱に陥る鮫男。そんな無様な姿に目もくれることなく、高杉は一人離れた場所に立ち、素知らぬ顔で煙管を燻らせていた。

「うおおおおおオオオ!!吹き飛ばやあつ!!」

一方、こちらでは神楽がぐるぐると大回転をしている。彼女の抱えているものをよく見てみれば、それは新八の両足。そう、彼女は新八をジャイアントスイングしながら、というよりジャイアントスイングをかまされている新八を使って天人達を薙ぎ倒しているのである。

「何だこいつら!!全く近付けやしねえ!」

「しかもこの眼鏡の袖が無駄に長いせいで、攻撃が広範囲に亘わたってやがんど!!」

「やったな新八！足跡スタンプにしかならなかつたお前の邪魔くさい袖がこんなところで役に立ってるアル！お前も喜んでるアルか？！」

「かつかつ神楽ちゃん!!今はちよつと喜ばなウツプやばい気持ち悪オロロロロロつ!!」
「ぎやああああ!!眼鏡の吐き散らかしやがったゲロが辺り一帯にイイつ!!」

阿鼻叫喚という言葉が当てはなりそうな地獄絵図の傍ら、フオウを頭に寄せたままの銀時が振るう木刀が、天人を殴り飛ばし一掃していく。

「おおおお！死に晒せやああアアつ!!」

熊の顔をした天人が、銀時目掛け斬馬刀を振り翳す。応戦しようと木刀を前に構えた時、フオウが大きく跳躍した。

「あつ、おいー！」

銀時の制止も聞かずに、果敢に跳んでいったフオウが着地したのは、熊顔の天人の顔面。見慣れない小動物に突然視界を塞がれた彼の顔を、フオウは自身の爪で思い切り引つ掻き始めた。

「フオウフオウフオウ！シスベシフオーウ！」

「ぎやああああつ!!痛でででで!!」

堪らずフオウを引き剥がそうと、熊顔の天人は両の手で掴みかかろうとする。その際に斬馬刀を離してしまった瞬間を、銀時は見逃さなかつた。

「隙ありいっ！」

銀時の全力の突きが、天人の下顎に直撃する。後ろ向きに倒れていく天人の顔から離れたフォウは、役目を終えたと同時に再び銀時の頭上へと戻っていく。

「おめえ、やるじゃねえか。ただ可愛いだけのマスコツトじゃねえみてえだな。」

銀時の大きな手にわしわしと撫でられると、フォウは満足げに「ンキュツ」と小さく鳴いた。

「お……おい、どうするよ!! こいつら只物じゃねえつて!」

「分かつてらあ!! ちつ、仕方ねえ………退くぞ!」

顔のあちこちに火傷を負った鯨男が叫んだのを合図に、天人達は負傷した者達などを抱えることなく、そそくさとその場から逃げていく。

「あつ! 待つてえ髄液! まだ全然足りてないのに!!」

「アイテム名で呼ぶんじゃねえよ!! てめえら覚えてろ、絶対え後で痛い目見せてやる!!」
「へっくし! ……あれ? お前ら誰だヨ?」

「ものの数行とくしやみ一発であつさり忘れてんじゃねええエエつ!! てめえらの面は
すっかり覚えたからな、覚悟しとけよ!!」

いかにも小悪党な捨て台詞と突つ込みを残し、天人達の姿は人波の中へと消えていく。壁の壊れた建物と気を失った数人の天人を残し、静まり返ったその場に突如拍手が

沸き起こった。

「こりやたまげた！どこの旅芸人一座かと思えば、皆腕の立つ侍じやとは！」

「ゴロツキ共め、ざまあみやがれてんだ！いや／＼久々に胸がスカツとしたねえ。」

「キヤ／＼お侍様！こつち向いて／＼！」

四方八方からの歓声に皆が嘩然としていたその時、人々を掻き分け現れた者達があった。

「たま……っ！」

息を切らせて姿を見せたのは、先程スナックで銀時達と言ひ争いを繰り広げていた女性……お登勢だった。彼女に続いて周りを押し退け（というか周りが離れていった）、キヤサリンも深刻そうな面持ちで駆け寄ってくる。

「オイ、大丈夫か！痛イコトヤ卑猥ナコトトカサレテネーカ！」

「お登勢様、キヤサリン様、心配をおかけしてすみません。この通り私もお使いも大事ありませんので。」

「お使いなんていいんだよ……すまなかつたね、アタシが買ひ物なんて頼んじまつたせいで。でも、アンタが無事で本当に良かったよ。」

皺の刻まれた手が、たまの頭を優しく撫でる。暫くその様子を眺めていた銀時だったが、座り込んでいたたまに合わせてしゃがんでいたお登勢が立ち上がり、おもむろにこ

ちらへと振り返ったことに周章する。

「あ……………えーと。」

とりあえず何と言つていいのか考えておらず、口籠る銀時。そんな彼の頭上に翳される、二人分の腕。

「ほら銀さん！何をボサツとしてるんですか?!」

「銀ちゃん今ヨ！ババアに誠意を見せて許しを請うアル！」

神楽と新八、二人の手に掴まれた頭を地面へと擦りつけられ、伏せられた銀時から「ふごっつ!!」とくぐもつた悲鳴が漏れる。

因みにフォウはまたもいち早く気配を察し、銀時の頭から跳躍した先の両手を開いた桂……………を經由して下へと降り、小さい歩幅で高杉の足元へと移動していった。背中に爪を立て、よじよじと肩まで昇つていくと、ここで漸く高杉がフォウの存在に気がつく。「何だいお前さん？んなどここにいたら、ご自慢の毛に煙の匂いが移っちゃまうぜ？」

左肩から顔を覗かせたフォウの頭を、高杉は指で軽く撫でてやる。それがとても心地良いようで、フォウはうつとりと目を細めながら「キュー…」と小さく鳴いた。

そんな一人と一匹の寄り添う光景にほんわかする藤丸達の横で、桂はハンカチを強く噛んでジェラシーを露わにし、そして銀時は強制的土下座からの息苦しさに行き場のない手をばたつかせていた。

「ぶはっ！てめえらマジでぶざけんなつて!! 銀さん殺す気!!ん? サーヴァントつて死ぬことあるの?」

「いいからとにかく謝りましょ!! たまさんを助けた今ならお登勢さんの心も穏やかですし、これはまたとないチャンスですよ!」

「おーい藤丸! お前も銀ちゃんに頭下げさせるの手伝うアル! 流石にここまでやれば、ババアの頑固なハートもきつとイチコロネ!」

ぎやいぎやいと騒ぐ三人、するとそんな彼らの前に、お登勢が無表情で近寄ってくる。三人が彼女の気配に気付いたのはすぐ目の前に来た時で、言葉を発さずとも感じる威圧感のようなものに血の気が引いていった。

「……新八、神楽、退いてろ。」

銀時の静かな声に、二人は顔を見合わせた後、すぐに背中の上から身を避ける。珍しく真面目な顔つきでお登勢を見上げた後、銀時は大きく吸った息を言葉にして吐き出した。

「ババア!! じゃなかったお登勢!! この度は家賃○○○日分の滞納、まっことにスンマセんでしたああアアアっ!! これからは頑張つて働いて毎月ちゃんと納めるよう頑張るからあ! だからこの寒空の中追い出すのだけは勘弁して!! せめて夕方の天気予報に出る結野アナは拝みたいの!! お願いい300円先に支払うからああアアっ!!」

悲痛な謝罪の声が、辺りに響き渡る。新八と神楽を始め桂や高杉、そして藤丸達もが、滞納していた日数に驚愕し、そしてドン引きする。

「白モジャ……流石にその滞納期間は、ちよつと酷いんじゃないかしら？」

「全く、金に困っているのなら俺に相談すればよかつたらうに！攘夷活動に関するアルバイトなら、幾らでも紹介出来たぞ。」

彼らが銀時を見る目は最早、まるで駄目なおっさん……略してマダオを蔑むソレと同一のものであつた。「ちよつと！リアルなマダオいんにその呼び方盗るのやめてくれない！」と何処からか聞こえてくる声を幻聴と捉え、背中に刺さる痛い程の視線を受けながら、銀時は少しだけ頭を上げてお登勢の様子を窺う。

腕を組み、こちらを見下ろすお登勢の顔は——両目をぱちくりと開き、驚いた様子だつた。

彼女だけではない。キャサリンも、段蔵の助けを借りて漸く立ち上がったたまもが、怪訝な様子で銀時を……否、銀時『達』を見ている。その視線から伝わってくるのは、『こちら』に来た時と同様の、自分達を眉唾物と疑う不信感。

やはり土下座だけでは駄目だったかと、身を起こして頭を抱える銀時に、お登勢が言い放つた。

「家賃？滞納……？ちよいとアンタ、一体何の話をしているんだい？」

「……………へ？」

思わず零れた間抜けな声。完全に頭を上げると、お登勢達は相変わらず不思議なものを見るような眼差しをこちらへと向けている。

「そんなことより、うちのたまを助けてくれたんだってね？この辺りはああいった連中が多いから日頃から気をつけてはいたんだが……………ま、アンタらが『どこの誰だかは知らない』が、本当にありがとうよ。」

「……………」

頬を緩め、朗笑するお登勢。だが彼女の発したその一言に、銀時の背筋を冷や汗が伝う。

この表情、この話し方……………間違いない、この者達は端ハナから嘘などついてはいなかったのだ。

「ババア、どうしちやっただんだヨ!!まさかとうとう耄碌もろくして、私や銀ちゃんのことも忘れちゃったアルか!!」

「誰が耄碌ババアだコノヤロー!まだそんな年喰つちやいねえよ!」

「お登勢さん……………それにキャサリンさんにたまさんも、本当に僕らのことが分からないますか?」

新八が恐る恐る尋ねると、三人はお互いの顔を見た後に、しつかりと首を横に振って

否定の意を示す。偽りなど感じられないその動作に、銀時達はただ呆然とするしかなかった。

「はは……どうなつてんだ、おい。」

自嘲気味に笑い、肩から力が抜けていく。彼だけでなく、新八と神楽も顔色が優れない。彼らを心配するようになっていた藤丸の視界の端に、ふと桂と高杉の姿が映った。相変わらず煙管を燻らせているであろう高杉は、こちらに背を向けているため表情が窺えない。だが自分と同じく銀時達を見つめている桂の面持ちは、どこか悲痛めいたものを感じた。

「んん……？ちよつとアンタ、そこのアンタだよ。」

不意にかけられた声に、藤丸の目は桂達からお登勢へと移る。じいつとこちらに向けられる視線は、明らかに自分を見ていた。

「へ？お、俺ですか……？」

「そうさ。アンタ服に血がついてんじやないかい、頭に包帯もしてるようだし……。」

「才登勢サン、アツチノデカイ犬ノ上ニモ寝カサレテル奴ガイルミタイデスヨ。」

「それに、皆様の身なり……先程ならず者を撃退してくださった以前よりぼろぼろの状態でした。特にそちらの駄眼鏡そうな眼鏡の方、袖が異様に伸びているではありませんか。」

「駄眼鏡そんな眼鏡つてなんだよ!! あとこの袖は、その………悪意のない親切からの付属品というか……。」

最早誰の足形がついているのかも分からないくらいに汚れた袖を掴みながら、新八は目を泳がせる。そんな彼の後ろでは、アストルフォが自分の額を軽く小突いてテヘペロ顔をしていた。

お登勢は暫く無口のまま、銀時達を観察するように一眸した後、溜め息を一つ零した。「仕方ない。恩人を無下にするほど、アタシも腐っちゃいないからね………来な。」

* * * * *

先程の騒ぎが起きてから四半時程経った頃、『大江戸警察』と書かれた数台のパトカーが停まっているそこに、遅れて新たなパトカーが停車する。

開いた扉から降りてきたのは、揃いの黒い制服をまとった三人の男達。一人は亜麻色の短髪を掻きながら欠伸をし、一人は啞えた煙草から紫煙を燻らせ、そして身長の高い

最後の一人はゴリラだった。

「ん？ねえちよつと、ゴリラだったっておかしくない？読んでる人が混乱しちゃわない？」

「何言つてやがんです？近藤さんは元からゴリラだったでしょう、しつかりしてください。」

「いや違うよ!!ゴリラじゃないよ!確かにゴリラではあるけども!あれ、どっちだったっけ……まさか、俺は本当にゴリラだったのか？」

「しつかりしろ近藤さん。アンタは確かにゴリラだが、それ以前に人間であり真選組局長だろうが。」

一人混乱するゴリラ……もとい、近藤の横を通過していき、煙草の男は先に来ていた他の隊士達の元へと歩を進めていく。現場の検証を行っている一人に近付くと、気配に気付いたその男はこちらへと振り向いた。

「あつ、土方副長!それに近藤局長と沖田隊長もお疲れ様です……つと、もう名前で呼んでも平気、なんですすよね？」

不安げに彼らの名を呼んだ、一見ジミーな彼は8話目の最初から台詞のあった真選組監察方・山崎退(32)。あんぱんとバドミントンをこよなく愛する。でもあんぱんはそこまで好きじゃなかったりする、日頃からあんぱんあんぱん言ってるくせにな。どっち

だよザキコノヤロー。あ、あとカバデイも好きだったなコイツ。通称ザキなんで、山崎でもザキでも殺鬼^{ザキ}でもジミーでも地味男でも、好きな呼び方で呼んでくれても構わないですぜい。あと多分童貞だと思——

「ちよちよちよちよつと！ちよつとちよつと！」

「どうした山崎、それ大分古いぞ。」

「じゃなくて！何皆して地の文使つてまで人の事好き勝手言いまくってるんですか?!?というかあんぱんのことも、日頃からそんなに言つてないし！」

「因みにこの地の文、誰がどの部分喋つてんのかは読んでる側の想像にお任せしやすぜ。その方が面白みあるだらうい？」

「面白くないですよ！そして唐突な年齢バレつて何これ?!?ふーんこの人32歳なんだーで精々終わつちやうくらういにしかならんでしょ?!?だからどうしたの?!?」

「こんなぴちぴちな肌してんのに、俺やトシよりも年齢が上なんだぞ。どんなスキンケアアしたらそんな若々しくいられるの？お肌に悩む全国の女性にスキンケア法とか教えてあげたら？」

「いえ、特に何もしてませんけど……そんなことより、早くストーリー進めませんか？こんなところでいつまでもぐだぐだやつてるから、小説の上がり余計遅くなるんですよ。」

「厳しい指摘だねイ……」と呟きながら、沖田と呼ばれた亜麻色の髪的青年は、現場の状

況を見渡す。派手に壊された木製の小屋の近くでは、既に他の隊士に捕縛された数人の天人の姿が見受けられる。中にはまだ気を失っている者もあり、それらは担架に乗せられていた。

「ここが通報のあった現場だな……にしても、随分と派手に暴れたもんだ。」

「只の喧嘩騒ぎじゃここまではならんだろ……山崎、聞き込みは終わったんだろ？」

開いた口から煙を吐きながら、鋭い眼光を向ける男——土方の問いに、山崎は「はい」と返事をし、手元のボードに目を落とす。

「通報の内容は、あの天人に女性が絡まれているというものでした。でも詳しい事聞いてみると、どうやら集まっていた野次馬の中にいた頓痴気とんちきな出で立ちの集団が、ならず者連中をまとめて成敗したとかで。」

「頓痴気な集団だあ？ちんどん屋か何かか？」

「それはどうか分かりませんが……目撃者の話によると、彼らは青年から幼子までの男女数名で、派手なフリルの服を着た角と尻尾のある少女だったり、ロケットパンチを打つ女の子やプラカードで相手をタコ殴りにするオ○Qもいたって話で。あつ、あとやたらとデカい犬もいたそうです。」

「うーん……よく分からんが、随分とキャラの濃い面子だな。」

「本当ですね、近藤さんのケツ毛並じやないですかい？」

「えっ、俺のケツ毛ってそんなに濃い？ちよつとトシ、確認してもらってもいい？」

「近藤さん、いくらアンタの頼みでもそいつあ聞けねえ。」

相変わらずの上司に溜め息を吐きつつ、土方は先程の山崎の報告の中に引つかかるものを感じていた。

「(オ○Qにデカい犬、か……まさかとは思うが、『あいつら』もこの江戸に……?)」
深く考察していると、こちらの顔を覗き込み「しかめつ面」と茶々を入れてくる沖田。彼の頭を軽く小突いたその時、山崎が思い出したと言わんばかりに声を上げた。

「(そうそう……その連中の中で、一際目立ひととけつてた男がいたそうです。強者揃いの連中の中で特に腕っ節も強くて、見ていて気持ちが悪かったとかで。」

「(ほくお、俺達の知らないところでそんな強え奴がいたとは……で、どんな奴なんだ?)」

「はい。聞き込みをした全員が、口を揃えてこう言っていました——夜闇に煌く、銀色の髪をした侍だった、と。」

「——！」

山崎の報告に、土方の眼が見開かれる。

彼だけではない。近藤も、沖田も、同じように驚愕を浮かべている。

「あ、あの……………どうかしました？」

三人の様子の変化に、山崎はたじろいでしまう。だか彼らの強張った面は、直ぐ様不敵な笑みへと変わっていった。

「…………ハツ、まさか奴らも『こちら側』の江戸に来ていたとはな。」

「ということは、『旦那』達も今の『俺ら』と同じってことになりやすね……………それなら話が早えや。土方さん、今からでも乗り込みに行きますかい？」

「やめとけ、今はこっちの片付けが先だ……………まあでも、同じこの江戸にいるんだ。顔を合わせるようになるのも、そう遠くねえだろうよ。」

一見だと冷静な態度のように思えるが、昂揚する声色はやはり隠せない。

啞えた煙草を離し、煙を吐く土方の視線の先には、『スナックお登勢』と書かれた看板の店。その二階に灯る明かりを確認すると、土方は一人ほくそ笑んだ。

「……………近いうちに、またその間抜け面を拝みに行つてやるよ。なあ？万事屋。」

《
続
く
》

【参】常夜の国（Ⅲ）

「ぐえええつくしよいつ!!」

だいわんじょう

大音声と唾を伴った銀時のくしやみが、室内に轟く。ちようと正面にいた新八の首元にそれは被弾し「ぎやっ!!」と悲鳴が上がった。

「ちよつとアンタ何するんですか!! お登勢さんから借りたばつかの着物なのに、早速汚さんでくださいよ!」

「だあつてよく、この部屋すんげえ埃つぽいんだもん。」

「フオーウ、プチュンツ!」

「ほら見ろ、こいつだつて鼻がむず痒くて仕方ねえみてえだぞ。」

「あつはは、フオーウ君たら銀さんの頭の上なんかにいるから。」

新八の置いた段ボール箱の上に、抱えた荷物を置く。台所の隅に積まれた荷物の山を暫し見上げた後、銀時は踵を返して歩き、居間へと通じる扉を開けた。

「あ、銀さんも新八君もお疲れ。手伝えなくてごめんね?」

こちらに気付いて声を掛ける藤丸は、設置されていた長椅子にエリザベートと座り、

アストルフォに頭に包帯を巻いてもらっている。彼の着ている服もまた、新八と同じ渋い色合いの着物であった。

テーブルを挟んだ向かいでは段蔵が座り、新八の着物をせつせと繕っている。その後ろで、定春はすやすやと気持ちがよくそうに寝息を立てていた。

「いいって、それより怪我は平気か？」

「うん、ちよつと切ってたんだけど大丈夫だから……心配してくれてありがとう。」

「もう〜マスターってば、動いちゃ駄目だよ！」

頬を膨らせるアストルフォに、「ゴメンごめん」と謝る藤丸。銀時に続いて室内に入った新八は、忙しなく^{せわ}辺りを見回す。

「あれ？神楽ちゃんと桂さん達は？」

「あの仔兎ちゃんなら、さつき濃ゆい顔の猫耳女と一緒に、汚れた服持って下に降りていったわよ。ツバメと黒猫は、そっちの部屋で先生を寝かせるって入ってっちゃったわ。」

エリザベートが指差したのは、この部屋と和室とを隔てる襖。白地に市松模様のシンブルな柄模様は、銀時と新八にとって見慣れたものであった。

——そう、ここは『スナックお登勢』の二階。本来であれば、嘗て^{かつ}銀時が『万事屋

銀ちゃん』を構えていた筈の、事務所兼住居であつた所。

しかし、お登勢にここへと通された銀時は絶句した。無くなつた表の看板と同様に、掛けてあつた飾りや額縁も姿を消し、仕事用のデスクに至つては、そこに在つたという床の凹みすらも無い。唯一置いてあるこの長椅子とテーブルだけが、妙に懐かしさを感じさせた。

「……………銀さん、どうかした？大丈夫？」

険しい顔のまま黙りこくる銀時を心配し、藤丸が声を掛ける。こちららに向けられる視線とそれに反応し、銀時は顔を上げた。大丈夫、と言いかけた口だが、目に飛び込んできた光景に思わず動きを止める。

「……………お前が大丈夫かよ、藤丸。何がどうなりやそんななるんだ？」

啞然とする銀時の視線の先では、顔全体を包帯に覆われた藤丸の姿。まるで頭部だけミイラのようになつた彼の辛うじて動く口元が、「前が見えねエ」ともごもご小さく呟いていた。

「あれれ？こんな筈じゃなかつたんだけどなく、えいっ。」

傾げた頭を指で掻きながら、アストルフォは包帯の端を引つ張つてみると、ちようど藤丸の喉辺りがギュツと締まる。わたわたと動かす藤丸の手は空を掻き、「ひゅ、ひゅ

……」と狭い管を空気が漏れるような軽くヤバめの音が、か細い音が包帯越しの口から零れた。

「オイイイイイツ!!ちよ、締めすぎ締めすぎっ!!藤丸死んじやうウウ!!」
「キヤアアアツ仔犬!アストルフオっ早く緩めなさいよお馬鹿!」

皆の慌てようと痙攣する藤丸に驚き、アストルフオはわたわたと包帯を緩めていく。数秒後、漸く顔を出すことが出来た藤丸は大きく呼吸し、瞬く間に肺を新鮮な酸素で満たしていった。

「ごつめくんマスター!つい力入っちゃって!」

「はあ、はあ……うん、平気平気。朦朧としてた間に変な夢まで見ちゃったけどね。」
「夢?何よそれ?」

「んーうろ覚えなんだけどさ……気がついたら大きな川の前に立つてて、そこにいたお婆ちゃんに服剥ぎ取られそうになった。」

「それ三途の川アアア!!そんで多分そいつ奪衣婆アアア!!全然平気じゃないでしょ藤丸君っ!」

「でもその人、ヤンキーが着てるみたいなさカジャン羽織ってた上に、頭に高そうなグラサンまで乗せてたんだよ。とにかく怖かったから、着てるスカジャンとグラサン褒めまくったの。そしたらすんげえ良い良くてくれたみたいで、自前のモーターボートに乗

せて川の向こうまで連れてつてもらえたよ。」

「行かないでエエ!!それ絶対行っちゃ駄目なヤツウウウ!!」

「つーか何で奪衣婆がスカジャンにグラサン!!黄泉の国のファッション事情も時代と共に移り変わってんの?んなファンキーな恰好で大阪の街中歩いても浮かねえよきつと!馴染みまくるよ!」

「本人曰く、近頃お洒落な恰好の亡者達が来るようになってから、ファッションに目覚め始めたんだって。同僚の懸衣翁?って人と一緒に罪を測り終えた服を色々着たりして楽しんでるらしいよ。因みにサングラスは霊盤なんだよフフン、ってさり気なく自慢された。」

「最後の情報どうでもいいイイイ!!何ちよつと霊盤自慢しちゃってんのババア!そもそもモーターボートどこから?あとあの世で小型船舶免許取れるトコなんてあんのかよ!!」

「『免許?そんなもの必要ないさ……自分の好きな事やんのに、いちいち周りの許しなさど得ることあ無え。そうだろ坊や?』って黄昏ながら、跳ねる水飛沫と共にスカジャンはためかせてたお婆ちゃん、最高にイカしてたなあ……。」

「何その無駄なカツコよさ!!フリースタイルDATA☆BB超イカす!つーか藤丸君、あの死にかけてた数秒の間に、どんだけ内容の濃い臨死体験してたの!!」

「しかしマスター、よくぞご無事でお戻りになりましたね。」

「それがモーターボードが川岸に到着する寸前、横から別のボードが突っ込んできたんだよ。船に乗り込んできたり〇ぐだ子のお面被った女の人が、『アンタはまだこつちに来ちゃ駄目でしょっ?!』とつとと帰って人理救ってきなさい。ポンコツ!!』って持ってたバットで俺を思いつきり打ったんだ。すげえ痛かったけど、お陰でこつちに戻ってこられたよ……………でもさ、妙に懐かしかったんだよなあ、あの人の怒鳴り声。」

「……………ねえ仔犬、アタシ本編だとその人と面識ないけど、リ〇漫画のほうだと会った事も話したこともあるの。もしかすると、そのお面の女ひとつて——」

カルデアサイドの面々が何やら話をしている一方、銀時は「あっ」と短く声を発した後、隣の新八に話しかける。

「そうだ新八、お前家に帰らなくても大丈夫なのか？姉ちゃん心配してるだろ。」

「いえ、今日は僕もこつちに泊まらせてもらいます。松陽さんの事も心配ですし……………それに、もし姉上まで僕の事を覚えてないなんて言い出したりしたら、なんて考えただけで怖くて……………」

震える指で袖を摘み、俯いてしまう新八。声も微かに戦慄わななく彼の頭を、銀時は何も言わずに撫でた。

彼の言う通りだ。もしもお登勢達だけでなく、自分達がよく知る他の者までが存在の

記憶を失っていたとすれば……などと、考えたくもない憶測が頭を過ぎる。

再び静かになってしまった銀時と新八に藤丸達が困惑していたその時、襖が静かに開かれた。

「あ………えつと、ヅラ君スギつち、お疲れ様〜。」

重い空気に負けじと笑顔で手を振るアストルフォ。だが和室から出てきた彼らの表情は、どこか陰鬱なものを感じた。

「ヅラ……？」

銀時に渾名あだなを呼ばれ、漸く我に返った様子の桂は、彼の方を見た。

「銀時か………先生なら敷いた布団の上で、よく眠ってらっしゃる。あのまま暫く安静にしておけば、直じきに気がつくだろう。」

寝間着に着替えさせた後の松陽の着物を抱え、桂は息継ぎすることなく言葉を連ねる。その態度と慌てて繕ったような笑顔に、銀時だけでなく藤丸達も違和感を覚えている。こちらへと向けられる疑惑の籠った視線にたじろぎ、言葉を詰まらせる桂。するとそんな彼に助け船を出すようにして、高杉が口を挟んだ。

「銀時、後でてめえにも確認しておきたいことがある。」

「後で、つて………今じゃ駄目なのかよ？」

「ああ………なるべく部外者には聞かれたくねえ話だからな。」

高杉の眼が動いた先は、銀時達……の背後にある玄関。扉の向こうから聞こえる話し声と足音は、少しずつ大きくなってきていた。

「ただいまヨ〜！」

扉を開ける音と共に、神楽の元気な声が響く。その声に反応し、むくりと定春が身を起す。

銀時と新八が避けた後ろから、何やら大きなお盆を抱えた神楽、そして同じくお盆を持ったお登勢と、こちらは何故か手に赤いポリタンクを携えた『たま』が次々と居間に入ってくる。それと同時に、ふわっと漂う香りが一同の鼻先を掠めた。

「おや、大分片付いたね。これならこの人数が入っても大丈夫だろ。」

部屋全体を見回しながら呟くお登勢の、持つお盆の上に乗った大皿には、綺麗な三角型のおにぎり为抓手りと並んでいた。一つ一つ丁寧に握られたそれには海苔も巻かれており、端には沢庵も添えてある。

「見てコレ！ババアがおにぎり作ってくれたアル、私も手伝ったネ！」

神楽の持つ大きめの盆に乗っているのは、彼女の顔、いやそれ以上はあるだろう、二つのでつつつかいおにぎり。それ一つに何合のご飯が使われているかなど、容易に想像もつかない。

「ねえ仔兎……まさかソレ、アンタ一人で食べるワケ？」

「違うネ、この手前のヤツが定春の。んでこつち側の一回り大きいのが私の分アル。ふくん、これ一個の中に具がゼーんぶ入ってるアルよ、凄いでしょ？」

「わんっ、わんわんっ！」

ででーんっ！という擬音が似合いそうな程に存在感のある巨大おにぎりを掲げる神楽。ほかほかと湯気の立つその姿に、定春は涎を垂らして尻尾を大きく振っている。

常人では決して食べきれないであろう、これだけ巨大なおにぎりも神楽にかかれば容易いもの。

——唐突だが、ここで先刻の出来事を話すとしよう。

それは、銀時達がまだカルデアにいた時のこと。

人影のない食堂で、赤い外套がいでうを纏まとった弓兵アーチャーの男は一人、本日のおやつ作りを行っていた。

オーブンの電子音が鳴ると、弓兵は両手にミトンはを嵌め、オーブンの蓋を開ける。立ち込める甘い匂いと共にそこから現れたのは、天板に並べられた様々な形のクッキー。次々と取り出されていく天板に並ぶクッキーの数はかなりのもの。それもそのはず、これらは全てこのカルデアに所属する職員並びにサーヴァント全員分のものなのだ。

綺麗な焼き上がりに満足していた時、ふと彼が顔を上げると、食堂の入り口からこちらを見つめてくる、見慣れない少女の姿を発見する。口端からだらしなく涎よだれを垂らす彼女の視線の先は、明らかにこちら見ている。どうやらクツキーの匂いに釣られてきたのだと推測し、弓兵の男は少女を手招きこう言った。

「おいで、よかつたら君にも『一口』あげよう。」

——この数分後、弓兵は彼女を招いたことを激しく後悔する。なぜあの時、『一枚』ではなく、『一口』などと言ってしまったのか……………。

目の前で次々とクツキーが少女……神楽の口内にダイビングしていく光景に、唾然とする弓兵。勿論彼女に今すぐ止めるよう懇願した。このままでは皆の分が無くなってしまう、今日のおやつが提供できなくなってしまうと……………しかし、神楽はハムスターの様に頬を膨らせた顔を彼に向け、ふがふがと聞き取りづらい言葉で言い放つ。

『一口』つてのはな、食べ物を入れて完全に閉じるタイミングまでが『一口』なんだヨ……………。

弓兵の苦勞の結晶は、強靱な頬袋と悪魔の胃、そして凶太い神経を持ち併せた、たった一人の少女によって次々と消えていく。

ぼりぼりと長い時間をかけた咀嚼そしゃくが終わった後、神楽は口内で粉碎されたクツキーを

一気に飲み込む。

ご馳走様でしたアルと最後に言い残して、神楽は少し残ったクッキーを掌に乗せると、更にそれを摘みながら膨れた腹を抱え食堂を後にした。

……あの後、空カラになった数枚の鉄板の前に、弓兵は沸き上がる虚しさを抑え、心に固く決意した。もう見知らぬ誰かに「一口どうぞ」なんて、迂闊に言つてはいけないな、と。

「わ〜あ！すつ〜い！」

自慢げな様子の子の神楽の周りをくると回りながら、アストルフオは様々な角度からおにぎりを観察する。自分よりも大きなその姿を離れた場所から警戒していたフオウは、銀時の頭上に乗ったまま「フオーウ……」とたじろぐ様子を見せていた。本当、見るだけでお腹いっぱいになりそう。

一方こちらでは、たまがお登勢の側から離れ、段蔵のいる長椅子へと近寄っていく。彼女の存在に気付いた段蔵は作業を一旦止め、軽く会釈をした。

「失礼致します。段蔵様……で宜よろしいのですよね？私はお登勢様の経営されている階下のスナックで働いております、機械かたくりの『たま』と申します。先程は不埒な方々に絡まれているところを助けて頂き、本当にありがとうございました。」

「そう畏まるのはお止めください、たま殿。段蔵は貴女を侮辱した輩が素直に許せないと感じたために、行動を起こしたに過ぎませぬ。」

「ですが段蔵様……………それでも私は、とても嬉しかった。危険を顧みずかへりに私を庇ってくれた貴女に、幾らお礼を申しても足りません。段蔵様、私は出来る限りの事は尽くしますので、何をしたら貴女へのお礼が出来るでしょうか？」

「お礼などと、そんな……………そうですね、それでは一つお願いがございます。」

一考の末、段蔵はたまへと体の向きを変える。そしてきよとんとしている彼女の両手を取り、微笑んだ。

「たま殿、よろしければこの段蔵と良き友人になつていただけませんか？我らは絡繰である前に、一人の女性でもあります……………実は恥ずかしながら、同性の友人というものに憧れを抱いております……………このようなことしか考えつかないのですが、いかがでしょうか？」

仄かに頬を染め、段蔵はたまの顔色を窺う。丸く見開いた瞳を数回瞬きさせた後、たまもまた段蔵に対し、柔和に微笑み返した。

「……………ではカラクリ同士ということで、私達二人のことを『カラ友』と呼ぶのはいかがでしょうか？段蔵様。」

「カラ友……………それは素敵です！ええ、とても！それではどうか、今後より畏まらずにお

呼びくださいませ。たま殿。」

「そうですか……ええつと、では失礼して………段蔵さん、と。そうお呼びさせていた
だきますね。」

和気藹々とする二人の間には、華やかな空気が漂っている。新八に包帯を巻き直して
もらいなら、藤丸がその光景を微笑ましく眺めていたその時、お登勢が横から声を掛け
てきた。

「藤丸、つていったね。怪我の具合はどうなんだい？」

「はい、何とか平気みたいです………すみませんお登勢さん、部屋まで貸してもらった上
に食事まで用意していただけるなんて。」

「若いモンが遠慮なんてするんじゃないよ、ここは偶たまに酔いつぶれた客を寝かせとく以
外、殆ど使つてなかったからね。それと、アンタの着てた服についた血も洗濯して大分
落とせたから、明日にや返してやるよ。」

「本当に何から何までお世話になつて、ありがとうございます………それじゃもしかす
ると、僕や藤丸君が着てるこの着物も、その酔つたお客さんの為に用意していたものな
んですか？」

ひらつかせた袖に目を落としながら、新八は何気なくお登勢に問う。するとテーブル
にお盆を置いた彼女の体が、ほんの一瞬だけ止まったように思えたのを、離れた所にい

た銀時は気がついた。

「……いや、そいつはアタシの『旦那』のもんだよ。仕舞いつ放しにしても虫に食われちまうからね、時たま日干ししたりなんかもしてたんだけ。」

そう語るお登勢の穏やかな口調を、上げた面おもての目に宿る光を、銀時はよく知っていた。しかし幾らこちらが覚えていても、彼女が自分に向けてくれたというそれらの記憶は、今は形も無いという事実の虚しさも同時に痛感し、心が少し痛くなる。

だがそんな心境は、お登勢の発した信じがたい一言により、瞬時に驚愕へとすり替わった

「ま、年中お天道様の出ないこんな国じゃあ、日干しつたって形だけみたいなものだけだね。」

「……………え？」

藤丸も、銀時も、その場にいた全員が仰天した。

……否、全員というには語弊がある。性格には桂と高杉を除いた面々である。誰とも目を合わせることなく俯いた桂の遙か背後では、高杉がいつの間にか奥の障子窓へと移

動し、開いた片側から外を眺めていた。

「年中太陽が出ないって………おいババア、そりやどういことだよ!!」

「あーもう来た時つから五月蠅い奴だね!原因なんざアタシが知るワケないだろこのクソ天パ野郎!!」

「銀ちゃん銀ちゃん、動揺するのも分かるけど少し落ち着こ?ハイ深呼吸さ。」

アストルフオに宥められ、一旦沈静化を図るべく、銀時は大きく深呼吸をする。相変わらず頭上に乗ったままのフォウもつられて同じ動作をしていたため、張り詰めた空気が僅かばかり綻んだような気がした。

「……で、本当なのか?この街が、江戸が太陽の昇らねえ国になっちゃったつてのは。」
「アンタ知らないのかい?この江戸の空はね、随分と前から暗闇に覆われているんだ。詳しい話なんて何も伝わってきやしないから、どうしてこうなっちゃったかなんて誰も知らない。晨夜の区別もつかない程に、年がら年中夜の帳とぼりに覆われちゃってるのさ………いつからかね、この江戸が『常夜の国』なんて呼ばれ始めたのは。」

淡々と語るお登勢の言葉に、皆開いた口が塞がらない。そんな中、一つ確信を得た藤丸は、腕に装着したままの通信機へと目を落とす。

外を歩いていたら時に確認した時刻、そして今のお登勢の話が本当であれば、この通信機にどこも不備は無い筈なのだ。しかし同時に、新たな疑問が湧き上がってくる。仮に

そうであるなら、何故カルデアとコンタクトを取ることが出来ないのだろうか？もしかすると、原因は他にあるのではないのか……？

眉間に皺を寄せ、考えられる可能性や憶測を推理していたその時、張り詰めた空気の中にたまの声が響き渡った。

「あの、お登勢様……そろそろ開店の時間が迫っています。」

部屋の壁に掛けてある時計を見上げ、たまが言う。二本の針はもうすぐ、18時を示そうとしていた。

「おやいけない、そろそろ戻らないと客が来ちまうね……それじゃアンタら、すぐ下は店なんだから、騒ぐんじゃないよ。布団は押入れの中に入ってるので全部だから、足りなかったらその椅子でも使っとくれ。それと台所にある茶あやら何やら、飲みもんは好きにいいけど、食器はちゃんと洗うんだよ。いいね？」

いくつかの注意を告げた後、お登勢は桂から松陽の着物を受け取ると、たまと共に玄関へ早足で向かう。草履の鼻緒に指を通した時、ふとお登勢はあることを思い出し、こちらを見る銀時達を振り返った。

「あ、そうそう。真夜中じゃ絶対に窓を開けるんじゃないよ。『化け物』が入ってくるかもしれないからさ。」

『化け物』……？おい、それって——」

銀時の問いも扉を開け放つ音に消え、二人は慌ただしくその場を後にする。外階段を降りる音が徐々に小さくなっていくのを聞きながら、残された一同は呆然とするしかなかった。

「……行っちゃいましたね、お登勢さん達。」

『「化け物」ねえ………なあツラ、今ババアが言つてつたヤツつて、もしかして俺達がお前らと出会つた時にやり合つた、あの気味の悪い連中のことか?」

「ツラじゃない桂だ。恐らく、それで間違ひはないだろうな。奴らが何者なのかも、何処から湧き出しているかも未だに不明だ。現在確認されている三種の個体にはそれぞれ名前がつけられているようだな、布を被つた奴が『元興寺』^{がごぜ}、鬼面のような顔の女は見たままの『般若』^{はんんにや}、そしてやたら数のいた小鬼は『魍魎』^{もうりょう}などと主に呼ばれている。」

「あつ??ツラさん。そういえば俺、さっきの騒ぎの中で誰かが話してるのを聞きました。化け物は天人を襲わないって??。」

「ええっ!?!ツラ君、それホント!?!」

「ツラじゃない桂だ。その話は恐らく本当だろう、だが連中が天人を襲わない理由までは俺にも分からん。いずれも奴らは生者を襲い、その血肉や生き肝を^{えぐ}抉り喰らっているらしい。」

「生き肝………。」

桂の説明の一部を呟いた藤丸の脳裏に、あの助けを求めて縋ってきた女性が蘇る。

半開きの口から零れた喀血が、頬を伝う感覚をまだ鮮明に覚えている。胸から突き出した魔物の手、女性の心臓と思しきモノを掴んだそれが引き抜かれると、たつた今日の前で絶命した彼女の抜け殻となった身体が、糸の切れた操り人形のように崩れていった。

あまりに唐突だった為に、対応出来なかつた。その言い訳は紛れもない事実であつたが、やはり藤丸は心中で悔いていた。あそこで狼狽などしなれば、もう少し早く動けたのではないのか……止まない後悔の雨に、自然と顔が険しくなっていく。

そんな時だった。隣に座つていたエリザベートの肘が、藤丸の腕に軽くぶつかる。彼女を見ると、少し頬を膨らせた様子でこちらを睨んでいるようだった。

「素敵なディナーを前にしてるっていうのに、なんて顔してんのよ。仔犬。」

「エリちゃん……。」

「ま、アンタが何を考えてるかなんて、見抜くのは簡単だけどね。いつもすぐ表情に出ちやつてるし、本当分かりやすい子。だからいっつもババ抜き負けるのよ。」

「え、俺が勝てない原因つてやつぱそれ？」

「本当に無自覚だつたのね、仔犬……。ともかくよ、もし今仔犬が自分の事を責めているのだとしたら……貴方はちつとも悪くない。だって、仔犬は自分の危険も顧みず（かへり）に行動を起こしたんだもの。それつてとっても勇気が無いと、まず出来るものではないで

「しよ？それでも、とても残念な結果で終わってしまったのだとしても……マスターが命を懸けてまで救おうとしてくれたことには、何ら変わりないのよ？」

「エリちゃん……でも、俺——もがっ！」

開きかけた口に飛び込んだものに、藤丸は咳き込みそうになる。仄かな塩味のある物体を一旦口から離して確認すると、それは皿に乗っていたあのおにぎりであった。

「とにかく、まずは栄養と休息を充分に取りなさいな。お腹が減ってちやパワーも沸いてこないわよ。あつそうだ、仔犬の元気が早く回復できるように、アタシが一曲歌ってあげましょうか？」

満面の笑顔の彼女の申し出に、藤丸は全力で首を横に振る。だが同時に、心の中にわだかたま蟠っていたものが僅かに綻んだような気がした。

ぐう、と空腹を知らせる音が室内に響く。説明を続けていた桂も、彼の話に耳を傾けていた面々も、その音を鳴らした張本人へと視線を向ける。

「あく、ずりいぞ藤丸。銀さんを差し置いて抜け駆けするなんざ十年早いぜコノヤロー。」

「フオウ、フオウフオウツ。」

「早く食おうぜ、私もうお腹ペコペコアル。」

「わうう……。」

「でも、確かにお腹が空いたような感じしますね。ダヴィンチちゃんさんには、サーヴァントはご飯を食べることも、寝ることも必要ないって僕らは聞きましたけど……。」

「新八殿の仰る通り、サーヴァントは魔力の補給さえ受けることが出来れば、食事や睡眠・排泄等を行う必要はありません。しかし食事を摂ることによって微弱ながら魔力を回復することも可能ですし、それに味覚から伝わる快感を得て、気を休めることにも繋がります。」

「ああ、もしかしてさつきツラに食わされたんまい棒で、俺の魔力が回復したのもそういうこと？」

「ツラじゃない桂だ。それだけではないぞ、あれはそこに俺の魔力を吹き込んだ特注品でな、一本で魔力をほぼフル回復できる代物となっている。一本で充分、これが本当の一本満足というやつだな。」

「……まあ、段蔵は絡繰ですので、食べるといった行為を行うことが出来ませぬ。仕方ないことではありますが……少しだけ、侘しきわびのような感情が働いてしまいますね。」

一通りの解説の最後に、寂し気に笑う段蔵。そんな彼女の隣には、たまの持つてきたあの赤いポリタンクの姿があった。

「ね〜段蔵ちゃん、さつきから気になってたんだけど、それ何？」

「ああ。こちらは先程、たま殿から頂いたものです。機械からくりの彼女が唯一口に出来るもの

「……………ああ、好きにしろ。」

素っ気ない返事はいつものこと、それを重々承知している桂は新八に続いて台所へと足を向かわせる。

……離れていく足音を背中で聞きながら、高杉は開けた窓から紫煙を吐き出す。深碧しんぺきの右目が見上げるのは、江戸の街を覆い隠す暗夜の空。星一つ存在しない漆黒を彩るのは地上からの灯りと、飛び交う宇宙船の照明。

するとそんな暗い空に、一本の光の筋が出現する。歪いびつな直線となつて伸びていったそれはある程度の辺りで伸長を止め、中央部からゆっくりと左右に開いていく。

それはまるで、見開かれる『眼』まなこのように——

「ス〜ギつち！君もこつちに来ておにぎり食べようよ！」

相変わらず空気の読めない、ポンコツさの滲み出た快活な声で呼ばれる。

振り返らずとも声の主は分かる。だが相手は理性が蒸発しているの、ここで振り向かないと何をしてくるか分からない。仕方なく首を後ろに回すと、案の定目を輝かせたアストルフオが、両手に其々おにぎりを構える態勢をとっていた。

「あのな、さつき段蔵も言ってただろうが。サーヴァントは食うことも寝ることも要らねえ、だから俺には食事なんざどうでもいいんだよ。食いたきやお前らで勝手に——」

「何なに？アストルフオ、どうしたアル？」

「あく神楽ちゃん。スギつちがね、おにぎり食べたくないって。」

「あんだとお!! スギつちてめエ、アタイの握った飯が食えねえつてのかい!! ええつ!!」

新たに加わった神楽までもが、アストルフオと同じようにおにぎり（やたらとデカイ）を構え、こちらを睨めつけてくる始末。

戦闘力に長けた高杉といえど、サーヴァント二騎……しかも片や夜兎族を一気に相手取るとなれば、骨が折れるどころでは済まないだろう。このままだとあのおにぎりとは名ばかりの米で出来た弾丸を、どこに捻じ込まれるか分かったものではない………黙考の末、半ば諦めモードとなった高杉は、彼女らへの返事代わりに大きく溜め息を吐いた。

高杉が視線を外している間に、空に描かれる光の筋は徐々に広がっていく。

やがて完全に開ききった時、『眼』は淡い光で闇夜を照らす光となって、江戸の空へと

その姿を現した――。

《続く》

【参】常夜の国（IV）

「さて、皆ちゃんとは手は洗いましたね？それじゃあ……もう神楽ちゃんっ！まだ触っちゃ駄目だよ。銀さんも、今から挨拶なんですから少し我慢してください。全くだい人だつてのに……あつこらアストルフオさ——アストル——アス——もうっ！フェイントかけて遊ばないでっアストルフオさん！ああ藤丸君、今食べられるからね、ほら涎拭つて……ふう、では皆さん手を合わせまして、いただきます！」

「「いただきますっ！」」

皆が犇めきあつた居間に、食事開始の挨拶が響き渡る。それを合図に、米の甘い香り漂うおにぎりに、次々と箸と手が伸ばされていった。

「つたく、いちいち挨拶なんていいだろうがよく面倒臭え。」

「駄目ですよ、食事の挨拶はきちんとすること。僕が小さい頃、姉上によくそう教えられましたから。」

「ご立派です、新八殿。段蔵も初代風魔頭領様に母役を賜つていた時は、何事にも挨拶は肝心と教授したものです。」

「うむ、二人の言う通りだ。それに比べて銀時、貴様は形ばかり大きくなくても肝心の中身はちつとも変わらん。昔もそうやって挨拶も碌ろくにせず我先にとがつついて、しよつちゆう先生に叱られていたではないか。」

オイルを堪能しながら頷く段蔵に合わせ、うんうんと首を動かす新八と桂の態度に、銀時は顔を渋くする。

「ちつ、うるせえな。全くてめーは昔つから、そういう余計なことはしつかりと覚えてやがんだからよ。」

取り皿に適当に選んだおにぎりを数個乗せ、銀時は床へと腰を下ろす。人数が多いのに対して長椅子が二つしかないため、何人かは床で食べる羽目になってしまうことになったが、これはこれでピクニックみたいで楽しいと、銀時と新八の間に座った藤丸は少しうきうきしていた。

「んく美味しいアルっ！動き回った後の飯はまた格別ネ。」

「わうっ、はむはむはむっ。」

自分専用の特製巨大おにぎりを口いっぱい頬張る神楽の後ろでは、定春が同じもの（こちらは具無し）にがつついている。するとそこに、てちてちと歩み寄ってくる小さな生き物の姿が。

「フオウッ。」

「うう……？わふつ、わんわんつ。」

じいつと見上げてくる円つぶらな瞳が訴えるものを直ぐ様理解した優秀な定春は、自身のおにぎりを少しだけ千切ると、それをフォウの前に置いてやつた。彼にとつては一口分にも満たない量であるが、身体の小さなフォウにとつてはこれで充分すぎる程。

「キュツ、フォウフォウツ。」

ありがとう、と礼を言ったのであろう。フォウが白米を美味しそうに食べ始めるのを確認してから、定春も食事を再開した。

「ねえ仔兎、このライスボールの中身はそれぞれ違うんでしょ？何が入ってるのか教えてちょうだい。」

「おうよ。まずここに並んでんのが梅で、こここのワンコーナーが鮭ネ。そしてこつからここがツナマヨで、あとここ全部が昆布アル。」

「ん、やっぱり文章だと読んでる人たちにイマイチ伝わりづらいよなあ……あれ？神楽ちゃん、昆布の下にあるのは何？その海苔が巻いてないヤツ。」

「えーと……あれ、何だっけ？でもきつと美味しいヨ、はいっ。」

皿に乗せられたそのおにぎりを手渡され、藤丸は「ありがとう」と礼を言って受け取る。何の変哲もない白むすびを暫ししば観察し、後で食べようと藤丸は皿を膝の上に置いて、前回の話でエリザベートに口に突っ込まれた、あのおにぎりから先に頂くことにし

た。

まだ灰かに温かい白飯を、海苔と一緒にがぶつと一口。ほんのり感じる塩味を堪能しながら、ゆつくりと数回咀嚼そしゃくしていくと、舌が先に捉えたのは香ばしさの後に続くマイルドな塩気……うむ、これは鮭だな。しかも鮭フレークではなく、焼いた鮭の骨を取り、更にそれを丁寧ほぐに解したものだ。噛んでいくうちに広がる米の甘さと鮭の味とがバストマッチしていて、何かもう、うん。

「……美味しい。」

それでいい、小難しいことなど考える必要はない。本当に美味しいものは、食べた時点で美味しいという言葉しか出てこないものなのだから。藤丸はまだ会った事がないけれど、どこかの母ちゃんが言っていたようにしっかりと二十回噛んでから嚥下えんげする。そして新八の煎れてくれたほうじ茶を啜れば、お腹も胸もほっこりと温かくなった。

「ねえねえスギっち、どれ食べた？僕が取ってあげるよ。」

「あ？俺あ別に何でも……大して魔力も減っちゃいねえから、別に今更補う必要なんてねえしな。」

「えー、それじゃあ僕が勝手に選んじやおつと。ど〜れ〜に〜し〜し〜よ〜う〜か〜な〜つ？うん、コレに決〜め〜た〜っ！」

アストルフオが差した指が止まったのは、神楽が藤丸にチョイスした例のおにぎり。

これでは足りないだろうともう一つおにぎりを選び、お新香と一緒に丁寧に皿に盛ると、向かいの長椅子に座る（というより座らされた）高杉の前にそれを置いた。

「はいスギっち、どぞぞっ！」

キラキラとしたオーラが周りに飛び交うほどの、アストルフオのとびつきりスマイル。彼に熱意を注ぐあのカルデア職員がここにいたのなら、恐らく……いや確実に、歓喜の涙と鼻血を流して卒倒しているだろう。

この愛らしい笑顔を向けられている者は、超のつく程のハッピー野郎……と言いたるところだが、そのハッピー野郎である筈の高杉はというと、相変わらず目も合わせない。その態度の塩^{しよ}つばさときたら、さつき藤丸が口にしていたあの鮭以上と言っても過言ではない。それにアストルフオへの礼の言葉も、「おう」と一言だけ。

「こら高杉、何だその熟年夫婦の旦那のような愛想も素気のない返事は。アストルフオ殿に礼くらいちゃんと言わんか。」

「あつはは〜いいんだよツラ君、僕が好きでお節介焼いてるだけだもん。」

「おうおう、いいねえ色男は何もなくても勝手にモテてよ。だがなアストルフオ、あまりそいつの隣に立たねえほうがいいぞ。何せお前と並ぶと身長の低さが露骨に分かつ

べらべらと好き放題喋り続ける銀時だったが、高速で飛んできた何かが顔面に直撃

し、勢いのままに仰向けに倒れていく。隣に座る藤丸と新八が見下ろした彼の二つの鼻穴には、真つ赤なチヨロギが突き刺さっていた。

え？チヨロギを知らない？チヨロギというのはシソ科の多年草植物で、漢字だと『丁呂木』などと書かれたりなどもする。球根の様に見える塊茎部分が食用とされており、主に梅酢や紫蘇しそで漬けたりなどして食べられる。ピリツとした辛みと食感が何とも美味いぞう。（W○k i 調べ）

まあチヨロギはさておき、アストルフオの眩まぼゆい笑顔と床に転がって豚の様にふがふがと鳴く銀時を交互に眺め、高杉は彼の選んだ一つ目のおにぎりをおへと運ぶ。二、三回と噛んだ時、高杉は齧かじった面から中身を確認した。

「…………ツナマヨか。」

ぼそりと呟いた声は、隣に座る桂の耳にも届く。こちらを向いた彼の口元は、緩く弧を描いているようだった。

「ふふ、まさかアストルフオ殿が適当に選んだものがツナマヨであつたとは……………思ひ出すな、昔のことを。」

「てめえが神社に供えていつた握り飯のことか。今だから言うが、握る時はあまり水を手につけるもんじゃねえぞ。あの後食つてる最中にぼろぼろ崩れだして、終いに着物が汚れちまつてエライ目に合つたんだからな。」

「供え物を勝手に食べておきながら文句を垂れるな。それにあれば、俺が握ったのはなくお婆が……………いや、もう当に過ぎたことを今更言つても仕方ない。」

少し寂し気に微笑み、桂はおにぎりへ手を伸ばす。彼が選んだのは、嘗て好物を自称していた梅……………ではなく、高杉が今食べているのと同じツナマヨ。一口食^はんで咀嚼した後、静かに飲み込んでから口を開く。

「……………うん、たまにはツナマヨも悪くない。」

小さく零した眩きに、高杉はくくつと低く笑う。そんな二人のやり取りを暫く眺めていたアストルフオは、朗らかに微笑んだ。

「さて、僕も食べよつと。あくむつ……………ん!!んんんっ酸っぱいイイイイー!」

何も考えずに選んだものは、どうやら梅干しだった模様。口内にじわじわと広がっていく独特の酸味に口は自然と窄^{すば}み、アストルフオが冷や汗を流しながら顰^{しか}めつ面になると、どつと皆から笑いが起こった。

「あれ? 神楽ちゃん何してるの?」

新八はふと、神楽が自分のとは違う皿に、せつせとおにぎりを乗せていることに気がつく。声をかけられた神楽はこちらを向き、につこり笑顔を見せた。

「これね、松陽の分アル! 起きた時にお腹空いてたら可哀想だから、少し寄せとくネ。」

「先生の……………そうか、リーダーは優しいのだな。」

「何だよツラあ、今更知ったのかテメー。それより松陽はどの具が好きなんだヨ？早く教えるヨロシ。」

桂の湛える笑顔に少しむつとしながら、神楽は丁寧な箸使いでおにぎりの側にお新香を添えていく。

「神楽、お前随分と松陽のこと気に入ったみてえじゃねえか。」

「うん！銀ちゃん、私松陽大好きアル！目が覚めたらいろんなことお話したいし、いろんなことして遊びたいヨ。記憶を失くしちやつてる松陽に、これから楽しい思い出をいっぱい作ってあげたいアル！」

あまりに屈託の無い笑顔と神楽の言葉に、面食らった銀時の表情も少しずつ綻んでいく。

「そっか……。」

短く返し、銀時は大皿へと手を伸ばす。拵んだのは、海苔の巻いていないあのおにぎり。

綺麗に形作られた三角形の握り飯を見つめ、ふと脳裏に浮かぶのは、幼き頃の記憶の断片。

『なつ、なれなれしくすんじゃねエ！』

『誰の応援してんだ!! そいつ道場破り!! 道場破られてんの!! 俺の無敗神話ぶち破られてんの!!』

『もう敵も味方もないさ。さっ皆でおにぎり握ろう!』

道場破りに何度も来た、生意気な奴に負けたのに。

無敗の記録をぶち壊されて悔しい拳句、訳の分からない奴に絡まれて苛ついていた筈なのに。

『あ、すみません。もう食べちゃいました。』

あの人の笑顔に、声に応えるようにして……気がつけばその場にいた全員が笑っていたのを、今でもよく覚えていた。

手に掴んだままの白むすびを暫く眺めた後、銀時は漸くそれに齧りつく。

「……………うん、美味エ。」

零した言葉と対称に、握り飯に落とす彼の目は寂しげなものであった。彼を見ていた藤丸と高杉も、自分の皿に乗った同じ白むすびを手に取り、同時に一口食んだ。

「ダイナゴンツツツ」

直後、悲鳴にも似た奇怪な声と共に、ブハアツ!!と藤丸の口からモザイク修正のかかった何かが飛び出す。

「ぎやつ!!ちよ、ちよつと仔犬!!」

「藤丸君!!だ、大丈夫!!」

床に倒れびくびくと痙攣する藤丸に、すかさず駆け寄るエリザベートと新八。長椅子のほうでは、高杉が口元を押さえ肩を戦慄わななかせている。

「わくんスギつちまで!大変くしつかりしてっ!」

「どうしたのだお前達、一体何が——」

狼狽し立ち上がる桂の視界の下で、高杉の震える手があるものを指差す。その先にあるのは、今しがた彼が口にしたあの白むすび。これがどうしたのだと覗き込めば、桂の顔色もすぐさま変化していった。

「な……………何だ、これは?」

——その物体もの、白き飯しろめを纏まといて陶器の野に立つべし。煮込まれた甘き小豆との絆を結び、ついに人々を甘美の地に導かん。

どこかの風の谷の言い伝えのようなナレーションが、齧りかけのその握り飯を見た者達の脳内に自然と流れてくる。

え、分かりにくい？簡単に要約するとううだ……そのおにぎりの中には、甘くい餡子がぎつしりと詰まっています、ということ。

「あ、思い出したアル。ババアとおにぎり作ってる時、銀ちゃんは甘いのが好きだって私言ったヨ。その後ババアがゴソゴソやってたけど、アレはこのおにぎりを作ってたみたいアルな。」

「そーかそーかよく言ったな神楽ア、やつぱおにぎりは餡子入りに限るぜ。ったくこの味が分からねえなんぎ、これだから舌の肥えた現代つ子とボンボンときたら。」

片手で神楽の頭を撫でながら、銀時は餡子のぎつちり詰まった件くだんのおにぎりを何の躊躇いもなく食べ続ける。信じがたい光景に唾然とする一同、あの楽天家なアストルフオでさえも理解が追いつかず、もつしやもつしやと餡子入りおにぎりをご満悦顔で頬張る銀時を二度見、三度見した。

「現代つ子とボンボンでなくてもこんなん食えるかああアアつ!! おかしいのは100%アンタの味覚だこの糖尿寸前野郎っ!!」

「高杉、とにかく茶だ!上から出せなければ茶を飲んで押し流せ!」

「お、おはぎと思つて食べれば何とか………うつぶ。」

「駄目よ〜仔犬!無理してまで食べようとしてんじゃないの!ほらペツてしなさいペツて!」

目の前の喧騒を完全な他人事のように眺めていた銀時だったが、ふとおにぎりを口に運ぶ手を止め、素直に浮かんだ疑問を零す。

「……………そういやババア、俺の事覚えてねえと言つときながら、何で『いつもみたいに』握り飯に餡子なんて入れてんだ？」

* * * * *

「……………まったくアイツ等、静かにしろつたのに。」

ミシミシと音を立てる天井を見上げ、お登勢は大きく溜息を吐く。開店したスナックの中にいた数名の常連客も、いつもと違う状況に目を丸くしていた。

「才登勢サン、本当ニアンナ得体ノ知レナイ連中、上ニ泊メテ平気ナンデスカ？デカイ犬ダツタリ天パダツタリ胡散臭イロン毛モイタリ、アトデカイ角ト尻尾ノフリフリ女？頭ニオプシヨンツケテルトコトカ私トキヤラ被ツテマセン？」

「被つてるところかーミリも掠つちやいねーよ。確かに見た目は奇抜な奴らだが、あいつらはチンピラからたまを助けてくれたんだ。悪く言うもんじゃないよ、キャサリン。」
「そうですキャサリン様、あの方々を悪く言うのであれば私が許しません。それに外見のインパクトであれば、間違いなく貴女を超える方はいないでしょう。」

「オウオウたま、言ウヨウニナツタジャネーカ。後デ店ノ裏ニ来ナ……デモソウ言ウオ登勢サンダツテサツキ、恩人ニ食ワセルオニギリニ餡子ナンカ入レテタジャナイデスカ？アンナ嫌ガラセ、中々思イツカナイデスヨ。」

「アレかい？あれは一緒に握り飯作らせたあの小娘が、天パ野郎がかなりの甘党だつて言つたのを聞いて……………」

そこまで言い掛けた時、お登勢は自身の行動に疑問を抱く。いくら甘党だからといって、握り飯の中に餡子を入れるなど普通はしないし、今までやったこともない。だが先程あの少女と食事の支度を行っていた際、何の違和感もなく台所にあつた小豆缶へと手を伸ばしていた。まるで自分の中で、『そうすることが当たり前』であるかのように――

「…………はて、私や何であんなことをしたんだろうね？」

ほつりと呟いたお登勢に答える者はおらず、たまとキャサリンは不思議そうな顔を互いに合わせた。

* * * * *

「ふう、お腹いっぱいアル。」

膨れた腹を抱え、長椅子に横たわる神樂のだらしく開いた口から、ゲフツと嘔おぐみが零れる。

部屋の隅では満腹になった定春とフオウが、丸くなり寝息を立てていた。

「ほら神樂ちゃん、皆座るんだから起きてよ。」

「んあ？新八イ、今から何しようってんだヨ。私はお腹の中の消化作業中で忙しいアルよ。」

「消化作業って、ただ寝転んでるだけだし……これから皆で話し合いをするって、さつき桂さんが話してたの聞いてなかった？」

「おう、原稿ページ10枚目にして漸く時が進むアルか、このままおにぎりを食べるだけのほのぼの回で終わるかと思ってたヨ。」

「それで終われたら書いてるほうも楽出来っけど、ストーリー進めねえといけねえだろ。」

ほら早く退いた退いた、俺と新八が座れねえじゃんか。」

銀時に急かされ、やむなく身体を起こす神楽。空いたスペースに腰を下ろした銀時が^{おもて}面を上げると、ちょうど向かいにエリザベートとアストルフオに挟まれる形で藤丸が座っていた。神楽と同様に膨れた腹を^{さす}摩っていた彼だが、銀時の視線に気付くと、へつと小さく笑う。

「よう藤丸、飯は美味かったか？あのババア口は悪イけど、飯は一品なんだよ。」

「うん、美味しかった。あの餡子入りは正直驚いたけど、あれ？意外とアリかな？なんて途中から思い始めてきちゃったし……。」

「ふっふっふっ……ようこそ糖分愛好連盟へ。お前と俺でメンバーは漸く二人だ、歓迎会としてケーキバイキングにでも行くか？」

「ちよつと白モジャ、アタシらの仔犬^{マスター}を糖尿予備軍に引きずり込まないでくれない？まだ未来ある若者なんだからね。」

「そうそう、二人でケーキバイキングなんてズルいよ！だったら僕も糖分愛好連盟に入るから連れてって！」

「やったね銀さん、これで三人だ！」

「って何仔犬までノつちやってんのよ!!ズルいだったらアタシもそのスイーツ連盟に入るウ！」

お約束のぐだぐだな空気が流れ、文字数が余計に加算されそうになっていたその時、桂の咳払いが室内に響いた。

皆の視線が一箇所に集中する。そこには引つ張り出した予備の椅子に座る桂が、どこからか取り出した大きな紙をテーブルに敷いていた。高杉はというと、また先程の障子窓の側へと移動しており、食後の一服に煙管を吹かしているようである。

「えー、そろそろ始めても構わないか……？ではこれより、現状の確認と今後についての討議を行いたいと思う。ええと筆はどこに……」

「桂殿、もし書記が必要でしたら、せんえつ楷越ながら段蔵が承りましょうか？筆はこの通り、利き手に専用筆マイブラシを内蔵しております故。」

「おお、ではお願いしよう。この紙に議題や質問等を書いていってくれ……さて、何か疑問に思ったことなどがあれば、どんどん述べて構わんぞ。」

「はいはーいっ！バナナはおやつに入りますか？」

「リーダー、早速お約束の質問だな……高杉、これはどうなんだ？」

「あ？弁当と持ってきたやデザートデザートの扱いになるんじゃねえか？」

「ふむ、だそうだリーダー。」

「ふーん、じゃあバナナ一束持ってきたても、それをデザートデザートと言ひ張ればデザートデザートの扱いになるアルか？」

「え？むう、それは……高杉、どうなんだろうな？」

「いちいち俺に聞いてんじやねえよ、てかこのままだといつまで経つても本題に入れりやしねえだろ。あと一束は流石に多過ぎだ、精々一、二本にしておけ。」

「ねくスギつちもこつち来て座ろうよ。ほらココ、僕の隣空けとくからさ。」

「やなこつた、てめえらとの馬鹿騒ぎに立ち交ざるつもりなんざねえ。」

高杉の冷たい返答と態度に、むうくとアストルフオは頬を膨らせる。彼が拗ねている傍らでは、段蔵が今の質問と回答をせつせと紙に記入していた。

「いやいや神楽ちゃん、ここはバナナより第一に聞かなきゃならないことがあるでしょ……あの、お二人の知っている範囲だけでも教えてくれませんか？今この江戸で、一体何が起きているのかを。」

新八の質問により、緩みかかっていた場の空気が一気に引き締まる。すると桂はおもむろに椅子から立ち上がると、高杉のいる障子窓へと近付いていく。

「そうだな……だが俺が説明する前に、まずは見てもらったほうが早い。江戸の、『今』の姿を。」

桂が取つ手へと指を掛けると、側にいた高杉と目が合う。暫し視線が交差した後、高杉のほうから逸らしたのを合図に、障子窓は開け放たれた。

「な……………!!」

そこから見えた景色……まず最初に目に飛び込んできたものに、銀時達は困惑する。

明かりに溢れる地上を照らすは、空高く昇った『月』——だがその形は、自分達のもよく知るものなどでは無かった。

弧を描いた対称の二本の曲線、中央部の楕円型に黒を残したそれは、夜空に浮かび上がった巨大な『眼』。

銀時達が見上げている間にも、虹彩や瞳孔と思われる黒い部分がしきりに動き、それはどう見ても生物の眼球の動きに酷似しており、それが一層異様さを際立たせていた。

「やだ、何よアレ……気味悪いわ！」

夜空を見上げたエリザベートが、忌々しげに吐き捨てる。彼女だけではない、新八と神楽、そして銀時と藤丸も、あまりの不気味さに鳥肌が立つのを感じていた。

「……そうか、藤丸君にもアレが見えているのだな。どうやらあの月の形を認識出来るのは、サーヴァントおれにた限られたわけではないらしい。」

「ツラさん、それってどういうことなんですか……？」

「ツラじゃない桂だ。今の俺が江戸こゝに現界した時には、既にこの国はこのような姿になっていた。いつまでも夜は明けず、酉の刻を過ぎた辺りから、ああして空に気色悪い月が昇る毎日だ……しかしどうしてか、街の者達の目には、あの月の姿が奇怪なものには映っていないらしい。俺も高杉に会うまでは、その事に気付かなかつたのだが……。」

「なあ、もしかして藤丸がああ月の形を俺達と同じように認識出来んのか、やつぱお前が『マスター』だから、つてのは考えられねえか？」

「ん……どうなんだろう？こんな体験、今まで無かつたからなあ。」

銀時の質問に藤丸は顎に手を添え、眉間に皺を寄せて考え込む。するとその時、藤丸の隣にいた新八が突然声を上げた。

「ん……あ、あれ？ちよつと、おかしいですよ!!」

椅子から立ち上がり、きよろきよろとせわしなく首を動かす新八の表情は、内心の動揺が露わになっていた。

「新八、どうした？」

「気付かないんですか銀さん!!よく見てください……ターミナル、あそこにあつたターミナルが、無くなつてるんです!」

新八の言葉に触発され、銀時と神楽は窓へと駆け出す。銀時が桂を押し退け、神楽の

手が高杉の頭に乗せられる形となつて、二人はそこから身を乗り出すようにして外を眺める。

この窓から見える筈の景色は、嫌でも記憶に刻まれている。立ち並ぶ家屋や店の向こうに聳え立つ、一際大きな建造物。『ターミナル』と呼ばれる巨大なそれは、正に近代化した江戸の象徴であり、その存在はここからも確認出来る……筈であつた。

しかし、今の銀時達の見開いた目に映っているものはターミナルなどではなく……嘗て、そのターミナルが在った場所に堂々と居座る、巨大な天守閣の姿。

「な……なんだよ、アレ……!!」

自分達が知っている江戸とは大きく異なっている事実には、驚きと焦りを露わにした銀時は、ただ愕然とするしかなかつた。

「……ねえパチ君、さっきから皆で言ってる『ターミナル』って何?」

「ああ、カルデアの皆は知らないもんね……ターミナルっていうのは、江戸の中心部に建てられた、惑星国家間の移動を容易にする為の転送装置のことだよ。」

「惑星国家間……転送装置……?」

聞き慣れない単語に首を傾げる藤丸達に対し、当惑する新八の後ろから桂が説明を付け加える。

「まあ、簡単に説明するとターミナルは様々な宇宙船などが発着する、言わば空港のよう

なものだ。」

「ふうん、空港ねえ……でも今あそこに建つてるのつて、どう見てもお城でしょ？まあ、アタシのチエイト城に比べたら外観も品位も劣るけど。」

「……何故ターミナルが無くなつていいのか、何故そこにあの巨大な天守が建つていいのか。残念だかその疑問に納得のできる答えを述べられる程の知識も情報も、今はまだ備わっていない。どうかその辺りは容赦してほしい、許せ。」

目を伏せ、陳謝する桂の背後で、高杉は未だ自身の頭部に乗つたままの神楽の手を払い除けている。煙管を啜えたままの彼の右眼は、天高く伸びた天守をひたすら映し続けていた。

「これで分かつただろう、銀時。ここは既に貴様……いや、貴様らの知つている江戸ではないのだ。」

これ以上は見えても無意味とばかりに、伸ばした桂の手が障子窓を半分だけ閉ざす。

暫くの間呆然と立ち尽くす銀時であつたが、やがて大きく溜息を吐くと、元いた長椅子へと戻り、再び腰を下ろす。

「銀さん……。」

「藤丸ウ……はは、本当笑えねえぜ。いきなり日常から切り離されて訳分かんねえト

コに飛ばされたと思つたら、今度は元居た世界が可笑しなことになつてゐるだなんてよ……少年漫画だつたら、毎週のはがきアンケートに割と高評価で記入してゐるストーリー展開だな、オイ。」

力なく笑い、項垂れる銀時の姿に心痛する藤丸に、彼の隣にいたアストルフオが怪訝な面持ちで尋ねてくる。

「ねえマスター、これは僕の勘なんだけど……この江戸まちも人もおかしくなつちやつたのつて、ひよつとしてまた『聖杯』が絡んでるから、なんじやないかな？」

「……うん、実は俺も少し勘づいてた。本来は靈基にいない筈の銀さん達が、こうしてサーヴァントになつて現界してゐる辺りから薄々とね。」

『聖杯』……？おい、何だそりゃ。」

「何アルかそれ？食えるモンアル？」

聞き慣れない単語に反応し、そろそろと皆が藤丸達の元へと集つどつてくる。窓辺の高杉は少しも動く様子を見せないが、どうやら耳だけはこちらに向けているようであった。

「えつと……聖杯つていうのはね、簡単に言えば願いを叶える願望器のことなんだ。アレがあれば、どんなことだつて簡単にできちゃうし、正に最高位の聖遺物と言つても過言ではない……それに聖杯の力があれば、一つの世界の在り方を歪めてしまうことだつて、容易に出来ると思う。」

「簡単に世界を歪められる、だと……そんなヤバい代物が、この江戸にあるつてののか」

「だが銀時、此度の異変が仮に藤丸君の言う、その聖杯の力によるものだとするならば、この世界の異変や人々の記憶の改竄かいざん、まして本来は存在し得ない者が存在するなど……今までの不可解な出来事に、全て合点がいくと思わないか？」

憶測を並べる桂の目が、寝室の襖へと向けられる。これまでの喧騒にも物音一つ立っていない様子から、松陽は余程熟睡しているらしい。

「……実はな銀時、先程お登勢殿がお前にとったような反応は、ここに来て初めて見たものではない。」

「は？ どういうことだよ、ツラ。」

「ツラじゃない桂だ。先程は往來の場で口を噤んでいたのだが……実は俺と高杉も、今の貴様らと同じなのだ。」

「俺らと同じ、つて……まさか——」

「ああ。俺もツラもこつちに現界した時つから、こつちの世界にや端はなから『いなかった』ことになってやがる。」

銀時の声を遮ったのは、高杉の放った信じ難い一言。煙管をしまい、おもむろにこちらへと体を反転させる彼の面には、皮肉めいた微笑が張り付けられていた。

「『いなかっただ』……………それじゃ鬼兵隊は、桂さんのいた攘夷党も……………?」

「新八君、今君の推測している通りだ……………ここではそのようなもの、初めから『無かつた』ということになっている。故に居場所も同士も失つた我らは、君達に会うまでこうして二人で行動を共にしていた、ということだ。」

淡々と語る桂の口調は、表面では冷静を保っている。だが彼の額を伝う一筋の汗が、僅かな動揺を窺わせた。

「……………。」

理解し難い推測と、受け入れ難い事実と、沈み切つた空気が重く肩に押し掛かる。

誰もが押し黙っていたその時、高杉が静かに口を開いた。

「なあ銀時……………俺がさっきテメエに言つた事、覚えてるか?」

「は? あ、ああ……………確か、俺に確認しておきたいことがあるつつつたな。部外者に聞かされたくないだとか言つてたが、一体何のことだ?」

訝いぶかしげに尋ねる銀時、すると高杉は小さく吐いた溜息と共に、ぽつりと零した。

「……………松陽先生の事、なんだがな。」

《《続く》》

かった質問がソレってどういうこと!! さつきまでのシリアス展開真つ只中だった空気返して!!」

「あ? 馬鹿なお前にや聞き方が悪かったな、それじゃこれならどうだ……: 松陽先生の裸、見たことあるか?」

「さつきより酷くなってるウウウつ!! 完全アウトな内容の質問にグレードアップしてんじやねえか!! どうしたの高杉クン、一体俺から何を聞きたいのお!! 捉え方によつてはタグ付け替えなきやいけない事案だよコレ!!」

「ええつ!! 銀ちゃんたら、松陽さんとそんなピ——な関係だったのお? 面白そうだから僕にも詳しく教えてよ〜!」

「ギャーツ!! 教師と教え子の淫行だなんて卑猥だわ! 破廉恥だわ! うら若き乙女や未成年のいる前で、何て厭いやらしいことカミングアウトしようとしてんの白モジャっ!!」

「ハイっそこ反応しない! ほら〜もう早速あらぬ誤解を招いちやつてるじゃん!! この作品はな、あくまでもギャグとシリアスと戦闘と下のネタを兼ね備えたクロスオーバー小説で進めていくつもりなんだから、あんましアブノーマルな方向に走らせようとしてんじやねえよ!!」

「で、どうなんだい銀時イ? 先生と風呂に入ったことがあんのか? 無えのか? 入ったことがあるとしたらそれはいつ頃だ……? 答えによつちや、てめえを今ここで霊核タマごと焼

き尽くすことになるが？」

銀時の胸倉を掴んで詰め寄り、殺気の籠った右眼で睨めつけてくる高杉。心なしか……否、彼の周りを漂う琥珀の蝶の数も、確実に多くなっているのは一目瞭然だ。

「わあ、綺麗アル〜。」

神楽が無邪気に目を輝かせ、ひらひらと舞う蝶の一羽に触れようと手を伸ばす。すると彼女の方へと首の向きを変えた高杉が、そちらに向かつて強く息を吹いた。直後、蝶はまるで風を受けた蠟燭の火のように、輝く身体を宙で四散させ消えてしまう。

「あ〜！スギっち何するネ!!」

「気をつけな、じゃじゃ馬姫。そいつは蝶のフリをした憎悪の焰だ。俺の機嫌次第じゃあ、指先が触れただけで骨まで残らず消し炭になるぞ。」

「んな厨二臭い要素満点のヤバイモンが常にお前の周り飛んでんの!! つかさつきより数が増え、ギヤアアアこっち来たアアア!!」

鼻先にまで接近しようとしてくる琥珀の蝶に、パニック寸前に陥る銀時。すると見かねた桂が、二人の間に仲裁に入った。

「こら高杉！俺達が銀時に確認したい内容というのは、共に入浴した事実の有無ではないだろう！」

「……ちっ。ああ、そういやそうだったな。」

高杉の手が漸く離れ、次々と消えていく蝶に銀時は安堵の息を漏らす。床から体を起こす皆の注目も、自然と彼らへと集中していった。

「まあ俺としても、貴様が先生と入浴したかについては気になつて仕方ないのだが。俺達だつて一緒に風呂呂など入つた事がないというのに、ええいどうなのだ銀時!!」

「結局オメーもそれかよ!どつちの味方についてんだツラア!!」

「大丈夫だよ銀さん、俺も小さい時は大人と一緒に入つてたし、今更恥ずかしがることないって。」

「いや藤丸、別に恥ずかしいとかそういうことじゃなくてだな……。」

「まあ、戯れはこの辺にしといてやらあ。」

「戯れだつたの!!さつき俺の事本気で殺す気だつたよなあスギつち!!」

「てめえまでスギつち呼びは止めろ、燃やすか叩つ斬るぞ。」

「よさんかスギつ……高杉。それで銀時、実際はどうなのだ?」

高杉の鋭い視線を背に受けながらも、微塵も動じることのない桂の問いに、銀時は頭を乱暴に掻きながらぶつきらぼうに答えた。

「ああ、あるよ。つつてもお前らと会うずつと昔に何回かだけだな……んで、それがどうしたんだよ?」

「……その時、先生の背中は見えたか?そこに何か、『変わったもの』は無かつたか?」

「は？背中？一緒に風呂入ってんだからそりや見るだろ、よく流してたし……背中は別に普通だったぜ。傷痕一つ無かったと思うけど……なあ、だからどうしたってんだ？」

中々核心に触れようとしてこない桂にやきもきしながら、銀時はやや苛ついた声色で彼に尋ねる。すると桂は少し考える素振りを見せた後、先程筆記に用いるうと出していた筆を手につつと、段蔵の記録する紙の空いている下部に穂先を滑らせていく。

数名が上から覗き込む中、静かに筆を置いた桂は段蔵に断りを得てからその箇所だけを裂き、完成した『それ』を皆に見えるよう掲げた。

「な……………何ですか、それ……………」

新八の声が、驚愕と別の感情で微かに戦慄わななく。驚きを隠せないのは彼だけではない。銀時も、神楽も、そして藤丸達も、そこに描かれたものに絶句する。

桂が紙に筆を走らせ、生み出したもの……………それは文字ではなく、一つの図であった。まるで何かの紋章のようなその図は、よくよく見れば何かを表している。

伸びた角つの、鋭い牙、そして二つの恐ろしい眼……………一つ一つを合わせて出来たそれを見た誰もが、『鬼』の顔を連想した。

「……先程、松陽先生の着物を着替えさせた際に気付いたのだが、あの人の背中に赤い刺青のような、この模様があつたのだ。」

「なっ……なんだって!?」

「銀時、てめえがさつき言った昔の記憶が本当なら、こんな気味の悪いモンは本来なら先生には無い筈だろ。だが俺もヅラも、先生の背中に刻まれたコレを、実際にこの目で見ちまつてんだ……こりやあ一体、どういう事なんだろうな。」

最後の眩きは誰に向けたものでもなく、高杉は大きく息を零すと、腰を下ろした長椅子の背凭せもたれに体を預け、寢室の襖へと目をやった。

「……あれ?」

と、ここで首を傾げたのは藤丸。桂の書いた絵と、自身の右手を何度も交互に見ている彼に、気付いたエリザベートが声を掛ける。

「仔犬、どうしたのよ?」

「いやあ何かさ……よく見たら似てるなと思って、アレ。」

ほら、と藤丸が上げた右手の甲には、赤く刻まれたマスターの証……『令呪』と呼ばれる刻印。彼が今しがたやったように、皆もそれと桂の絵を何度も見比べ、やがてあちこちで合点のいった者達が声を上げ、掌を拳で叩いた。

「むく……確かに、マスターの令呪と何となく似てる感じがするね。」

「ええ。色や形状など、どこことなく共通するものがあるように、段蔵も思いまする。」

「なあ藤丸、その……令呪？ つつたつけ。一体そりや何なんだ？」

「銀さん、カルデアでダヴィンチちゃんさんが説明してくれたのに、もう忘れたんですか？」

「それ、私も小難しくて分からなかったヨ。もう一回説明してプリーズ。」

「ええ……マシユやダヴィンチちゃんほど上手く説明は出来ないと思うけど、仕方ないなあ。」

銀時と神楽の要望に戸惑いながらも、藤丸はコホンと咳ばらいを一つし、やや緊張気味に説明を始めた。

「えつと、令呪っていうのはね……簡単に説明すると、サーヴァントを使役する為の絶対的命権なんだ。例えば、言う事を聞かないサーヴァントに強制的に命令に従わせたり、またはサーヴァントの戦闘力を大幅に上げたりなんて使い方もあるね。」

「ふーん……まるで奴隷につける首輪みてえだな、見えない力的なものでサーヴァントを縛ってるのか。」

「サーヴァントっていうのは、魔術世界における中で最上級の使い魔だからね。本当はその扱いもかなり難しいんだ。マスターの命令に従わないで意思のままに動き回った

り、時にはマスターを殺そうとしたなんて例もあるくらいだから……そんな大きな力を従わせる為に、こうして令呪があるんだと思うよ。」

「成程なあ。まっ、野良サーヴァントの銀さんにや令呪なんて関係ないけどね？俺的にや縛られるより縛るほうが好きだし。うん。」

「あくら奇遇だわ、アタシもそういつた加虐思考を持ち合わせているの。そつちの面ではアンタと気が合いそうね、白モジャ。」

互いに目を合わせ、ニンマリと腹黒い笑みを湛える銀時とエリザベート。色々とヤバそうなコンビの誕生に苦笑しながらも、藤丸は説明を続ける。

「まあ基本として使えるのは全部で三回、その一画一画が膨大な魔力を秘めた魔術の結晶であり、それが令呪の宿ったマスターの魔術回路と接続することによって、サーヴァントに強力な命令を下すことが出来るものだよ……ふう、こんな感じかな？段蔵、カンペありがとう〜。」

「お役に立てて光栄です、マスター。」

「カンペだったのオオオっ!!どっから導入されてたか全然分からなかったよ!」

「最初の『……』が続いた辺りで、ふと目をやった先にカンペ持った段蔵がいたもんだから。いやあ助かったよ。」

「ふむ……藤丸君、君のその令呪なのだが、俺に少し見せてくれんか？」

「え？はい、どうぞで……。」

おずおずと差し出したその手を、桂の両手が軽く包み込む。掌で令呪に触れるなどした後、桂は首を傾げて藤丸を解放した。

「ツラ君、どうかした？」

「いや……藤丸君の令呪に触れて確かめてみたのだが、これと松陽先生の背中にあるモノとは、どうも何かが違うようだ。それとツラじゃない、桂だ。」

「違うって……桂さん、分かるんですか？」

「ふふん、あなと侮るでないぞ新八君。それでも俺はキャスター魔術師として現界しているからな。魔術の心得は元より備わってはおらぬものの、通常のサーヴァントよりはこういったものを敏感に感じ取ることなど容易いものだ。」

得意げに鼻を鳴らす桂にちよつとだけ苛つきながらも、銀時は今しがた彼の言つたことの真意が気になって仕方なく、説明の続きを催促する。

「んなことより、どういうこつた？藤丸の令呪と先生の背中のソレが関係ないもんなりや、一体何だつてんだよ？」

「そこまでは俺も分からん。先程も言つたが、本来の俺は魔術師ではない。あくまで触れた時に感じた微々たる魔力のようなものを、俺の中で比べた結果に過ぎんからな……。」

ふう、と溜め息を零し、桂は頬杖をついて自身の描いた鬼の刻印に目をやる。その表情からはやや困憊こんばいしている様子が窺うかがえた。

「ふあああああ……。」

張り詰めた空気の中で、大きな欠伸が一つ。見れば、神楽が眠たげに目を擦っていた。

「神楽ちゃん、眠いの？」

「ん……腹もいっぱいになったし、それにもうくたくたアル……。」

「ふああ……欠伸うつっちゃった。確かにたくさん歩き回って戦って、僕も疲れちゃったよう。」

「……そうだな、今日はもう休むとしよう。今後のことは明日また話し合うことにするか。段蔵殿、討議の記録ご苦労。」

「いいえ、段蔵が自ら引き受けたことです。しかし桂殿、この人数で休むことになること、全員は寝室に収まりきれないのでは？」

テーブルの上のものを片付けながら段蔵が尋ねると、桂は「あつ」と声を上げ、顎に手を当てる。どうやらそちらのことにまで、頭が回っていなかったらしい。

「あふ……銀ちゃん、私松陽と寝るアル。あつちの部屋は私らが使うから、お前ら大人はここで休むヨロシ。」

「しゃーねえな、まあ俺らはまだ眠くないからいいけど……おい神楽、ちゃんと布団敷け

よ、横着して松陽の布団に潜り込むんじやねえぞ。」

「わくわく！皆で寝るなんて修学旅行みたいだね！僕行つた事無いけど。ねえねえマスタ、枕投げしようよ〜！」

「ん、今は松陽さん休んでるから、それは後日に回そうか。」

「ええ〜……一つの部屋に男女が一緒になつて休むだなんて、何かあつたらスキャンダルよ？アイドルの名に傷がついちやわないか心配だわ……。」

「大丈夫ヨ〜エリちゃん、藤丸と松陽はまず無いだろうし、残つたこの童貞眼鏡も夜這いなんて大それた真似、起こすほどの度胸も根性も無いアル。」

「失礼な奴だな君はアアっ!!僕だつてその気になれば夜這いくらい——あつ嘘、嘘だよエリちゃん、だからその槍をこつちに向けな、ギャアアアごめんなさいごめんなさい!!出来もしないことを二度と大口叩いたりしませんからアアアアっ!!」

必死に逃げ回る新八と、それを追いかけるエリザベートの二人が繰り広げる追いかっこ。目の前で繰り広げられるドタバタ劇に笑つていた銀時だったが、ふとどこからか視線のような気配を感じ、周りを見回す。

すると今居間と廊下を繋ぐ間にある扉が、僅かばかり開いているのを見つけた。

「……………ああ?」

その隙間から顔を出し、怪訝な顔で様子を窺うも、目の前には玄関までの暗い廊下が

広がっているだけ。

「銀さん、どうかした？」

「藤丸……いや、今なんか………やっぱ何でもねえわ。」

まだ疑念の心は晴れていないものの、とりあえず気のせいだと思うことにし、銀時は扉の取っ手に手を掛ける。

「………気のせい、だよな。」

もう一度、自身にそう言い聞かせるように呟いて、銀時は扉をゆっくりと閉めた。

* * * * *

——藤丸は、夢を見ていた。

頬を撫ぜる冷たい風と、子ども達の声に目を開けると、山間から覗く夕日に照らされ

た河原の道を、一人の大人と数名の幼子達が歩いてるのが見えた。

彼らが囲んでいるその大人は、亜麻色の長髪を風に靡かせ、遠目だと性別が分からない。いずれも子ども達はその人物から離れることはなく、絶えず楽し気に話しかけている。

その賑やかさから少し離れたところを、一列になつて歩く子どもが三人。

先頭の幼子は高い位置で結わえた長髪を揺らし、その後ろのきちんとした身なりの子どもは鋭い切れ目で前を見据え、そして一番後ろにいる少年は、眠たげな様子で歩を進めている。彼の頭髪は他の者達とは明らかに異なり、ふわふわとした銀色の髪が、夕日を受けて煌いていた。

……何故だろう。俺は、この子達を知っているような気がする。

彼らの遙か後方を歩きながら、藤丸は直感的にそう思う。

すると、銀髪の少年が急に立ち止まり、おもむろに振り返る。二つの緋色の瞳は、真つ直ぐにこちらを見上げていた。

「、——」。

ぱくぱくと動く口、そこから声となった音は、聞こえない。

茫然としているうちに銀髪の少年はそっぽを向き、他の子ども達と空いた距離を埋めるように、前へと駆け出していく。

いつの間にか、藤丸は足を止めていた。

少しずつ遠くなっていく小さな背中を、彼らの姿をただ一人見つめる藤丸の横で、夕日は山々の向こうへと徐々に姿を沈めていった——

* * * * *

ドスツ、

「ぐふえつ。」

鳩尾に走った衝撃と痛みに声を上げ、藤丸の意識は微睡みから一気に覚醒する。

何が起きたのかを確認するため、寝惚けた意識の中で首を僅かに動かすと、自身の腹部辺りにアストルフオの足が見えた。

「もう、アストルフオつたら……痛てて。」

まだ僅かに痛む腹を押さえ、藤丸はむくりと体を起こす。壁に掛けてある時計を見上げれば、時刻は二時過ぎを指している。室内に響く時計の秒を刻む音を聞いているうちに、眠気は少しずつ晴れていった。

寝惚け眼を擦りながら、藤丸は周りで眠りこける皆の様子を何気なく見回す。壁に凭れ掛かって休む段蔵や、枕の上に並ぶ穏やかな寝顔を順に眺めていくうちに、ふと同じ布団の中で、ぴったりとくつついた状態で眠る松陽と神楽を発見する。

銀時の言いつけを守らずに、松陽の布団にそのまま潜り込んだ彼女はすやすやと寝息を立てており、その姿はまるで母親に甘える仔兎を思わせた。また松陽のほうも顔色はすっきり良くなり、穏やかに呼吸を繰り返している様子に、藤丸は安堵した。

「ん……？」

アストルフオの掛け布団を直していた時、襖の向こうから話し声が聞こえてくることに気付く。音を立てないように襖へと近付き、僅かに開けた隙間から覗くと、照明代わりの月明かりを受けた部屋で、三人の男達が盃を傾けていた。

「ほいじゃ、お前らもそういうことでもいいんだな？」

「何なんべん遍も同じこと言わすんじゃねえよ……不服だが、それしかあるめえ。」

長椅子に腰掛けた銀時の向かいで、高杉はぶつきらぼうに返す。その隣に座った桂のいるテーブルには、戦闘の際に用いていたあの巻物が数本広げられているのが見えた。

「でもよおツラ、これって一応藤丸に話してからのほうがよくね？俺らの内でOKってことになっても、やっぱしアイツの意見も聞かねえと……。」

「ツラじゃない桂だ。そうだな、では本人に確認を取るとしよう……なあ、藤丸君？」

不意に名を呼ばれ、吃きつきょう驚し肩が跳ね上がる。不敵に笑う桂の顔は、明らかにこちらを向いていた。

「何だよ藤丸、起きてたのか？」

桂の一言によりこちらの存在に気付いた銀時にまで声を掛けられ、藤丸は止む無く襖を開け、寝室からのそのそと出てきた。

「あはは……ごめんさい、覗き見するつもりは無かったんだけど。」

「いいって、なら今の俺らの話は聞いてただろ？寝れねえってんなら丁度いいや、こつち来いよ。」

そう言つて銀時が人差し指で示したのは、ちょうど空いた自分の隣。音を立てないよう静かに襖を閉め、そこへと移動している最中に、おもむろに立ち上がった桂が台所へ

と向かつて行つた。

「あれ？そのお酒どうしたの？」

「ババアが台所にあるモンは好きにしていっつたろ？だから好きに飲ましてもらつてんの。」

「……高そうな瓶だけど、それ本当に飲んでよかつたのかな？」

「いゝのつ。まあいざとなつたら、高杉クンのポケットマネーで解決してもらうから。ねえスギつち？」

「阿呆か、てめえにや一銭もくれてやるつもりなんざねえよ。あとスギつちは止めろつつたよな？本気で燃やすぞ？」

「悪かつた俺が悪かつた。だから一旦落ち着こう高杉クン？文章形態だから分かりにくいけど、君の周りにまたあの蝶々めつさ飛んでるから、火事とかになつたら危ないからっ！！」

「あはは………とところで銀さん達、寝なくて平気なの？」

「あ？ああ、不思議なことに全つ然眠くならねえ。さつき段蔵が言つた通りだな、眠気も無けりや催すことも無え、サーヴァントつて奴あ便利なモンだな。」

「だがそりゃあ同時に、生き物としての欲求を満たす必要が無いにも関わらず存在出来ている俺らは、既に『人でなし』になつてゐるつてことをまざまざと思ひ知らされて

る、つてことでもあるんだぜ。銀時。」

猪口代わりの湯呑ゆのみに酒を注ついだ高杉の言葉に、銀時の笑顔が強張る。そんな事を今まで考えもしなかったのだろう、黙ったまま自身の掌を見つめる彼の表情は、藤丸がまだ見たことのないものであった。

「銀さん……。」

何か話しかけようと困惑していたその時、ふわりと甘い香りが鼻先を掠める。

「あれ？この匂い……。」

くんくんと鼻を動かす藤丸、彼の嗅覚が捉えたのは、台所から戻ってきた桂がお盆に乗せたもの。

「藤丸君、眠れぬようならこれを飲むとよい。温まるぞ。」

桂が藤丸の前に置いた湯呑には、ほかほかと湯気の昇る淹れたての飲み物。色はココアに似ているものの、入れられたスプーンでかき混ぜると一層漂うその匂いは、藤丸にも覚えがあるものだった。

「わあい、ありがとう桂さん。俺これ好きなんだ。」

「はっはっは、そうかそうか。N I L Oニロは成分が沈殿している場合もあるから、よくかき混ぜて飲むのだぞ。」

「はーい……ええ？N I L O？」

「む？N I L Oだが……何故そう訝しむ、好きなのだろう？」

「いや、確かに色も匂いも同じなだけ……『N I』なの？『M I』じゃなくて？」
「『M I』ではない、『N I』だ。まあ心配するな、君の知っているM O L Oと同様、これも美味しさと健康を兼ね備えたマイルドな麦芽飲料であることに変わりはない。」

「あ、言っちゃった。M O L Oって大分バレバレだけと言っちゃったよ桂さん。」

まあ大人の都合は置いておくとして、藤丸は両手で持った湯呑を口元まで近付け、ふうふうと軽く息を吹いてから、漸く一口飲む。じんわりと広がる優しい甘さは、やはり藤丸のよく知るもので……うん、やっぱりコレM O L Oだわ。

「おう、何か俺も甘いのが欲しくなっちゃったなあ、一口くれや。」

藤丸からの返答を待たずして、銀時の手がN I L Oの入った湯呑を取り上げる。器を傾け、口を離れた銀時の顔は、如何にも不満顔であった。

「ヅラよお、これ少しばかり薄いんじゃないかねえか？どうせババアのとこのモンなんだから、粉ケチって使ってんじゃないやねえよ。」

「馬鹿を言え、俺はちゃんと分量通りに作ったぞ。貴様が普段飲んでいるものが濃すぎるのではないか？」

「ハッ！銀さん……これで間接キスだね（ポツ）」

「ええい頬を赤らめるなっ！大体俺が飲んだのはこっち、お前が口付けたとこと反対だ

から！間接キスとか無効だかなな！」

ほんの冗談に対し、焦った様子で捲まく立てる銀時の反応が予想だに面白く、突き返された湯呑を受け取りながら、藤丸は聞こえないように含み笑いをする。その姿に一人気が付いた高杉も、低く笑いを零した。

「ところで、さつき話してたことって何？俺にも話さなきゃ、とか聞こえたんだけど……。」

「何だ、肝心なところは聞いてなかったのか。」

「良いではないか銀時。重要な事柄だ、ここは改めて藤丸君にきちんと話をすべきだろう。」

「ハイハイ、分かりましたよっと。」

頭を乱暴に掻きながら、銀時はすぐ隣の藤丸へと向き直る。つい先程のちゃらけた様子とは雰囲気が一変し、こちらを見据えてくる二つの紅に思わず緊張し身体が強張った藤丸に、銀時は口を開いた。

「藤丸、さつきこいつらとも話し合ってたんだが……俺達、この江戸の事をもう少し詳しく調べてみることにしたんだよ。それにあたってだな……ええと……。」

「銀時イ、言いにくいんなら、根性の無えテメエに代わって俺から言っつてやろうか？」

「へっ、テメーの手なんざ借りねえよ！」

「いいから早いとこ要件を言わんか。只でさえ書き上がりが遅いというに、これ以上余計に文字数を喰うでないぞ。」

「わーってるつーの！ たたくどいつもこいつも……………それでな藤丸、お前に……………お前さん達に、改めて頼みたいことがある。どうか俺達に、お前らの力を貸しちやくれねえか？」

「いいよおー！」

F1レーサーもびっくりな速さでの即答と、スリ○クラブのフラ○チェン張りにいい返事に、銀時は椅子からずり落ちる。

「早えつつの！ せめてもうちよい考えるとかあるだろ！！ あのな藤丸、銀さん今いつになく真剣なの。カルデアにとつても、そっちの人類にとつても重宝されてるお前を、こんな訳の分かんねえ事態に巻き込んじゃって、本当悪いと思ってる……………だが、俺はどうしても知りたい。何故俺達がサーヴァントになったのか、一体この江戸くに嘗て何が起こつて、現在まもどんな事が起きているのか……………それに。」

銀時が皆まで言わずとも、続けて何が言いたいのかは当に分かつていた。こちらから逸らした視線が見つめるのは、固く閉められた寝室の襖。見れば銀時だけでなく、桂と高杉も同じ目をして同じほうを向いている。

彼らと松陽の間には何があったのか、藤丸はまだ何も知らない。だがそれを知るの

は、今でなくてもよいだろう。夕刻、河川敷で化け物達に襲われた際に、彼らが振るっていた刃から感じたものは強靱さだけでなく、大切な者を守らんとする意思であったから。

「大丈夫だよ銀さん。別に俺も皆も、巻き込まれたなんて思っちゃいないよ。それにもし、この件に聖杯が絡んでいたとしたら、寧ろこつちの問題に銀さん達を巻き込んだってことになるんだから……まあ、カルデアと通信が出来ていない状態が続いてるから、その辺はまだ何とも言えないんだけどさ。」

「藤丸……。」

「それに、俺も松陽さんのことが心配なんだ。あの人を追っていた、妙な連中のこともあるし。もしかすると、松陽さんが記憶を無くした事とこの国の変異、どこか繋がっている可能性だつて無きにしても非ずだろ……？なんて、カルデアにいる名探偵みたいに言ってみたり。」

へへ、と照れ笑いを浮かべながら、藤丸は温ぬるくなつたMI……じゃなかつたN I L Oを飲み干す。こんな異常事態に巻き込まれたにも関わらず、微塵も狼狽することの無いこの少年に、銀時達は感服すると同時に、協力の申し出をあつさりを受け入れてくれた彼の器の大きさに深謝した。

「藤丸……ありがとうな。」

銀時の大きな手に頭を撫でられ、やや乱暴な手つきに「うおううおう」と声を漏らしながらも、藤丸は笑顔を返した。

「よーし！そうと決まれば、皆が起きたら伝えなきやな。きつと喜んで受け入れてくれ……て……」

唐突に、ぐにやりと歪む視界。言いかけた言葉は語尾が小さくなつていき、隣の銀時に凭れ掛かる頃には、それは寢息へと変化していた。

「藤丸……？え、このタイミングで眠りに入るの？の○太君だつてちゃんと羊を三匹数えてからだつてのに、寝つきがいいにも程があんじやねえ？」

「漸く寝たか……どうやらN I L Oに施した、安眠の呪ましないがよく効いたようだな。うむ、初めてにしては我ながら上出来だ。」

「お前、いつの間に一服盛つてたんだよ……おい高杉、お前もヅラにや気をつけたほうがいいぜ？何時なんどきにナニ仕込まれてるか、分かつたもんじやねえからな。」

「人聞きの悪いことを申すな！それとヅラじやない桂だ！」

「ああ、肝に銘じとくぜ……それより銀時、テメエも藤丸の飲んだソレ、口をつけてたじやねえか。」

「へ？あつ——」

高杉がそう放つたのが合図であつたかのように、がくりと一気に力の抜ける身体。次

の瞬間には、背もたれに倒れかかった銀時の開いた口から、いびき 鼾が聞こえ始めた。

「……全く、単純な奴め。」

溜め息交じりに零しながら、桂は長椅子で眠りこける二人に毛布を掛けてやる。お互いに身を預けるようにして寝ている銀時と藤丸は、どことなく兄弟のように映った。

「高杉、お前も休め。俺の知っている限りでは、お前は一睡もしていないだろう。」

「別に、眠くならねえから眠らないだけだ。お前こそさつさと休んだらどうだ？ キヤスターと言えど、あれだけ魔力を消費すりゃあ困こんぱい憊しないほうがおかしいぜ。」

「そうだな、これを終えたら休むとしよう。」

桂はまた長椅子に腰を下ろすと、広げたままの真つ白な巻物を前に筆を取る。不思議なことに、そこに墨すずりや硯は見当たらない。すると桂の握った筆の先端が、じわりじわりと淡く光り出す。やがて穂先全体が光に包まれた時、桂はそれを紙へと滑らせた。文字や魔術式などを次々に記した筆の軌跡は、僅かな間だけ光り輝いた後、墨と同じ黒へと変化していく。

「難儀だねえ、お前さんも。」

「仕方なからう。強力な魔術も呪文の詠唱も出来ない俺は、こうして事前に術式を書き記しておくねば、いざという時に戦えんのだから。」

真面目しんめんもくに作業を行っている桂の様子を、高杉は酒の残った湯呑を傾けながら観察す

る。すると、その筆の動きが不意に鈍くなった。

「……………なあ高杉、松陽先生のことなのだが。」

面を上げぬまま零した彼の声は、どこか暗澹あんたんとしている。高杉は何も答えぬまま、桂の言葉に耳を傾けた。

「もしも、もしもだぞ？あの襖の向こうにいる松陽先生が、仮に記憶を取り戻したとしても……………その時俺達の前にいるのは、本当に『松陽先生』なのだろうか？」

「……………ツラ、何が言いたい？」

「俺とて、先生にまた会えたのは嬉しい。物凄く嬉しい。河川敷で先生の姿を見た時、思わず感情が胸の内から込み上げ、爆発しそうになつたくらいだ……………だが高杉、お前も知っているだろう？松陽先生に似た……………いや、『松陽先生と同じ』姿形をした、あの男のことを。」

筆を握る桂の手が、僅かに震えているのが分かる。

彼は恐れているのだ。また再会した恩師が、実は全くの別人である可能性を、自分の中で捨てきれないことを。

「……………んなこたあ、俺にも分からねえよ。とにかく今眠ってる先生が目を覚まさねえ限りじゃ、そう憶測を立てんのは早すぎンだろ。」

「そう、か……………そうだな。可笑しなことを言つてすまぬ。やはり俺も疲れているらしい

な、もう休むとするか。」

一方的に喋り続け、桂はテーブルの上の巻物や湯呑を片付けだす。強張った笑顔は、拭いきれない不安からだろう。

「……………」

高杉は湯呑に残った酒を一気に呷り、障子窓の方を見やる。

そこから見える、雲一つない小夜に浮かんだ『月』が、丑三つ時の江戸を静かに照らしていた。

《続く》

【肆】幽暗の暁（I）

『化け物』

『鬼の子め』

『忌まわしい、何て忌まわしい』

まるで豪雨のように降り注がれる、容赦ない罵詈雑言。
聞くに堪えないそれらを遮るべく、耳を塞ごうと手を動かす。
しかしその行動は、手首をきつく縛いましめた枷かせによつて叶わぬものとなった。

『世に災厄をもたらす者め』

『呪いが降りかかる前に』

『殺せ』

『殺せ』

『殺せ』

刀、斧、包丁、鉈、竹槍……一斉にこちらへと向けられる穂先に、心の底から恐怖が湧き上がってくる。

やめて、と懇願を訴える筈だった口が吐き出したのは、言葉ではなく真つ赤な鮮血であつた。

腹部から生えた青竹に、噴き出た赤がこびりつく。立て続けに振り下ろされる凶器が、身体にめり込んでいくのを間近で見せつけられる。

痛い。痛い。痛い。

激痛を感じているのは傷口ではなく、胸の奥底。

刃が深く抉^{えぐ}つてくる度に、まるで心臓を直^{じか}に握りつぶされているかのような痛みに襲われた。

止^やめて。痛い、痛い。どうして、やめてやめて、嫌だ、やめてっ!!

どれだけ泣き叫ぼうと、どれだけ許しを請おうと、止むことの無い罵声と残虐な行為。

『殺せ、化け物を殺せ』

『殺せ、忌まわしき者を殺せ』

『殺せ 殺せ 殺せ』

抵抗されぬよう縛り付け、一方的に力を振るう者達。

飛び散る血飛沫の向こう側で、何人かが口元に笑みを浮かべているのが見えた。

何が可笑しい？^{おか}一体何が楽しいというのだ？

嗚呼、真の化け物^{まこと}はどちらであろうか。

憎い。恨めしい。

厭^{いと}わしい。大嫌い。

——なんて酷い、悪夢だろうか。

* * * * *

「——ハッ!! はあ、はあ……………」

首筋を、額を、大粒の汗が伝う。

見開いた目が始めに認識したのは、古びた木製の天井と、そこから吊り下がった照明器具。

外気に触れて冷たくなった汗を腕で拭いながら、松陽はゆつくりと体を起こす。手は掛け布団を握りしめたまま、まだぼんやりとする頭を左右に大きく動かして、辺りを見回した。

「……………」

薄明りの中で見た、知らない部屋。そこに敷かれた布団の上で寝息を立てる数名を見下ろし、松陽は首を傾げる。

「えっと、この人達は……………？それに、私は何故此処に……………あれ？」

不意に、湧き上がってきた疑問が頭の中を駆け巡り、ぐるぐると渦を形成し始める。

「私、わたし……………わたしは、だれ、でしたっけ？」

顔を触り、髪を触り、何度も確かめるようにその行為を繰り返す。

再び溢れた汗が今度は背中を伝い落ち、徐々に冷たさを孕んでいくその感覚に身震いした。

「おもいださなきゃ……………わたしの、なまえ……………なまえは……………」

頭を抱え、震える声で疑問を紡いだその時、すぐ近くでもぞもぞと何かが動いた。

「むにゃ……んむ………松陽。」

小さな呟きと同時に、着物の袖を掴まれる感覚。それらにハッと我に返った松陽は、咄嗟に下を向く。

声の主はどうやら、すぐ隣で眠っているこの少女のものであるようだった。むにゃむにゃと動かす口の端には、間抜けにも垂れた涎が筋を残している。

「……しよう、ようっ。」

少女の寝言を、頭の中で何度も反芻させる。その単語が示すのは何であつたかを漸く思い出した時、彼の疑問の渦は即座に消滅した。

「そうだ、松陽………今の私の………」

胸の内が晴れやかになつたと同時に、一気に込み上げてくる慙愧ざんきの念。

僅か数秒、だがその数秒間だけと言えども、銀時から借り受けた大切な恩師ひとの名を忘れてしまうなど、決して許されることではなかつた。

戒めの意味も込めて、松陽は両手で自身の頬を強く叩く。パアンツ！と響いた音は思いの外ほか大きく、それと比例した痛みを頬に受けた松陽は肩を戦慄わななかせながら、今しがた頬を叩いた手で赤く腫れた箇所を押さえた。

軽くさす摩る手を動かしたまま、松陽は改めて室内にいる者達の顔を確認する。まず自分のすぐ隣で眠るこの少女、名はよく覚えていた。

「……ありがとうございます、神楽ちゃん。」

「はか図らずもヒントを与えてくれた彼女に小さく礼を言い、松陽が頭を優しく撫でると、神楽は心なしか嬉しそうな表情を浮かべていた。

続いて顔を上げて最初に見たのは、壁に凭もたれかかって休む段蔵。彼女の近くで、掛け布団にくるまって眠るのはエリザベート。その布団からはみ出た尻尾と、自身の所定であつただろう位置から大きく離れた場所で眠りこける少女……少年？のアストルフオの、それぞれ両者の寝相の悪さが合わさった一撃を顔と体に受けている、何とも不憫なこの少年。彼は……あれ？ええと？

突如復活してきた物忘れに狼狽うろたえながら、松陽は懸命にヒントを探す。すると、枕の上いきちんと置かれた眼鏡を発見。思い出した、確かアレが新八君……じゃなかった、新八君はあの眼鏡を掛けている人間のほうだった、筈。大丈夫大丈夫、間違つてないよ。多分。

一通りの名前と顔を確認したところで、松陽は記憶にある残り数名がこの場にはいないということに気が付く。

「銀時さん……藤丸君……？」

その二名の他に、あの二匹のもふもふ達の姿も無い。もう一度よく見回してみるが、やはりこの部屋に彼らはいないようだ。

一体どこにいるのだろうか？記憶の中で最後に覚えているのは、低くしゃがみこんだ姿勢の銀時と、頭から流血した藤丸……特に藤丸は大きな怪我を負っていたので、余計に心配であつた。

そんな時、不意に松陽の頬を冷たい風が掠める。出所を探すと、和室の襖が僅かに開いているのが見えた。

「おや……？」

音を立てないよう注意を払いながら立ち上がり、襖へと歩を進める。何となく隙間の向こうの景色が気になつたので、細く開いたそこへ好奇心のままに顔を近付けていく。

指を数本入れ、そろそろと開いた襖から見えたのは、和室よりやや広めの板間。薄暗い部屋の中で、松陽はその隅に佇む巨体を発見する。それは身を丸め、すやすやと眠る定春だつた。その上にちよんと乗っているフオウも、揃つて穏やかな寝息を立てている。

二匹の姿を確認出来たことに、安堵の息を零す松陽。彼らにもあの時の事をちやんと謝ろう、そう松陽が思つた刹那、突然彼の面が強張つた。

「……………え？」

* * * * *

チュン、チュンと嘯ヒキる声に、高杉はふと窓の外を見やる。

あの気味悪い『月』が消えた夜空は、また元の暗闇となつて江戸の街を覆い尽くしている。だが外には新聞配達を行う若者や、頭にセツトした灯りを伴つてランニングを行う夫婦の姿。そして掛け時計の針が示す卯の初刻から、もうじき朝を迎えようとしていることが理解出来た。

高杉が障子窓を開けると、薄ら寒い風が入ってくる。何気なく振り向いて見渡した室内には、長椅子で眠りこける藤丸と銀時、隅で丸くなつて寝ている定春とフオウ、その隣ではエリザベス……もとい、エリザベスの着ぐるみを被つた桂が、ぬぐぬぐと中で不気味な寝息を立てていた。因みにこれ、本人曰く再臨いわ第一段階の姿らしい。お馴染みの普段の恰好は第二のほうであり、お楽しみの第三は……おっと、ここからは皆様の豊かな想像力でイメージしていただきたい。

「……寒い。」

呟いた声は、薄闇の中に溶けて消えていく。

高杉は窓際へと向き直ると、開いた掌に魔力を集中させ、具現化した煙管たばこを携たえる。その側をひらひらと舞う一羽の蝶が火皿に止まると、熱を孕み赤くなつた刻み煙草から、一筋の煙が昇つた。

吸口を咥え、肺と口内を煙で満たした後、外に向けて緩く吐き出す。紫煙はゆらゆらと揺らめきながら、徐々に暗い江戸の街へと溶けていった。

煙管を燻らせ、高杉はもう一度振り向く。彼の目が捉えるのは銀時達……ではなく、その向こうの和室へと繋がる襖。先刻ちやんと閉めなかつたのか、そこは僅かに開いていた。

「……………松陽先生。」

無意識に口から零れ出た、恩師の呼び名。

河川敷で銀時に抱えられた姿を目撃した時、気を失っていた彼を自らの腕に抱いた時……その姿形に、懐かしい匂いに、胸の内の感情が爆発しそうになつたのは桂だけではなかつた。

この薄い襖を隔てた向こうに、あの人はいる……………会いたくて、逢いたくて堪らなかつた存在。そして、この異質な世界に降り立った自分が、『復讐者』となり果てた原因。

『あなたは十分に強いですよ。あの銀時とあれだけやりあつたんですから、道場破りさん。』

嬉しかった。実家でも塾でもかけられたことの無かった、温かい言葉が。

『それでいい……悩んで、迷って、君は君の思う侍になればいい。』

心地良かった。優しい声が、見つめる眼差しが。

『松下村塾へ、ようこそ。』

ああ、この人の言葉に、この笑顔にどれだけ救われたことだろう。

先生の背中を追いかけていきたい。先生の隣に並べるようにになりたい。

そしていつか、先生が俺に対して言ってくれたような、『自分の思う侍の姿』になって、共に一人前となった銀時や桂と揃って認めてもらいたい——

だが、そんな細やかな願いですらも、突如として容赦なく叩き壊されてしまう。

松下村塾を奪われ、恩師を奪われ、只茫然とするしかなかった幼子の自分達を、現実には嘲笑った。

全てを取り返す為に、剣を取った。またあの場所に帰る為、何度だって血に塗れた。全身を覆ったその赤が、敵のものでも味方ものだろうと、まして自身から零れたものであっても、最早どうでもいい。

再び吉田松陽を自分達の元へ還せるのだったら、幾ら穢れようが構わなかった。

『やつ……やめろ……頼む。』

曇天の下、泥や返り血にくすんだ白い羽織を翻し、銀時はゆっくりと松陽に近付いていく。

手には、共に師を取り戻さんと誓い、数多の障害を切り伏せてきた彼の刀。その刃先が、今まさにその師へと向けられようとしている。

嫌だ。やめろ、銀時。その人は、その人だけは——

『やめてくれエエエエエエエエ!!』

「……………っ。」

反芻した過去の記憶に、煙管を離れた口許が歪む。

ひらりひらりと、高杉の憎悪の化身である数匹の琥珀の蝶が、室内を舞っていた。

サーヴァントとなった今でも、嘗ての記憶はしっかりと保持されている。先生を捕らえた者、先生を捕らえるよう命令した者、そして先生を……………吉田松陽を間接的に殺した者達。全て切り伏せ、皆地獄に送ってやった。

しかし、この胸中に渦巻く厭世えんせいや嫌疑げんぎは消えることは無い。否、サーヴァントになつてから寧ろ、内側から身を焼くような憎悪の焰は勢いを増すばかり。

嗚呼、憎い。俺から、俺達から居場所も先生も奪った奴等が、憎くて堪らない。当事者を殺しても尚、この想いは微塵も掻き消えることはない。

胸の内を満たしていく、醜い感情。だが不思議なことに、それらが増幅し膨らめば膨らむほど、どこかで満悦まんえつしている自分があることに気が付いた。この感覚は、そう。空腹だった胃袋を満たした時に似た……………

——ああそうか、これが『復讐者』^{アヴエンジャー}というやつなのか。

怒り、嘆き、妬み、恨み……様々に入り混じった負の感情。『憎悪』と総称されたそれらこそが、この靈基^{からだ}の動力となつてゐる源に違いない。そんなものを糧^{かて}として現界している自身など、殺戮を犯すだけの兵器と何ら変わり無いではないか。

銀時に対し、『人でなし』などとほざいていた先刻の事を思い出し、高杉は自分を嘲^{あざけ}り啜^くつた。

——パアンツ！

不意に聞こえた音が、陰鬱になりかけていた高杉の私考を阻害する。琥珀の蝶を消散させ、高杉は直ぐ様視線を音のした方……和室へと向ける。

そこから暫しの沈黙……時間にして二分弱といったところだろうか。布の擦れるような音の後に、襖の隙間から数本の白い指が伸びてくる。それらは襖の堅縁を掴むと、音が立たないようそろそろと慎重に横へと動かされ、隙間を拡大していく。

さらに、と薄闇の中でもよく映えた亜麻色の髪が覗いた時、高杉は目を見張つた。

「……」
言葉が、喉の奥で悶もえたように出てこない。

ゆつくりと襖から身を乗り出してきたその人物……十数年振りかに見た、松陽おんしの動いた姿に、高杉は思わず煙管を落としそうになる。

幼き頃より見てきたそれと、何一つ変わらない容姿。だが真つ直ぐと正面を見つめる彼の怪訝けげんそうな表情は、いつも笑みを湛たえていた松陽をよく知る高杉にとつて初めて見るものであつた。

「……………」

松陽は何も言わず、黙つたまま一点を見つめ続けている。一体何を見ているのだろうか。と視線を辿ると……ああ成程、その答えは直すぐに分かつた。くうくうと寢息を立てる定春……もとい、その定春に寄りかかつて眠る謎の物体X——エリザベスの着ぐるみを見凝視したまま、松陽は微塵も動かない。険かしい表情おから読み取れるのは、あれが何なのかを彼が懸命に理解しようとしていることだ。

静かな時間が流れた後のち、ふと視線に気付いた松陽の顔が、不意にこちらを向いた。

心臓が止まりそうになる程の動揺が表に出ないよう、高杉は平静を必死ひっくるに繕う。狼狽する彼とは正反対に、松陽は悲鳴を上げるわけでも、わたわたと慌てふためくわけでもなく、ただほんの少しだけ驚いたような様子で、棒立ちの高杉をじつと見つめていた。

……再び訪れる沈黙。一秒が何分にも感じられる程の気まずい時間が流れていく中、ぐう、と気の抜けた音が静寂を破った。

「あつ……え、ええと……。」

音の発信源となった自らの腹部を押さえ、俯いた松陽の頬は赤くなっている。以前見たことなど一度も無かつたであろう、こんなにも師が恥じらう姿に言葉が出なかつた高杉だが、やがて彼の開きつ放しだつた口が大きく吹き出した。

肩を小刻みに震わせる高杉に、松陽はきよんとしている。暫くした後、右目を指で拭つた高杉は障子窓から離れ、歩き出した。

「ここに座つてくれ、いいモン持つてくる……おつと、その前にこの暗さは不便だな。」

空いたほうの長椅子を指した後、高杉は広げた掌に揺らめく火の粉に、軽く息を吹きかける。風を受けて宙へと舞い上がったそれらは、瞬時にその姿を蝶へと変えた。目の前で起きたことに呆然とする松陽に小さく笑みを零し、高杉は扉を後ろ手で閉めた。

「……………」

松陽は呆けたまま、室内を飛び回る光の蝶と高杉の消えていった扉を交互に見つめる。ぐうう、と先程よりもやや大きめの腹の虫が鳴いたことで我に返り、静かに襖を閉めてから示された長椅子へと移動する。

見慣れない部屋の様子を見回し（特に圧倒的存在感を放つエリザベスを何度も見やり）ながら、松陽は長椅子に腰を下ろす。ふと顔を上げると、向かいの長椅子で眠りこける藤丸と銀時が目に入った。寄り添うようにして寝ている両者は揃って口端から涎を垂らし、何とも間の抜けた面で毛布を被っていた。

「銀時さん、藤丸君……ああ、よかつた！」

二人の無事を確認出来たことに安堵し、松陽は胸を撫で下ろす。そんな時、先程の引き戸が開かれ、高杉が盆を持って部屋に戻ってきた。漂う香りが鼻腔を擦り、松陽の腹の虫が再び騒ぎ出す。

高杉はテーブルに近付くと、盆の上に乗ったものを松陽の前に置く。傍に止まった蝶の淡い光に照らされたそれは、少量の漬物と共に皿に盛られた、数個のおにぎり。その隣には手拭に続いて、温かいお茶が煎れられた湯呑もあった。

「昨日の夕餉の残り物だ。じゃじゃ馬姫……じゃなかつた、神楽？ つつたか。アイツが貴方^{アシタ}について寄せておいたんだぜ。」

「神楽ちゃんか……？」

真つ直ぐな瞳で見上げられ、気恥ずかしさから目を逸らしてしまう。高杉は盆をテーブルへと置くと、空いた松陽の隣へと腰掛ける。どこかぎこちなさを感じさせる高杉の動作に首を傾げつつも、松陽は視線をおにぎりへと移す。

丁寧に拭いた手で、おにぎり一つ取る。綺麗に握られた三角形をまじまじと観察した後、一口食む。ゆっくりと数回咀嚼すると、緊張気味だった松陽の表情が徐々に和らいだ。

「……美味しいです。」

次いで出たそれは、素直な気持ちだろう。和やかにおにぎりを頬張る松陽の様子を眺める高杉もまた、口元に弧を描いていた。

口いっぱい詰めたおにぎりを頬張り、やや温めに煎れられたほうじ茶を煽つて流し込む。一つ目のおにぎりを完食した後、ふと松陽が顔を上げ高杉の方を向く。

「あの、ありがとうございます。ここまでして頂いて……ええつと。」

ももごと、吃りながらこちらを見つめてくる松陽の意図を、高杉は直ぐに察する。

「ああ……そういうやあ、今の貴方は何も覚えちゃいねえんだつたつけな。」

「あの……はい、すみません。」

「謝らないでくれよ、別に責めているわけじゃねえんだ。」

悪かったな、と続けてから微笑む高杉。その表情はどこか憂いにも似たものを帯びているようだった。

「俺は……俺の名は、高杉晋助。貴方が先に出会ったあの天パ……銀時の朋輩みてえなモンだ。」

「銀時さんと、お知り合いなのですか……?」

「知り合いどころか、切つても切れねえ腐れ縁さ。ついでに言うとな、そのペンギンの化けモンの着ぐるみ被つた奴も含めてな。」

高杉の指した先には、松陽が発見した時よりも傾きの大きくなつた桂がいた。ぬゝゝと相変わらず不気味な寝息を立てて体重をかけてくる桂に、定春は然も不快そうに唸り声を上げていた。

くすくすと笑う松陽を何も言わずに見つめていた高杉だが、深呼吸を一つ終えると、意を決したように松陽へと向き直る。

「……なあ、松陽『先生』。」

高杉が発した刹那、松陽の表情から微笑が消える。間を待たずしてこちらを向いた彼の見開いた目は、明らかに驚愕を訴えていた。言葉を失つたままにいる松陽に、高杉は続ける。

「記憶を失つてる貴方にとつちや、俺が何の話をしているのかも分かるめえ。だからこつからは、俺の他愛ない独り言だとも思つて聞き流してくれても構わねえよ。」

高杉は徐に立ち上がり、摺り足で障子窓へと移動していく。僅かに開けられた窓の向こうで、ぼつぼつと街灯りが増えていくのが見えた。

「『松下村塾』……嘗て貴方が、とある田舎に開いた私塾の名だ。金も碌に取らず、貧

しい子供を集めて手習いを教えていたその場所に、俺達も教え子として貴方の元にいたんだよ。」

啜えた煙管の先端に、一羽の蝶が止まり、消える。昇った細い煙が、窓の外へと吸い込まれていく様を眺めながら、高杉は続ける。

「……銀時はな、アイツがまだほんのガキの頃、貴方が戦場で拾って育てたって聞いてる。ツラ……そこで軒かいてるペンギンの中身だ。そいつあ親も育ての祖母も喪って、天涯孤独になつちまつた時に貴方と出会った。俺は……通つてた名門塾も 実家も投げ捨てて、貴方の門下に入った……分かるか？俺達三人を救ってくれたのは紛れも無え、先生なんだ。」

松陽に背を向けたまま、高杉は淡々と語り続ける。振り返らずとも、松陽が困惑している様子は何となく感じ取れた。無理もない。一切の記憶を失くしている彼に対し、こんな話をしていいるのだから。

「いつも、何時でもその顔に笑みを湛えて、でも時々は言動と行動が合致しねえで、何度も俺らを振り回して……それでも、貴方の傍に居るのは心地が良かった。武士道とは、侍とは何かを説いてくれた貴方の声は、今でも忘れちゃいねえ。いや、忘れられる筈がねえ。」

「……………」

松陽は、何も答えない。否、この僅かな距離であろうにも、彼の息遣いまで聞こえないというのは、少し妙に思えた。

「例え人でなしになろうと、その果てに復讐者なんてモンに成り下がろうと………俺は、貴方アンタを忘失することは決して無えのさ。なあ、松陽先——」

「どうかもう、そこまでにしていただけませんか………高杉『さん』。」

すぐ背後から聞こえたその声は、聞くに堪えないと言わんばかりに高杉を遮る。

吃驚きつきょうし、思わず煙管を置いてあつた煙草盆に取り落とす。それから即座に振り返る。すると長椅子にいた筈の松陽が、自身のすぐ後ろに立っていた。

気配など、微塵も感じなかった………だが、それより高杉を驚愕させたのは、先程の楽しい様子から一変した、松陽かれの表情だった。

何故？どうして貴方は、そんな悲しい表情かおをしている………？

「………ごめんなさい。」

飛び回る蝶の薄明りに照らされた松陽の、微かに動いた口許。そこから紡がれた謝罪の声は、微かに震えていた。

「貴方が色々と教えてくださったお陰で、私が名を借り受けている『松陽』という方がど

れほど皆さんに想われ、慕われているのかを知ることが出来ました……だからこそ、私を『松陽』と呼ぶことは、どうかお止めやになつてください。」

「な……に、言つてんだよ？先せ——」

「高杉さん、貴方や銀時さんが私に親切をしてくださることは、凄く嬉しいです。しかしそれは、私があなた方の恩師によく似ているからではありませんか……？今の私には、幼い銀時さんや高杉さん、そしてヅラさんのお世話をした記憶も、皆さんと過ごした思しい出も、何一つ備わつていません……こんな私など、皆さんの慕う『松陽先生』と見た目ばかりが似ただけの別人に過ぎません。」

「っそんなことは……!!」

言いかけた高杉の脳裏を、桂と交わしたあの会話が唐突よきに過る。

『もしも、もしもだぞ？あの襖の向こうにいる松陽先生が、仮に記憶を取り戻したとしても……その時俺達の前にいるのは、本当に『松陽先生』なのだろうか？』

分かつている。今日の前にいるこの男が、確実に『松陽先生』である保証は無い事な
ど。

だが、否定などしたくはなかった。会いたくて、逢いたくて、手を伸ばしても届かな

い処へ逝つてしまつたあの人が、結ばれた不思議な縁えにしによつて、こうして再び触れられる距離にいるのだ。

英サリアクト靈になつたことや異次元からの来訪者、常夜の国となつた江戸の異変。だがそんなことなど、今の自分には端はなからどうでもいい。

「……………松陽先生、俺は——」

ふわり、

両の頬を包む、温かな感触。

鳩が豆鉄砲、という言葉がそのままではまりそうな程に、高杉は突然のことに丸くなつた右目で眼前…………彼の頬に手を添える、松陽を見る。

「少し……………もう少しだけ、待っていてもらえませんか？どれだけの時間がかかるかは、見当もつきません。ですが、私は必ず思い出してみせますから。自分の事も、貴方のことも、そして銀時さん達のこと……………」

こちらを真つ直ぐ見つめる表情は穏やかであるものの、絞り出すようなその声は震えている。そして彼は、泣きだしそうになるのを必死に堪えたような、そんな笑顔を浮かべて言った。

「だから、それまで『先生』はお預けです。そうでないと、あなた方が想い慕っていらつしやつた、本当の『松陽』さんに申し訳が立ちませんからね。」

へへつ、と悪戯つぽく微笑む松陽。どこことなく幼さを感じさせるその表情と仕草は、高杉の知らないものであった。

それでも、この両手から伝わってくる優しい感触と温もりは、間違ひなく自身の記憶の中にある『松陽』のものに違ひなかつた。

「……………ああ、分かつた。それじゃあ俺も、一つだけいいか？」

「はい、何でしょう？」

「その……………俺の呼び方なんだが、出来れば名前で呼んでほしい。否、名前で呼んでくれねえか？」

「名前……………ふふつ、実は先刻、銀時さんにも同じことをお願いされたんですよ。」

「だろうと思つたよ。抜け駆けしやがってあの野郎……………で、どうなんだい？」

「勿論、謹んで呼びさせていただきます……………よろしく願ひしますね、『晋助』さん。」

『晋助』

胸が震え、痛い程に締め付けられる。

再びこの人に、この優しい声に、名を呼んでもらえる時が来ようなど、夢にも思わなかった――。

「……………晋助さん、どうなさいました？」

「ああ、何でもねえよ……………煙草の煙が、目に沁みちまつたかねえ。」

ひらひらと、一羽の光の蝶が煙草盆に止まり、羽を休める。

淡い光に照らされた煙管の火皿は、当に冷たくなっていた。

和室の掛け時計が、卯の正刻を指したその頃。

「……………ん。」

体内にセットしていた起動タイマーが作動し、段蔵が目を覚ます。

背伸びをしてから立ち上がり、残る眠気で若干ぼんやり気味の頭を動かして、室内を見回す。まだ皆が眠りこけている様子を眺めていた時、ふと彼女は藤丸と松陽の姿がそこにはないことに気付く。

「マスター？松陽殿……………？」

室内を見回すが、いない。爆睡するアストルフオの布団を引っぺがしてみても、やはり二人はいない。段蔵は首を傾げながら、居間へと繋がる襖に手を掛ける。

音を立てないよう、ゆっくりと開いた襖から和室を後にすると、夜目の利く段蔵の視界に二つの長椅子が映る。

銀時と、何故か藤丸が互いに寄りかかる形で眠るその向かいに、松陽は座っている。彼はこちらに気が付くと、につこりと微笑んだ。

「松陽ど——」

名を呼ぼうとする段蔵。だがそれを遮ったのは、自身の口元に人差し指を立て静粛を

促す^{うなが}松陽の動作だった。

一瞬きよとんとするも、長椅子にもう一つある人影を認識した時、彼の行動の理由が理解出来た。

「……成程、そういう事でしたか。」

段蔵が目を落とした先……松陽の膝の上にあつたのは、高杉の頭だった。長椅子に身を横たえ、松陽に膝枕をされている状態で、彼は眠っていたのだ。

終始相手を射貫くような眼光を放っていた右の目は瞼に閉ざされ、規則正しく呼吸を繰り返す高杉の寝顔は、段蔵が見たことも無い程に安心しきっている。

まるで、母親に抱かれた幼子の様な彼の寝顔を観察した後、揃って顔を上げた松陽と段蔵は、互いに微笑み合った。

——間も無く、幽暗の江戸に夜明けが訪れる。

【肆】幽暗の暁（Ⅱ）

チュン、チュンと静まり返った居間に微かに響く、雀の鳴き声。

外から聞こえてくる心地の良い嘖さえずりは、未だ眠りこける彼らの耳には届かない。

「んじく……………」

「ふんがく……………」

毛布が剥がれ、床に落ちても尚、銀時と藤丸は目を覚まさない。特に藤丸に至っては、上半身が椅子から既に落ちかかかっており、銀時の後ろ首に回した足の力で辛うじて体勢をキープしていた。

「むにや…………いちご牛乳、いちごパフェ、いちごぱんつ、いちご祭りじゃねえかフヘヘ……………」

「ううう…………マナプリ量産は嫌だ、爆死はもう嫌だああ……………」

片や幸せそうな寝言を零し、片や悪夢に魘うなされているその空間に、そろりそろりと忍び足で現れた者が一人。

左右の手にそれぞれ構えたものを頭上高く持ち上げたその時、『彼』は大きく息を吸い込んだ。

「起つきろおおおおくっ！」

ガンツ!!ガンツ!!ガンツ!!ガンツ!!ガンツ!!

「うおおああああアアアアアッ!!」

室内に響き渡る凄まじい音に、銀時の意識は即座に覚醒する。飛び起きた彼の首から足が外れ、顔面から床に落下した藤丸の「ぶえっ」とくぐもった声が椅子の下から聞こえてきた。

「だあああもうっうるせえって!!やめろやめろ近所から苦情来るから!!」

銀時の必死の制止に、『彼』はぴたりと手の動きを止め、室内の電気のスイッチを押す。明るくなった室内に現れたのは、両手にフライパンとおたまを携たずさえた、満面の笑みのアストルフオだった。

「あ、起きた。おっはよく二人とも！」

「痛てて……あれ?さっきの300連ガチャ大爆死祭りは夢?よかつたあ……」

「まったく、まだ耳の奥がキンキンしやがる……おはようってなあアストルフオ君、今何時だと思つてんの?お外はまだこんな真つ暗じやねえか。」

「んもう、銀ちゃん忘れたの?この国はお日様が昇らないって、昨日お登勢さんが言つて

たじやないか。それに時間だつて、もう朝の8時だよ。」

ほら、とアストルフオが右手のおたまで指した先の掛け時計は、彼の言つた通り既に辰の正刻を表している。

「ああ、そーういやあんな設定あつたつて。しつかし朝だつてのにこーう暗いんじやあ、体の調子狂つちまいそーうだぜ……ふわあゝあ。」

銀時が大きく欠伸をかけたその正面で、藤丸もつられて欠伸をしてしまう。ふと銀時は周囲を見回しながら、アストルフオに尋ねた。

「あれ？ツラ達は……？」

「んむ……そーういえば、定春君やフオウ君もいないなあ。」

「皆なら、この下で朝ご飯の支度を手伝つてるよ。僕はお寝坊さんの君達を起こすよう頼まれたのさ。さて、次は神楽ちゃんだ！」

ふんつ！と鼻を鳴らし、アストルフオは意気揚々と和室の襖を開く。そして「起つきろ〜っ！」の声から始まるけたたましい目覚まし大合奏。

ガンツ!!ガンツ!!ガンツ!!と、力いっぱいぶつけられたフライパンとおたまによつて奏でられるこの二重奏は、漫画やアニメで見たことがあるという方も多いだろう。だからといって真似をしてはいけない。何故かつて？だつてコレ、予想してるより遙かにうるさい。めつちやうるさい。家族とか友達に、健やかな朝の目覚めをお届けしようと

やってみるのもいいかもしれない。但しお礼は感謝の言葉ではなく、高確率で怒りの鉄拳が飛んでくること間違いなしなので、お勧めはしない。

「あああああ!! もうやめてエエお願いだからっ!! 銀さんの大事な膜が駄目になっちゃうウウウツ!!」

「ストップ! ストップだよアストルフオ!! もうつ言う事聞かないとこうだからねっ!!」

騒音に悶えながら、藤丸は右手を掲げる。手の甲に刻まれた令呪が光を孕み始めたのが目に止まったと同時に、アストルフオは動きを停止した。

「おっと、いけないいけない。ごめんねマスター?」

「いやいや気にしないで………それより起きた? 神楽ちゃん。」

「んんん駄目だこりや、ぐつつすりだよ。ねえ銀ちゃん、もしかして神楽ちゃんて寝起き悪くっ。」

「悪い悪い、そりやもう悪いさ。特に寝惚けてる時なんて最悪だぜ。」

「むく……こうなつたら僕の宝具・『恐慌呼び起せし魔笛』でスッキリお目覚め——」

「ノー! ノー宝具!! そんなんやつたら近所からクレームどころか、一帯のご近所さん全部吹っ飛ばから!!」

立ち上がった藤丸が必死にアストルフオを押しさえようとしていたその時、不意に銀時が狼狽した様子で尋ねる。

「おい、そーいや先生……松陽はどうした？ひよつとしてまだ寝てんのか？」

「へ？松陽さん？ああくあの人ならとつくに起きて皆のところに——」

アストルフオが答え終えるのも待たずに、銀時は玄関へと駆け出す。バタバタと忙しない音を残して玄関から飛び出していく銀時の後ろ姿を、藤丸とアストルフオが呆然と、そして漸く起床した神楽が寝惚け眼で見っていた。

まるで雪崩のような音を立てながら、銀時は外階段を駆け下りる。少しだけ息を荒らげたまま面を上げれば、一階の『スナックお登勢』が看板も出ていないのに、店内の照明がついているのが見えたため、銀時は咄嗟に店の扉に手を掛けた。

「松陽っ！」

勢いよく扉を開けると、案の定既に店内にいた新八を始め、エリザベートに定春、そしてカウンターに立つお登勢とキャサリンが、扉がぶつかる音と銀時の声に反応し、目を丸くしている。

「ああ銀さん、おはようございます。やっと起きてこられたんですね。」

「わんっ！わんわんっ！」

「んもう、遅いわよ白モジャ！」

「オウオウ、重役出勤トハイイ御身分ダナオイ。」

「つたく、朝っぱらからうるさいねえ。頼むから店を壊さんどくれよ。」

「こちらへと向けられる挨拶や不平、しかし銀時がそれらに応えることはなく、彼は啞然とした様子で店内を見回している。

「あ、あれ……？おい新八、松陽はどこ行つた？」

「へ？ああ、松陽さんなら店の奥で桂さん達と——」

新八が言い掛けたその時、店の奥に掛けてある暖簾のれんの向こうが騒ひらめがしくなる。閃ひらめく布を手で上げて現れたのは、飯櫃めしびつを抱えた桂だった。彼の長髪は高い位置で結ばれ、着物の袖もきちんと襷たすきで纏まとめている。

「おお銀時、やつと起きたか寝坊助め。」

桂に続いて、高杉も後ろから姿を現す。片手にポットを持った彼は、いかにも不機嫌といったその表情を少しも隠しはしていない。

「つたく、何で俺まで手伝わされてんだ？」

「文句を垂れるな高杉、働かざる者食うべからずだぞ。」

「だから、別に俺は食う必要なんざ………おっと。」

暖簾から離れる間際、高杉は空いた手で布を上へと避ける。そこに出来た隙間から現れた人物に、銀時は目を見開き一驚した。

「ほらよ、さつさと通つちまいな。『松陽』。」

「はいっ。すみません、晋助さん。」

高杉に微笑みかけ、礼を述べて会釈するその人物こそ、銀時が血眼ちまなこになつて探していた、松陽本人であつた。桂と揃いの恰好で、手には綺麗に盛られたお新香の乗つた皿を持つてゐる。

「どうだい？直した着物の着心地は。おかしなところがあつたらすぐアタシに言うんだよ？」

「はい、お登勢さん！ええと、今のところは大丈夫のようです。」

「チョイト、襷タスキガ緩ンデマスヨ？直シテヤツカラジツトシテテクダサイ。」

「あつ、すみません……ありがとうございます、キャサリンさん。」

右から左からと声を掛けられ、それら全てに笑顔で答える松陽。ふと彼が呆けている銀時に気が付いた次の瞬間、ぱあつと表情が一気に華やいだ。

「銀時さんっ！」

桂の置いた飯櫃の隣に皿を置くと、松陽は真つ直ぐ銀時の元へと駆け寄ってくる。喜悅に溢れた顔と頬を紅潮させ、こちらへと向かつてくる松陽の結わえた亜麻色の髪が、

びよこびよここと縦に揺れた。

「おはようございませう！お体のほうは大丈夫ですか？」

「お、おはよう……うん、快眠したお陰でバッチリです、よ。」

鼻が付きそうな程の距離まで接近され、思わず仰け反る銀時。気恥ずかしさに返答もしどろもどろになってしまふ。そんな彼の前で朗笑を浮かべていた松陽だったが、次第にその笑顔に曇りが差していく。

「あの……銀時さん。私はまず、貴方に謝らなければなりません。」

「へ？」

「私が意識を失う前……あの怖い怪物達に囲まれたあの時、私の身を案じてくださった貴方は、定春君の傍を離れないよう言ってくださいました。でも私は、私の我儘のままに勝手に動いて、貴方の言いつけを破ってしまいました。本当に……本当に、ごめんなさい。」

徐々に俯き、視線が銀時から床へとずれていく。決まりの悪さから目を合わせる事が出来ないでいる松陽だったが、ポンと頭に何かが乗った感覚に驚き、思わず面おもてを上げた。

「銀時さん……？」

きよんとした顔でこちらを見つめる松陽に、銀時は我に返る。無意識のうち、いや

本当にごく自然に、銀時は自らのその手を、落ち込む松陽の頭に乗せていたのだ。まるで幼かった頃、師が自分にそうしてくれたように。

「え、ええと、その……なんだ。き、気にすんなって！俺あ別に少しも怒っちゃいねえし。」

「本当、ですか……？」

「つたりめーだろ。それにな、あの時アンタが庇かばってくれたから、藤丸は助かったんだぜ？寧ろ礼を言いてえのは俺のほうだよ……本当でありがとうな、松陽。」

くしゃ、と頭に乗せた手を動かすと、絹のような髪の手触りが指の間から伝わる。銀時の思いがけない行動と温かな言葉に、ぼかんとしていた松陽の顔にも次第に朗らかさが戻っていく。

安堵する銀時、触れ心地の良い松陽の頭を再び撫でようとした時、突然横から伸びてきた腕が彼の手を掴んだ。

「おい………いつまで触つてやがんだ？さっさとその汚ねえ手を退けろ。」

容赦なく込められていく握力、同時に骨が軋きしむ音までが銀時の耳に聞こえてくる。

「痛ででででででで！！何しやがんだバカ杉っ！！」

堪らず手を引つ込め、まだ痛みの残る利き手を摩さりながら、銀時は腕の主であるバ………はい、ごめんなさい違いましたね。ガン飛ばさないで怖い怖い。えー改めまして、

高杉。そう高杉を涙目で睨む。

「つたく、大丈夫か松陽？アイツあな、厠行かわやつた後も平気で手を洗わないでいるような奴だ。もしも貴方アシタに変な菌なんかついちゃ堪んねえぜ。」

「サーヴァントだから便所トイレ行かないもんつ!!ばつちい物なんか今んとこ触つちやいねえし!!あくそつかあ?高杉くんたら俺が松陽の頭撫でてたから、ひよつとしてヤキモチ焼いちやつてたりするう?嫌だねく男の嫉妬なんて醜い醜い!」

「ああ、率直に言つて羨ましかつたし、あと気安く松陽に触つてるテメエを八つ裂きにしてやろうかとも思いました。」

「少しは否定する素振りくらい見せろよオつ!!何で最後作文の締めみたいな感じで殺意?き出してんだ!!え?つーかお前、何で松陽呼び?銀さんの知らない間にいつそんな関係になったの?」

「ハッ、てめえにや口が裂けても教えねえよ……なあ、松陽?」

同意を求めるような言い振りと共に、銀時から離れた松陽を見やる高杉。同時に得意げな顔の前に人差し指を立てる仕草をすると、松陽もまた同じ動作をし、返事の代わりに茶目つ気を含んだ微笑を浮かべてみせた。

「へえええええあああつそおおおおう!!二人だけの秘密つてやつウウウつ!!そんなら銀さん、力尽くで聞き出しちやおつかなあ!!それに丁度いい機会だぜ!サーヴァントに

なった銀さんの実力、朝飯前にテメエにたーんと味わせてやらあ!!表に出ろっ!」

「上等だ、飯の味も分からなくなる程に叩きのめしてやらあ!」

「おい、やめんかお前達!ここに来てまで喧嘩など——うおわっ!」

互いにメンチを切り合う銀時と高杉。彼らから放出した魔力が部外者を寄せ付けんとばかりに噴出し、またオーラとなつて各々のおのおの身体に纏わりつく。正に竜虎相搏つ………などとスケールのデカいものではなく、蝸牛角上の争い、もつと身近に例えるなら、近所の犬と猫の喧嘩のようなものである。

然りとて安心は出来ない。只でさえ荒くれ者の二人であるのに、加えて今回は更にサーヴァントとして現界しているのだ。一騎の強さが戦闘機一機分と例えられる英霊が怒りに任せてぶつかり合えば、こんな店など木っ端微塵になるに決まっている。

「ちよ、ちよつと!白モジヤも黒猫もやめなさいよっ!」

「グルルル、わんわんっ!」

エリザベートと定春の制止も、最早二人には届かない。

青い顔をした新八の横で、二人を交互に見ながらおろおろとする松陽の不安を桂が落ち着かせようと努めている。ふと新八が見やった先のカウンターの向こうでは、慌てふためくキャサリンの隣でお登勢が腕を組みながら、額に青筋を立てていた。もしかすると、この人なら二人を止められるのでは……いや、いくらかぶき町四天王とはいえ、やつ

ばサーヴァント相手なら無理かな。うん。

一触即発の状態にある二人に誰もが近付けないでいたその時、バァンツ!!と派手な音と共に店の扉が外れて吹っ飛んだ。

「松陽オオオオオッ!」

カンフー・キックの体勢で店内に飛び込んだのは、寝間着姿のままの神楽だった。よく見れば髪の毛もまだボサボサで、ついでに言う乾いた涎よだれの跡もまだ健在である。

神楽の蹴りを後頭部に諸もろに受け、「タツカルビッ!」と悲鳴を上げた銀時の体は前へと倒れていく。その際ちょうど正面で睨み合っていた高杉までも巻き込み、二人は揃って床に頭を強打した。

「待つてよ神楽ちゃん! って、うわっ何コレ!」

「やっだ〜! 銀ちゃんにスギちっちゃたら、朝からこんな面前でお盛んなんだから♪けどこの作品は一応健全な方向で進めてくらしいから、そういったコトはしっかりと注意書きとタグをつけた上で行わなきゃ駄目だよお? まあ僕は別に構わないけど、さあ続けて続けて?」

遅れて到着した藤丸は広がる惨事に仰天し、続いてやって来たアストルフオは、銀時の下敷きになった高杉と、その彼を組み敷く形にして床に転がる銀時を遠目で発見し、にやついた顔で二人の姿を眺めていた。

「違えエエエっ!!あのコレ、とんでもない誤解だからね!!これは只の事故だからであつて、別にこのチビとピ——なコトとかピ——したくて押し倒したとかそんなんじや——」

「話が余計にこじれるから喋んじやねえ。あとクソ重いからさつさと退けるこの糖尿一步手前野郎が。」

文句を全て言い終えるや否や、突如垂直に蹴り上げてきた高杉の足が、銀時の腹部に直撃する。その細身からは想像も出来ない程の力で吹き飛ばされた銀時は、「ジャンドウーヤっ!!」と奇怪な声を上げながら天井に背中を強打し、その後重力に従つて床へと落下した。

「松陽——松陽どこアルか!!」

足元に落ちてきた銀時に目もくれず、神楽は松陽を呼びながら店内を何度も見回す。すると、騒ぎの中で定春の後ろに隠れていた松陽が、ひよっこりと顔を覗かせた。

「その声は……神楽ちゃんですか?」

凜とした声に名を呼ばれ、神楽の動きが一瞬止まる。その方を見やつた時、彼女の表情は一気に明るくなる。

「しよ……松陽オオオっ!」

一目散にこちらへとかけてくる神楽、あと寸でというところで大きく跳躍した彼女

を、前へと出てきた松陽は両の手でしっかりと受け止めた。

「松陽、松陽……………動いてる、ちゃんと起きてるヨ……………よかつたあ……………」

胸元に顔を埋め、震える声で呟く彼女の上げた面は、顔から出るものが全部出ている。ぐしゃぐしゃになった顔が衣服に付着しようと、松陽は不快を微塵も露わにせず、柔らかな笑みを湛えて彼女の頭を優しく撫でていた。

「松陽、身体大丈夫アルか?! 痛いところか無い?!」

「ええ、もうすつかり大丈夫です。それとおにぎり、ありがとうございます……………
貴女あなたにも、随分と心配をかけてしまいましたね。本当にごめんなさい、神楽ちゃん。」

「ぐすつ……………ねえ松陽? 次からはこの宇宙一美少女サーヴァントの神楽様が、絶対にお前のこと守ってやるアル! だから、もうあんな無茶しないでヨ? 約束アルよ?」

「はい、もう一人であんな無謀な真似は致しません。それに神楽ちゃんがいてくれるなら、こんなに頼もしいことはありませんから。」

「モチのロンだヨ! どーんつと私に任せるヨロシ!」

赤くなつた目を細め、満面の笑みを浮かべる神楽。互いに微笑みあう二人の姿を呆然と眺めていた銀時と高杉だったが、不意にその頭頂を振り下ろされた拳骨が襲つた。

「痛っ。」

「いつでえつ!!」

腫れたタンコブを押さえて同時に振り向けば、拳をグーにしたままの桂が、怒りを通り越し呆れた眼差しで二人を見下ろしていた。

「全く貴様らという奴等は……何時^{いつ}何処^{どこ}にいようと全く変わらんのだから！ 毎度毎度調停に入る俺の苦勞も少しは考えんか馬鹿共がっ!!」

（珍しく）真つ当な理由で叱責され、銀時も高杉もぐうの音すら出ない。桂の叱声が響く中、藤丸と新八そしてアストルフォが外れた扉を直していたその時、香ばしい匂いが辺り一面に漂った。

「マスター、お目覚めになられたのですね。おはようございます。」

「お登勢様、先程の大きな音は何でしょう？ 揺れは無かったので地震ではなさそうでしたか……。」

暖簾をくぐり、出てきたのは頭に三角巾を巻き割烹着を着た段蔵とたまであった。彼女らの持つ盆には、それぞれ一人分に盛られた焼きメザシが乗っている。

「フオーウ、フオーウツ。」

メザシのお零れを貰ったのだろう、小さな口をもぐもぐさせながら、フオーウも二人の足元からちてちと歩いて現れる。

「おはよう段蔵、わく美味しそう……!」

「お登勢殿よりメザシを頂きました。冷めないうちに皆さんでどうぞ。」

「ご飯にお新香に魚、あとは……段蔵さん、魚は私が配膳しますので、台所からお味噌汁の鍋を頼めますか？」

「はい、承知しました。たま殿。」

メザシの乗った盆をテーブルに置き、段蔵は台所へと戻っていく。心なしか、彼女の様子はいつもより楽し気なように藤丸の目には映った。

「ほら子兎、レディーがそんなみつともない姿じゃいけないわ！アタシが直してあげるから洗面所行くわよ！どこにあるの？」

「えっと、確かこつちアル。」

「さて、冷めちまわないうちに食っちまわないと飯が不味くなるよ。ほら座った座った。」

お登勢に促され、皆ぞろぞろと店内の椅子に座り始める。先程あれだけ騒いだこともあって、ばつの悪い思いのまま床に座り込む銀時と高杉だったが、突如着物の襟首を同時に掴まれる。

「ホラ、オメーラモ。腹ガハツテルカラ喧嘩ナンテスルンデスヨ。セツカクオ登勢サンノゴ厚意デ用意シテヤツテンダカラ、サツサト食エヤ。」

キャサリンの言葉と威圧に暫し呆けていた二人だったが、やがて揃って立ち上がると、皆の集まる場所へと足を赴かせる。

「たまさん、僕は食器の準備をしますね。」

「それは助かります、ありがとうございます……新八様。」

「今メガネって言うおうとしてませんでした？僕の聞き違いかな？本体はこつちだから新八だから。」

そんなお約束のやり取りが行われている横では、蓋が開けられほくほくと湯気の立つ銀舍利を前に、杓文字を構えた松陽が意気込んでいた。

「よし、では私は皆さんにご飯をお配りしますね！」

「先せ……えっと、松陽殿。よろしかったら俺もお手伝いさせていただけないでしょうか？」

横から声を掛けてきたのは、やや緊張気味の桂。形だけの笑みと話し方も、どこかぎこちなさを感じる。

「わあつ、助かります！ではお願いしますね、ツラさん。」

「ツ……………」

まさかこの人にまでその渾名あだなで呼ばれるとは思ってもみず、シヨックを受ける桂。耐えきれず吹き出す銀時と高杉を睨みながらも、冷静さを欠かないよう深呼吸をする。落ち着け落ち着け、この人に悪意はないのだから。

「……………ツラじゃ、ない。」

桂が、静かに呟く。お？いつものあの台詞が来るか？と皆の視線が集中する。だが彼は口をもごもごことさせながら、決めの「桂だ」を中々言わない。やがて桂は頬をやや赤らめながら、漸く口を開いた。

「その……………小太郎と、呼んではくれないだろうか？桂小太郎、それが俺の名だ。」

気恥ずかしさから顔を上げられず、下を向いたままの桂が発したその一言に、松陽を始め皆が固まる。彼を笑っていたあの二人でさえ、目を丸くしていた。

「桂、小太郎……………分かりました、先程の失礼をどうかお許してください。では改めてよろしく願います、小太郎さん！」

朗らかな笑顔と温かな声に、桂は目頭が熱くなるのをぐつと堪え……………られなかった。ダバダバと目から鼻から流れ出る液体が飯櫃に混入する寸前に、新八が慌てて近くにあった手頃の布を彼の顔面に押し付ける。

「ちよつとちよつと！汚いモンゴ飯に入れないでくださいよ！」

「失礼な新八君！清らかな心より生まれた涙は決して汚くなど——つて臭つ!!この布巾超臭つ!!」

今しがたまでの静穏がまるで嘘だったかのようになり、再び騒がしくなる店内。いつの間にか戻ってきてちやつかりメザシをつまみ食いする神楽を怒鳴るお登勢や、それに皆が笑う姿につられて、松陽も声を出して笑う。

まだ開店前だということにも関わらず、楽し気な声が漏れてくる『スナックお登勢』を、外の通行人は不思議そうに眺めていた。

* * * * *

「ふう、お腹いっぱいアル。」

膨れた腹を抱え、床に寝転がる神楽のだらしなく開いた口から、ゲフツとわくび嘔が零れる。あれ？デジャヴ？

朝食を終えた一同は片付けも済ませ、スナックお登勢の従業員三名を除いて再び上階の元万事屋に集まっていた。昨日と同じく桂がテーブルに紙を広げ、段蔵が書記を担当している。

「よし、ではまず昨夜に俺と銀時、そして高杉を含めて話し合ったことを皆に伝えようと思う。藤丸君は既に承知していることだが、これより我々は異変の起こっているこの江戸の調査を行いたいと考えている。」

「それで、俺やカルデアのサーヴァント面々にも協力をお願いしたいらしいんだけど、皆もいいかな？」

「もつちろん！僕達は喜んで力を貸すよ、ねっエリちゃん段蔵ちゃん？」

「はい。マスターの命とあらば、この段蔵謹んでお受けいたしまする。」

「もう、アタシは燦然と輝くネオンの街を見に來ただけだったのに……まあいいわ、仔犬はアタシがいなくちゃ只のへっほだからね。しょうがないから助けてあげる！」

すんなりと快く引き受けてくれた三騎のサーヴァント達に、藤丸は「ありがとう」と心からの感謝を口にする。桂も安堵に胸を撫で下ろした。

「それで、調査つつつても具体的にどうすんだ？定番の聞き込みだったって、ここの奴らに俺らの記憶が無いんじやあアテがねえだろ。」

首を捻った銀時の頭に乗るフオウも、「フオウ？」と小首を傾げている。ふりふりと動くモフモフの尻尾が鼻先に触れ、「わぶしゅんっ！」と定春が大きなくしやみをした。「それでもやるしかあるめえよ、銀時。今はどんな些細な情報でも欲しいところだ。それに先……松陽の記憶が戻る手掛かりも見つかるとかももしれねえからな。」

「……すみません、私も一刻も早く思い出せるよう努めますので——」

「や、貴方は悪くねえ。出来ることは俺達でやるから、自分のペースで頑張りたいいな。」

しゅんと落ち込む松陽に、光の速さでフォローを入れる高杉。普段のポーカーフェイスからのあまりのギャップに、藤丸を始め一同は開いた口が塞がらないでいた。

「おーおー、流石は松陽先生過激派の高杉晋助くんだなあ？」

「何だ銀時、飯後のウォーミングアップなら付き合つてやろうか？終わつた後にテメエが地に足着けてる保証は無えが。」

「そつちこそ、痛くて松陽に泣きついたりなんかみつともねえ真似すんじゃないぞお？」
再び起こる一触即発ムードに、居間の空気が険悪になる。どうしてこの二人はいつもこうなるんだ、と藤丸が心の中で呟きながら狼狽えていたその時、ポンツ、と突如彼らの横にエリザベスが出現した。

「いい加減に」「しやがれっ!!」と各々書かれたプラカードを両手に携え、勢いよく振り下ろしたそれが両者の頭に直撃する。

「んがっ!!」

揃つてくぐもつた声を上げ、轟沈し床に倒れる二人の男達。役目を終えた桂の式神エリザベスは、登場した時と同様にまたポンツと音を立ててその姿を消した。

え？フォウ君なら案の定プラカードが来る前に避難したよ？今は松陽の膝の上で何とも気持ちよさそうにリラックスしてるぞ。

「全く、奴等は……さて、話を戻そう。」

「ツラクーん、銀ちゃんとスギつちはこのままでいいの〜?」

「ツラじやない桂だ。いずれ勝手に起きるだろうからな、そのまま放っておけ……:で話は戻すが、調査といつてもこの広い江戸だ。どこから手をつけてよいのか正直俺にも分からん……:そこで提案なのだが、この人数からグループを分け、それぞれで調べものに当たるといふ案は如何いかだろうか?」

「賛成アル!何か修学旅行みたいでわくわくするネ!」

「神樂ちゃんたら、遊びじやないんだから……:でも確かに、そのほうが効率も良さそうですね。僕も賛成です。」

「うむ、皆もそれで良いか?」

桂の問いに、皆が首を縦に動かす。床に転がった二名は反応せず、未だ頭上にピヨピヨと小鳥が飛んでいた。

「ではグループだが、銀時と高杉、そして俺を筆頭とした三つに分けようと思う。これに新八君やリーダー、定春君にフォウ殿、そしてカルデアのサーヴァント三騎を分けて構成したいのだが、さてどう分けたらよいものか?」

「ちよつとツバメ、仔犬と松陽はどうすんのよ?」

「案ずるな、それについてもちゃんと考えてある……:藤丸君、君は松陽殿と二人ペアで、いずれかのグループに入ってもらえないだろうか?」

「へ？俺が、松陽さんと？」

「うむ。マスターである君なら、いざという時は令呪を以てサーヴァントを呼び寄せることも可能だ。それに君と一緒にであれば、銀時達も俺も安心出来る……頼めるか？」

桂のあまりに真つ直ぐな目に息を？むも、藤丸はすぐに頷いて肯定を示した。

「藤丸君、くれぐれも足を引つ張らないよう努めますので、よろしくお願いしますね。」

「はい！こちらこそよろしくお願いします、松陽さん。」

「それじゃツラ君、僕らはあみだくじ作つて決めちゃうから。マスター、どこに入るかわかつたらすぐに教えてね〜！」

アストルフオはエリザベートと共に段蔵の元へと集合し、筆記用の紙の上にやたらと線の多いあみだくじを作成し始める。

「なあなあ藤丸、私お前と松陽と一緒にいいネ！私のいるグループに来るアル！」

「神楽ちゃん、まだ自分の所属するところも決まっていなから、藤丸君に迷惑かけちゃ駄目だよ。ほら、僕らも段蔵さんのとこ行こう？」

新八に首根っこを掴まれ、ぶ〜！と膨れつ面のまま連行される神楽を苦笑しながら見送っていた藤丸。その時、不意に強い力で何者かに両肩を掴まれた。

「んで、藤丸……お前は誰のグループに入るんだ？ん？」

「心配するな、どれを選ぼうがお前さんを責め立てたりなんざしねえよ……だから

よく考えて選択するんだな。ん？」

それぞれの手と声の主………いつの間にか復活していた銀時と高杉は、その面に穏やかな笑みを浮かべている。だが穏やかなのはあくまで表面上の態度だけ、藤丸が自分のグループに入るよう、無言ながら伝わってくる圧力に、藤丸はたじろいでしまう。

「ええ、何コレ………乙女ゲーだったらめちやくちや嬉しいシチュエーションだけど、俺男子だし………っていうか俺と行動したいってより、松陽さんと一緒にグループになりたいって魂胆が見え見えなんだけど、お二人さん？」

「こら、よさんか貴様ら！すまないな藤丸君、こいつらのことは放っておいて、君の意思で決めてもよいのだぞ？何だったら俺のところに来ないか？んまい棒もあるぞ？ん？」

笑顔で駄菓子差し出してくる桂。だが彼も、前者の二人と同じオーラを放っているのを、藤丸は即座に見抜いた。

「あつ、ずりいぞツラ！賭賂わいろなんか送ろうとしやがってこの卑怯モンが！藤○君かテメエは！！」

「誰の唇が真つ青だと？！貴様のそういうねちねちしたところこそ、永○君そつくりではないか！その天パ固めに固めて玉ねぎヘアーにしてやろうか？！」

「何で具体例にちびま○子ちゃん引つ張り出してんだ、こいつ等………んで、どうすんだい藤丸？」

「えええ………松陽さん、誰にしますか？」

「私は藤丸君の一存にお任せしますよ♪」

「まさかの丸投げされたアアアアっ!!」

三人の男達に詰め寄られ、藤丸は頭の中で悩みを悩む。

暫く考え込んだ後、彼は意を決したように大きく頷き、息を吸い込んだ。

「えっと、それじゃあ俺は——」

「じゃんじゃやくんっ！ここで突然登場、アストルフオが次回のお知らせをするよ！この次の回は、な・な・何と！驚きの三本立てっ！銀ちゃん・ツラ君・スギつちの誰かを選ぶことによって、各グループの小話が読めるんだって！一つだけ選んでもよし、も

し三択せくんぶ読んでくれると、書いてる人がすつごく喜ぶよ！僕は一体誰のグループに入るのかなあ？それじゃ、また次回会おうね！ばいばい！」

【肆】《其の一》「銀さんと行くよ」

「えっ何、マジで俺とにすんの……？ギャツハハハア！ざくんねんだったなあヅラに高杉クン？あら嫌ねえくんな露骨に悔しそうな顔されてもさあ、結果として藤丸が選んだことに変わりないんだしい？そつかそつかあゝ藤丸はそんなに銀さんのこと………え？一番気心が知れてるから、変に緊張しなくてよくて楽そう……？ふ、ふくん。別にいいんじゃない？そんな理由でも。という訳で悪いねお二人さん、松陽と藤丸は今日一日俺と——あ痛っ!!ちよっ脛すね、脛は蹴らないでマジでっ痛い痛い痛いイイっ!!」

* * * * *

「ん〜………やっぱり思ってたより集まらないなあ。」

メモ帳の一ページにも満たない記録を何度も眺め、藤丸は溜め息を吐く。

こちら銀時をリーダーとした、藤丸と松陽そして段蔵とフオウのメンバーを伴ったグループは、繁華街にて調査の定番である聞き込みを行っていた。

通り行く人に声を掛けては、江戸の事を尋ねていくだけの地道な作業。時には無視をされ、時には侮蔑的な態度を取られつつも（因みに松陽がこの扱いを受けた時、その相手を殺さんとはばかりに嚇怒した銀時を必死に皆で押さえつけた）、それでも中には熱心に話を聞き、分かり易く懇切丁寧に答えてくれる者達もいた。

そんな作業が数時間に渡り続いたため、当然疲労も溜まる。ならばここで一時休息を取ろうと、藤丸達は騒がしい繁華街を離れ、街中のとあるこの公園を訪れていた。

「ていうか、この公園やたらと広くない？もう疲れた、歩きたくないわ……。」

「俺より若え奴が弱音なんか吐いてんじゃねえよ、それに都心の公園なんてどこもこういうモンだろ。TOLとかUOJみてえに地図無しだと歩けねえパークに比べりや可愛いもんだぜ？」

「知らない知らないっ！俺の中での公園は何にもない真っ新たな平地に土管が三つ重なって置いてある殺風景なところだもん！それで近所には怒ると怖い雷おじさんが住んでるんだもんっ！」

「それ公園じゃなくて別次元の空き地イ！もうっそんな駄々ばつかこねってと、さつき買ったこのチューパットはあげませんよ!!」

掲げた袋の中でキンツキンに冷えているであろうチューペット、もといチューパットを人質に取られ、藤丸はしぶしぶ歩を進める。重い足を持ち上げて動かすのも怠だるくなってきた藤丸を、フオウを腕に抱いた松陽が横から激励する。

「藤丸君、もう少しだけ頑張つてみましょう？きつとどこかにお休み出来るところがあ
る筈……ですよね？段蔵さん。」

「ええ松陽殿、実にいいタイムミングです。皆様ご覧ください、あそこに全員が腰掛けられ
る場所を確認いたしました。どうかあと数十歩のご辛抱を。」

「フオウ、フオウツ。」

「よかつたあ！さあ二人とも、もう目の前ですから頑張りましたよう！」

右手で銀時を、左で藤丸の手をそれぞれ掴み、松陽は段蔵が示した先……街灯の下の
空いたベンチへと早足で進む。引つ張る力は思いの外強ほかく、あれよあれよという間に三
人はベンチに辿り着いた。

「ああ〜疲れたあつ……もう足。パンパンだよ。」

漸く腰を下ろし、脹脛ふくらはぎを摩さする藤丸の隣に銀時が座り、その彼の隣に座った松陽の腕か
ら出たフオウが、定位置である銀時の頭へと登つていった。

「皆様、お疲れ様でした。段蔵が見張りをしております故、どうぞごゆるりと休まれてく
ださい。」

「んな固いコト言わねえでよ、お前も一息つこうぜ？ほらっ。」

銀時は袋から出したものを、段蔵へ向けて投げる。咄嗟に両手で受け止め確認すると、それはペットボトル程の大きさのオイル缶であった。

「あれ？銀さんたらいつの間に……？」

「なあに、お前らが駄菓子屋で悩んでる間に、隣の店でちよろつとな。『俺が知ってた頃』のたまにもよく買つていったヤツと同じモンだから、多分口に合うと思うぜ。」

「何と、私達が知らない間に……銀さんはお優しいのですね！」

松陽の朗らかな笑顔と称賛に、銀時は染めた頬を搔いてはにかむ。やはり情愛を抱いた者に褒められるというのは、幾つ歳を重ねても嬉しいものである。

「銀時殿……このような段蔵にも気を使つていただき、本当にありがとうございます。」

「そんな言い方すんなつて。俺達やもう仲間だろ、なつ？」

そう言つて皆に同意を求めれば、全員首を縦に振る。感奮する心を抑え、段蔵はオイル缶の蓋を開ける。密閉された容器から漂う独特の香りを堪能し、早速口をつけて液体を含む。暫し間を置いてからゴクリ、と喉の奥にオイルを流し込んだ段蔵の表情には、喜悦の色が浮かんでいた。

「にしても銀さん、よくお金なんて持つてたね。」

「あ？ああ、ポケット漁ってたらまさかの千円が一枚出てきたんだよ。多分パチンコに使おうと思って突っ込んで、そのまま忘れてたんだろな。」

「パチンコもいいけど、いや良くないけど。ちゃんと新八君と神楽ちゃんにお給料払わなきゃ駄目だよ。あと家賃ね、生まれてこの方あんなにドン引きしたの初めてだったわ。」

「わーってるよ。ったく、てめえも小言の多い奴だな。二代目新八でも目指してんのか？それならまず人間やめて、眼鏡として生まれ変わるところから始めねえと。」

ぶつぶつと零しながら、銀時は袋の中を漁る。彼がそこから取り出したのは、先程もその存在をお伝えした冷凍チューパット。それも二本ある。

「やべっ、ちよつと溶けてきてんな。藤丸、松陽、お前らどっち食う？」

「んぐグレープ味とソーダ味かあ、どっちにしようかな……松陽さん、お先にどうぞ。」

「そんな、藤丸君からお決めになってください。私は頂ければどちらでも構いませんから。」

「いや、ここは年功序列ということで先にどうぞっ。」

「いえ、お若い方からお先に。まだ伸び盛りでしょうから、美味しいものをたくさん摂ってしっかり成長なさらないと。」

「いやいや、松陽さんこそお先に。」

「いえいえ、藤丸君こそ。」

「いやいやいや。」

「いえいえいえ。」

「ちよつとお！いつまで譲り合いのラリー続けてやがんだっ!!ほら見てどんどん溶けてきちやつてる!!つーかどつちでもいいから早く決めてくんないかなあ!!因みに俺グレープね!」

ぼたぼたと水滴の零れるチューパットの棒の^{つま}ところを摘んだまま、焦燥^{しょうそう}した銀時が叫ぶ。

「あ、ゴメンごめん。それじゃあえつと、俺もグレープにしようかな。」

「では私は綺麗な青色の……ソーダ、というのでしたっけ?そちらを頂きますね。」

「フォウーウ、フォウーウ! (グレープ、グレープ!)」

「よし、お前もソーダだな。これできっちり分かれたぜ。」

「キュツ!!フォウウウウウツ!! (バリバリバリツ)」

「痛でででででっ!!何だよ^{むじ}筆^{むし}るなって!!やめてエエエ禿^はげちやうウウウウツ!!」

「あつこら、駄目ですよフォウさん!」

突如暴れて銀時の天^{なだ}パを^{なだ}筆^{なだ}り出すフォウを、松陽が慌てて引き剥^はがす。揉^もみくちやに撫^なでまくって何とか宥^{なだ}めると、フォウは憤^{ふっく}みながらも漸^{なだ}く落^おち着^きいた様子で、松陽の膝

の上には大人しく納まった。

「あく、ひつでえ目にあつた……にしても、こんな溶けてんじや割るのは危険だな。段蔵、悪いけど苦無貸してくんない？」

そう言つて銀時が振り向いた先には、何と地べたに座り林檎のように赤い頬でオイル缶を煽る段蔵の姿。彼らのよく知る静穩な彼女はどこにもいない。

「だ………段蔵？」

「んあ………ひつく、ふあい何れしよう？金時ろの？」

ふにやりと緩みきつた笑顔を浮かべ、段蔵が答える。舌も碌ろくに回つておらず、彼女が酔つ払っているのは明らかだった。

「金じゃねえよ銀つ！おいおいどうしたよ？めちやくちや悪酔いしてんじやねえか。」

「何を言うのれふか金時ろの！段蔵は絡繰だんろれふよ！酔つばらうなんれあるわけないひやないれふかく。ひよれより苦無くによいれふね、どこだっけなあ？」

がさごそと粗雑な手つきで、段蔵は懐にしまっているものを漁る。あーでもないこーでもないと次々に取り出されては地面に転がる暗器の数々を、銀時達は呆然と眺めていた。

「段蔵、どうしたんだらう……？昨日たまさんから貰つたオイルを飲んでた時は、割と平然としてたのに……。」

「藤丸、こりやひよつとするとオイルの種類が昨日と違うからじゃねえのか？ほら、安い酒つてよく悪酔するつていうし。」

「……こんな姿、カルデアにいる小太郎や千代女には絶対に見せらんないや。」

藤丸が本日二度目となる溜め息を吐いたのと、「あつた〜！」と段蔵が歓喜の声を上げたのは、ほぼ同時のタイミング。

「は〜い金時ろの、どうぞぞ〜。」

こちらに向けられた刃先に触れないよう、銀時は慎重に柄の部分つかを掴む。あ、決して洒落ではないよ。彼が受け取ったのを見届けると、段蔵はにこにここと微笑みながら再びオイルの缶を煽った。

「と、ともかくこれでチューパットが食えるな。もう大分溶けてつけど、まあ大丈夫だろ。」

銀時が向けた刃先は、まずはソーダのチューパット。真ん中の凹みを切った途端に溢れ出る青い甘露を零さないよう気をつけ、やつとの思いで二等分したそれらを松陽へと渡す。

「ほらよ、服に零さないよう気をつけろよ。」

「わあつ、ありがとうございます〜！」

銀時から受け取ったチューパットを両の手に持ち、一つは自身の口元に、そしてもう

一つは膝に乗るフォウの元へと近付けていく。

「ンキュツ、フォウフォウ。」

フォウが小さな舌で中身を舐めとるのを見届けてから、松陽も半分ほど溶けたチューパットを吸う。初めて味わうソーダの爽やかな甘味に、自然と頬は綻んだ。

「どうだ松陽、美味いか？」

「はい！とつても美味しいです、ねえフォウさん？」

「キューウ。」

「そっか、もつとしつかり凍ってたら良かったんだけどな……さて次はグレープを。」

松陽の満足気な様子を見届けた後、銀時は自分達の方であるグレープ味のチューパットに刃を当てる。するとその時、藤丸がふと思いついたように口を開いた。

「あつ、そうだ銀さん。長いの付いてるほう頂戴？俺そつちがいいや。」

ブツシユウウウウウウウツ！！

突として、凹み部分から溢れた紫の甘い液体。それは放物線を描きながら飛んでいき、その勢いを殺さぬまま藤丸の左眼球に直撃する。

「オギャアアアアアツ！！目が、目がアアアアアアアツ！！」

地面に倒れ、ゴロゴロと転がり悶える藤丸に、松陽と段蔵（へべれけ状態）が慌てて駆け寄る。何故か彼の着ている礼装、カルデア制服には奇跡的に染み一つ付着していない。

「藤丸君、大丈夫ですか?！」

「待つれくらひやいまひゆた〜! 只今^{たらいま} 段蔵^{だんぞう}が拭くもによをー!」

そう言つて只でさえ布地が薄い衣服を更に脱ごうとする段蔵を、藤丸は片目を押さえたまま必死で止める。松陽が差し出してくれたハンカチ（お登勢が持たせてくれた）で患部を拭くと、俯いたまま黙っている銀時へと向き直る。

「もうっ! 何すんだよ銀さん!」

頬を膨らせ、割と強めに怒る藤丸。しかし漸く面^{おもて}を上げた銀時の発した答えに、藤丸は更に驚愕することとなる。

「……………すまねえな、藤丸。」

「むっ……………まあ、そんな根に持つほど怒つてもないしい? 次からは気をつけて——」
「お前にや悪いが、チューパットの長いほうは俺が頂くことになつてんだよっ!!」

「つて、ハアアアアアアアッ^{!?}」

あまりに予想外の発言に、藤丸を始めとし銀時を除いた面々も、開いた口が塞がらない。そうしている間に二等分したチューパットの、ヘタと呼ばれる短い棒のついたほう

を大きく開けた口元に持つていこうとする銀時の手を、我に返った藤丸がすかさず止めた。

「ちよちよつと待つて！ズルいよ銀さんつ！俺だつて棒ついてるほうがいい！」

「藤丸う、俺もこればかりは譲れねえよ。チューパットの長いほうを欲するのは、同じく長い棒チューパットを持つ雄として当然のこと。それは最早本能と言つても過言じゃねえ……どうせまだ毛も生えてねえだろうお前にや、短いのがお似合いだぜ？」

「見たことも無いくせに何言つてんだアンタ!!俺だつて立派な棒チューパットくらい持つてるわあつ!!」

「うるつせえ！いいから長いほうを寄越しやがれ青二才つ!!」

「イ・ヤ・だ・ねつ！断固拒否だよこのアホ天パくつ!!」

片や長いほうを取り合い、片や短いほうを押し付け合う。数多の戦場を駆け抜け、白き夜叉と畏怖された男と、幾十いくそもの世界を跳躍した、人類最後の希望と呼ばれた少年が織り成すそれは、傍はたからすればあまりにも不毛で、世界一どうでもいい戦いであった。

「長いのやら短いのやら……あのお二人は、一体何の話をされているのでしょうか？」

首を傾げる松陽と、残り少ないチューパットを傾けてこくこくと喉を鳴らすフオウ。

すつかり溶けたチューパットの中身が組み合った手に零れようと構わず、両者一步も譲らずに取つ組み合いを続けていた時であった。

「おっ?」

「あ、あれ?」

不意に、掌の中にあつた冷たい感覚が取り払われる。揃つて顔を上げれば、そこには二人が取り合つていた筈のグレープチューパットを二つとも掲げる段蔵の姿。

「もうっお二人ふひやりろも! 喧嘩はこの段蔵だんざうが許ひまひえんよう! 喧嘩の元もとになつひえるチューパットなんかあ……:……こうれふっ!」

次の瞬間、ブチュツ!と音を立て、二つのチューパットが段蔵の手によつて爆ぜる。

「~~~~~!!」

ほぼ液体となつて零れていき、新たな染みとなつて地面へと吸い込まれていくチューパットの姿に、銀時も藤丸も声にならない悲鳴を上げる。

幽暗の中の、静まり返つた公園の一角で起こつた悲劇……:……何とも不憫な二人に構うことなく、チューパットを食べ終え満腹になつたフォウはベンチに横になると、大きな欠伸を一つかいた。

【肆】《其の二》「桂さんについていくね」

「ほう、俺を選んだか……中々聡明な判断だな、流石は世界の危機を救ったマスターとしての器を持つだけのことはある。ふふつ、そう謙遜するな。まあ俺はあの二人とは違って、無闇に事を荒らげたりなどはせんから安心するが良い………とここで藤丸君、攘夷活動というものに興味はないか？え、別に無い？ああ………そう………」

* * * * *

「わあ………凄いです！」

天井まであるかのような高さの本棚がずらりと並ぶ光景に、松陽は目を輝かせる。

様々なジャンルの本から雑誌に始まる書物、そして過去の瓦版までもが保存されたこの場所は、江戸が誇る大図書館。ここならば何かしらの情報を得ることも出来るだろうと、桂をリーダーとした藤丸に松陽、そして新八とエリザベートのグループは、この場

所に赴おもむいていた。

「どうだ藤丸君、江戸にはこんな立派な図書館もあるのだぞ。」

「ん〜……悪いけど、カルデアの図書室のほうがデカイ、かな。」

「確かに、僕も短い時間の中でカルデア内を色々と見学させていただいたんですけど、やっぱりあそこには敵わないですね……。」

「そ、そうなのか……カルデアとは誠に凄い機関なのだ、是非俺も行つてみたいものだ。」

得意げに語つたつもりの桂だったが、藤丸と新八のドライ過ぎるリアクションにあつさりとし蹴いっしゅうされてしまい、しゅーんとしよげてしまう。

「ふうん、まっアタシのチエイテ城よりは量も広さもあるじゃない……あら〜！」

ふとエリザベートが見つけたのは、表紙を見せるようにして並べられたティーンズ雑誌の数々。女性向けの華やかなデザインや着飾つたファッションモデルの写真に、彼女は直ぐ様釘付けになった。

「きゃ〜可愛いっ！こんな素敵な雑誌も置いてるのお!! いずれここでも輝くアイドルとして、この国のカルチャーも取り入れないといけないわね!」

嬉々とした甲高い声が広い館内に響き、何人かの利用客や職員が口元に指を当て、静粛を促す。藤丸や新八が彼らに何度も頭こぶを垂れる傍らで、エリザベートは既に手に取つ

た雑誌を読み耽^{ふけ}っている。

「ふむふむ、今江戸で話題の超人気アイドル、寺門通は——」

「ちよ、ちよつとエリちゃん、調べ物はどうするの？」

「心配しないで仔犬、これ読み終わったらちゃんどやるから。まずはライバルの情報をしっかりと把握しておかないと……!」

ぶつぶつと呟きながら、エリザベートは手にした雑誌の誌面を食い入るように眺めている。そんな彼女のほうばかり向いていたせいも、藤丸達は松陽の姿がないことに気が付くのが遅くなってしまった。

「あれ？松陽さんがいないよ？」

「本当だ、今まで近くにいたと思ったのに。」

「何だど!!」のほほんとしている場合ではないぞ君達、これは一大事ではないか！先生、松陽先生エエエエツ!!」

びりびりと空気を震わす桂の叫び声、またも利用客や職員に怖い顔で牽制^{けんせい}され、藤丸と新八はまた何度も頭を下げる。

するとそんな桂の視界に、絵本コーナーに群がった子ども達の姿が映る。幼子達に囲まれている人物を確認した途端、桂は駆け足でそこへと向かっていった。

「先せ………松陽殿!」

名を呼ばれると、松陽は頭だけを動かしてこちらを向く。子ども達を中心に膝を折って座る彼の手には、幼児向けの絵本が広げられていた。

「ねーねーお兄ちゃん、早く続き読んで。」

「お兄ちゃんつ、次はこのお話がいい！」

「あくズルい！次は僕だよっ！」

「ここらこら、喧嘩はいけませんよ。後でちゃんと読んであげますから、皆さんも順番はきちんと守ってくださいね。」

穏やかな松陽の言葉に、「は〜いっ！」と彼らは元気よく返事をする。その光景を呆然と眺めていた桂の後ろから、藤丸と新八が遅れて到着した。

「わっ。松陽さん、これは……？」

「ああ藤丸君、実は気になる本があったので手に取っていたのですが、どうやら自分でも意識しないうちに、内容を声に出して読んでいたようでして。それで気が付いたら、この子達が私の周りに……。」

「お兄ちゃん、読むのとってもお上手だもん。もつと聞かせて！」

「私も聞きたあい！ねえお兄ちゃん、早く早くう！」

期待と好奇に輝いた瞳を向けられ、松陽は困ったように笑う。桂はどうしているのかが気になり、藤丸と新八は未だ微動だにしない彼を横目で見る。

すると、そこにあつた表情は困惑でも焦燥でもなく、どこか慈愛に満ちた微笑を浮かべた桂は、松陽と彼に戯れる子ども達を見守っていた。

「申し訳ありません、小太郎さん……今すぐにそちらへ戻りますので。」

「……いいえ松陽殿、貴方は子ども達の相手をしてあげてください。彼らへの朗読が終わってからこちらに来ていただいても一向に構いませんので。」

「え？しかし……。」

「大丈夫ですよ。エリちゃんだつて向こうで雑誌に夢中になつたまま動きませんし、それにせっかくですから、子ども達に絵本を読み聞かせてあげてください。僕も小さい頃、姉上にそうしてもらつた時に凄く嬉しかった記憶があるから……まず僕らだけで調べ物をしてますので、心配ないですよ。ねっ藤丸君？」

新八に同意を求められると、藤丸も素直な気持ちで首を縦に動かし肯定を示す。

「では二人とも、行くとするか。松陽殿、あちらの開けた場所にありますので、後でお会いしましょう。」

「すみません、ではまた後ほど。」

こちらに小さく会釈をし、再び絵本へと向き直る松陽。そこに描かれた白い侍の絵を視界の端で確認してから、藤丸は踵を返して桂の背を追いかける。

「……懐かしいな」と零した桂の呟きは、誰かが頁を捲つた時の、紙が擦れる音に紛れ

てしまう程に渺びようなものであつた。

「それで桂さん、俺達はどんな資料を探してくればいいかな？」

「ん？ふむ、そうだな……では君達には、ここ数年の新聞記事や瓦版などを漁うってきてほしい。この図書館にはそういったものもすっかりと保存してあるからな。」

「成程、そういった刊行物なら詳しいことも載のっているかもしれないからね。」

「そつか、分かつたよ桂さん。」

「うむ、頼んだぞ……ところで藤丸君、気のせいなら悪いのだが、さつきから君の俺に對しての口調が軽いものになつてやしないか？」

「ああ、それなら気のせいじゃなくて本当だよ。何でも、俺も新八君も『桂さん』呼びだから、書く側も読む側も分かりにくいつていう書いてる奴の一身上の都合により、今回から変更させてもらつたんだ。というわけでよろしくね。」

「うーむ、納得はいかんが仕方ない……のか？まあそれは置いておくとして、俺もあらゆる方面から資料になりそうなものを探してみる。そちらも見つけたら、先程松陽殿に示した場所に集合だ。」

桂はそう言い残し、立ち並ぶ本棚と本棚の間へと姿を眩くらませる。

「藤丸君、僕らも行こうか。」

新八の声に頷き、二人は静閑な図書館の中を歩き始める。

途中で行き会った職員に場所を尋ね、何度も道を間違えながらも二人が辿り着いたのは、過去の新聞記事などがファイルに保存された、図書館でも奥の方にある一角であった。これだけの大きさの施設ということもあり、目の前に広がる膨大な数のファイルが並ぶ本棚に、藤丸と新八は息を？む。

「えつと……これ全部の中から、よさげなものをチョイスすればいいんだよね？」

「つて言つても、この量じゃあ……よし藤丸君、ここは二手に分かれて探してみよう。多分その方が時間の短縮にもなると思うし。」

「うん、そだねー……それじゃ俺は適当にこつちから漁ってみるよ、新八君も頑張つて。」

「藤丸君こそ、何か見つけたらすぐに声を掛けるよ。」

互いに手を振って別れ、一人になった藤丸は高く積み上げられたファイルの山を改めて見上げ、溜め息を零す。

「……とは言つたものの、どこから手エついたらいいんだろ？コレ。」

首を傾げ、とりあえず近場にあつた一冊を取り出し、広げてみる。数ページに渡り保管されていたのは、過去に起きた時事の新聞記事。暫くページをめくり続けていた藤丸だが、やがて目ぼしい内容が乗つてないことに再び溜息を吐き、パタンと閉じたそれを元の場所に戻した。

途方に暮れながら歩を進め、角を曲がったそんな時、ふと上げた視界に動くものを発見する。

それは、こちらに歩いてくるファイルの山……訂正、高く積み上げられたファイルの山を抱えた誰かが、こちらに向かつて歩いてくるのだ。ふらふらと不安定に一步を踏み出す度に、てつぺんに置かれた一冊が今にも落ちそうに揺れる。あまりに危なっかしいので声を掛けようとしたその時、藤丸の視界に影が差した。

「ふぎやっ!!」

ゴンツ、と鈍い音に続く、頭部に走る鈍い痛み。頭を押さえて蹲うずくまると、痛みを与えた犯人である一冊のファイルが目の前に落ちてきた。

「わああっ!!君、大丈夫かい!!」

慌ただしくこちらに駆け寄ってくるのは、たくさんのファイルを抱えていたあの人物であろう。酷く狼狽した声が、今しがたの事故は故意でなかったことを表していた。

患部を手で摩さすりながら顔を上げると、目の前にいた男性と目が合う。きちんと着込んだ着物に毛先の跳ねた黒髪を一本に束ねている彼は、生真面目まじめそうな面おもてに不安を滲にじませている。

「本当にごめんよ!!怪我とかしてないかい!!」

「いえ、俺は大丈夫ですよ。それより……。」

藤丸が指したのは、先程落下してきたあのファイル。内側のポケットから飛び出した中身が、床一面に散乱していた。

「ぎやつ！ た、大変だああ……！」

男性は、慌ててそれらを拾い始める。藤丸も自然な流れでそこへ手を貸すと、恐縮した彼は「あ、ありがとう……。」と小さく礼を言った。

「それにしても、凄い量のファイルですね。何か調べものですか？」

「ああ、ちよつと仕事で色々と使うもんで……それにしても君、見かけない顔だね。俺しよつちゆうこの図書館使うんだけど、ここつて設備はいいのに利用客は大体同じ人達が多いんだ。だから不思議に思つてね。」

「へ、へえ……記憶力いいんですね。」

「えへへ、まあね。仕事の仕事だからさ。」

照れ笑いを浮かべる男性を前に、藤丸は正直焦つていた。ここで下手な答えを言えば、疑われるに決まっている。異次元から来ましたくなどと馬鹿正直に話すわけにもいかず、どうしたらよいものかと思案していた藤丸であったか、その懊惱おのうは次の瞬間あっさりと消え去る。

「分かった！ もしかして学生さんかな？ 課題に関する調べもので来たんだろう？」

「え？ えつと……はい、まあそんなところですよ、ね。」

「やっぱり。内申とかレポートとか大変そうだもんね、でも今のうちに下積みをしつかりしておけば、将来は安泰した職に就けると思うよ。頑張つてね！」

よく分からない結論の末に何故が励まされ、まあでも変に疑われることもなくなつたかと、苦笑する内心で藤丸は安堵する。

「……はいどうぞ、これで全部ですかね？」

「ありがとうく助かったよ……げっ、もうこんな時間か。早く戻らないとまた『副長』にどやされちゃうなあ。」

腕時計の示す時刻を目視し、男性は渋い面持ちで立ち上がる。そして山積みになつたあの大量のファイルを再び抱えると、急いだ様子で体を反転させる。

「それじゃあ俺、もう行かないと。課題頑張つてね学生くん！」

去り際にこちらに笑顔を向け、男性は再びよろめきながら歩き出す。危なっかしい動きに何度もハラハラしながらも、曲がり角で男性の姿が見えなくなると、藤丸は安堵の息を零した。

「……………あれ？」

ふと、何気なく自身の後方に目をやった藤丸は、そこに数枚の紙が束になつて落ちてゐるのを発見する。手に取つて確認すると、それは古びた瓦版であることにすぐに気が付いた。

「いつけない、まだ残ってたのか……!」

藤丸は直ぐ様立ち上がり、慌てて先程の男性の姿を探す。しかし曲がり角の向こうにはすでにその姿は無く、大きく肩を落としたその時、背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「あれ?藤丸君、こんなところでどうしたの?」

振り向くと、そこには両手に数冊のファイルを抱えた新八が、不思議そうな目をこちらに向けている。

「えつと……いや、何でもないよ。それより新八君、凄い量だね。」

「あはは、探し出したらキリが無くてさ。でも流石にこれは多過ぎた、かなあ?」

「それじゃあ半分持つよ、俺はこの通り成果ゼロだしさ。」

「いいのかい?これから桂さんのところに向かおうとしてたから、凄く助かるよ。ありがとう。」

荷物を半分に分け、二人は本棚の間を抜ける。暫く歩いていると、先程桂の示した場所である、大きな机のある共同スペースに到着する。真面目に読書に勤いそしむ者や、机に突っ伏して眠る者などもある中、既に椅子に座っていた桂は、こちらに近付いてくる藤丸達の気配をいち早く察知すると、読んでいた書物から顔を上げた。

「おお君達か。随分と見つけてきてくれたようだな、ご苦労。」

「いえいえ………ていうか、桂さんのほうも既に凄い量なんですけど。」

新八が見下ろす視線の先には、彼が運んできた量の二倍、否三倍はあろうかという程の、山のように積まれた参考文献の数々。ふとその中に、桂の周りを忙せわしく動く小さな影の姿がある。よく目を凝らしてみれば、それは手の平サイズの小さなエリザベスであつた。

「わっ！桂さん、何スカそれっ!!」

「ふふん、よくぞ聞いてくれたな新八君。これは既にお馴染みの、俺の式神エリザベス・マスコットサイズverだ。可愛らしいうえにお出かけのお供に最適な大きさだぞ、如何いかな？」

「いや、如何かな？じゃないですよ。それよりこんな手乗りUMA、他の人に見られたら大騒ぎですよ？」

「その点は心配ない。魔術の心得の無い者には認識出来ないよう、目晦くらましの術を施してあるからな。」

桂が答えたその時、一匹のエリザベスが彼の着物の裾を引つ張る。桂がそちらを見ると、開いた本の一節をエリザベスが指(?)で示している。

「おお、それも中々参考になるな。よく見つけてくれた。」

指でエリザベスの頭を撫でた後、桂はその手で開いたページへと触れる。するとそこ

に記された文字が一瞬だけ光った後、桂が手を持ち上げたと同時に複写された文字が浮き上がる。桂の手はそのまま開いた無地の巻物へと移動し、指を下へ向けたのを合図に文字は紙へと浸透していき、やがて黒い文字となって形もそのままに写された。

「わあお、何つー魔術的なコピー&ペースト……。」

「これならば印刷代もかからんからな。君達の持つてきてくれた資料も早速目を通したい、そこに置いてくれんか？」

桂に促され、藤丸と新八はファイルを机の上に置く。その際、藤丸が積んでいたファイルの上に雑に置いていたあの瓦版が飛んで行つてしまい、宙を漂つたそれは桂の前に降りていった。

「あつ、ごめん桂さん。それ拾つたやつだから、あんまし関係ないと思うけど……。」

「構わんよ。一応見ておくか……ふむ、これは十年前の瓦版だな。」

それを手に取り、まじまじと眺める桂。するとその数秒後、彼の顔が一気に青ざめた。

「……………馬鹿なっ!!」

ガタンツ!と椅子が倒れる音が響く。桂が突然、勢いよく立ち上がったためだ。周りにいた利用客も、そして藤丸と新八も、桂の豹変に言葉を失う。

「……………信じられない……………こんな、こんなことが……………」

ぶつぶつと一人呟く桂の額には、幾筋もの汗が伝っている。酷く狼狽した彼は何度も

瓦版に目を落としては、顔を歪ませていた。

「……………桂さん？」

藤丸が声を掛けたことにより、桂は漸く我に返る。そして気分を落ち着かせるため、深呼吸を一つ。

「……………すまない、少し驚いたものでな。俺はここで引き続きまとめ作業を行っているから、君達はまた資料を集めてくれないか？」

穏やかに微笑んでみせる桂だが、相変わらず顔色は悪い。藤丸と新八は互いに顔を見合わせた後、無言で頷いて踵きびすを返した。

「……………。」

離れていく背中を見送った後、桂はもう一度瓦版に目を落とす。

薄くなりかけた文字でそこに記されているのは、彼の最もよく知る『十年前』の出来事であった。

「……………信じられない、信じたくもない。なあ、お前もそう思わないか？」

近くにいたエリザベスに何気なく問うが、彼（？）は小首を傾げるだけ。予想していた通りの反応に苦笑し、桂は大きく息を吐いた後、天井を仰あおぎ見た。

【肆】《其の三》「高杉さん、よろしくお願いします…！」

「…………ククツ、全くお前さんも酔狂な野郎だ。敢^あえて得意でない俺を選んで何になる…………あ？んなもんとつくに気付いてたさ。お前さんが意識してなくとも、顔や態度に出たからな…………そう思ってるからこそ、もつと交流して俺をよく知っておきたい。ねえ…………そりやあ健気なこった。そーいやあ、他の奴らの班分けも終わった頃じゃねえのか？お前と松陽と、他には……………あ？」

* * * * *

「ふうんふうん、ふふふふんっ♪」

神楽は上機嫌に鼻唄を混じえながら、隣に座る松陽の腕に抱きついていて。二人を乗せた定春は、のっしのっしと歩を進めていた。

「よかったね神楽ちゃん、松陽さんと同じグループになれて！」

その隣を歩くアストルフォが声を掛けると、神楽は「うん!」と大きく頷く。

「だって、今まで銀ちゃん達大人げない大人のせいで松陽の傍にいられなかつたんだもん。でも今日は私だけの松陽アルよ! やっと独り占め出来たアル!」

神楽は松陽に抱き着くと、顔を埋めて頬擦りをする。そんな彼女に松陽は慈愛の眼差しを向け、優しい手つきで頭を撫でた。

「ふふつ、私も神楽ちゃんとご一緒出来て嬉しいです。今日はよろしく願いますね。」

「今日と言わず、いつだってお前のご守つてやるヨ! そう約束したアル!」

「僕だって同じさ、どーんつと任せてよ!」

「わんっ! わんわんっ!」

三人と一匹の間に漂う、和やかな空気。そんな彼らのアットホームなやり取りを、前方を並んで歩く二人は背中で聞いていた。

「……大人げない大人って言われちゃってますけど、高杉さん。」

藤丸は恐る恐る、隣を歩く高杉に話しかける。啜えた煙管から紫煙を燻らせる彼の表情は、不機嫌そのもの。眉間に皺を寄せ、こちらには目も合わせてくれない高杉に、負けてたまるかと藤丸は声を掛け続ける。

「い、いやあまさか、神楽ちゃん達と同じグループになるなんて。運命って分からないも

のですよね。」

「……………」

「それにしても、俺らのとこだけやたらと人数が多いような気がしますが、別に他のクループメンバーのお零れってわけじゃないみたいですよ？ちゃんと頭捻って考えた末の結果だつて、書いてる奴は言つてましたし。」

「……………」

「えつと……………そうだ。桂さんから貰つたヤクルト……………じゃなかった、ヤクルト飲みません？」

「ああ、飲む。」

思いがけないタイミングで口を開いた高杉に驚き、「うおわっ!!」と間拔けな声を上げる藤丸の手から、高杉はヤクルト……………じゃねーやヤクルトを抜き取る。煙管を消失させ、銀紙の蓋を剥がして一気に呷ると、高杉は息を零した。

「なあ、藤丸。」

「ひやいつ!!もももしかして、温ぬるいの駄目でしたか?!!」

「別に構やしねえよ、まあ出来たら冷えてたほうがよかつたが……………そんなことより、さつきから変に俺に気を回すんじゃないやねえ。確かに機嫌は悪いが、別にお前さんに対して怒つちやいねえよ。」

「ほ、本当ですか……?」

「寧ろ感謝してゐるくらいだ。お前がいなきやあのじゃや馬姫とポンコツ野郎、それにデカ犬のお守を俺一人で担わなきやならなくなるところだったからな……それに。」

ゆつくりと、高杉は徐に振り向く。右の瞳に映るのは、神楽やアストルフオと談笑する松陽の姿。樂し気に笑う彼を無言で見つめる高杉の、出会つてから今日までに見たことが無い彼の温顔に、藤丸は釘付けになつていた。

「兎に角なあ、別にこつちが何もしちやいねえのに、そう一々びくつかれても目障りだ。それに契約こそ交わしちやいねえが、俺とお前はサーヴァントとマスターだろ。お前が話しかけりやあ俺はそれに答えるし、指示されりやあまたそれに応える。それでいいだろ?」

「えつ、う……うーん。」

「何だよ……まだ不満があるつてのかい?」

煮え切らない態度の藤丸に、高杉は少し苛立ちを見せる。そこから二、三度唸つた後、藤丸は高杉の顔を見て口を開いた。

「そういうドライな関係じゃなくてさ、もつとこう……仲良くなりたんです、高杉さんと。」

「……………」

素つ頓狂な彼の言葉に、思わずヤクルコの殻を取り落としてそうになる。

「確かに、サーヴァントとマスターの關係つてそんなものもあるかもしれませんが、けどそんな上部だけの業務的なモノなんて、只つまらないじゃないですか！俺はマスターとして……いや、その前に藤丸立香として、皆の事をもつとよく理解したい。そして理解した上で、皆と共に走っていきたくないと考えてるんです……高杉さんには、余計なお節介だと思われるかもしれませんが。」

「ああ、その通りだな。」

間髪入れずに返ってきた答えに、敢え無く轟沈する藤丸。落胆し項垂れる彼の頭に、不意に置かれた温かな手。

「だがなあ、別にお前さんの事を嫌つてゐるつてわけじゃねえよ。俺あこの通り馴れ合いは好かねえ性分だから、勘違いされても仕方はねえが……この異変の起きた世界で、銀時達と共に松陽を救つてくれたお前だ。一応信頼は置いてるんだぜ、カルデアのマスターさんよ？」

「うむむ……まだ他人行儀感が抜けてない気がする。」

「贅沢言うな、俺からの信頼をこれ以上に買いたいつてんなら、もつと精進しろ。あとさつきから聞いてりゃその謙った口の利き方、うつとおしいからそれも直せ。いいな？」

「あうっ………はい、じゃなかった。うん、分かったよ。」

額を軽く小突かれ、藤丸は頬を膨らせながらも、こちらを向いたその面かおには、はにかんだ笑みが浮かんでいた。

「あ〜っ! マスターつてば、スギっち独り占めしてズルいズルい!」

まるで身体の大きな獣がタツクルしてきたような勢いで、アストルフオが彼らの背後から追突してくる。造作もなく避ける高杉の横で、反応が遅れも諸に体当たりを食らった藤丸は「たわばっ!!」と奇怪な悲鳴を上げて前方へと吹き飛んだ。

「ねえねえねえっ、マスターと何話してたの? 僕にも教えてよ〜!」

肩を掴まれ、激しく前後へと揺さぶられる。ぐわんぐわんと揺れる視界の中でも、「お前」にや言わねえ」と答える高杉の声色は平静としていた。

「なあアストルフオ、もうそろそろこの辺りでよくないアルか? 私達以外誰もいないネ。」

「へ? ああつうん、そうだね〜。」

定春に乗って遅れて到着した神楽の声に反応し、アストルフオは高杉から手を放す。

一方アストルフオに吹っ飛ばされた藤丸は漸く顔を起こすと、自分達が目的地であるひとけ人気のない河原に到着していたことに気付く。

「アストルフオ、街を調べるつたつて、こんな誰もいないところで何をやるの?」

「んっふっふ、聞いて驚かないでよお？」

「勿体ぶってんじやねえよ、いいからさっさとしろ。」

「もうっ、スギつちつたらくせつかちさんだから……え、それでは、これから僕が考えた作戦を発表します！三つあるグループのうち、銀ちゃん達は聞き込み、ツラ君達は図書館、となれば僕らが調査すべきは……ズバリ！この江戸くの今の全容でしょう！」

「全容ねえ……確かに、この国がどんな姿になっているのか、把握した方がよさそうだね。でもどうやってそれを調べるの？江戸を一望出来る展望台でも探す？」

「ちつちつち、ノンノンマスター！そんなところに行くよりも、こうしたほうが早いよ。」

するとアストルフォはくるりと向きを変え、藤丸達に背を向けて数歩前が出る。

ピーッ！と彼が鳴らした指笛が響き渡ったその時、遙か空の向こうから何かはこちらに向かって飛来してくるのが見えた。

「おっ、来た来た。おっいこつちこつち〜！」

始めは小さな豆粒程だったそれが、こちらに接近してくるにつれ定春並の大きさの怪鳥であることが分かり、アストルフォと藤丸を除いた面々は騒然とする。

大きな翼はためかせ、彼らの前に降り立ったその生き物は、大鷲の頭と獅子の前半身、そして後半身は馬という、何とも奇怪な姿をしていたのだ。

「よろしよしよし!よく来てくれたね〜偉いぞう!」

わしやわしやとアストルフオに撫でられると、怪鳥は何とも気持ちが良いように目を細める。目の前の不思議生命体と戯れる彼の姿に、皆開いた口が塞がらない。

「わあ………大きな鳥さんですね。」

「すっげ〜!アストルフオ、それ何アルか?!」

目を輝かせ、今すぐにでも駆け寄ろうとする神楽の前に、定春が立ちはだかる。怪鳥を睨み低く唸っているのは、飼い主を守らんとする忠義心からであろうか。うーんよく出来たワンちゃんだ。

「大丈夫だよ定春君!この子は何にも悪い事なんてしないから、ねっ?」

アストルフオが顎を撫でながら尋ねると、怪鳥は返事代わりにキューと小さく鳴く。

「それで、そいつあ一体なんなんだ?」

「紹介するね。この子は僕の相棒、『この世ならざる幻馬』だよ。とつても頭が良くてね、僕を乗せて色んな所まで連れていってくれるんだ!そうだねえ……生前は月まで行ったこともあるかな!うん!」

「月、か………例えほなしにしちゃあ面白いな。」

低く笑い呟く高杉の隣で、いやー例えじゃなくて本当ガチで月行つたんだよなーこの子と心の中で呟く藤丸であった。

「お月様まで行けるのですか……私も行ってみたいですね。」

「松陽が行きたいなら私も行きたいアル！アストルフォ、早速その子に乗って行こうヨ！」

「まあまあ神楽ちゃん、今ヒポグリフを喚びだしたのは、空からこの国の姿を一望しようって目的なんだ。月面旅行はまた今度ね。」

「ちえ……でも、それなら今乗れるってことアルか？私も乗せてほしいネ！」

「うんつ、いいよ！それじゃああともう一人は……松陽さん、一緒に乗らない？」

「えっ……いいのですか？」

「勿論！月までは無理だけど、この辺りをびゅーんって飛ぶくらいなら問題ないもんね。マスター、スギっち、いいかな？」

許可を求めるアストルフォに、藤丸は手で○^{マル}を、高杉は何とも渋い顔をしつつも、やがて大きく息を吐いた。

「……あまり高度を上げるなよ、そこら中に宇宙船が飛んでるからな。」

「はいっ！よかったね松陽さん！」

「はい……わあ、何だかわくわくしますねっ。」

気持ちが高揚するままに、松陽は先に乗ったアストルフォに手を引かれてヒポグリフの上に乗る。彼の後ろに飛び乗った神楽は、松陽の腰にギュツと手を回した。

「松陽はこうして私が押さえてるヨ、これなら落ちる心配は無いネ。」

「ああ、何かあつたらまず俺が容赦しねえ。」

「高杉さん、蝶々めつちや飛んでるよ。危ない危ない。」

「それじゃあ、出発おしんこ〜! 胡瓜きゅうりの糠漬ぬかけ〜!」

どこかの嵐を呼ぶ五歳児のような掛け声を合図に、ヒポグリフは動き出す。見守る藤丸達に手を振っていると、自分達の乗っているヒポグリフの進む速度が、徐々にあがっていくのに松陽は気が付いた。

「二人とも、しっかり掴まっててね! そおれエエエつ!」

強くなっていく正面からの風圧に耐え切れず、松陽は目を瞑つむつてしまう。やがて体が浮き上がる感覚の後、不意に冷たくなった風の温度に、松陽は恐る恐るまふた瞼を持ち上げる。
「わあ……………つ!」

眼下に広がる景色に、松陽が上げたのは感嘆の声。

地上から空までを、暗闇に覆い尽くされたこの国。しかし絶えず輝き続ける街の灯りが、常夜を明るく照らしている。大きなものから小さなもの、そしてカラフルなネオンなどによって彩いろどられた江戸は、星月夜ほしづくよのような美しさを放っていた。

「キャツホオオオオツ！楽しいアル〜！」

「それはよかつた〜、松陽さんはどう？」

「ええと……上手く言えませんが、とても凄いです！」

地上の光に負けんばかりに目を輝かせる神楽と松陽に、アストルフォは満足げに頷く。

よくやつたとヒポグリフの頭を撫でてやれば、三人を乗せた幻獣は甲高い声で轟いた。

「ひやく高い高い、あんなとこまで飛んでいけるんだもんなあ。」

一方、こちらは先程の河原の様子。

地上からアストルフォ達を見上げていた藤丸達であったが、不意に高杉が体を反転させ、そこから歩き出そうとしている。

「わうう？」

「あれ?高杉さん、どちらへ?」

「ちよつと野暮用があるんでな、悪いが一、二時間抜けさせてもらう。」

「野暮用って……俺も手伝うよ。高杉さんを一人にさせるなつて、ヅラさ……桂さんにも言われてるし。」

「ヅラの野郎、お前にんなコト言ったのか……心配すんな、ちよいとばかり席を外すだけだ。なあにすぐ戻るさ、あいつらが戻ってきたら、適当に街ン中でもぶらついてろ。」

「えええ……でも——」

開きかけた藤丸の口許、そこから出ようとしていた言葉を遮ったのは、宛てがわれた高杉の指。

「……悪いな、こつから先は大人の行く処だ。俺が戻るまでの間、しつかりとアイツ等を守ってるんだな。信頼してるぜ、お子ちやまマスター?」

妖しさを秘め艶やかさを滲ませた、間近で向けられる高杉の嬌笑に魅了され、まるで催眠術にでもかかったかのように、藤丸は硬直し動けなくなる。

「それじゃ頼んだぜ、藤丸。ああ、お前さんにも何か美味いモンでも買ってきてやるよ。」

「わふつ、わおん!」

定春を数回撫でてから、踵を返した高杉は霊体化してその姿を消失させる。後に残つ

た数匹の蝶が漂う様を、藤丸は呆けたまま眺めている。

「……………大人つてさ、こういう時ずる狡いよなあ。君もそう思わない？」

ぼふつ、と定春のもふもふボディに凭もたれかかる藤丸に、定春は「わう？」と首を傾げるばかり。

遥か上空では、こちらの事情を知らないアストルフオ達が、調査という名の夜空の観光を優雅に楽しんでいた。

【伍】 曖昧模糊（Ⅰ）

「つつ、かれたあゝ……。」

長椅子に寝そべる定春の、もふもふボディにダイブする藤丸。「わんっ」と鳴いた彼の毛並みを撫でながら、何気なく見やった先の掛け時計は、もうじき酉の初刻を示そうとしていた。

「お疲れく……って、本当に疲れてるね、藤丸君。」

「やつほく新八君……それが自分でもよく分かんないんだけど、たつた一日しか過ごしてない筈なのに、まるで三日分のエネルギーを消費した気がすんだよね。銀さんとチューパット取り合ったり、図書館で本ぶつけられたり、あとは高杉さんと……あれ？何でこんなに色々な記憶がごっちゃになってんだっけ？デジャヴ？」

悶々とする頭を抱えていたその時、コンコンと居間の扉を叩く音が聞こえてくる。駆け寄った新八が扉を開けると、そこにはポットを抱えたエリザベートと、三角巾に纏たずみと今朝と同じスタイルの松陽が、数枚の皿を抱えて立っていた。

「んもうっ、遅いわよ眼鏡ワンコ。一秒でもこのアタシを待たせるなんて、いい度胸して

るじゃない?」

「わわっ、ごめんねエリちゃん……よかつたら、お皿半分お持ちますよ? 松陽さん。」
「すみません新八君、助かります。」

皿を持った二人はテーブルへと近付き、同時にそこへと置く。ふと松陽が顔を上げた時、藤丸と視線がぶつかった。

「あつ、ごめんなさい。俺つてば手伝いもしないで……。」

「ふふ、いいんですよ。帰ってからとてもお疲れのようでしたし、ごゆっくりお休みください。」

いつものように、松陽は優しく微笑みかける。ただ少し違うのは、彼の口許がまだ何かを言いたげにもごもごと動いていたことだ。

「松陽さん?」

「藤丸君、その……今日は色々とありがとうございました。貴方や皆さんと過ごせたこの一日は、記憶を失くした私にとつて、とても素敵な宝物の一つとなりました……今度こそ決して消えてしまわないよう、心にしっかりと仕舞わせていただきます。」

胸に手を当て、微笑みながら紡がれる松陽の言葉に、藤丸の胸の内もじんわりと温かくなる。はにかみながら頬を掻いていたその時、玄関の外が騒がしくなった。

「でね、聞いてよ銀ちゃん! スギちっちゃたら途中でいなくなっちゃったんだよ!!」

「そうアル！定春にどこ行ったか聞いてもワンしか言わないしヨ！」

「そりやそうだろ、いきなり喋りだしたらホラーだぞ。」

「フオウ、フオウ。」

むくれるアストルフオと神楽に続いて、定位置にフオウを乗せた銀時も続々と今に入ってくる。同時に漂う馴染み深い香りが、藤丸の鼻先を掠めた。

「おつ、この食欲を刺激するスパイシーな匂ひは……！」

「あつまスター。今日のディナーは皆大好き僕も大好き、お登勢さん特製の具材ごろごろカレーライスだよっ！」

「林檎と蜂蜜がとろろり溶けてるアル、ルーは食べやすい中辛味ネ！」

テーブルの中央に敷かれた鍋敷きの上に、神楽が寸胴鍋を置く。より近くから感じるカレーの香りに、藤丸の空っぽの胃が鳴き出す。

「中辛かあ、俺としては甘口のがよかつたんだけどな。お前もそう思わねえか？」

「フオウ？」

「はいはい、銀さんが一人の時に一人で作って一人で食べてくださいね。」

冷たく返す新八に、銀時は頬を膨らせる。幼子のようなその仕草に小さく笑う松陽の隣で、エリザベートがふと辺りを見回す。

「ねえ、ツバメと黒猫は？まだあつちの部屋にいるの？」

彼女の派手なピンク色の指が示した先は、閉ざされた和室の襖。皆がここ元万事屋に戻ってきた数刻前、集めた情報を纏めておきたいからと、桂は高杉と共にいそいそと和室に籠こもってしまったのだ。

実はこの時、銀時も協力を申し出たのだが、連発する余計な一言により高杉とのお約束の展開に持ち込みそうになったため、敢え無く桂に追い出されてしまった。

「じゃあ僕呼んでくるよ、おーいツラ君スギच्छ〜!」

アストルフオにより勢いよく開かれた襖の向こうで、「ツラじゃない桂だ!」と聞こえてくるお決まりの台詞。

新八と共に食器を並べていた藤丸が面おもてを上げた時、銀時が床に置いたポリタンクが目止まる。そこで足りないあと一人の存在に気が付き、辺りを見回す。

「銀さん、そういうえば段蔵は? 帰ってから姿を見てないんだけど。」

「何? あいつまだ『あそこ』に引つ込んでんのか………つたく仕方ねえな。」

吐いた溜め息と共に、銀時が体を反転させる。その際に手招きされた神楽を連れて、彼は居間を出た。

気になった藤丸がその後が続いていくと、二人は数歩進んだ先で足を止める。暗い廊下にはぼつんと現れた一枚の扉……かわや廁、せっちん雪隠、WCなど呼び方は多種あれど、まあ一般的にはトイレという名称で馴染みのあるその場所の前に、三人は横列に並んだ。

「おくり段蔵、たまがお前にもオイル用意してくれてっから、早く出てこ〜い。」
「フオフオフオ〜イ。」

扉を軽く叩きながら、銀時とフオウが呼びかける。だが木製の薄い板の向こうからは、物音一つ聞こえてこない。

「……銀ちゃん、何で段蔵こんなトコに引き籠ってるアルか？」

「詳しくは言えねえが、日中ちよつとした出来事があつてだな………段蔵いいか？開けるぞ。」

銀時の手がドアノブに掛けられ、そこに力が加えられると、扉は軋きしんだ音を立てて開いていく。

ヒュ〜、ドロドロドロ……と、お化け屋敷などでよく耳にしたことがある、不気味な笛と太鼓のBGMに合わせるように、青白い火の玉が狭い空間内に揺らめいている。

「ギャツッ！」と短い悲鳴を上げた銀時に抱きつかれた藤丸と、小指で鼻はしを穿る神楽が淡い光の中で見たのは、蓋を閉めた洋式便器の上で膝を抱える段蔵の姿であった。顔は伏せているため表情は窺うかがえないものの、暗然とした雰囲気から相当落ち込んでいることが容易に理解出来た。

「段蔵〜、何があつたかは知らないアルけどな、さっさとそんなトコから出てくるヨロシ。」

僅かに抵抗を見せていた段蔵だったが、サーヴァント二騎分の力……内一人は夜兎であるため、終いには観念したようで、ずるずるとそのまま廊下へと引きずり出された。

「まあ何だ、嫌な事は飲んで忘れちまえ。たまの奴、俺にオイルを渡す時嬉しそうに言つてたぜ?」「今日は段蔵さんもお疲れのようですから、とびきり質の良い物を用意致しました」つてな。

「たま殿が、そのように……?」

カラ友である彼女の名を聞いた途端、淀んでいた段蔵の瞳に徐々に光が戻っていく。そして座り込んでいた床から腰を上げると、藤丸達に頭を下げた。

「皆様、お手を煩わせてしまい申し訳ございません……そして、ありがとうございます。」
「気にしないでよ。さっ、早く皆の所に戻ろう?」

「フオウツ。」

「なあ段蔵、何があつたかは知らないけど、そんな深く気にすることないネ。お前の隣にいるこの天。パなんてなあ、てめえの酒癖の悪さから六股かけてそりやあエライ目に——」

「かくぐらちゅわあんつ!! 違う違うあれはドツキリで——つてちよつと藤丸君!! ここ肝心なところだから聞けつて!! 聞いてエエお願いイイイイツ!!」

「ご馳走さまでした、ああ美味しかったあ！」

空になった皿を置き、藤丸は手を合わせて食後の挨拶をする。

粒一つ残らない飯櫃めしびつと綺麗になった寸胴鍋は、誰が見ても何とも清々しい気持ちになる。お残しは許しまへんで！が定番の台詞である某おばちゃんも、この光景を見れば満悦の笑みを浮かべるに違いない。

「藤丸君、こちらのお皿はお下げしてもよろしいですか？」

「あつ、はい。すみません松陽さん。」

「いえいえ。それに今日の私はお片付けの当番ですから、しつかりお勤めしなければ！」

次々に食器を盆に乗せ、松陽はいそいそと台所へ向かう。途中すれ違う形で居間に戻ってきた銀時は、危なっかしい彼を少しはらしながら見守るも、やがて彼が無事台所に着いたことを確認し、安堵の息と共に開いたままの扉を潜くぐった。

「それにしても、さっきのカレー本当に旨かったアル。あんなにお肉の入ったヤツなんて久しぶりネ！定春も美味しそうなジャーキー齧かじってたアルな？」

「わおんっ!」

「本当本当。銀さんのとこのカレーに入ってるたんぱく質なんて、精々一番いい時で特売の竹輪ちくわか魚肉ソーセージだもんね。」

「えっ、それホント……? ちよつと白モジャ、アンタ育ち盛りの子達にそんな貧相なものばかり与えてちや可哀想でしょ? 保護者なら自分の身を削つてでも、子ども達にいいものを食べさせてあげなきゃ。」

「そーヨそーヨ! もつと言つてやれエリちゃん!」

「わんっ!」

「仕方ねーだろ、うちの収入は依頼の量に左右されるから安定しないの………にしても、さつき食つたカレーの肉、やたらと美味かつたな。あのけち臭いババアにしちやあ奮発したじゃねえか。」

「そうか。ならば礼を言うべき人物を、もう一人増やしておけ。カレーを調理してくれただお登勢殿に加え、貴様が今しがた絶賛したその肉の送り主であるもう一人の存在もな………そう思わんか、高杉?」

テーブルを拭く手を止め、桂は一人窓際に立ち煙管を吹かせる男に声を張る。悪戯つ子の様な桂の笑みを尻目に、高杉は開いた窓から見える夜のかぶき町へと紫煙を細く吐いた。

「はあ？高杉が……おいおい、何でそんな柄でも無エことしてんだ？今夜は空から槍でも振るんじゃないか？」

「ふむ、では場面を数刻前に戻そう。回想シーンを入れてくれ。」

ほわんほわんほわんツラツラ、と間の抜けた効果音と共に、桂の頭からもやもやとしたものが昇っていく。ほらあの、漫画の吹き出しなんかでよくある、何かを考えたりした時に現れるアレだ。

「あれ？つい去年の秋頃辺りに、こんな効果音を耳にしたような……。」

「仔犬、今はハロウインのこともメカエリチャンのことも一旦忘れときましょ？ね？」

「という訳で、ここからは二時間程前の回想場面に突入するぞ。それからツラじゃない、桂だっ！」

* * * * *

「ん。」

無表情のままの高杉に対し、お登勢とキャサリンはポカンとした様子でこちらを見ている。彼は桂と共に店を訪れて早々、手に携えた白いビニール袋を、何も言わずにカウナーへと置いた。それが何なのかという説明も碌に無いまま、暫くの沈黙が店内に流

れた後、見兼ねた桂が高杉の後ろから嘴くちばしを容いれた。

「こら高杉！そんなト○口のカ○タ君のような態度と物言いでは、お登勢殿に用件など伝わる筈もあるかつ！サ○キちゃんではないのだぞ!!」

「いや、サ○キちゃんでも分かんねーよ……それより何だいこりや？私にくれんのかい?」

手にしていた煙草を啜え、お登勢は袋の中を確認する。そこに入っていたのは、如何にも高級感の滲み出る渋い竹皮の包みであつた。

「才、才登勢サン……コレツテ……!!」

横から覗き見ていたキャサリンの、生唾を呑み込む音が聞こえてくる。彼女と同様、竹皮の中身が大凡おおよそに想像出来たお登勢の額にも、一筋の汗が伝い落ちていった。

「下になつてるほうは、アンタらで処分しな。量の多い包みは今日の夕餉ゆうけに使つてくれ……未だに腹を立ててるだろうガキ共への、『ほんの些細』な詫びの品だ。」

頼んだぜ、と短く言い残し、高杉は踵きびすを返す。そのまま扉を開け、店内を後にする高杉の背中を、桂は慌てて追いかける。こちらに会釈をして店を後にする桂の遠ざかる足音を、お登勢とキャサリンは呆然としながら聞いていた。

「失礼します。お登勢様、カレーの材料が切り終わりましたが……如何なさいました?」

暖簾のれんを潜り、たまが割烹着姿かつぼうぎで現れる。不思議そうに見つめてくる彼女の視線に、二人は漸く我に返った。

「ああ、たまかい。ご苦労さんだね。後は私がやつとくから、アンタは店のほう頼んだよ。」

「はい、了解しました。」

「……才登勢サン、ソノ中身ツテナヤツパアレデスカネ？一般ピーポーニヤ到底手ノ届カナイ、才高イヤツニ違イナイデスカネ？」

「開けずとも何となく分かるさ、こりやそんじよそこらの肉屋で買える代物じゃあないよ……あの色男、愛想は無いが気は利くじやないかい。」

竹皮の包みを出し、上機嫌にそれを眺めるお登勢。するとビニール袋から一枚の小さな紙が落ちたことに、キャサリンは気が付いた。

「ア、何カ落チマシタヨ。レシートカナ？」

紙を拾い上げ、記載されている文字の羅列を何気なく読んでいたキャサリンの目に、とある数字が止まる。

「ブルジョアツ!!」

それが何を意味するものなのかを理解した瞬間、キャサリンの開いた口から真っ赤な鮮血ほしほしが迸る。バタンツ、と彼女の体が床に倒れたその音で、お登勢とたまは異変に気付

いた。

「キャサリン!! どうしたんだいキャサリンっ!!」

お登勢に揺り起こされる彼女の開いた口から、蟹のような白い泡が噴出している。ふとお登勢が目落とした先に、彼女が白目をむいて失神する原因になったであろう、その手に握られている紙が映る。

「一体これに何が書かれてたってんだい……何なに。」

キャサリンの手から紙を抜き取り確認すると、やはり彼女が先程言っていたように、それはこの高級肉の領収書のようにであった。ここまで過激なりアクションを起こして失神するなど、どんな内容が記されているのだろうか……? 不安と好奇心が入り交じりながら、お登勢は印刷された文字を目でなぞった。

店名、住所、電話番号……そこにあつたのは、やはりお登勢もよく知る名店の情報。あの眼帯男はやはり只者ではないと疑念を抱きながら、次にお登勢は金額へと目を移した。

「ミリオネアツ!!」

刹那、先程のキャサリンのように奇怪な悲鳴を上げ、今度はお登勢が吐血する。未だ気を失ったままのキャサリンと並ぶようにして、お登勢もまた床に倒れた。

「お登勢様、キャサリン様、大丈夫ですか?」

びくびくと痙攣する二人の前にしやがみ、たまは指で頬を何度もつつく。

彼女らが失神するまでの衝撃を与えたレシートは血溜まりへと落下し、赤色を吸ったその紙に刷られた文字は既に読めなくなっていた。

* * * * *

「……………ということが、先程階下で起こった出来事だ。アンダースタン？」

「アンダースタン？じゃないでしょツラさんっ!! つか、お登勢さん達は大丈夫だったのや!!」

「ツラじゃない桂だ。心配無用だぞ藤丸君、ギャグシーンで発生した怪我や流血など、コマを隔てた時には既に治っているのが漫画のお約束だ。お登勢殿達も疾うに復活して、今頃高杉から貰った最高級の肉の味を堪能していることだろう。」

桂が床を指しながら何度も頷いている一方で、定春がのっしのっしと高杉のすぐ隣へと歩いていく。

「わふっ、く〜ん。」

先程の地味に長つたらしい回想から、そのジャーキーの提供主を察した定春は、高杉の腕に自身の鼻先を擦りつけてくる。

始めはきよとんとしていた高杉だが、千切れんばかりに動く大きな尻尾と定春の嬉し気な表情から、その行動が示す意味を理解すると、煙管を消失させた利き手で人懐っこい巨大犬の白い毛並みを撫でてやった。

そんなほっこりする光景の傍ら、銀時を始めとした万事屋の三人が、部屋の隅で陰鬱な顔のまま、揃って項垂れていた。

「おいおいマジかよ……さつきのカレーにそんな高級な肉が使われてたなんて、どうして銀さんにあらかじめ言っといてくれなかったの？ ああ、駄目だあ、どんな味だったのかがまるで思い出せねえよおお……!!」

「私なんて、殆ど嘔まずに飲んじゃってたアル……ああ、くっ、神楽のバカバカバカあつ！三杯もおかわりしたのにいいっ！」

「どうしよう、僕もお肉の味が殆ど思い出せない……この先の人生の中で、あんな高級品に巡り合えるチャンスなんて、もう二度と来ないかもしれないってのに……よし、こうなったらもう一度肉の味を確かめるしかない！神楽ちゃん、僕のお腹を思いつきり蹴って！」

「神楽、新八の次は俺な！まだ胃の中で溶け切ってねえ筈だ！」

「あいあいさー！」

「ギャ、ツ!!何とんでもないコトやらかそうとしてんのよ!!向こう側でお食事中の人

だっているかもしれないんだからねっ!!」

慌てて神楽を止めようとするエリザベート。しかし相手はあの宇宙最凶の戦闘民族でもある夜兎の少女、同じサーヴァントであつてもか弱いエリザベートの力では、蹴りの態勢を崩すことは叶わない。慌てて藤丸と桂も彼女に加勢するが、相手はあの宇宙最凶以下略。

「んも〜う何なのこの娘っ!!びくともしないじゃない!」

「うぐおおお……!!いかん、このままではお茶の間まくらみで寛くつろぐ皆さんの前に、吐瀉物としゃぶつを晒さらしてしまうことになつてしまうぞ!!」

「えええっ!!どうしよう、そんな不祥事起こしたら只でさえ更新が遅いこの連載が続けていけなくなつちやううっ!!」

「大丈夫だつて藤丸、そういうコトは既に新八が10話目でやらかしてっから。」

「銀ちゃん、わざわざ丁寧ていねいに話数まで教えたところで、この地味眼鏡が起こした愚行なんて覚えてる奴、きつと数える程もないアルよ。」

「わふっ (コクリ)」

「誰が地味眼鏡だコラアアアツ!!覚えてないつてんなら今ここで再現してやろうかつ!!喉の奥に指突つ込んでモザイク必須のブツ吐き散らして、心に拭えないトラウマ植え付けたるか!!ああん!!」

ぎやいぎやいと四方から騒ぐ声が、狭い室内を満たしていく。霧かまびすしさを背中で聞いていた高杉であったが、やがて煙と共に大きく息を吐くと、定春を撫でる手を止めこちらへと振り向いた。

「そこまですておけ馬鹿共。あんな安物が気に入ったンなら、また買つてきてやらあ。」

呆れた様子でそう言った高杉の言葉に、万事屋社員三人はぴたりと動きを止める。同じく三人がかりで神楽を押さえ込もうとしていた藤丸達も、彼女が突として力を抜いてしまったことに対応が遅れ、仲良く揃つて床へと落ちていく。

「……スギつち、本当アルか?」

「くどい、二言は無エよ。俺は出来ねえほら法螺は吹かねえ男だと、単行本11巻の紅桜篇でもしつかり言つてるだろ。」

「……銀さん、僕今からでも鬼兵隊に転職しようかと思うんですけど。」

「奇遇ネ新八、私も全く同じこと考えてたアル。スギつちのところにいればきつとお腹もお財布も寂しいことにはならないネ。という訳で銀ちゃん、今までお世話になりました。」

「わうう。(ペコリ)」

「ちよちよちよ、何でそうなる?! 只でさえギリ貧なのに社員に一遍にやめられちゃあ銀

さんだつて困るよ!! だつたら俺も万事屋辞めて鬼兵隊に行つてやるんだからね!! い
いだろ高杉くん!!」

「悪いなお前ら。鬼兵隊ウチの雇用規約にや、ガキと天パとテカい犬は採用不可つてことになつてんだ。諦めな。」

素つ気ない返答と共にすつぱりと拒絶され、河豚ぶぐのように頬を膨らせた万事屋社員三名と一匹は、恨めし気な眼差しを高杉の背中へと送つていた。

「皆様、お風呂が沸きました。」

ここで開きつ放しの扉の向こうから現れたのは、風呂場の用を足し終えた段蔵。

お疲れ様、と彼女に言い掛けた藤丸の興味を奪つたのは、彼女の腕の中でバスタオルにくるまれたフォウであった。

「フォウ……。」

「あれ? フォウ君どうしたの?」

「申し訳ありません、マスター。段蔵が目を離れた僅かな隙に、フォウ殿が湯舟に飛び込んでしまいました……。」

ゆつくりと床に下ろしたフォウを、段蔵はタオルで拭いていく。だがフォウは嫌そうに何度も身を振りよじ、段蔵が力を抜いたほんの一瞬をついて、タオルの中から飛び出した。

「ンキュツ、フォウフォウッ!」

「あつ、フオウ殿いけませぬ！」

素早い身のこなしで段蔵を撒まこうとするフオウ。懸命に捕まえようとすゝる彼女の手をすり抜け、大きく跳躍した後の着地点のちは、やはりいつもの定位置である銀時の頭上。

「ギヤアア冷てえつ!! 水滴が、水滴が背中を伝つてるウウツ!!」

「こらフオウ君! 待つてて銀さん、今降ろしてあげるから……!」

「いや、ここは私に任せるヨロシ。動くんじゃねーぞ銀ちゃん……!」

「いやいや。藤丸君もリーダーも、ここは俺に任せてもらおう。さあフオウ殿、早く濡れた毛を乾かせねば風邪を引いてしまうぞ? 俺も手伝つてやるから、再びモフモフを……モフモフをを……!!」

「は? ちよ、待つてつてお前ら——」

獲物を追ひ詰める肉食獣の様なオーラを放つ三人に、銀時がたじろいだのも束の間、一斉にこちらへを飛び掛かつてきた彼らの体重が上に乗れ、「ギヤアアアツ!!」と至つてシンプルな悲鳴が下からくぐもつて聞こえてきた。

「フオウツ。」

しかし肝心のフオウはというと、機敏さを生かして三人の手をいとも簡単にすり抜けてしまつていた。押し潰される銀時を離れた位置から眺めながら、乾ききらない尻尾を得意げに振つていたその時、小さな身体がひよいと宙に浮く。

「こら、おいたはそこまでだ。」

高杉に抱えられたフオウは、そのまま段蔵が広げているバスタオルへと返される。今度は暴れることなく、優しい手つきで水分を拭き取られながら、「キューウ…」と少しだけ悔しそうに小さく鳴いた。

「あゝら、美丈夫は動物の扱いもお上手なのね……もしも貴方が女性だったら、是非その血を堪能してみたかったものだわ。ああ勿体無い。」

「ククツ……俺の血だけは止めときな、竜のお嬢さん。生憎俺の体を巡ってるモンは、復讐と執着で穢れに穢れたどす黒い憎悪だけだ。肌につこうもんならアンタの美貌を保つどころか、どろどろに灼け爛れちまうぜ？」

「やあね、それは怖いわあ……でもアタシ、今は英靈サレワアントなの。何事も試してみなきや、分らないとは思わなくて？」

あの高杉を相手にしても勝気な態度を崩すことなく、挑発的な言葉を紡ぐ口許を赤い舌で舐めるその仕草に、やり取りを見ていた藤丸の背筋に寒気が走る。

外見こそ14歳の可愛らしい少女であるものの、彼女が嘗て『鮮血魔嬢』と呼ばれ畏怖された歴史的殺人鬼であるという事実と恐懼きよおくを、改めて自身の心に刻み込んだその時、居間の扉が勢いよく開かれた。

「たっただいま〜！お片付け終わったよ！」

当番を終え、常時揺らぐことのない明るいテンションのアストルフオと、彼に続いて松陽も居間に戻ってくる。皆の……否、未だ圧迫されたままの銀時を除いて、視線は二人へと集中した。

「ああ、お疲れ様々二人とも。」

「やつほくマスター！あれ？銀ちゃん何してるの？楽しそうだから僕も混ざっていい？」

「いいワケねえだろっ!! つーかお前らさっさと降りてくんない?! このままだと伸餅のしもちみてえに平たくなっちゃうんだけど!!」

「あ、忘れてた。ごめんね銀さん今降りる。」

「伸餅みたいになつても、銀ちゃん自体が伸餅になるわけじゃないなら興味無いアル。松陽も来たことだし、そろそろ降りてやるか。」

「ふむ、リーダーの言う通りだな。銀時の上は思ったより乗り心地も悪いし、俺も降りるとしよう。」

漸く退けた三人の下に残されたのは、ぐつてりと床に横たわる銀時。フオウが催促さいそくするように何度も頬ほを突くと、彼は痛む体をゆっくりと起こした。

「あく痛いたてて………なあツラ、それでこれから何すんだっけ?」

頭によじ登っていくフオウが落ちないよう支えながら、銀時は桂へと尋ねる。すると

ほんの僅かだが、彼の表情が唐突に強張ったことに気が付く。

「あ、ええと……そうだな……。」

中空を眺め、歯切れの悪い返答をする彼が時折視線を向ける先を辿ると、そこには神楽に腕を抱かれ、楽しそうに彼女と談笑する松陽の姿。桂への違和感が晴れないまま眉間に皺を寄せる銀時に変わり、口を開いたのは高杉であった。

「松陽、今日は病み上がりにあちこち歩いて疲れたろう？風呂が沸いてるらしいから、先に入って汗を流してきたらどうだ？」

「えっ？そんな、いいですよ。私などが最初にお湯を汚してしまう訳にはいけませんし……。」

案の定、高杉の提案に対し松陽は首を左右に振り、畏まってしまふ。すると定春に凭れかかっていたアストルフォが立ち上がり、「はーい！」と挙手をした。

「それじゃ、僕と一緒に風呂入ろう！二人なら罪悪感も楽しさも半分だよ！」

「あーズルいネ！それなら私も一緒に入るヨ！」

「駄目よ仔兎、未婚の淑女が殿方の前で肌を晒すなんて。アンタは後でアタシと入りましょ？また髪の毛洗ってあげるから。ね？」

エリザベートに諭され、膨れつ面のまま神楽は渋々と松陽の腕を離す。

解放された松陽の手を今度はアストルフォが握り、まだ了解の返答もしていない彼を

連れて風呂場へと小走りで向かっていく。

途中、驚いた顔でこちらを見ていた桂とバツチリ視線が交差すると、アストルフオは悪戯つぼく笑ってみせる。葷色すみれの彼の瞳が、まるでそちらの伝えたい意図はお見通しだと示しているようで、廊下の奥へと消えていく二人の背中を見つめたまま、「……恩に着る」と桂は小さく礼の言葉を呟いた。

「あ、あれ？ 待つてくださいよ。アストルフオさんと松陽さんが一緒になって、これ大丈夫なんですか？ 今からタグつけ直しに行つたほうよくないですか？ それ以前に不純異性交遊なんて大問題じゃあ——」

「異性？ 新八お前、何言つてんだ？」

「え、だつて………え？ 何です銀さんその目？ 嘘、やだ、まさかアストルフオさんて………もしかして自分称の『僕』つていうのも、僕っ娘だからじゃなくて本当に——嘘だアアアアッ！」

遅れて知つた衝撃の事実には、新八は頭を抱え絶叫する。シヨツクのあまり床を転げ回つて悶絶もんぜつする新八に何人かが憐みの眼差しを向けていたその時、高杉が静かに口を開く。

「もう話してもいいんじゃないか、ツラ。先生………松陽に聞かれたくない内容ことなんだろ？」

「ツラじゃない、桂だ……いつから気付いていた？」

「てめえや銀時と、同じ釜の飯を何年食つてたと思つてやがる？俺に隠し事なんざ出来ると思わねえこつたな。」

「別に隠していたつもりでは……まあいい、気を利かせてくれたお前にも一応感謝をしておいてやる。」

やや腑に落ちないと思いつつも、自身の中でとりあえず流しておくことにし、桂は息を吐く。続いて彼がパキンツと指を鳴らすと、それを合図に和室の襖が勢いよく開け放たれる。

突然のことに目を丸くした一同の見つめる先で、襖を開けた本人(?)であろう白い巨体、もとい桂の式神であるエリザベスが、同じく他のエリザベスを数体引き連れてぞろぞろと和室から出てくる。各々の手には、桂が集めてきたであろう資料やそれらの内容をまとめた巻物などが抱えられていた。

それらが次々とテーブルに並べられていく最中、一体のエリザベスが一枚の紙らしきものを桂へと手渡す。彼が礼を言つてそれを受け取ると、役目を終えた式神は他の個体と同様に、ポンツと音を立てて消えた。

「……まずは皆に、これを見てもらいたい。」

沈鬱した声と共に、桂はその紙を床へと置く。彼の近くに集まった者も、シヨックか

ら何とか立ち上がった新八も、神楽に手を引かれて澁々こちらへと引き連れられた高杉も、皆揃って古びたその紙面に目を落とした。

「これ……随分古い瓦版ですね。」

「新八、瓦版って何アル？」

「瓦版っていうのはね、今でいう新聞みたいなものだよ。昔は印刷の技術もそんなに進歩してなかつたから、粘土なんか彫り付けた文字や絵を一枚刷りにして売り歩いたりしたらしいんだけど………銀さん？」

新八の声に反応し、藤丸は瓦版から顔を上げる。

名を呼んだ新八に応えることなく、銀時は瓦版を凝視している。だが藤丸が驚いたのは、両の目を限界まで見開き、額に汗を滲ませる程に愕然としている彼の形相であった。

見れば、桂の隣に腰を下ろしていた高杉も、銀時と同じ表情かおをしているではないか……表に出ないよう繕つくろいながらも、明らかな動揺までは隠すことが出来ず、隣にいる神楽も不安そうに彼を見ていた。

室内の空気が重くなつていくのを肌で感じながら、藤丸はもう一度瓦版を見る。小さな字が連つなつているところはよく読めないものの、大きく書かれた見出しの文字は、何とか理解することが出来た。

「(攘夷、戦争………処刑………?)」

それが何なのか、そしてどういったものなのかは、今の藤丸にはまだ何も分からない。銀時、そして高杉の纏う雰囲気の変化に、皆が心中に訝しさを抱いていた時、桂が静かに口を開く。

そこから紡がれた言葉に、藤丸は……………そこにいる者達全ては、絶句した。

「十年前の、『あの日』……………俺や高杉、そして銀時、松陽先生。」

「俺達は皆、『あの場所』で疾とうに、」

「——命を落としたことに、なっているらしい。」

《
続
く
》

【伍】 曖昧模糊（Ⅱ）

『攘夷戦争』

後世でそう呼ばれ続けことになる大規模な其の戦争の火蓋は、約二十年程前に切つて落とされた。

遙か彼方の宇宙そらより来襲してきた、『天人』あまんとと俗称される宇宙人と、愛する国からその侵略者を追い出すべく立ち上がった人間達との間で勃発ぼっぱつした、長きに亘わたる戦争。

天人と幕府による連合軍と、それに反旗を翻ひるがえした者達、『攘夷志士』と呼ばれる彼らの軍勢とがぶつかり合い、日夜激しく行われる破壊と殺戮の日々。

第一次、二次と繰り広げられてきた戦いによって、流れた多くの血は大地へと染み込み、積まれた屍は山を築き、故郷や愛しき者を喪った多くの民が慟哭を奏で、憎しみの籠った眼で空を泳ぐ鈍色の宇宙船を見上げた。

戦禍によって多くの犠牲を生み出し、多くの損傷を齎した戦いの結果は————天人、つまり幕府の勝利に終わる。

夢も希望も破り捨てられ、失意の底にいなながらも生き残った志士達。そんな彼らに国が与えたものは、聞くに堪えない侮蔑と冷たい嘲笑。そして………国に仇なした者として押された、消えぬ『大罪人』の烙印。

嘗て故国を護らんと奮起した志士達を、腐りきったこの国は手の平を返し、彼らを悪と見做した。

捕らえられ、拷問を受け、果てに処刑され獄門に晒される志士達の首。鴉に啄まれながら崩れ落ちていく同士の無残な姿を、隠遁者となり陰に暮らす仲間であった者達は、一体どのような感情を抱いて眼に映すことであろうか。

侍達が愛し、己が命を懸けてまで守ろうとした国には、今や異形の者達が我が物顔で

横行し、穢れた足で彼らの母国を踏みつけている。

『侍の国』——この日本をその名で呼ぶ者は、最早誰一人としていない。

* * * * *

「……………以上が、攘夷戦争についてのたまかな解説だ。理解していただけただろうか？」
 式神エリザベスが木枠の絵を横に引くと、『おしまい』と大きく書かれた紙が表になる。藤丸達がパチパチと鳴らす疎^{まば}らな拍手を受けながら、桂とエリザベスは皆に一礼した。

「おじちゃん、水飴おかわりアル。今度はもつとでつかいの頂戴ヨ。」

「おじちゃんじゃない桂だ。リーダー、これくらいでどうだろうか？」

増やしては練り、更に増やし練りまくってから桂が神楽に差し出したのは、林檎飴サイズにまで膨れ上がった特大の水飴。照明を受けてきらきらと輝くそれを受け取り、早

速大口を開けて水飴を含むと、満遍なく広がっていく優しい甘さに神楽は顔を綻ばせた。

「ん〜美味しいアル〜。この素朴な味が心地良く染み渡るネ。」

「水飴ですか……何故でしょう？この綺麗な琥珀色を眺めていると、段蔵の記憶回路の中で何かが『懐かしい』と訴えてかけてくるのです。何とも不思議ですね。」

「ふーん……田舎臭い駄菓子だけど、ジンジャーが効いてて中々美味しいじゃない？まっ都会派アイドルなアタシに似合うのは、もつとファンシーでキュートなスイーツなだけだね。例えばきや〇ーぱみゅぱびゅっ！み、みたいな……何よ仔犬、笑ってんじゃないわよおっ！」

「……あの、開始早々からずつと聞きたかったんですけど、桂さんは何で水飴を配っているんですか？」

「新八君。君も幼少の頃、紙芝居屋を楽しんだ思い出は無いか？よい子が紙芝居を楽しむ際のお供に欠かせないのは駄菓子、その駄菓子の中でも定番と言えばズバリ、安価で美味しい水飴であろう！ああ勿論、他にもんまい棒や『飴せん』も用意しているぞ。」

二本の割り箸で先端につけた水飴を再び練りながら、桂は曲調のよく分からない鼻唄を奏でている。因みに存じている方もいるであろうが、『飴せん』というのは紙芝居屋でもお馴染みの、カラフルな澱粉煎餅でんぷんせんべいに水飴を挟んだシンプルな駄菓子。柔らかくもパ

リツとした食感と共に味わう水飴の甘さといったら、これ正に至福の境地。時折水飴が歯にくっついてしまこともあるが、これもまたご愛嬌。だがそうなってしまう後は、しつかりと歯磨きも忘れずに。

「にしても、のっけから始まったシリアスモード全開の回想場面が、まさかの紙芝居で表現されてたなんて、読んでる側からしたら全然分かんねえよな。ああツラ、俺も水飴おかわり。」

「本当本当。どんな感じのイメージ図かは、読んでくれる皆さんの豊かな想像力に任せっきりなんだって。本当、書いてる奴の怠惰具合が窺^{うかが}えるよねえ。あつツラさん、俺もおかわり。」

「ええい貴様らツラツラと！俺は桂だと言っているだろうがっ!!あと夕飯後にそんなに食べるモンじゃありません！」

どこかのお母さんのような叱り方をしつつも、桂は手を止めずに水飴を練り続ける。そうして渡された飴の大きさは神楽の半分程であったが、「何か文句でも？」と眼で恫喝^{まご}してくる桂に気圧され、銀時と藤丸は大人しく駄菓子^{どうかつ}を口に啜えた。

「しっかし何だ、こつちだと俺らは十年前にとつくにくたばってたってわけか。道理で誰も覚えてくれてねえ筈だぜ。」

「……銀さん、随分と冷静だね。俺だったら自分が死んでたって分かった途端に、散々慌

てふためいてから泡拭いてぶっ倒れるよ。」

「まあなく。でも俺、存在忘れられたのは一度や二度じゃねえし。そこんこのメンタル強度は保証出来るぜ。」

「そんな強固なメンタル、日常で活用される機会は早々無いんじゃないかなあ……?」
「フオウ、フオウ。」

「あつ、こら駄目だつつの。これは銀さんの——」

「わうっ（パクン）」

「つてアアアアアツ!! 定春てめえつ俺の水飴返し……いや、やつぱいいわ返さなくて。ロン中でべったべたになつたの返されても困、ギヤアアアツ舐めるなつて!! 髪が、顔がべったべたにイイイ!!」

序盤の重苦しい空気がまるで嘘であつたかのように、室内を漂うぐだぐだな空気。定春に顔面を飴塗れにされる銀時を遠巻きに眺める高杉の前に、溶けかかった水飴が差し出される。

「スギっち、眉間に皺が寄つてるヨ? 一口あげるから機嫌直すヨロシ。」

「お前さんの食いかげなんざいるか。いいからさつきと食つちまえ、床に垂れんぞ。」

高杉の言つた通り、粘度を失いつつある水飴は重力に従つて下へと垂れていき、神楽は慌ててそれを口内へと納めた。

「……で、そろそろ予定文字数の四分の一に到達する目前なんだが、この茶番劇はいつまで続くんだい？」

「む、もうそんなに文字とページ数を消費してしまったのか。いかんいかん、話を元に戻さねば。」

高杉の指摘を受け、桂は紙芝居と駄菓子の入った箱をてきぱきと片付ける。そうしてそれらを式神エリザベスの捲まくつた裾(?)の中へとしまうと、役目を終えたエリザベスは敬礼のポーズをとったまま、ポンツと軽快な音と煙を纏まとつて消えた。

「あく消えちまったあ、俺まだ一個しか食ってねえのに……。」

「ご飯の後なんですから、一個で充分でしょ?特にアンタは糖尿予備軍に片足突っ込んでるんだから尚更ですよ……それより銀さん、顔洗ってきたらどうです?水飴と定春の涎でべつたべたじゃないですか。」

「うん、さつきから瞼が上手く開かねーのも、多分そのせいだと思う……仕方ねえ、ちよいと行ってくるわ。」

気怠そうに立ち上がり、銀時は洗面所へと足を向ける。てちてちと小さな歩幅で隣を歩くフオウと共に、彼は閉めた扉の奥へと消えていった。

「……それでツバメ、アンタがさつき紙芝居で教えてくれたJOY戦争と、その瓦版?に書いてることが、どう関係があるっていうの?」

「エリちゃん殿、JOYではなく攘夷なのだが……しかしそうであつたな、根本の説明は一通り終えた。ここからは本題に入るとしよう。」

桂が軽く咳払いをすると、室内の一同は口を噤む。彼らの視線を正面から受けながら、桂は静かに口を開いた。

「十年前に起きた、二度目の戦争……そう、あれはちようど藤丸君と変わらない頃の齡であつたな。俺や高杉、そして銀時はこの戦争に参加していたのだ。」

唐突に紡がれた自身の名と告げられた事実、藤丸は目を丸くする。同じく名を上げられた高杉を見やると、彼は怪訝に顔を覗き込もうとする神楽から面を背けたまま、その右眼はしっかりと桂を見据えていた。

「俺達が属していたのは、幕府側と対立する攘夷軍だ。国の乗っ取りを企てる夷人達を追放すべく、集つた同士達と共に立ち上がり剣を取つた……俺達三人と、ここにはいないもう一人を筆頭にしてな。」

「あの、その残りの一人つていうのはもしかして……。」

「ああ、そいつあお前さんが今頭に浮かべてる通りの男……坂本辰馬だ。」

予想外の相手に答えを返され、短い悲鳴を上げた新八の肩が跳ねる。側に寄り添う定春の鼻先を撫でる彼……高杉の左腕には、未だにしがみついたままの神楽が剥がれないでいた。

「坂本、辰馬……?」

「どうした藤丸君、彼奴きやつの名に覚えでも?」

「ああ、別にそうじゃないよ。そうじゃないんだけど……。」

やや口籠りながら、言葉を濁す藤丸の頭の中に浮かぶのは、先程呟いた『坂本辰馬』を始めとした、この世界に属する彼らの名。

桂小太郎、高杉晋助、そして坂本辰馬……どこかで覚えがあるそれらの名前は、確か歴史の教科書から得た知識からのものだったと思う。彼らの成なした威光と共に、活字で記された偉人達の名と酷似しているようだが、やはり相違する点が幾つもある。

とすると、此処はやはり自分達のいた次元とは異なる世界なのだろう……様々な疑問が残る中でも一旦そう推測し、明日の方角を向いたまま一人領く藤丸の姿を、桂も新八も不思議そうに眺めていた。

「桂殿方が攘夷側、となれば……皆様が参加なされていたその戦いは……。」

「……ああ、結果として惨敗に終わった。戦後から数年が経過し、共に攘夷派のテロリストとなった俺も高杉も、国家を脅おびやかす反乱分子として追われる身となった……筈なのだがな。」

桂は床に置いてあつた瓦版を手に取り、そこに記された文字にもう一度目を落とす。何度読んでも変わることの無い紙面を繰り返し読んだ後、桂は上げた面おもてをこちらへと向

けた。

「藤丸君、先の話と今の俺達の姿を見て、何か気付くことは無いか?」

「え? 気付くことと、言われましても……。」

唐突に疑問をぶつけられ、藤丸はやや困惑しながらも、桂と高杉へと目を向ける。二人を交互に観察していたその時、「あつ」と開いた口から短く声が漏れた。

「仔犬? どうかした?」

「うん……桂さんに言われて、一つ分かったことがあるんだけど。」

確認するように再度見やり、そして藤丸は確信し大きく頷く。皆の期待する視線を真つ向から受けながら、藤丸はハッキリとした声と口調で言い放つ。

「やっぱり……高杉さんてこうして見ると、座つても桂さんよりやや背が低いのででででっ!!」

左右に引つ張られた頬に爪が食い込み、藤丸は痛みに堪らず声を上げる。びろくんとよく伸びる彼の頬を、更に広げている張本人である高杉。浮かべる満面の笑みとは正反對に、額には幾つもの青筋が浮かんでいる。

「そういう余計な事にも気付けるなんて流石じゃねえかい? ん? あと座高が低いってことは、その分足が長エってことなんだよ。分かったか藤丸? よし分かったな、じゃあ特別に許してやらあ。」

漸く高杉の折檻せつかんから解放された藤丸は、伸び切った頬を戻そうと懸命に肉を掌で押し戻す。傍から見ればアツ○ヨンブリケ状態になったその顔に、神楽とエリザベートは耐え切れず腹を抱えて笑っていた。

「つたく、可笑しなところばかり銀時あいつに影響されやがって……見てろツラ、そのうちこいつも飯に小豆かけて食い始めるぞ。」

「ツラじゃない桂だ。いや、流星にそこまではいかんだろう。そうなる前に俺が止めるさ……ああもう、こうしている間にもどんどん本題がずれていくではないか。なあ藤丸君、他に気付いたことは本当に無いのか？ 正解に掠りでもすれば、俺の特製んまい棒をプレゼントするぞ？」

「そうは言っても……あと分かったことといったら、十年前に死んでる筈になってる桂さん達の姿に、妙に違和感を感じるってことくらい、かな？」

「掠りどころかストライイイイック!! 最終確認ファイナルチェックをするまでもなかったな、約束通り三本まとめてくれてやろうっ！ 受け取れ！」

桂から勝ち取った栄光のんまい棒を掲げ、わーいわーいと歓喜の舞を踊る藤丸を見上げ、「いいいなー」と神楽が羨まし気に呟く。

「あの、どういうことですか？ 藤丸君の言う違和感って……。」

「新八殿、段蔵が推測するに、恐らくマスターの仰おつしやった意味はこうです……この瓦

版に記されている内容が事実であれば、皆様は既に十年前に、マスターと変わらぬ齡で亡くなっている筈。ですが今我々の目の前にある皆様の容姿からは、二十路程の印象を感じさせるのではないでしょうか、と。」

「あく、言われてみれば確かにそうよね。十代を名乗るにしては無理があるし、アラサー手前のオジサンって感じ？」

「お、オジサン………!! 強^{あなが}ち間違いでもないのだが、改まつて正面から言われてしまうと、やはり精神的にクるものがあるな。高杉もそう思わんか？」

「今更何言つてやがる。俺らなんざ英^{サイヴァント}霊としちやあ、まだまだひよつこも同然なんだぜ? ざつと曆^{しよみ}で計算すりやあ、てめえの前にいるドラゴン娘は数字三桁も年上つてことになるんだからな。」

「んまつ! 何て嫌なコト言うのかしらね! この黒猫は! 見てなさい、いつか必ずアンタの血をバスタブいっぱいになるまで搾^{しほ}り尽くしてやるんだからっ!」

尻尾を大きく振り上げ、あつかんべーをするエリザベート。そんな彼女に見向きもせず、高杉は対象を桂へと戻す。

「ツラ、念のために聞いておく。お前の中に晩年の記憶はあるか?」

「ツラじゃない桂だ………いいや、こちらへと現界した時点では、そのようなものは俺の中には備わってない。恐らくそれは貴様も同じであろう? 高杉。」

桂のその言葉に、居間の喧騒がぴたりと止む。瞠目どうもくしている藤丸に、桂は続けて疑問を投げかけた。

「実はな、藤丸君……俺達がこの変貌した江戸に喚よばれた際、頭の中に蓄積されていたものはサーヴァントとしての情報データと、今日こんにちに至るまでの記憶のみだったのだ。つい今しがたまで普通の日常を送っていた筈であつたというのに、気が付いた時にはこの世界に人ならざる者として召喚されていたなどと、本来はあり得ることなのか……？」

「俺もツラと同様の状況だった。姿形ばかりが見知つたものと似たこの異質な世界の中で、俺達は与えられた靈基うつわの中に、半端な記憶と共に英霊の能力と知識を詰め込まれ、サーヴァントなんざになつて現界させられたんだ……まるで、それまで過あやしていた平穩から、見えねえ缺はきみで己の存在ごと強引に切り取られたようにな。」

同時に溜め息を吐く、桂と高杉。そんな彼らの口から飛び出てきた言葉に、藤丸はだたひたすらに喫驚きつきやうする。

彼らの話が本当であるならば、本来なら英霊である筈の無い者が、何かの见えない力によつて本来居るべき次元からその存在ごと分離され、英霊の器を与えられたということになる。それだけでも充分に信じ難い話であるのに加え、現界したこの世界での自分達が、遙か以前に死亡したということになっている、という現実……。

理解に苦しむ状況が続く中で、ふと新八が抱いた疑問を吐露する。

「そういえば僕達がカルデアに召喚された時も、確かに桂さん達と同じく日常の中からいきなり引き剥がされた状態でした。けれど僕らには、サーヴァントとしての知識も情報も、あらかじめ予め備わってなかったんですよね……これはどういふことなんでしょう?」

「私達も同じだったアル。駄貧乳ダウインチに説明させるまで、自分がどうなってるのかさっぱり分からなかったヨ。ねっ定春?」

「わんっ。」

「ふむ……これは推測だが、それは恐らくリーダー達が藤丸君によつて喚よばれたからではないだろうか? そうであるならば、お前達がサーヴァントに関する事にやたらと疎いことにも合点がいく。」

「えっ……もしかして俺、ヘボマスター呼ばわりされてる?」

「落ち着きなさいよ仔犬、アンタがヘボなのは今に始まったことじゃないわ。」

「おい、フォローになってねえぞドラゴン娘……まあ何だ、てめえのヘボが原因でなければ、こいつらの知識に関する欠落は召喚の際のバグつてことになるんじゃないやねえのか。」

「バグ、か……そういやダヴィンチちゃんもそんなこと言つてたような……あれ?」

ふと藤丸の頭の中に再生される、カルデアでの光景。

そういえば彼らの召喚に用いた、あの触媒……もしやアレが、いやほぼ100%ア

レが原因なのではないだろうか？だってアレ、ダヴィンチちゃんもよく分からないって
 言ってたし。というかそもそもあの銀の呼符がどういったものかも分からないのに、よ
 く召喚式を発動してみようなんて気になったよな俺。いや待てよ、しかし、うーん
 ……。

考えれば考える程深まっていく疑問の中、瓦版に綴られた文字を無言で読んでいた段
 蔵がほつりと零した。

「……しかし、妙な文面の記事ですね。」

「段蔵？どうしたヨ？」

隣から覗き込んでくる神楽にも見えるよう、段蔵は瓦版を差し向けながら続ける。彼
 女の声に、室内の誰もが耳を傾けていた。

『○月○日、某所……未明二起コツタ大規模ナ爆発事故ニヨリ、幕府及ビ攘夷側ノ死
 者・行方不明者多数。爆発ノ元トナツタ原因ハ、未ダ解明ニ至ツテオラス。尚、現場及
 ビ遺体ノ損壞ガ著シク酷ク、現場ニ残ツタ遺留品ニヨツテ犠牲者ヲ特定ス』……。

所々掠れた文面には、地図らしきものも記されている。その横に何行にも連ねられた
 名前の上には、『死亡及ビ行方不明者一覽』と書かれていた。

始めのほうに記載された幕府側の名を大きく飛ばし、神楽が注目したのは最後の辺りにあつた攘夷側のもの。擦れた黒文字が示している、攘夷志士と記された横にあつた三名、そしてその下にあつた残り一名を確認した途端、神楽が声を上げた。

「そんな……っ!!」

澄んだ青い瞳を限界まで見開き、神楽は紙面と桂達を交互に何度も見る。今しがた再確認した事実を、受け入れられないといった様子で。

「……俺達の知っている史実であれば、『あの日』あの場所で爆発事故など起こらなかつた上に、俺と高杉がそこで『死んでいた』という事実も、本来ならば有り得ない………あの場で命を落としたのは、たった一人だけの筈なのだ。」

固く握りしめた桂の拳が、血色を失い小刻みに震えている。そんな彼を一瞥し、高杉はゆつくりと立ち上がると、障子窓へと歩を進めていく。徐おもむろに開いた窓の向こうには、夜闇を照らす街灯り。そして、そんな江戸を一望するかのよう^{かた}に煌々と宵の空に浮かび上がる、眼を模った異形の月。

「本来は起きていた、或いは起あこらなかつた筈の出来事。居る筈の存在モと、居ない筈の存在モ。そして陽光を奪われた江戸の空……これだけの要因が揃つてりやあ、どれだけ頭の悪い馬鹿でも流石に理解は出来るだろうよ……得体の知れないこの世界に、とんでもねえことが起こり始めてやがる、つてな。」

『これより貴様が行こうとしているは修羅が道、待ち受けるは大いなる災厄だ。』

不意に藤丸の脳裏に浮かんだのは、レイシフト前に廊下で受けた、巖窟王のあの忠告。まさか彼のあの言葉は、この事態を暗示していたのだろうか……いや、彼なら有り得るだろう、しょっちゅう人の夢の中に勝手に出て来たりしてるし。

「あの、桂さんがさつき言つてた、たった一人の死亡者つていうのは——」

そこまで言い掛けた時、新八は自身の迂闊な行動の為に自責の念に駆られる……伏せた面を苦々しく歪め、呟いた桂の肩が、見るからに震えていたのだ。

「……その一人、とは……………っ!!」

語尾は震え、最早言葉を紡ぐのも辛いといった様子の桂。見ていられないと高杉が口を挟もうとした、その時であつた。

「ああ、松陽だよ。」

突如今に響いた声に、皆の視線が一点に集中する。後ろ手に閉められた扉の前にいたのは、首からタオルを掛け頭にフオウを乗せた銀時であつた。

張り詰めた空気を肌で感じ取りながらも、銀時はマイペースを保つたまま歩いていき、空いている長椅子へと腰を下ろす。

「銀さん、今の話聞いてたんですか…………？」

「聞いてたも何も、顔洗つてさあ戻ろうとしたら、何だか知らねえがシリアスなムード全開じゃん？だから入るに入れなくて、事が落ち着くまでフオウをモフリながら立ち聞きしてたつてわけよ。」

「フオウフオウツ、ンキュツ。」

「まあ、立ち聞きなんてイイ趣味してんじゃない？ちな因みに確認するけど、どの辺りから聞いてたのかしら？白モジヤ。」

「えくと、高杉くんが己の身長の低さを、座高と足の長さで必死に言い訳してる辺り——
——うおわつ危ね!!」

顔面擦れ擦れに迫ってきた琥珀の蝶を、銀時は見事な海老反りを決めて間一髪避ける。荒く息を吐いて睨んだ先は、蝶を飛ばした犯人の背中。彼はこちらに目もくれてやらず、肘をつき煙管を吹かしていた。

「あのさ、銀さん……さっき言ってたことって、どういうことなの？ 銀さん達が参加してた戦争の中で、どうして松陽さんが命を……？」

真つ直ぐにこちらを見つめ、そう尋ねてくる藤丸の目に宿るのは、明確な怪訝の色。

銀時はそんな彼から目を逸らすと、大きく息を吐いた口から、ぼつりぼつりと語り出した。

「俺達が攘夷戦争なんかに参加した理由ってのはな、国の為だとか威信の為だとか、そんなじゃねえ………唯ただ一つ、松陽を取り戻すこと。その為だけに俺達は刀を取り、命を懸けて血生臭エ戦場を駆け回ってたんだ。」

「松陽さんを……？」

「ああ………その通り。」

話が見えず、藤丸達が困惑していると、桂が横から付け加えてくる。声の震えは止んだものの、沈鬱な様子で顔を伏せたままにいる。

『安政の大獄』……天人の恐怖に腰を抜かした幕府が起こしたこの弾圧により、危険因子と見なされた思想を持つとされる者達は皆、罪人として次々に捕らえられていったのだが……その中の一人に、俺達の恩師である松陽先生もいたのだ。』

唇を噛み締め、戦慄わななく桂の姿に居た堪れず、藤丸は視線を銀時へと向ける。頭から降り、タオルにじやれつくフオウを膝に乗せた彼は、無表情のまま中空を見つめていた。「俺達は皆、死に物狂いで戦った……大切な恩師を取り返すため、居場所を奪った憎き幕府に復讐するため、共に戦い斃たおれていく仲間の仇を取るため、来る日も来る日も、また来る日も……だが現実には、そんな俺達を嘲笑った。」

「……ツラ、もういい。」

不意に銀時が言葉を発したことに驚き、藤丸の心臓が跳ね上がる。彼は視線こそ宙を見たままでいるものの、静かに発したその声に含まれる仄ほのかな怒気に、藤丸は直ぐ様気が付く。

「良い訳などあるか、銀時……俺は、俺達は攘夷戦争に参加した志士達の中の第一人者として、伝えていかねばならんだ。『あの日』、『あの時』、『あの場所』で、俺達を知る記憶の中では、本当はどんなことが起きたのかを……。」

「なあツラ、もうやめろつつつたよな……もしかして聞こえてねえのか？ 耳垢でも詰まってんじやねえの？」

銀時の声は、先程よりも明らかに苛立っている。徐々に顔が険しくなっていく銀時と、変わらず俯いたままの桂を交互に見るのを繰り返していた藤丸達であったが、不意に桂が伏せていた顔を擡もたげる。薄く浮かべた笑みをそこに貼りつけ、緩く弧を描く唇で彼は綴り始めた。

「……銀時、俺は思ったのだ。もしも俺達の辿った結末が、この瓦版に記されていたものであったとしたならば……一体どちらが最良であったとお前は思う？」

「……黙れ。」

「先生を喪った未来と、我らが共に心中する未来……後者のほうであれば、お前にあんな業を背負わせることも無かったというに——」

——刹那、藤丸のすぐ横を掠めていく風。

「キュッ!」と後方で聞こえたフォウの声と重なるようにして、ダンツ!と床に叩きつける音が居間に響いた。

「……………銀ちゃん、何してるネ!？」

「ちよ、ぎぎ……銀さんっ!？」

神楽と新八の声に事態を察した面々が顔を起こし、その視線が同時に向けられた先は………床に転がる桂と、その彼に跨る形で胸倉を掴む銀時。

「……………いい加減にしろよ、ツラ。俺らが今いるこの世界でどんな事が起きていようと、こつち側の俺達がとづくにこの世にやいねえモンだったとしても……………んな下らねえ憶測を幾つも並べたところで、『俺達』に起きた結末を今更変えることなんざ、出来っこねえんだよ……………っ!!」

桂の胸倉を何度も揺さぶり、銀時は掠れる声を絞り出し続ける。見上げた先の彼が浮かべるのは、あまりに悲痛な表情かおであつた。

「……………すまない。」

それ以上は何も言えなくなり、桂は短く謝つた後、口を噤んでしまう。

……………静寂の訪れた居間に響くのは、舌を出した定春の呼吸音のみ。

気まずい沈黙が辺りに漂い始めたその時、ドアを隔へだてた向こう側から、ドタドタと足音が聞こえてきた。

「ねくえ！バスタオルってどこにあるか知らなくい？」

「バァン!と大きな音を立て、扉は込められた力により開かれる。そこに立っていたのは、声の印象に負けない明るさを秘めた少年サーヴァント、アストルフォ……………」のだが。

「キヤアアアツ!!ちよちよちよ、ちよつとアンタ!なんでまだスツポンポンのままなのよ〜!」

顔を両手で覆い、定春の影に隠れたエリザベートが叫ぶ。乙女ならこうして恥じらいを見せるのが定番だったりするのだが、同じ性を持つ神楽と段蔵は赤面する様子すら見られない状態のまま、揃ってアストルフォへと視線を向けている。

「仕方ないじゃーん、お風呂上がったらバスタオルが置いてないんだもん。何度かおつきな声で呼んだんだけど、返事が無いから仕方なく聞きに来ちゃった。」

雫の滴る髪を、被っていたタオルで乱暴に拭いているアストルフォ。身に着けているものは本当にそのタオルだけのようで、肩から爪先までの上気した肌が、惜しげもなく曝さらされている。

少女と見紛う程の美少年の湯上りヌードとなれば、ファンには堪らなく嬉しいサービスである……………だがしかし、空いた口が塞がっていない状態になった室内の彼らが注目しているのは、腰よりもつと下……………あ、カメラさんちよつと行き過ぎかな?そつからちよい上……………そう、勘の良い方は既に気付いている筈。そこは俗世間な呼び方ですと

……ちようどまたぐら股座と呼ばれる箇所。

「あれ？皆どうしたの？」

一同の視線がこちらに集まっていることに漸く気が付き、アストルフオは小首を傾げる。

「な……………」

「な、ななな……………！」

「なんつじやこりやああアアアアアアアアツ！」

誰ともつかぬ叫びを背中で聞きながら、高杉は深く吸った紫煙を外へと吐き出す。揺

らめき踊る煙は次第に形を失っていき、やがて暗闇の中へと同化し消えていく様を見届けてから、高杉は小さく呟いた。

「……………下らねえ。」

《続く》

【伍】 曖昧模糊（Ⅲ）

「ほあく……いいお湯だったなあ。」

タオルで髪の水気を拭き取りながら、アストルフオは長椅子に腰を下ろす。既に彼の隣に座っていた松陽は、頭にタオルを乗せたまま惚けていた。

「ありや、松陽顔が赤いネ。逆上^{のほ}させたアルか？」

「ううう……しゅみましえん、少々湯中^{あた}りをしてしまいまして……。」

「あらあら、それは大変ねえ……あらあ？こんなところに素敵^{うちわ}な団扇があるじやない！ほら松陽、これあげるから使いなさいな。」

満面の笑みでエリザベートが差し出したのは、アイドルのライブなどで必ずといっていいくらいにお目にかかる大きめの団扇。目がチカチカとしてしまいそうな色彩の文字で『鮮血魔嬢・killer☆killer輝いて』などと書かれたそのブツは、記憶が確かならば本来はこの部屋になど無かつた筈……否、ここはスナックお登勢の二階。いくら散らかっていたとはいえ、異なる作品の物が存在するなどあるわけが無い。うん、無い無い。

ということ、やはりこの団扇は100%彼女が持ち込んできた私物ということになるのだろう。全くどこに忍ばせていたのやら、などと考えながら藤丸が見つめる先で、ごてごてにデコられた団扇に対し礼を言つて受け取つた松陽は、片手にかかる重みに耐えながら団扇を動かし、ほんの僅かに発生する微風を何とか頬で拾つていた。

「松陽殿、そのままではお風邪を召されます………失礼。」

断りを入れ、段蔵は松陽の後ろへと回る。あまり強くなく、且つしつかりとした力加減で髪を拭いてやると、心地良さに松陽は目を細めた。

「はひゅ。それにしてもいっぱい汗かいたから、喉が渴いちゃつたよう。」

「それなら私がいいモノ作つてやるヨ、ちよつと待つてるヨロシ。」

くるりと体の向きを変え、歩き出す神楽。足元にいたフォウを肩に乗せ、軽快な足取りで台所へと向かつていく途中、空を見つめたままぶつぶつと何かを呟き続ける新八の前で、彼女は止まった。

「おい新八イ、いつまで呆けてんだヨ。お前も手伝うアル。」
「フォウ。」

着物の襟を掴まれ、引き摺られるがままに台所へと消えていく新八の姿を、藤丸は憐憫の眼差しで見送つていった。

「それにしても、たまげたものだ………あれが話に聞いていた、アストルフオ殿………改め

アストルフオ君のこの世ホならざる幻馬グか。うむ、立派であった。」

「ちよつと!! 何お馬鹿なコト言つてんのよアホツバメつ!! あんなモザイク必須の猥褻わいせつなモンが宝具なわけないでしょくがっ!!」

「いやいや、それは違うぞドラゴン娘。だつてこいつ、その……宝具?とかいうモン、他にも色々あるつて設定らしいじゃん?にしても、今思い出すだけでも凄かつたなく。ありや宝具と呼んでもおかしくねえ代物だつたぜ。俺もう気安くアストルフオなんて呼べねえよ、アストルフオ『さん』つて呼ばせてもらわねえと。ん?パイセンのがいいかな?なあ藤丸、どつちがいいと思う?」

「あゝ、ほかあ何でもいいと思うよお。でも銀さん、一個訂正。宝具バオベエじゃなくて宝具だから。まあ奇跡的なものを起こす意味では似通つてるところもあるかもしれないけど。」

鼻の頭を掻きながら答える藤丸の前方で、気恥ずかしさから頬を染めたアストルフオが、「たはは」と眉の傾斜を下げ微笑を浮かべていた。

「宝具ねえ……つか、その『宝具』つてのは結局何なんだよ?ダヴィンチの説明もあつたけど、結局小難しくてよく分かんなかったし。」

「む、そういえば貴様もリーダー達と同様、サーヴァントの記憶は備わつていなかったのであつたな……よかろう、彼らが戻ってきたら今日の収集結果の報告を終えた後に、改めて教示するでしょう。藤丸君、君にも協力を頼みたいのだが。」

「うん、いいよ。といっても俺自身、上手く説明出来るか不安なことだけでも。」

「構わんさ、充分に助かる……それから高杉、いつまでもそんな所にいないで、お前もこちらに来てい。」

「やなことつた、俺が赴く必要がどこにある？」

「……俺の説明に不足な点があれば、貴様にも補ってもらいたいのだ。四の五の言わずにさっさと来んか。」

やや苛立ちを見せながら桂が差したのは、自身の腰掛ける長椅子の空いた隣。胸中の感情を露骨に顔に示しながら振り向いた高杉であったが、不意に彼の右眼がこちらを凝視する松陽の視線とぶつかる。

「晋助さん、宵であれば外は冷えます。どうぞこちらにいらしては如何ですか？」

柔和な声音と湛えられた和やかな微笑に、高杉の渋面にも微々ながら動揺が表れる。

「ほらほらスギつちく、何だつたら僕がツラ君の隣に移動したげるから。君も早くこっちおいでよ！」

言うなり椅子から立ち上がり、くるりと体を反転させたアストルフオは、そのまま桂の隣へとお尻をダイブさせる。ここまでしてもらっては断る理由など見つからず、高杉は大きく息を一つ零し、皆のいるテーブル側へと移動を開始した。

「よかったでちゆねく高杉くん、優しいお友達に特等席譲ってもらっちゃって。本当

昔っから我儘わがままの頑固者なんだから、そういうとこ全然変わんねあれ何か焦げ臭くない？」

「銀時殿、蝶々の止まつてる頭の頂点から煙が昇っております。」

「アギヤアアアアアツ!! 段蔵ちゃんっこういうアクシデントはもつと焦ったテンションで教えて頼むからっ!!」

銀時の絶叫が響く中、廊下側の扉が開かれる。「もくうるさいですよ銀さん」と呆れた様子の声と共に居間へと入ってきたのは、湯呑やコップの乗ったお盆を持った新八。彼に続いて同じく盆を携たずねえた神楽と、最後に入場してきたフォウが引き戸を閉めようと爪で力り力りしていたところを、近くまで寄っていた高杉が小さな身体を抱き上げて回収し、彼の手によって扉は閉められた。

「ハイお待ち、万事屋特製狩カ比ル酢ビスアルよ。」

「コップの数が足りなくて、湯呑ですみませんが………はい、藤丸君もどうぞ。」

「わあ、ありがとう。俺も喉乾いてたんだよね。」

新八に礼を言い、藤丸は手渡された湯呑を受け取る。

徐々に暑くなりつつある初夏の季節。じんわりと滲んでくる汗が何とも不快であるが、そんな時こそやつぱりコレ、お馴染みの皆大好き乳酸菌飲料。澄んだ白に爽やかな甘酸っぱさは、懐かしき青春の味を思わせる………つてちよつとちよつと、俺まだ青春

真つ盛りの健全男子なんですけどお？と地の文を睨みつけてから、藤丸は湯呑に目を落とした。

「……………ん？」

揺れる水面の下、濁った白色の向こうで藤丸がご対面したのは、湯呑の底に描かれた花模様。

あれ？いや待って、おかしくない？俺の記憶にあるカル……………狩比酢は、こんなに色が薄いものだっただろうか？

ふと顔を上げれば、ほぼ全員に狩比酢を配り終えた新八と神楽が定春に寄りかかって座り、件の狩比酢（？）が注がれているであろう湯呑を同時に呷あおっている。やがて容器を下ろした向こうにあった彼らの表情は、何とも幸福に満ち溢れたものであった。

「かくつ美味エ、暑くなってきたらやつぱコレだよなあ。」

空になったコップを床に置いた銀時が口元を拭う。彼の満足気な様子を隣で見ている藤丸の頭に、もしかするとこちらのカルピ……………狩比酢ってこういうものなのかもしれない、といった結論が浮かぶ。だってほら、今透明なのにしつかりと味のついた飲み物とか多いじゃん？きつと狩比酢も外観に更に涼しさを追求した末に、だったらもういっそのこと色も取っ払ってクリアにしちまおうぜくなんてことを提案した者が、恐らく開発段階の最中にいたのだろう。

「わ〜い！ いただきま〜すっ！」

「ごくりごくりと、喉を鳴らして狩比酢を飲むアストルフオの傾けたコップから、勢いよく嵩^{かさ}が減っていく。あまりにいい彼の飲みっぷりに無意識に喉を鳴らし、藤丸もよく冷えた湯呑を口につけ、一気に狩比酢を口内に流し入れた。

「カラダニピースツツ!!」

直後、恒例となりつつある奇怪な悲鳴と共にブフォアツ!!と勢いよく噴き出される狩比酢。すぐ隣で起こった事態に泡を食う銀時の横で、器官に侵入してしまった狩比酢により藤丸が激しく咳き込んでいた。

「おい藤丸、大丈夫か? んな一気に飲もうとすつからそうなんだよ。」

「ゲホツ……………違、銀さん……………コレ……………」

段蔵に手渡されたハンカチで口元を拭いながら、藤丸は震える手で零れた狩比酢を指差す。そんな藤丸の姿に、まだ口をつけていなかったエリザベートは訝しみながら、コップの中の狩比酢と疑わしき液体を少量含んだ。

「薄^うつつつす!! ちよつと何なのよコレ!! 味が薄いにも程があるわよつ!! これじゃあ力〇ピスじゃなくてボトルの中を濯^{ゆす}いだけの水も同然だわ!」

「あ? だからさつき神楽も言ってただろ、『万事屋特製』狩比酢だって。俺ん家じゃあ日頃からこうして、原液の希釈量を倍の倍のそのまた倍にして飲んでんだよ。こうすりゃ

節約にもなるし、只の水に色とほんの少しの風味がつきやあそれで充分だからな。」

しれつとした態度でそう説明をする銀時の後方では、桂が眉間を押さえて深い溜め息を吐いている。

一方高杉はというと、狩比酢もと擬きに鼻を近付けて匂いを確かめた後、無表情のままコップをテーブルへと置く。そこに飛び乗ってきたフオウが小さな歩幅でコップまで歩み寄り、波打つ表面を数回舐める。そして数秒もしないうちにしか響めつ面へとつら変容したフオウはぶいとコップから顔を背け、高杉の膝の上へと戻っていった。

「うくんつ、コレは薄いね！でも喉乾いてるからもう一杯！」

新八がアストルフオからコップを回収しているその傍らで、松陽は湯呑の中の薄い白濁色と皆の様子を交互に観察してから、こくこくと狩比酢を飲み始める。

「せん……………松陽。んな水と変わらねえモン、無理して飲むこたアねえぞ？何だったら俺がちやんとしたヤツ作り直してきてやるから。」

高杉が言い終える間に、中身を飲み干した松陽は湯呑を下げると、小さく吐いてにこりと微笑み、拭った口元を開いた。

「狩比酢、でしたか？ほんのり甘味と香りがあつて美味しいですね。」

「ええ……………でも松陽、これすつごく薄いのよ？」

「皆さんの反応をざ覧になる限り、きつとそうなのでしょね。でも私にとっては初め

て口にしたものですし……それに、これは新八君と神樂ちゃんが作ってくれたものから。味に多少の違いはあれど、私はこれをとても美味しく頂かせてもらいました。お二人とも、ありがとうございます！」

まるで菩薩のような笑顔と温かい感謝の言葉に、新八と神樂は胸の内から湧き上がってくる感動に打ち震え、そしてそれは彼らの近くにいた銀時にもまた、密かに伝染していくのであった。

「ぎ、銀ちゃあん……っ！私、自分が恥ずかしいアル！こんな水も同然のドケチなモンを平気で出したのに、あんな風にお礼を言われるなんて……ぐすっ。」

「泣かないでよ神樂ちゃん、僕まで悲しくなつてきちゃうじゃないか！ううう………というか思ったんですけど、ここって今は万事屋じゃありませんし、あの狩比酢だつてお登勢さんが好きにしていって言ったものだから、節約なんてする必要なかつたんじゃないか……？」

「よし手伝えお前らあ！原液ありつたけ用意しろっ！！待つてろ松陽、本当に美味しい狩比酢つてやつを今飲ましてやつからよ！」

颯爽と立ち上がり、台所へと駆けていく万事屋社員三名。騒々しいきょうおん登音がフェードアウトしていくのを啞然としながら聞く一同の後ろで、定春は大きく欠伸をしていた。

「……それではこれより、皆が集めてきた情報の収集結果をまとめたものを発表していく。」

桂の置いたコップの中で、作り直された狩比酢の中を漂う氷がカラン、と涼し気な音を立てる。

彼と、彼が助手として召喚した式神エリザベスへと皆の視線が集まる中、桂は取り出した一本の巻物を広げる。そこに記された内容を指でなぞるや否や、光を纏^{まと}って浮き上がった文字や写真は宙へと浮き上がり、桂がエリザベスの引つ張つてきたホワイトボードを指すと、それらはまるで意思を得たかのようにそちらへと飛んでいき、再び黒い線や字となつて白い板面に刻まれた。

「この江戸……いや、この世界が常夜となつた始まりは、今からおよそ十年前。偶然にもそれは、あの瓦版にもあつた攘夷戦争終結と重なる時期にあつたようだ。突如として現れた、黒い影霧^{もや}ともつかぬものが空を覆い尽くし、その原因も解明されぬまま時が経過した……と、ここまでの情報は三組とも共通であつたな。」

「あの戦争が終わつたと同時に、空からお天道さんが消えた。つてか……：……何度聞いても妙な話だぜ。大体太陽を消すなんて真似、普通に考えりや出来っこねえだろ。」

「銀さんの言う通りですよ。もし仮に犯人が天人だったとしても、こんな長い年月の間ずうっと太陽を隠してしまふなんて技術があるわけ……いや、もしかしたら他の星で発達した技術を使えば可能になるかも。だとしたら、この一連の異変の黒幕は天人!!」

興奮気味に身を乗り出そうとする新八。だがそんな彼を制するように、銀時の手が肩を掴む。目を動かして座るよう促され、それにより平静を取り戻した新八は大人しく従う。

「新八君が言った通り、俺も最初は天人の仕業かと疑いの目を向けていた。だがアストルフオ君からの報告を受け、俺の中でその可能性にも変化が起こったのだ。」

「アストルフオからの報告……?」

反芻した藤丸に答え、「はいはいっ!」とアストルフオは元氣よく挙手をする。そしてコップの中の狩比酢をまた一気に飲み干すと、自分を見る皆へと向き直り説明を開始した。

「僕、昼間の調査でヒポグリフに乗って、空からこの江戸まちを見下ろしてみただ。始めはちゃんとスギつちの忠告に従って高度を上げ過ぎないでいたんだけど、段々調子に乗っちゃってさあ……。」

言葉を区切り、頬を掻くアストルフオの正面で、長椅子に腰掛けた高杉が呆れた眼差しを彼へと向けている。痛いと感じるその視線を受け片頬笑みを浮かべるアストル

フオに続けるようにして、今度は神楽が挙手をした。

「私もアストルフオと一緒に乗ってたアル。途中何回か宇宙船にぶつかりそうになったけど、ヒポグリフは大分高いところまで飛んだネ。」

「高いところって……アンタまさか、大気圏まで到達したんじゃないでしょうね?」

「あく大丈夫だいじよぶ!今日は行ってないから。」

えっ、今日『は』……?と疑問に思った方は、この場にいる一同だけではないだろう。詳細を知りたくなかった方は是非、『シャルルマーニュ伝説』を読んでみよう。ともあれ彼がそこまで上空を飛行していないことは分かったため、ひとまず皆アストルフオと神楽の話に再び耳を傾ける。

「それで私達、結構な高さまで上がっていったヨ。でも途中から急に、周りの空気が変になってったアル。上手く言えないけど、体の表面がびりびりするっていうか、あとは嫌に頭がもやもやしたり……とにかく、まとめて嫌な感じがしたネ。」

「僕とヒポグリフも、そのおかしな空気の变化に気付いてたよ。あれはどこかで感じたことがある……そう、言うなら『結界』の境目に接近した時に近い気配だったかな。」

「結界……?ってことは、この世界にも桂さん以外にも魔術が使える人が、まだいるってことですか?!!」

新八にとって、それはゲームや物語の中でしか知識を得たことが無い言葉。しかしそ

の単語が示す意味が魔術的なものであることは理解しており、驚愕のあまり立ち上がった勢いで、彼の傍にあつた湯呑が倒れる。あと少しで中の狩比酢が床にぶちまけられる寸でのところで、段蔵の伸ばされた手が素早く容器をキャッチしたことで難を逃れた。ナイスクノ一。

「そんなに大袈裟に騒ぐことでもないでしょ？ 眼鏡ワンコ。大体ツバメと黒猫だつて英^{サツアト}霊として召喚されてんだから、マスターになつてる術者がいてもおかしくはないわ。」

「うむ、エリちゃん殿の言う通りだな。それにこの江戸には古くより存在する、結野衆と^{けつ}巳^{しり}厘野衆という陰陽師の一族もいるらしいではないか。彼等が関わっているかはまだ分からぬが、可能性としてはゼロではないと俺は睨んでいる。」

桂がどこから取り出した指示棒で指した先は、ホワイトボードの上部分。そこに映された古風な大きい屋敷は恐らく、彼が今しがた説明をした陰陽師一族のものなのだろう。

「ケツにお尻に……：銀さん、こつちの人達は随分と個性的な名前が多いんだね。」

「ケツでもお尻でもねーよ。そういうお前だつて、大分変わった名前してんじやねえか……：あれ？ 藤丸、そーういやお前の下の名前つてなんだっけ？」

「あれ？ それじゃあもしかすると、江戸から太陽が消えた原因つて、その結界も関係して

るとか……だとすれば、カルデアと通信が出来なくなつて原因も、そこにあるのかな?」

銀時の問いを敢えて無視し、藤丸は浮かんだ疑問を桂へと尋ねる。隣から聞こえる大きな舌打ちを流す藤丸の視線の先で、桂は少し考えた後に口を開いた。

「……その可能性も大いにあるだろう。いずれにせよ、これだけの情報では異変の根源を突き止めるには至らない。また明日より各自、調査活動に励んでくれ。」

桂の言葉に、短い了解の返答が疎らに起きる。桂の後ろでエリザベスが巻物を広げると、ホワイトボードの文字達は再び浮き上がり、元いた紙面へと吸い込まれるようにして戻つていった。

「そういえば高杉、貴様はまた一人別行動をとつていたようだが、そちらは何か収穫はあったのか?」

パチン、と指を鳴らし、式神を消失させた桂が徐に疑問を投げ掛けたのは、長椅子で頬杖をついている高杉。丸くなったフォウを膝に乗せ、愛おし気に撫でる松陽を眺める慈愛の眼は、桂に呼ばれると同時にまたいつもの冷淡な光を湛え、彼へ向けられる。

「あーっ! そうだよスギっち、どこに行つてたのさ?!!」

「そうネ! 一人で美味しいモンとか食に行つたりしてねーだろうナ?! 今度は私達も連れて行くヨロシ! なっ定春?!!」

「わうう? くあく……。」

大きく欠伸をし、再びそっぽを向いてしまふ定春を見遣つた後、ぷりぷりと冠を曲げているアストルフォと神楽に対し、高杉は薄笑いを浮かべて答えた。

「そりやあすまなかつたな、お姫さん方。だがこつから先は大人の領分だ、どうしても踏み込んできたいつてンなら……もつと色を含んで成熟してくるこつたな。」

眉目秀麗という言葉が型に嵌りきらない程の芳顔と、相手を射殺すかのような物言いを綴る艶やかな声。

おぼこである神楽とアストルフォ(?)にはどうやら刺激が強過ぎたようで、耳まで真っ赤になつた二人はそれ以上の発言を止めてしまふ。また何故かエリザベートに新八、そして藤丸までもそれは伝染し、(精神年齢的にも含め)未成年達は皆赤面し俯いてしまつた。

「……高杉、貴様さては魅了スキル持ちか?」

「ハハツ、どうだかね。性能だのスキルだのそういった類のモンは、読む側の各々が自分の頭の中で想像膨らませるのが楽しいんじゃないのかい?」

くつくつと喉を鳴らして笑う高杉の隣で、話の自身が理解出来ない松陽は小首を傾げる。その彼に合わせるようにして、顔を擡げたフォウもまた、「フォウ?」と小さく鳴いて首を傾げた。

「んで、どこ行ってたかは知らねエけど、お前の方はどんな情報持つてこられたんだ？まさか一人でぶらぶら遊び歩いてただけで、何の成果も!! 得られませんでしたっ!! とか叫んで膝ついてても銀さん許さねエぞ？」

「阿呆、誰がんな真似するか。それに少ねエが、成果はしつかり得てきたぜ……………件の馬鹿デカい城に関する情報だ。」

高杉が言い放ったその言葉に、室内の空気が一気に張り詰める。彼は椅子から立ち上がる、最早そこが所定位置と呼んでも構わないであろう障子窓へと移動していき、薄い紙の貼られた窓をスライドさせた。

宵の空を照らす、数多に浮かぶ宇宙船の光。そんな人工的な星月夜の中で一際青白く輝いている、『眼』の形をした月に照らされているのは、あの巨大な天守閣。昨夜見た時とはまた違う雰囲気を放つその建造物に、藤丸は改めて不気味さを覚えた。

「とある連中から聞いたんだが……………おつと、まだそいつらの素性は明かせねエ。まあとにかくだ、江戸に長いこと定住している連中曰く、あの天守が現れたのは今から凡そ十年前、突如としてあの場所に建造されたそうだ。」

「十年前つて……………それじゃ、江戸が常闇になった時期とまるで同じじゃないですか!!」
思わず声を張り上げた新八を、高杉は目だけを動かして一瞥し、またすぐに視線を戻すとそのまま再開する。

「それと奴等の話だと、今の江戸には幕府も将軍も存在しない。あの城に居座ってる奴がその代わりとなる立ち位置に就いて、とりあえず形だけ国を治めてるらしい。」

「将軍、も……ちよつと待つてヨ、スギつち……それじゃあ『そちゃん』は？ 将ちゃんだつてどこに行つたアルか?！」

声を荒げ、必死の剣幕で高杉へと詰め寄る神楽。突然取り乱す彼女に呆然としている藤丸達に、銀時と桂が横から補足を加える。

「あくと……そちゃんつてのは神楽のダチでな、俺らのいた江戸を治めてた将軍の妹だ。」

「そして将ちゃんというのは、『将軍かよオオオオツ!!』の台詞でお馴染み、江戸幕府の第十四代目征夷大將軍・徳川茂々のことだ。因みに俺や銀時達とも、何度も面識がある男なのだぞ。」

「その『将軍かよオオオオツ!!』は知らないけど、征夷大將軍とその妹さんをそんな親し気に呼べるなんて……銀さんつて、実は凄い人だったり?！」

「何だ藤丸? 本編の連載21話目にして、漸く俺の凄さに気付いたのか。大分遅かったが、寛大な銀さんは大目に見てやろう。そらつ美酒のおかわりを注いでやる、盃を出しな。」

「はは、ありがたき幸せ。」

上機嫌の銀時が藤丸の差し出した盃ゆのみに美酒カルピスを注いでやる一方で、高杉が興奮する神楽の肩を軽く叩いてやると、その行動により少し落ち着きを取り戻した神楽は、元いた定春のもふもふボディへと大人しく戻っていった。

「何故將軍がいねエのか、そしてせいづらは今何処に行つちまつたのか……この辺りに関する情報は、俺もまだ掴めていない。しかし俺が話を聞いた連中は、皆口を揃えてこう言っていた——あの城には、人喰いの『鬼』が棲すんでいる。つてな。」

窓から入ってきた通り風が、高杉の頬を撫でる。街灯りと、異形の月によつて照らされた天守閣を、彼の右眼は鋭い眼光で睨みつけていた。

「人喰いの、鬼………!!」

誰かの呟いた声が室内に響き、そして静寂に消えていく。

藤丸を始めカルデアのサーヴァント達、そして銀時達もが高杉の放ったその一言に度肝を抜かれ、皆唾然とすることしか出来なかつた。

「鬼、ですか………ということは、あの城には真まことに鬼が棲すんでいるのでしょうか？高杉殿。」

「さあな。何者かが適当に流した噂に、真偽の分からねえいい加減な尾びれと背びれがついた代物かもしれねえ。だが実際にあの城を訪れた連中が、そのまま忽然と姿を消したなんて噂が掘り出せばあちこちから出てきやがる………そいつさながら宛さながらら、城に住まう人

喰い鬼が獲物の着物片一枚残すことなく、全て食い尽くしちまったようでもあるな。」

こちらに振り向くことなく、淡々と綴る高杉の言葉に、皆一様に黙りこくつてしまう。ふと藤丸が顔を上げた時、松陽が窓の方を向いたまま不動の姿勢でいるのに気が付く。だがよく見れば、彼の固く握った拳は指の先までもが白くなり、肩も僅かに戦慄していることが確認出来る。

「松陽、さん……………」

そろそろと名を呼んでみるも、反応は無い。松陽の変化に遅れて気が付いた面々の意識も、自然に彼へと集中していった。

「おい松陽、どうした……………」

「フオウ、フオウ？」

「しよーよーさーんっ！もしもくしっ！！」

いつの間にか顔のすぐ傍まで接近していたアストルフオが耳元で声を張ると、「ひやつ!!」と短い悲鳴を上げて松陽が僅かに跳ねた。

「あらま、可愛い声。小鳥の囀りみたいね。」

「松陽殿、如何なされた？どこか気分でも悪いのか？」

こちらを心配する皆の態度と言葉を受け、漸く我に返った松陽は目を丸くしたまま一同の顔を見回す。

「いえ、どこも悪くはないのです……ただ。」

俯き加減に目を伏せ、松陽の手は自らの着物の袖を掴む。その手がまた、微かに震えているのが見て分かった。

「皆さんがお話をされていた、あの窓から見える大きなお城……自分でもよく分からないのですが、あれを目にした途端から何かがおかしいのです。どうしてなのでしょう？理由も分からないのに怖くて、ただ怖くて怖くて、どうにも身体の震えが止まらなくて……まるで、見てはいけないものをこの眼まなこに映してしまったかのように……。」

袖を掴む手を放し、そのまま自身の肩を抱く松陽。見開いた両の目は木製の床を映し、元より薄い肌色の顔は先程よりも青ざめているのが明らかであった。

銀時が目配くばせするよりも早く、高杉の手は障子窓を閉め、急せいた様子でこちらへと駆け寄る。

すっかり縮こまってしまった松陽。そんな彼の肩に乗る手に重なるようにして、一回り小さな手がそつと置かれた。

「松陽、もう窓閉めたアルよ……大丈夫ネ、ここには私達しかいないアル。例えこないだみたくないなヘンテコ連中がいきなり押しかけてきても、この神楽様が絶対に守つてやるヨ！」

「……神楽ちゃん。」

ゆつくりと顔を上げた松陽。そんな彼を次に待っていたのは、ふわりと半身を包む温かな感触。

「ほら、元氣の出るおまじないアル。私がちつさい時に、マミーがよくこうしてくれたネ。」

神楽に上体を抱きしめられ、ついでに頭もぽんぽんされている。しかし恥じらいよりは心地良きの方が勝り、胸の内から溢れた安堵感に松陽は目を細めた。

「……………もう大丈夫です。ありがとうございます、神楽ちゃん。」

「ん〜……………も少しこのまま。松陽の髪サラサラで気持ちいいアル〜。」

「えっと、神楽ちゃん……………流石に恥ずかしくなってきましたので、どうか後生です……………」

「ほら神楽、松陽困ってんだろ？早く放してやれって。」

銀時からの注意を受け、神楽は渋々松陽を解放する。落ち着きを取り戻した彼に先程の怯えた様子はなく、またいつもの温和な笑みを面に湛えていた。

「それにしても、お城をあんなに怖がるだなんて……………確かに俺から見ても、どこことなく気味の悪さは感じるけど。」

「ふむ……………これはあくまで俺の推測なのだが、松陽殿の記憶が失われている原因も、もしまああの城にあるのではないだろうか？」

桂の直言に、異議を申し立てる者はいない。寧ろ他の者達も、今彼が唱えたものとは
ぼ同じことを考えていたからであつた。

「よつし！そうと決まれば、明日の調査はあの城に行つてみることにするか。おい藤丸、
一緒に来いよ。」

「うん、明日は銀さん達と行くことにするよ。」

「待て二人とも。あの城は俺と高杉もまだ近寄つたことすら無い、まして鬼に喰われる
という噂があるならば、何が隠れ潜んでいるのか想像もつかない。危険極まりないぞ。」
「大丈夫だろ。銀さんは只でさえ強い上に、今はサーヴァントのチートなスキルも上乘
せされてんだけええ？鬼が来ようが魔物が出ようが、ちよちよいのチヨイつと片付けてや
らあ。」

「そのちよちよいのチヨイでしょつちゆう魔力切れを起こされては、元も子もないでは
ないか……………よいか、明日は皆であの城へと赴く。それで良いな？ん？勿論異論は認
めんぞ。ハイ決定！」

ほほ強引に決定され、不満げに頬を膨らせる銀時。その一方では、神楽とアストル
フオが和氣藹々としていた。

「わ〜い！皆で一緒にお出かけだなんて嬉しいね！」

「おやつは何がいいかな〜？とりあえず酢昆布と酢昆布と、あと酢昆布アル。それと

こつちの酔昆布も……。」

一体どこからその大量の酔昆布を持ち込んでいたのか……二人の間で山のように（と
いうかほぼ山）積まれていく赤い箱を眺めていた松陽に、高杉がそつと声を掛けてきた。
「……貴方はどうする？ここで待つてるかい？」

「……いいえ、私も是非行かせてください、晋助さん。先のことを忘れたわけではありま
せんが、もしもあそこに私の記憶の手掛かりがあるのでしたら、少しの可能性にでも賭
けてみたいのです！そして……そして……そして、貴方がたとの大切な記憶を、一刻も早く思い
出したいんです。」

にこりと、またいつものように微笑む松陽。その笑顔の下に隠れた様々な感情おもいを読み
取った高杉は、返答代わりに小さく微笑んでみせた。

「松陽、あんまり無理はすんなよ？」

「はい！ありがとうございます、銀時さん。」

「でもこれで、松陽さんの記憶も戻るといいですね。それに背中のアレも気になってた
ことですよ——」

新八がそこまで言い掛けた時、「あつ」と誰かが短く声を発する。出所を探せば、そこ
には神楽と酔昆布の箱でネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング
砲（現段階で中々の完成度だなオイ）を作ろうとしているアストルフオが、中空を見つ

めて大きく口を開けていた。

「そーだそーだ！ツラ君とスギつちに聞かなきゃならないことがあったのに、すっかり忘れてたよーいっけない！」

「ツラじゃない桂だ。して、俺達に聞きたいこととはなんだ？」

「うん。さつきパチ君も言ってた、松陽さんの背中の中の刻印のことなんだけどさ……。」

「こちらを睨みつけるかのような形相のまま固まる、桂と高杉。緊張の漂うこの二人とは対照的に、アストルフオはいつも通りの明るい声で、やや首を傾げながら答えを紡いだ。

「無かったんだけど。」

「……………は？」

「だから、無かったんだよ。二人が言ってたあの刻印、松陽さんの背中の中にも。」

アストルフオは簡潔に答えると、テーブルに置いてあった狩比酢を一気に飲み干す。

「ぶっはーっ！」とコップを下ろしたアストルフオが対面したのは、驚き桃の木山椒の木、更に目を白黒させた桂の何とも言えない顔であった。

「おいおい、一緒に風呂に入ったアストルフオがこう言ってるんだぞ？お前ら本当に見たのかよ？」

「俺は見た……………かもしれねえ。途中から直視出来なかったから、完全にツラに丸投げ

してた。」

「たつ高杉、貴様までそのようなことを……………あく分かった！それならもう一度確認すれば良い話だろう！では松陽殿、ちよつと失礼するぞ。」

桂は長椅子から身を乗り出し、きよとんとしている松陽の寝巻用の浴衣の襟に手を掛ける。それが左右に引つ張られ、あられもなく肌蹴られ……………することはなく、暴走状態突入前の桂の暴挙は、「無礼千万つ!!」と同時に叫んだ銀時と高杉による見事なコンビネーションキックが炸裂したことにより、未遂に終わった。

「でもアストルフオ、松陽さんの背中の様相が無かつたつて本当?」

「そーよそーよ! 納得のいく説明を求めろわ!」

「フォーウウ!」

「んくそうだね、それじゃあこれから僕が松陽さんとお風呂に入つてた状況説明を……………とりたいところだけど、ごめんマスター! それはまた次回にしよう!」

「えつ、次回に回すのコレ? こんな中途半端な状態? というか宝具の説明は?」

「だあってえ、予定の文字数大幅に超えちゃつてるんだもん。だから今日はここまで! え? 早く僕の入浴シーンを見せろ? やだなあくもうつ、マスターつたらスケベさんなんだから☆」

「いや、俺何も言つてな——」

「というわけで、今日はここまで！次回はな・な・なんと！初っ端から入浴シーンです
ターゲットしちゃうよっ！ちよっぴり恥ずかしいけど、これも閲覧数のためだから仕方ない
よね……？それじゃ、次回も楽しみにしてくれると嬉しいな！バイバクイ！」
「健全だから！念のため言っておくけど、この作品一応健全な方向で進めていく予定な
んだからね！皆忘れないでエエエっ！！」

《《続く》》

【伍】 曖昧模糊 (IV)

『風呂は、命の洗濯だ』

かの有名なSFロボット作品において、こんな名言が存在する。

入浴というのは、人間が生きる上で欠かせない習慣の一つである。毎日動きまわっていたり、また何もしていない時でも、身体は排出される老廃物によつて毎日汚れていくもの。そんな不快感を疲れと共に洗い流せてしまう場所が、ズバリお風呂である。

芳^{かぐわ}しい香りのシャンプーで隅々まで洗い、適度な温度の湯舟に浸かれば、その日の疲れなど瞬時に和らいでしまう。お風呂つて入るまでが面倒だと感じて、いざ済ませてしまえば心身共にサッパリ爽快。余程のことが無ければ、やつぱ入らなきやよかつたなあ……などと後悔する人もいないだろう。

さてさて、今から始まりますのはそんなお風呂での光景。前々回にてアストルフオが松陽の手を引いて浴室まで来た辺りから始まるのである。

「ふんふんふん、ふんふんふん♪」

上機嫌に鼻歌を奏でながら、指を掛けたサイハイソックスをすると下げていく。髪を結い上げ、服を殆ど脱ぎ終え、露出の低い普段の衣装ではお目にかかれない白い肌
が剥き出しになる。そして最後の砦が畳まれた服の上に置かれ、新たに曝け出された彼のスラリとした脚線美は正に………あのくすいませんお客様、撮影は困りますんでカメラ止めてくださいカメラ。

「よしつ、と。さくつ今日汗を流すとしますかー」

勢いよく開けられた扉の向こうには、朦々と湯気の立ち込める浴槽と適度な広さの洗い場。二人で使うには多少狭さを感じるであろうが、まあそれもまた楽しいもの。

腰に手を当て、仁王立ちの構えで浴室を見渡すアストルフオだが、本来は腰に巻いていなければならぬ笥のタオルが、彼の頭に鎮座しているではないか。ちよ、コレ文章じゃなかったらマズい絵面じゃね？とお思いの方もいらつしやるだろう。だがその辺の心配はご無用、室内を満たすほどの白い煙がアストルフオのアストルフオを上手いこと隠してくれている。しかしこれも湯気が消えてしまえば完全にアウト。さあアストルフオよ、そんなワケだから早いこと湯舟に浸かってしまおうのだ。

「は〜い、それじゃあ松陽さんも——あれ？」

うきうきと昂揚する気持ちのままに振り返ったアストルフオだったが、ここで彼の目

は点になってしまふ。胡麻ごまのような瞳の先にいた松陽は、まだ一枚も衣服を脱がないまま、俯いて何やらもじもじとしていたのだった。

「松陽さん、どうしたの?」

「あ、えつとですね……アストルフオさん、いえアストルフオ君のお誘いは嬉しいのですが、その……やはり人前で服を脱ぐというのは、まだ些いささか抵抗がありますか……。」

袖の端を掴んだまま何度も吃どもる松陽は、耳まで顔が赤くなっている。

「そっかー、昨日は松陽さん眠ってたし、こうやってちやんとお風呂に入るのは初めてだよね……いよつし、それなら僕すっぱが素裸すっばに剥き剥きしてあげる!」

「え、えええええつ!!あの、そこまでしていただかなくとも……!!」

「ほくらほら、早くしないと僕の悪戯いたずらなお手々がどんどん近付いてつちやうよくお?」

両手をわきわきと不気味に動かしながら、アストルフオが徐々にその距離を詰めていくと、松陽は血相を変え悲鳴にも似た声を上げた。

「はわわ、まつ待つてくださあい!!じ、自分で脱げますのでっ!!」

ぴしゃつ、と音を立てて閉められた扉。松陽の慌てぶりを思い出し忍び笑いをしていたアストルフオの脳裏に、ふと昨日のことが浮かぶ。

『松陽先生の着物を着替えさせた際に気付いたのだが、あの人の背中に赤い刺青のよう
な、この模様があつたのだ。』

重々しく言つた桂が、こちらに掲げたその図に描かれていたのは、誰もが体の芯から
震えあがつてしまう程に、鬼を象つたかのような悍ましい紋様。

だがアストルフォ達がその存在を知らされたのは、松陽の介抱を行つていた桂と高杉
の二人のみであり、証言と絵図だけではどうにも信憑性に乏しい。

丁度いい機会だし、だったら自分の目で確かめたほうが早いよね。思い立つたらす
ぐ行動なアストルフォの手が、微塵の躊躇もなく取つ手に掛けられる。おいおい理性
が蒸発している設定をいいことに、それ以上はちと容認しかね——

「それ〜いつ〜!」

ガラツと横にスライドした扉。その向こうの脱衣場では、既に肩から二の腕の辺りま
でが肌蹴けた松陽が、きよとんとした様子でこちらに振り向いている。好都合とばかり
に彼の背中を食い入るように見つめていたアストルフォであつたが、ここで不可思議な
点に気が付く。

「……………ありや?」

無い。どこにも無い。

ヅラ、じゃなくて桂達の言っていた鬼の刻印が、松陽の背中のだこにも存在していないのだ。

彼らが嘘など吐く人間……今はサーヴァントだが。とにかく、そんな男達でないことはアストルフオも十分に承知している。だが今自身の眼が認識しているものは、傷痕一つ無い色素の薄い背中。

「あれれ………おかしいなあ？」

アストルフオが首を捻^{ひね}っている一方、不意を食らい暫し呆けていた松陽だったが、やがて頬から始まった紅潮は顔全体へと広がっていく。

「あ………ああああアストルフオさん………っ^{!!}」

肩は戦慄^{わなな}き、瞳は潤み、羞恥と狼狽^{ワイフテイー}が50:50となっている松陽に、アストルフオは慌てて釈明する。

「わっ！あのあの、勝手に開けてゴメンね！えつとお………そうだ！あのさ、そのままじゃお風呂に浸かる時、髪の毛がお湯に入っちゃうよ？だから松陽さんのものもこうして僕みたいに纏めてあげようと思つてさ、ねっ^{!!}」

しどろもどろになりながら、苦し紛れに思いついた言い訳を述べるアストルフオ。すると暴発寸前だった松陽の面^{おもて}に、少しずつ平静さが戻りつつある。

「おや、そうだったのですか……すみませんアストルフオさん、貴方のご厚意をどうやらおかしく捉えてしまったようで……。」

「いいよ、元はと言えば僕が悪いんだもん。さつ松陽さん、僕が結つたげるから前向いてて。」

思惑がバレなかつたことに心底から安堵しつつ、アストルフオは再び正面を向いた松陽の背中へと近寄っていく。

彼の髪を掬い上げれば、絹のようなきめ細かい手触りが指の間を通っていく。その心地良さを堪能しつつ、アストルフオは露わになつた背中にもう一度目をやる。先程より一層近場で見るこの出来た松陽の背だが、やはりそこに異変は何も確認出来ない。

「ねえ松陽さん、背中のおき——」

そこまで言い止したアストルフオだったが、一顧した松陽の表情を見た時、思わず言葉が詰まる。

こちらを不思議そうに見る彼の瞳には、一点の濁りも無い。どこまでも透き通つた琥珀色は、正に無垢の表象……そしてアストルフオは常時蒸発する（やや）いい加減な理性の中で直感する。ああ多分、この人は本当に何も知らないんだろうな。と。

只でさえ記憶を失っているというのに、ここで下手に事実を告げても彼が余計に混乱するだけだろう。ならばいっそ話さなくていいや、聞かれたら答える感じがいいよ

ねー。と動き出した楽天的思考が活動を再開する。はいシリアスモード終わりー。

未だこちらに振り向いたまま、怪訝そうにしている松陽。そんな彼の背中をつつくと指でなぞつてやると、『ひやわあっ!』と不意打ちを食らい悲鳴を上げた松陽の体が大きく跳ねた。

* * * * *

「てなことが、ついさつきお風呂場でありましたとき。あつパチ君くカールピス狩比酢もう一杯。」
 アストルフオが差し出したコップに新八は我に返り、受け取ったそれに追加の狩比酢を注いでいく。一方他の面子はというと、皆開いた口が塞がらない状態で彼と松陽を交互に見遣やっている。

「いや背中の云々もそうなんだけど、回想の最後の『ひやわあっ!』つてのは何? ガチで松陽がそんな声出したの?」

銀時が向ける好奇の視線の先では、羞恥のあまり居た堪たまれないでいる松陽が、抱き上げたフオウで熱ほる顔を隠していた。

「いいなくアストルフオ、私も松陽とお風呂入りたかったアル。」

「すつごく楽しかったよ。背中流しっこしたり、お湯の中で一緒に百まで数えたりしてさ。最後におまけの汽車ポッポもちやんとやったんだ。そうだ、今度は皆で入るか？きつと面白いよお！」

「キヤツフオオオ！入りたいアル〜！」

「こらこら！アンタ達には恥じらいってものがないの？！混浴乱交プレイだなんてふしだらな展開になってみなさいな！いよいよこの連載継続出来なくなるわよ？！ほら〜仔犬からも何とか言ってちょうだい！」

「いやエリちゃん、乱交プレイは誰も言っていないと思うよ。しかし多少のドスケベハプニングがあつたほうが、閲覧数も評価も稼げて寧ろ美味しいのでは………ハッ、いけないいけない。主人公の一人たるもの魔が差してしまうだなんて、狩比酢飲んで頭冷やそう（ゴクツ）」

「あつマスター、それは原液のボトルにござりまする。」

段蔵の注意も虚しく、濃縮100%の狩比酢原液を半瓶程飲んでしまった藤丸は案の定激しく咳き込み、せめて口内だけでも相殺すべくボトルの隣にあつた冷水をぐびりぐびりと豪快に呷った。

「それにしても、刻印が無くなっていただなんて………てつきり桂さん達が見間違えた、なんてことも考えはしましたけど、僕らもあの時に『アレ』を目撃していますからね。」

「?……新八君、『アレ』とは一体何のことだ?」

「ほら、僕らが沢山の魔物に襲われて、桂さん達が助けに来てくれる前ですよ。あの時藤丸君を庇かばつて負傷した松陽さんの裂けた着物の間から、仄ほかですけど光のようなものが見えたんです……いや、暗闇であんなにはつきりと見えたんだもの。あれはきつと光に違いない。」

自身の言葉に確証を得るかのように、新八は何度も頷く。どういふことだ、と桂が切り出してくる前に、会話を聞いていた銀時が嘴くちばしを容いれた。

「俺も多少は朦朧もうろうとしてたが、そんなことはよく覚えてる。確かに化けモンの爪にやられた松陽の背中は、淡く光を放つてた。それも暫くしたら消えちまったが、その後松陽を抱えてから更に驚いたぜ。何せ背そこ中にある筈の裂かれた傷が、どこにも無いんだからな。ありや一瞬にして癒えたのか、それとも最初ハナから斬られてなかつたのか……ああくそ、考えても分かんねえわ。やつぱりコレもお前らの言つてた刻印とやらに関係が——

ツラ?」

ふと銀時は、向けられる視線の変化に気が付き朋友の名を呼ぶ。
ツラじゃない桂だ、といち早く渾名あだなに反応を見せる筈の桂は、酷く愕然とした様子でこちらを睽視している……いや、彼だけではない。松陽の頭上に登ろうとするフオウを抱き上げていた高杉もまた、桂と同じ眼差しを銀時へと向けていたのだ。

「銀時……貴様、何を言っているのだ？」

「何を、つて……何のこと？」

「とぼける真似も大概たいがいにせんかつ!! 貴様が、よりもよつて貴様が知らぬ筈はなからう
!!」

憤然として銀時に迫る桂。後退するのがあと少し遅ければ鼻の頭がぶつかつてしま
う程の勢いに、銀時と隣の新八も目を丸くする。

「おいおい待てつて。んなおつかない顔されてもよ、本当に心当たりが無エんだつてば
よ。」

「銀さん、本当に覚え無いですか? 桂さんがこんな風に怒るなんて、普通じゃないです
よ? 頭の中ひっくり返してよく思い出してみてくださいよ。」

「そうは言つても……あ、もしかしてこないだのアレまだ怒ってる? お前がウチに
逃げてきた時、厠行トイレつてる間に財布からパチンコでスった分拝借したの。ごめんね
あん時さあ、ババアの家賃催促がいつも以上にしつこくつて。借りた分は後でちゃんと
返すから、ね?」

「ね? じゃないだろ貴様アアアツ!! 俺の知らぬ間にそんなことを……いや、今は
よい。知らぬというのであれば、俺がお前に——」

そこまで言い止きした桂であつたが、突如背中に走つた悪寒に震驚し、続く言葉は強制

的に遮断されてしまう。

回顧かいこした桂が辿つた先には、何も言わずにこちらを睨みつけてくる高杉の姿。まるで射殺さんとはばかりに鋭い視線を向けられたことに驚きつつも、その行動が示す彼の旨意ししいを何となくではあるが察した桂は、それ以上の口を噤むつぐことにした。

「俺がお前に……………何だよ？ ヅラ。」

「……………ヅラじゃない桂だ、あと金返せ馬鹿者。」

「や、金は後で返すつて言つたじゃん。ローン何回分になるか分かんねえけど。それより今、何か言い掛けて——」

「ええい貴様つローン組むとか何年掛けて返済する気だ!! とにかく、この話はここで一旦終わりだ! いつまでも留まつていては物語が進行しないからな、はい次!」

パアンツ! と鼻先で鳴らされた手に、一驚した銀時は仰け反る。新八を巻き込んで床に倒れた彼の中に小さな蟠わだかまりを残したまま、桂は題目を強引に次へと移した。

「さてと……………それではこれより、英霊サイヴァントとなった我々に新たに備わつた力、『宝具』について復習を行つていきたいと思う。では藤丸君、それに高杉もよろしく頼むぞ?」

親指を立て解顔スマイルする藤丸とは裏腹に、高杉は顰しかめつ面わすらで煩わしさを露骨に出している。だがその両腕を神楽とアストルフオにがっしりと掴まれ、おまけと言わんばりに定春が鼻で背中を押してくるため、定位置の窓際の逃避は不可能と観ずると同時に、彼

女らと共に床へと腰を下ろした。

因みに、彼の手から離れたフオウは小さな歩幅で一生懸命に床を駆け、またいつもの定位置である銀時の頭上への登頂を無事果たしていたのであった。

「お前達が既にカルデアで耳にした内容もあるかとは思いますが、ここはまず聞いてほしい……宝具というのは、我々サーヴァントにおいて重要な切り札となるもの。ざっくり言ってしまうと、必殺技のようなものだ。」

「そこまでは、ダヴィンチちゃんさんが説明してくれたままです……そういえば、皆さんも神楽ちゃんもあの時、出されたお菓子に夢中になって全然聞いてなかったと思うんですけど。」

「やくだつてさあ、俺こんにち今日まで生きててあんな美味しいモンブラン食ったの初めてだったもん。あん時はあまりの感動に、味覚と嗅覚そして視覚以外の全機能が一時停止して、俺の全ての神経がああのモンブランへと注がれてたな。うん。」

「それってエミヤ君の作ったお菓子でしょ?! いいな僕も食べたかったよう!」
「エミヤってあの赤いガングロコックのことネ? 私アイツからクッキーも貰ったけど、それも凄く美味しかったアル。また食べたいな。」

神楽の口端から伝よたれう涎を段蔵がハンカチで拭つてやっている光景を椅子から眺めていた松陽は、聞き慣れない単語に小首を傾げる。

「もんぶらん、とは何ですか……？ 銀時さんや神楽ちゃんのお話を聞いた限りでは、とても美味しいものようですが。」

「あら、松陽ったらモンブラン知らないの？ モンブランっていうのは栗を使ったケーキのことでね、スポンジケーキの上にクリームや絞った栗をふんだんに乗せて、お山の形に似せてあるの。甘しいマロンペーストとふわふわのスポンジを、滑らかな生クリームと一緒に口に入れた時の幸せときたら……ああ〜ん想像しただけで涎が零れちゃうううー！」

うつとりと恍惚こうこうの笑みを浮かべるエリザベートのモンブラン解説に、松陽の好奇心は益々ますますそそられる。そんな彼の姿を見ていた高杉が、不意にぼそりと呟いた。

「……………そんな気になるんなら、俺が明日調達してきてやるよ。」

「ほ、本当ですか……………っ!? でも晋助さん、そこまでしてただかなくとも……………」

「なあに、他でもねえ貴方あなたのためなら、このくらい造作も無エこった。」

「晋助さん……………ありがとうございます、とても嬉しいです！」

仄かに頬を染め、心底から喜氣とし顔を綻つくばせる松陽を愛つしみ、高杉は細めた右眼にその姿を焼き付けるように映した。

「あくっ！ スギつちつたらまた別行動する気だね!?」

「そういうこつた。ま、お姫ひいさんらの食い分も用意してやるから、それで勘弁してくれ

かい？」

「キヤツフオオオ！流石スギっち一生ついてくネ！」

神楽からのハグを受ける高杉に「もくしようがないなあ」と呆れつつも、遅れて彼女と同じようにアストルフオはその細い腕にしがみつく。

ほのぼのとした室内の空気ではあるが、それを引き締めたのはやはり桂の咳払いであつた。

「……………皆、話を戻してよいかな？」

「は、はい……………でも必殺技って言ったって、銀魂は少年漫画の魅力の一つである必殺技が無いことでも知られてますし、そんな僕らに宝具なんて本当にあるのかな…………？」

「新八君、何も宝具は一撃必殺のド派手な技ばかりじゃないんだよ。人間の幻想を骨子として作られたそれらには色んなものがあるって、剣や槍なんかの武器は勿論のこと、指輪なんかの普段から身に着けてるものから該当することだってあるんだから。」

藤丸の補足を皆が頷きながら聞いている中、「おお、そういえば…………」と何かを思い出したように掌を拳で叩いた桂は、何やら奥のほうでガサゴソと漁る動きを見せる。全員視線が彼へと注がれる中、桂は引つ張り出したあるものをこちらに広げてみせた。

「ふふん、どうだ？可愛かろう。」

「別に。っーかさソレ、お前がこの作品初登場の回で着てたQ○郎の着ぐるみじゃねーか。

何今更自慢してきてんの？別に羨ましかねーんだよ。」

「Q○郎じゃないエリザベスだ。この流れで俺がただこのエリザベスの着ぐるみの自慢ををすると思っているのか？それは違うぞ銀時、俺が貴様らに言いたいののは、コレこそが俺の宝具の一つだということだ。その名もズバリ、『雪白片吟・絶対障壁』！どうだカッコいいだろう！！」

宝具だと自称したその雪白……うんたらという名を冠したその着ぐるみをはためかせ、自慢げに見せつけてくる桂を見る皆の反応はというと、笑顔で拍手をする松陽とアストルフオ以外は誰もが口を開けて啞然としていた。

「イザベ……えと、何？もつかい言つてツラ。っーかやたらと厨二臭さを感じるその名前は、もしかしなくても自分で考えたの？」

「ツラじゃない桂だ。いいかよく聞け、『雪白片吟・絶対障壁』だ。只でさえネーミングセンスが壊滅的な書いてる奴が辞書やらグー○ル先生に縋りつくやらして小一時間かけてつけた名前らしい。まあ正直俺もどうかとは思っているのだが、エリザベスを崩した異国のこの呼び名は割と気に入っているのだぞ。」

「あはは……それで桂さん、その宝具は一体どんなものなの？」

「おつ、知りたいか藤丸君。ならば実際に体験してみたほうが早いだろう。」

「え？体験つて——」

困惑する間も与えられず、藤丸の頭上を黒い影が覆う。それが桂の仕業であることに気付いた時には既に遅く、次の瞬間には全身を着ぐるみですっぽりと包まれてしまった。

「ぎゃ〜っ!!ちよつとツバメ、仔犬に何てコトすんのよっ!!」

「いいなあマスター、次僕ね〜!」

白い化けモ……もといエリザベスとなつてしまった藤丸の傍に寄るサーヴァント達。人理を救つた星見の希望である彼のこんな姿を見れば、未だ連絡の取れない向こうのマシユはどんな顔をするだろうか。ああでもダヴィンチちゃんは腹を抱えて笑うと思う。確実に。

着ぐるみの中で暫くジタバタしていた藤丸だったが、ふと動きが一時停止したかと思うと、利き手に持った何かを掲げた。

『大丈夫だいじよぶ、中結構快適だから(*・・*)……それならば一安心ですね、マスター。』

「ていうか、アンタそのプラカードでどうやって台詞の揭示が出来てんのよ?一々書いてるわけでもなさそうだし、どんな仕組みなのかしら……?」

怪訝な顔のエリザベートにエリザベス……もといエリザベスの中の藤丸が再び掲げたプラカードには、『いや〜俺にもよく分かんない(・ω・)?』とまたも顔文字が添

えられて書かれていた。

「この宝具の効果は常時発動しているものであつてな、暑さや寒さなどの気温の変化への対応は勿論、外敵からの攻撃や呪詛じゆその類たぐいも弾き返すことの出来る優れものなので。強しいて不便な点を挙げるとすれば、それらの効果は着ぐるみの繊維に編み込まれた俺の魔力によるものであるため、それが底を尽きればたちまち只の暑苦しくて動きにくい着ぐるみと化してしまうことだがな。」

「あ、桂さんたら認めちゃいましたよ。やっぱり自分でも動きにくいとか思つてたんですね。」

「マスター、その中つてそんなに快適なの？ それじゃ僕もお邪魔しまゝすつ！」

アストルフオは可否の返事も待たずして、捲めくつた裾(?) から強引に中へと侵入してくる。もそもそと蠢うごめく中で、藤丸がひっくり返したプラカードには『ぎよわええエエやめつ止めてエエツ!! (D。;)』と顔文字のせいであまり危機感が感じられないが、とりあえず大変なんだろうといった具合の訴えが記されていた。

「それにしても、宝具つてゲームや漫画に出てくるような凄く派手で強烈な必殺技みたいなのを想像してたんですが、こういうタイプのももあるんですね。」

「そうだな新八君。一口に宝具と言えど、そのタイプは様々なものが存在する。第一宝具というのは、英霊かれらが生前に築いた逸話や伝説、そして武器などを基盤として生まれた

例が多い。或いは没後に語り継がれ、自身の最期に大きく関わった、つまりは死因となつたものなど、後天的に得たという事例もあるのだという………つまりまとめて言えば、宝具はその英霊の『奇跡が物質化』したものだ、俺達の霊基には刻まれている。お前もそうだろうか？ 高杉。」

桂に振られると、高杉は気怠げに髪を掻く動作をした後に右眼をこちらへと動かし、ゆっくりと唇を動かす。

「それに、サーヴァント一騎に対し宝具は一つだけ、なんて原則は厳しく存在するわけじゃねえ。そののツラだって、ペンギンの被りモンの他にドでけえ宝具を奥の手として隠してたりもするわけだからな。」

「ツラじゃない桂だ。それは貴様とて同じだろう、あれだけの魔力を有する宝具を顔色一つ変えることなく放つとは、つくづく貴様は恐ろしい男だ。それとも、復讐者とやらの魔力も実は底なしであつたりするの？」

「ハッ、魔術師のテーマエがそれを言うか。いざとなれば術者の加勢も必要としなくてもいいクラスのおくせによお。」

「凶に乗るな馬鹿者め。多少魔術に優れていようと、俺など所詮、一介のサーヴァントの中の一騎に過ぎん。それに一度、貴様の前で披露したことがあるから分かるだろう………正直『アレ』はとても疲れるから、あまり使用はしたくない。出来れば本当に興

の手としてしまっておきたいものだ。」

不機嫌に呟いた桂はこめかみを押さえ、深く溜息を吐く。そんな二人を交互に何度も見遣りながら、銀時を始め新八そして神楽も目を白黒とさせていた。

「えっ？ちよつと待て、まさかお前ら……もう自分の宝具持ってたりするわけ？」

口角を引き攣らせながら質す銀時に、桂と高杉は一瞬だけ目を交わせた後に、同時に頷く。

「持っているも何も、サーヴァントには備わっているものと先程説明したばかりであろう。」

「だって俺、出し方知らねーもん！どうすりやいいの？体内の潜在エネルギーを手の中で凝縮させて一気に放出させればいいのか？あつても確か打てるようになるまで50年は修行しなきゃいけないって亀仙人が——」

「誰がか〇はめ波打てつつたよ。それ本当にやったら多方面から叱声の嵐だからな………いいか銀時、それにお前らも聞いておけ。宝具の能力を解放するにあたって必要なのは、『真名の解放』だ。これさえ判明すりやあ強大な力も手足のように操ることが出来るようになる。だが今の銀時を見る限り、俺達と異なる形で召喚されたお前らには、この宝具の真名の知識は備わっていない……違うか？」

高杉が投げ掛けると、万事屋の三人と一匹は互いに顔を合わせ、やがて揃って首を縦

に動かした時、神楽がぼつりぼつりと零し始めた。

「ねえヅラ、スギつち……宝具って、その真名が分かんないと使えないアルか？ 私達せつかくサーヴァントになれたのに、今よりもつと強くなれるかもしれないのに………
こんなんじや、おかしくなったこの江戸くを救えないアル。もしもこの間の怪物より、もつともつと強いヤツが出て来たりしたら………私達、本当に松陽のこと守れるアルか……？」

真つ直ぐにこちらを見ていた神楽の面は徐々おもてに下がり、瞳には暗い影が差し始める。銀時の頭から降りたフォウが彼女の顔を覗き込むと、服の裾を握っていた手が小さな獣を優しく撫でた。

「神楽ちゃん……。」

「くうーん……。」

「……なあお前ら、どうにか出来ねえモンか？ 神楽の言う通り、イカれちまったこの国じやあ何が起きてもおおかしくは無エんだ。なのに俺らがこんなザマじや、松陽どころか藤丸も守れやしねえぞ。」

「分かっている。しかしそうは言っても、宝具の真名を一番理解しているのは他でもない本人自身だからな………まあ、宝具の中には真名の解放を行わずとも使用できるものもあるらしい。だがそれは英霊サーヴァント自身の属性や特殊な能力が発動することで、初めて力

を帯びるものだ。だがそれらに関する記憶が欠落している場合は、殆ど意味を為さなないのと同じだぞ。」

桂の厳しい指摘に、意気消沈してしまつた銀時達は一人として言葉を発さない。俯く彼らの姿を捲つた裾(?) から藤丸がアストルフォと共に垣間見ていたその時、一際ひととき大きな溜め息が室内に響き渡つた。

「全く、何くよくよしてんのよアンタ達。らしくないじゃない。」

「……うるせえな、トカゲ娘。こちとら真剣に考えてんだよ。」

「そんなの見れば分かるわ。でもね、アンタ達がそんなんじやアタシの調子が狂つちゃうの。だからいい? よくくお聞きなさい………宝具の真名なんてねえ、分からなかつたら自分でつけちゃえばいいのよ。」

「はいはい、んなこたあ分かつて——は?」

突拍子もない一言に、銀時は空いた口が塞がらない。彼だけでなく隣の新八も、のどちゃん口蓋垂が丸見えになるほどにあんぐりと大口を開けている。因みに神楽と定春はとうとうと、その手があつたかと感心し何度も頷いていた。

「……えつと、エリちゃん。今なんて?」

「うわつ、アンタにエリちゃん呼びされると違和感ありありで何だか気色が悪いわ。」

「んだとテメエゴラアアアツ!! 人のコト毛玉呼びしてるくせに何なの!! じゃあもういい

わ最終回までずつとトカゲ娘固定にしてやるっ!!」

「銀さんたら、少し落ち着いてください………それよりエリちゃん、今言ったことつて一体どういう意味なんだい？自分で名前をつけるだなんて、そんなことしても平気なの？」

「ええ、問題無いと思うわよ。だってカルデアには、自分の宝具の名前もたまに忘れるおつちよこちよいだってほんの稀まれにいるし、それにアンタ達があそこで出会った人物で、前にそうしてた子がいたんだもの。ねえ貴方達？」

エリザベートが視線を移した先には、捲つた着ぐるみから全身を覗かせた藤丸とアストルフオが、朗笑して頷いている。

「そくそく、僕なんてとある宝具の真名をしょつちゆう忘れちゃってさ、肝心な時に使えなくて何度も困つたことあるからね。」

「まあ、自分で名前をつけるといっても、あくまで真名が分かる間の仮初のようなものなだけけどね………俺が初めてレイシフト、人理を守るための時間跳躍を行った時、着いたその街で味方になってくれた英霊セイヴァントが言っていたよ。『宝具というのは英霊の本能、つまり自分そのものだ。それに従つた強い覚悟、強い想いがあれば魂と呼応して、おのずと目覚める』………つてさ。」

「………強い覚悟と、想い………」

藤丸の言葉を反芻^{はんすう}し、同時に銀時の二つの紅がある方向へと動く………長椅子に座ったままこちらを見ている松陽とそれが重なれば、彼は温恭なその面^{かお}にあどけない微笑みを浮かべた。

「俺がまた、こいつを守ろうと強く心に誓えば………宝具^{むじう}のほうからこつちに出てきてくれる、つてことなのか……？」

銀時は視線を落とし、開いた自身の掌を無言で見つめ続ける。

サーヴァントとして藤丸に召喚されてから、既に二日経過している。変質した自身の変化に未だ自覚が持てないのは、恐らく自分だけではない。

しかし、起きてしまった事態^{ごと}をとやかく考えていても仕方がない。この変貌した世界を救い、そして大切な人^{もの}を守り抜く………その為に必要な更なる力を、今は身につけなければいけないのだ。

『今度こそ』、絶対にその手を離さない為にも——。

「……それじゃつまり、私達は名前が分からないっていうだけで、その宝具が使えな

い、つてわけじゃないアルな？」

「ええ。今はまだ本当の宝具が使えずとも、いずれ必ず芽吹く時が来ます。故に神楽殿が落胆する必要は、もうございませぬ。」

浮かべた微笑と共に段蔵が言い果つと同時に、先程までの落ち込み具合が嘘であったかのように、神楽の顔がパアツと明るくなる。銀時が隣に目をやれば、自信に溢れた表情をした新八が、気付いたこちらに快活な笑顔を向けた。

「やっといつもの調子に戻ったようね、全く手間のかかる連中だこと。」

「うん、ありがとうエリちゃん！」

活力を取り戻すきつかけとなった彼女に礼を言った時、ふと新八は頭に浮かんだ疑問を投げ掛けてみることにする。

「そうだ。そういうえば気になってたんだけど、エリちゃんの宝具ってどんなの？」

「……………え？」

上機嫌にくるくる回っていたエリザベートが、その一言に硬直する。

きよとんとした様子の彼女であったが、その表情が驚きから歓喜に変わるまでの時間は一秒もかからなかった。

「ほ、本当……………!! 眼鏡ワンコ、アタシの宝具ステイジがそんなに見たいの!!」

「わわっ!! 近い近い近いっ! えっと、ステイジ……………っていうのはよく分からないけど、そ

の……サーヴァントの先輩としてさ、エリちゃんはどんな宝具を展開するのかなくつて気になったから……。」

鼻先がくつついてしまいそうな距離まで顔を近付けられ、童て……いかんいかん、純真な少年である新八は赤面し、どもりながら理由を述べる。しかしそんな新八の言葉一句一句に頷きを返し、全て聞き終えた後のエリザベートのご機嫌は、最早有頂天そのものであった。

「いいわ！k e d v e s i アイドルたるもの、フアンの期待には応えてあげないと！それじゃあサーヴァント界の絶☆対☆的☆アイドル、エリザベート・バートリーが、今宵ここでスペシャルな宴を開いてあげる！」

フリルのスカートを揺らし、踊るような動きで彼女は窓際へと移動していく。これから何が始まるんだと、銀時達の注目はエリザベートへと集まっていった。

「ん、記念すべき第一回目ライブの公演にしては、ちよつと会場が狭いのが不満ね。まあ仕方ないわ、だって今日は江戸こっちに来て初めてのライブだし、フアンとの身近な交流も大事なコトだわ……よつと。」

利き手に展開した愛用の竜骨槍を握り、両の手に構えたその先端を木の床にブツ刺し……はせず、軽くトーン、と当てれば、そこに小さな魔法陣が浮き上がる。

「おおっ！エリちゃん凄いネ！」

「おいおい、大丈夫かよコレ？部屋壊したりしたら後でババアに怒られんぞ？」
 「大丈夫よ。これは召喚式なんだし、部屋には傷一つ付かない筈……だわ！」

最後の方ちよつと怪しくなかつた？と新八が突つ込みを入れる前に、微々たる揺れ……といつても人が歩いたぐらいの振動を伴つて、魔法陣から何かがせり上がつてくる。

やがてエリザベートの膝下辺りで振動と動きを止め、室内の幅いっぱい広がつたそれらは、西洋の城のような形をした増幅器アンプであることが判明した。

「さあつ、準備は整つたわ！仔羊達、準備はいい！！」

マイクの搭載された槍で呼びかければ、彼女の美声がアンプから轟く。

イエーイ！と意気揚々に拳を上げる新八と神楽、そしてどこからか出したサイリウムを振る桂に呆れ眼まなこを向けていた銀時は、ふと藤丸達がやけに静かであることに漸く気付く。

不審に思い辺りを見渡すと、エリザベートのいる窓際から大分離れた部屋の隅に彼らはいた……しかし、どうも様子がおかしい。

集まる皆の背中を一点に見つめたまま正座をしている段蔵は、いくら呼びかけても反応が無い。それに彼女の隣にいる桂の宝具・イザ、イザベ、えーと……もとい、エリザベスの着ぐるみの裾(?)からは四本の足、そしてふもふの尻尾が度々見え隠れし、

やたらともぞもぞ動いている。

「おい藤丸、聞こえてんだろ……？ 一体どうしたんだよう？」

普通でない空気を察し、銀時が密めき声で質す。何やらこそそとしてゐる銀時の後ろ姿を目撃した高杉も、怪訝な顔でこちらに歩み寄ってきた。

「お前ら、何してんだ？」

「おう高杉、実はさつきからこいつらの様子が——」

そこまで言い止した時、エリザベスの着ぐるみがプラカードを掲げる。白い木板を持つその手は、ほんの僅かに震えているようだった。

「ああ？ 何だコレ…… 『只今より、此処にてジャ○アンのリサイタルが開催されます！ 地獄を見たくなければ、急ぎ耳を塞ぐべし（；・・・）…… ジャ○アン、ジャ○アンって、本名は剛○武君で間違いない？ 』」

書いてある内容がいまいち理解出来ず、キーワードとなつてゐる単語を繰り返す。数秒の後、やっと藤丸が伝えてきた危機の意味を理解した銀時の顔は、瞬時に青ざめた。

「……おいおいおいおい！ つてことはあのトカゲ娘、ジャ○アン並の音痴を宝具にして流すつもりつてことじゃねえか!! やべえぞ高杉、つてアレエエエもういないっ!!」

慌てて周囲を見渡す銀時だが、高杉の姿はあっさり見つけることが出来た。彼は既に松陽の背後へと移動しており、自身の両手で彼の耳をぴったりと覆つてゐるのである。

その行動が示す意味をまだ理解していない松陽は、目を瞑り虚無となつてゐる高杉を不思議そうに見上げていた。

師を守る為に自らを犠牲にしようとする彼に心中で敬意を送つた後、銀時があたふたと狼狽している間に、エリザベートの召喚したアンプ・ミニチエイテ城からイントロらしき音楽が流れだした。

「やつべ、始まりやがつた！段蔵、おゝい段蔵ちゃん!!アレお宅んとこのサーヴァントだろ何とかしてくれよ!!」

「ピー、段蔵は只今聴覚を遮断しております。ご用件のある方はやたらとうるさいくしゃみの後にメッセージをどうぞブルウウアツクシヨイツツ!!」

「ギヤアアアツ!!唾液(?)がやたらとオイル臭い!!ちつ、もうこうなつたら仕方ねえ。おいお前らつ俺も中入れろ!(ガバツ)」

「キュツ!!フオウフオウツ!!」

「キヤアアアツ!!銀ちゃんのエツチ〜!!」

「ちよつ銀さん!ここはもう定員オーバーだよ!!他のエリザベスをご利用くださいっ
!」

「おいコラてめえらつ閉め出そうとしてんじゃねえぞ!!銀さんがここにくたばつたらどうするつもり?主人公不在でクロスオーバー続けていけんのか?え?これ書いてる奴

はそんな器用な真似出来ないこと知ってるよな。何せ現時点で予定文字数だ。いぶ超過しちまつてるもんなあ?」

「双方の主人公がお陀仏になつたらそれこそ作品続けていけなくなると思うけどお!! 大丈夫、もし銀さんがいなくなつたとしても、人理修復経験豊富な俺が見事この世界を救つてみせるから!」

「さつすが僕らのマスター! いよつ頼もしいねえ!」

「こんガキやアアツ!! 藤丸つ主人公の座はてめえ一人のモンにさせやしねえぞ……あれつ、もしかしてそろそろイントロ終わつちやう感じ? ヤバいよヤバいよもういいからさつさと中に入れさせ痛ででっおいフオウ嘯むなつて!! 頼むよ藤丸君アストルフオツ!! お願い300円、いや500円あげるからアアアアツ!!」

「皆々! 今日のエリザの大江戸・初ライブに来てくれてありがとう!」

「イエエエエエエイツ!!」

「華々しい未来を期待されたアイドルのライブにしては会場も狭いし、観客の動員数は明らかに少ないけれど、これからどんどん目覚ましい活躍を遂げてやるんだから！これから是非応援してね！」

「イエエエエエエイツ！！」

「それじゃ豚共、行くわよっ——『バートリ・エルジエーベト鮮血魔嬢』！」

開幕の挨拶を終え、少数の観客の歓声を受けたエリザベートは、高鳴る鼓動に身を弾ませ、そして大きく息を吸い込んだ。

——刹那、宵のかぶき町に響き渡った………否、これは最早轟いた、と言ったほうが相応しい。

繁華街を震わす程の爆音と重なるように奏でられる、狂乱したりズムと劣悪な音程、そして聞いているだけで胸がむかついてきそうなくらいに甘ったるい、スイーツなメロデーとハチャメチャな歌詞。それらが合わさって生まれた音達は不協和音ハーモニーとなり、スナックお登勢の周囲にいた近隣の人々を騒然とさせた。

こうして、唐突に行われたエリザベートの初リサイタルは、夜が明けぬ人々の心を恐怖と混乱の渦へと陥れ、不可解な怪異として翌日の朝刊の一面を飾ることとなるのであった。

《続く》

【伍・伍】 糸繰りの傀儡は、破滅を舞う

終始江戸を覆う夜闇を照らす、空の鏡。

まなこ かなと
 眼を象った異形の月の下で、入浴を済ませた藤丸は一人、外廊下で風に当たっていた。
 「つああく………まだ頭がズキズキする……。」

そう呟いて眉間を押さえ、水分の乾ききらない頭の中で再生されるのは、つい先刻に起きた惨事。

現実となったジャ○アンリサイタル……もとい、エリザベートの対人宝具は（本人としては）その威力を抑えながらも、やはりサーヴァントの能力が齎すもの、所詮アンプを小さくしたくらいでは、彼女の溢れる情熱を抑制するなど不可能であった。

突としてご近所さん一帯に轟く悪^{デスワオイ}声、周囲の空気を震わす程の大音声と心底から湧き上がる何とも言えない感覚に、スナックお登勢を中心としたかぶき町のその一角は阿

鼻叫喚と化したのだ。

外がそんなザマなのだから、当然室内も地獄となっているのはあたり前だのクラツカーなワケで……え、知らないコレ？ともかく、密閉された空間の中に逃げ場などある筈も無く、エリちゃんの歌声を諸正面から受けた新八に神楽そして桂の三人は、大事な霊核へのダメージが一番大きく、キラキラしたオーラを出して若干座に還りかけながらも、霊基だけは何とか形を保ったまま、白目を剥いて気絶するあたりで留まつてくれた。

あ、そうだそうだ。桂の宝具もといエリザベスの着ぐるみの中へと避難した彼らはどうしたかというと、前回紹介したあのイザベ、イザ……もう着ぐるみでいいや。とにかく、あの着ぐるみの形をした宝具の主である桂が気絶してしまったために、供給されていた魔力が徐々に失われ、遂には前話で彼が説明した通りに只の暑っ苦しい布と化してしまった着ぐるみには、エリちゃんの宝具を防いでくれる効果などは無く、厚手の布越しに耳を劈いてくる不協和音に身悶えるしか出来ない。

いよいよ收拾のつかなくなつたこういう時こそ、頼みの綱であろう高杉の出番だと期待する方々もいることであろう。だがその肝心の彼はどうしているかというと、敬愛する恩師を眼前の危機から救うため、己が身を挺して護ることで精一杯。しかし残念ながら彼もまた、歌に踏ん張れる程の耐久力は持ち合わせておらず、騒ぎを聞きつけたお登

勢達が怒鳴りこんできたのと同時に力尽き、そのまま眠るようにして意識を失ったところを松陽に慌てて抱き留められた。

こうしてお登勢やキャサリンから数名へ振り下ろされたとびきり硬い拳骨と、小一時間に渡る長々とした説教を以つて、事態は漸く収束を迎えたのであった。

「……にしても、お登勢さんの拳骨相当痛そうだったなあ。エリちゃん涙目だったし。それを笑つてた銀さんの顔にもキャサリンさんのストレートが決まって……………ぶっ。」

先程の光景を思い出し、一人なのをいいことに盗み笑う藤丸。そんな彼の背後から音も無く伸ばされた手が、手拭いの乗った頭をぐわしと掴んだ。

「おっおく、人の不幸がそんなに楽しいかい？んん？」

周章する間も与えられず、手拭いの上からわしやわしやと乱暴に頭を搔き回され、「アギャアアアツ!!」と藤丸が上げた悲鳴に何人かの通行人が驚いて足を止めた。

「あ、悪い。そういやお前頭怪我してる設定だったっけ。大丈夫か？」

「も〜銀さんたら……………怪我ならもう平気だよ、傷口自体小さいモンだから大体塞がってるしね。」

乱れた髪を手櫛で直す藤丸の隣に、奇襲をかけた犯人……………銀時が自然に並ぶ。漸く髪

を整えた藤丸の前に、彼は持っていたものを差し出した。

「あれ？ 覚えのあるこの香りは……もしかしてM_三I——」

「ほらよ、銀さん特製のN_二I_二L_二Oだ。風呂上がりには飲むのも中々乙なモンだぜ。」

細い湯気の昇るM_三I……もといN_二I_二L_二Oの入れられた湯呑を受け取り、「あ、ありがとう」と藤丸は礼を言う。甘い香りの漂う飲み物に数回息を吹きかけ、何気なく隣の銀時に目をやると、同じく湯呑に入ったN_二I_二L_二Oを一口飲んだ後に、彼は眉間を指で押さえていた。

「大丈夫？ やっぱり頭、まだ痛い？」

「あー……頭に加えて耳もまだ本調子じゃねえや。でもまあ、お陰でババアの長ったらしい説教が少し楽に済んだからよしとするか。」

歯を見せて悪戯っぽく笑う銀時に呆れながらも、藤丸の頬もまたつられて緩んでしまう。しかしその朗らかな顔も、彼がN_二I_二L_二Oの湯呑に口をつけ傾けてしまった瞬間に聳_{しか}めつ面へと早変わり。

「……………甘_{あんま}つ。」

「おう、規定分量の三倍は粉使つてつからな。これぞ大人のN_二I_二L_二Oの楽しみ方つてやつよ。よかったな藤丸、お前もまた一步大人に近付いたぞ。」

「こんなのが大人の階段上がる一步なら、旋回してスライダー乗って逆走するわ。一生

未成年謳歌してやる。」

「文句がおりなら飲まなくてもいいんだぞお？ほらつ銀さんに寄越しやがれっ！」

「ギャツ!!危ない危ないって!火傷したらどうすんだよっ!!」

湯呑を取り上げようとする銀時から、何とか死守し逃れようとする藤丸。野郎二人のイチヤコラとか誰得なんだこの場面は、と思つたその諸君。もう少しだけのご辛抱を。

「ハハハ……………あ?」

半ばお遊び状態になつていた時、銀時は気付いてしまった——普段は長袖に覆われていた藤丸の腕、そして着ている甚平の胸元から露わになつている、彼の身体に刻まれた幾つもの傷痕に。

「……………銀さん?」

突然静かになつてしまった銀時を、藤丸は訝しげに見つめる。そして無言のまま返された湯呑を受け取ると、銀時は手すりに肘をついて再びN I L Oに口をつけた。

彼の様子の変化に暫し呆然としていた藤丸であったが、先程の銀時の目線が辿つていた先を思い返したと同時に、「ああ……」と短く声を漏らした。

「……………なあ藤丸、それってやつぱアレか?お前が人類の未来ってやつを護つたから、お前の体がそんなになつちまつてんのか?」

「えっと、まあね……………ごめん銀さん、汚いもの見せちゃつて。」

頭部の手拭いを取り払い、特に痕の目立つ方の腕に巻きつけようとする藤丸の手を、銀時が掴んで制する。

喫驚し目を丸くする藤丸の見上げる先にいた銀時の表情は、一切の嘲諷ちやうぎやくなど存在してはいなかった。

「藤丸、何でお前は傷痕これを汚えなんて言うんだ？過去にお前に対してそう言った奴がいたのか…………？もしいたとしたなら誰かを俺に言え、そいつ自身を目も当てられない程にポッコポコにしてやる。」

「銀さん…………？」

「…………汚くなんざあるもんか。いいか藤丸？これはな、お前が今日まで頑張ってきたことの何よりの証じゃねえか。本来は世界の崩壊と縁もゆかりも無エ筈のお前が、底なしのお人好しでどつか抜けてる只のガキだったお前が、んな細っこい背中に何でもかんでも背負い込んでいったことの結果の表れじゃねえか…………だから隠そうとなんかすんな、誰に何と言われようが気にせず、もっと誇りやがれ。傷痕つてのはな、男の勲章なんだからよ。」

語り終えてから湯呑に口をつけ、数回喉を鳴らした後に銀時は目だけでこちらを見遣る。

透き通る程に鮮やかな紅の瞳が伝えてくる無言の激励に、曇りかかっていた藤丸の顔が徐々に明るさを取り戻していく。

「……うん、そうだね。ありがとう銀さん！」

朗らかな笑顔を返し、少し温くなってしまうN I L Oをこくこくと飲む。

濃い甘さに時折何度も噎せる藤丸を眺める銀時の脳裏に、ふと昔の自身の姿が浮かぶ。

——ちようど、彼くらいの齡であった。桂や高杉と共にあの悪夢のような戦争に参加したのは。

がむしやらに刃を振るい、敵となるものを次々と屠り、前へ前へと突き進んでいく毎日。その向こうに待っているのが自身の望んだ未来だと、あの頃の自分は信じて疑わなかった。

しかし、現実というのはそんな青二才の僅かばかりの希望さえもを粉微塵に打ち砕く。

取り戻したかった恩師の命を自らの手で散らせ、絆までもずたずたに引き裂いてし

まった。

『好きなほうを選べ』

『師か 仲間の命か』

……あの時、自分は本当はどうするべきだったのだろうか、時折考えることがある。それはきつと、あの時の自分の心の弱さを、どこかで悔いているからなのかもしれない。

どうすれば、松陽せんせいを助けられたのか。

どうすれば、皆を救えたのだろうか。

どうすれば、どうすれば、どうすれば——

「……………もし、あん時の俺がお前だったら、どんな答えを出してたんだろうな。」

呟いたその声は、賑やかな階下の街の喧騒に紛れてしまう程に細細やかなもの。「何か言った？」とN I L Oを半分程飲んだ湯呑から口を離れた藤丸が尋ねると、銀時は笑みを貼りつけたまま首を横に振った。

「藤丸、明日も早えからそろそろ寝たほうがいいぞ。つつても布団は殆ど使われて満員状態だけど。」

「ん〜…………でも、N I L O飲んだら眠気吹っ飛んじやったよ。おかしいなくコレ、確かカフエイン入って無い筈なのに。」

「つたく、しょうがねえなあ。んじやお前が眠くなるまで、俺が話し相手でもなつてやるよ。愚痴でも恋愛事でもどーんと来いっ。あ、そーいや気になつてたけど、お前つてマシユとはどこまでいってんの？」

「ぶつは!!ゲホツゲホヴオエツ!!いいい、いきなり何てコト言いだすのかねこの人は!!俺とマシユはそんなじゃなくて、何てーかアレ、そうっ頼れる相棒というか……………ああもう、この話題は無し無し!それより銀さんさあ、俺が今まで皆と走つた特異点での出来事とか気にならない?そつちの話にしよう?ねっ?」

「あー確かに、リア充の乳繰り合いよりそつちのが面白そうだな……………それじゃ聞

かせてもらおうか、お前らが救つてきた世界の話を。」

柔らかく微笑む銀時に、藤丸は朱に染めた頬で嬉しさを隠そうともせず、満面の笑みを向けて彼に言った。

「勿論！結構長くなるからね、覚悟しといてよ！」

* * * * *

静まり返った廊下に響く、引き戸を開く音。

滴り落ちる水気を拭い取りながら、高杉は風呂場を後にした。

「つたく、ぬる温い湯だったぜ……。」

悪態を吐きながらも、不満は顔には出てはいない。普段の彼であれば立場上、このよ
うな後の順番に風呂に入るなど有り得ないのだが、初夏に差し掛かった今の時期も
手伝つてか、やや冷めかけた湯の温度も不思議と不快ではなかった。

暗い廊下を歩き出そうとした時、ふと耳に入り込んできたのは微かな話し声。それら
が聞こえてくる方角へと首を動かすと、玄関の曇りガラスの向こうにぼんやりと映つて
いる、二つの人影を確認する。仲良く並んだ後ろ姿と楽し気な声を聞いた時、彼らの正

体に気が付く。

「……あいつ等、何やってんだか。」

声色や物言いこそは呆れている高杉だが、ガラス越しの淡い街灯りに照らされた彼の顔には、そぞ漫ろ笑みが浮かんでいた。

居間へと足を向け、数歩歩いたその時、再び微かな声が聞こえてくる。しかしこちらはやや甲高く、言葉にはなっていない。耳を澄ませ、その声の出所を探ると、どうやらそれは開いたままの台所から聞こえてくるものだと分かった。

暖簾のれんを潜り、やや広くなつた部屋を見渡すと、中心部にちよこんと座る小さな白い影を見つめる。背を向けていた声の主はふわふわとした尻尾を左右に振り、こちらの気配に気付いたと同時に振り返り、短く鳴いた。

「フオウツ。」

「お前さんか、こんなところで何してんだい？」

「フオウフオウツ、フオ………キユ？」

声の主、フオウは何度も飛び跳ね、あのねあのねと訴えるように高杉に向かつて鳴き続ける。それからくるりと後ろを向いたその数秒後、ぴたりと止んだ鳴き声の後にフオウは小首を傾げた。

小さな獣が見つめているのは、ぽつかりと空いた何も**ほしよ**ない空間。フオウは不思議そう

に何度もそこを見返し、そして何度も首を横に倒す。まるで今まで話していた相手が突然いなくなつてしまい、それを訝いぶかしむかのように。

そんなフオウの行動に高杉が呆氣に取られていると、同じ行動を何度か繰り返した後にととう諦めたのか、フオウはてちとちと高杉の足元へと近寄つていき、前足で彼の着物の裾を軽く叩いた。

「ん？ああ、分かつたよ。」

その行動が示す意味を悟つた高杉は、屈んで利き腕を前に出す。その手にフオウがよじ登つたのを確認してから、高杉は台所を後にしようとした。

「フオウッ。」

再びあの方角を向いて、フオウが甲高く鳴く。高杉も振り向いて今一度確認するが、やはりそこには何も無い。

「なあ……お前、一体何が見えてんだ？」

一連の行動に狐疑こぎする高杉の問いに、フオウは只首を傾げるばかり。高杉は大きく息を吐いた後、フオウと共に台所を出る。数歩ばかり進んだ先の扉を開けると、静寂に包まれた居間が彼らを出迎えた。

居間へと足を踏み入れた高杉は、長椅子に座り広げた巻物へと筆を滑らせている桂へと近付いていく。その足音で漸く存在に気が付いた桂は、やや疲れた様子顔を上げ

た。

「ツラ、お前もさつさと入っちゃまえ。つっても大分冷め気味だったかな。必要なら焚き直しな。」

「……ツラじゃない、桂だ。貴様が上がったとなれば俺で最後だな。」

桂が筆を置くと、小さなエリザベスがそれを回収していく。組んだ腕を頭上に伸ばしながら、桂は大きく欠伸をした。

「松陽……先生達は、もう寝たのか？」

「ああ、リーダー達と共によく眠ってらっしゃる。だからあまり声を立てるなよ。」

ゴキゴキと凝りを示す肩を鳴らした後、桂は長椅子から立ち上がる。ミニエリザベス達に手伝ってもらいながら片付けを行っていた時、ふと桂はこの場にはいない二人の存在が気にかかり、高杉に尋ねた。

「高杉、銀時と藤丸君を知らぬか？姿が見えないようだが……。」

「ああ、あいつ等なら外階段のとこだ。何やら盛り上がったようだがな。」

「フォーウ。」

「全く、もうじきで子の正刻を回るといふに……仕方ない、呼んでくるとするか。」

言葉では呆れているながらも、彼らの身を案ずる桂の寛厚さに、高杉は目笑する。

暗闇に映える程に艶やかな彼の長髪が正面を流れていったその時、扉に手を掛けた桂

の動きが徐おもむろに止まる。

突然停止した桂に訝し気な視線を送る高杉とフオウ、すると何も言わずに前を向き続けていた桂の頭が、ゆっくりとこちらへと動いた。

「……なあ高杉、お前にも確認しておきたいことがあるのだが。」

まつすぐに高杉を見つめる桂の、憂いを帯びた瞳がぶつかる。いつになく真剣な桂に少し驚きながらも、高杉は黙って耳を傾けた。

「先程の、銀時のことなのだが……松陽先生が背中に傷を負った時の、あの話をした際の奴の態度と反応を見る限りで、俺は思ったのだ……今俺達と共にいるあの銀時はきつと、いいや確実に、『あの男』のことを知らないのではないのか、と……。」
眉間に皺を寄せた桂の顔色が、徐々に青ざめていく。言い知れぬ不安に苛きりまれながらも、彼は続けた。

「高杉、以前お前にも『松陽先生』に関する記憶がどこまで存在するのか、確かめたことがあったな……だが、あの銀時はどうだ？ 自身がサーヴァントとなつていることから碌ろくに分かつてもない上に、『あの男』に関わる記憶の一切も持っている様子は無かつた……ならば俺達は、今まで誰と話をしていたのだ？ 俺達や先生の前で銀時の姿をしている、あれは一体誰だというのだ……っ！！」

居間に響き渡る、震えを伴った荒げる声。それから何度か大きく呼吸を繰り返して

た桂であったが、自身を見据えている高杉の冷然とした眼差しを受けて我に返り、「すみん……」と小声で謝罪をする。

桂の取り乱し具合を心配してか、フォウは高杉の腕から軽やかに飛び降りると、小さな歩幅で桂の元へと歩いていく。

「フォウ、フォウーウ？」

「フォウ殿……すまない、静かにしろと言った俺が大声を出してしまったな。」

桂は膝を屈め、フォウへと両の手を伸ばす。その指の先を鼻で軽く突いたかと思うと、くるりと旋回したフォウは反対側へと走り去り、僅かに開いた襖から寝室へと潜っていつてしまった。

「……ふふ、ふふふ。全くフォウ殿はつれない。だが短い時間ながら貴重なデレを見せてもらった……お陰で少し元気が出たぞ、ありがとうフォウ殿。」

「あ、そう……まあ何だ。お前が幸せなら、とりあえずそれでいいんじゃないの？」

頭を拭っていたタオルを首元へ下げ、高杉は屈んだまま歓喜に震える友の背中に呆れながらも言葉を投稿る。

「なあツラよ、銀時が『あの記憶』を持っていきようがいまいが、俺はあいつを本物の坂田銀時だと信じている。この世界で奴と相見えたあの時、先生を護らんと振るついていたアイツの太刀筋は、少しも鈍っちゃいなかったから……こうやって一々言葉にせずと

も、お前だって本心じゃあそう思っただらろ？」

「うぐつ、ま、まあ一応はな……………すまない高杉、俺としたことが、不甲斐ない姿を晒してしまった。」

「まあ何だ。銀時^{アイツ}を含め他の奴等も同様、俺達とは違って藤丸に召喚された身だ。あくまで俺の推測だが、連中は召喚の際に何らかの異変を起こして、そのせいで記憶が欠落してるのかもしれない。まあ、そう決定づけるにはまだ情報が全然足りやしねえんだがな。」

「そう、だな……………そういった考え方もあるか、ふむ。」

高杉の言葉に何度も頷きながら、桂は足に力を入れて立ち上がる。だがその時、ガクンと崩れた膝から体はバランスを失った。

「うわ……………っ！」

咄嗟の事に反応出来ない桂、そんな彼を受け止めたのは、瞬時に伸ばされた高杉の手であった。

「すまん、助かった…………。」

「いいからさつきと風呂入って寝ろ、そろそろ魔力が切れそうなんだろ。」

「……………ハッ、やはり貴様にはバレていたようだな。」

「てめえ、ここに来てから夜間はずつとこの周囲に結界張っただらろ……………？まあ、銀時や

藤丸達はそんなこと、未だに気付いちやいねえようだが。」

「…………念の為というか、こうでもせんと先生や皆を守れているか心配でならんのだ…………だが今日は出歩いたせいとか、いつもより疲れが酷い。貴様の言うように、早く風呂を済ませて寝るとしよう…………。」

高杉の腕を離れ、風呂場へと桂は歩き出す。時折振らめく後ろ姿を見送りながら、高杉は深く息を吐いた。

* * * * *

いぼ、いぼり。

粘度を持った毒々しい色の液体が、空気の泡を吐き出す。

底が見えない程に濁りきったそれが収められているのは、床の下に埋没された巨大な甕かめの中。常人であれば呼吸さえ不可能な程の濃い瘴気しやうきが湧き出すそこを中心として、広範囲に展開されている魔法陣が淡く光を放ち、闇に包まれた空間の中を不気味に照らし

ている。

まるで、獲物が飛び込んでくるのを待ちわびている食虫植物を思わせる大きな甕口の前に、鳥面からすの男は立っていた。

「……………」

男は一言も発さず、息を吐き出す音すら静寂に溶け込ませ、泡立つ液体の表面を只眺めている。目元までを覆った仮面の、僅かな隙間から覗くその眼には、一切の感情が宿っていないかった。

「やつほ、お仕事お疲れ様〜。」

突として静けさを切り裂いたのは、その場に似つかわしくない鬻明ちやうめいな声。

石像のように直立していた男の顔が、ここで初めて動く。頭をもたげ、ゆつくりと動いた眼球が向けられた先には、黒い外套を纏った男が二人、五米ほどの距離の先に立っていた。

「それにしても、こんな陰気なところで仕事だなんて『アサシン』君も大変だねえ。俺なんて息するだけでも気分悪くなっちゃうよ。」

中性的な顔に笑顔を湛え、珊瑚色の髪を三つ編みに結わえた青年は、明るい調子の声で『暗殺者アサシン』と呼んだ鳥面の男に話しかけ続ける。そんな彼の背後に立つ無精髭の男は、口元を手で覆い軽く咳き込む素振りを見せていた。

「ゲホツ………おい『団長』よお、無駄話はいいからさっさと用件を済ましてくんねえか。こんなトコの空気なんか吸ってたら、肺がイカれちまいそうだけ。」

「え〜そう？あ………じゃなかった、『ランサー』って意外と軟弱なんだね。折角サーヴァントになれたつてのに何そのザマ？もういつペン座の登録からやり直す？」

「ノンストップで辛辣な暴言のマシンガンかましてんじゃねーよっ！！まさかアレか！！8話で頭に不意打ちチョップかまそうとしたことまだ根に持つちゃってたりすゲホツゲホヴェエツ！！」

声を荒げたことにより瘴気交じりの空気を余計に吸ってしまい、あ………もとい、ランサー槍兵と呼ばれたその男性は激しく咳き込む。

そんなやり取りを見つめる氷の眼差しに気付き、青年は再びアサシンへと向き直った。

「ああゴメンごめん、君への用事はこっちなんだ。はい。」

青年は笑顔を貼りつけたまま、利き手で引き摺ずっていたものを彼の足元へと乱雑に投げる。

ドサツ、と布地が床に擦れる音と共に上がる、僅かな呻き声。アサシンの興味の対象が、青年から『それ』へと移っていった。

「う………ああ………」

だらりと力なく垂れた四肢はあちこちに痣が見られ、恐らく関節を外されているのだらう。まるで芋虫の様に腹這う傷だらけの男は、あの御徒士組風の形をしていた。

男は全身を襲う激痛に耐えながら、重い頭を何とか持ち上げる。虚ろな目の映す先が徐々に上へと登っていった時、彼の顔は一瞬にして青ざめた。

「あ、ああ………うわあああああああつ!!」

怯えきつた男の悲鳴が、広い空間内の澱んだ空気を震わせる。怖気と戦慄に支配された男の姿を、アサシンは相も変わらず無言のまま見下ろし続ける。

「そいつがさつき、他の奴等と一緒に『あの人』を見限ってここから出ようって話をしてるのをたまたま聞いちゃってさ。『あの人』の耳に入ると余計面倒なことになりかねないし、だからバレル前にさつきと片付けちやおうかなって。あとどうせ殺すなら有効的に使つてからのほうがいいかなってさ。ねえランサー?」

「よく言うぜ、真つ先に二人も屠つたのはためえのほうじゃねえか。しかもどっちの中身も潰しやがって、あれじゃ使いモンにならねえだろ。」

「もく、悪かったって言ってるじゃん。このクラスのせいとか、サーヴァントになつてから力の加減が余計に上手くないかない時があるんだよ。だから最後の一人は綺麗に殺つてもらおうって、彼の元に来たんだからさ………それに、こうして『元の上司』に殺してもらったほうが、コイツも嬉しいんじゃないかな?」

青年が爪先で軽く小突くと、吃驚きつきょうした男の躰からだが大きく跳ねる。水を求める魚のように開いた口をぱくぱくとさせていた男であったが、やがてそこから絞り出されたのは悲鳴わななきに近い戦慄声であった。

「もっ……申し訳いございませんっ!!もう二度と、金輪際きんりんざいつ、このような真似は致しませ
ん!!ですから——」

臉を閉じ、またすぐに開く。ほんの、ほんの一瞬の間であった。一秒にも満たない時
間の間で、アサシンは男のすぐ正面へと音も無く移動していたのだ。

ひっ、と短く声を上げる男の髪を鷲掴み、アサシンはしやがんだ自身と彼の視線を合
わせる。仮面の向こうから覗く無機質な二つの目に、男の体の震えはますます強くなっ
た。

「あ、あああああああ!!嫌だ、嫌だ嫌だっ!!裏切りなど二度と、二度と致しません!!
何でもします!誰だつて殺します!だからお願いです、どうか……どうか命だけは、——」

お助けを。

続けてそう紡ぐはずだった口から溢れた、真つ赤な泥水。

「あ?」

鉄臭い、生臭い液体が、口元を伝い胸から生えた腕を汚して……あれ？どうしてこんなところから、腕が生えているのだろう？

ぐちゃ、と生々しい濡れた音を立てて、腕がゆつくりと引き抜かれていく。そうか、この手は目の前にいるこの男（ひと）のものだったのか。ああ早く、早く拭わないと。汚してしまつたことでまた怒りを買ってしまう。申し訳（わけ）ございません、只今拭いますのでどうか、どうかお許しください。頭りよ——

ぶち、ぐちゃり

生血を伴い、引き抜かれたアサシンの腕。その手に掴まれたものを確認する間もなく、男は恐怖に見開いた目を閉ざさぬまま、静かに絶命していた。

「お見事！いや〜流石アサシンの名は伊達じゃないね、俺やランサーはそんなに手際よく済ませられないもの。」

「けっ、こんな履歴書にも書けねえ特技（スキル）なんざ、俺あ別に欲しくねえやい……つと、そうだった。おいアサシンよ、そつちの残りモンを片付けんのは少しばかり待つてくんねえか？」

ランサーが指で示したのは、冷たくなり始めた男の亡骸。アサシンは何も言わないま

ま、じつと彼を見つめ続ける。

「え？どうしたのランサー、もしかして腹でも減った？」

「誰が魂喰いなんざ悪食な真似すつかよ、それにもう死んでんだろ……『お上』からの命令だ。何でもその骸を使っておつ始めたいことがあつから、魔物共の餌に回すのは一旦ストツプだよ。」

ぼさぼさの頭を搔きながら、気怠げに連ねるランサーの言葉に対し理解する素振りも見せないアサシンであつたが、やがて数秒の沈黙の後に彼は掴んでいた亡骸の髪を離し、重力に従つて床に倒れていく男になぞ目もくれぬまま、立ち上がり踵を返した。

彼が向かつたのは、未だ瘴気を吐き続けるあの甕かめの口。僅かに泡立つ表面に向かつて、アサシンは利き手に握つていたものを放り投げる。

ぼちゃん、と小規模の飛沫を散らし、『それ』は汚泥の中へと沈んでいく。やがて表面から『それ』の姿が完全に消えていくまで、アサシンは静かに見つめ続けていた。

「……にしてもコレ、本当鮮やかな殺り方だねー。失血も最小で済んでるし、何より一撃で抉り取つてる。」

青年の声に反応し、アサシンは甕口から顔を逸らす。既に硬直の始まつた男の傍にしゃがんだ青年が、仰向けにひっくり返した骸を利き手の番傘の尖つた先で無邪気に突いていた。

「やっぱりこれも、アサシンとしてのクラス性能のお陰なのかな……ああでも、君はサーヴァントになる生前まえから既に暗殺者アサシンだったんだもんね。それなら『嘗ての部下』をこうやって苦しませずに屠ほふるのも造作ないか………なあ、そうだろう？ 『元』天照院奈落の鳥さ——」

ヒュンツ、と風を切る音が、青年の声を遮った。

丸く開いた空色の瞳に映るのは、前方に番傘を開いた状態でこちらに背を向けているランサーの姿。暫しの間流れた沈黙の後、ランサーは大きく溜め息を吐きながら傘を下げる。その向こうにいた筈のアサシンの姿は、もうどこにも見えなくなっていた。

「……こんの、すつとこどつこい!! 野郎をわざと煽るなんざ、一体何考えてやがんだ!!」
「あつははく、やっぱり底かぼつてくれた。ありがとランサー。」

「あのなあ………つたく、その程度の礼で済ませていいコトじゃねえぞコレあ。見ろよ俺の傘、穴が開いちまったじゃねえか。ト○口のカ○タかつての。」

ぶつぶつと文句を零すランサーの持つその傘の面には、彼が言った通りに数か所に亘わたつて小さな穴が広がっている。それがあのアサシンによるものだ と確信する青年は、ランサーに悟られぬよう目を細め、一人ほくそ笑んだ。

「それで？ ランサー、俺達はこれから何をすればいいのかな？」

「え、もう話の流れ変えちゃうの？俺に対してじゃなくてもさ、何か言うことあるだろ？この傘とかさ。」

「ははは、ゴメンね。んで俺達はこれからどうすればいいの？二度も同じこと質問させるなよ。」

「このガキ、反省してんだかしてねえんだか………まあいいや。さつき『お上』に呼ばれた時に言われたさ。いつもの仕事に加えて、魔力を豊富に蓄えてそうなヤツを見つけたら狩ってこい、だそっだ。」

「む、相変わらず面白みのない命令だねえ。大体魔力を蓄えてる奴なんて、どれも簡単に捕まえられない連中ばかりじゃないか。ちようど良さげな『あの陰陽師』だって、常に周りをうろついている邪魔な『犬共』のせいで近付けやしないだろ。」

「それなんだがなあ、団長………つい最近、手頃そうな獲物を見つけちまったんだよ。」

口角を吊り上げ、ニタリと嗤うランサーのその言葉に、青年の関心は瞬時にそちらへと向けられる。

「へえ、それは気になるなあ………詳しく教えてよ？」

小首を傾げるその仕草は、何も知らない他者からすれば愛らしさを感じるもの。だが、ランサーは既に気付いていた。薄く開いた瞳の奥に、飢えた獣の狂気が潜み隠れていることに。

これ以上焦らすと危険だ。と察した賢いランサーは一呼吸間を置き、記憶を辿らせながらぼつりぼつりと語り始めた。

「ありやあ、江戸にあのドでかい火柱が現れたのと同じ日だったな。お前さんにも話しただろ？逃げた小鳥を追ってたら、思わぬ妨害が入ったって………そんな時にいたんだよ。『俺達と同じ』連中の中に、一人だけ雰囲気の違い妙なガキが。」

「ねえランサー、もしかしてお前はその子が俺達と同じ存在……サーヴァントを操っていた、とでも言いたいの？」

「ああ、連中が逃げていく時にチラツとだが見えたからな。あのガキの手の甲にあった刺青みてえなモンが……『お上』からの情報と合わせると間違いねえ、あいつはサーヴァントを使役することの出来る魔術師、『マスター』だ。」

確証を得て片頬笑むランサー、彼の放った言葉に呆気にと取られていた青年であったが、やがて開いたままだった口元は弧を描き、その面おもてに微笑を浮かべる。

「ふうん………マスター、か。」

年下の団長じょうしが不意に零した、楽し気な呟き声。

よし、聞かなかったことにしよう。そう思うことにしたランサーは、上機嫌に鼻唄を奏でる彼と目を合わせないよう、冷たくなった亡骸を持ち上げた。

* * * * *

モニターに表示されたデジタル時計が、午前四時に切り替わる。

巨大な疑似地球の淡い光に照らされた、広いその部屋の一角で、くうくうと寝息を立てる一人の少女。そして彼女へと静かに近付いていく、一つの影。

電源の入れられたままのモニターの横で机に突っ伏し、彼女……マシユは眼鏡も外さずに眠っている。目の下にはうっすら隈くまが浮いており、頬には既に乾いた涙の跡が、幾筋も刻まれている。そんな彼女の背中に、そっと毛布が掛けられる。

彼女へと憐憫れんぴんの眼差しを向け、優しい手つきで頬を撫でていたその時、プシュ、と自動扉の開閉音が後方から聞こえてきた。

「ダヴィンチ女史。彼女の様子はどうか？」

暗がりに溶け込んでしまいそうな程の漆黒のインバネスに身を包み、その男は管制室へと入ってくる。徐々に近付いてくる足音に、ダヴィンチ女史——レオナルド・ダ・ヴィンチはマシユから顔を上げた。

「やあホームズ、悪いがもう少し声を抑えてくれないかな？ ついさつき寝付いたばかり

なんだ。」

口元に指を当て、ダヴィンチちゃんは静肅を促す。それに面食らった男、ホームズは素直に従い、床を踏む靴にかかる力をやや抑えた。

その名は、誰もが耳にしたことがあるだろう……彼こそが、かの有名なコナン・ドイルの作品に欠かせない存在、名探偵を語る上で彼の名が上がらないことは無いと言われる存在——シャーロック・ホームズその人である。

とある亜種特異点でマスター・藤丸立香と出会い、事件解決という名の修復を行ったのち、後にこのカルデアへと身を置いている、裁定者のサーヴァントだ。

「地の文での説明ご苦労。それで、藤丸^{かれ}らの所在を突き止めるには至ったのかい？」

「残念ながら進歩なし、だ。彼らのレイシフトを行ってから既に二日も経過しているのに、未だ何も変わっちゃいない。まるで砂漠の中に落とした米粒を探するようなモンだからね、職員も皆お手上げ状態さ……マシユを除いて、だけどね。」

マシユの頬から手を離し、ダヴィンチちゃんは規則的に寝息を立てるマシユを見下ろす。白に近い彼女の顔色が、優れない体調を露骨に表していた。

「……まさか、ミス・キリエライトはあれから一步もそこを動いていないのか？」

空いた口が塞がらないホームズに対し、ダヴィンチちゃんは無言で頷く。瞑目した彼女の瞼の裏で再生されるのは、もう二日も前の記憶。

銀時達を送り届けるため、藤丸や他のサーヴァント達を入れた数名でレイシフトを行つたあの日。

何ら問題は無い。いつものように彼らの到着を確認して、いつものように通信を行う………筈であつた。

管制室内に響く、異常を告げる警報音。赤く点滅する照明が、職員達やダヴィンチちゃん達の不安を一層煽^{あお}つた。

『先輩………先輩！立香先輩っ!!こちらマシユです、応答してください!!先輩、先輩………!!どう、して………何も聞こえない、何も見えない………先輩、先輩っ、先輩っ!!』

噪音^{そうおん}に負けない程に響く、マシユの悲痛な声。一切の反応が返つて来ないモニターと音声に向かい、職員達の制止を振り切りながらも、彼女は声が枯れるまでの間、藤丸を呼び続けていた――。

「……何かあつたらすぐに対応出来るからって、必要時以外は一切ここを離れようとしてないんだ。通信の復旧作業を行っている間も、ずっと泣いていたよ。」

腫れた目元を見下ろすダヴィンチちゃんの表情には、自身への痛憤とどうしようもない慙愧ざんきが滲み表れていた。

「今思い返しても、浅はかな行動だったと思うよ。碌に調べもしない触媒を使って英霊の召喚をして、剩あまつぎえレイシフトまで行うだなんて……今回の件は私の責任だ。何としても彼らの居場所を突き止めないと、『彼あいつ』に申し訳が立たないからね。」

モナ・リザの微笑が消えた彼女の顔に浮かぶ、強い決心と覚悟。その気迫にホームズは瞠目したものの、彼女の想いを感じ取った彼も、静かに片頬笑んだ。

『ピピッ』

突如鳴り響いた電子音に、その場の空気が一気に張り詰める。

それはホームズも、ダヴィンチちゃんも聞き覚えのある、そして何よりも待ち望んだ、『外部』からの通信を知らせる音。

「……………先輩っ!!」

その音に即座に反応を見せたのは、机から飛び起きたマシュだった。素早く上体を起こした彼女は左右にホームズとダヴィンチちゃんがいることに驚きつつも、その意識は直ぐ様モニターへと向けられる。

画面に浮かんだ受信を示す表示と、鳴り続ける電子音。キーを押そうと伸ばしたマシュの手は、様々な感情により僅かに震えていた。

「マシュ、大丈夫かい…………? 私が変わろうか?」

「…………いいえ、大丈夫です。お気遣い頂きありがとうございます、ダヴィンチちゃん。」
マシュは平静を取り戻そうと、口から大きく息を吸い、そして吐き出す。そうして決心した彼女は、こちら側からも通信を受けるためのキーを力強く押した。

モニターに展開された、もう一つの画面。そこに映し出される姿を今か今かと待ち続けるマシュとダヴィンチちゃんの後方で、ホームズは自若として顔色一つ変えないま

ま、そのモニターを観察している。

僅かなノイズを経て、漸く映像が映し出される
——
刹那、歓喜に溢れて輝
いていたマシユの顔が、驚愕へと変化した。

「——あの、『あなた』は？」

「さあさあ、お立ち会いお立ち会い。」

「糸の掛けられた傀儡達がこれより織り成すは、物語の『第二幕』。」

「江戸という舞台の上で演じられるのは、悲劇かはたまた喜劇であるか。」

「^{おれ}吾の手によって創り出されたこの箱庭^{せかい}で、無様に……そして、滑稽に踊れ。愚かな演者達よ。」

舞台照明のように煌々と地上を照らす月の下で、『鬼』はただ静かに——嗤つた。

第二夜 影鬼

【陸】 赤い紅い、桜の下で（I）

『夜叉』

そんな異称で世間から呼ばれ始めたのは、何時いつの頃ころだったか。

目の前に立ちはだかるモノ、それら総すべてを斬り伏せていく度に、穢はれた色の血ちが迸ほとほとる。

髪も、顔も、真白だった羽織にも、染み込んでいく濁った赤。それがあの憎い異邦者達だけのものだったかは、最早『彼』本人にも分からない。

母国を取り戻す、そして師を取り返す。その一心で刃を振るい、戦い続けた『彼』を、天人を始め味方の志士達、そして守った力無き民までもが畏怖し、誰となしにこう呼ん

だ。

『バケモノ
夜叉』

『今一度問おう。お前は何の為に剣を取り、何の為に戦う？』

『俺』が、おれが、戦う理由は——

*
*
*
*
*

「ふんふんふんっ、らつたららっ♪」

「らつたらつた、ぴゅひやららっ♪」

「わんわんっ、わおん。」

上機嫌にスキップをしながら、アストルフォと神楽は先頭を進む。互いに手を繋ぎ、揃って軽快に跳ねる度に、三つ編みと髪飾りの紐、そして定春の尻尾も同時に揺れた。

「ふふっ、皆さんとても楽しそうですね。」

「おっ？それなら松陽も一緒にやるアル！」

「ほらほら、松陽さんもこっちこっち！」

「え？あつ、わわわ。」

掴まれた両手を同時に引かれ、松陽は多少よろけながら数歩前に出ていく。スキップのやり方が分からず困惑する彼に合わせ、左右の二人が手を握ったままジャンプを促すと、何度も繰り返していくうちに、松陽の困り顔には自然な笑みが浮かび始める。楽し気な三人の姿を、道行く人々を始め後方を歩く藤丸達は微笑ましく眺めていた。

「それにしても、リーダーもアストルフォ君も随分とご機嫌だな。」

「だってだって、今日は楽しいお出かけアル！藤丸も銀ちゃんも松陽も一緒だよ！なっ定春！」

「わんつ。」

「あくあ、これでスギつちと段蔵ちゃんもいれば、皆でお出掛けだったのに。そこはちよつぴり残念だったかも。」

「仕方ないじゃない、黒猫は昨夜言つてた通り別にやることがあるみたいだし。まあそのお土産に甘いスイーツを献上してくれるんだから、期待に胸を膨らませて彼を待つとするわ……：……：……：そういえば、モンブランつて葡萄ぶどうのソースと食べても中々美味しいのよね。あの美丈夫の果実フラッグ・イ・ソース蜜なら、最高のケーキがもつと素敵になりそう……：……：ふふつ。」

エリザベートが零した最後の眩きは聞かなかつたことにするとして、つい先程アストルフォが言つた一言に反応し、頭にフォウを乗せた銀時は数回廻りを見回した後、隣の藤丸と新八に尋ねる。

「なあ、そーいや何で段蔵までいねえの?」

「フォウ?」

「んもう、しっかりしてくださいよ銀さん。さつきお登勢さんのお店の前で段蔵さんと別れたばかりじゃないですか。」

「え、嘘?俺知らないよそんなの。前回の投稿から今日までの間に、そんな描写シーンあつたの?」

「まあ、読んでくれてる人達の目にもまだ触れられてないところだからね。というワケ

で、こつから回想シーン流しまゝす。ほわんほわんほわんぐだぐだぐ。」

回想へと突入する効果音を口遊くずまむと同時に、藤丸の頭から立ち昇る靄もやが広がって行く。まるでスクリーンのようにそこへと映し出されるものに、銀時を始め一同の視線は釘付けとなった。

「そのSE、口で言っちゃうんだ………つーかぐだぐだつてのは何?」

「銀さん、今から一時間前の僕らのやり取りがここに流れるみたいですから、とりあえず黙って観みましょうか。」

「フオウフオウ。」

* * * * *

「うわああ〜っ! 段蔵ちゃん、か〜わいい〜っ!」

いっぱい開いた瞳の中に星を輝かせ、アストルフオの上げた声がスナック内に響き渡る。四方から視点を変え、可愛いと連呼する彼に、段蔵は頬を赤らめていた。

「よく似合ってるじゃないかい、たまと一緒に仕立てた甲斐があつたつてもんだよ。」

「ええ、とても素敵です。段蔵さん。」

満足げな笑みを浮かべるお登勢の隣で、たまもムフーと鼻を鳴らしている。そんな二人を一瞥してから、段蔵はもじもじと小声で問いかけてきた。

「えっと………如何いかでしよう？ 皆様方。」

彼女の今の服装は、普段の色々と際どい忍装束………ではなく、着物にフリルをあしらった和風のメイド服。結わえた紐を解き、髪を下ろした頭部には、メイドさんのトレードマークであるヘッドドレスが、縮ちぢ細めん工の飾りと共に乗っている。また清楚な白いエプロンの下には、小さな花模様のちりばめられた生地に着物となっており、膝丈までのスカートから覗く足を覆う黒のニーハイソックスが、可愛らしさと艶あでやかさをより強く表していた。

「ええ、メイド服………というのですか？ とつてもお綺麗ですよ、段蔵さん。」

「だ、段蔵さん………すすす、すつごく似合ってます！ かか可愛いです………っ！！」

「落ち着けヨ童貞眼鏡、汗ヤバいぞ。いいなく私もそういうの着てみたいアル。」

「むむむ、アイドルのアタシを差し置いてメイドデビューだなんて………でも、悔しいけど似合ってる。ああくんっ羨ましいっ！」

「わんわんっ。」

「フォーウ、フォーウッ。」

「なっ、やっぱ髪下ろしたほうがいいだろ？ 俺の思ってた通りだね、うん。」

「何を一人で納得しておるのだ、貴様は……しかし真まことに麗しい、こういった女性を八方美人というのであつたか？」

「意味合いは似てるが、八面玲瓏はちめんれいろうと言つたほうが聞こえはいいがな……どうした藤丸？ さつきから黙つたままだが、主マスターとして何か一言あるかい？」

高杉に声を掛けられ、口を開けたまま呆けていた藤丸はハツと我に返る。そして改めて段蔵を目に映すと、はにかんだ笑みを浮かべながら染めた頬を搔いた。

「いやあ、本当に可愛くてびつくりしたよ。カルデアにいる小太郎にも見せてあげたいな。」

「あつ、それなら写真撮ろうか！ そういえば僕、カルデアから支給されたスマホ持つてきてたんだつたよ。はくい段蔵ちゃん笑つてく！」

言うなり何処からか取り出したスマホを構え、段蔵の許しを得る前にシャッターを切りまくるアストルフオ。マナーをきっちり守る紳士なカメコさんは、きちんと相手の許可を得てから撮影しなきゃいけないぞ？

「へいイカメラコツチコツチ、マニアニハ堪ラネエ猫耳メイドサンモイマスヨ？」

「それじゃあ、段蔵は今日一日お登勢さん達のお手伝いってことで。一人で任せちゃつてごめんね？」

「いえ、こちらこそ申し訳ございませぬ、マスター。本来なれば段蔵はサーヴァントとし

て、貴方の身を守らねばならぬのですが……。」

「無視力？ オイ無視力テメーラ？」

「大丈夫大丈夫。皆いることだし、お登勢さん達にはお世話になつてゐるからね。それに、段蔵もたまさんとゆつくりお話しできるいい機会だと思ふよ？ カラ友として、もつと仲良くなれるといいね。」

「マスター……ありがとうございます。」

藤丸の氣遣いに胸の奥がじんわりと熱くなり、段蔵は深く会釈する。そんな彼女の後方で無理矢理カメラに入り込んでくるキャサリンに対し、「もく退いてよく！」とアストルフォが憤慨の声を上げていた。

「にしてもよーババア、何で今日に限つて全員メイド服？ たまとか段蔵なら目の保養として、お前とキャサリンが着ても似合わねえどころの話じゃねえじゃん？ 最早放送事故じゃん？ こんなんもうモザイクかけないと、読んでる側にお見せ出来ないレベルのゲテモノじゃねえか。」

「ブツ殺されてえのかクソ天パっ!! 大体これ小説なんだから、モザイクなんてかけても意味ねえだろ………スナックお登勢はな、今日からメイドっ娘強化週間なんだよ。年中昼なんだか夜なんだか分かりやしないこんな状態だからね、客足も思うように伸びやしない。他の店と同様に、こうして客を呼び込むためにウチでも色々工夫を凝らすこ

とにしてんだ。」

「客足を伸ばすつつつたつて、この状態じゃメイドの経営するバーじゃなくて、メイドのいる化け物屋敷が正解——」

銀時が言い終える前に炸裂する、お登勢の見事な延髄蹴りが彼の頭部にヒットする。その際にごく一部の者達しか喜びを得られないであろう、お登勢のパンチラ描写シンを不幸にも目撃してしまった新八と神楽そしてエリザベートは、直ぐ様店の隅に蹲うすくまり噓えすいていた。

「ツラさんツラさん、メイドっ娘強化週間で何だろ?」

「ツラじゃない桂だ。それは恐らくアレだろう、あの、ええと……そう男の妄想、男の妄想に違いない。そうだろ高杉……ってあれ?」

桂は自身の隣に在るであろう男に同意を求めそちらを向いたが、そこには空いた丸椅子があるのみ。続いてガラガラと扉の開く音の方へと首を向ければ、高杉が既に店を出ようとしているところを皆が目撃した。

「ンキュツ、フォーウ?」

「……じゃあ、俺もそろそろ行つてくらあ。」

足元のフォウを撫でた後、取っ手へ掛けた手に力が込められようとしたその時、不意に松陽が慌てた様子で高杉を呼び止めた。

「あつ……晋助さん、お待ちください！」

それに反応し、高杉だけでなくその場にいた皆の動きもぴたりと止まる。何事かと思議そうにする一同の視線を受けながら、松陽は小走りで高杉の元へと駆け寄つていく。

こちら側へと近付いてくる松陽をぱちくりさせた目で追う高杉、そんな彼の前で松陽が足を止めたと同時に、自身の両の手がふわりと温かいものに包まれる感覚がした。

「……いつてらつしやい。どうかくれぐれも、怪我などなさいませぬよう。」

優しく握られた手から伝わる、心地良い温もり。そして身を案じる言葉と共に向けられた微笑みに、高杉は瞠目する。

今眼前にいるこの男は、過去ひとの事など一切覚えていないと言つた。それでも……それでも、こうして気に掛けてくれる彼の優しさは、幼かつたあの頃と変わらない。

込み上げる感情を零さないよう、右の眼を何度も瞬まばたかせる。そうしてから松陽と視線を合わせた高杉は、仄かに浮かべた笑みを彼へと向けた。

「……貴方アンタこそ、この間みてえな無茶やらかして、またガキ共を泣かすんじやねえぞ。」
「はい、承知しております！」

「ならいいんだが……それじゃ、また後でな。」

名残惜しげに手を解き、高杉は身を翻ひるがえす。その際、彼の深碧しんぺきの瞳がこちらへと向けら

れていることに、銀時と桂は気が付く。

「……………松陽せんせいに何かあったら、その時は——分かつてるだろうな？」

両者共、彼との距離は割と離れているというのに、囁くようなその声は不思議と耳に届いてくる。

霊核を射貫かんばかりの殺気を孕んだ眼光に、二人の背筋に冷たい汗が流れ落ちていった。

「いつてらっしやいスギっち！気をつけてね〜っ！」

「スギっち、モンブラン忘れないでヨ！」

元気よく手を振るアストルフォと神楽に、高杉は背中を向けたまままで小さく手を振り返す。唐草模様の黒い羽織は、閉めた扉の向こうへと姿を消した。

「にしても、高杉さんって昨日から一人でどこに行ってるんだろう？銀さん知ってる？」

「さあな。今は違うかもしれないねえけど、アイツ一応過激派テロリスト組織の親玉だし、裏の社会に通じてるルートか何かあるんじゃないやねえの？なあツラ、お前詳しいコト知ってんじゃないやねーか？」

「ツラじゃない桂だ。まあ、何処に行つて何をしているのかは大方の予想はついていますが……だが今は松陽先生もいる、高杉ヤッとて以前のように無謀な真似まではするまい。」

桂は細めた目で、高杉の消えていった扉を見つめ続けている。その眼差しから感じら

れる慈しみにも似た感情を、藤丸は何となくであるが感じ取っていた。

「さてさて、私達も店の仕事があるからね。アンタらもさつきと出とくれ。」

お登勢が手を叩きながら急かすと、皆ぞろぞろと一様に扉へと向かつていく。

「それじゃ段蔵、お登勢さん達の手伝い頑張つてね。」

「はい、マスターもお気をつけて……それでは皆様、至らぬ点は多々ございますが、どうぞよろしくお願い致します。」

「オウオウ、新人ダカラツテ容赦ハシネーゾ。マズハスグソコノ自販機テ煙草買ツテコイヤ。」

「何早速パシリから仕込もうとしてんだテメーは。たま、アンタが色々と教えてやんな。」

「分かりました。では早速、もしもセクハラにあつた時の対処法から簡潔に。段蔵さん、もしも痴漢行為やセクハラ発言などを受けた場合、まず一に鳩尾みぞおち、二に目潰し、三四を面倒なので飛ばして五に滅殺です。これだけ覚えておけばあらゆる痴漢から己を守る事が出来ます。いいですね？」

たまにより並べられた物騒なワードに対して「受諾致しました」と答える段蔵の声を背中で聞きながら、大丈夫かな？と不安になりつつも、藤丸は振り返ることなくスナックの扉へと手を掛け、そのまま横にスライドさせたのであった。

* * * * *

「……………あれ？」

回想が終わったと同時に顔を上げ、藤丸はせわしなく辺りを見回す。

「どうしたのよ？ 仔犬。」

「いや……………皆はさ、気付かない？」

藤丸の言葉に、一同は咄嗟に首を動かし、周囲の状況を確認する。そして彼の訴える異変に気が付いた松陽は、呟くように零した。

「そう言えば……………先程からどなたも、いらっしやいませんね。」

藤丸達がいるのは、あの巨大な天守に向かって続く広い道。しかし、彼らが目的地へと近付いていく度に人の数は減り、いつしか道を歩いているのは自分達しかいなくなっていたのであった。

「わう……………？」

「本当だ、皆どこにいったんちやっただら？」

「……………いや、これは『いなくなった』のではない。もしかこれは、俺達が向かうこの先

に、人々が『近付いていない』のではないだろうか？」

歩を進めながら桂がそう呟いたその時、ひらり、と彼の視界の端に小さな何かが映る。それを目で追いかけてしようとすると、続けてひらひらと舞い散る『それ』に目を奪われる。

「これ………花卉^{はなびら}、ですよね？」

掌の上に乗った小さなそれを見つめ、新八が呟く。

咄嗟に顔を上げた藤丸は、飛び込んできた光景に啞然とした。

「これって………」

風が吹く度に、連なる木々の枝に咲いた花が、闇の中で仄かに紅い花卉を散らす。

宙を舞った小さな花卉の大半は堀の水面へと落ち、赤い絨毯^{じゅうたん}となつて表面を覆い尽くしている。

そんな幻想的な光景の向こう………高く聳^{そび}え立つ塀と木々に囲まれるようにして、その天守閣は建っていた。

漆黒の城壁に、朱塗りの屋根瓦。そして所々に施された、鋭利な装飾………夜陰に溶

け込むことなく、天高く伸びたその城に誰もが率直に抱いた感想は同じであった。

「何だ、この城は……まるで鬼そのものではないか。」

桂の眩きに、藤丸も心中で頷く。同時にそこで浮かんだのは、昨日高杉が報告として述べた内容の一部であった。

『しかし俺が話を聞いた連中は、皆口を揃えてこう言っていた——あの城には、人食いの『鬼』が棲んでいる。ってな。』

鬼が棲まう城……というよりは、あの城そのものが人を喰らう鬼のようにも感じられて仕方がない。

異様な不気味さ、そして上手く言い表せない怖気に鳥肌が立っていたその時、隣にいた銀時が声を上げた。

「松陽……っ!!」

それに反応し隣を見れば、しゃがみ込んだ松陽が自身の腕を抱え、身体を戦慄かせて

いた。限界まで見開いた目で一点を見つめたまま怯えるその姿は、昨日見た彼の様子と酷似している。

荒く呼吸を繰り返す松陽を心配し、皆が彼と銀時の元へ駆け寄ってくる中、桂が身を乗り出してきた。

「松陽殿、落ち着いて……………そう、ゆっくりと息を吸って。」

背中を摩る桂の手が、淡く光を放っている。恐らく気分を鎮静させる魔術でも施しているのだろうと藤丸が予測した通り、過呼吸寸前だった松陽が少しずつ落ち着きを取り戻してきた。

「松陽、大丈夫アルか……………？」

「くうーん……………？」

彼に合わせて屈みこみ、心配する神楽と定春。そんな二人に松陽は額に汗を伝わせたまま、微笑みを返した。

「ええ、もう平気です……………早速ご心配をおかけしてしまい、すみませんでした。」

「いいって別に……………なあ松陽、もし何だったらここに定春置いてくからよ。俺らが来るまで待つてもいいんだぜ？」

松陽を助け起こしながら、銀時が尋ねる。すると松陽は首を横へと振り、彼を真つ直ぐに見つめて口を開いた。

「いいえ、私も行かせてください……まだ予感ではあるのですが、きつとここに私の記憶に関する何かがあるような気がするんです。」

「……………そつか。わあつたよ、でもあんまり無理はすんな？また辛かったりしたら、俺かツラに言うんだぞ？」

銀時に念押しされると、松陽は「はいっ！」と力強く返答をする。大分良くなった彼の様子に銀時と桂が安堵の息を漏らす一方で、天守を見上げていたアストルフオが小さく唸っていた。

「ん……………ここからじゃよく分かんないか。よしっ。」

アストルフオは数歩前へと進むと、藤丸達が集う辺りからやや離れたところで指笛を吹く。甲高い音が静寂に響き渡ったその数秒後、藤丸達の真上を影が通った。

「はいこつち〜！よしよ〜し！」

羽音を響かせ、発した鳴き声で空気を震わせたそれはアストルフオの前に着地する。大鷲の頭と獅子の前半身、そして馬の後半身を持つその生き物に、銀時と新八は空いた口が塞がらない。

「あ、アストルフオきゅん……………何それ？」

「そつか、銀ちゃんもパチ君もまだ合わせたことなかったっけ。紹介するね、この子は僕の相棒にして宝具の一つ、『この世ならざる幻馬』だよ！」

アストルフオの紹介を受け、よろしくと言つてゐるかのやうにヒポグリフは甲高い声で鳴く。その大きさと音量に皆が思わず慄くおの中、一人目を輝かせてゐる者がいた。

「おおお……こ、これは、何と素晴らしき羽毛………！ヒポ殿、宜しければ一度だけ、俺に触らせてはくれないだろうか……っ!!」

息を荒げ、こちらににじり寄つてくる桂にアストルフオも苦笑するしかない。あと少しでその手が羽毛モフモフに到達しようとしていたその時、不意に桂の視界が更なる闇に覆われた。

「あつ、駄目だよヒポグリフ〜！ペツしなさい！」

くぐもつたアストルフオの声が聞こえた刹那、身体が大きく浮き上がり、そのまま左右に乱暴に振り回される。ここで桂は漸く自身の頭がヒポグリフによつて啜くわえられ、更にはそのまま激しくぶん回されていることを確信した。

「アツハツハツハ！ヒポ殿つたらお戯れを〜！」

ここまでされても尚、ヒポグリフがじゃれついてゐるのだと勝手に思い込んでゐる桂のタフネス精神に、藤丸は呆れると同時に心の中で敬意を払つた。

「それで、アンタはその子を喚よび出してどうするつもりなのよ？」

「あ〜うん、とりあえずヒポグリフに乗つてき、上からこのお城を調べてみようかと思つて。そうだ、一緒に乗りたい人挙手して〜！」

アストルフオか言うや否や、「はいはいっ！」と元気よく手を上げた神楽の横で、控えめに拳手をする新八の姿も確認出来た。

「うんうん、それじゃ神楽ちやんとパチ君に決定〜！」

「ツプハア！あ、アストルフオ殿……………俺も拳手をしたのだが……………」

「ごめんねツラ君、ヒポグリフがここまで嫌がつてると、乗せた時に振り落としかねないからさ……………今回は我慢して？ね？」

可愛らしいウインクまでつけられ、桂はそれ以上は何も言えなくなってしまう。唾液塗れになってとぼとぼと歩いてくる桂に、松陽はそつとハンカチを手渡した。

「小太郎さん、どうぞお使いになってください……………」

「ううう……………松陽先生エエっ！！」

ヒポグリフに振られ傷を負った心に優しさが沁み込み、愛しき恩師にハグを求めようと両手を広げて向かって来る桂。そんな彼を受け入れたのは温かな松陽の温もりではなく、横から突き出された銀時の勢いを伴った蹴りであった。

「はぐおっ！！」

錐揉み回転をしながら大きく吹っ飛んでいった桂は柵を越え、漸く止まったのは花卉の積もる堀の上。そのまま重力に従った彼の体は下へと引つ張られていき、ドボンッ！と大きな音と花卉の飛沫を散らして絨毯の中へと沈んでいった。

「ったく、んなベツタベタの体で松陽にくつつこうとしてんじゃねえよ。そこで綺麗に洗い流してくるんだな。」

鼻で大きく息を吐く銀時に、一同苦笑いを浮かべるしかない。堀に落ちた桂も無事水面から顔を出してこちらに泳いできていることだし、とりあえず進めようか。

「それじゃ、アタシも上から探索してみましようか。多少なら飛ぶことも出来るし。」

「えっ、エリちゃんも飛べるの?」

「そうよ、眼鏡ワンコ……ふふん、アンタ達にもアタシの天使の翼、特別に見せてあげるわ。覚悟なさい!」

得意げに鼻を鳴らし、嗤笑するエリザベト。すると彼女が両の手を大きく広げたと同時に、その小さな背中から巨大な翼が現れた。大きく広げたそれは天使というより竜ドラゴンのものであり、禍々しさの中にもどこか美しさのある印象を他者に与えていた。

「おおお……っ!! トカゲ娘、何それ!!」

「エリちゃん、ごっさカツケーアル!」

「むっふふっ、そうでしょう? あ、でも幾ら素敵だからって無断の撮影はNGよ? そういうことは事務所を通してからにしてちょうだい。」

彼女の念を押しつけた注意到、既にスマホを構えていたアストルフオは「えっ
T m i t t e r 上げたかったのに!」と不満の声を上げる。そんな彼らの様子を苦

笑しながら眺めていた時、藤丸の目の前を何かが通過し、足元に落ちた。

「あれ？これって……………」

拾い上げたソレは、花柄かへいごと落ちた花であった。よくよく観察すると、藤丸はあることに気が付く。

「……………これ、『桜』だ。」

花卉の色で、すっかり梅だと勘違いしていたのだが、花卉の形や全体の構図が明らかに梅とは異なっている……………しかし、ここでまた新たな疑問が浮かび上がる。

彼がよく知る桜の花とは、明らかに花の色が異なるのだ。確かに形は桜であれど、今こうして風を受けて舞うこの花卉は、記憶にある桜のものより遥かに赤みが強い。色でいえば……………そう、くれない紅に近い。

それにここに来る前、お登勢の店のカレンダーで時期を確認したところ、今の江戸の季節は初夏辺り。なれば桜は疾とうに花を散らせ、新芽が萌える頃合いも過ぎているのではないだろうか……………？

様々な疑問が泉のように沸き上がり、混乱する頭を傾げたその時、不意に藤丸の視界に『何か』が映り込んだ。

「え……………っ？」

目を凝らしてみれば、それは桜の木々の間に立つ影……………人の影だった。暗闇の中で

その姿は確認出来ないものの、それは明らかに木のものは異なっている。

呆然とその影を見つめていたその時、穏やかだった風が突如突風へとその勢いを変化させた。

「うわっ————っ！痛ででっ！」

砂埃が舞い、風に舞い散る花卉と共に藤丸へと吹き荒れる。異物が目に入った藤丸は、痛みに思わず目を瞑つむってしまう。

「つたくも〜、何なんだよ……。」

生憎とハンカチなどは持ち合わせておらず、服の裾で目元を擦る。そうしていると漸く異物ごみが取れ、痛みも和らいできたのを確信してから、藤丸は目を開いた。

「凄い風だったね、皆大丈夫——」

言い掛けた藤丸の言葉は、再び吹いた風によって掻き消される。

再び目に映した景色——だが、何かが違う。

「え……………(こゝ)、何処？」

立ち並んだ幾本もの桜の木は、藤丸が今しがたまで見ていたもの……………しかし今彼の目に映っているそれらは、全て堀の『内側』に根を張っていたのだ。

状況が理解出来ず、藤丸は辺りを見回す。天守と同じ、黒い壁に囲まれた広い場所。遅れて気が付いたが、桂が銀時に落とされたあの堀も無い。そして何より……………自身の数十メートルすぐ先に、あの奇怪な天守閣が建っているではないか。

「(こゝ)って、もしかして……………城の敷地の中？あれ？でも、何で……………？」

ぐるぐると、頭の中が渦を形成しだす。自分は今しがたまで、確かに皆と堀の外側にいた。そしてこれから調査を開始しようとしていたところであり、まだ一步も動いては

「……………銀さん？アストルフオ、エリちゃん？」

ここで漸く、藤丸が今一人しかいない事に気が付く。仲間どころか、辺りに人の気配が全くしない現状に、藤丸の顔色はみるみるうちに青ざめていった。

「新八君！神楽ちゃん！松陽さん！ツラき、桂さんっ！定春君っフオウ君！」

力いっぱい声を張り上げ、皆の名を呼び続ける。だが返ってくる音は声ではなく、風

に揺れる桜のささめきだけ。

「……………皆、一体どこ行っちゃったんだろう……………」

肩を落とし、沈んだ声で一人呟く藤丸……………そんな時だった、何者かが落胆する彼の肩を掴んだのは。

「……………何だ、皆そこに……………」

少し痛いと感じたものの、漸く見つけられた自分以外の存在に安堵し、藤丸は明るい調子の声と共に振り向いた。

『キキ、キキキキ……………！』

汚れた茶色のこびりつく、黄ばんだ歯の並んだ口許が、ゆっくりと弧を描いていく。複数体並んだ魔物——その内の一体、元興寺がごぜの鋭い爪の伸びた手が、藤丸の肩をしっかりと驚掴んでい……………

「ギヤアアアアアアッス!!」

驚愕より早く防衛反応が働き、即座に手を振り払った利き手で元興寺の目球を勢いをつけて突く。

まさか振り向きざまに目潰しを喰らうとは向こうも思っではいなかったようで、「ギ

エエエアアアツ!!」と濁った声を上げて翻筋斗打っている。そんな元興寺になど振り向きもせず、藤丸はその場から駆け出した。

「うええっ、やっぱハンカチ用意しとけばよかった……!」

まだほんのり生温かさが残る指を不快に思いつつ、藤丸は足を止めぬまま首だけ動かして後方を確認する。

藤丸が一撃を喰らわせたあの元興寺は、まだ地に倒れ伏している。しかし、後ろに控えていた他の元興寺と魍魎達が、こちらに向かつて走り出してきていたのだ。

「はあっ、はあ??っ!早く、皆を見つけないと……!!」

息を切らしながら、とにかく走り続ける藤丸。そんな時、ふと彼が目をやった先に、長柄の槍が壁に立て掛けてあるのを発見した。

武器が無いよりはマシだ。咄嗟に藤丸はそちらへと駆け出し、寸でのところまで迫ってくる魔物達に魔力の弾丸を数発お見舞いした後、漸くその場所へと到達することが出来た。

槍を掴み、両の手に構えてから穂先を魔物達へと向ける。正面には魔物が数体、状況で言えば壁際に追い込まれた形なのだが、背後にまで気を回さなくていいだけ精神的にはマシだった。

『ギギギ、ギギギガガガ……!』

爪を、牙を、手にした武器をこちらに向ける魔物達の放つ殺気は、明らかに自分へと向けられている。服の下に鳥肌が立つほどに、藤丸自身もそれは感じ取っていた。

「（倒そうだなんて、考えるだけ無駄なことだ……とにかく、これ以上接近されないようにしないと。）」

正面の魔物達から決して目を離さず、しつかりと槍を構えている藤丸であったが、彼はまともにも武器を扱った試しなど、数えるほどしか……否、皆が思っている回数よりそれ以下であろう。今まで様々な危機に立ち会ったことがあっても、それらを乗り切れたのは自分の傍らに常に英霊達サイヴァントがいたため。武の心得も碌ろくに持ち合わせていない今の藤丸など、魔物達からしてみれば少し面倒臭いだけの恰好の獲物。藤丸の抵抗など所詮、茄子の蒂へたについている小さな棘程度とげにしか思っていないだろう。

「……………情けないな。いかに自分が今まで英霊達みんに頼りっぱなしだったかが、痛い程に思い知らされる。」

息を吐きながら、藤丸は自分自身を嘲ら笑う———そんな一瞬の気の緩みでさえ、戦いの場では命取りとなる。痺れを切らした一体の元興寺が、手にした棍棒を振り翳かきして跳躍してきたのだ。

「うわ?!?!?!」

藤丸は咄嗟に、槍を前へと突き出す。しかしその穂先をいとも容易く回避した元興寺は、槍に向かつて棍棒を振り下ろした。

バキバキツ、と木が折れる音と共に、搦んでいた手に衝撃が走る。折られた槍を手放し尻餅をつき、得物を失い無防備となった藤丸に、一斉に飛び掛かる魔物達。

「あつ——」

駄目だ、ここで殺される。

目を背けても避けられない眼前の現実には、一気に恐怖が込み上げてくる。

駄目だ、駄目だ、まだ死ねない。死ぬわけにはいかない。

やらなくちゃいけないことがある。果たさなくちゃならないことが、まだあるんだ。

駄目だ、死にたくない。駄目だ、嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

「——まだ、死にたくない。」

口を次いで出たのは、叫びでも命乞いでもなく、素直な自身の想い。

見開いた瞳が映したのは、こちらへと振り下ろされる武器や爪の数々。

そして、

「——ちよつとちよつと、何勝手なコトしてくれてるんだよ。」

目の前に降り立った、一人の青年の後ろ姿。

「——へ？」

「ギ——ゴア、ア!!」

突如現れた青年の存在に困惑する間も無く、棍棒を振り回していた元興寺の顔に拳がめり込む。骨の砕ける音と共に元興寺は大きく吹き飛び、他の魔物達を巻き込んで大きく吹き飛んだ。

やがてその躰は壁へとぶち当たり、僅かに痙攣を繰り返した後に動きを停止し、その身を塵へと変えていった。

「キキ……ッ、キイイイイイツ!!」

乱入者に憤る者、恐怖に駆られ逃げ出す者、それら全てを無慈悲に薙ぎ倒す青年の姿を、藤丸は只呆然と眺めていることしか出来なかつた。

異国のデザインをした藍墨茶の服に、紅色の花弁がよく映えている。透き通るような白い肌も、三つ編みに結わえた珊瑚色の髪も、そして時折楽し気な光を湛える天色の瞳でさえ、惨たらしい殺戮を行っているにも関わらず、彼の姿は美しいとさえ感じられた。

「そーおれ、つと。」

最後の一体となつた魍魎を、青年は宙高く放り投げる。そして利き手に持っていた葦色の傘の先端を標的へと向けると、そこから一発の弾丸を放つ。見事に弾が命中した魍魎は息絶え、他の魔物と同様に塵となつて消えた。

「ふゝ、終わり終わりゝ。」

血飛沫の残るその場に相応しくない、のんびりとした声で青年が言う。背伸びをし、

数回肩を鳴らした後、不意に彼がこちらへと振り向いた。

「さてと……ねえ君、大丈夫？」

スキップをするかのような軽い足取りで近付いてくる青年に、ぽかんと空いた口が塞がらないでいる。今しがたまであの魔物達を軽くあしらっていた姿とは、まるで別人のようだった。

「あ、あの………！」

漸く絞り出した声は、情けなくも震えている。藤丸と目線を合わせるようにしやがんだ青年は、中性的な面おぼしてに笑みを浮かべ、「ん？」と小首を傾げていた。

「た、助けてくれて………ありがとう、ごさいました………」

情けないやら、恥ずかしいやらで、顔を上げることすら躊躇ためらってしまふ。そんな彼に青年は一瞬だけ目をぱちくりさせた後、またすぐに浮かべた笑顔を藤丸へと向けて言った。

「それじゃ、行こっか。」

「はい………へ？何処に？」

「だって君、迷子なんですよ？だから俺が案内してあげるよ、君の仲間がいるところまでさ。」

ほら立って、と両手を引っ張られ、藤丸は訳も分からないまま起立する。ズボンに

ついた砂埃を払いながら、藤丸は目の前にいる命の恩人に対し、怪訝な視線を送っていた。

「(……………この人、何で俺が銀さん達とはぐれたことを知ってるんだろう?)」

今しがたの記憶を掘り返しても、そのような事を口にした覚えは一切無い。ならばどうして……………と眉を顰^{ひそ}めていたその時、「ねえ」と青年が声を掛けてきた。

「うえい!!な、何でせう……………!!」

「あはは、そんなに怯えることないのに……………率直に尋ねるよ。君さ、マスターだよね？」

にここにこと笑みを湛え、青年が指した先は藤丸の右手の甲。砂と擦り傷に汚れた刻印を軽く擦りながら、藤丸は頷く。

「それじゃ、君のことはマスター君って呼ばせてもらうよ。だから君も、俺のことクラス名で呼んでね? いい?」

「クラス名って……………それじゃ君、やっぱり……………!」

先程の勇姿から予感はしていたものの、改めて告げられるとやはり驚きも大きい。

唐突に吹いた風と桜吹雪を受けながら、青年はもう一度微笑んだ。

「俺はサーヴァント、召喚されたクラスの名は『バーサーカー』………なまえ真名はまだ教えてあげられないけど、これからよろしくね？ マスター君♪」

《《続く》》

【陸】 赤い紅い、桜の下で (Ⅱ)

まるで細雪ささめゆきのように、降り止むことのない紅色の花弁はなびら。

所々に設置された照明の灯りを受け、先を行く青年……バーサーカーの後方を、藤丸は黙々と歩いていった。開いた番傘をくるくると回し、時折上機嫌に奏でられるバーサーカーの鼻唄を聞きながら、藤丸は先程浮かんだ疑問を再び思い返す。

「……………この英霊ひと、一体何者なんだろう？」

先程目の前で、いとも容易く魔物達を塵殺ちりころしたあの姿から、彼が自らそう名乗ったように、クラスはバーサーカーで間違いはないのだろう。引き裂いた魔物から浴びた返り血を頬に付着させ、花を摘むように軽い手付きで縊くびり殺すバーサーカーの面おもてに浮かんだ媚笑を思い出し、藤丸の背筋が再び寒くなる。

それに、何故か彼は藤丸しじふんが仲間達とはぐれたことを既に周知していた。ここが何処であるのかも把握出来ないままで、彼に言われるがままについていてはいるものの、果たしてこのまま身を任せていいのだろうか………そんな内容を思索していたその時、

不意にバーサーカーが足を止め、その場に立ち止まる。

マズい、訝しんでいたのがバレてしまったかと狼狽しかけたその時、バーサーカーがぼつりと呟いた。

「……………いた。」

「え、何？どうしたの…………？」

恐る恐る、藤丸が横から尋ねてみる。するとバーサーカーは徐おもむろにしゃがみこみ、唇を尖らせたままもう一度繰り返す。

「お腹、空いちやつた。」

「……………へ？」

お腹が空いた、即ち魔力を消耗したことによる疲弊であることを、藤丸は瞬時に理解する。まあ、そりゃあれだけ派手に戦えば、サーヴァントでなくとも体力は減るし、お腹だって空くかもしれない。

本来であれば、一刻も早く銀時達の所へ戻りたい藤丸ではあるが、彼の空腹ハシゲリの原因は自分を救ってくれたことにもあるため、そここの責任はちゃんと感じている。何か持っていないかかったかなくと、ポケットに手をつ込み中を漁る。おっと早速手応えが…………何だ飴の包み紙か。ええつとこれは何だろう、あつ片つぽだけ無かつた靴下がこんなところろに。そんな具合に探っていたその時、指の先が何かに当たる感覚がした。

「おっ? コレは確か……。」

摘んで引きずり出したその物体を確認し、藤丸は相好を崩す。そしてバーサーカーへと向き直ると、中空を見つめている彼の前にそれを差し出した。

「はい、よかつたら食べる?」

藤丸が渡したのは、昨夜桂の出した問い掛けに正解した報酬として貰った、例の『んまい棒』。お馴染みのグレーがかつたドラ○もん似のあのキャラクターではなく、エリザベスの絵が描かれたパッケージの駄菓子に、バーサーカーは丸く開いた目で凝視する。

「……………くれるの? 俺に?」

きよとんとした様子で問いかけてくるバーサーカーに頷きを返すと、彼の表情は瞬く間に華やぎ、瞳には星の如く輝きが宿る。ぴよこんと逆立った毛、所謂いわゆるアホ毛がまるでご機嫌な犬の尻尾のように何度も跳ね、愉快に揺れていた。

「ツラさ……えつと、君と同じサーヴァントの人から貰ったんだけど、凄いんだよコレ。一本食べるだけで魔力が全回復出来ちゃう、正に一本満足つてええええええつ!!」

一瞬、ほんの一瞬だけ目を離れた間に、んまい棒は藤丸の手の中で袋だけとなっていた。

続いてバリッバリッと乾いたものを頬張る音に面おもてを上げると、眼前のバーサーカーの

頬がぼんっぼんに物を詰め込んだハムスターのように膨らみ、僅かに開いた隙間から件の音を立てている光景に驚愕し、藤丸は慄き声を上げる。

「ふんふん、ふあかふあかほいひーねほふえ。」

数回の咀嚼そしゃくの後に飲み下すと、バーサーカーは硬直する藤丸へと向き、につこりと解顔する。

「本当だ、すつごく元気が湧いてきた気がするよ。まあ食べる量としては全然物足りないけど。でもありがと〜マスター君。」

「あ、あはは………お気に召したなら、もう一本あげるよ。」

「え、いいのかい？それじゃお言葉に甘えて。」

藤丸が新たに差し出したんまい棒を受け取り、早速開封………しようとしたバーサーカーの手が不意にぴたりと止まる。不思議そうにその様子を見る藤丸の視線の先で、バーサーカーは暫く考える素振りをした後、んまい棒を服の中へと仕舞い込んだ。

「あれ？食べないの？」

「ん〜………今は止めとく。せつかく君から貰ったものだし、いざつて時まで取って置かせてもらうね。」

そう言つて立ち上がり、顔を綻ばせたバーサーカーの微笑には、先刻までの妖しきは欠片も感じられない。改めてよくよく見れば、身長や外見などは自分とほぼ変わらな

い。何となく親近感を抱いた藤丸は、再び歩き出したバーサーカーの隣へと並んだ。

「そういえば、魔力切れを起こすことは、バーサーカーにはマスターはいないの？」

「うん、契約を交わしてる相手は今のところいなかな。まあ一応野良サーヴァントなんだけど、仕えてる上司的な人はもういるから。」

「そっか。もしよかつたら俺達と一緒に、とも思ってたけど……それなら仕方ないよね。」

「……………マスターか、それもいいなあ。」

ぼそりと呟いた声は囁きに等しく、言葉として藤丸の耳に届いてはいなかった模様。

「えっ、何？」と聞き返してくる藤丸にバーサーカーは戯笑を浮かべ、「なくんでもないっ」と舌を出した。

「あつ、そうだ。まだ名前も言っただけ……俺は藤丸立香、改めてよろしく。バーサーカー。」

「藤丸……ふうん、面白い名前だね。それに立香なんて、字だけ見たら女の子と間違えそうかも。」

「うっ、早速痛いところを……そうなんだ、小学校の時とか同級生にからかわれたりしてさ……。」

「あははっ。でもせつかくけど、君のことはマスター君で覚えちゃってるからなあ。」

まあでも、気が向いたら名前前で呼んであげるよ。それでもいいよね？」

屈託の無い笑顔から滲み出る威圧感にも似た何かに、藤丸はたじろぎながら頷くしかない。それと同時に、ああやっぱこの人只者じゃないわく怖いわく、と改めて痛感する藤丸であった。

引き撃つた顔で片頬笑む藤丸を、ぱつちりとした瞳に映すバーサーカー。そんな二人の間を、桜の花弁を舞い散らせながら風が通り抜けた。

「そ、それにしてもさ、この桜つて凄いいね。今の時期に咲いてること自体も珍しいけど、こんなに色が赤い花なんて、俺初めて見たよ。」

広げた掌に落ちた一枚を摘み、藤丸は素直に思ったことを言葉にする。するとそんな時、バーサーカーがぼそりと呟いた。

「……………マスター君、知らないんだ？ここの桜に関する噂のこと。」

不意に落とされた声色に、一瞬だけ背筋に寒いモノが伝う。強張った顔のままバーサーカーを見つめ続ける藤丸に、彼はそのまま淡々と続ける。

「それじゃあ、何も知らない君に教えてあげるよ。この桜の木はね……………人間の血肉を取り込んで、花を咲かせてるらしいんだ。」

「……………は？」

バーサーカーが何を言っているのかが、すぐに理解することが出来なかった。啞然と

する藤丸の横で、変わらぬ表情のままバーサーカーは歩き続ける。

「この日本くにでも、昔から言われてるんだろ？『桜の木の下には死体が埋まつてる』んだつて。城しろの地面の下にもね、たくさんの人間の亡骸が埋没してるらしいよ……………そうして長い間に亘わたつて人の血と肉を吸いあげて、やがてその味を覚えた桜は自らも獲物を襲い喰らうようになった。この城の近辺で神隠しが多発するのは、消えた奴等が皆桜に喰われてしまったから……………知らないだろうから教えてあげる。この城はね、『鬼ヶ城』なんて異名でも知れ渡つてるのさ。只でさえ鬼が棲すんでるなんて俗言に加えて今の噂だから、今じゃ鬼ヶ城おにがしろには誰一人近付いてきやしないんだ。よっぽどの物好きか、或いあるは命知らずを除いて、さ……………」

細められたバーサーカーの瞳が、妖し気に光を湛える。彼の莖すみれ色の傘に落ちる花弁が、先程の話からまるで滴したたり落ちる血を連想させ、驚怖した藤丸の顔は青ざめ、全身に鳥肌が立つ。

暫しの間、流れる沈黙。木々が風に揺られる音だけが響く中、それを破つたのはバーサーカーの吹き出した笑い声であつた。

「ゴメンごめん、何もそんなに怖がらなくても……………まあ、俺も他人ひとから伝つてに聞いたただけだし、あくまで噂は噂、他愛もない与太話として流してくれて構わないよ。」

また元の人懐っこい笑顔と態度へと変わるバーサーカーに、藤丸は空いた口が塞がら

ない。何事もなかったかのようにすたすたと歩みを進め、バーサーカーが目の前を通過していくタイムリングで漸く我に返り、藤丸は慌ててその背中を追った。

「それで、そんな噂が世間に流れてるにも関わらず、マスター君達はこんな所で何をしていたんだい？」

「あ、うん……………実はこの城、鬼ヶ城のことを調査しておこうと思つて。」

「ふーん、どうして？」

「えつと……………今更になると思うけど、君もこの江戸くの異変には気付いてるだろ？いつまで経つても夜が明けなかったり、それにさつきみみたいな魔物がうろちよろしてたり……………まあ俺にとつては、街中に宇宙人がいたり空をあんなデカイ宇宙船ふが飛んでたりするのも不思議でならないけど。」

「そうだねえ、俺もこつちの世界に来たのはつい最近のことなんだけど、魔物はともかく太陽が出ないってことには驚いたかな。まあでも、俺としてはそつちのほうが好き都合だけだよ。」

「え、何で？」

「実はね、お日様の光が苦手なんだあ。だから俺『達』は日除けのために、こうして常に傘を持ち歩いてるんだけど……………こんな風に夜が続いてくれるなら、一々気をつけなくていいから気持ちがいいんだけどね。」

バーサーカーは両手を広げ、その場でくるくると回ってみせる。傘に乗っていた花卉がそれに合わせて舞い踊り、まるで紅い斑雪はだれのように彼の頭頂から降り注いだ。そんな姿を見ていた藤丸の中に、幾つか生じる疑問の数々。

「俺『達』……………それに日の光が苦手って、どこかで同じことを聞いたような……………」
 眉間に皺を寄せ、藤丸は思考を巡らせる。そして改めてバーサーカーの容姿に着目した時、新たに浮かび始める疑義。

「……………あれ？そう言えばこの人、よくよく見れば誰かに似てる気が——」
 「マスター君、マスター君ってば。」

幾度も呼ぶ声に漸く顔を上げれば、鼻がつきそうな程の間隔にあるバーサーカーの顔。「距離感っ!!」と叫んで勢いよく後方に下がると、その反応にバーサーカーはくすくすと小さく笑う。

「どうしたの？難しい顔なんてしちゃって、疲れた？」

「あゝ、ええつと……………そんなとこ。」

「そう、でももう少しだけ歩くから、それまでの辛抱だよ。」

頑張って、と一言の後に背中を軽く叩かれ、藤丸はまた足を動かす。そこから先程の続きから、二人の会話は再開される。

「で、君は鬼ヶ城きよがきを調べたりなんかしてどうするんだい？只の好奇心、なんてことはない

よね？」

「好奇心だけでこんなおつかない所には行かないよ………詳しいこと話すと長くなるし、ぶっちゃけ文字数もページも喰うから、出来ればかくかくしかじかで済ませたいところだけど、変なところでは手抜きにしたくないっていうか、とりあえず簡潔に………笑わないでよバーサーカー君？ 実は俺、いや俺達は、ここじゃない別の場所から、次元を跳躍してやってきたんだ。」

「あつはは、あんまり面白くないかな。」

「わーんっ！ それはそれで地味に傷つくリアクション!!」

「ごめんねマスター君、俺嘘吐くの得意じゃないからさ。それで、君達はどのようにこんなところまでやってきたの？」

「ううう、君の素直さが俺の心を容赦なく傷つける………ええとどこまで話したか。そうそう、目的は俺のところに召喚された数人のサーヴァントを送り届けることだったんだけど、到着したこの世界がさっき言った具合におかしくなっちゃってるし、それにこっちで出会ったとある人が、どうやら記憶を失くしてるらしいんだ。それで俺達は異変の解決とその人の記憶を戻す手掛かりを探すために、こうやってあちこち足を運んだりして情報を集めてただけだ——」

「成程ねえ、そうしてる最中に君はこうやって迷子になってしまった、というわけか。」

痛い一撃を突かれ、うっと藤丸は声を洩らす。バーサーカーは俯きがちになった藤丸の顔を覗き込む体勢を取りながら、緩く弧を描く口許を開いた。

「……ねえマスター君、この世界を元通りにしようなんて大それたこと、本当に出来るって思ってるのかい？」

「え……っ?」

バーサーカーの問い掛けとその意図が理解出来ず、藤丸の足は無意識にそこで止まる。怪訝な顔を向ける藤丸と距離を取り、開いた傘の向こうでバーサーカーはどこか楽し気に続けた。

「君が今までどれ程の世界と出会い、どれ程の英霊達と絆を結び、どれ程の事を成し遂げてきたのかなんて、俺には知らないし分からない。でもさあ考えてごらんよ、何故此処が変わり果てたのか、そもそも原因はなんなのか、はたまた何者かの手による仕業なのか。まだ情報が不足しているにせよ、こんな大掛かりなことを起こしている奴がもしも、気配を殺して君達の背後にいつの間にか忍び寄っているとしたら。そして一瞬でも生まれた隙に、喉笛を搔っ切ろうとしているとすれば……そんな可能性だつてゼロじゃない、ここでは充分に有り得るかもしれない。そういつた事も視野に含めて、君は考えてはいるのかなあ……? そんな夢見がちで自信に溢れた、何も知らない君に一つだけ、俺から忠告をさせてもらおうよ。」

閉じられた傘の向こうから、不敵に微笑むバーサーカーの姿が現れる。一步、一步とこちらへ近寄ってくる彼の眼は、まるで雪氷の如く鋭い冷たさを孕んでいるかのようであった。

突如変貌した態度と視線に気圧され、息を？む藤丸の正面にてバーサーカーの足は止まる。硬直する彼の眼前に突き付けられたのは、嘲ら笑うバーサーカーの人差し指。

「……………己の命すら、誰かに護ってもらわないといけない君じゃあ、この世界は何も変えられっこない……………そう、『今のままの君』じゃあね。」

ザア…ツ、と吹いた微風が、枝や照明を僅かに揺らす。

舞い落ちる紅の花弁と共に、風に戦ぐバーサーカーの結わえた髪、そして薄ら明かりに照らされた彼の、艶やかさを感じさせる程の微笑。

幽暗に溶け込むことなく映えるそれらに、藤丸は一切の言葉を失い、ただ魅入っていることしか出来なかった。

「……………はい、もうこの辺りでいいかな？」

バーサーカーの声に我に返ると、そこは何処か見覚えのあるような場所。辺りを見回してから正面に向き直ると、バーサーカーはまた先刻のように、にこにここと笑っている。

「あ、ありがとう……………えつと、でも誰もいないみたいだけど？」

「平気平気、すぐに帰れると思うから。」

「そんなどうやって——うわっ!!」

不意に吹き荒れる疾風に、巻き起こる花嵐と砂埃。思わず目を閉じた藤丸の聴覚が捉えたのは、遠くに聞こえるバーサーカーの声。

「また会えたら……………いや、君とはまた必ず会えると思うよ。だって俺が……………いに行くもの。だから……………まで……………んじゃ駄目だよ……………だってマスター君は、俺が……………すんだから。」

風音に掻き消され、所々が聞こえない。

徐々に強くなる風に何とか踏ん張りながら、うつすらと開いた藤丸が意識を失う前に見たのは、背筋が寒くなる程に綺麗なバーサーカーの笑顔であった。

* * * * *

「マ〜……ス〜……タあああつ！」

意識が覚醒したと同時に、バツチインツ!!と乾いた音に続いて凄まじい衝撃が左の頬を襲う。

「ふべらつ!!」と驚愕と激痛に声を上げた藤丸の首が、ゴキリと嫌な音を立てた。

「マスター……? マスター! ああよかった、気がついたんだね!」

泣き出しそうな声の主を確認するため、強引に首を動かして向きを戻す。ごきごきと何度も鳴らしながら漸く正面を向くと、そこには涙目になったアストルフオを始め、座り込んだ自分を囲むようにして皆が集まっていた。

「あ、あれ……? ここつて…… バーサーカーは?」

「はいヨ、バーサーカーの神楽ちゃんアル。」

「あくいやいや、神楽ちゃんはバーサーカーだけど、違くて別の……あれえ?」

額に手を当て、必死に思い出そうと脳みそをフル回転させようとする藤丸。しかしそんな時、不意にふわりと温かな感覚が彼を包み込んだ。

「藤丸君……よかつたあ、本当に……!」

温もりと優しい匂いに満ち溢れた、松陽の腕の中。混乱しかけていた藤丸の頭は少しずつ落ち着きを取り戻していき、深呼吸の後にゆっくりと辺りを見渡せば、左右の目は覚えのある景色をしつかりと映し出していた。

「つたく、心配させやがってよお……………なあ藤丸、お前一体何処行つてたんだ？」
「フオウ、フオウ！」

「何処つて……………銀さん達こそ、途中でいなくなつたじゃないか。」

ぶーと頬を膨らせる藤丸に対し、銀時は二の句が継げないといった様子で目を睜^{みは}り、そして大きく溜息を零す。

「何言つてんだ、いきなり姿消したのはお前のほうだろ。つたく、小一時間もかけて探し回つたら、こんなところで居眠りしてやがるなんてよ。」

「まあまあ銀さん、藤丸君も無事見つかったことですし、いいじゃないですか。」

「そーよ、結果オーライアル！」
「わんつ！」

新八と神楽に宥^{なだ}められる銀時の発した言葉に、藤丸は目を丸くする。松陽が離れてから、まだぼやける頭を動かして皆の顔を確認していくと、エリザベートとその隣にいる桂（髪がまだややしっとりとしている）と目が合う。

「エリちゃん、桂さん……………銀さんが今言つたこと、本当？」

「ええ、そうよ。私達全員があゝの悪魔みたいなお城に目を取られてたほんの一瞬の間に、仔犬アシタは姿を消したの………というか、消えた本人が覚えてないってどういうこと？」

「ふむ………まるで神隠しのようだな。藤丸君、今俺達と会う前に何かあったか、僅かでも覚えていることは無いか？」

「覚えてることって………あつ。」

心当たりを一つ思い出し、藤丸はポケットの中を漁り出した。お菓子の殻やら鼻をかんだちり紙やらを避け、漸く見つけた目標………んまい棒を掴み、引き摺り出す。

「(………やつぱり、一本しかない。)」

コンボタージュ 昆捕駄呪のみとなつた駄菓子に目を落とす、先程の出来事は夢ではなかったことを藤丸は確信する。無言のまま押し黙ってしまった藤丸に皆が困惑する中、「ねえっ」と声を発したのはアストルフオであった。

「マスター、やつぱりこのお城変だよ。さつき皆で君を探してた時、僕はパチ君と神楽ちゃんを乗せて、ヒポグリフからお城の全容を見下ろしたんだ。そしたら………」

焦りからか、何度も吃どもつてしまうアストルフオ。やがて大きく深呼吸をし、新八と神楽と目を合わせた後、気を取り直して藤丸へと向き直った。

「僕達はしつかりとこの目で見ただ………ここには、このお城には、門が一つも存在しないんだよ。」

「門が無い、だと………馬鹿な！ではこの城に居る者達は、どのようにして出入りを行っているというのだ！」

声を荒げて驚愕する桂とは対照的に、銀時は顔色一つ変えることは無い。鼻の穴に小指を突っ込んだままの彼を尻目にし、アストルフオは尚も続ける。

「それとさ、もしかしてマスターはお城の中にいるんじゃないかと思って、ヒポグリフと一緒に扉の向こうに飛び込んだんだ。けど………二人とも、あの時のこと覚えてるよね？」

「おうヨ！ばっちりアル！」

「僕もしっかり覚えてるよ………でも、どうしてあんなコトに………？」

「何だよおめえら、勿体つけてねえで早く教えろって。」

やや苛立ちを見せながら銀時が言うと、三人はそれぞれ互いに顔を揃えた後に頷き合いい、代表として再びアストルフオが口を開いた。

「僕達はあの時、確かに城壁を越えて中に入り込んだ。降下していく景色も、風を切った感覚も、間違いなく覚えてる………でも、地面に着地する感覚は得られなかった。何度同じように試みても、僕達が顔を上げた時に広がってたのは、突入する数秒前と同じ景色だったんだから………」

「えっと、つまりそれってこういう事？アンタ達は確実に城内への侵入に成功した筈な

のに、気が付いた時にはいつの間にか外に放り出されてた、って言いたいのかしら……？」

エリザベートが要約すると、三人は揃って大きく頷く。それらの話に耳を凝らしていた桂は、一つの推測を挙げた。

「ふむ……やはりこの城には、結界の類たぐいが施されているようだな。恐らく城門が存在しないのも、侵入者を拒むためのものだろう。」

「んなどうしようも無エこと並べたつて仕方ねーだろ、ツラ君よお〜どうにかなんねえのコレ？こういう時のためのキャスターじゃねえの？」

「ツラじゃない桂だつ！何度も同じことを言わせるな、本来の俺は魔術師などではないのだぞ！そんな無茶振りを言われても、俺とて手の施しようが——」

今まさに言い合いを繰り返している銀時と桂。二人を止めようとする藤丸達に、自分も加わらねばと狼狽うろたえる松陽。彼らの元へと一步を踏み出した、その時だった。

「——つ——ッ！」

突として、全身を貫くように駆け巡る、凄まじい程の悪寒。

「……………え？」

震えが、止まない。続いて痛いと感じる程に降り注ぐ、何者かの視線。それが何処からのものかを探せば、顔の向く方角は自然と上へと昇っていく。

やがて松陽が見上げた先には……………桜の木々の向こう、聳え立つ禍々しい天守閣の、とある一角。

最上階に当たる天守の廻縁まわりえんに、『それ』はいた。

「……………っ
!!」

地上からの距離では、肉眼での認識など不可能に等しい。
だが、松陽には分かってしまった……………闇黒の中にぎらつく二つの赤い眼が、今こちらを見下ろしているのを。

「……………あ……………!!」

声が出ない。水を失い酸素を求める魚のように、ただ口はぱくぱくと動くだけ。

戦慄し動けないでいる松陽へと、『それ』はゆっくりと焦点を合わせていく。

恐怖に染まった琥珀と、狂気を孕んだ緋色が重なったその時——

『鬼』^{それ}は、嗤った。

どさっ、

質量を持ったものが地面へと倒れる音に反応し、喧騒は一時中断する。

音の方へと集中した意識がその正体を捉えた刹那、驚愕するよりも早く銀時が駆け出

し、叫んだ。

「松陽っ!!」

銀時の声に皆もハッと我に返り、彼に続いて倒れた松陽の元へと向かう。

地に伏した松陽に触れた時、銀時は愕然とする……冷たい。着物越しでも異常な体温と分かるほどに、松陽の身体はまるで氷のように冷たくなっていた。

「フオツ!! フオウフオウツ!」

「松陽、松陽!! どうしたアルか!! 松陽っ!!」

フオウと神楽がいくら呼びかけても、松陽はそれに応えない。身体はこれだけ冷えきっているにも関わらず、苦悶の表情で荒く呼吸を繰り返す彼の額からは、おびただ夥しい汗が吹き出ている。

「やだ……ちよつと、どうしちやつたのよ!!」

「松陽さんっ、ねえ起きてよ!! 松陽さん!!」

「わんっ! わんわんっ!」

誰もが松陽の名を呼び、身を案じるそんな中、ふと藤丸はその中に桂の声が無いことに気が付く。見れば、彼は強張った表情で松陽——正しくは、羽織の崩れかかっ

た松陽の背中を凝視している。限界まで見開かれた目が見つめる先を認識した時、藤丸は驚愕する。

「銀さん……………背中、松陽さんの……………!!」

震える声で紡いだ藤丸の言葉に、銀時は直ぐ様松陽の背中を確認する。

そこにあつたものを眼まなこに映した時、銀時……………否、彼だけでない。松陽を除いた誰もが、目を疑った。

「な、んだよ……………これ……………!!」

絞り出すようにして、銀時は呟く……………彼に抱かれた松陽の背中が、淡く光を放つていたのだ。

どこかで見た覚えのあるその光は厚い生地を突き抜け、暗闇の中で仄かに輝いている。しかしそれが示す形を目にした時、皆一瞬だけ言葉を失った。

「こ……………これって、桂さん達が見たって言ったあの……………!!」

震駭しんがいする新八に続き、あまりのことに銀時も叫び出したかった——
 背そこ中ちゆうにあつたのは、一昨日の夜に桂が筆で示したままの、鬼を模したような刻印。

隣を見れば、アストルフオもまた驚きを隠せないでいる。そう、彼だって松陽の背中

には何も無かったのをしつかりと目視し、それを昨夜皆の前で話したばかりであった。

にも関わらず、何故、どうしてこのタイムミングで………何一つ理解出来ない現状に誰もが酷く混乱していたその時、松陽が苦し気に小さく唸った。

「つ………とにかく、このままボサツとしてるわけにもいかねえだろ！早くババアんとこ戻るぞ!!」

松陽を抱きかかえ銀時が立ち上がると、皆も一齐に我に返り行動を取る。誰もがこの場所は危険だと察知し、元来た方角へと駆け出した。

「う………つ………」

身を震わせ、腕の中で喘ぎ続ける松陽の姿に、銀時は歯を食いしばる。一刻も早く身を休ませてやりたいところではあるが、自分達が先程の地点に辿り着くまでに所要した時間は約一いっしょくじ時程。徒歩であったとはいえ、お登勢達のいるスナックまでは余程の距離もある。

そんな銀時の焦燥を察してか、彼のすぐ横を走っていた新八が張り上げた声で言ってきた。

「銀さん、お登勢さんの所よりも近い場所、僕知ってます!」

「……………本当か、新八!!」

「もうこうなったら、四の五の言ってる場合じゃありません!行きましよう!」

眼鏡越しの奥に灯る力強い瞳に、銀時は頷く。それを確認した新八は先頭へ躍り出ると、「こつちです！」と皆を先導する役を買って出た。

「……………あーあ、連中行つちまうぞ。本当にいいのか？」

桜の木の上から小さくなつていく背中を気怠げに見送り、ランサーは大きく欠伸をする。彼のすぐ傍らにある太い枝に腰掛けているのは、あのバーサーカーの青年であつた。

「いいんだよ、別に急ぐことでもないんだし。」

「さいですかい……………にしても『団長』、アンター一体何がしてエんだ？折角例のマスターの小僧を連中と引き剥がして城に入れたつてのに、殺すどころか助けた上に送り届けちまうなんてよ。」

「ふふつ……………あのね、あ……………ランサー、実は俺面白い事を考えたんだ。」

「へいへい、俺にとつちや面倒事ではない団長サマのご提案、是非ともお聞かせ願おうか。」

「そつかくそんなに知りたいなら教えてあげるよ……………あのマスター君の事なんてどき。」

「ああハイハイ、何でしょうね？」

「暫くは殺さないで、様子を見守ろうと思ってるんだ。」

「へーそう……………はああアアアアアッ!!」

あまりに唐突な発言に、酷く驚愕するランサー。その拍子にバランスを崩し、愉快的な動きで体勢を戻そうとする彼を、バーサーカーは助けるどころか腹を抱えて笑つていた。

「あつはは！何今の動き、面白かったからもう一回やつて？」

「誰がやるかってんだ!!つーか何頓珍漢なこと言い出すんだよこのすつとこどつこい!

23話で俺らが『お上』^{かみ}に命令されたこと忘れたのか!!ええ!!」

「失礼だなあ、ちゃんと覚えてるに決まつてるだろ。あ…………ランサーと違ってそこまで脳の細胞は老化してないよ。」

「サーヴァントに老化も何も関係無エだろ。あとさつきからちよくちよく真名バラしちゃうになるのやめてくんない? 勘の良いヤツは既に気付いちやいるだろうが、まだ本編^{こっち}じゃ伏せてることになつてんだからさ。」

愚痴を零すあ…………じゃなかつたゴメン。ランサーを尻目にし、バーサーカーは再び視

「また会えたら……いや、君とはまた必ず会えると思うよ。だって俺が君に会いに行くもの。だからそれまで、絶対に死んじや駄目だよ……だってマスター君は、俺が殺すんだから。」

《続く》

【七】 暗雲（I）

——ごぼ、ごぼり。

微かに聞こえてくる、液体の泡立つ音。そして鼻をつく不快な臭気に、ぼやけた意識は徐々に覚醒していく。

吸い込んでしまった瘴しやうき気に噎むせながら辺りを見回すと、『』は今自分が置かれている状況を理解し、愕然とする。

眼下に広がるのは、一面の黒い水面みなも………否、これは断じて水などではない。重い質量を保った得体の知れない液体が広がっているその中空うらで、『』は狭い檻おりの中に閉じ込められていたのだ。

人型を模した、冷たい鉄製の籠かご。中世期の西洋において拷問器具として使用されていたものに酷似したその中では、身動き一つ取ることが出来ない。液体から昇る瘴気に

何度も咳き込んでいた時、ふと視界の中で何か動いたのに気が付く。

……人だ。それも一人や二人ではない。朱殷しゆあんを更に濁らせ腐敗させたような水……否、これは最早泥と呼ぶほうが相応しい。そんな汚泥おでいの中を、何十という数の人の形をしたものが漂ただよっていたのだ。

人の形をしたもの、という表しなのは、彼らが既に生者でないことが明確であるからだ。躰からだの半分以上がどろどろに溶けきっている者、眼球だけが落ち窪くぼんだ者、頭部を喪失している者など、それらが無氣力に浮遊している酸鼻を極めた悍おぞましい光景を直視出来ず、『』は込み上げる吐き気を必死に堪こらえながら目を逸らした。

「ああ何だ、起きたのか……そのまま眠っていたほうがよかったものを。」

粘度を含んだ水音と、自身の咳以外に耳に飛び込んできたその声に、『』は咄嗟おもてに面を上げる。

それが発せられた位置を探すため、忙せわしく見回す『』の首が漸く動きを止めたのは、遙か下方——濁った泥に満たされた巨大な器のすぐ傍たたずに佇たむ、二人の姿を発見した時であった。

目元までを覆った黒い鳥からすの面を被った、白と黒の袈裟けさを纏まとった不気味な男は、直立のまま微塵も身体を揺らすことなく此方こちらを凝視している……しかし、『おのが慄くその対象は、彼の隣に立つもう一人の男の方にあつた。

烏面の男とは対称に、暗い室内でも映える煌びやがな着物。上着のように羽織ったその黒橡くろつるぼみの生地には、袂たもとと裾すそのそれぞれに紅白の曼珠沙華まんじゆしゃげが描かれている。顔が隠れるほどの大きな盃さかずきの中身が汲み乾ほされた間合いで、下ろされた盃さかずきの向こうから男の顔面が露あらわになった。

死人しびとを連想させるかのような、白い肌。

雪華の如く純白の、癖のある頭髮の間から鋭く伸びる、二本の紅色の角つの。

そして………

——ひゅつ、

開いたままの口から、間拔けな音と共に空気が細く漏れ出る。

まるで蛇に睨まれた蛙のように、全身が竦み上がり動けない。今すぐにも座り込みたかったが、縛める狭い檻によってそれは叶わぬ望みとなった。

畏縮し硬直したままでいる『』を一瞥し、白髪の男……『鬼』は盃を徐に泥へと近づけ、空の器にそれを掬い取る。

緩やかに傾けた盃の端から、ぼたぼたと零れ落ちる赤黒い泥。飛沫も上げずに澱んだ水面へと消えていく様を眺め、鬼は微笑んだ。

「……よし、いい塩梅だ。」

満足げに呟いた後、鬼は傍らに立つ烏面の男へと目配せをする。男は返答もせず、頷きもせず、ただ合図に従い行動を開始する。

じやら、と擦れ合う金属音を立て、彼が手にしたのは鈍色の鎖。長く伸びたそれが何処へと繋がっているのかを確かめようと、『』は唯一自由の利く己の目を動かして、鎖の道筋を辿っていく。

やがてその鎖の最終地点が、自身の囚われているこの檻のすぐ上に存在していることが分かったと同時に、『』は彼らがこれから何を行おうとしているのかを悟り、心底から震え上がった。

「嫌だ、止めてくれ」

そう叫ぼうと口を大きく開けたのと、烏面の男が鎖を強く引いたのは、ほぼ同時。支えを失った鉄の籠は、重力に忠実に従い垂直に落下していく。悲鳴を上げる間も与えられず、『』は檻ごと汚泥の表面に激しく叩きつけられた。

格子の間から、生温かい泥が容赦なく入り込んでくる。水面から頭が出ることから、深さはそれほど存在するわけではなさそうだ。しかし、動けないのと不快であることに変わりはない。

やめてくれ、助けてくれ。悲痛な声で叫ぶ『』と、妖しく微笑んだままこちらを見つめる鬼との間に、ぬつと何かが割り込んでくる。

それが手だと理解した刹那——『』は絶叫した。

先程上から見下ろしていた、あの『人の形をしたもの』達………物言わぬ骸むくろであるはずの者達が、一斉にこちらへと集まってきたのだ。

何本もの腕が、檻を掴み揺らす。彼らの行動の意味を理解した『』は、必死に声を張り上げ訴えた。

やめろ、やめろ。どうかやめてくれ。助けて。頼む。嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ!!

ごぼり、とうとう泥は『』の口の中にまで侵入してくる。徐々に傾きが大きくなり、鼻から、耳から、全身のあらゆる穴から染み込んでいく泥。

瞼を閉じてはいないのに、視界が徐々に暗くなっていく。いや違う、闇に飲まれようとしているのは自分の意識だ。

もう既に、あちこちの自由が利かない。鉛のように重くなった自身の体は、指一本すらも動かせない状態にまで陥っていた。

亡者達の手により、檻はもう完全に没する手前にある。狭まる視界が最後に映したのは、無機質に傍観する烏面の男。そして盃の向こうから覗かせた、白髪の鬼の——
あまりに綺麗で恐ろしい、愉悦の笑み。

—— 誰か、誰か助けてくれ

どうか

どウか………

『』は………自分いしきを、手放した。
自分が自分でなくなる感覚に怯え、ここにはいない『何者だれか』に救いを乞いながら、

再び訪れる静寂。鬼は残った最後の果実酒を喉に流し、空からになった瓶を放り投げる。陶器の派手に割れる音が後方で響き、思わず片目を瞑つむる鬼。烏面の男はとうとうと、相も変わらず微動だにしていな様子。そんな彼を一瞥してから、また汚泥へと向き直つた鬼が、暫くしてから口を開いた。

「……………ん、そろそろだな。」

牙の並ぶ口許が弧を描いたのと同時に、器の中の泥に異変が起き始める……………静かだった水面が徐々に揺らめき、やがて泥は勢しぜんいを伴ともなつて、ある箇所へと引き寄せられていく。

その中心に存在するのは、既に頭頂部の金具しか露出していない例の檻。ガタガタと激しく揺れ動くそこへと向かい、泥は浸かった骸ごと渦を巻いて集中し、吸い込まれていった。

泥の嵩かさが半分になり、膝下ほどになり、やがて完全に干上がったその時、檻に変化が表れる。中に入っていた真つ黒なモノが膨張を開始し、盛り上がつていく塊かたまりが内側から格子を押し上げていった刹那、派手な音と共に檻が碎け散る。

咄嗟に鬼の前へと躍おどり出る、烏面の男。利き手に展開した錫杖しゃくじょうを巧たくみに使い、破片を

弾き返していく。やがて危険を除いたことを確認すると、烏面の男は無言のまま数歩下がりが、また佇立^{ちよりつ}の姿勢へと戻った。

束縛を破り、解放された黒い塊はその場から移動することなく、ぐねぐねと揺れ動き続けている。やがてそれが少しずつ治まりつつあるのと同時に、塊の大きさも徐々に収縮していく。

球状だったそれが楕円へと変化し、そこから突き出るように生える四本の細いモノ。それらが人間の手と足の形に変形していくと同時に、頭となる丸い部位までもが現れる。徐々に『人』を形作っていくその物体を、鬼は嬉々とした表情^{かお}で眺め続けていた。

『お、才、お……………あアあアアアアアアアアツ!!』

一帯の空気を震わせる咆哮が、空間内に響き渡る。

男とも女とも、まして獣ともつかない声で吠える、『人の形をしたモノ』。

深淵の闇を連想させるほどにどす黒い^{からだ}軀に刻まれた、『鬼を模した刻印』が、薄暗さの中で強く光を放っていた。

「……………よしよし、流石は吾^{われ}だな。上手くいった。」

異形の轟きに聞き惚れながら、鬼は眩き一人ほくそ笑む。

細めた両の眼が、幽暗の中で妖しく深緋の色を覗かせていた。

* * * * *

「はい、つて…………？」

目の前に建つ古びた木製の門を前にして、藤丸は目を白黒させる。

年季の入った門の隣に並ぶ、これまた古い看板には大きく『恒道館道場』と記されていた。

「ちよつと眼鏡ワンコ、アンタに言われるままについては来たけど、何なのよココ？」

「あ、エリちゃん達にはまだ話してなかったんだっけ……………実は僕の家、道場をやつてる

んだ。」

「つてことは、ここつてパチ君ち家なの？すつごーい！何だか門だけでも立派だね！」
 ぴよんぴよんと跳ね、はしやぐアストルフオ。そんな楽し気な彼とは裏腹に、銀時の面持ちは強張つたまま。

腕に抱えた松陽の様子は、先程よりは幾分か落ち着いている。しかし、呼吸が規則正しいものに変わつたのみで、血色の好くない顔色は相変わらずである。

「銀時……先生の様子はどうか？」

「ああ、さつきよりは大分マシになったとは思ふ。」

「そのようだな。だがまだ油断は出来ない、早く先生を横にさせてやらねば……。」

そこまで紡ぐと、桂は口を閉ざしてしまふ。眉間に皺を寄せる彼が今考えていること、それは恐らく目の前にいる銀時の頭の中でも、同じ疑問が存在しているに違いないだろう。

「なあツラ、さつき見た松陽の背中の中——」

「銀時、その話は高杉達が戻つてからでも構わんだろう。今は何より、先生を休ませることを先決させなければならん。それと、ツラじゃない桂だ。」

「あ、ああ………そうだな。」

桂の鋭い正論に、銀時はやや阻喪そそうする。先程見た不可解な光景への疑念と、松陽を心

配する想いとがせめぎ合い、大きく溜息を吐いたその時、神楽が近くへとやってきた。
「おう神楽、どうした？」

銀時がそう声をかけるも、返答は無い。ただ泣き出しそうな顔で彼の腕の中の松陽を見つめ続け、やがてぼつりと呟いた。

「……………銀ちゃん。私、また守れなかったヨ。」

松陽の羽織の裾を握りしめる手と同様に、その声も震えている。瞠目する銀時を始め皆の意識を小さな身体に受け、神楽は尚も続ける。

「あんなに、あんなに守ってやるって言ったのに……………さっき松陽が倒れた時、怖くて何にも出来なかつた……………今だって、こうして苦しそうにしてるっていうのに……………私、結局は松陽のために、まだ何にもしてあげられてないアル！」

「……………神楽。」

不意に上げられた面おもてには、幾筋もの雫が流れ落ちている。二つの瞳いっぱい涙を溜めた神楽は、何度もしゃくり上げながら銀時に尋ねた。

「銀ちゃんあんな……………松陽、このまま死んじやつたらどうしよう……………う、うええ……………つ！！」

止めどなく溢れる涙が頬を伝い、彼女の朱い服あかに染みを作っていく。定春にしがみつき、泣きじやくる神楽を前にした銀時の脳裏に、突として甦る過去の記憶。

『……銀時、あとの事は頼みましたよ』

学び舎を包む焔が、後ろ手に縛られたその背中を照らす。

左右に並ぶ見知らぬ男達によつて、今まさに吉田松陽は連れていかれようとしている。

『私はきつとスグに みんなの元へ戻りますから』

自身を拘束する縄が解けない、邪魔な連中を退けられない……。

力の無い子供である今の自分を、これほどまでに厭わしいと思つたことはなかった。

『だから……それまで仲間を みんなを 護つてあげてくださいね』

嫌だ、嫌だ、行かないで先生。

お願いだ。俺達からその人を奪わないで、その人を連れていかないで。

『約束……ですよ』

振り向いた面に浮かべられた、いつもと変わらぬ松陽おんしの微笑み。

しかし、どこか寂し気な情調を感じるのは、今しがた交わされた契りがこの先叶わぬものとなるのを、まるで暗示しているかのようだった。

遠ざかっていく師の背中に向かって、腹の底から叫び続ける。
喪うしないたくないんだ、傍にいてほしいんだ。

行かないで、行かないで、行かないでっ——先生!!

「………さん、銀さんってば!」

「フオーウ、フオーウ!」

呼びかける藤丸とフオーウの声に、銀時は我に返る。怪訝な顔でこちらを見る藤丸の後ろでは、咽むせび泣く神楽をエリザベートがハンカチで顔を拭ってやりながら宥なだめていた。

「銀ちゃん、本当に大丈夫？ さっきから顔、凄く怖いよ……う？」

銀時の顔を覗き込み、アストルフォが眉を顰めて言う。見れば、神楽とエリザベートを除いた皆の視線は、いつの間にか自分へと集中しているではないか。決まりの悪くなった銀時は彼らから視線を逸らし、「……悪い」と小さく謝った。

「大丈夫ですよ銀さん、それに神楽ちゃんも。きつと休めばまた元気になつてくれますって！ さ、早く中に入りましょっ！」

明るい調子で言いながら、新八は門に手を掛ける。しかし木の壁に触れたその手が僅かに震えているのを、銀時は見逃さなかつた。

『もし姉上まで僕の事を覚えてないなんて言い出したりしたら、なんて考えただけで怖くて……』

一昨夜に零した彼の心の内を、今でもしつかりと覚えている。一見気丈に振る舞っているが、それもきつと自身の不安を打ち消すために無理をしたことだろう。

「新八、お前………本当に大丈夫なのか？」

銀時が尋ねると、こちらに背を向けている新八の肩が僅かに跳ね上がる。暫しの沈黙が流れた後、新八はゆっくりとこちらを向いた。

「大丈夫……じゃあないですね。正直、不安で胸が張り裂けそうなんです。でもさつきも言ったでしょ？ 四の五の言ってる場合じゃないって……それに今は怖いって気持ちより、こんな状態の松陽さんを早く介抱しなきゃって思いのほうに断然強いんですよ。」

「パチ君……。」

眉の端を下げ、心配そうにこちらを見つめるアストルフオに対し、新八は笑みを浮かべ強く頷き返す。そうすることで、自身の中にわだかま蟠る不安や懸念をも打ち消せるような気がしたからだ。

「神楽ちゃんも、そんな顔しないで。もうすぐ松陽さんを休ませてあげられるから、ねっ？」

「ぐすっ……うん。」

鼻をすす吸り、エリザベートから借りたハンカチで顔を拭きながら神楽は頷く。そんな彼女を見届けてから、新八は門へと向き直ると、目を閉じて深呼吸をする。数回繰り返した後、のち腹を据えた新八は目を開き、門へと手を掛けた。

「せーのっ————ただいまアアッ！」

思いつきり力を込め、やたらと威勢のいい帰宅の声と共に、木製の門は勢いよく開かれる。

中へ入ろうと一步を踏み出すべく、新八が片足を上げたその時だった。

「きゃっ!!……もう、びつくりしたわあ。」

凜とした声、それと同時に門の向こうから現れたのは、一人の女性。

艶やかな黒髪を高い位置で結わえ、丸く見開いた目でこちらを見つめるその女性を前にするや否や、新八の顔はF1レーサーも仰天するほどの速度で真っ青になった。

「あ、ああああねああね……!!」

彼の中から姿を消した筈の不安と懸念は、実は足にしつかりとゴム製の命綱を装着していたようで、数秒間のバンジージャンプを経た後に宙で華麗なUターンを決め、そのまま新八の中へと戻ってきてしまったようだ。

四の五の云々言っていたあの頼もしさは何処へやら、ダラダラと滝のように冷や汗を流し硬直する新八を皆が啞然として眺めていた時、女性が徐おもむろに口を開いた。

「あら……っ。」

「ひゃっ、ひゃい!!」

極度の緊張に声が裏返ってしまう新八。張り詰めた空気からそれは伝染してくるよう、藤丸達も思わず固唾を呑み込む。

女性はきよとんとした様子で瞬まばたきを数回繰り返す。直後、彼女は朗らかな笑顔を浮かべてこう言った。

「おかえりなさい、新ちゃん！」

「……………へ？」

思わず漏れ出た、素とんきようつ頓狂な声。新八も、銀時達も、何故か事情を知らない藤丸達カ
ルデア面々までも、揃そろって目が黒胡麻のような点になる。

「あ、あの……………姉上？」

おずおずと、新八が緊張を崩さないまま口を開く。どうやらこの女性が先日より会話
の中で度々登場していた彼の姉なのかと、藤丸は確信した。

「思ってたより早く帰ってきたのね。これからお夕飯の買い物にいくところだったんだ
けど、新ちゃんもお荷物持つの手伝って……………新ちゃん？」

反応の返ってこない新八を、女性は不思議に思う。すると佇立していた新八の体がわ
なわなと震え、今度は涙が滝のように溢れ出した。

「あ……………姉上エエエエツ！！」

人目など憚はばらず、女性へと飛び込んでいく新八。実の姉に忘れられていなかったとい
う安心から緊張の糸が切れたようで、彼を受け止めた姉に背中を優しくぽんぽんされな
がら、新八は声を上げて泣きじやくっていた。

「もう、新ちゃんたら……とところで、貴方がたは？」

新八から対象を銀時達へと移し、女性は首を傾げる。その顔は、こちらの世界に来たばかりに出会ったお登勢達と同じ……初めて目にする、『余所者』よそを前にした時のもの。

「あ、姉御……私神楽アルよ!! こつちの白いモジヤモジヤは銀ちゃんアル! 忘れちゃったの……!!」

「あら可愛い子、神楽ちゃんっていうのね。私は新ちゃん……志村新八の姉の妙たえよ。お妙って呼んでくださいな。」

穏やかな笑みを湛え、女性……お妙はにこやかに挨拶をする。まるで初対面であるかのような彼女の態度に、神楽も銀時も動揺を隠せない。

「……………やはり、彼女もか。」

桂が重苦しい声で、静かにそう呟く。

今日の前にいるお妙はお登勢達とは違い、実弟である新八のことはしつかりと覚えていた。だが彼女の記憶の中には、自分はおるか神楽の存在すら無い……受け止め難い事実、銀時の眉間に皺が自然に寄っていった時だった。

「う、んん……………っ。」

腕の中の松陽が、小さく唸り身を振る。

我に返った銀時が目を落とすと、松陽の額に少しだけ汗が滲んでいるのが確認出来る。未だ温度の低い身体を抱え直し、銀時は新八へと視線を移す。

緋色の瞳が訴えるものを即座に察した新八は、袖で乱暴に顔を拭ってから、直ぐ様お妙と顔を合わせた。

「姉上っ！事情は後でお話しますから、部屋と布団を貸してください！」

「え？ちよ、どうしたの新ちゃん？」

「松陽さん……えっと、銀さ……僕の知り合いの方が急に倒れてしまって、それで——」

弟の必死の剣幕に吃驚しながらも、お妙は状況を確認しようとして彼が全て言い終える前に顔を上げる。そして銀時の腕に抱かれた松陽の姿を目撃したと同時に、彼女は表情を一変させた。

「……分かったわ、皆家うちに上がって。新ちゃんはお布団出すのを手伝ってちょうだい。」
踵かかとを返し、力強い言葉で皆を玄関へと促すお妙の姿に、新八の目頭はまたも熱を孕み始める。しかしまた泣いていては姉に怒られてしまうため、再度目を袖で擦ってから、後方の銀時達へと目配せする。

張り詰めていた面々の顔は安堵から徐々に緩み、共に顔を合わせた藤丸と銀時も、互いに笑みを浮かべた。

* * * * *

「うんしょ、つと……。」

絞ったタオルから零れた水が、桶へと垂直に落ちていく。程よい湿り気であることを確認し、藤丸は布団の脇に座る桂にそれを手渡した。

「はいツラさん、どうぞ。」

「かたじけない、それとツラじゃない桂だ。」

藤丸から受け取ったタオルを利き手に持ち替え、桂は布団側へと向き直る。強い布団の上では、先程銀時と協力して寝間着に着替えさせた松陽が、すやすやと寝息を立てていた。

桂がタオルで額の汗を拭うと、松陽は冷たさに一瞬だけ眉を顰めたものの、優しい手付きに心地良さを覚えたようで、またすぐに穏やかな表情へと変わっていった。

「ツラさん、松陽さんの具合どう?」

「ああ、先程より顔色も大分良い。今はとりあえずこのまま寝かせておこう。それからツラじゃない桂だ。」

「よかったあ……………それじゃ、暫くは安静にしておかないと。俺達も銀さんのところに戻ろつか、ヅラさん。」

「ヅラじゃないってば桂だつてば!! 藤丸君つ俺は何か君を怒らせるようなことをしたのか!!」

「えーだつてホラ、台本にもそうやって書いてるんだし、仕方ないよ〜かつ……………ヅラさん。」

「今の言い直さなくてよかつたよ!! 桂さんと合ってるから! 最近何だか君も銀時のようになつてはきてないか?! ええ!!」

桂が声を張り上げたその時、突如彼の頭頂に衝撃が走る。頭を押さえ蹲うずくまる桂の背後に立つ人物を見上げると、ぽかんと開けた藤丸の口からその名が飛び出す。

「あ、銀さん。」

「痛つつく……………つたく、なに騒いでんだテメーら。静かに松陽休ませるつつつたる。」
「痛たたた……………痛いではないか銀時イ! 見ろコレたんこぶが出来てしまったではないか!!」

「うっせーよっ! オメエの石頭に拳骨落とした俺のが痛いわ! 見ろコレ拳に血が滲んじまったじゃねーかつ!!」

ぎゃいぎゃいと大の大人が言い争う光景を眺めていた藤丸であったが、ボキツと不意

に響いた音と共にその二人が膝から崩れ落ち、やがて床に倒れたその向こうで、開いたままの障子の辺りに立つ新たな人物を見上げ、その名を口にした。

「あ、神楽ちゃん。」

「藤丸、姉御がお茶煎れたから来いだってヨ。あとこの喧しい馬鹿共、一人運ぶの手伝うヨロシ。」

「うん、分かった……それじゃ松陽さん、ゆつくり休んでくださいね。」

天井から下がる紐を引くと、室内は暗闇に包み込まれる。音を立てないように障子を閉め、藤丸はぐったりしたままの銀時の両足を掴み、桂の襟首を掴んだ神楽と共に大人の引き摺った状態ですぐ隣の居間へと移動した。

「姉御く、皆連れてきたアル！」

神楽が障子を開けると、湯呑を並べるエリザベートと机を挟んで向かい合う位置にいるお妙が顔だけこちらを向き、急須からお茶を注ぎながらにつこりと微笑む。

「ありがとう神楽ちゃん、今お茶が入ったから皆で飲みましょ。今新ちゃん……えつと、アストルフオ君？だったかしら。その子達がお菓子も持ってきてくれるから、さあさあ座って。」

「お菓子!? キャットホイー！」

ドタドタと足音を立て、我先にと神楽が室内へ入っていく。続いて藤丸と、運搬途中

に意識を戻した銀時と桂が、脹脛ふくらみの青痣あざを摩りながら居間へと上がりこんだ。

座布団の上に座った藤丸の隣に銀時が腰掛けたと同時に、障子の向かい側の襖が開く。「おつ待たせ〜！」と相変わらず元気のいいアストルフォの後に、盆におかきやらル○ンドやらの小さな菓子に乗せた新八が居間へと入ってくる。アストルフォが襖を閉めたとの同時に、新八が菓子の入れられた器を机の上に置くと、光の速さで神楽が数個のバー○ロールを掴み取っていった。

「んもう仔兎つたら、意地が汚いわよ……………それで仔犬、松陽の具合はどうなの？」

「うん、大分落ち着いて今は寝てる……………ええと、お妙さん？」

「はい、お妙です。そう言えば貴方のお名前は何と仰るのかしら？」

「あつ、すみません。俺つてば名前も言わずに……………俺は藤丸、藤丸立香です。この度は色々とありがとうございます。本当に助かりました！」

深々と頭こぶを垂れる藤丸に、「あらあ…」とお妙は驚嘆する。

「そんなに恐縮しないで、藤丸君。人として当然の行いをしたただけのもの……………それで、そちらの方々は？」

お妙が何気なく尋ねると、湯呑を口元に運ぼうとした銀時の手が止まる。それから彼女の方を向いた銀時が一瞬だけ見せた寂しげな表情かおに、新八の胸がちくりと痛んだ。

「俺は……………坂田銀時だ。新八コイツとは色々と縁があつてな、まあ一つ宜よろしく頼むよ。」

新八の頭をわしわしと撫で、銀時は緩やかに微笑む。お妙は相も変わらず笑みを浮かべたまま、今度は桂へと対象を変更した。

「それじゃ、そちらのロン毛がうつとおしい方は？ 貴方も名前を教えてくださいな。」

「うむ、少し引つかかる物言いだが構わんか。俺は桂小太郎、決してツラとか可笑しな渾名あだなで呼ばないように頼む。」

「分かりました、よろしくお願いしますね。ツラさん。」

「ねえ聞いてた？ 俺の話聞いてた？」

額に青筋を浮かべるツ……桂から顔を逸らすと、お妙は皆の顔を改めてじっくりと観察し始める。

にここにこと崩れることのないその微笑が、どこかいつもより嬉々とした雰囲気まどを纏っているように感じられる。何やら嫌な予感がする……そう直感的に思いながら、銀時は怪訝な表情のまま温かい茶を啜った。

しかし直後、お妙の発した一言により、その口に含んだ茶が外へと吹き出されることになる。

「それにしても嬉しいわ、新ちゃんがこんなに『門下生』を勧誘してきてくれるなんて。これで道場は安泰ね♪」

「……へ？」

袋から出したル○ンドを口に入れようとしたまま、新八は思わぬ言葉に動きを止める。すかさず横から顔を突き出した神楽にそのル○ンドを食われても尚、新八は自身の耳を疑ったまま、おかきを頬張るお妙を呆然と眺めていた。

「あのう、姉上……すみません、僕さっきのアクシデントで記憶が飛んじやったみたいで、詳しい経緯いきざつを教えてくださいてもよろしいですか？」

「あら、ヤダわ新ちゃんつたら謙遜して。それとも勿体ぶっちゃつてるの？」

「いえ、本当に何が何だか……それに現時点でまた予定文字数オーバーしちやつてるんで、出来れば簡潔に。」

「しようがないわね、それじゃあざつくりと説明するわよ……先週辺りだったかしら？ほら、新ちゃん満喫に言った時よ。あの時は驚いたわ、銀魂一巻を片手に持つて唐突に言い出すんだもの。『人事を尽くして天命を待つ……姉上、僕は父上の遺したこの恒道館いしずえの礎を守る為に、今から門下生を募ってきます！』なんて鼻息荒くしちやつて。」

「何かどつかで見たとあるなその流れ!!アレか!!ビームサーベ流篇りゅうへんの冒頭で見たヤツだな!!」

「そうして新ちゃんたら興奮したまま、銀魂一卷とメロンソーダの残ったコップを持って満喫を飛び出してっちゃったんだもの。私や店員さんが呼び止めるのも聞かずにね。」

「何やってんだこつちの僕ウウツ!!ちよ、ち、違いますからね皆さん!そんな突拍子もないコトやり始めたのはこつちの世界にいた僕であつて……あれ?でも今は僕が志村新八であるから、姉上の言う通り門下生探しに出たのは僕……いやいやいや!!でもそんな記憶ありませんし、ああ〜エリちゃんそんな養豚場の豚を見るような目で僕を見ないでエエツ!!」

「とにかくこうして新ちゃんが門下生を集めてくれたんだもの。これから私も忙しくなるわく、頑張らなきゃ♪」

「姉上!!待つてくださいいっ僕の話を——」

「それじゃあ改めて……皆さん、ようこそ恒道館へ!見たところ性別も流派もバラバラだけど、きつと大丈夫。私と新ちゃんて皆さんを一人前の天堂無心流の剣士に育て上げていきますから。あつ、お部屋の心配はしなくていいからね?たつくさんあるから好きに使ってくださいな。それじゃあ私、お夕飯の買い物に行ってきますね。新ちゃん、私に戻ってくるまでの間に中の案内とか済ませておいてね。それじゃっ♪」

一通り喋り倒した後、お妙は立ち上がり居間を後にする。少しずつ遠くなっていく上

機嫌な鼻唄を聴きながら、新八は軋きんだ音を立てて首を動かす。お菓子に夢中になつて
いる神楽とアストルフオを除いて、じつとこちらを見つめる皆の眼は、まるでネットで
よく見かけるあの無気力なチベットスナギツネそのもの。肌で痛いと感じる程の視線
を受け、ただ硬直するしかない新八の横で、定春とフオウが揃つて大きな欠伸を搔いた。

《続く》

【七】 暗雲（Ⅱ）

「……………そう。ならアンタら、これからはその恒道館とやらに厄介になるのかい。別にこっちは構やしないよ。恩人とはいえ、いつまでも上を占拠されちゃあそろそろいい迷惑だと思つてたからさ……………まあでも、そういうことなら仕方ないね。ただし、明日にや上の片付けを済ましに来とくれよ。それと、松陽の具合はどうなんだい……………そう、そりやあ何よりだ。ちゃんと元気になつたら、また皆で顔見せに来なよ……………ああ、段蔵と色男にや伝えとく。それじゃあね。」

チンツ、と受話器を置く音が、賑やかな店内に紛れる。啜えた煙草に火を点け、肺を満たした紫煙をゆつくりと吐き出すと、カウンター席で酒を酌む一人の男……………高杉へと向く。

徳利とっくりの中に残つていた酒を全て猪口ちよこしへと注ぎ、一息に飲み干すや否や、「勘定頼む」と短く言つたのと同時に椅子から立ち上がった。

「おや、アンタも行くのかい？別に一人なら置いてやつても構わないけどね、家賃も安く

しとくよ?」

「ククツ……折角のお誘いだが、丁重に断らせてもらうぜ。持ち直したとは言うが松陽のことも気掛かりだ。今日はこのままお暇いとまさせてもらう。」

高杉が数枚の札さつをテーブルへ置いたのと同時に、奥の暖簾のれんからいつもの忍装束へと着替えた段蔵が、手に生菓子モンブランの入られた箱が収められた袋を持つて姿を現す。他の客達の前を通る度に、おひやりかしの口笛やら名残惜し気に別れの挨拶やらを受けながら、すたすたとこちらに歩いてくる彼女の際どい衣装を改めて見澄ましながら、着替える前のメイド服の方がまだ健全な恰好だったのでは……と心中で呟くも、決して口にはしない高杉なのであった。

「高杉殿、支度を整えました。」

「おう。それで、道案内は任せていいんだな?」

「ええ、今しがた新八殿の道場のある位置を地図で確認し、データを段蔵の中に読み込みましたので……それで皆様、段蔵はお先に失礼致します。本日は色々ご指導、ありがとうございます。」

深々と礼をする段蔵に、たまも同じようにして頭こぶしを垂れる。ふんぞり返るキャサリンの後頭部に一撃を食わしてから、お登勢は段蔵が面おもてを上げたのと同時に一封の封筒を差し出した。

「ほら、今日の働き分だ。アンタのお陰でいつもより多く稼げたからね、本当に助かったよ。」

「これは……いいえお登勢殿、段蔵はお手伝いとして働いたのみ、賃金を受け取るなど滅相も……。」

「オ？ ジャア要ラネーツテコトダナ？ ソンナラ私ガ貰ツテヤツテモ——」

お登勢の背後から身を乗り出し、給料の入った封筒を掠め取ろうとするキャサリン。しかしそんな彼女の伸ばされた腕は、更に横から突き出された第三者の手によりぐわしと乱暴に掴まれ、敢え無く阻止される。

「段蔵さん、労働にはそれに見合った対価というものが必ず存在します。ですので、貴女がこれを受け取ることはごく自然で当たり前のことなのです。お登勢様も私達も、そして本曰いらしてくださいったお客様方も、段蔵さんと楽しい時間を共用することが出来ました。なので、どうか受け取ってください。そしてもし貴女さえ宜しければ、またこうしてお店に入っていたたくことは可能でしょうか？」

「そくそく、また来てくれよ段蔵ちゃん！」

「俺達やすつかり君のファンだからな、またヘルプに入ってくれた日にや札束握りしめて駆け込んでくるぜエ！」

たまに続いて声を上げたのは、客席にいた他の男達。酔いで赤く染まった顔に満面の

笑みを浮かべる彼らの温かい言葉に、段蔵の胸の内はじんわりと熱を孕む。

「……………ありがとうございます、皆様。またこちらでお手伝いできる機会がございましたら、是非ともお声を掛けてくださいませ。」

骨が軋むほどの握力で手首を掴まれ、痛みに悶えるキャサリンのくぐもった悲鳴を遠巻きに聞きながら、段蔵はお登勢の手から封筒を受け取る。両の手で持ったそれを愛おし気に胸の前で抱く彼女を一瞥してから、高杉は踵きびすを返す。

「じゃあ行くとするか、ご馳走さん。」

礼を残し、出口へと向かっていく高杉の後ろを、段蔵が焦って追いかける。扉の引手に触れようとしたその時、不意に背後から声を掛けられた。

「おっと……………その御仁、本当に今から外に出られるのでござるか？」

高杉と、そして段蔵が振り返れば、一番奥のカウンター席に座っている一人の男が、深藍色のサングラス越しにこちらを見ていた。高麗納戸こうらいなんどの特徴あるコートを着込んだその男は傾けていたグラスを口から離し、高杉から視線を逸らすことなく話し続ける。

「まだ巷ちやまたではそれほど噂も広がってはおらぬが、近頃この界限かいわいにて『辻斬り』による故殺が多発しているようござる。そなたのような人目を惹く伊達男が、これ見よがしに美

女を伴って歩いていては、格好の標的となるのでは？」

男の置いたグラスの中で、ぶつかつた氷同士がカラン、と音を立てる。口許に緩やかな笑みを湛えるその男の物言いに多少の苛立ちを覚え、お登勢もキャサリンも怪訝な態度をとる。

「ちよつとアンタ、いきなり何なんだい？」

「ソウダゾコノヤロー！ 大体店来々時ツカラ妖シ過ギナンダヨテメーハ！ 何只ノモブキヤストノクセニ個性的ナパーソナルボディ固ヤガンダ！ グラサンニヘツドフォンニロングコート、オマケニ三味線ナンカ背負イヤガツテ、初登場ニシテ読ンデル側ニインパクト与エテ覚エテモラオウトカ考エテンジヤネーゾゴルアツ!!」

読むのも入力するのもかつたるい片仮名だらけの台詞から、男の出で立ち^いは他の客達と比べ、一風変わったものであることが伝わっていただけであらうか。青筋を浮かべたキャサリンの濃ゆい剣幕に迫られても尚、男は顔色一つ変えることはない。

「……………」

高杉は一言も発することなく、鋭い眼光を放つ右の深碧^{しんぺき}で男を睨^ねめ続ける。店内に重苦しい空気が流れ、お登勢の啞えた煙草から白い灰が落ちたその時、同じ間合いで高杉の失笑する声^{こゝろ}が漏れた。

「忠告をどうも、『見知らぬ』お待さんよお。だが俺も段蔵^{コイツ}もそこいらのならず者程度

なら、指一本で捻り殺せんだけ。てめえの言う『辻斬り』がどんなモンかは知らねえが、出会つちまつたんならその場で叩つ斬つてやらあ。」

嗤笑ししょうと共に前を向き、高杉は外へと歩を進める。今一度こちらに礼をしてから、段蔵も彼に続いて店を後にし、ぴしやりと引き戸を閉める音の後には暫しの沈黙が漂つた。

「……………なあ、アンタ一体——」

徐おもむろに男の方へと向いたお登勢だが、その男が耳に当てたヘッドフォンに手を当て、何やら真剣に聴いている姿が目に入り、思わずそこで言い止さしてしまふ。その数秒後、男もまた椅子から立ち上がり、現金を席へ置いたと同時に扉へと向かつて移動を開始した。

「ちよつ、お待ちよー！」

「ああ、釣りは要らぬでござる。」

「あつ、どうも——じゃねーって!! さつきから何なんだよ、アンタ……………まさかあいつらの事、何か知つてたりするのかい?」

「はて、何の事やら……………拙者は今日、『たまたま』この店に立ち寄つただけでござる。先の者共のことなど、とんと知らぬでござるな……………」

お登勢を始め、たまやキャサリン、そして他の客達までもが、その男に對し猜疑心さいぎしんを強める。こちらに集中する視線をもともせず、男は三味線かまを担いだ背中を向け、出口

へと足を踏み出していった。

男の手が引手に触れた時、ふと彼は何か思い出したように顔を上げ、こちらへと振り返る。仄かに笑みを浮かべたその表情に、お登勢達は全身に怖気おそげを感じた。

「ところで、先のあの包帯男……………名は何と？」

「アツ、エエト——」

「悪いが、見ず知らずの胡乱うろんなヤツに、大切なお客の個人情報流すわけにはいかないね……………さつさと消えな。」

口を開こうとするキャサリンを、お登勢は手で制する。男を睨む彼女の眼には、明らかな敵意が宿っていた。

「……………分かったでござる。ではこれにて失礼致す、中々良い店であつたぞ。」

後ろ手に閉められた店の扉。磨すりガラスの向こうに映る男の姿が完全に見えなくなるまで、お登勢達はいつまでもその箇所を睨み続けていた。

* * * * *

異形の月が照らす明かりの下、繁華街を外れ人ひと気けの無くなつた道を、言葉数も少なく

歩く二つの影。

灯り代わりの蝶を数匹待らせ、煙管を啜え月を見上げながら、高杉は紫煙と共に吐き出した。

「つたく、月があんなじゃなけりやあ、逢瀬おうせにやびつたりの夜だつたんだがな。」

「逢瀬……？それは高杉殿と、どなたのものですか？」

「あ……いや、いい。忘れろ。」

ほんの軽い戯れを生真面目に捉えられてしまい、話題をはぐらかそうとした時、冷たく吹いた風が二人の間を通り抜ける。

初夏とはいえ、まだ夜はやや肌寒い。「はつくちゅん！」と段蔵がくしゃみをし、その反動で鼻の穴から黒い液体のようなものが飛び出した。

「おいおい、絡繰からくりも風邪なんか引くモンなのかい？」

「いえ、これは先程お店で頂いたオイルが逆流して鼻から、つくしゅあい!!」

「ちよつ、掛かんだろ……つたくホラ、これでも上に着ろ。」

高杉は自らの羽織を脱ぐと、段蔵へと差し出す。しかし当の彼女はすぐには受け取らず、きよとんとした様子でその羽織を見ているばかりであった。

「……高杉殿、段蔵は絡繰ゆえ、体温の調節などは自動で行うことが出来ず。従って重ね着をしてもあまり意味は——」

「いいから着てろ、見てるこつちが寒いんだよ……それに、んな恰好してりやあ自然と可笑しな虫が寄りついてくるつてもんだ。」

段蔵に羽織をかけてやりながら、高杉の眼は後方を睨みつける。視線の先にあるのは静まり返った民家、しかしそれらの一角から発せられる微弱な気配を、高杉は見逃さなかつた。

正体を突き止めるべくそちらへと一步を踏み出したその時、「高杉殿！」と不意に段蔵が彼の名を呼んだ。

「おんや〜あ？お兄さん達、こんなところで逢引デートでもしてんのかなあ？」

後ろに気を取られ、橋の方からの足音と殺気に気付くのが遅れてしまう。利き手に刀を展開し振り向けば、そこには柄の悪い天人が数名、似え非せ笑いを浮かべ橋の上に集まっていた。

「久しぶりだな、絡線のお嬢さん。今日のお仲間はそつちのひ弱そうな色男だけかい？」
鼻の頭に絆創膏を貼った鮫頭の男が、齒を剥き出し笑みを湛えて前に出てくる。彼が口を開いたのを皮切りに、他の天人達も次々と好き勝手に喋り出す。

「この間はよくもやってくれたな？仲間はやられるわ俺らも怪我するわ、拳句にその後来たポリ公連中に大半がしよつ引かれちまうわで、こちとらてんやわんやだったんだぜえ？」

「あーあ、俺ら心も体も傷ついちゃったなー。こりゃあ慰謝料たんまりブン取らねえといけねえや。ま、金が無きやその代わりに、お嬢さんのはち切れボディで俺らにいいコトしてくれても構わねえんだけど？何ならその包帯の兄ちゃんでもいいんだぜ？アంతほどの美丈夫なら、男でもアリなんて変態も仲間ウチにやいるからなあ？ヒヤハハハハッ!!」

聞くに堪えない下品な嗤い声が、静かな一帯に響き渡る。未だ何も言い返してこない彼らはさぞ怯えた表情を浮かべていることだろうと、期待に胸を躍らせながら鰐男は薄目を開いた。

「……………あり?」

しかし、鰐男の目が映したのは、こちらに背を向け何やらひそひそと話をする高杉達の背中。時折ちらちらと様子を窺うかがってくるその姿は、例えば言うなら学校の昼休み、複数で集まったJKが対象となる人物から距離を置き、遠巻きに観察しながら噂話や陰口を言い合っているような、そんな教室での日常のような雰囲気かを醸かもし出している。

予想外の出来事に二の句が継げないでいると、彼らの話している内容が鰐男達の耳にも段々と聞こえてきた。

「……………どうする? 奴やつさんは俺らのこと知ってるようだが、俺の記憶ン中にやあ手掛かりになるヒントの一文字も出てきやしねえぞ。」

「少々お待ちください、只今段蔵の記憶データを解析致します……。」

「お、お〜い……………テーマら——」

「あつ、特定出来ました。」

「おつ、何か分かったか？」

「はい、彼らは敵エネミーの『ならず者天人』です。クラスは殺と狂、ドロップする素材は主に魔術髄液と記録しております。」

「ほう、そこまで分かるたア便利なモンだな。」

「もう少し詳しく確かめたい場合は、フリークエストを選択時に右下の小さなアイコンをタップしていただければ、エネミーの種別や獲得出来る素材などを簡単に確認することが——」

「だああああああアアアツ!! ヒトをアイテム名で認識するなつつつたじゃん!! あとガン無視とかマジやめてっ! オジサン達そういうのホント心ハートにクルから傷ついちゃうから!!」

「あ? 聞こえてやがったのか髄液野郎。」

「高杉殿、マスターは未だ素材の数が足りないと困窮しております。早急に彼らを片付け、獲得した素材を追加のお土産として献上いたせば、マスターもきつとお喜びになるかと。」

「ほう、そりやあ名案だな……つーワケだテメエら、苦しみたくなきや動くんじやねえぞ？ 安心しなア、一太刀の元に逝^イかせてやるぜ……ククツ。」

煙管を愛刀へと変え、舌なめずりをする高杉の姿は、まるで阿修羅の如し。滲み出る魔力が火炎光背のように揺らめき、喜悅の微笑を浮かべる高杉に、鰐男は体の芯から慄然とする。

「は……ハハッ！んなハツタリが通用するとも思つてんのか！ たつた二人でこの多勢を相手にしようつてんなら、お望み通り揃つて廻^{なぶ}りモンにしてやらあつ！！」

鰐男が鞘から刀を抜き、高杉達へと斬りかかる。他の天人達もそれぞれ己が得物を構え、共に突進していく—— 筈だった。

「ハツハハア！ 行くぜ野郎ど—— あ、あれ？」

ふと鰐男は、静寂^{しじま}に響く足音が自身のものだけしか聞こえてこないことに気が付き、足を止める。

どういうことだ……言いようのない違和感に恐怖すら覚え、鰐男はゆつくりと振り返る。すると彼の眼に映つたのは、虚空を見つめたまま立ち尽くす仲間の天人達。何人かの力なく垂れ下がった腕から、握っていた棍棒やら拳銃やらが次々と橋の敷石へと落下していった。

「お……おい、お前からどうし——」

ずるっ、

肩を叩こうと伸ばした手の先で、一体の天人の身体から何かが落ちる。

ぼとん、と音を立て、足元に転がってきた『それ』に目を落とした途端、鰐男は目を見開き絶叫した。

「あ、あ、うあ、あああああああああつ!!」

空気を震わす程の悲鳴に、高杉と段蔵も異変に気が付く。呆然と立ち尽くす鰐男の前で、次々と斃^{たお}れていく天人達。いずれも頭部や腕、上半身などが切り離され、そこから噴き上がった血飛沫が雨のように降り注ぎ、鰐男と橋を赤く染めていった。

「……………どういふことだ?」

高杉が眩いたのとほぼ同時に、鰐男がこちらへと振り向く。顔も衣服も、全身を鮮血で真っ赤に汚した男は肩を戦慄^{わなな}かせ、けたけたと壊れたように笑い狂っていた。

———そんな男の腹部から覗く、鋭い刃の先端。

月夜の闇の中で淡く光る紅色に、流れた温血が伝い彩りを添える。

がくがくと痙攣を繰り返した後、完全に動かなくなった鱈男の躰は刃から抜け、地面へと崩れ落ちた。

倒れた巨体の向こう——そこに立っていたのは、今しがた鱈男を絶命させた大振りの刀を持った、深く笠かさを被る何者かの姿。

「あれは……………」

段蔵は直ぐ様、自身に搭載されている暗視スコープを起動し、対象を確認する。だが……………おかしい。先日この機能を使用した際は、何の異常も見られなかった筈である。

ならば、この視覚が今映し出しているものは、一体何だというのだろうか……………？

「おい、段蔵。」

高杉に名を呼ばれ、段蔵は漸く我に返る。暗視モードを解除し隣を見遣れば、琥珀の蝶に照らされた高杉の横顔にも、狼狽の色が浮かんでいるのが見て取れた。

「お前さん、『アレ』の姿を確認出来たかい？」

「え、ええ……………しかし——」

「何でも構わん、教えてくれ……………お前が視た奴は、どんな姿すがたをしていやがる？」

露骨に出さずとも、彼が周章しているのは理解出来る。己の眼が映しているものが何

であるかをこちらに求める高杉に、段蔵は今しがた見たものをありのままに伝え始めた。

「……………段蔵の眼は、闇夜でも視界が利くよう設定されております。異常が無ければ、それは対象の顔や輪郭までもを正確に映すことなど容易いもの……………しかし、段蔵が認識したあの者の姿はまるで……………まるで、『影』そのものにござりまする。」

微塵も逸らすことなく、段蔵は自身が『影』と比喩したモノを睨み続ける。彼女の言葉で合点がいった高杉は、その視線の先を做つて迎る。

身動き一つせず、天人の屍と血痕に囲まれた『それ』の風貌は、頭のとっぺんから爪先までもが、深い闇のような黒一色で覆われている。顔があるべき箇所には目鼻などの位置が確認出来ず、また身に纏っている衣服までもが躰と完全に同化し、正に影そのものが実体化したような姿をしていたのだ。

「高杉殿、段蔵は以前に『あれ』と似た敵と戦闘を行った経験がござります……………しかし、大凡に把握出来ているだけでも、『あれ』は虚ろな残留霊基であつた紛い物とは明らかに異なります。あれではまるで——」

そこまで言い止めた段蔵を遮つたのは、背を向けたまま向けられた高杉の左手。それ

がゆつくりと下げられていくのと並行し、彼の面もこちらへと向けられていく。

「段蔵、土産の入った袋はちゃんと持つてるな？」

「へ？は、はい。此方にしつかりと。」

「よし、ならいい……彼奴は俺に任せろ。お前さんはその中身、絶対にひっくり返すんじゃないぞ。」

言うや否や、高杉はゆつくりと前進を開始する。段蔵が背後で呼び止める声も聞かず、彼が漸くその足を止めたのは、あの『影』の目と鼻の先の距離。

「………よお、『久方振り』じゃねえか。いや、こつちでのお前が俺の事を覚えてりやあそうなるか。」

片笑みを浮かべ、『影』へと話しかける高杉の利き手の刀が煙管へと変化し、彼は徐にそれを口許へと運んでいく。

得体の知れない、異形のモノを前に刀を納めた高杉に泡を食わされ、言葉を失う段蔵を余所に、火の灯つた煙管から煙を堪能しながら高杉は続ける。

「つい先刻、酒場で辻斬りの噂話を聞いたばかりだが、ありやあテメエのことだろ？まさかこんなトコでも、『そいつ』と共に派手に斬りまくってるたあな。どうなんだい？人斬りにして妖刀、『紅桜』の使い手………岡田似蔵さんよお。」

岡田似蔵、高杉が人名らしきその単語を口にした途端、『影』が初めて反応を見せる。

『……ひヒ、ひヒはハは、ひヤはハはハはハはハはッ!!』

僅かに肩を動かしたかと思つた刹那、『影』は人とも獣ともつかない嗤い声を、けたたましく辺りに響かせた。

『どこかデ嗅イだ匂いダと思えば、まさかアンタに会エるトはネえ……イヤハヤ光荣、実ニ光荣だヨ。』

『影』……否、似蔵はひとしきり笑つた後、被つていた笠を放り投げる。暗闇に覆われた顔をこちらへと向け、似蔵は然も嬉しそうに語り続ける。

『ずウツト待つテたんだ、アンタみたいナ強者が来ルのヲ……いや、アンタがイイ。網二引つかかつた獲物がアンタで本当ニよかつた。俺ノ光、俺ノ篝火、俺の、俺ノ、俺の俺の俺ノ俺ノ、キヒヒヒイイイツ!!』

狂つたように嗤い、突進してきた似蔵の利き腕と同化した刀、『紅桜』が高杉目掛け振り下ろされる。対し高杉は身を翻し、重い一撃を躲し似蔵の懐へと潜り込んだ。

「(コイツが似蔵だつてンなら、コレで何とか——)」

すると高杉は唇から煙管を離し、口の中を数回もごつかせた直後、似蔵の顔面らしき場所に煙を吹きかけた。

今までの喫煙時に燻らせていたものとは明らかに違う、鮮やかな藤色の煙。それを正面から多量に吸い込んでしまった似蔵に、間も無く変化が訪れる。

『ゲほッ、小癩ナ——へ、へえ……あへ、アひヤア……う?』

体を激しく痙攣させ、似蔵はその場にへたり込む。高杉が紫煙に籠めた魔力によってそこには強力な麻薬に匹敵する作用が生まれ、それを諸に吸収してしまった似蔵には、最早指一本動かす力すらも殺がれてしまった。

「過度に鋭い嗅覚が仇になつたな……いや、テメエの最大の不幸は、今ここで、この世界で、テメエを知る俺に出会つちまつたつてコトだ。」

『あア……あハあアあア……!』

「(……さっきの具合を見りやあ、相当な狂化を付与されてやがる。俺の術が解けてもあの状態じゃあ、碌に情報を引き摺り出すこともできやしねえ。なら——)」

高杉の煙管が、再び刀へと姿を変える。月明かりを反射した刃先は、似蔵の首辺りへと静かに当てられる。

「じゃあな、今度こそ地獄に送つてやる。」

力を込めた刃が、ぶれることなく斜めに振り下ろされる。ぶしゅ、と肉を断つ音と共に刎ねられた頭部は宙を舞い、数回跳んでから敷石の上を転がり、やがて塵となつて微風に吹かれ、消えていった。

「高杉殿……もしか、今の者を……存知で?」

刀に付いた汚れを軽く払い、鞘に納めこちらへと歩いてくる高杉に、段蔵は率直な疑

問をぶつける。

「……………奴は以前、俺の率いていた『鬼兵隊』に属していた野郎だ。盲目だが剣の腕は達人的でな、そこに『紅桜』を使わせりやあ正に敵無しだった。ま、終いにや銀時に敗れたんだがよ。」

『紅桜』とは……………先程彼奴きやつが使用していた、あの紅色の刀のことでしようか？」

「ああ、俺がとある一件で刀鍛冶の男と手を組み、造らせた対戦艦用機械機動兵器からくり。内蔵した人工知能によつて戦闘の経緯をデータ化し、それを積むことによつて能力を向上させていく代物だが……………場合によつちや、使用者に完全に寄生して精神も肉体も喰らい尽くしちまう、正に妖刀なんて呼ばれた刀だ。」

段蔵に事細かに説明をする最中、高杉の頭の中では別の……………先の似蔵について、ずっと引つかかっている疑問が巡り続けていた。

『どこかデ嗅かイだ匂かいダと思エば、まさかアンタに会エるトはネえ……………』

「……………他の連中が覚えていなかった俺の存在を、どういうわけかあの似蔵の形をしたモノはハッキリと覚えていやがった。捕らえて吐き出させる手もあつたが、俺に対してあれ程までの殺意を向けた野郎だ。ありやちよつとやそつとで済む程度の狂化状態

じゃあ無エ。現界時に施されたか、或いは——」

「——高杉殿っ!!」

突然、段蔵が声を張り上げ名を叫ぶ。

我に返つたのと同時に、背後から凄まじい程の殺気が膨張し、噴き上がる感覚が肌で理解出来る。

抜刀し、即座に振り向いて態勢を取る。だが眼前に広がる光景に、高杉は思わず我が眼を疑つた。

『アああ、ああおアああ才あ………ッ!!』

地の底から這いあがる亡者のように、似蔵『だった』モノの躰が瘴しやうき気を伴いながら、再び動き始める。頭部を失っているにも関わらず、どこからか発せられる地響きにも似た唸り声が、夜闇の中に轟いた。

「……ハッ、くたばり損ないが。死んでも死にきれねエってんなら、俺がまた何度だって地獄に叩き落としてやらあ!!」

動揺を払うようにして声を張り、高杉は似蔵目掛け突進していく。頭を喪失したまま、闇雲に振り回される紅桜を回避しつつ確実に距離を縮め、彼の刃が再び似蔵に突き

立てられようとした、その時だった。

『アああアアああああアアアアアああああアアつ!!』

吠える似蔵の胸部辺りに、突として浮かび上がる光。それが形となって現れた刹那、高杉は絶句した。

「な……………っ!?」

伸びた角、鋭い牙、そして二つの恐ろしい眼。

それはあの時、松陽せんせいの背中に浮き出ていたものと同じ——

『がアアアああアアあつ!!』

その一瞬の狼狽が仇となった。似蔵の振り下ろした紅桜を避けるのに反応が遅れ、高杉はそのまま橋もへ諸共叩きつけられてしまう。

「高杉殿っ!!」

段蔵の声もかき消してしまいう程の轟音を立て、橋には大きな穴が開く。天人達の遺体

が次々と、浅い川へと落下していった。

「く……………っ!!」

橋の崩壊に巻き込まれつつも、宙で体勢を整えようとする高杉。直後、土煙と瘴氣の霧から出現したモノに身体を掴まれ、土塀へと叩きつけられる。

「がっ、は……………!!」

痛みに顔を歪め、尚も抗おうと高杉は身を振る。しかし彼を土塀に縫い付けるようにして拘束する、触手のようなモノが生えた巨大な黒い塊はびくとも動かない。

『……………やアット、捕まエた。』

陥没した首から、新たな似蔵の頭部が生えてくる。

薄れる霧の向こうに、紅色の光が煌めく。黒い塊は似蔵の左腕から生えたもので、氣道を圧迫され咳き込む高杉の姿を眺める彼の表情は何えないものの、然も愉快そうな声色から大凡の感情は読み取れた。

『ずウツと斬つてミタカッタ……………白夜叉でモナク、桂デもナク、憧憬焦ガレテタアンタのコトを……………ああ、どこから斬ツてヤロウか？少シずつ刻ンデヤロウか？それトも一思イニ心の臓ヲ貫いてヤロウか？ああ、殺スのガ勿体なイクらいだ！キヒッ、キヒヒヒヒヒッ!!』

まるで舌で舐めるような動きで、軽く当てられた刃先が二の腕の辺りをなぞる。着物

を裂き痛みを伴う皮膚に、高杉は眉を蹙ひそめた。

狂った喘あはい声を上げる似蔵。そんな時、上から放たれる飛来物の気配を察し、紅桜を大きく振る。

巻き起こった風により、飛来物……段蔵が投げた苦く無ないは宙で勢いを殺され、一本として目標に命中することなく浅い川へと沈んでいった。

「高杉殿!! 暫しお待ちをつ、段蔵も今そちらに——」

——ドスツ、

段蔵の声を遮り、その音は鈍く響く。

言葉を失った彼女の眼下で………似蔵は、紅桜を高杉の胸へと突き立てていた。

『ひやはっ、ひやははあハハハハはあっ!! 殺やツタ、遂に俺ハあ、高杉晋助をつ!! あひやあつはハハははハははッ!!』

似蔵の左手が離れ、力の抜けた高杉を支えるのは身体を貫く紅桜のみ。歎喜に身を震わせる似蔵を、段蔵はただ見下すことしか出来なかつた。

「あ……………ああ、あ……………っ!!」

怒りか、或いは悲しみか、あまりの出来事に声が出てこない。

身を戦慄^{わなな}かせ、呆然と立ち尽くしていたその時、不意に身体を後方へと引つ張られた。

「きや……………っ!!」

尻餅をつき、着地したそこは橋台の手前。何が起きたのか理解出来ず、きよとんとしていた段蔵の背後で、シユルシユル……………と微かな音が遠のいていった。

『ハハハ……………あ?』

同時に、こちら側にも変化が訪れる。似蔵の周りを飛び回る琥珀の蝶の数が、次々と増えていつているのだ。

それが何を示しているのかを似蔵が漸く気付いた時、そして俯いていた高杉の口角が吊り上がった次の瞬間、彼の身体が大きく爆ぜ^は、そこには無数の蝶が四散する。

高杉を象^{かたど}っていた蝶達は似蔵を取り囲み、パキン、と何処からか聞こえてきた指鳴りを合図に、それらは一斉に焰^{ほむ}を纏い大爆発を起こした。

「いや、いい。それより肩貸してくれねえか？ 久々に派手にやり過ぎちまった。さっさと眼鏡ン家行つて休ませ……………」

こちらを向いた高杉の言葉が不意に止まり、どうしたのかと段蔵は首を傾げる。

「……………段蔵お前、袋はどうした？」

「え……………あつ。」

その時、段蔵の脳内で先程の光景がリプレイされる……………似蔵が橋を破壊し、高杉が巻き込まれ落下した時、自分は咄嗟にその場から駆け出した。確か苦無を投げた時には既に両手は空いている状態。では恐らく、自分はどこかのタイミングで無意識のうちに袋を放り投げて……………

「……………申し訳ございませぬ、高杉殿。この段蔵、腹を切る覚悟は出来ておりますので――

――

「ああ何だ、ここにあるじゃねえか。」

「そう、土産はここに――へ？」

思わず口から出た間拔けな声と共に振り向くと、記憶はないが恐らく乱雑に扱ってしまつたであろう、土産モンプランの入つた袋は橋から少し離れた納屋のすぐ横に、ちよこんと置かれていた。

「何と……………面妖な……………」

「よし、中は崩れて無エみたいだ。これでガキ共にどやされなくて済むぜ。」

衣服に傷が擦れる痛みに眉を寄せつつ、高杉は袋を持って段蔵の元へと歩いてくる。

「ほら行くぞ、銀時達が騒いで待ってやがるだろうからな。」

「は、はい……。」

不可思議な疑問が幾つも残り、やや煮え切らない思いを抱えたまま、段蔵は高杉の腕を担ぎながら、再び夜のかぶき町を共に歩き出した。

* * * * *

「……………ふむ、やはりあの男……………間違いないようでごさる。」

彼らが去っていった橋の付近、建物の影にあるその場所で呟いたのは、スナックお登勢にいたあの三味線の男。

耳に当てたヘッドフォンからは、無線らしき音声が僅かに漏れている。男は小型のマイクを口元に当て、再び話し始める。

「しかし、あの『影鬼』とあそこまで渡り合えるとは、恐ろしい男でござった。共にいたあの絡繰の少女も中々………はいはい了解した、そう怒りなざるな。」

無線越しに聞こえる金切り声に顔を顰め、男は溜め息を交じえて零し、そして最後に
呟いた。

「ではこの川上^{かわかみばんさい}万^{まん}斎^{さい}、只今^{もつ}を以て帰還致す。良い報告を待たれよ………我らが鬼兵隊、
『総督』殿。」

《続く》

【捌】 再会そして、契約（Ⅰ）

「……………到着いたしました。どうやらこちらが新八殿の居住されておられる、恒道館道場のようです。」

月明かり、そして琥珀の蝶の淡い光に照らされ、屋敷塀に囲まれた建物が明らかになっていく。

段蔵が自身のナビゲート機能をOFFにしたのとはほぼ同時に、高杉が彼女から離れた。

「高杉殿、お身体はもう宜しいので？」

「ああ、大分楽になったからな。さっさと中に入ろうぜ、門はどこだ？」

「はい、恐らく此方かと——」

そうして二人が角を曲がった、その時である。

ふと目が飛び込んできたものを頭で認識した途端、彼らの意識は即座にそちらへと奪われた。

——誰かが、いる。

青白い月の下、道場の正面の門と思わしき場所と向かいあうように、何者かがひっそりと立っていた。

背丈は小柄で、神楽やエリザベート（角含まず）よりもやや低いほどだろうか。頭からすつぽりと被った黒い布によって、顔をよく窺うことが出来ない。

高杉を囲う蝶の数が増え、段蔵も片手に仕込んだ刃を展開し、物陰から様子を見ながら警戒していたその時、対象は徐にこちらを向いた。

「そう構えずともようござんす、あつしは妖しいモンじゃありませんので。」

深閑の中に凜と響く、少女の声。あれ？何処かで聞き覚えのあるような……と首を傾げる段蔵の隣で、数歩前に出た高杉が今いる場から離れ、声の主であろう人物の前へと姿を現す。

「ハッ、なら入門希望か？だが疾うに亥の初刻を回ろうとしてんだ。明日にしたらどうだい？お嬢さん。」

「いえいえ、あつしの用件はこちらの道場でなく、そちらさんにごさいますて……ああそうだ、一つ頼まれては頂けんでしょうか？」

すると少女は向きを変え、すたすたとこちらへ歩いてくる。いきなりのことに高杉と、そして漸く姿を覗かせた段蔵も、揃って目を丸くした。

そんな彼らの正面で、少女は歩みを止める。深く被った布で顔を隠した彼女は、何やらガサゴソと探る動きとSEを見せた後に、漸く取り出したものをこちらへと差し出す。

「……………何だこりや?」

見るなり怪訝な反応を見せる高杉。彼の右眼が捉えているのは、少女の手に広げられている、数枚の護符ごふのような札ふだ。

「ささ、こちらをどうぞで。」

「どうぞじゃねーよ。得体の知れねエ奴が渡したモンなんか素直に受け取れるワケが――」

「これはこれは、ご親切にありが――あうちつ。」

なんの疑いもなくその札を受け取ってしまった段蔵の額を、高杉が零した溜め息と共に軽く叩く。

「……………んで、本当に何なんだよこりやあ?」

「あつしもよくは知らぬのですが、主様にコレを渡してこいと言われやして。」

「おい段蔵、ちようどいいちり紙が手に入ったじゃねえか。これで鼻汁オイルで捨てちま

え。」

「ちよちよちよ、堪忍してつかあさい包帯の旦那。こりや別に危ないモンじゃございせん……多分。」

「おい、最後しつかり聞こえたぞ。多分ってどういうことだコラ。」

「すいやせん、本当にあつしも詳しいことは知らされてないんでござんす。所詮は使い魔なもので……。」

「使い魔、ということとは……つまり貴女は、式神あなたのようなものなのでしょうか？」

段蔵の問いに、少女は少し考える素振りをした後、やがて首を縦に振る。

「ようなもの、というか……あつしも式神にござんす。名は——おつといけねえや、まだ明かしちゃいけないんでござんした。」

少女は再びくるとと旋回すると、そのまま背を向けて歩き出してしまふ。徐々に離れていく後ろ姿に、高杉は「おい」と声を掛けた。

「ああ、言い忘れるところでやした。その札は建物の最も端に当たる東西南北に、それぞれしつかりと張り付けてくださいな。きつと『いい事』が起きると……ようござんすねえ。」

「……最後に聞かせろ、お前を使役している奴の名は何だ？」

「……後生ですよ、包帯の旦那。あつしは使い魔の身分ですから、それ以上のことは口

に出来ない決まりなんです。でも、これだけはハッキリと言わせておくんなせえ………あつし等は常に、貴方がたの味方でござんすよ。」

振り向いたその口元が僅かに緩んだように見えたその瞬間、少女の姿はまるで霞かすみのように、その場から消えてしまった。

再び訪れる静寂、少女の消えた辺りを見つめたまま、呆然とする段蔵の手に残された謎の札を一見し、高杉は二度目の溜め息を吐く。

「……あの方の声、聴いたことがあるような………中の人的な意味で。」

「何こちゃこちゃボヤいてやがる、とりあえずさつさと中入るぞ。その札がヤバイモンかどうかは、ヅラに見せりやすぐに分かるだろうからな。」

「成程………こういつた時の術者キヤスターの存在は、誠に心強いですね。」

握った札に目を落とし、段蔵が零す。その間に高杉が門へと向かって行ってしまったため、彼女も慌ててその後を追った。

『恒道館道場』と書かれた古い看板の真横の、これまた古びた木製の門を押すと、軋む音を立てながら扉は開く。少し離れた先に玄関らしきところを見つけたため、二人はそこへと歩を進めていく。

「おいおい、呼び鈴もついて無エのか？この家は。」

小さくぼやきながら、高杉は引手に手を掛ける。すると扉は少しの力を入れるだけ

で、あっさりとは見知らぬ来客を招き入れた。どうやら鍵はかかっていないらしい。

「開いてやがる……家が道場やつてるからって、随分と不用心じゃねえか？」

ガラガラと音を立て、完全に開け放った扉から中へと入る。明かりのついていない玄関の土間には藤丸達の履物が並べられており、本当に皆がここに来ていることが確認出来る。早速足を踏み入れたその時、突如高杉の顔が不快に歪んだ。

「……何だ？この臭い。」

彼の言葉に反応し、段蔵も嗅覚センサーもとい鼻をすんすんと鳴らす。玄関の向こうから漂うその匂いは何とも比喩し難いものではあるが、確かに嗅いでいると眉間に皺が自然と寄ってしまうほどの不快感を与えられるもの。え？分かりにくい？んー強いて近いものに例えるならば、焦げ臭さに近いような……ような……

「!!——まさか……っ!!」

面を上げた段蔵の脳裏に浮かぶ、先刻の光景。

高杉により撃退され、逃亡したあの似蔵という影男……もしや、この志村邸にいる者達が仲間だと知り、逃げるフリをして既にここに乗り込んだのではないだろうか？

最悪な展開が、二人の頭を過る。信じたくはないが、それを裏付けるかのようなことを、もう一つ発見してしまう……家の中が、異様に静か過ぎるのだ。奥にいるのでは、などという推測もあるが、それにしても物音の一つも聞こえないのはおかしい。

「夜分遅くに申し訳ありません！どなたかいらっしやいませんかっ!!」

隣に立つ高杉が思わず片目を瞑つむってしまふ程の音量で、段蔵は奥へと呼びかける。しかし、返答の声は一切返って来ず、家の中は閑静に包まれたままであった。

「マスター……皆様——あつ!」

声を上げた段蔵の頬を掠める微風ていよかせ、それは履物を脱ぎ捨て家の中へと駆け込む高杉が起こしたものであった。反応がやや遅れた彼女もまた、離れていく背中を追い掛ける。

「(クソツ、どうなつてやがる………松陽!!)」

恩師は、あのひと銀時達は、藤丸は無事なのだろうか……? 考えたくもない可能性を掻き消すように、かぶり何度も頭を振る。

突き当りを曲がったその時、廊下に転がる一人の姿を発見し、高杉は足を止めた。

「おい………しつかりしろ!」

うつ伏せに倒れた身体を抱き上げられると、彼……アストルフオは小さく呻うめき、ゆつくりと瞼まぶたが持ち上げられる。遅れてやって来た段蔵もまた、アストルフオの姿に言葉を失った。

「……ああ、段蔵ちゃん………それにスギちちだあ………えへへ。」

暫くぼんやりとしていた彼だが、視界の中に段蔵、そして高杉の姿を確認すると、ふにやりと青白い顔に弱々しい微笑を浮かべる。

「アストルフオ殿、お気を確かに……………」

「えへへ……………よかった。『最期』に君に、スギつちに会うことが、出来、て……………僕ね、もう……………駄目みたいだからさ……………」

「は……………？お前、さつきから何言つて……………」

狼狽を露わにする高杉の頬に、アストルフオの手が添えられる。伝わってくる小刻みな震えに、高杉の中で不安は更に大きくなつていく。

「……………ねえスギつち……………僕のお願ひ、聞いてくれる？」

澄んだ董の瞳が、微かな期待に揺らぐ。徐々に雫を含み、零れそうになるのをぐつと堪えながら、アストルフオは口を開いた。

「あのね……………ぎゅつて、してくれない……………かな？我儘だつてことは、重々も承知さ……………でもね、このまま座に還つて、君のことを一片も思い出せずに終わるなんて……………そんなの、やだよ……………だからさ、ね……………？スギつち……………お願ひ。」

何度も声を詰まらせながらの懇願に、高杉は俯いた顔を上げることが出来ない。返答もせず、素振りも見せず、高杉は黙つたまま、両の手をアストルフオの背中へと回す。

温かい掌の温度にアストルフオは目を細め、そして力を籠められた高杉の手は、アストルフオの身体を引き寄せ……………

「ああ〜つ黒猫、段蔵も帰つてたの!!ちようどよかつたわ〜手伝つて!」

突として曲がり角から姿を現したエリザベートに一驚し、高杉は手からアストルフォを落としてしまう。その際床に後頭部をぶつけ、「いった〜い!」と下から上がるアストルフォの声など耳に入らないまま、空いた口が塞がらない状態の高杉と段蔵に、エリザベートは尻尾を大きく振つて捲まくし立てる。

「何が何だか分かんないんだけど、アタシ以外の全員が夕飯ディナーを終えてから、いきなりお腹を押さえて苦しみだしちゃったの!もしかしたら食あたりかもしれないと思うんだけど……とにかく、白モジヤは泡吹いてるし、眼鏡ワンコはキラキラしながら座に還りかけてるし、仔犬なんて白目剥いて気絶しちゃってるのよう!それで今さっき、虫の息の眼鏡ワンコからお薬の入った救急箱の場所を教えてもらったわ。とりあえずあちこちにのたうち回つて散らばってるでしょう皆を、居間に集めなくちゃと思つて、だから手伝つてちようだいな!」

言い終えると同時に、エリザベートはくるりと方向転換し廊下の奥へと駆け出していく。

何とも言えない空気が漂う中、高杉と段蔵が再び眼まなこを下へと向ければ、だらだらと滝のように流れた冷や汗で顔中を濡らしたアストルフォが、気まずさから目を逸らし、誤

魔化しの諂笑を浮かべている。

ふう、と息を一つ漏らし、その場から離れ立ち去ってしまった段蔵。遠くなつていく彼女の背中から高杉へと視線を移せば、そこには背筋どころか全身が凍つてしまいそうな程に綺麗な巧笑が、額に浮かんだ青筋と共にこちらを見下ろしていた。

「……………そうかいそうかい。食あたり、なあ。」

「あ、あははは……………これはその、ええつとお……………」

蒸発気味の脳に残っている細胞達をフル回転させ、しどろもどろになりながら言い訳を捻り出すとするも、時は既にお寿司、じゃなかつた遅し。固く握られた拳に高杉が熱い息を吐きかけたその三秒後、「にやああああアアツ!!」とアストルフオの悲鳴が家中に響き渡つたのであつた。

* * * * *

「はあく……………旨エ、旨えよおおお……………!」

「えぐつ、美味じい……………美味じ過ぎで前が見えないよう……………ぐすつ。」

ぼろぼろと溢れる涙やら鼻水やら、とりあえず顔から出るもの全部駄々洩れさせなが

ら、銀時と藤丸を始め、あの後発見された胃薬によって無事回復した面々は、滝のように溢れ出るそれらを拭いてもせず、ががつとモンブランを食している。咽び泣きながら生菓子むしほを食たべるその姿に、高杉はただ呆気に取られていた。

「……………そこまで喜ばれりやあ、菓子職人も本望だろうよ。」

「もう、銀さんも藤丸君も大袈裟だなあ。でもこのモンブラン本当に美味しいですよ、こんな高級品と縁なんてなかったから、食べられるなんて夢にも思いませんでした。この若干の塩気もアクセントになって中々、アレ変だな？前が霞かすんで見えないや。」

「テメエも面拭ツラいてから食え、眼鏡。顔から出るもん全部出てるじゃねえか……………ったく、どいつもこいつも。」

呆れ顔で溜め息を吐く高杉。そんな彼は今、左腕に負った傷の手当てを、頭にたんこぶを乗せたアストルフォと共にわこな行っていた。破れた着物は段蔵つぐろが繕つくろった後、洗濯場へと持っていったために、今は新八の寝巻用の着物を借りて着ている。

互いに身長もそれほど差はなく肩幅もあまり広くはないため、サイズ的にはあまり問題はないものの、やはり高杉も始めはやや難色を示していた。しかし彼の厚意を無駄にするのも引け目を感じ、そのまま拝借する経緯に至ったのであった。

因みにコレを着た際、「よかったね〜高杉くん、こういう時ばかりはチビな自分に感謝しろよお？」と銀時にお約束の身長デイスリススペクトを受けたため、直後彼に対し見

事なまでの原ジャーマン・スープレックス爆固めをお見舞いしている。プロレス雑誌の表紙を飾りそうな程の完成度を誇ったその光景は、皆からの拍手喝采を受けながら、アストルフォのスマホによつてしつかりと記録されていた。

「フォウ、フォウ。」

てしてしと小さな前足で高杉の膝を軽く叩き、フォウがおねだりをしてくる。上機嫌に揺れるふさふさの尻尾に頬を緩め、高杉は菓子の入っていたものとは別の紙袋を開けた。

「ほらよ、お前さんはこつちだ。」

掌に出した中身、渋い茶色の小さなそれは、彼がフォウや定春のために菓子屋に頼んで作らせた、砂糖を使用せず過度な甘さを抑えた甘栗。

フォウは何度か鼻を鳴らした後、早速一粒ぱくりと頬張る。口いっぱい広がる甘栗の味がどうやらお気に召したようで、そのまま残りの数粒も一気に平らげ………と思いきや、フォウは最後の一つは啜くわえ、くるりと方向転換し離れていってしまう。

一体どこへ持つていくのかと行き先を見届ければ、そこは台所と反対側の襖の前。そこに甘栗を置き、カリカリと戸を引っかくフォウの動作から、その向こうに誰がいるのかを高杉は何となく察した。

「心配すんな、松陽の分もちゃんと用意してつから。それはお前が食べばいい。」

「キュ？フオウツ。」

高杉の声に振り向くと、フオウは少し考えた末に甘栗はそのままにし、また高杉の元へと戻ってくる。胡坐あぐらを組んだ足の上に飛び乗ると、高杉の手が頭を優しく撫でた。

「……松陽は、まだ眠ってんのかい？」

「うん。でも大分顔色もいいから、とりあえずこのまま寝かせとこうつてツラ君が言つてた。詳しいことは皆集まってるから話し合おうだつて。」

「そういや、そのツラはどこ行つた？じゃじゃ馬とワン公も姿が見えねエが。」

「今ちよつと出てるんだ、もうすぐで戻ってくると思うけど……はいスギっち、包帯巻けたよ。他に手当てするトコ無い？」

「ああ、後はもう十分だ。お前もさっさと食つてこい。」

「え、僕もモンブラン食べていいの？さっきのこと、もう怒つてない……？」

「そうさなア……全員分の美味しい茶あ煎れてこい、それでチャラにしてやるから。」

「わあい！やつぱりスギっち大好きっ！待つてて、とびつきり美味しいの煎れてくるからー！」

立ち上がつてすぐに、アストルフオは忙せわしくなく台所へと向かつて行く。開いたままの襖の向こうに消えていくのを見届けてから、高杉が使用済みの道具を片付け始めていた時、それに気付いたエリザベートがモンブランを堪能する手を止め、摺すり足でこちらへ

とやってきた。

「あら、アストルフオに手伝ってもらったとはいえ、手当てから片付けまで自分でちやんとやるなんて、随分とマメじゃない？」

「俺あ王様じゃねえからな、自分で負った傷の始末くらいは自分でするのは道理だろ。」
「ふーん……：……なら今度はアタシがお節介してあげる。アタシはコレを持っていくから、黒猫は広げた物を片付けなさいな。」

そう言つてエリザベートが手に取つたのは、止血に使つた布。まだ変色しきつていない血糊（のり）の染み込んだ数枚のそれを集める彼女は何故か上機嫌で、その浮き浮きとした様子に、高杉は嫌な予感がしてならない。

「おい……：一応言つとくが、妙な気は起こさねエほうが身のためぞ。」

「んなつ！ 失礼ねつ！ このアタシがケーキのフィルムを舐めるような、そんな意地汚い真似するワケないじゃない！」

「いや〜でも俺、あのフィルムについたクリーム舐めるの結構好きなんだよなあ。アイスの蓋然り（しか）、ヨーグルトの蓋然り、ああいうところについてるのってまた違う味わいが感じられてさ。糖分王の銀さんならこの気持ち分かる？」

「愚問だけ藤丸よお、やつぱお前とはいつかケーキバイキングにでも行つて、糖分の重要性について深く語り合う必要があるな。よっしゃ、銀さん奢（おご）つてやつから今度行こう

ぜ。」

「わーいやつたー。」

バンザイをして喜ぶ藤丸の後ろを通り、エリザベートの姿は閉めた襖の向こうへと消える。

「はーい、お茶入ったよー!」

エリザベートとちようど入れ替わるタイミングで、アストルフオが人数分の煎茶を注いだ湯呑を盆に乗せて居間へと戻ってくる。お湯沸くの早くね?と疑問にお思いの方もいらつしやるであろうか。まあその、そこんところは割愛ということだ。

新八や藤丸と共に湯呑を配り終え、湯気の昇る湯呑に誰となしに口をつけようとした、その時であった。

「みぎやああああアアアアアツ!!」

隔てた襖の向こうで上がる、エリザベートの絶叫。皆の意識がそちらへと集まる中、襖をぶち破る勢いで居間へと乗り込んできたエリザベート。真っ赤に腫れた舌をまるで犬のように出した彼女は、涙で潤んだ瞳に湯呑を映すやいなや、瞬時に掴み一気に呷る。

「それ熱くない?」と目を丸くしたアストルフオが彼女に尋ねる前に、エリザベートの顔がみるみるうちに赤くなっていく。仕舞いに湯気まで昇り始め、「熱いイイッ!!」と

叫ぶと同時に大きく咳き込んだ。

「ゲホツ………もくう何よ！何らのようっ？フルーティーかつフロールな芳醇な香りを見事に裏切るあの辛さは！！あんなのハバネロに等しいわ！アンタの身体には血じゃなくてハバネロが流れてるの！！ああんっもう今のお茶の追加ダメージで舌の上が大火事よっ！！」

「だから妙な気は起こすなっつたろ………自業自得だ。」

「ホントそれな、それに後半の件はお前の自己責任じゃ——」

「おだまり白モジャ！アンタに今のアタシが受けた地獄の苦しみが分かって？クリームがたつぷり乗ったケーキの甘さを堪能しようと思をときめかせていざ齧り付いたら、スポンジから間のジャムまで全てが唐辛子だったの！ホットよ、ベリーホット！それも痛みを伴うほどに！Csal・dot・tak！」

一通りぶちまけた後、エリザベートは新八の持つてきた水をこちらも一気に飲み干していく。嵩が降下していくコップを何気なく眺めていた高杉の中に、ふと先程の光景が浮かぶ。

「そーいやお前ら、何で食あたりなんかになつてんだ？おかしなモンでも食ったか？それと何でツラ達はここにいない？一体どこに——」

おかわりを要求してくるフォウに追加の甘栗を与えながら、高杉は問い掛け顔を上げ

たその時、カチャーントンツ、と響いた金属音が彼の言葉ことばを遮さへぎった。

音の源であるフォークは、藤丸の手から滑り落ちたもの。その藤丸を始め、銀時と新八そしてアストルフオまでもが、青ざめた顔に多量の冷や汗を流し、がくがくと震えている。

「……………おい、何があつた?」

「えつとだな……………長つたらしい説明で文字数食うのダルいし、とりあえず今から回想流すからそつちを覗てくれや。お前も読んてる側も気になつてしやーないだろう、ツラ達がどこ行つたかとかも、こん中で説明出るから。ほんじゃ、回想入りまーす。ほわんほわんほわんギンギン……………んん、自分で言うのちよつと恥ずかしいな、コレ。」

* * * * *

「おかえりなさい。さあさあ皆さん、お腹も空いてるでしょう? たーんつと召し上がってくださいな。」

「今日のデイナーはいつもより格別よ、なんてつたつてアタシとお妙の合作なんだから。さあ、飢えた家畜のように喰らうといいわつ!」

道場の案内説明を一通り終え、居間へと戻ってきた藤丸達を迎えたのは、揃いの可愛らしいエプロンを着たお妙とエリザベートの可憐な笑顔。

「私、得意なお料理つて卵焼きくらいしか無いの。だからエリちゃんが手伝つてくれて本当に助かったわ。」

「ふふん、そうよく感謝なさい。アタシが力を貸したからこそ、こんな豪華な食卓になつたんだからねっ。」

得意げに鼻を鳴らし、エリザベートは大鍋を中央へと置く。

彼女らの手によつて生み出された料理達が、次々と食卓へと運ばれてくる。徐々にテーブルを埋め尽くしていくそれらを眺める藤丸達であつたが………：………：どういうわけか、皆一様に顔色が優れない。定春も部屋の隅で尻尾を巻いて唸つており、彼に守られるようにしてフオウも背後に隠れている。

「ほら、どうしたのよ仔犬？エリちゃん特製のハラスレーが冷めちゃうわよ。」

大鍋の中身を皿に装い、湯気の昇るそれを藤丸の前へと置く。ハラスレーというのはハンガリーの名物料理の一つであり、新鮮な魚介をふんだんに使つたスープである。パプリカで付けられた鮮やかな赤色や、海の幸の香りが何とも食欲をそそる一品………：………：の、筈なのだが。

「あ、りがとう、エリちゃん………：うっ！」

強張った笑顔でハラースレー（飯）と向き合うも、あまりの光景と皿から昇る赤い湯気が纏う刺激臭に、藤丸は耐えられず顔を背ける。

皿に盛られているにも関わらず、その赤いスープは尚もぐつぐつと煮立ち続けている。肝心の具である海老さんや烏賊さんなどの魚介を代表とする面々の姿は見受けられず、代わりに石炭のような黒い塊と共に、青いゲソに似た何かハラースレー（飯）の中で蠢いていた。この感じはそうだな、記憶の中にあるもので一番近い例に例えようと………あれだ、色は違うけど聖杯の泥だ。

目も当てられないものはスープだけではない、食卓を埋め尽くす彼女達特製の料理の数々、それら全てが赤と黒の二色で覆われ、文章では分かりづらいが何れも皆モザイクがかかっているなければお見せ出来ない程の惨状であった。

激辛唐辛子のような刺激臭や、食べ物にあるまじき化石燃料に近い臭いに涙目となっている藤丸を、不意に隣の銀時が引き寄せ声を潜める。

「おい、どういふことなんだよこりや？何で食材だったモンがビフォーアフターしたらこんな地獄絵図になんだよ？」

「それ聞きたいの俺だから。すつげえ今更になるけど、もしかしてお妙さんってそちらさんのメシマズ樺だったりする？ヤバイよ、パツと見大和撫子のこの人ならエリちゃんが多量やらかしても何とかなるなんて考えてたさっきの自分を殴りたいよっ！」

「いや、それなら俺だつてお前にトカゲ娘が劇物製造機だつてこと確認しなかつたもん、こんなんお相子あいきだつて………しかしクロスオーバー作品のメシマズ二人がフュージョンしちゃまったとなりやあ、かなりマズいぞ。多分ベジツトでもアイツ等にや勝てねえよ、どうすりやいいんだ？」

ひそひそと二人が言葉を交わしている背後で、遠くから電話の音が鳴り響く。慌ただしく居間を後にするお妙の足音が聞こえなくなつたのと同じタイミングで、エリザベトは皆の皿へハラースレー（仮）を配り終えた。

「わ、わあ………凄いな、コレ。」

あの終日陽気なアストルフオでさえ、微苦笑を貼りつけた顔を下に向けて硬直している。彼の隣でも神楽が口元を押さえており、桂は………あれ？あの人どこ行つた？

首を動かし桂を探していた最中、ふと視線を向けた先に、壁に凭もたれたエリザベスの姿が。ぬ、ぬ、と微かに聞こえてくる寝息に、「あんの野郎、狸寝入り決め込みやがった……!!」と心中で同時に叫んだ銀時と藤丸が、血走つた眼を向けると共にギリギリと食いしばつた歯を軋きしませた時だった。

「あのう………ちよつといいかしら？」

電話を終え戻つてきたお妙が、開いた襖から困り顔を覗かせる。一同の視線が彼女へと集まる中、お妙は言いくそうに切り出した。

「あらあ、頼もしいわ。只のうざったいロン毛しか個性の無いワケじゃないのね。」

「はっはっはっ、怒るぞ？そろそろ怒るぞ？」

「うおいヅラ！てめえ逃げようとてんじゃねーぞっ卑怯モンが！この藤○君二号!!」

「藤○君じゃないヅラだ！あつ間違えた桂だ！残念だがな銀時、こういったことはどんな状況であろうと、早い者が勝つと昔から相場が決まっているものだ。ではリーダー、定春君、参るとしよう！」

「んないちいちデカい声出さなくても聞こえてるネ、うるせーし近所迷惑だからトーン落とせヨ。それじゃちよつと行つてくるアル。」

「わんっ。」

腹の立つ桂の高笑いが離れていく中、去り際にお妙がこちらに振り向き、朗らかに笑つてこう言つた。

「そうそう………お残しは、許しまへんで♪」

終始彼女の顔に湛えられた、華のような笑顔。しかし銀時も藤丸も、その場にいる誰もが気付いていた………目だけは、決して笑つてなどいないということに。

「あ……ああそうだと、僕お登勢さんのところに電話してくるよ！こつちに住むこと早く伝えなきゃいけないし、パチ君電話借りるよ〜！」

言うなり席から立ち上がつてしまい、そそくさと今居間を後にするアストルフオ。そ

してフオウまでもが、彼の後をちやつかりとついていき退室してしまふ。

再び流れる気まずい沈黙……しかしそれを破つたのは、エリザベートの深い溜め息。

「……………やつぱり皆、食べたくないのね。アタシの料理なんて。」

「えつ、あの、エリちゃん——」

「いいのよ眼鏡ワンコ、自分でも分かっているから。頑張つて作ったつもりだったんだけど、こんな見た目じゃ食欲なんて少しも湧かないでしょ？やつぱり、真心を込めても駄目なものは駄目なのよ……………」

「いやコレ、明らかに真心とは別なモン入っているよね？最早怨念に近——」

そこまで言い止した銀時の口を塞ぎ、「そんなことないよっ！」と叫んだのは新八。すると彼は意を決したようにスプーンを握り、ケイオスタイ……………違つた。既に温ぬるくなりつつあるハラースレー（飯）に震える手で匙さじを入れる。

「し、新八君……………」

「おい新八、お前何を……………っ！！」

泡を食わされ狼狽うろたえる藤丸と銀時を余所に、新八は動かした目を不安げな顔のエリザベートへと向ける。そして笑み顔を向けた次の瞬間、彼は持っていたスプーンの先端を自らの口内へと入れた。

「……………眼鏡ワンコ？」

瞳をいっぱいに開き、言葉を失うエリザベート。もっしやもっしやと数回咀嚼そしゃくをした後、彼は笑顔に向けて口を開いた。

「……………うん、美味しいよ。エリちやつげボロツシヤアアアアアアアアアアツ!!」

男として決めねばならない台詞のところで、一体何をしでかしているのかこの眼鏡は。こちらもモザイクのかかった胃袋からの逆流物を咄嗟に掴んだくずかごへと吐き出し、やがて力尽きた新八はその場に倒れてしまう。時折痙攣けいれんする背中を唾然と見つめ続ける藤丸達であつたが、ドンツ!とすぐ側で聞こえてきた大きな音に呆けていた意識が覚醒する。

「……………嬉しいわ、うれboldogわ!美味しいなんて言ってもらえたの、初めてよ!さあつ
 どんどん食べてちよう дайな、デザートにこのクロカンブツシユもあるわよ!」

頬を染め、満面の笑顔でエリザベートが運んできたのは、小さなシュークリームを餡で貼りつけ積み上げた飾り菓子……………なのだが、やはりこちらのカラーリングも赤と黒が使われており、しかもグネグネと動いている。絵で表示出来ないのが大変惜しまれるが、例えていえは小規模サイズの魔神柱が皿の上に乗っている様子をイメージしてもらいたい。

「……………銀さん、こうなったら腹を決めるしかないよ。」

藤丸はズボンのポケットを漁ると、そこから取り出した一枚のカードのようなものを銀時へと差し出す。そこに描かれた金髪で赤薔薇のよく似合う美女は、余だよ！でお馴染みのローマ皇帝様。

「え？あの藤丸君、何コレ？」

「今年のNY祭りで余った礼装、それがあればHPが無くなっても一回は復活出来るから。頑張つて！」

「出来るから。じゃねーよっ！俺が死ぬ前提で話進めんのやめてくんない!!それに頑張るのはそっちも同じだかんな、一人だけ逃がさねえぞっ!!」

「わーんっ銀さんの人でなし！俺只の人間だよ!!^{ヒューマン}生きてる保証ないって!!」

今の状況から一刻も早く脱しようと、互いに互いを蹴落とし合おうとする醜い戦いが繰り広げる横で、エリザベートは新たな料理の乗った皿に自らのフォークを突き立て、肉らしき黒い塊をナイフを使って器用に切り分けていく。

「ほらほら、お腹が空いてるからそんなにイライラしてんじやないの？しようがないわね、このアタシが特別にあーんしてやるんだから、味わい感謝しておあがりなさい？」

中まで炭と化した肉塊を差し出され、二人は硬直する。食欲を掻き立てるジュシーな香りの代わりに鼻を突く、何とも言えない石油の臭い。^{したた}滴る赤い液体は血なのか肉汁なのか、はたまたどれにも当てはまらないモノなのか。

言い争いを止めた藤丸と銀時は、引き攣つった表情のまま互いの手を握り、まるで怯えた子犬さながらに全身を震わせ壁際へと逃れていた。

「さあ……………お残しはあ、許しまへんで♪」

彼女が浮かべたのは、数分前にお妙が向けたものと同じ、あの悍おぞましい笑顔。

「いつ……………いやああああああアアアアアアツ!!」

恐怖と絶望のあまり、作画が煤すす図か〇お風となった藤丸と銀時。

志村家に轟いた彼らの悲鳴は、夜陰の中に溶けて消えていったのであった。

《《続く》》

【捌】 再会そして、契約（Ⅱ）

「えー、てなことが数刻前にあつてだな……え？何があつたのかつて？さてはオメー、色々すつ飛ばしていきなりこつから読み始めた物臭ちやんだなあ？別に必読しなきゃならんトコでも無えが、どうしても知りたいつてんならコレの前の回を読んでくれよ？いちいち説明するなんて親切な真似、銀さんはしてあげないだからねっ。」

「銀さん、さつきから誰に對して話しかけてんの？」

「あ？誰つて藤丸君よお、人生の中においての貴重な時間をわざわざ裂いてこんな物語さくひん読んでくれてる、心優し〜い皆さんに決まつてんだろ……まあそれより、あの後礼装のスキルやら藤丸のスキルやらを駆使して、何とかあと半分つてとここで俺らの意識は途絶えた。要はそこで氣を失つちまつてたんだな。次に目エ覚ました時にや、段蔵や高杉クンに助け起こされてたつてワケさ。」

ふう、と息を一つ吐き、銀時はアストルフォの煎れてくれたお茶の入った湯呑を取る。すつかり温ぬるくなつてしまったソレを一息に飲み干し終えたのと同時に、開けられた襖か

ら段蔵が現れる。

「キユツ、フオウフオーウ。」

「あつ段蔵ちゃん、おかえり〜。」

「フオウ殿、アストルフオ殿、只今戻りました……………高杉殿、着物の繕いと洗濯を終えましたので、明日にはお召し出来るかと。」

「そうかい、色々とすまねエな……………にしても、俺らがここに踏み入った際に見たアレの正体と、台所^{あっち}で未だ異臭を放ってやがる放送規制オブジェが、まさか仮にも食いモンだったなんてな。」

「んま〜つ失礼しちゃうわね！ 仮とは何よ仮とは!! どつからどう見ても愛情の籠^ごめられた素敵な料理じゃない！ それなのに黒猫と段蔵ったら、アタシの渾身の作品のクロカンブツシユをいきなり粉碎しちゃうだなんて酷いじゃないのよ〜っ!」

「申し訳^ございませぬ……………敵^{エネミー}性反応が検知されたものでしたから、段蔵もてつきり新たな種^{しゆ}の魔神柱が現れたのかとばかり。」

「いいや段蔵、ありやお前が悪いンじゃねえ。只の手料理が攻撃仕掛けてきたり、画面の上^にこれ見よがしとHPが表記される筈無エだろ。ホラ藤丸、ついでに素材も落ちたからテメエにやる。」

「わ〜い、ありがとう高杉さん。銀箱かあ、どれどれ中身は……………やつたく塵だ! ちよう

ど足りなかつたんだよ！」

両手に素材を抱え、小躍りする藤丸を膨れ面で睨んでいるエリザベート。彼女は席を立つと、尻尾を立ててぷんすこと台所の方へ歩いていつてしまった。

「……何だか、エリちゃんに悪い事しちやつたかな。きつと一生懸命作ってくれたのに。」

「パチ君、きつとその思いやりの気持ちだけでも充分さ。彼女の料理クッキング・スキルの腕は最早、一種の個性みたいなものなんだから。前にカルデアで料理の上手な赤い弓兵アーチャーに習ったりもしたんだけど……出来上がったカツケーキ(仮)を試食した職員やサーヴァントが全員、青ざめた顔のまま昏倒しちやつたこともあつたつけ。ねえマスター。」

「覚えてる覚えてる、あの時は大変だったなあ。斯かくい俺もお腹がジエツトコースターにまで陥おちちやつて、終日トイレの住人になるしかなかつたんだよなあ……。」

「フオーウ、フオーウ……。」

湯呑を降ろし、遠い目で空を見つめるアストルフオと藤丸そしてフオーウに、銀時達は何と声を掛けてよいか分からない。そんな時、「ねえっ」と台所から戻ってきたエリザベートが一同に問い掛けてきた。

「そつちに卵焼きのお皿残つてない？お妙が作ったヤツなんだけど、さつき下げた食器の中に見当たらないのよ。」

「卵焼き？卵焼きといっても……………アレの中だと、どれが何だったのやら。」

鮮明に記憶に残る赤と黒のゲテモ……………んんっ失礼、料理を思い浮かべ、首を傾げる藤丸の隣で、銀時が口を開く。

「いや、誰かが食ったとしてもだ、大した奴だよそいつあ。銀さん500円あげたくなっちゃう。」

「え？300円じゃなく500円？銀ちゃんがそんなに出すなんて、お妙ちゃんの卵焼きってそんなに凄いの？」

「フオウ、フオウ？」

「凄いつつーか、まずアレを卵焼きと扱っていいモンなのか、最早卵としての形を忘れた可哀想な卵焼きと呼ぶべきか……………なあ新八？」

「そうですね……………弟の僕が言うのもなんですけど、姉上の作る……………というか生み出す料理は卵焼きに限らず、ほぼ確実に暗黒物質ダークマターと化してしまいますから。」

「ええと、確認したいんだけどいいかな？何をどうしたら卵焼きが銀河系に存在する未知の物体になっちゃうわけ？ていうか卵要素が微塵も残ってないのに、それを卵焼きと呼称してもいいの？」

「しゃーねーだろ、生み出した本人がそう言って……………いや、そう名付けてんだから。いいか藤丸、奴の卵焼きは絶対エ口にすんなよ。万が一俺らが食ったとしても、今はサー

ヴァントだから前より体の造りも幾分か頑丈になつてゐるし、まあワンチャンで死にやしねえだろ。だがな、もしも人間のお前がアレを食つちまうことがあれば……………いや、食うな。何があるうと決して食うんじゃねえぞ。お前にもしものことがあつちやあ、カルデアのマッシュやダヴィンチにどう説明すりやいいんだか……………」

険しい顔つきでぶつぶつと呟く銀時に困惑する藤丸、そんな面を上げない銀時の代わりに答えたのは、微笑を浮かべる新八であつた。

「とにかく、ここからの食事当番は僕達もやることにしようよ。皆門下生つて扱いだから、姉上も明日辺り皆にやるよう言つてくると思うし。」

「む……………それならしようがないわね。眼鏡ワンコ、アタシの手料理がまた食べたくなつたらいつでも言いなさい。気が乗れば作つてあげなくもないわよ?」

お世辞ではあつたものの、新八の「美味しい」という言葉にエリザベートはすっかり気を良くしたようで、フンツと得意げに鼻を鳴らす彼女を見上げる新八の額を一筋の汗が伝い落ちた。

「それにしても、卵焼きのお皿はどこに行つたのかしら? 仔犬、その辺にあつたりしない? 白の四角いお皿なんだけど。」

「フオウ?」

「えっと、この辺りには特に見当たらない……………お?」

辺りを見渡していた藤丸の目に留まったのは、開いた障子の向こう側。夜闇が広がるその向こうが何となく気になり、藤丸は立ち膝で縁側へと移動していく。

「……………あつた。」

外縁の下、地面にぼつんと置かれたそれは、正しく探していた卵焼きの皿。しかしそこには暗黒物質……もとい可哀想な卵焼きの姿はどこにも無い。おかしいな—と思いつつも、皿を取ろうと伸ばされた藤丸の腕に、不意に生温かい空気が纏わりついた。

「うひえっ!!」

思わず上げた悲鳴に、「どうしたの?」と背後で聞こえたアストルフオの声と近付いてくる足音。藤丸の隣に並んだアストルフオが顔を覗くと、彼はこちらを向くことなく、真ん丸に見開いた天色の瞳で皿の辺りを凝視していた。

「あつ、お皿ここにあつただく……………マスター?」

「あああ、アストルフオ……………この下、下に何かいる……………っ!!」

「へ?何かつて?」

「分かんないけど、多分生き物じゃあない、かな……………?だって今さつき、手に生温かき息みたいなモンが掛かって……………」

「うーん……………とりあえず確認してみよっか?僕も一緒に覗いてみるからさ。」

アストルフオの提案に些か躊躇いを見せるも、やはり好奇心には抗えない。藤丸が

渋々頷いたのを確認し、アストルフオが「せーのっ」と発した声を合図に、二人揃って縁の下を覗き込んだ。

逆さまになった視界に広がるのは、奥まで続く真つ暗闇。もつとよく見ようと目を凝らしていた時、月に掛かっていた雲が風に流れ、月明かりがそこへも差し込んできた。

「……………え？」

刹那、彼等は暗がりに浮かびあがった『それ』の姿を目視し、思わず声を？んでしま

た。無骨な輪郭、顎に生えた髭。逆さであろうと、それが顔であることは即座に理解出来

くちや…くちや…と、微弱な音によく耳を澄ませてみれば、『それ』は何かを咀嚼そしゃくしている。手に掴んだ黒い塊を口元らしき箇所まで運びながら、『それ』はひたすらに何かを貪り喰むさほっている。

ふと、こちらの存在まなこに気が付いた『それ』はピタリと手を止め、ゆつくりとこちらを向く。ぎらついた眼まなこを向け、言葉を失っている藤丸達を暫し睨ねめつけた後、『それ』は生

臭い息を吐き散らす口をにんまりと歪めて嗤い、そして——

「う……………ウホッ。」

やたらと低い声で、短く鳴いた。

「っギヤアアアアアアアッ!! 出たああアアアアアアッ!!」

二人の身体は弾かれたように跳ね上がり、勢いそのまま居間へと突進してくる。

「は!! え、ちよつ何——フロランタンッ!!」

何が起きたのか把握する猶予も与えられず、突としてこちらへ跳んできた藤丸を受け止める準備もままならぬ状態で、銀時は彼諸共床へと倒れていく。因みに定位置（銀時の頭）にいたフオウは危険を察知し、事が起こる数秒前にそこから飛び降り新八の腕の中へと既に避難を完了していた。

「銀さんっ!! 出た、出たんだよっ!! ごっごっご、ゴゴゴツ出たつ出た、ゴゴゴゴゴゴツ!!」

「何なに!! 何が出たつて!! ゴキブリ!! ゴ○ゴ13!! おいおいまさかゴから始まる妖怪とかじゃねえよな……やめろよおつ銀さんオカルト的なヤツはパス! 絶対エパスだかな!! アーメン○ーメンツ悪霊退散アブダクシヨントツ!!」

喧騒が繰り広げられるその隣では、同じく勢いを殺さぬまま突っ込んできたアストルフオが、期待に輝かせた瞳をいっぱいに開きながら、両手をこちらもいっぱいに広げている。

「いや〜ん止まんないよう！スギつちお願い！受け止めてえっ！」

接触するまでの距離があつという間に縮まり、あと1mを過ぎたという時、突如高杉の姿が霞かすみとなって消失する。

「ほへっ？」

不意を食わされたアストルフオの先にいたのは、こちらも目をぱちくりさせたエリザベート。車とアストルフオは急には止まれない。誰かが瞬まはたきをした直後に見た光景は、派手な音を立てて激突し畳の上へと倒れる二人の姿であつた。

「いった〜……………ぎやつ！ちよちよちよ、ちよつとアストルフオ！早く離れなさいようつ！アイドルは握手以外のお触り厳禁なんだから！それにこんなところ、週刊誌の記者やファンに見られでもしたら、アイドル続けていけなくなつちやうウウツ!!」

「あいたたた……………ゴメンねエリちゃん、まさか霊体化して避けられるとは思つてなかつたよ。むう〜流石はスギつち、やつぱり一筋縄ではいかないね。」

うんうんと一人頷く彼の横で、未だ引つ付こうとしている藤丸を銀時が懸命に剥がそうとしている。一方その頃、既に実体へと戻った高杉は段蔵と共に、先程藤丸達がいた

縁側の下を同じように覗き込んでいた。

「段蔵、そつちはどうだ？俺にや鼠ねずみ一匹見えねえが。」

「はい、こちらも暗視モードをONにして確かめておりますが、やはり生物の姿は何も捉えられませぬ……………ですが。」

不意に、ワントーン低くなる段蔵の声。隣で縁の下から頭を上げた高杉もまた、既に彼女と同じことに感づいているようであった。

「…………残り香が、って言やあいんだかな。縁下この空気ン中に、微弱だが魔力らしきモンが漂ってやがる。これが魔物のなのか、はたまた別のモンかは俺にや分からん。それに、もう風前の塵だ…………ツラがいてくれりやあ、何か分かつたかもしれんがな。」

「んん…………？そういえば、ツラ君達遅いね。お妙ちゃんの勤め先ってそんなに遠いところなのかな？」

アストルフオが首を傾げたその時、遠方から引き戸を開ける音と共に、「ただいまヨウ！」と元気のいい声、そしてこちらへと駆けてくる一人と大きな一匹の、床板を踏む音が近付いてきた。

「あら、噂をすればなんとやらね。それにしても随分と遅かつたんじゃないかしら？もう長い針が三周も回ってしまったてるわよ。」

時計を見上げたエリザベートがそう言い果つはのと同時に、両手いっぱいはに袋を持った

神樂が、息を切らして現れた。続いて同じように背中に荷物を乗せた定春と、神樂ほどではないが大きい紙袋を抱えた桂も、揃って居間へと集結する。

「おおツラ、遅かったじゃねーの。」

「ツラじゃない桂だ。お妙殿の働く店で『もてなし』を受けてな、少々寛くわぎ過ぎてしまった。」

「『もてなし』って……因みに桂さん、お財布は大丈夫でしたか？ 姉上にポツタくくられたりしてませんか？」

「案ずるな新八君、酒は一滴も飲んではおらん。世間話のついでに情報を集めてきただけだ……まあ店を出る際に何人かの舌打ちが聞こえたような気がしたが、あれは気のせいだな、気のせいに違いない。うん。」

「フオウツフオウツ！」

「わんわんっ、わん！」

「銀ちやくん藤丸っ！見てヨこれ、姉御の店の人から沢山お土産とお菓子貰ったアル！」
満面の笑顔に嬉々として袋の中身を知らせる神樂、そんな彼女の目に縁側の二人の姿が留まるや否や、瞳を更に輝かせた彼女は抱えていた袋を放り（新八とアストルフオが慌ててキヤッチしたため事なきを得た）、彼らの元へと駆け寄った。

「段蔵、スギっち！おかえりアル！」

勢いを伴って抱き着いてきた神楽を容易に受け止め、段蔵はよしよしと彼女の頭を撫でる。心地良い手付きに目を細めていた神楽だったが、ふと高杉の方を向いた際、彼の着物のやや開いた衿えりから僅かに覗く包帯を見つけた途端、その顔が一気に強張る。

「スギっちー！ それどうしたアルか？！ 痛くないの？！」

「ああ……………少しドジ踏んだだけだ、大したこたアねえさ。」

神楽を安心させるように、いつもの表情かおと声色で返す高杉。その様子を新八や藤丸らと荷物を片付けながら眺めていた桂であったが、穏やかだった彼の面おもてが、不意に険しいものへと一変する。

「えっ？ ツ、ツラさん？」

渾名あだなで呼ぶ藤丸の声にも反応することなく、桂は大股の歩幅で高杉の元へと迫っていく。きよとんとした様子の段蔵と神楽に構うことなく、桂は伸ばした腕で高杉の衿を乱暴に掴んだ。

「高杉……………これはどういうことだ？ 貴様、一体『何』と接触した？！」

張り上げた桂の声は居間中に響き、皆の視線が彼と高杉に集まる。肩を戦慄わななかせた桂の見開いた瞳から伝わってくる、激しいほどの憤怒と狼狽。しかし真正面からそれらを受けても、高杉は顔色一つ変えることはない。やがて彼の手が諭さとすように桂の手の甲を軽く叩くと、桂はハッと我に返り慌てて衿を離す。

「……………すまない。だが高杉、それは——」

「そうだヅラ、お前にまず視^みてもらいてエモンがあんだ。積もる話は後に回して、とりあえずはこつちから頼む。」

「あ……………ああ。」

すつかり毒気を抜かれてしまい、喉から出てこようとしていた疑問を一先ず飲み下す。桂と同じ視線を向ける銀時に背を向け、「段蔵」と高杉は隣の彼女の名を呼び、そこに含まれた意図を察した賢い段蔵はがさごそと自身の衣服の中を漁る。

「ええと、確かこちらに……………あ、ここにでした。」

あちこちを散々探った後、彼女が例の札^{ふだ}を取り出したのは何と豊満な胸^{バスト}の谷間。端を摘^{つま}み、するすると数枚の札を引き摺^ずり出していく彼女の顔には、微塵の恥じらいも見受けられない。あんぐりと口を開けている桂の掌に、「どうぞ」と彼女は仄^ほかに温もりが残る札を置いた。

「お前さん、何つー場所^{トコロ}にしまつてやがんだ……………?」

「公式の設定には存在しないこの作品だけのオリジナル設定なのですが、段蔵のはあらゆるものを収納出来るスペースとなつていのです。戦闘に用いる苦無や煙幕なども、ここから取り出して使つております。」

「んなつ……………何つーいかがわしい四次元ポケットなんだオイ。なあ段蔵ちゃん、銀さ

んにもその中、よく見せてくれない？」

「銀さん、何を企んでるかは知らないけど、悪い事は言わない。それはやめといた方がいいって……ウチのカルデアにもその箇所がとも豊か、いや豊か過ぎる娘がいるんだけど、彼女の谷間デス、パレにナニかを突っ込んだり落ちたが最期、一度そこに入ってしまったものは二度と帰って来ない、虚数空間の中から永久に出られなくなっちゃうらしいからね……もしかすると、段蔵も例外じゃないかもしれないよ。まあ、銀さんの銀さんがどうなつてもいいってなら、俺も強くは止めないけどさ。」

「え、何それ……おっぱい怖い。」

銀さんの銀さんを守るように手で覆い、顔の青ざめた銀時はすすすじと後退していく。何故か新八も自身の新八を押さえているのだが、まあ気にせず次に進もう。

「フ〜ンだっ！何よ男なんて、女の価値や魅力は胸の大きさに決まるものじゃないんだからね！大体今のアタシはまだ14歳の処女おとめなんだしい？将来ボンキュッボンになることは既に約束されてるんだし！まあ、外見もクラスもC Vも変わっちゃうんだけど！ね〜っフオウ？」

「ンキュ？」

「エリちゃんの言う通りネ！胸の大きさしか見てない男はサイテーアル！因みに私も二年後、そして五年後はマミーみたいなごっさ美人のダイナマイトになるんだからな！嘘

だと思ふんなら単行本最新刊（現時点での七十五巻）と劇場版完結篇を要チェックしろ
ヨ！なっ定春？」

「わう？」

既にOPPAIの話だけで原稿が一ページ埋まりそうになっている一方で、桂は段蔵から受け取ったその札を丹念に観察している。

「ふむ、何らかの魔術が施されているようだが、邪よこしまは念は感じられない……………段蔵殿、これをどこで？」

「はい、道場まじの門の手前にて見知らぬ少女より手渡されたものです。きつと『いい事』が起ころ、彼女はそうも言っておられました。」

「見知らぬ少女だと……………？高杉、貴様が一緒にいながら、そのような不用心な真似を……………」

「俺も最初は疑った、無論今も疑念は晴れちやいねエがな。だが奴から敵意の一切は感じられなかった。それにこうも言っていたぜ……………自分達は常に、俺達の味方だな。その言葉の真偽は定かじゃねえ、だがここは一つ信じてみるのも一興じゃねえか？」

くつくつと笑いながら煙管を吹かす高杉に、呆れた桂は眉間を押さえ溜め息を吐く。

「……………で、これをどうすればいい？」

「彼女によれば、敷地の東西南北にそれぞれ貼り付けると良い、と申しておりました。」
「うむ、ではそれに従いやつてみるか。」

「ちよちよちよつ、待つてくくださいよ桂さん！万が一何かあったらどうするんです!! こ僕の家なんですから！」

わたわたと慌てて止めに入ろうとする新八。しかしそんな彼の肩を掴む、第三者の手。

「……ちよ、銀さん？何で止めるんですか!!」

「まー落ち着けよ新八、言い出しつぺの法則つて知ってるか？何事にもそれをやろうと
言い出した奴にはな、全てにおいての責任が自動的に降りかかるモンなんだ。つまり今
の場合は言い出しつぺはツラだから、もし何かあったら全責任はコイツが負うつてこと
になる。例えば家が壊れようがそれでお前の大事にしてるお通のグツズやら何やらが吹
き飛ばうが、全責任はコイツが負う。大事なコトだから二回言ったぞ？それでいいじゃ
ねーか。」

「……成程、分かりました。それなら僕が各方角に案内しますんで、皆さんついてきてく
ださい。」

利き手で眼鏡を上げ、颯爽と歩き出す新八。その背中をぞろぞろと追いかける数人
と、周章し駆け出す桂。

「ちよつ待て待て！確かにやつてみようとは言つたぞ！だけど責任重すぎない？俺一人が背負なきやならんなど聞いておらんぞ！第一今の俺は攘夷活動やつてはおらんのだから、金だつて碌ろくに持ちあわせてはおらぬ。それにもし道場どじやうに危害が及ぶようなことがあれば、お妙殿からの制裁も怖い……よくて切腹か、或あるいは——あつ、待つて皆！歩くの早つ！！頼む俺の話も聞いてくれ、頼むからああアアねええエエツ！！」

「あくむつ………んんんっ美味しいアル！銀ちゃんのとこにいた時には決して巡り会えなかつた上物な味ネ！」

モンブランを口いっぱい含み、広がる甘さと栗の風味に思わず笑みが零れる。神楽がケーキを堪能する傍らで、定春とフオウはそれぞれ藤丸と高杉の手から甘栗を貰つていた。

「定春、凄いがつつくね。美味しい？」

「わふつ、わんわんっ！」

「あははっ、そんなに舐めたらくすぐつた——つてギヤアアア！涎よたれが、涎よたれが服の中に

いいいつ!!」

定春からの猛烈な愛情表現に悲鳴を上げる藤丸と重なるようにして、「ごちそーさまっ!」と神樂が空からになった皿を前に手を合わせた。

「どうだい? 満足してただけたか、お姫ひめさん。」

「ごっさ美味かつたアル! ありがとうな、スギっち!」

高杉への感謝を述べると、神樂はいそいそと先程運んできた袋の中身を広げ始める。出てきたのは幾つもの菓子と、そして予めあらかじりボンのついた可愛らしい柄のラッピング袋。神樂は並べた菓子と何度も睨めつこを繰り返し、その中からチョイスしたものをラッピング袋の中へと詰め込んでいた。

「ねえ神樂ちゃん、それってもしかして……。」

「うん! これね、松陽にあげるんだヨ! こうやって包んだのをこっさり枕元に置いておけば、松陽が起きた時にびっくりすると思つて、さつき姉御と考えたアル!」

意気揚々に答えながら、神樂が手に取つたのは眼鏡の形をしたマーブルチョコ。それを最後に袋はいっぱいになったようで、神樂は鼻唄を歌いながら綺麗にリボン結びを施していた。

「よし出来た! 後はコレを松陽の枕元に……スギっち、松陽まだ寝てるアルか?」

「ああ……まだ目は覚ましてねエらしいが。」

「そっか………こうしてサブライズの準備が出来るのは嬉しいけど、早く起きてまた笑顔見せてほしいって気持ちのが、今は強いアル………いよっし、早速こっそり置いてくるか！」

寂しい心情を振り払うようにして何度も頭かぶりを振りながら、立ち上がった神楽は隣の部屋へと歩いていく。音を立てないよう静かに開けた襖の間から、先程置いた甘栗を口に啜すすえたフオウも一緒に、未だ眠る松陽の元へと忍び足で向かって行った。

「……嬉しそうだったね、神楽ちゃん。」

「ああ、そうだな。」

「俺も心配だからなあ………早く松陽さんの意識が戻ってくるといいんだけど。」

「……ああ。」

「それにしても、あの時見た松陽さんの背中うしろの光、一体何だったんだろう………？前にも俺達が魔物に襲われた時、似たものを——高杉さん？」

何気なく彼の方を見遣やつた藤丸の目が映したのは、常時変わらぬ高杉の横顔。左の目が包帯に覆われた状態のため、そこから感情は読み取れない。だが心なしか、呼吸と連動する肩の動きがいつもより小刻みであるように感じられた。

「あの………高杉さ——」

言いようのない不安に駆られ、名を呼ぼうとしたその時、ドタドタと廊下の奥から響

く複数の足音にそれは掻き消される。

「やつほくマスター、たっだいま〜!」

「居残りご苦労様〜。あら? 仔兎の姿が見えないけど。」

エリザベートが室内を見回していると、開いた襖からフオウを抱いた神楽が上体を覗かせ、「はいは〜いつ」と返答した。

「あれ? もう札は貼り終えたの?」

「いんや、最後の一枚は居間の真正面に貼るんだとよ。そんじゃあツラ、最後の仕上げ頼んだぞ。」

「もし道場が爆破四散したら、その時は立て直し費用+慰謝料も丸々ふんどくりますからね。」

「ツラじゃない桂だ! だから大丈夫だってば新八君、それに爆破したらここにいる全員も木^こ端^{はみじん}微塵になるだろう! あっ、そうなれば俺の保険金から費用慰謝料その他諸々払えばイケるのでは……?」

「桂殿、とりあえずモノは試しです。先程の三枚を貼った際にも罨のようなものは作動いたしませんでした。きつと最後の一枚も大丈夫です。」

「むう………そうだな、ここでぐだぐだが続いてまた無駄に文字数を使ってしまうよりだつたら、俺も武士として腹を括^くろう。さあ段藏殿、また先のアレを頼む!」

先のアレ、桂がそう告げた直後、「承知しました」と腰を下ろし屈かがんだ体勢をとる段藏。そこへ桂が覆い被さると、彼女が立ち上がった時の合わせた高さは、ちょうど鴨居辺りまでとなる。

少女が成人男性をおんぶするという頓とんちん痴気な光景に、普通逆じやね？と誰もが心の中で静かに突っ込む中、桂は札を持つ手を震わせながら鴨居へと近付けていく。

「ではいくぞ？ ホントにいくぞお？ いいのだな————カッラ、行っきまあ
あアアアつす!!」

何度もしつこく振り向いては確認を求めていた桂であったが、青筋の浮き出た銀時と高杉カウが空の湯呑を振りかぶっていたため、慌てて正面へと向き直り、そして札を押し付けた。

糊のり付けなどしておらずとも、まるで吸い寄せられるようにして鴨居へと接着する札。そして————流れる、沈黙。

「……………あれ？ なんにも起きないね。」

拍子抜けしたように呟くアストルフオの声と、神楽が余った菓子そしゃくを咀嚼する音が、居間に漂う静寂に響いた。

「……………はは、ハハハハハハ！ ほら見ろ、危険など何も起こらないではないか！ やはり俺の言った通りだな、ああよかった！ 本当によかった！」

緊張から解放されたためか、高笑いをする桂の額やら背中やらを、噴き出た大量の汗が滝のように伝う。

本当に何も起こらないのか、と桂を除く誰もが訝^{いぶか}しんでいた時だった。

「あ、あの桂さん……………見てください、札のトコ。」

強張った顔で一点を見つめたまま、新八が指をさす。一体何があるのかと鴨居へ向き直った刹那、桂^{かれ}の顔もまた驚愕の色に瞬時に染まった。

「なっ……………、それは……………!!」

——光っている。否、札に記された文字や術式らしき図が、まるで心臓の鼓動の如く一定の間隔で点滅を繰り返している。

その光は徐々に弱まり、やがて淡い輝きは完全に消滅する。呆気にとられる一同であつたが、ここで声を上げたのはまたもアストルフオであつた。

「ん……………？ んん？ ねえ皆、何か気が付かない？」

「あ？ 気付くって……………？ そういやあ、さつきより部屋の空気が澄んでるような……………」

先程とは明らかに何かが違う、しかしそれが何なのかを上手く説明することが出来ない……………言いようのない違和感に皆が首を傾げていた、その時だった。

『ピピッ
ピピッ
ピピッ』

——その音を耳にするのは、何時いつ振りになるだろうか。

段蔵も、エリザベートも、アストルフオも……そして、藤丸もが、何が起きたのかを直すぐに理解出来なかった。

「藤丸……？なあ、今の音って——」

『ピピッ　ピピッ　ピピッ　』

断続的に鳴り続ける電子音。呆けた意識を覚醒させ、藤丸は咄嗟に音の源——自身
の腕に肌身離さずつけていた、カルデアとの通信機へと目を向ける。

「(……やっぱり、壊れてなんかなかったんだ……!!)」

受信を告げるアラートと、点滅を繰り返すボタン。驚愕と安堵に硬直する藤丸の背中

を、叱咤しつたするように叩く大きな手。

「あ痛いたつ……………銀さん？」

「ほら、ボサツとしてねえでさつさと出ろよ。細けエことはまず後回しだ、待ちに待ったマシユ達からの通信かもしれないねえだろ……………？早く出て、元気な声聞かせてやんな。」

白い歯を見せ、朗ほがらかに笑う銀時の言葉に、藤丸の緊張は春先の氷雪のように溶けていく。

「……………うん、ありがとう。銀さん。」

彼への感謝を伝え、藤丸は俯うつむいていた顔を上げる。けたたましく鳴り続ける音が響く中、顔を合わせたそれぞれと力強く頷き合う。

もう藤丸の心に、迷いも躊躇ちゅうちゆいも無い。大きく深呼吸をし、藤丸は展開したディスプレイの『受信』を示す項目へと触れ、そして——震える指に、力を込めた。

《《続く》》

【捌】 再会そして、契約（Ⅲ）

『ピッ』

画面のコマンドに触れた直後、空に展開されるディスプレイ。

痛いほどの深閑の中に、誰かの生唾を飲み込む音が響く。

皆が目を見張る中、砂嵐を映し続けていた電子モニターに、変化が訪れようとして――

『先輩っ!!せんぱーいっ!!』

突として、画面いっぱいに映し出される少女の顔面。

スピーカーを介して室内の空気を震わす大声量に、居間にいる誰も（一部除く）が一齐にひっくり返った。

『先輩、どこですかっ!? どうか応答願います! 立香先輩っ!!』

『ここから、気持ちに分かるけど一旦落ち着いて。そんなに顔を近付けちゃあ、向こうから確認も出来やしないだろ?』

モニターの端から聞こえてきた第三者の声に、「す、すみません」と小さく謝った少女の顔が離れていく。

やがて青と白の画面が少女の姿を映し出すと、上体を起こした藤丸の目は大きく見開かれる。

「……………マシユ?」

震える声が名を紡ぐと、少女——マシユも少しだけ驚いた様子を見せ、やがて眼鏡越しの瞳に輝きを灯した。

『……………はい、先輩。マシユです、マシユ・キリエライトです!』

「マシユ……………夢じゃ、ないよね? 本当のホントに?」

『ええ、夢ではありません。本当のホントにマシユです!』

「フオーウ! (ガブツ)」

「痛でででっ! フオーウ君痛い痛い!」

『あつ! 駄目ですよフオーウさん! というか、やはりそちらにいらしたんですね!! 心配したんですからっもう!』

ぷりぷりと怒るマシユに、「キュウ……」と小さく鳴いたフオーウは長い耳を下げ、僅かに落ち込む素振りを見せる。

「あはは………ん? こうして痛いってことは、やっぱりこれは夢じゃない………んだよね?」

フオーウに噛まれた指の痛みが、この奇跡を現実のものであることを知らせてくれる。徐々に引いていく痛みとは正反対に、驚愕と歓喜に高揚する気を抑えられないまま、藤丸はモニターへとつんのめった。

「マシユ………」

『先輩………』

「マシユ………ああ、本物のマシユなんだ!」

『はい、正真正銘あなたの後輩、マシユ・キリエライトですよ! 立香先輩っ!』

「ま………マシユ!」

んのお顔を見られてやつと安心出来ました。本当に、ご無事で何よりです。』

「マシユさん、お久しぶりです！またお会いできるなんて嬉しいなあ……。」

「おい童貞眼鏡、鼻の下伸ばしてンじゃねーぞ。マシユ、私達も皆元氣アルよ！なつ定春？」

「わおーんっ！わんわんっ！」

和氣藹々とした雰囲気わきあいあいに室内が満たされていく一方、その中に溶け込めないでいる英靈が二騎。事情をまるで知らない桂は只困惑し、高杉は素知らぬ顔で煙管くゆを燻らせている。

『はいはい。再会の喜びに浸るのもいいけど、このまま一話丸々とそれで持たすわけにはいかないだろう？そろそろ私にも喋らせてくれないかな？』

『あつ、すみません。私つたらしい夢中になってしまつて……。』

『別に謝ることはないよ。君が藤丸君に一番会いたがつていたのは、私も職員達も理解の上だからね。さて、ちよつと割り込ませてもらうよ。』

モニターのマシユが横へとずれ、ひよつこりと顔を覗かせる黒髪の美女。突然の新キャラの登場に瞠目する桂に対し、彼女はにつこりと微笑んだ。

『おや、その色男さん達は初めて見る顔だね？自己紹介が遅れて申し訳ない。私はレオナルド・ダ・ヴィンチ、皆はダヴィンチちゃんと呼んでるよ。こう見えてカルデアの

技術局特別名誉顧問を務めてる、万能の英霊なのさ。』

「あ、ええと……………俺は桂小太郎、こちらでは魔術師キヤスターとして現界している。」

『ふんふん、私と同じクラスか。キャスターがいるなら色々心強いかもね、よろしく』

……………それで、そちらの彼は？』

ダヴィンチ、もといダヴィンチちゃんの興味が、高杉へと移る。向けられる視線に

一瞥いちべつを返し、抑揚頓挫おんそくの無い声で彼は答える。

「……………高杉晋助、復讐者アヴェンジャーだ。」

あまりに素気の無い態度と峻険しゅんけんな雰囲気ふんぎに、マシユは眉を寄せる。しかし彼女の強張った表情は、フオウが高杉かたれの膝ひざに飛び乗ったことにより、驚きへと変わった。

『フオウさんが自分から……………あんなに懐いていらつしやるなんて……………』

「な？驚いただろマシユ。英霊ひとなんざ見かけにやよらねエんだぜ。」

『……………はい、銀時さんの仰おつしやる通りですね。ほんの少しでも訝いぶかしく思ってしまった自分が恥ずかしいです。』

俯うつむくマシユを尻目に懸かけ、高杉は何も答えることなくフオウを撫なでる。態度とは裏腹の柔らかい手付きで背中を撫なでられ、「キュウウウ…」と鳴き声を洩はらしフオウは目を細めた。

『ん……………？高杉くん、君まさか——』

ダヴィンチちゃんが徐に口を開いた時、穏やかな光を湛えていた高杉の右眼が刃の如き鋭さへと変貌し、彼女を睨みつける。画面越しであれど、視線だけで対象を射殺さんとはかりの眼光に怯み、尚且つ彼が声に出さず伝えてくる内容をそこから即座に読みとり、賢いダヴィンチちゃんはそれ以上の穿鑿を止めることにした。

『まあとりあえず、君達が元氣そうで何よりだ。管制室にいる職員達も皆喜んで……ああ、ムニエルなんて号泣じゃないか。誰か彼にティツシユパーパー渡し……いやもうコレ、ティツシユじや間に合わないな。タオル持ってきてきてタオル。』

「俺達の方は何とか……まあ、色々あり過ぎてどれから報告していけばいいのか分からないんだけど……。」

『構わないさ、こちらは本日始めて通信に成功したんだ。何でもいい、何一つ分からないことだらけの私達に、今日までに起きたことを教えてくれないかい？』

ダヴィンチちゃんが言うなり、藤丸を始め何人も拳手が一斉に上がる。そして彼女が誰と指名するのを待たずして、皆堰を切ったように話し始めた。

「マシユ、それにダヴィンチちゃん！実はこつちの世界では、ずっと夜が続いてて――

――

「聞いてよ二人とも！アタシは煌びやかなネオンの街を見たかっただけなのに、変な宇宙人や魔物が次々と襲ってきてね！いくらアタシが輝かしいアイドルの卵だからっ

て、いきなりボテイタッチを要求してくるだなんて非常識にも程があると思わない!!」
「あつそうだ! ねえ二人ともつきつき縁側の下にゴリラがいたんだよ! マスターも僕も見たもんつ嘘じゃないもん!」

「フオーオウ! フオーフオーフオーツ! キュウウツ!」

「おいおい、おたくらがレイシフト? した到着時間、思いつくそズレてて結局結野アナ見逃しちまったじゃねーか! 俺が一番楽しみにしてた湯けむりリゾート（ポロリもあるカモよ☆）だったつてのに、局に頼んで録画したテープ貰ってくんねえと承知しねエぞコノヤローツ!!」

「あゝ銀ちゃんズルいネ! それなら私も、『家政婦は多分見たかもしれない・愛と憎悪の土俵入り、どすこいバンジー殺人事件!』のテープ欲しいアル!」

「わんわんっ! わんっ!」

『はいはいはくい。諸君らの逸る^{はや}気持ちはよくく分かるが、そう一遍^{いっぺん}に喋らないでくれ。いくら私が天才とはいえ、かの厩戸皇子^{うまやじこのおうし}みたいな真似は出来ないからね。きちんと順番で頼むよ、はくい一列に並んだ並んだっ!』

広い庭の草陰から、雨を求める蛙かわずが集すだく声を聞きながら、桂は一人縁側えんがわに立ち、異形の月と宇宙船ふくねの浮かぶ空を見上げている。

そんな彼の後ろでは、居間に集まった皆から各々おのおの提供された情報をまとめたダヴィンチちゃんチちゃんが、幾つかの要点を読み上げる。

『…………成程ね。晨夜しんやの区別付かず、夜の帳とばりに覆われた常夜の江戸の国。それと関連するかのようように同時期に出現した、人間を襲う正体不明の魔物達エネミー……………そして何より気にかかるとは、君達の前に一切の記憶を失った状態で現れた、銀時君達かっの嘗ての恩師である男性……………ええと、松陽君っていったっけ？』

確認を求めるダヴィンチちゃんに、銀時や神楽そして藤丸が頷き、答えを示す。

『しかしその松陽君について、やはり気になる点てんが幾つもあるなあ。背中に浮き出た不可解な紋様もんがたといい、記憶を喪失していることといい、まあ彼の記憶が欠落している原因として挙げられるのは、恐らく現界時に起きたであろう何らかのバグによるものだと考えられるけど……………うーん、こればかりは推測すいそくだけだと心許こころもとないなあ。出来れば松陽君本人にも、詳しい話を聞いてみたいところところなだけけど。』

「…………松陽は、具合が悪くて寝てるヨ。今はまだそつとしておくネ。」

定春じやうちんのもふもふボディに顔を埋め、神楽は閉ざされた襖ふすまを向いてそう呟く。未だ開く

ことの無い堅縁の狭間、その箇所を見つめ続ける彼女の瞳に揺らぐ憂うれいを、藤丸や銀時を始め誰もが感じ取っていた。

『先輩からお聞きした、その松陽さんという方……とても皆さんに慕われておられるんですね。』

「うん。凄く優しくして穏やかな人なんだ、目が覚めたらマシユにも是非会ってもらいたいな。」

「うんうん、マシユもきつと仲良くなれるよ。僕も松陽さんのこと大好きだもんっ！」

和にやかな藤丸とアストルフオの言葉に、画面越しに頬を染めたマシユは微笑みと共に「はいっ！」と頷く。漂っていた緊張が彼らのやり取りによつてやや緩和されていたその時、縁側の桂が不意に呟いた。

「おっ、戻ったか。」

彼の声に振り向いた一同がみたものは、プルルル……と安臭い感じのプロペラ音と共にゆっくりと降下してくる、数体の小さな式神エリザベス。国民的代表作の某青い狸、じやなかつた猫型ロボットが飛行時に頭部に装着している、あの黄色いプロペラに似たものを頭頂で回転させ、各々手に持った小型のカメラを抱えたまま、エリザベス達は次々と広げた桂の腕の中に収まっていく。

「よしよし、皆無事に帰ってきてくれて何よりだ。もう休んでよいぞ。」

それぞれのエリザベスが、桂からの^{わざら}労いの言葉と優しい手付きでのナデナデを^{ほじ}施された後、敬礼をして消失していく。やがて最後の一匹が消えた後、桂は皆のいる居間の中へと歩を進めた。

「ダヴィンチちゃん殿、映像のデータは上手くそちらに送られたらどうか?」

『バツチリさ、助かったよツ……桂君。しかし君の使い魔、中々ユニークなデザインだねえ? 私の芸術的センスが久々にざわついてるよ。機会があればもつとよく観察してみたいものだ。』

「おおっ!! エリザベスの魅力が理解出来るとは、流石はダヴィンチちゃん殿! そなたが偉大なる科学者にして芸術家の英霊であると、かねがね藤丸君から聞いてはいたのだが、まさかこれまでに豊かな感性を持つておられるとは……! 『いつか』などと待ちきれぬ! 是非今、ここで、俺の可愛いエリザベスを存っ分に見てくれ!」

鼻息を荒げながら、桂は展開した緑の巻物を広げる。紙面に綴^{つづ}られた文字が輝き、それらが光の球となつて天井付近へと浮き上がり――

「え? えつ――うわああアアアツ!!」

悲鳴を上げる新八を始め、驚愕する一同の頭上から次々と振つてくる、大中小様々なサイズの式神エリザベス。

この光景を分かりやすくお伝えするために礼を挙げるとすれば、ジャンヌ・ダルク・オ

ルタ・しゃん……失礼、ジャンヌ・ダルク・オルてや……ええいつもう、縮めてジャンヌサンタリイの宝具、『優雅に歌え、かの聖誕を』を思い浮かべていただきたい。クリスマスケーキやプレゼント、可愛らしいぬいぐるみが雨の様に降り注ぐあちらに対抗するように、桂の展開した大量のエリザベス（中には「宇宙怪獣ステファン」と書かれた^{まが}紛い物もあつたが）は、^{またた}瞬く間に居間中を埋め尽くしていった。

「つぶは〜！ テメエ何しやがんだ馬鹿ツラ！！ 死因がオ〇Qで窒息^{ちっせく}とか冗談でも笑えねぞ！！」

「ツラじゃないかつ……もごっつ！！ ふお、ふおら！ 口のなふあひ入^{ふあい}つふえふあ、ゲホツゲホツ！」

「ひゃん！ ちよ、何してるの！！ アタシのスカートの中に潜^{くすく}つちや駄目……あはっ！ あはははは！ やめて〜動かないで〜撥^{くすく}たいつ、キャハハハハハ！」

「わうっ！！ わんわんっ！ きやいんっ！」

『た、大変です！ 部屋の中がエリザベスさんだらけに……先輩、姿が見えませんがご無事ですか！！』

「うわ〜マスター！ 犬〇家のアレみたい^{ただよ}に上下逆さまにひっくり返つて漂^{ただよ}ってる！ 今僕が助け……る前に、面白いから写真撮つてもいい？」

最早收拾つかず、というかこのままだと話が前に進みやしない。読んでくれている側が

既に飽き飽きしてるだろうし、誰でもいいから收拾つけてくれないかな。などとダ
ヴィンチちゃんの中の眩きを汲みとったかのように、突として響き渡る咳払いの声。

明確な苛立ちを含んだそれに喧騒はぴたりと止み、恐る恐る動いた一回の首が一点へ
と集中する。

その先にあるのは、首から下がエリザベスに埋もれている状態でこちらを睨む高杉の
姿。頭と肩の上でフォウと小さなエリザベスがじゃれ合う微笑ましい様子が繰り広げ
られていようとお構いなし。鋭い眼光を放つ右目から伝わる憤然と、見るも明らかな
慍色おんしよくに、居間にいる全員を始めデイスプレイの向こうのマシユまでもが恐懼きょうくし口を噤つぶ
だ。

『桂くくん、せっかく召喚してくれたのに悪いんだけど、やつぱりモニター越しだとよく
観察出来ないなあ。また今度、それこそ君がカルデアに来られた時にでも、じっくりと
研究させてくれたまえ。』

「あ、ああ………そうだな、そうするとしよう。」

そう言ってから桂が二、三度手を叩くと、式神エリザベス達はポンツと煙と共に一斉
に消滅する。居間の体積を満たしていたそれらがいなくなつたことにより、宙ちゆうにある体
は重力に従つて下へと引つ張られ、高杉や段蔵のように畳へと器用に着地する者もあれ
ば、銀時や藤丸のように「痛えっ！」と上げた声と共に尻やら顔からダイブする者もち

らほらと見受けられた。

『大丈夫ですか先輩っ!! 今顔面から諸もろに着地もろされましたが……!』

「フオウオウ?」

「あいててて……うん大丈夫、平気平気。」

赤く腫れた鼻を押さえながら体を起こし、藤丸はマシユとフオウに親指を立ててみせる。救急箱を持つてきた段蔵に手当を受ける彼の周りで、サーヴァント達は皆モニターの方へと体を向け、腰を下ろした。

『さて、今のぐだぐだタイムの間にこちらは映像からのデータ解析を終えたようだ。』

「ほう、あの短時間でか。カルデアにやあアンタを始め、随分と有能な人材が揃ってるらしいな。」

『んふふ、君のような色男にお褒めに預かるとは光栄だよ、高杉君。そつちに聞こえているかは分からないけど、管制室こちらにいる女性職員達も黄色い声を上げているよ。君の言う通り、我がカルデアの職員達は誰もが優秀であり、誰もが誇れる宝なのさ。さてと、ここからは私とマシユがやるから、皆は少し休んでいいよ。』

ダヴィンチちゃんがそう言ったと同時に、スピーカーの向こうから騒さわめきが聞こえてくる。彼女とマシユの間から手を振るムニエル……先程の号泣していたとされる男性職員に同じく手を振り返す藤丸に和やかな眼差しを送った後、ダヴィンチちゃんは手元

のタブレット端末に目を移し、そしてマシユと共に口を開く。

『まずは君達のいる、そちらの世界についてなんだけど………そのことについて、私から一つ謝罪をさせてほしい。』

途端、ダヴィンチちゃんの顔からモナ・リザの微笑が消える。普段あまり見ることのない、いつになく真剣な様子のダヴィンチちゃんに藤丸やアストルフオ達は目を丸くしつつも、彼女の話^{はなし}に耳を傾ける。

『……すまない。実はそちらの靈基基点、銀時君達が本来存在していた江戸^{はしよ}ではないんだ。いや正確に言うのなら、銀時君達がいた世界に限りなく近い、だが異なる『もう一つの江戸』と表したほうが正しいかな。シバが観測した本来の靈基基点である江戸と、こちら側に関するデータ内容があまりに酷似していたがために、こちらで到達先の設定を誤ってしまったんだ。』

「もう一つの、江戸……それってどういうことですか？ 僕らのいた本当の江戸と、ここは違うってことなんですか？」

ダヴィンチちゃんの言ったことが呑み込めず、啞然としながら質問をする新八の横で、銀時と神楽は余っていた駄菓子^{つまようじ}を頬張っている。冷静なのはたまた話が難し過ぎ^{そしやく}で理解が追いつかないのか、表情一つ変えることなく爪楊枝^{いちべつ}で刺したフルーツ餅^{もち}を口に運び、もそもそと咀嚼^{そしやく}する二人を一瞥し、ダヴィンチちゃんは続ける。

『平行世界……パラレルワールド、と言ったほうが分かりやすいかな？主に一つの世界から分岐し、それと並行して存在している別世界のことを示すのさ。在り得たかもしれない未来、可能性、選択……そういうった『If』が世界の数だけ無限に広がっている。ところで新八君、君はさっき「本当の江戸」と言ったね？それじゃあ数多あまたに存在する世界の中で、どうして君は自分のいた世界が本物だと言い切れるんだい？』

「え？そ、それは……その……。」

『……ダヴィンチちゃん、今の質問で新八さんが眉を顰しかめてしまってます。』

『ありや、困らせてしまったかな？そんなつもりはなかったんだけど、君がそう捉えてしまったのであれば謝るよ、すまないね。しかしだ、私が今言ったように平行世界とは、まるで合わせ鏡をした時に起こる、鏡の中に果てしなく連つらなる同じ姿をした肖像のように、それは無数、そして無限に展開しているのさ。君達のいた天人の飛来した江戸、そして私がこうして今話している志村新八君だって、姿形も全く同じモノが他の平行世界に存在しているも、ちっとも不思議ではないんだぜ？』

「えつと……つまりは、僕らのいた世界にそっくりな別世界は他にも存在していて、そこにはまた別世界の僕も存在していて………んん？」

眼鏡の下の瞳がぐるぐると渦巻き、混乱する思考をリセットするように、新八は立てた両手の指で自身の頭を乱暴にがしがしと搔く。

そんな彼とは対称的に、桂は至つて平靜を保つた状態で切り出してきた。

「とすれば、やはりここは俺達の存在していた世界と合わせ鏡になつた平行世界の一つ、というわけなのだ………しかしつくづく驚かされることばかりだ。多少異なる箇所はあれど、宇宙船の飛び交う空や江戸の街並み、そして馴染みのある者達までもが、俺の知るそっくりそのままの姿なのだから。」

「……だが、問題はこつからだ。ツラの言つたように、平行世界といえど俺達のいた世界と違うモンがあるつてのはまあ分かる。だとするなら、何故この江戸に朝は訪れない？ 夜闇を徘徊し、人を襲い肝を喰らうあの化け物共はどこから現れた？ そして何より………俺達が英霊として、こちらの平行世界に喚ばれた理由が、未だ明確になつちやいねえ。」

高杉が溜め息と共に吐き零した紫煙に、琥珀の蝶達が絡みつくように舞い踊る。眉間に皺を寄せる彼の言う事も最もだ、と銀時はラストワンとなつたフルーツ餅を口に放りながら胸の内で頷く。こちらの世界にレイシフトをしてからまだ日は浅いといえど、明らかに異常な事態が起きていることはよつほどの阿呆でも分かることだ。

啞えた爪楊枝を折り、容器と共に屑籠へと投げ入れたと同時に、「ねえつ」とエリザベートが徐に開口する。

「アタシ達の知つてゐることはさつき一通り話したんだし、とりあえず今度はそつちで把

握出来た内容を聞かせてくれないかしら？ 分からないことはたくさんあれど、解決できるものならアタシはまず最初にこの延々と続く暗闇を何とかしたいわ……………嫌なのよ、閉められた井戸のように真っ暗で、息が詰まりそうになるこの感覚。まるでたった一人で『最期』を迎えた、あの時を思い出すみたいで……………」

水縹みはなだの瞳を伏せ、僅かに震える自らの肩を抱くエリザベート。そんな彼女の手の上に重ねられる、もう一つの手。

「……………仔兎？」

「エリちゃん、もしも真っ暗が怖くなったらいつでも言ってヨ？ 私、エリちゃんに昔何があったのかは全然分からないアル。けど私も銀ちゃんも新八も定春も、みーんなエリちゃんの側にいるからナ、もう寂しい思いはさせないアル！」

満面の笑顔と共にかけられた温かい言葉に、エリザベートの抱いていた不安や懼れおそはまるで口内に入れたチョコレートのように溶けて、そして消えていく。

気恥ずかしさに視線を逸らしながらも、「……………ありがとう」と次いで出た感謝に、神楽はまた明るく微笑んだ。

『……………エリザベートさん、元気になられてよかったです。』

「フオウ、フオウフオウ。」

「そうだね。こつちに来てからもあの二人、結構仲良いみたいだよ？ 何かと神楽ちゃ

んの世話を焼いてあげてるエリちゃん、まるでお姉さんみたいだし………それさ、ダヴィンチちゃん、そつちで他に分かったことを色々聞かせてほしいな？」

『りようか〜い。先程ツ……桂君が先程こちらに送つてくれた、江戸の様子を撮った映像及び画像データを解析した内容を元に、我が天才的な頭脳をフル回転させた上での結論を述べさせてもらうよ。』

アストルフォの催促さいそくに頷いて応え、ダヴィンチちゃんは目を落としたタブレットに指を滑らせ、画面に開示された内容を読み始める。張りのある潤った唇が果たして何を紡ぐのか、皆目を睜みはり固唾かたずを飲み込んだ。

『まず、そちらの国を四六時中覆っている幽暗………それこそが、今の今まで我々が君達との通信を行えなかった最大の原因だ。その正体は永劫えいこくに続く夜の闇なんかじゃない………ズバリ、『何者かの膨大な魔力』によって造り出された、大規模で堅牢な魔術結界なのさ。』

「魔術結界、だって………!!」

ダヴィンチちゃんの出した一つの結論、あまりに聞き慣れないその単語を、新八は反芻する新八の横で、桂はまたも眉一つ動かすことなく冷静に呟く。

「………やはり、その類たぐいによるものか。」

『流石は魔術師キャスタークラスとして現界しただけのことにはある、大凡おおよそのことについては予測し

ていたんだね、ヅラ君。』

「あ？何だよヅラあ、分かってたんならもつと早く言えつての。」

「ええいもうつどいつもこいつも！だからヅラじゃない桂だ！仕方なからう銀時、確証も無いのに事を荒立てたくはなかったのだから………しかし魔術による結界となれば、この現象は何者が人為的に起こしているということになるな。それもここ十年という、長い年月の間も結界は維持し続けられている………だとすれば、その夜を模した結界を展開した者は、相当な魔力を保持している、ということではないのか？」

つらつらと並べられる桂の推測を聞きながら、眉を八の字にして「んく……」と聳めつ面で唸る^{うな}ダヴィンチちゃんの代わりに、マシユがタブレットに目をやりながら続ける。

『それともう一つ、その結界がどういったものかについてなのですが………どうやら外部からの防衛機能は備わっておらず、どちらかという内部のものを外へと出さないための作用が、大きく働いているようです。』

「何と………それでは、この結界の本当の役割とは………！」

「つまり、アタシ達は本当に籠^{かご}の中の小鳥^{こどり}つてわけね………いいえ違う、この国そのものが結界とやらに覆われているのだとしたら、『箱庭』と擬^{なぞら}えたほうがいいのかしら。」

『おや、君は鋭いことに気が付くね。正にその通りなんだ。』

驚く段蔵の隣でエリザベートがそう呟いたのと同時に、ダヴィンチちゃんが^{くちばし}嘴を^い容れ

てくる。

「駄貧乳、その通りつてどういうことネ？分かるように説明するヨロシ。」

『貧相じゃないよ、顔も頭脳もスタイルも完璧な天才美女サーヴァントだよ………さつきマシユが述べたのと、エリザベート君が比喻で表した通りさ。日本でも注連縄しめなわの緬なう向きによつて意味合いが変わるように、結界よじまつてのは外から邪なモノを守るものと、内側に閉じ込めておくものが存在する。君達のいるそちらを覆う闇の結界は紛れもなく後者の役割を持ち、尚且かつ外部からの通信手段などの介入も断つほどの、非常に強力なものだ。こんな厄介なの、そんじよそこらの魔術師やサーヴァントが容易に造り出せるものじゃないぜ？』

タブレットを置き、やれやれとダヴィンチちゃんが首を横に振る。ふと彼女の話を聞いていた藤丸は、頭に一つ浮かんだ疑問を声に出す。

「あれ？それならどうして、こうやつて通信が可能になったの……？ああもしかして、ホームズが何かしてくれたとか？」

「ホームズ……？ホームズつてあの、コロンとかでしょつちゆう名前聞く名探偵つてやつか？ふーん、そいつも英霊サーヴァントになつてんのか……だが俺達がカルデアにいた時にや、そんな奴見なかつたけどな。」

「そつか、銀さん達は帰る時まで姿を見なかつたもんね。今度改めて紹介するよ。」

『あの、先輩……ホームズさんはこの通信が復旧されてから今に至るまで、一度も管制室に来られてはいません。何でも、至急調査しなくてはいけないことがあるとかで、刑部姫さんのところに向かわれて行ってしまい、それっきり彼女の部屋に籠もりきりです……』

「え？あの頭の堅い探偵つたら、おつきーのところにいるの？珍しい組み合わせね、一体何の用なのかしら？」

エリザベートに藤丸、マシユが揃って首を傾げる傍らで、あることに気付いた桂が拳でポンと掌を叩く。

「もしや、先刻に俺達がこの道場のあちらこちらに貼って回ったあの札は……」

『ご明察だ、やはりヅラ君は中々に頭が切れるね。君達が貼りつけたその札とやらの効力で、この新八君の道場は結界の中に更に結界を展開した状態になっている。例えるなら、湯舟の水面に桶をひっくり返して、そのまま沈めた感じを思い浮かべてもらいたい。』

「つまり、結界を張ったこの道場の中であれば、外の影響を受けることなくカルデアとの通信が行える、つていうこと……？」

『はい、その通りなんです。先輩！』

藤丸とマシユが朗らかな雰囲気の中で微笑み合う一方、桂は深刻な面持ちで高杉へと

耳打ちする。

「おい高杉……貴様に件の札を渡したというその少女、特徴などはよく見ておらんかったのか？」

「さあな、妙に古めかしい口調ってだけで、後は頭からすっぽり布で覆つちまつてて外観は殆ど分からん。だが、自分のことを『使い魔』と言ってやがった。差し詰め、どこかの術者に放たれただけの只のお使い役だったってことだろうよ。」

「全く、貴様と言う奴は……何故そういつた肝心なことを口に出さぬのだ？ 大体貴様のそういうところは、昔からちつとも変りやしない。今だってその『左肩』は——
—わぶっ！！」

くどくどと続きそうになる桂の小言を遮るさえぎるように、高杉は彼の顔面に煙を吐きかける。微量ではあるが吸い込んでしまい、何度も咳き込む桂の姿に嗤笑を送り、高杉は再び電子モニターへと向き直る。そこに映っているダヴィンチちゃんの面持ちは、再び険しい顔つきとなっていた。

『……結論から言うのだね、そちらの平行世界は既に幾つもの異変が感知され、最早特異点と呼ぶに相応しいものと化している。本当は今すぐにも君達を連れ戻したいところではあるが、今の我々に出来ることは、その即席で作られた蚊帳かやの中でのみ、こうして通信を行うことで精一杯だ……藤丸君、カルデアのサーヴァント諸君、それに銀時

君達、これも私がしつかりと靈基基点を確かめず、安易にレイシフトを行ったせいだ………すべての責任は私にある。本当に、すまなかつた。』

深々と頭を垂れるダヴィンチちゃんの姿に、皆かける言葉が見当たらない。数秒に亘つて流れた気まずい静寂を破つたのは、溜め息の後に続く藤丸の一声だった。

「ふう……頭を上げてよ、ダヴィンチちゃん。そんならしくないことされても、どうしたらいいか困るだけだからさ。」

『……藤丸君、もつと感情を露わにしてもいいんだよ。ダヴィンチちゃんのせいできとか、今すぐカルデアに帰せよとか、詫び石じゃんじゃか寄越せよとかさ。』

「んん、そう言われると素直な欲求に従って、聖晶石は欲しいかな………でもさ、ダヴィンチちゃんにはわざとやったわけじゃないんだし、銀さん達を帰そうとしてくれて行った上でのレイシフトだろ？それにここが特異点になっちゃってるのなら、それを元に戻すのがマスターである俺の役目なんだしさ………誰も悪くなんかないんだ。だからダヴィンチちゃん、顔を上げて？」

藤丸の穏やかな口調と声に、ダヴィンチちゃんは恐る恐る顔を上げる………彼女の目が映したのは、自分へと向けられた皆の笑顔。煙管を吹かす高杉は相変わらずのポーカーフェイスであれど、その表情に憤りなどは見られない。

「つたく、垂れる文句はまだあれど、起きちまったモンは仕方ねえや。特異点だか何だか

よく知らねえが、俺は万事屋銀ちゃんの社長・坂田銀時だぜ？頼まれればどんな仕事だつてそつなくこなす、例えそれが異変の解決でもな。あ、勿論依頼料はきちんと頂くぜ？金か若しくはお高いスウィーツで動いてやるよ。」

「あく銀ちゃんばかりズルいアル！それなら私だつて、特上の酢昆布1年分、いや10年分で働いてやるネ！」

「10年分つて、神楽ちゃんそんなに食べられ……いや、余裕で食べられるか。ともかく、僕も万事屋社員の一人ですから、銀さん達と一緒に頑張りますよ。」

「あくら、眼鏡ワンコつたら欲が無いのね？つまらないの……アタシ達は元々カルデアアの、今は藤丸のサーヴァントなんだしい？彼が貴女を許すというなら、それに仕方なく従うまでだわ。」

「段蔵も同じです、我らサーヴァントはマスターに従い、マスターの為に働くのみにございます。」

「わーい！皆一緒だと頼もしいな、ねっスギつち……ああんつもう顔を逸らさないでよくねえつたらっつ！」

今しがたの静けさがまるで嘘のように、賑やかを通り越して喧しい夜の志村家。

暫くほかんとしていたダヴィンチちゃんだったが、やがて彼女の開きつ放しだった口が大きく吹き出した。

『全くもう、君達には呆れるよ……でも、ありがとう。』

再び妍麗けんれいな顔に戻ったモナ・リザの優美な微笑みに、誰もが頬を染めはにかんでしま

う。漸くいつものダヴィンチちゃんを取り戻したことに安堵し、マシユも胸を撫で下ろした。

『さて、それじゃあ万事屋銀ちゃんの社長さんに、早速依頼を一つお願いしたいんだけど、いいかな?』

「おうつ、どーんと来い。」

やる気に溢れ、むふーと得意げに鼻を鳴らす銀時。しかしそんな彼のご機嫌かおな表情は、ダヴィンチちゃんの発した思いがけない依頼の内容に瞠目し、強張ることとなつていた。

『銀時君、君きみに藤丸君とのサーヴァント契約を結んでもらいたいんだ。』

《続く》

【捌】 再会そして、契約（Ⅳ）

光。 星明かりの灯らない江戸の天、その下で燦然と輝くのは、煌びやかな照明やネオンの

夜空に浮かんだ巨大な眼が見下ろす地上……恒道館の園庭に、凜とした声が響き渡る。

「——告げる。 汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に。」

翳した右手の甲に浮かぶ、令呪が淡く光を放つ。同時に彼の……藤丸の前にて傳えている銀時の身体もまた、同じく光に包まれていった。

「聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うのなら——」

熱を孕み始めると同時に、令呪の輝きも強くなつていく。ぶれそうになる利き手を左の手で押さえながら、藤丸は大きく息を吸いこんだ。

「——我に従え！ならばその命運、汝が『剣』に預けよう！」

高らかに叫んだ直後、噴き上げんばかりの強い風がその場に巻き起こる。

流水紋にも似た、雲の模様が描かれた白地の着流しがはためく中、銀時は閉ざしていた^{まぶた} 瞼を、そして口をゆつくりと開いていく。

「……………^{セイバー} 剣士の名に懸^かけ、その誓^{ちか}いを受けよう。貴方^{オマエ}を俺の、新たなマスターとして認めるぜ——藤丸立香！」

渦巻くようにして吹き荒れる風音の中で、力強い銀時の声がしつかりと、藤丸の耳にも届く。やがて輝きを増し双方の光は膨張^{ぼうちやう}し、風と共に大きく爆ぜ^は、ゆつくりと消滅していった。

「……………ふう。」

静まり返つた広い庭に、藤丸の溜め息だけが響き渡る。余程の緊張からか、その額は一筋の汗が伝つていた。

佇立したままの藤丸の前で、銀時はゆっくりと面を上げ、そして足に力を入れる。立ち上がりこちらを見下ろす彼の顔には緊張の痕跡なども見られず、いつもと変わらぬ眠たげな眼で藤丸を見下ろしている。

双方共に言葉を発さず、暫しの静寂が流れていく。やがて二人は同時に肩を震わせ、そして同時に吹き出した。

「ぶっはははは！あくもう駄目だ腹痛エ！我とか汝とかリアル厨二ワード言う奴初めて見たぞ……いっつけね、思い出したらまた笑ってきたツブフウ！」

「ちよつとそんな笑わないでよ、銀さんだつてあんなクソ真面目な顔で同じこと言つてたじゃんか。眉なんかキリつと逆八の字になつちやつてき、『剣士の名に懸け、その誓いを受けよう』なんて声も低めのトーンで渋く決めようとしちやつて、普段とのギャップ激し過ぎて何故だか無性に笑いたくなつちやアツハハハハハ！」

箸が転んでも可笑しい年頃、という言葉が存在するが、この二人の場合は箸が転がるどころかブレイクダンスでも踊っているのかと疑つてしまうほどに、哄笑を響かせている。因みに前者の諺が本来示す対象は、後から調べたところ十代後半の女性とのこと。

書いてる奴がその意味に気付いたのはつい最近のことであつた。恥ずかしい。

『こちらこちら君達、いつまでそうしてるつもりだい?』

青と白のディスプレイに映し出される、ダヴィンチちゃんの呆れ顔。スピーカーから流れてきた彼女の声に応えるように、二人の呵々大笑は漸く治まっていく。

『先輩、銀時さん、これで仮契約は成立です。お疲れ様でした。』

「あくもう、お腹振れるとこだつた………ありがとマシユ、ともあれまずは一段落だね。」

「ふーん。別にどこがどう変わったのかイマイチよく分かんねえけど、強いて言うならば体が少しばかり軽くなつた………くらいか?」

『ふふ、そうだろう? 今君の靈基には、マスターである藤丸君を介して、カルデアから変換された魔力が流れているからね。これで存分に力を振るうことが出来ると思うよ。』

「おつ、そりゃありがたえ話だ。ほんじゃ改めて………これからもよろしくな、『マスター』。」

「うん、こちらこそよろしくね。『セイバー』!」

再び向き合い、互いに朗笑する藤丸と銀時。画面越しにその光景を眺めていたダヴィンチちゃんとマシユであつたが、暫くすると彼らの笑み顔が徐々に崩れつつあることに二人とも気が付いた。

「……………何だろう、やっぱ慣れねえわコレ。」

「今まで散々名前前で呼び合ってたからね、今更銀さんにマスター呼びされても、こそばゆいというか気持ち悪いというか……………」

「おい、今サラツと失礼なワードが出なかつたか？それとも銀さんの聞き間違いかな？え？」

『まあ、サーヴァントがどんな呼称でマスターを呼ばなきゃいけないかなんて、特に定められてはいないからね。その辺は二人で相談して好きに決めたまえ。』

「ん……………じゃあ、今まで通りでいいか？銀さん。」

「そうだな藤丸、やっぱ馴染みがあんのが一番だよ……………とここでさつきから気になってたんだが、アストルフォはそんなトコで何やってんだ？」

「僕かい？僕はこのカルデアから支給されたスマートフォンのカメラで、銀ちゃんとマスターの輝かしい勇姿を一秒たりとも逃さず録画していたのさ！いや〜実によく撮れてる、マシユにもマスターのカッコいい姿を納めたこの動画、後でちゃんと送るね？」

『は、はい！ありがとうございます！頂いた際には即データの保護とバックアップも行った上で、DVDなどの媒体等にも永久保存いたします！』

「えっ、いつの間に撮ってたの？やだなあ恥ずかしい……………でも、俺のかっこよかつたところをマシユにまた見てもらえるなら、それも嬉しいかな。」

『先輩……。』

「あくハイハイ、乳のクリクリ合いは余所でやってくんない？お二人さん………それよりさつきから気になってしゃーねえんだけど、何で冒頭から喋ってんのが俺らだけなの？他の外野連中は何して………ははくん分かった。さてはこの俺の作品史に刻まれるほどにカッチョイイ契約シーンに、どいつもこいつも見惚れてやがんなあ？」

勝手な憶測と共に、ニンマリと腹の立つ独り笑いを浮かべる銀時。その時ダヴィンチちゃんの目がある方向を一瞥いちべつした後、彼へと戻された彼女の表情は微笑とも苦笑ともつかないものであった。

「つたく、ホント素直じゃねえ奴らばつかで呆れちまうぜ。そりや主人公だし？カッコイイのは元より承知の助だし？そんな銀さんのてんこ盛り要素にサーヴァント属性まで追加されたってなりや、もう鬼に金棒ならぬミヨルニルつか！ガツハツハツハアツ！ほらお前ら、いつまでだんまり決め込んでるつもりだ？そろそろなんか喋ったら——」

「へえ、『世にも』のテーマって、手拍子しながら聴くと怖さが半減するの。こんな仕様しよっもないこと、よく気が付くわよね。」

「でもエリちゃん、こういうことって自分じゃ中々気付けないから、それがまた面白いと

思わない？ そうだ、今度放送した時に僕も試してみようかな。」

「ツラあく、そのル○ンドとつてヨ。袋から開けて中身だけ寄越すアル。」

「リーダー、ツラではなく桂だ。それと寝転がりながら菓子を食べるのはあまり関心しないな、今だつて膝枕にされている高杉の借り物の寝巻の上に、ぼろぼろと食べカスを零しているではないか。」

「ツラよお、注意なら口頭でなく行動で何とかしてくれや。おい段蔵、コイツを退かせ。」
「はっ、承知しました。」

和やかな雰囲気の中でテレビを鑑賞しているエリザベートと新八の横で、茶を啜りながら注意をする桂。彼の正面で不機嫌に胡坐をかく高杉の膝から離れまいとする神楽を、力づくで引き剥がそうと試みる段蔵。そんな彼らの視界に映るか映らないかギリギリの辺りを、ズササーツ！と勢いを伴ったヘッドスライディングで滑っていく銀時にもくれることなく、部屋の隅で二匹良く丸くなった定春とフォウは大きな欠伸をしていた。

「ちよちよちよオイイイイイイイツ!! 何だよこの空気!! つーかテメエら見てなかったの?! 恐らく二度目は無いだろう俺の最っ高にCOOLだった契約シーンを刮目してなかつたあどういうことだ?! ト○ビアへ銀さんだろうがっ!」

「うっせーな、今は銀ちゃんへト○ビアがいいアル。あく面白かった。」

「流石にリテイクが5回目を越えたあたりで、もうすっかり愛想を尽かしましたよ。それより美味しいお茶が入りましたので、三人ともこっちに來て一息入れたらどうですか？」

「わーい、お菓子まだ残ってる？」

「あつ！僕も僕も〜！」

縁側に一目散に駆け出し、いそいそと雑に靴を脱ぎ捨てる藤丸とアストルフオの姿に、銀時は溜め息を一つ零してから、自身もまたそこへと赴く。

彼らが居間の畳へと足を踏み入れたのとほぼ同時に、徐に顔を上げた桂が口を開いた。

「まさかダヴィンチちゃん殿も、俺と同じことを考えていたとはな。確かに銀時の強さは英霊になる以前よりのもの、しかし肝心の魔力の使い方があのように出鱈目であり、それに加えて燃費の悪さといった最悪なおまけ付きだ……だがこれで、銀時も存分に力を振るえるだろう。藤丸君、仮という形であれ、銀時との契約を承認してくれて本当に感謝するぞ。カルデアの皆にも改めて礼を言わせてくれ、ありがとう。」

深々と頭を垂れる桂に、藤丸とモニターの向こうのマシユを始めとした面々は仄かに、はにかんだ笑みを浮かべる。藤丸も薄く色づいた頬を搔いていたその時、「藤丸〜っ！」と快活な声が名前を呼んだと同時に突として背中に衝撃が走る。

「ごっふう！ あいだだだ……どうしたの神楽ちゃん？」

鈍い音と共に猛烈なタツクルをかまされ、それでも何とか体勢をキープし痛む背中を摩りながら、藤丸は自身の腰に抱き着いている声の主の少女……神楽を見下ろす。

「藤丸、次は私とも契約してヨ！ その次は新八と定春ともしてほしいアル！ そしたら皆、もつともつと強くなれるネ！」

「わう………？ くあぁ〜。」

「こら神楽ちゃん、藤丸君を困らせちゃ駄目だよ……大丈夫？ 凄いなしたけど。」

「平気平気。 あばら何本かイったような音はしたけど、別にそんなことは無かったよ。」

額に汗を伝わせながらも、新八に対し心配をかけまいと笑顔を向ける藤丸。 そんな彼の後方から、銀時がひよっこりと顔を覗かせて言う。

「でもよ、神楽の案も中々イカすと思わねえか？ 俺の他にもコイツ等を始めに、ヅラや高杉とも契約すりゃあ、どんな連中が向かってきても敵無しじゃね？ なあ藤丸？」

「そうだヨ！ 魔法少女になる勢いで私達と契約するアル！」

秒の間隔で顔を接近させてくる銀時と神楽を手で制しながら、藤丸は身体を仰け反らせていく。こちらが何をしなくても勝手にヒートアップする二人を前に、困り顔に浮かんだ微笑み。 その中に感じた僅かな困惑を、ちやぶ台を挟んだ向かい側でハッ〇ーターンを啜くわえたアストルフオは、蒸発気味の理性の中で感じ取る。

マスター、彼の口からその呼び声が出ようとした数秒の差で、それは第三者の苛立ちを含んだ溜め息により掻き消された。

「そこまでにしておけ、馬鹿共。」

喧騒を裂くように、凜と響いた声。それを皮切りに静粛した一同が視線を向けたのは、一人縁側に腰を下ろし煙管を吹かす声の主。

「……おいおい、何だよ高杉くん。俺らが強くなんのがそんなに気に入らないワケ？ 嫉妬ですかコノヤロー。」

水を差され機嫌を損ねた銀時が、しか顰めた顔を彼へと向ける。名を呼ばれた声の主、もとい高杉はこちらに背を向けたまま、吸口を離し静かに紫煙を吐き出す。

昇る細い煙が蝶の薄明かりに照らされ、やがて空気に交わり消えていく様を見届けてから、高杉は漸く言葉を発した。

「物事つてのはな、何であれ相応の代償が発生するもんだ。いくらカルデアからの支援があるたアいえ、従えるサーヴァントの数にも限りがあるに決まってるだろ。」

「えっ？ そ、そうなの……？」

思いがけない事実を目を丸くし、新八は藤丸へと顔の向きを変える。先程と同様の困ったような笑みのまま頬を掻く藤丸の代わりに、口を開いたのはダヴィンチちゃんだった。

『高杉君に先を越されてしまったけど、大体は彼が今言った通りさ。先程も述べさせてもらったけど、藤丸君と契約を結んでパスを繋ぐことにより、カルデアからの魔力供給を始めとした様々な恩恵を受けることが出来る……だがそれも、無限にというわけにはいかない。今しがた仮契約を結んだ銀時君においては、魔力の使い方が人一倍に不得手な彼を安定させるためといった止む無い事情の上での契約だ。カルデアのサーヴァント三騎に加え、銀時君が新たに一騎……正直言つて、この時点で結構キツいんでないかと私は思うんだけど、どうか藤丸君?』

「え、いや別に俺は、そんなこと——」

『先輩、ダヴィンチちゃんに誤魔化しは通用しませんよ。無論私にもです。』

マシユの厳しい一言がクリティカルにヒットし、仰け反りから戻った藤丸は徐々に顔を俯かせ、「しゅみましえん……」と小さく謝る。

「キツい、というのは……やはり肉体的にもかなり負担がかかるという解釈でよいのか?」

「そだね、ツラ君の言う通りだよ。サーヴァントって扱いとしては使い魔の部類に入るみたいだけど、前にもマスターがカンペで説明したように扱いがとっても難しいんだって。」

「それにサーヴァントは魔力の供給があつてこそ、こうしてエーテルの身体で現界出来

てるってワケ。それがマスターの死亡や魔力切れなんかで断たれちゃうと、またか弱い霊体に戻っちゃうのよ。」

「以前段蔵が何方どなたかから拝聴した内容によると、サーヴァントは『魔術兵器』と呼ばれるほどの魔力の塊だとか……確かに我々が自由に活動出来るのは、紛れもなくマスターのお陰です。しかし、故にその身体に負担がかかっているのもまた事実。あまり無茶をなされば、倒れてしまうやもしれませぬ。」

まるで子を心配する親のように……否、段蔵はそれに等しい想いで藤丸へと眼差しを送っているのだろう。彼女を含めた三騎の英霊からの視線がこちらに集まっているのに遅れて気付いた藤丸は、驚きのあまり手に取っていたバー〇ロールを落としてしまい、それは床に落ちる寸でのところで、スライディングしてきた神楽の開いた口によって受け止められた。

「そっかあ……藤丸に負担がかかっちゃうってんなら、しょうがねえな。」

「ううう……未熟なマスターでごめんね、皆……。」

「そんなんつ、謝らないですよ！君は何も悪くないんだから……それどころか無茶を承知で、銀さんと契約までしてくれるなんて……本当にありがとう、藤丸君。僕達も君に無理はさせないよう、一生懸命頑張るから。」

眼鏡……んんっ失敬、眼鏡のレンズの向こうできらきらと輝き、それでいて力強さを

孕んだ新八の瞳、そして彼のこちらを氣遣う温かな言葉に、藤丸の胸の内と目頭がじんわりと熱くなっていく。

ありがとう、そう礼を言おうと口を開いたその時、つけっぱなしだったテレビのスピーカーから、軽快な囃子の音が聞こえてきた。

「あら、何かしら?」

エリザベートを始め、皆の視線が集中する画面には、神輿を担ぐ法被姿の男女の映像が流れている。そして彼らの上に、『第〇〇回 かぶき町夏祭り』のテロップと共に開催場所である神社の名、そして日付と日時などがこれまたでかでかと表示されると、神楽はいっぱいに開いた目を輝かせてテレビへと突進していく。そして彼女と同様に瞳の中に煌びやかな星を宿したアストルフオも加わり、二人揃ってテレビ画面に釘付けになった。

「ねえっ、これって明日じゃない? いいなく僕も行きたいっ!」

「私も! 私もお祭り行きたいアル! ねえっいいでしょ銀ちゃん、新八!」

「ちよちよちよ、待ってって! あのなあ、書いてる奴の大スランプが原因で前回の投稿から大分間が空いちまつてるから、お前らのピーマンみたいなスカスカの頭ン中にやもう話した内容なんて耳クソ一欠片分も残ってねえだろうよ。だから敢えてもう一度言うけど、俺達や遊んでる暇なんてないの。一刻も早くこの世界が、と……特異点? になっ

まった原因を探らねえと。なあ新八？」

「銀さんの言う通りだよ。まあ楽しみたい気持ちは分からなくもないけど、ここで優先すべきはやつぱり——」

するとその時、テレビから流れる祭囃子がポップな音楽へと切り替わる。それに素早く反応を示した新八は、台詞を言い止したままの状態にしてテレビへと首を向ける。

そこに映っていたのは、オールバックの髪形にやたらと目立つ黒のサングラスをかけた某司会者風の男と、その隣でこちらに手を振るサイドテールの可愛らしい女性。丈の短い檸檬色の着物を着た彼女は利き手に持ったマイクを口へと近付けていくと、大きく息を吸いこんだ。

『皆さんこんばんは〜！こんな時間に失礼しまぐ口のタタキ、アイドルの寺門てらかど 通つうです！』

『久しぶりだね〜お通ちゃん、髪切った？』

『切ってません。え〜最近夏が段々と近付いて、徐々に気温も暑くなってきましたん狸たぬきの金たま〇袋。そんな下がりが気味になりつつあるテンションを、私と一緒にアゲアゲにアゲちゃおう様の耳はロバの耳！てなわけで、先程の宣伝にありました明日開催のお祭りに、な・な・なんと私寺門通が特別ゲストとしてご招待いただけることに決定いたします。才さんの年取いくらだ！』

『おおくこれは凄い、明日は大いに盛り上がりそうだね。ところで髪切った?』

『切ってません。因みに私がイベントステージに登壇するのは、午後7時から行われるカラオケ大会からですので、どうか皆さんお忘れなくよ鷺^{うぐいす} 平安京! トークに歌に盛り沢山、明日は私と一緒に夏の夜を楽しみましょう便小僧!』

『えー以上、お通ちやんから明日のイベントに關してのお知らせでした。ところで髪切つ——』

某司会者風の男性が質問を終えるのを待たずして、テレビには蚊取り線香のCMが映し出される。皆が呆然と画面を見つめ続けている中、不意に新八がゆっくりと立ち上がった。

「……すみません、少しだけ席を外させてください。」

そう短く残し、新八は静かに居間から出ていってしまう。彼のトレードマークもとい本体である眼鏡が、終始妖しく光っていたことに疑問を抱き始めていた藤丸の耳に、高杉と銀時の声が聞こえてきた。

「……………あれが鬼^{おに}兵隊^{へい}の万^{まん}齊^{さい}が担当してた、珍奇な語尾をつけてやがるって女か。」

「そしてその彼女に夢中になってんのが、ウチの新ちゃんってワケ。俺の勘だと、ありやあ今やつてた明日の催^{もて}モン^{まおん}に關して、他のドルオタ面子に電話で連絡でも入れに行ったんじゃないねえのかい人二十面相?」

「あく言われてみれば確かに、今パチ君が向かつてったのって電話のある方角だもんね。このふぐりって可愛いよね。」

『あの……銀時さんもアストルフオさんも、先程のアイドルの方の口前がうつつていませんかりんとう……あつ。』

『ありや、マシユも伝染しちゃったようだね。それにしても何でかりんとう……ああそうか、藤丸君がレイシフトする前に一緒に食べてたつけね。それで無意識に口を次いで出ちやつたのかな?』

『ハッ! え、ええとその、あの……。』

にやけた顔と口元を微塵も隠す様子のないダヴィンチちゃんに、恥ずかしさから顔を紅潮させるマシユ。耳まで林檎色に染まっていく彼女に、画面の向こうの藤丸と段蔵は朗らかな微笑と眼差しを向けていた。

「にしても何だヨあいつ、優先すべきはナントカうなんて偉そうに言つてたくせにムカつくアル! エリちゃんも聞いてたでしょ?」

プンスコと腹を立てながら、神楽はエリザベートのいる方へと顔を向ける。だがその彼女はというと、未だテレビを凝視したままブツブツと何かを呟いていた。

「カラオケ大会……それに寺門通………いいじゃない、フフ、いいじゃない! このアタシの江戸での初デビューを飾るには、申し分ない舞台だわ。覚悟なさいよ寺門通、この

アタシが直々に、アイドルとしての格の違いつてヤツを見せてやるんだから！ウフフ、フフフフ……アッハッハッハッハッハッ！」

高らかに響くエリザベートの咲笑う声えが、居間中に響き渡る。耳が痛くなる程の咲笑こうしょうの中、藤丸は隣の銀時にこっそりと耳打ちをした。

「ねえ銀さん……今俺の耳に、何個か物騒な単語ワードが聞こえたようなつとうキナーゼ。」

「言うな、そしてそれらは空耳ということにしておけ。またあのジャ○アンリサイタルに巻き込まれでもしたら、今度こそ座に還つちまいそうな気がしてならねえムー○ン。」

珍妙な会話を交わした後、互いに顔を合わせた藤丸と銀時は頷き合い、大分温ぬるくなつたお茶を同時に呷あおる。未だ通信が繋がつたままのディスプレイ越しに聞こえるエリザベートの甲高い声に、ダヴィンチちゃんとマシユもただ苦笑するよりなかった。

するとここで、桂かみが徐おもむろに畳から立ち上がる。きよとんとする皆の目の前で彼が向かつたのは、新八が退室していった襖の前。引き戸に手を掛けてゆつくりと開き、左右を確認する素振りをした後、襖を静かに閉めた桂は再び元いた位置へと戻つていく。

「……………ダヴィンチちゃん殿、先程の話の中で一つ気になった点があるのだが、伺つてもよいか？」

『ん？どうしたんだい色男君、この天才に何なりと言つてごらん。』

「ああ……………新八君のことなのだが。」

ダヴィンチちゃんの花化しを気に留める素振りも見せず、桂はこの場にはいない新八の名を口にする。それに反応した一同は、一斉に彼へと視線を注いだ。

「今、俺達がいるこの世界……平行世界となつていてこちら側では、俺や高杉そして銀時……或いは松陽先生も含め、疾うに死没した扱いになつていて。それ故だろうか、攘夷戦争が終わつてからの十数年という月日を経た後も、本来は存在している筈の俺達に関するモノや人々の記憶が、まるで初めから無かつたかのように全く存在していない。だがそのことを踏まえ、新八君はどうだ？彼の姉であるお妙殿は、彼のことをしつかりと覚えていた。今とて、同じ志を持つ者達に電話を入れていることだろう……。」

中々本題を切り出さない桂に、小指で耳を掻きながら銀時は内心やきもきしていた。そんな彼の内憤を察してか、桂はこちらを一瞥した後、大きく吸い込んだ息を言葉へと変えて発する。

「これらは紛れもなく、こちらの世界に『志村新八』という人物が存在していた証……：ならば、平行世界に本来居なければならぬ『志村新八』は、一体何処へ消えたというのだ？門下生を募つてくると言い残し、お妙殿の前から姿を消した彼に変わつて今ここにいる新八君は、我々と同じくサーヴァントであり、召喚されたカルデアからこの平行世界へと跳んだ者。それは間違いのない事実であろう？ならば……：ああもうっ。」

上手く説明が出来ないことに苛立っているのか、桂は自身の頭を乱暴に掻く。立てた指の間から、絹のような黒髪がさりりと流れた。

『ん、それなんだよ。どうして彼が突然姿を消したのか、私も君達の話聞いて不思議でならなかった。まあ本当に門下生を勧誘しに行つたのかもしれないけれど、今そこらでは人々を襲う得体の知れない魔物があちこちにいるんだろう？幾ら家が道場を経営しているからつて、お姉さん思いの新八君が彼女を一人置いていたりなんかするものかねえ。』

顎に手を当て、ダヴィンチちゃんは難しい顔を傾ける。確かに言われてみればそうだ、お妙の口から聞いた『こちら』の新八の行動は、あまりに不可解な点が多い。ふと藤丸が隣の銀時を見遣れば、彼もまた鼻穴に小指を突っ込んだままではあるものの、細めた目には鋭さが宿っているようにも見えた。

「なあダヴィンチ、さっき言つてたその『特異点』つてのは一体何なんだ？こつちの江戸がその特異点化しちまつたのと、眼鏡小僧がどこかへ消えたこと……ひよつとしたら関係があつたりするんじゃないかい？」

口に啣えていた煙管を消失させ、高杉が率直に疑問をぶつけてきた。開いたままの縁側から降り注ぐ月の明かりを受け、一層に妖しさを増す深碧の右眼に、マシユは背筋に寒気を覚える。

『そうだね、まずはそこから話そうか………特異点というものは大雑把おおざっぱに言うただね、正常な時間軸から切り離された現実なのさ。人理の定礎と呼ばれる座標であり、言わばもしも If の可能性が存在する世界だ。もしも、起きていた筈の戦争や革命が起こっていなかったら。もしも、本来ならば死んでいる筈の人物が生きていたら………そういう現在の人類を決定づけた究極の選択点が崩されることは即ち、人類史の土台が崩れることに等しいということだ。』

「んん……？土台が崩れたら、どうなっちゃうアルか？」

「バツカお前、要は家の土台と同じだろ。支えてる根っこが壊れちまえば、上のほうも一緒にお釈迦シヤカになっちゃうってことだよ。」

「大変アル！家が崩れる前に逃げないと、ほら定春ったら起きてヨー！」

銀時の例えを思いっきり勘違いしたまま、神楽は慌てて定春を叩き起こそうとする。頭を何度も叩かれ、心地良い眠りから強制的に覚醒させられた定春は、？き出した歯の奥から不機嫌に唸り声を洩らした。

「それじゃあ、この世界の元になってる時間軸って……。」

『はい先輩、やはり銀時さん達が本来存在していた、『江戸』で間違いはないようです。それと一つ、非常に厄介なことが新たに判明しまして……。』

「厄介なことって？勿体ぶらないで早く教えなさいな。」

定春と同時に起きてきたフォウを腕に抱き、エリザベートが尋ねる。深刻な顔でタブレットに目を落とすマシユの代わりに、答えたのはダヴィンチちゃんであった。

『密接し過ぎているんだよ、この二つの世界はね。』

「……密接？」

「し過ぎていて、とは？」

「つまり……んな感じ？ぎゅ〜っ！」

目を丸くしてダヴィンチちゃんの言葉を反芻する高杉と桂の間から、勢いよく飛び出してくるアストルフオ。突然のことに反応の遅れた両者の頭を摘むと、自身の顔へぎゅ〜と押し当てる。

咄嗟に離れようと力を込めるも、今アストルフオの腕には保有スキルの一つである『怪力（Lv. 10）』が宿っているため、抗うのも容易ではない。美男子二人に（非合意だが）挟まれてご満悦の男の娘に苦笑しながら、ダヴィンチちゃんは続ける。

『鏡面世界、と言う表現が妥当かな？鏡というのは映したものと全く同じ姿、同じ動き、同じ表情かおをするもの。そして君達のいた江戸せかいとこちら側は、今まさに鏡映しの状態になっているというわけさ……さて、ここまで来れば私が何を言いたいのか、賢い子はどう分かるよね？』

「……………そんな、まさか……………!!」

ダヴィンチちゃんの問い掛けに真つ先に反応を示したのは、やはり桂であった。目を見開き肩を僅かに戦慄わななさせる彼の姿に、まだ理解していない銀時や神楽は首を傾げる。

「えーと……………つまりどゆこと——っとうおうおうっ！」

「ちよつと銀さん！鏡だよ鏡！鏡の役割は何でしょうハイ思ひ出してっ！！」

興奮した藤丸に乱暴に肩を掴まれ、激しく前後に揺さぶられながら銀時はその質問の内容を揺れる頭の中で巡らせる。そして答えが生まれた刹那、銀時の顔と思考は瞬時に強張った。

「えっ……………ちよつと待て、それってまさか——」

事の重大さに漸く気が付いた銀時は藤丸の手を剥がすと、狼狽に染まった表情かおをダヴィンチちゃんへと向ける。

『漸く気付いたようだね……………あまりに密接した双子の世界。しかも運の悪い事に、どうやら鏡像側はあちらの世界らしい。こちらで起きた異変や出来事は、少なからず向こうにも影響が及ぶことだろう。』

「じゃあ……………じゃあ私達がいた江戸は、かぶき町は……………皆はどうなっちゃったんだヨ！！」

あまりの驚愕に冷静さなど何処かへと放り投げた状態で、神楽は声を上げる。そんな彼女に対し、藤丸は掛けてやる言葉が見つからなかった。

『残念だけど、君達のいた世界がどうなっているのかを、こちらで確認することは出来ない。今こうして通信が行えたのだから、さつき張ってくれた魔術結界のお陰だからね。』
「……………そんな……………」

全身から力が抜け、神楽はその場にへたり込んでしまう。見開いた天色あまの瞳に映るのは、彼女の想う大切な者達の姿であろうか。

「フオーウ……………」
「わふっ、くうーん……………」

そんな神楽を心配してか、エリザベートの腕から降りたフオーウが膝上に、定春が顔の側に鼻先を摺すり寄せると、今にも零れそうな瞳を堪えながら、神楽は両の手で二匹をしっかりと抱き締めた。

「神楽殿、こちら側にはお登勢殿方やお妙殿も存在しております。となれば、特異点からの影響は、まだそれほど及んでいないかと……………」

『その通り……………と、本来ならそういう言葉をかけてあげたいんだけど、あまりのんびりはしてられないかもなんだよねえ。カルデアが獲得・解析出来た情報の量は、現時点ではあまりにも少なく乏とほしい。一刻も早い修復が望ましいところだけど、この特異点は

あまりにも得体が知れない。故に、こちらも迂闊に指示を出すことは出来ないよ………
藤丸君は勿論のこと、君達を誰一人として危険に晒すわけにはいかないからね。』

居間に流れる、重苦しい空気と沈黙。そんな陰鬱な雰囲気の中で、ふと襖の方を見つめていたアストルフオがぼつりと零した。

「……………ねえ、パチ君遅くない?」

その眩きにいち早く反応し、床から弾かれるようにして銀時が立ち上がる。

ややリズムの早い心臓の鼓動が、自身の耳にも聞こえてきそうだった。

『平行世界に本来居なければならぬ筈の『志村新八』は、一体何処へ消えたというのだ?』

『こちらで起きた異変や出来事は、少なからず向こうにも影響が及ぶことだろう。』

先程聞いた言葉の数々が、凄まじい暴風となつて頭の中を巡っていく。

そんな、まさか、まさか——

考えるより先に、足は襖の方へと駆け出していく。

「銀さんっ!!」

後方で名を叫ぶ藤丸の声も耳に届かず、全身を動かす原動力となっている焦燥と、僅かな期待を胸に抱きながら、銀時は引手に手を伸ばした。

「——新八いつ!!」

《《続く》》

【捌】 再会そして、契約（V）

『銀さんっ！』

いっただって、どんな時だって、彼が側にいることが……名前を呼んでくれることが、当たり前だと思っただけで済んでいた。

不可思議な因果に巻き込まれ、英^{サーヴァント}霊というものになってしまった現在^{いま}だって、異世界の魔術師達と、旧友^{とも}と、そして……万事屋の三人と一匹がいるなら、きっと何とかするだろう。

——その愚かな思い込みが、『^{おど}驕り』であるということに気付くには、あまりに時間^{おと}が掛かり過ぎた。

『あまりに密接した、双子の世界』

『しかも運の悪い事に、どうやら鏡像側はあちらの世界らしい』

『こちらで起きた異変や出来事は、少なからず向こうにも影響が及ぶことだろう』

何度も何度も、頭の中で反芻するはんすうダヴィンチの言葉。

信じたくはない。だが、まさか、もしかしたら——

「頼む、どうか………どうか無事であってくれっ!!」

襖が左右に大きく開かれ、乾いた音と共に銀時は叫んだ。

「——新八イイツ!!」

「はい、何ですか?」

「つて、アレええええええエエエエっ!!」

上からマリ○、隣にはト○口、親方空から女の子がっ!そして襖を開いたそこには怪訝な顔の新八けげんっつあん。

あまりに突然な事に驚き、銀時は声を上げて仰け反り、数歩後退したその足が床に転がる湯呑を踏んづけてしまう。

バランスを崩し、背中から倒れていく銀時。そうなれば当然、彼のすぐ後ろにいた藤丸も巻き込まれてしまう運命は避けられない。直後、ゴチンツと鈍い音が志村家の居間に響いた。

『せ、先輩っ!! 銀時さんも大丈夫ですか!!』

「いっただあああアアアツ!! もうっ! あーたはもうっ!! 何がしたいのっ!!」

「痛つてええエエツ!! そりゃこっちの台詞だ石頭野郎!! 頭蓋骨にヒビ入ったらどうす……ちよつと待て、確か前にもこんなコトなかつたっけ? デジャヴ?」

「むむっ! 銀時、石頭なら俺も負けてはおらんぞ? 何なら今ここで試してみるか?」

「何でオメーは張り合おうとしてんだよ馬鹿ヅラっ!! おいやめる構えてんじゃねえっ!!」

頭部への激痛に悶える二名と、モニターの向こうで彼らの身を案じるマシユ。そしてロケット頭突きの姿勢を取ろうとする桂を交互に見遣る新八に、ダヴィンチちゃんとアストルフオが尋ねる。

『おや新八君、随分と遅いお戻りじゃないかい。』

「そうそう、連載が止まってからの大体二年間くらい居なくなってたことになるから、僕

らも心配したんだよ？」

「えっ、この作品つて更新そんな止まってたの……ああ、もうこんなに時間が経つてたのか。」

新八を始め、皆が一斉に上げた顔の先にある掛け時計。短長の二本の針が示している時刻は、既に亥の三つ時に差し掛かっていた。

「アハハ、ごめんね。実はさつき用を済ませた後、皆が使える分の布団や部屋の数が本当にあるのか、念の為確認しに行つてたんだよ。何せ今日からこの大人数で、道場に寝泊まりするわけだからさ。」

足下に近付いてきたフオウを撫でながら、新八はそう答える。数名の納得したような声音が居間のあちこちでちらほらと聞こえた。

「それにしたつて、随分と時間が掛かつてたんじゃない？アタシはてつきり、眼鏡ワンコが久々の自宅の中で迷子の仔犬パピにでもなつたのかと思つてたわ。さつき回つて気付いたけど、この家結構広いみたいだし？まあ、アタシのチエイテ城には到底及ばないけどお？」

『あの、エリザベートさん……ひよつとして生前のチエイテ城で、迷子になられたことがあるんですか？』

通信越しの悪意の無い好奇心。そんなマシユからの問い掛けがエリザベートの図星

にクリティカルヒットし、「はうわっ!!」と甲高い声が尻尾と共に上がった。

「トカゲ娘……自分家ちで迷うとか、方向音痴にも程がねエか?」

「ちっ、違いわよ白モジャ!! そりやお城だもの、自室とか大広間とか、後は……地下の拷問部屋とか? とにかく広い敷地内にそれだけ沢山の部屋があつたんだもの、城主であるアタシだつて、その……時たま混乱したり、度忘れすることだつてあつたの! 悪い!!」

隠しきれない恥ずかしさから、真つ赤な顔で弁解するエリザベート。大きく上下する竜の尻尾に合わせ、定春とフォウが頭を動かしている様子に、藤丸は思わず笑みを零す。

「そういえば新八君、結局その用事ってなんだつたの? 銀さん達はさつき、君がアイドルファンの仲間に連絡を取りに行ったんじゃないかって言つてたけど……」

気になつていた問いを、率直に投げ掛ける藤丸。すると新八は眼鏡越しにキラキラと輝く瞳を彼へと向け、待つてましたと言わんばかりに開いた口から明るい声が飛び出した。

「そう! その通りだよ藤丸君! 自慢じゃないけど僕、こう見えても彼女の親衛隊の隊長やつてるんだ。あつ、お通ちゃんっていうのはね、さつきテレビで観た可愛い……ンツ超絶可愛いあの女の子でさあ、江戸だけじゃなく全国的にもファンクラブがある程の超人気売れっ子アイドルなんだよ! お通ちゃんは可愛いだけじゃなくて歌もサイ

コーで、あの明るい歌声とインパクトのある歌詞に、落ち込んだ心を何度励まされたことか……ああ、さつきのお通ちゃんの良い笑顔、まるで真夏の太陽のように輝いて

「あくあ。新ちゃんの推し語りがまた始まっちゃったよ。」

「サーヴアントになろうと、ドルヲタ気質は相変わらずアルな。」

恍惚とした面おもてで推しの素晴らしさを語り出す新八に、呆れた眼差しを向ける銀時と神楽。話を聞いてる方もさぞ退屈しているのではと思いつながら、銀時は視線を周りへと向ける。すると彼の目に映ったのは、熱く語る新八の話に耳を傾け、頷きを返す藤丸の姿。フオウと揃って欠伸あくびをするアストルフオとは対称に、穏やかな笑みを浮かべて心底から楽しそうにしている彼であったが、その表情に時折ふと寂しさのようなものが滲にじんでいることに、銀時は気が付いた。

「(アイツ……何であんな顔——)」

しかしそんな銀時の思考は、「ちよつと眼鏡ワンコ！」と唐突に叫んだエリザベートの甲高い声に遮られる。

「アンタねえ、もう既に本命の推しアイドルがいたってことじゃない?! アタシに魅了されて応援してくれる子豚メンバの一人だと思つてたのに………だつたら初対面の時にアタシがあげたあの直筆サインは?! 9話目の自己紹介でアタシを讃えてくれたサイリウムと

ラブコールは一体何だったのよう❗️さてはアンタ、何も知らずに浮かれ舞うアタシを見て、心の中で嘲ら笑つてたのね❗️わくわくさんっ!!」

散々ヒステリックに叫んだ後、取り出したハンカチでおいおいと泣き入るエリザベト。そんな彼女の頭や背中を、隣に座っていた段蔵が優しく撫でていた。

「えええっ❗️ちよつ、違! 誤解だよエリちゃん! 確かに僕の本命はお通ちゃんだけど、エリちゃんのことにも応援していくつもりだよ。君がくれたサインの色紙だつて、後で飾っておくためにさつき部屋に置いてきたところだし……。」

『おんやあく新八君? 大人しそうに見えて、君も中々罪な男だねえ?』

「オイオイぱつっあん、女泣かせるなんざ一万年と二千年早えんじやねえの?」

「どうせ八千年過ぎてもモテ期なんか来ない非モテ駄眼鏡のくせにヨ! そういうのは顔も性格もスギつちくらい男前になつてからやるヨロシ! 姉御に言いつけてやつからな!」

「ダヴィンチちゃんと銀さんまで何言つてんスカもう! てか神楽ちゃん、姉上に言うのだけはマジで止めてねホント❗️お願いイイツ300円上げるからっ!!」

「高杉、貴様リーダーからさり気なく諸々褒め称えられているではないか。まあ羨ましくはあるが、俺とて貴様に勝つてゐるものはいくつかある。具体的に挙げるとしたらそうだな、やはり身長とか……ん? おい、何やら焦げ臭くないか?」

「あれ、ツラ君、頭にちようちよがたくさん止まつてるね？可愛い〜！」
 「ツラじゃない桂だ、つて熱あぁアアツ!! アストルフォ殿つこういう事態になつてい
 ることはもつとテンパつた感じで知らせてはくれないだろうか!!」

四方八方からの非難の嵐に困惑し、只々狼狽する新八。頭頂から煙を昇らせて台所へ
 とダツシユする桂は置いておくとして、そんな彼に助け船を出したのは、漸く落ち着き
 を取り戻したエリザベート本人であった。

「ぐすつ……いいのよ皆。眼鏡ワンコが他のアイドルを推していようと、それはアタシ
 と会おう以前からの事実だもの。それは決していけない事なんかじゃないわ……ア
 タシも、いきなり取り乱してごめんなさいね?」

「い、いや僕こそごめん。エリちゃんに対して少しデリカシーに欠けてたかもしれないな
 ——」

「でも、これでハッキリと分かったわ! やはり寺門通は、このアタシに相応しい好敵手と
 なる存在だつてことがね……!! 見てなさい、どちらが江戸の……いいえ、この世界の
 トップアイドルに相応しいか! 明日の祭フェスティバルでハッキリとさせてやろうじゃない!
 オーツホツホツホツ!」

泣いたり笑つたりを経て、漸くいつもの調子に戻ったエリザベートは段蔵から離れる
 と、食卓に片足を上げた状態で高笑いを上げる。キンキンと耳を劈つんざく彼女の甲高い声

に、眉間に皺を寄せた高杉が「煩うるせえ……」と小さく零した。

「しかしカラオケ大会か。ここは一つ、俺も式神エリザベスと共に参加してみるのも悪くないな。曲は勿論俺の十八番おほ・『攘夷が★JOY』で優勝を狙ってみるのもアリよりのアリだと思わんか？ 銀時。」

「梨より、じゃなかつたナシよりのナシだわバカヤロー。テメエにや秋○さんの鳴らす鐘の一回すらも勿体無えわ……にしても、前回空耳で済まそうとしてた事案がとうとう確信に変わつちやつたなあこりや。なあ藤丸、マスターとしてアイツを止めてやることって出来ない？ ほら、令呪もつを以て命じたりとかさ。このままだと明日のカラオケ大会が昨日の夜みてえに地獄絵図と化しちまうぞ？」

「うーん……三画しかない貴重な令呪ものだけど、いざとなつたら仕方ない……かなあ？」
 険しい顔で頭を捻る銀時と藤丸。首を傾げるタイミングまでもがシンクロし、モーター越しに見えるその様子に、ダヴィンチちゃんとマシユは小さく笑った。

「それじゃあ話を戻すけど……パチ君は明日のお祭りのカラオケ大会に来る、アイドルのお通ちやんを親衛隊の皆と応援しに行つて、エリちゃんも大会に参加するってことだよな？ いいないないなあ〜！ 僕も明日のお祭りに行きたいっ！ ねえ〜いいでしょマスター！！」

「私もネー！ お祭りと言えば一番の楽しみは縁日アル！ 出店で美味しいものたつくさん食べ

たいヨ！いいでしょ銀ちゃん？」

開いた瞳いっぱい星を輝かせ、じりじりと迫ってくるアストルフォと神楽の迫力に、藤丸と銀時は思わず身じろいでしまう。

「あのなあ神楽ちゃん、今の俺らは祭りなんて悠長ゆうちやうに楽しんでる余裕なんてねえだろ。江戸が特異点になっちまってるって時に、チョコバナナだのリンゴ飴だのかき氷だのべっこう飴だのたい焼きだの冷やしパインだのクレープだの、そんなモンもんに現まを抜かしてる場合じゃアレ何だろ、口から汗が止まんないや。」

「銀さん……それ汗じゃなくて涎だね。実はすっごい行きたいんでしょ？意地張ってないで素直になれば？」

「チツ、うっせーなあ藤丸。そうだよ、実は超がつくほど行きたいよお祭り大好きマンだよ悪いかコラ（ゴシゴシ）」

「ギヤアアアアアアアツ!!ちよつと！何ヒトの着物で涎拭いてんだアンタあ!!アレこの流れ前にもあつたなデジャヴ!!」

新八の絶叫が響く中でも、皆の明日の祭りに対する期待は高まるばかり。賑やかな談論を遠巻きに聞いていた段蔵の頭に、ふとスナックお登勢で聞いた内容が甦おっしやる。

「そういえば……お登勢殿のお店も、明日の祭りで出張すると仰おつしやっておりました。なので、その……もしよろしければ、段蔵もまたお手伝いに伺いたいと思っっているの

すが……………」

そこまで言うのと、段蔵は藤丸の顔色を窺うようにして、何度もちらちらと視線を送る。働き者だなあと思うと同時に、もしかするとまたカラ友であるたまに会えることが嬉しいのかもしれない。遠慮がちな態度のそんな彼女の心情を察し、藤丸は和やかに答えを返した。

「いいよ、きつとお登勢さん達も喜んでくれるだろうし。それにたまさんもきつと、段蔵にまた会いたいって思ってくれてるんじゃないかな?」

「……………はい、ありがとうございます。マスター。」

札の言葉と共に、深々と頭を垂れる段蔵。顔を上げた彼女の陶磁器のような白い頬は、喜悦からほんのりと紅潮しているようだった。

『お祭り、ですか……………私はまだ行ったことがないので、どんなものかは分かりませんが、先輩や皆さんの反応からすると、とても楽しい催しなのでしょうね。ダヴィンチちゃん。』

『そうだねえ。いつの時代もどんな国も、祭りというのは心が躍るものさ。それに人が集まる場所に行けば、また新たな情報の獲得も望めるかもしれない。まあ、そこはとりあえず頭のどこかにでも置いといて……………せっかくのお祭りだ。少しの息抜きくらいしたって、バチは当たらないんじゃないかな?』

そう言つてダヴィンチちゃんがウインクをすると、居間にいる全員（一部を除く）の顔がパアツと明るくなる。それらの表情の変化を、まるで花火のようだと感じたダヴィンチちゃんとマシユは小さく笑い合つた。

「それじゃあ決まり！ 勿論スギっちも一緒に来てくれるよね……………あり？」

アストルフォが名を呼んだことにより、一同の視線は高杉へと集中する。しかし彼はその声に反応を見せず、頬杖をついたまま空を見つめている。

「スギっち！ ねえ、スギっちってば！」

アストルフォが顔を近づけ声を張ると、その音量に驚いた高杉の肩が大きく跳ね上がった。

「あ……………何だお前か、デケエ声出すんじゃないやねえよ。」

「ゴメンごめん。でもスギっちつたら、呼びかけても全然反応してくれないんだもん。どしたの？ ボーつとしてるなんて珍しいね。」

「高杉殿……………もしや、先刻負つた傷が痛むのですか？」

「……………いや。別にこんなモン、大したこたアねえさ。」

身を案じる段蔵の眼から隠すように、高杉は負傷した左腕の上に羽織を重ねる。ふと彼の右目が、離れた先でこちらを睨む桂の眼光、そしてモニター越しに怪訝な顔をしているダヴィンチちゃんと搦ち合う。

「(……………やっぱりな。キャスターには俺自身にも認識出来ねえ『何か』が視えてやがる。)」

「んでさ、スギっちも勿論明日のお祭り来てくれるよね？ 夕方からみたいだし、松陽さんも起きたら皆で行こうよ！ ね？ ねっ？」

「あー……………そうだな。松陽が行きたいっていうんなら……………いいぜ。」
「アハハくやっぱり駄目か……………ん？」

高杉の返答に、アストルフオは一瞬自身の耳を疑った。

ここでいつもの流れならば、自分がどれだけしつこく誘っても、高杉が首を縦に振る確率など、ガチャで例えるなら☆5サーヴァントの排出率並みに低い。

……………だがしかし、彼は今何と言った？ 驚きと興奮で蒸発が早まる理性の中で、アストルフオは高杉の言葉を反芻する。

「いいぜ」 ↓ 「一緒に言ってもいいぜ」 ↓ 「お前と一緒に祭りに行きたいぜ」

やや都合のいい形の解釈となつて変換されているようだが、まあ大体あつてるんでないかと。

みるみるうちに歓喜の色に染まつていくアストルフオの表情。キラキラとしたエ

フェクトが舞うそのままの状態で頭の向きを変えると、同じく呆気に取られポカンとしている面々の中で、今の自分と全く同じ顔をした神楽と目が合った。

「神楽ちゃん、今の聞いた？！聞いたよね？！スギっち行くつて！」

「ぼつちりネ！言質もこの耳でしつかり聞いたアル！なつ駄貧乳^{ダツインチ}！」

『だからもう貧相じゃないつてば。そう心配せずとも、高杉君の今の発言はこちらでもしつかりと録らせてもらってるよ。』

「キヤツフオオオオイ！やった（アル）くっ！！」

パンツ！と宙^{ちゆう}で決めたハイタッチの音が居間に響く。欣喜雀躍^{きんきじやくやく}、その字の通りまるで

雀が飛び跳ねるように小躍りしてはしゃぐ神楽とアストルフオを横目で見ながら、銀時は小声で高杉に耳打ちした。

「おいおい、どうしたの高杉君？いつものお前ならあっさり断つてるとこだつてのに……あつもしかして、いつもツンなお前が唐突にデレるところを見せときや、読んでくれている側の好感度も上がるとか考えてたりする？そういう策士的なアピールも考えてたりする？」

またいつものノリで、やや挑発的に絡む銀時。しかし高杉は特に反論するどころか、彼と目を合わせることもなく、その場から静かに立ち上がる。

「……………悪い、少し疲れた。先に休む。」

高杉はそう言い残すと、皆に背を向け開いた襖の奥へふらりと姿を消してしまう。彼を追おうと慌てて立ち上がった桂も同じく今から退室しようとしたが、ふと思いついたように新八の方へと振り向く。

「新八君、すまないが我々の休む部屋と布団の場所を教えてくださいませんか？」

「え？ ああハイ、今行きます！」

「あつ、待つてパチ君！ お布団敷くなら僕も手伝うよ〜！」

バタバタと慌ただしく廊下を駆けていく桂と新八そしてアストルフオの足音が小さくなっていくと、今には一時の静寂が流れる。

「何だあ？ 高杉の奴、調子狂うな……。」

「高杉殿……やはり先の戦闘で負った損害が、まだ靈基に響いているものと思いまする。」

「確かに、黒猫つたら怪我して帰ってきたし、ちよつと心配よね……そうだわ！ 黒猫がよく眠れるよう、アタシが癒しの一曲でも歌ってあげようかしら？ きつとぐつすり休めること間違いナシね！」

「いやソレ、寧ろ永眠しちゃうから。英霊の座に直帰コースだから……つてもういねえじゃん、あのトカゲ娘。」

同時に離れていく足音と音の外れた鼻唄を聞き、銀時が息を一つ吐いたワンテンポ後

に、藤丸ふじまるが徐おもむろに口を開いた。

「それにしても、段蔵と高杉さんが遭遇したっていう、シャドウサーヴァントに似た敵エネミーか………しかもその姿形や声までもが、嘗かつて高杉さんの率いてた『鬼兵隊』に属してた人と瓜二つだったなんて……。」

『首を斬られても即座に再生してしまふ驚異的な回復力や、明らかに第三者から加えられたとされる狂化状態の付与。これらの情報から見ると、私達の知るシャドウサーヴァントとは少し異なる存在なのかもしれない………そちらの正体不明のエネミーに関しては、頂いた情報を元にカルデアこちからでも解析中です。何か分かり次第、すぐにお知らせしますね、先輩。』

「ありがとう。でも今日はもう遅いから、マシユもダヴィンチちゃんも一先ひとまず休んで？」

「ふうわくああ………私もう眠くなってきたヨ。」

「くうあくあ………くうん。」

『アハハ、二人とも大きな欠伸だねえ………まだ再会の余韻よゐんに浸りたいところではあるけど、今日はここまですししよう。マシユもいいね？』

『はい………では先輩、また明日の朝にこちらから連絡をさせていただきます。』

「うん、おやすみマシユ、ダヴィンチちゃん。」

モニターの向こうで手を振るダヴィンチちゃんと、直後に聞こえた後輩マシユの「おやすみ

なさい」という声を最後に、カルデアからの通信は静かに途絶える。

そのタイミングと同時に開いたままの襖から、新八が姿を現した。

「皆さん、布団敷きましたのでどうぞ休んでください。」

「ご苦労だったアルな眼鏡………んんんもう限界ネ、私寝るヨ。」

「おい待ってって神楽、そつちは松陽が寝てる部屋の方角だろ。さてはまた横着おうちやくして松陽の布団に潜り込む気だな？」

「だって銀ちゃん、松陽と寝ると暖あたたかくていい匂いしてぐっすり眠れるアル！それに松陽が起きたら一番におはようって言いたZZZZZZZZZZ。」

「あらら………神楽ちゃん、喋ってる最中に寝ちゃったよ。」

「ほんと唐突に電池切れるんだよな、コイツは………おい定春、このまま向こうの布団に運んどいてやれ。」

「ワンツ。」

「フオウ、フオウツ。」

鼻提灯を膨らませて爆睡する神楽を背中に乗せられ、定春は新八の来た廊下をフオウと共に戻っていく。

「さてと………俺達も休むとするか。」

「マスター、銀時殿。片付けは段蔵がいたしますので、お先にお休みください。」

「いいよ、皆で片付けたほうが早く終わるし。段蔵だつて明日も手伝いがあるんだから、ちやちやつと済ませちやおう。」

「そうだね、僕も手伝うよ……ほら銀さんも、自分で散らかしたお菓子の袋ちやんと片付けてつてください。」

「へいへいわあつたよ。つたく母ちゃんかテメエは……ふあくあ。」

新八に尻を叩かれ、銀時大きな欠伸をしなから渋々片付けに参加する。

藤丸が食卓に散らばる湯呑を回収していたその時、「あの……」と新八が声を掛けてきた。

「ん？どうしたの、新八君？」

顔を上げると、食卓を拭く手を止めた新八が、何やら言いたげに口をもごもごことさせている。暫くばつが悪そうにしていた彼であったが、自分を見る藤丸の怪訝な表情けげんに気が付き、漸く口を開いた。

「実はその……ちよつと、言いにくいんだけどさ——」

《続く》

【捌・伍】 暮夜

「いや、本当にゴメンね。また姉上の悪い癖が出てさあ、空いてる部屋を物置にしちゃうんだもの。いつそ今晚だけでも銀さんと一緒の部屋だけでも思ってたんだけど、「銀ちゃんには僕と寝るの〜」ってアストルフオ君が銀さんにしがみついて離れないし………とりあえず明日、夜が明けたら片付けて部屋を一つ空けておくから、今晚だけでも我慢して………藤丸君？」

開始から一方的にずつと喋ってる眼鏡、じやなかつた新八は、数行に亘る台詞が続いても藤丸からの返答どころか相槌すら返って来ないことを不審に思い、彼か腰を下ろしている場所——新八しんぱんの部屋に敷かれた二組の布団へと目を向ける。

新八から借りた寝巻に着替え、布団の上に正座の姿勢で座る藤丸………だが彼はほとんど大きく口を開け、あちらへこちらへと忙せわしく動いているのは、彼の点になった眼だ。

「空いてる部屋が無いから」と新八に相談を受け、それなら今夜だけでも藤丸が提案した、新八の部屋でのお泊り会。ここが自室だと照れながら彼が通したその部屋は、所々和を想わせるデザインであり、広さも中々。藤丸のよく知る思春期男子の自室であつた……たつた一つ、部屋中に展開されたアイドル・寺門通、通称お通ちゃんのファングッズが溢れている以外は。

一番目を惹く等身大ポスターを始め、ミニポスターも壁の隙間を埋めるようにして貼られており、棚には今までにリリースされたCD、そしてライブなどのDVDがきちんと整頓されて並べられており、その横に飾られている精巧なフィギュアは、埃が被らないうようしつかりとケース内に納められている。そして極めつけは、新八の布団の上に横たわる大きな抱き枕……そのカバーには澁刺とした笑顔のお通が、彼女のイメージカラーである檸檬色の可愛らしい水着姿で印刷されていた。

「……………凄いなあ。」

ぼつりと漏らした呟きに、新八は彼が呆然としている原因が推しアイドルにまみれた自室のレイアウトであることに漸く気が付き、ぼつが悪そうに口を開く。

「そ、そうだよ。こんなドルヲタの部屋なんて、気持ち悪いよね……………ごめんよ。今からでも銀さんか誰かに頼んで、一緒に部屋にしてみようから。」

抱き枕を背にやりながら、徐々に沈んでいく声色で新八は言う。しかし彼が軽蔑して

るであろうと思つていた藤丸の反応は、驚くほどあっさりしたものだつた。

「別に、全然気にしてないよ？ カルデアにもこういう部屋にしているサーヴァントだって何人かいるし……それに、大好きなものをこれだけ応援できるって素晴らしい事だと思ふよ。俺もカルデアに戻つたら、ポスターでも部屋に飾ろうかな……あ、これつて新八君の言つてた親衛隊の？ へーちゃんと衣装まであるんだ！」

壁に掛けられたお通の横に並ぶ寺門通親衛隊の法被はっぴを眺め、感嘆の声を零す藤丸。一方の新八は彼から返つてきた予想外の言葉に暫しばしの間きよんとしていたのだが、やがてじわじわと込み上げる歓喜やら気恥かぢずかしさやらで、リング飴のように赤くなつた頬を見られないよう抱き枕に顔を押し付けた。

「とととにかく、今日はもう寝ようか！ あつ明日、マシユさんから何時頃に連絡が来るんだっけ？」

「んーと確か……9時頃だつたかな？ それまでにはスタンバイしておかないと。」
「こそそそうだね！ じゃあ、電気消すね！」

妙に挙動不審になつている新八が気になりながらも、藤丸は彼が敷いてくれた布団の中へと体を潜ひそらせる。

カチツ、と新八が電気に繋がる紐ひもを引くと、部屋の中は一瞬だけ闇に包まれるものの、障子紙から突き抜ける外の月明かりが、ぼんやりと室内を照らしていた。

天井にまで貼つてあつたポスターのお通と目が合ひ、驚いて声を上げてしまひそうになつたその時、「……ねえ」と新八から声を掛けられた。

「へ？な、何？」

「あのさ……僕、君にずっと聞いてみたいことがあつたんだけど……いいかな？」

眼鏡、やべつルビ間違えた。もとい眼鏡を枕元に置きながら、新八は藤丸に問い掛ける。いやに改まつた態度の新八を不思議に思いつつも、藤丸は特に気にすることなく「いいよ」とだけ答えた。

「それじゃあさ、始めに一つ……藤丸君はさ、いつからマスターをやつてるの？」

「おおう、いきなりそんな質問が来るとは……そうだねえ、俺がカルデアに来たのが2015年だから、ええと……かれこれもう二年くらいは経つてるかな。」

「そんなに……その間、たまには家に帰つたりしてるの？君の親には、友達には会つたりしてる？」

「……いや、まだ一度も里帰りなんて出来てないかな。だって人理を修復するまで、カルデアの外にいた人達は皆『いなくなつて』いたからね……でも懐かしいなあ。こうして誰かの部屋に布団を敷いて寝るなんて、小さい時友達の家でやつたお泊り会以来だし。それに母さんの手料理……また食べたいなあ。」

ぼつりと零したその直後、藤丸は急に黙つてしまつた新八の方を向く。愕然とした表

情でこちらを見つめる彼の姿にハツと我に返り、慌てて弁解を述べた。

「ででもでも、ちゃんとカルデアでの仕事が終わつたらちやんと帰る予定だよ!! だからその辺は大丈夫だから、カルデアはそんなブラック……いや、既に片足突つ込んでるようなものだからグレーかな? いやとにかく、別にカルデアは極悪組織とかそんなじゃないんだからね! 勘違いしないでよねっ!」

「何で最後の方ちよつとツンデレ風になつてるの……それじゃ次、藤丸君はどうしてマスターになつたの?」

「マスターになつた理由、か……そもそも俺がカルデアに來た理由が、コミカライズ版だと偽装した献血員の人が実はカルデアの職員で、そこから訳も分からず拉致同然に連れてこられたつて感じになつてるけど。」

「いやいやいや、それつて立派な誘拐事件だよな? 人理を救う組織が犯罪起こしちゃつてるけどそこんこいいの? 物語を円滑に進めるためとはいえ、そんな事案もローションスライダーの如くスルーしちゃうとか、やっぱり悪の組織疑惑拭えないんだけど?」

「まあまあ新八君、細かいことは一旦部屋の隅にでも置いといて……マスターになつた理由、俺がマスターを続ける理由、か……んんく改めて言葉にするとなると、結構難しいなあ。ちよつとまとめるからシンキングタイムちようだい。」

頭を乱雑に掻いてから、藤丸は暫しの間黙考に入る。うんうんと唸る藤丸をぼやけた

視界に映しながら、新八は先程彼が言っていた内容を思い返していた。

「(自分達以外の人間が消失、か……もし僕が藤丸君の立場になったら、どうなるんだろう。理由も分からず知らないところに連れてこられて、今日から人類を救うために死と隣り合わせの仕事を頑張れ、だなんて言われたら……そんなの、数ヶ月分も給料が支払われない万事屋の方がまだマシに思えて……いや全然マシじゃねえわ。家賃もまともに払えないあの天バが従業員に給料払う日なんて、後にも先にも本当に来るんだろうか……。)」

途中から脱線した先で銀時に対する怒りを募らせていた新八であったが、「あのさ」と横から掛けられた藤丸の声により我に返る。

「え、なっ何?もし言いくかかったら無理して言わなくてもいいんだよ?ゴメンね、変な質問して——」

「そういえば、カルデアにもいたんだよ?君みたいにアイドルが好きなのが。」
「……………へ?」

唐突に告げられた一言に、新八はきよんとする。こちらを向く新八の丸くなった目を一瞥してから、藤丸は続ける。

「その人は、俺がカルデアに赴任した時から働いてて、トップの地位にいた人がいなくなった後も、ずっとカルデアを…………俺達を支えてくれてた。」

静寂の中に、時折微かに聞こえる近所の犬が吠える声。何も言わずに聞いている新八が今どんな顔をしているのか気にしながら、藤丸は再び口を開く。

「お人好しで、どこか抜けてて、甘いお菓子が大好きで、『マジ☆マリ』ってネットアイドルの話になると我を忘れて熱くなつて……もしも新八君と会わせてあげることが出来たなら、きつと凄く意気投合して仲良くなれてたんじやないかな？」

明るい声色で絞り出す藤丸の声が無理をしていること……そして、彼の語るその存在は、もう既にもいないのだと、新八は悟つた。

「……それでさ、ここからが質問の答え。俺が今日まで、カルデアのマスターを続けてこれた理由は色々あるけど、その一つには、『彼』がいてくれたから……そして、その人が残してくれた言葉が、いつも背中を押してくれたからなんだ。」

語尾が震えそうになるのを誤魔化しようと、藤丸は大きく息を吸いこむ。そして吐き出した空気と共に、静かに呟いた。

「————キミたちなら、大丈夫」

それは新八が思っていたよりもあまりに飾りつ気がなく、あまりに素朴な言葉。

しかし、どこか温かさを感じさせるこの言葉が、何度も藤丸を奮い立たせる原動力と

なっているのだと理解すると、新八の胸や目頭にも熱い感情が込み上げてくる。

「……えつと、上手く言えなくてゴメンね？ていうかももう眠いよね？すっかり話が長くなつちやつて——」

「ねえ、藤丸君。」

唐突に声を発した新八に驚き、布団ごと跳ね上がった藤丸は「うえいつ!!」と奇怪な声を上げてしまう。

「もしよかつたら、この間君が銀さんに話してくれたように、僕にも教えてくれないかな……君がこれまでに歩んできた旅路と、君を支えてくれた『アイドルが好きだったその人』の話もさ。」

そう言うとき新八は口角を吊り上げ、ニツと笑う。

彼の言葉に瞠目どうもくしていた藤丸だったが、やがて彼もその返答の代わりに、新八の浮かべた悪戯スマイルつ子の様な同じ解顔を浮かべてみせた。

* * * * *

コン、コン。

皆が寝静まった夜半の廊下に、木製の扉を軽く小突く音が響く。

部屋の内側にいる主の返答を待たずに、横へとスライドした扉の向こうから桂が現れた。

「高杉、もう寝たか？」

後ろ手に扉を閉め、桂は部屋の主である高杉の方へと顔を向ける。

しかし名を呼ばれた本人は、桂の登場にも問いにも反応を見せず、先刻アストルフォが敷いた布団の上……ではなく、薄暗い部屋の隅に腰を下ろした状態のまま動かない。

右半身を壁に凭もたれかけている彼の肩は、先刻桂が彼をこの部屋へと連れてきた時よりも大きく上下していた。

「……——おい、高杉!!」

明らかに普通でない……いや、そもそも彼はここに来た時から普通の状態ではなかったのだが、ほんの数刻前に見た時より体調が悪化しているのは明らかだった。

慌てて駆け寄った桂の手が、高杉の左肩へと置かれようとした時だった。

「触るなっ!!」

突如張り上げた声と共に、バシツと乾いた音が室内に響く。

払われたその手に軽く痛みを覚えたが、それよりも大きな驚愕に桂は目を見張る。

「……高杉、お前……。」

「……悪い。だがお前も、迂闊うかつに触れないほうがいいぜ——視えてんだろ？お前にはよお。」

ゆつくりと頭を上げ、高杉の面がこちらを向く。そこに浮かんだ顰笑ひんしよの額を、一筋の汗が伝っていた。

「……ああ、視えている。口には出さなかったようだが、恐らくダヴィンチちゃん殿にも視えていたことだろうな。」

眉間に皺を寄せ、言い終えると同時に桂は息を吐く。

ゆつくりと持ち上げた脛の下から覗いた彼の紫色の瞳は、高杉を——否、高杉の左腕に纏まとわりつく、黒い煙のような『何か』を映していた。

神楽達とお妙を送ってきた後、この恒道館へと戻ってきてから初めて高杉の姿を目撃した際は、それは只の霏もや程度でしかなかった。しかし微量であれど、そこから伝わってくる禍々まがまがしい気配に驚異し、先刻のように詰め寄ってしまったのだった。

黒い霏は高杉の負った左腕の傷から噴き出るようにしてその量を増やしていき、カルデアとの通信が復活した時には、彼の煙管の煙が霞かすんでしまう程にまで膨れ上がり、高

杉の身体にねっとり絡みついていた。

ふと周りを見れば、眼前の異様な光景に自分以外は誰も気付いてはいない。それどころか、高杉本人でさえも自信を蝕むしばんでいる霧の存在を認識出来てはいないようであった。

その事実には啞然とし、表に出さずとも狼狽する桂であったが、藤丸の通信機が展開した空中ディスプレイに映ったダヴィンチが、怪訝けげんな顔で高杉を凝視していることに気が付く。何かを言い掛けた彼女であったが、高杉の鋭い眼光に牽制けんせいされ、それ以上の追求を阻まれてしまった。

そこから暫くはマシユとダヴィンチを筆頭としたカルデア側と、こちらは藤丸達や銀時らよつての状況確認が行われていたのだが、やはりダヴィンチの眼は所々の合間で高杉を睨にらんでいる。ふとその時、同じように高杉を観察していた桂の視線が彼女のものかと搗かち合う。

それは魔術師キャスターである者同士の直感と言うべきか……彼らはその瞬間、互いに視えているものが全く同じであることを悟った。

「(恐らく、魔力の察知能力に優れた者……取り分けキャスタークラスのサーヴァントであれば、アレを検地することが出来るらしい。しかしこれは——)」

「なあツラよ……お前の目に見えてるモンの正体、一体何だと予想するっ!」

徐おもむろに動かした深碧の右目が、険しい表情の桂を映す。高杉から一步距離を置いていた彼は、「……ツラじゃない、桂だ」とお決まりの一言を返してから数秒の後、重たい口を再び開いた。

「上手くは言えんのだが……恐らく、それは呪いの類たぐいだ。俺の目には、お前を覆う黒い煙のように見えている。しかも厄介なことに、呪いを受けたであろうその傷口からどんどん広がってきているぞ。」

「……黒い煙、ねえ。」

そう呟いた高杉の脳裏よみがえに甦よみがえるのは、先刻討ち洩らしたあの『岡田似蔵』の姿をした得体の知れない何か。

「カルデアとの通信の際、段蔵殿と共に貴様を襲った存在について話していたな？『シャドウサーヴァント』、と藤丸君達は呼んでいたか。」

「ああ。奴やつこさん、頭のとっぺんから足の爪先まで真つ黒黒助だったぜ。この腕はそいつの紅桜もじ擬もじきにやられたモンだ。お前さんの言う呪いとやらも、どうやら奴の仕業つてことで決まりだな。」

「だが呪いと分かったところで、対処する方法が見つからん。生憎あいにく俺は解呪を施せるスキルは持ち合わせておらんし、こうなれば明日の朝にでも、急ぎカルデアと相談をして………「先ひとまず高杉、傷の状態はどうなのだ？」」

「怪我自体は大したことねえさ、だが——ぐつ!!」

不意に言葉を詰まらせ、高杉は壁に凭れたまま蹲る。同時に彼の腕から噴き上がる凄まじい黒煙の量に、桂は両の目を見開いた。

「高杉っ!!」

咄嗟に手を伸ばし、前のめりになる桂。だが高杉は黒煙に覆われた左腕を持ち上げ、それ以上近付かないよう示してくる。

「はっ……参ったな、まさかこんなに進行が早えたあ思わなかった。サーヴァントでなかったら、間違ひなく即死してるレベルだ……。」

「高杉……まさかお前、呪いが既に霊核にまで……くそっ!」

開いた桂の手から、幾本もの青の巻物が展開される。解かれた巻物の紙面に書かれた呪文が次々と浮き上がり、敷かれた布団の周りへと集まっていく。やがてそれらの文字達は円形を成し、魔法陣となって床や布団に刻まれた。

「高杉、ここまで動いてこられるか? 厳しいのなら俺が手を——」

「いらねえ、つつつてんだろ……ガキみてえな扱ひすんな……。」

荒く呼吸を繰り返しながら、高杉は重たい体を引きずるようにして動かす。時間を掛けて布団まで辿り着くと、彼は仰向けになって倒れ込み、大きく息を吐いた。

「急ごしらえの魔術だが、その陣の中にいれば呪いの進行を多少遅らせることが出来る

「はす 咎だ……今夜は俺もここにいてやるから、朝まで何とか踏ん張れ。」

「はー……つきつきの看病たあ、俺が銀時と揃って風邪拗らした時以来じゃねえか。」

ククツと低く笑う高杉であるが、未だに安定しない呼吸と止まらない冷や汗が桂の不安を煽る。

「……とにかくもう寝ろ、少しでも体力を残しておかんと。明日はリーダーやアストルフオ殿達との約束もあるのだぞ？」

「ツラ、お前だつて休んどけ……また昨日みてえにふらついても、今の俺じゃ支えてやれねえぜ？」

「うるさい。それとツラじゃない、桂だ。」

魔法陣への魔力供給が切れないように手を施すため、桂は布団の傍らへと腰を下ろす。掛け布団を被せてやろうと上体を動かしたその時、彼の耳を小さな……ほんの小さなささめき声が擦った。

「なあ……もしもン事があつたら、ガキ共と藤丸と……松陽に、代わりに謝つといってくれや。」

——布が擦れるよりも小さな声わとで紡がれたその言葉を、桂が拾ったかどうかは分からない。

乱暴に布団を被せる桂の伏せられた顔の下では、唇を強く噛む口元が僅わずかに震えていた。

* * * * *

カチ、コチと音を刻む時計が、間もなく寅の下刻を示す。

静まり返った志村家の居間では、定春とフオウが丸まった姿勢ですやすやと眠りについていた。

「プウ、プウ………フオウ？」

熟睡していたフオウの耳に潜り込む、微かすかな物音。まだ微睡まどろみの中ちゆうにいるフオウが寝

惚け眼で見た者は、静かに開かれる隣の部屋の襖であった。

「フオウ……？」

徐々に意識が覚醒していき、フオウはその襖を凝視した。すると開けられた部屋の向こうから、見覚えのある亜麻色の髪がざらりと揺れた。

「フオウッ。」

現れたその人物が誰であるかを理解すると、フオウは飛び起き襖の方へと移動していく。起きる気配のない定春を避け、一直線に駆けてくる小さな動物の姿を見た『彼』は、襖に手を掛けたまま動きを止めた。

「フオウッ、フオウ。キュ……。」

『彼』の足元に辿り着くと、フオウは甘えた声で頬を摺り寄せる。すると上から伸びてきた二本の手に優しく包まれ、フオウはそのまま抱き上げられる。

「フオウ、フオ………フオ？」

温かい手に背中を撫でられ、すっかりご満悦していたフオウであったが、細めていたクリクリの目を開いたその時、彼は一つだけ違和感を覚える。

今、自分を抱き上げ撫でてくれているのは、紛れもなく『彼』——松陽であることは無論記憶している。

縁側から吹く微風に流れる長髪も、自分に向けられた柔和な表情も……花の香とは違

う優しい匂いも、全て自分の知っている筈の松陽のものであることに間違いは無い。

しかし、フオウが抱いた違和感は松陽の……こちらを見下ろす彼の、瞳の色。

自分を見下ろし、穏やかな光を湛えている松陽の眼はフオウの知る琥珀に近い色ではなく……暗い室内でも仄明るいと感ずるほどの、柳色をしていた。

「フオウ……？」

外からの月明かりで薄つすらと照らされる室内は、時計の音と定春の寝息だけが響く。

パチパチとまん丸の目を瞬かせていたフオウだが、不意に視界がぐるりと反転し、手足が畳みに触れた。

「フオウ？」

床に降ろされたことに気付いたのと、松陽がどこかへと歩き出したのはほぼ同時。足音を立てずに居間を後にしようとする彼の背中を、フオウは小さな歩幅で追いかける。

「おや……君も一緒に来ますか？」

潜めた静穏な声が、松陽を見上げるフオウへと掛けられる。自分の知っている彼とは

随分声色が落ち着いてるなあと思いつつ、「フオウツ」と短く返答すると、松陽は笑みを浮かべて歩を進めた。

居間から出ると、そこは幾つもの木製の扉が連なる廊下となっていた。恐らくこの向こうで、銀時達が休んでいるのであろう。たまに扉越しに聞こえてくるいびきを立てた耳で聞き流しながら、フオウは歩き続ける松陽の背中をてちてちとついていく。

と、ここで松陽の歩みがピタリと止まり、余所見をしていたフオウは彼の足に鼻を軽くぶつけてしまい、「ソキユツ」と小さく鳴いた。

「……ああ、ここですね。」

「フオウ?」

ぼつりと呟いた松陽の声に反応し、フオウは視点を彼の向いている正面へと向ける………そこにあるのは、一番奥にある部屋への扉。

松陽はゆつくりと扉へと近付き、音を立てないよう慎重に開いていく………行燈あんどんの明かりだけが灯る薄闇の室内には、床や布団に施された魔法陣や術式に囲まれて横たわる高杉と、胡坐あぐらの姿勢のまま眠り込んでいる桂がいた。

「う………ぐ、うう………つ!!」

絞り出すような呻うめき声が漏れ、高杉の面かおに苦悶が浮かぶ。彼の左腕を侵食する呪い

は、遂にはキャスタークラスのサーヴァントでなくとも可視化出来る程に進行しており、立ち昇る黒煙に「キュツ!!」と悲鳴を上げたフォウは、松陽の背後へと逃げ隠れた。「……………」

松陽は無言のまま、室内へと足を踏み入れていく。揺れた髪の間隙から覗いたその表情に浮かぶのは、悲哀と心痛……………そして、僅かな怒気。

一步、また一步と進んでいき、彼は高杉の臥ふしている布団のすぐ横で止まると、その場で膝を折り曲げた。

「大丈夫……………もう、大丈夫ですよ。」

まるで幼子をあやすような声音で囁き、松陽は利き手で高杉の頬にそつと触れる。冷え切った肌に、掌を通じて伝わる温もりが心地良く、高杉の表情がほんの少しだけ和らぐ。

「フォウ……………?」

その様子を遠巻きに眺めるフォウの見つめる先で、松陽の手が高杉の頬から左肩へと撫でるように移動していく。自身にも黒煙が纏わりつくことなどお構いなしに、彼の白い手が包帯の巻かれた傷口に触れた、その時だった。

「フォ……………ドフォーウツ!!」

——突如として幽暗を照らす、白く淡い光。

しかし、この明かりは行燈が齎もたらしたものではない……来ている寝巻を突き抜けるようにして、松陽の背中に刻まれているとされていたあの鬼を模した刻印が、光を放っていたのだ。

「フオウウ………フオ？」

あまりに唐突な出来事に一驚を喫していたフオウであったが、同時に訪れた変化にも忙せわしなく目を白黒させる。

室内を覆い尽くさんとばかりに溢れていた、黒い煙。高杉を蝕み、苦しめていた呪いの具現——それが少しずつ、徐々にではあるが確実に収束している。

「——」。

僅かに動いた松陽の唇が、何かを呟く。

それが一体どんな言葉を紡いだのか、残念ながら聞き取れた者はここにはいない。

やがて黒煙が晴れ、同時に松陽の刻印の光も完全に収まったのを確認すると、フオウは漸く室内へと小さな足を踏み入れる。ゆっくりと松陽の手が離れた後には、まるで先程の苦痛が嘘だったかのように、規則正しい呼吸で静かに眠る高杉の姿がそこにはあった。

「フオウ……キユーウ？」

松陽の背後に座り、てしてしと前足で背中を叩く。その動作に反応し振り向いた松陽の額には、幾筋もの汗が伝っていた。

「……………ふう。」

自身よりも、穏やかに寝息を立てている高杉の額に残る汗を拭ってやる松陽。その面には、心底からの安堵の微笑みが浮かんでいる。

ふと彼が顔を上げると、今しがた起きた出来事にも目を覚ます様子も見せず、開いた口から涎を垂らして眠りこける桂の姿が目には止まる。

展開された魔法陣、辺りに散らばる複数の巻物、そして俯いた目下にうつすらと浮かぶ黒い隈くまから、彼もまた高杉を案じて自身を疎おろそかにしてまでも、懸命に尽くしてくれていたのだろう。時折「ぬ、っ」と奇妙な唸り声を洩らす姿に含み笑いながら、松陽は無

防備な彼の頭頂に掌を乗せた。

「貴方あなたも、たくさん頑張ってくれたんですね……ありがとうございます。」

柳色の瞳に光を湛え、優しく声をかけながら頭を撫でてやると、閉じていた桂の口許がほんの少しだけ緩んだ。

——ピシツ、

不意にどこから聞こえてきた、不可解な音。

それはまるで、圧力をかけた硝子がらすに罅ひびが入った時のような、そんな音。

どこから聞こえてきたのだろうとフオウが耳を立てていた時、松陽の様子に変化が訪れた。

「ぐっ……うあつ、う……!!」

「フオウ!!」

胸元を押さえ、突如苦しみ出す松陽の姿にフオウは驚き狼狽うろたえる。

「っ……いけませんね。少し無理を、させすぎました……。」

額から首筋から滲にじむ汗が床へと伝い落ち、開いた口から乱暴に酸素を取り入れながら、松陽はゆつくりと立ち上がる。来た時と同様、ただし足取りは先程よりも重く、そ

れでも二人を起こさないようにと極力音を立てずに扉へと向かつて行く。

「おやすみなさい……………晋助、小太郎。」

ゆつくりと閉ざされていく扉の向こうに消えていく寝顔に微笑みを送り、松陽は扉を閉める。

そのまま踵きびすを返し、来た方向を戻っていこうとする松陽の後に、フオウもついていく。だが二、三步進んだところで松陽の身体がぐらりと揺れ、咄嗟に寄りかかった壁を伝つてそのまま床に座り込んでしまった。

「フオウツ、フオウー！」

松陽の膝に飛び乗り、フオウはその顔を覗き込む。すると彼の耳に聞こえてきたのは、一定のリズムで繰り返される呼吸音……………そう、寝息であった。

どこか憂うれいを湛えていた柳色の瞳は完全に閉ざされ、そこにあつたのは先刻の悠々たる雰囲気とは打つて変わった、フオウのよく知る松陽のあどけない寝顔。

「フオウ……………？」

目を覚ましてからの変容振り、今の彼の大きなギャップに困惑するフオウであったが、まあとにかくこんなところで寝ていては風邪を引くだろうと、前足後ろ足ついでに尻尾も使つて、懸命に松陽を起こそうとする。

「んん……おいたは駄目ですよ、フオウさん……。」

すると寝言と共に伸ばされた手がフオウを掴み、小さな体をがちりとホールドしてしまう。

「フオツ、フオウツフオウフオウ……キユ〜ウ。」

じたばたと抵抗を試みるも、そのまま熟睡の態勢に入ってしまった松陽の腕から抜けたようでは容易ではない。そうしているうちに歩いて騒いだ疲れのツケが今回つてきると、再び夢の中へと旅立っていった。

——空に浮かんだ『眼』が、払暁と共にその瞼を閉ざしていく。

朝日の昇らないこの江戸に、再び朝が来ようとしていた。

《
続
く
》

【玖】 恒道館の朝（Ⅰ）

—— 夢を、遠い昔の夢を見たような気がする。

ざあつ、と頬を掠める温かな風に瞼を開けば、板張りの床に広がる薄紅の花弁が映る。足袋越しに踏む古い木の感触。ガヤガヤと子供達の声で賑わう空間。そして大きく開け放たれた扉の向こうから見える、満開の桜。

忘れもしない、忘れるわけがない……ここは、『松下村塾』に設けられた道場だ。

『サーヴァントは、夢を見ることが無い』

まだお登勢の店の上に拠点を置いていた際、銀時と閑談していた藤丸がダヴィンチから聞いたと話していたこの言葉を、ここでふと思いつく。

とするのなら、これは己の中に存在する過去の記憶を再生しているのだろうか……：……
 そう疑問を抱いたのと同時に、突如頭頂部を襲った鈍い痛み。

喫驚と怒りに振り返ると、そこにいたのはこちらに對してバツが悪そうな顔を向ける一人の少年。よく見知った銀色の髪が春風に揺れている彼は、犯行の凶器であろう竹刀を懸命に背後へと隠そうとしていた。

……：……間違いない、コイツは幼い時の銀時だ。人の頭に竹刀で一撃入れておきながら、反省している素振りなど微塵も見せない。夢であろうと記憶の再生であろうと腹の立つことに変わりはなく、そんな彼に小芬しょうぶんしていたその時、呆然とする周りを掻き分け、髪を高い位置に結わえた少年——今の銀時同様に、幼い頃の姿そのままの桂がこちらへと駆け寄ってくる。

不思議なことに、ぱくぱくと口を動かして発しているであろう彼の言葉が、声となつて聞こえてこない。だがこちらに積極的に話しかけていること、そして銀時に対して尻を吊り上げている様子から、竹刀による怪我の心配と銀時に対してきちんと謝罪をするよう叱っているのだというのが分かった。

小言を言う桂にうんざりとした表情かおを向け、耳の穴をかつぽじる銀時。だがその利

那、ゴンツと響く鈍い音のすぐ後に、頭に大きな瘤こぶの出来た銀時がその場に蹲うすくまる。

——再び吹いた春風が、道場の中に花卉を運んでいく。

宙ちゆうを舞う薄紅色と共に、さらりと流れる絹のような亜麻色の髪。そして固く握った拳と対照的に、面おもてに浮かんだ柔和な微笑。そんな『彼』の登場に、道場にいる全ての子ども達は声を賑わせた。

「……」

桂は『彼』へと駆け寄り、ぴよこぴよここと結った髪を揺らしながら事の起こりを懸命に説明をしている（ように見える）。すると『彼』は興奮する桂の頭に手を置き、宥なだめるように優しく撫でる。桂は徐々に落ち着きを取り戻していき、やがて『彼』の手が離れる頃には、すっかりご満悦顔になっていた。

痛む瘤を押さえ、低く唸うなりながら身を起こす銀時の横を通り、『彼』はこちらへとやって来る。そして桂の時と同様に手を伸ばし、大きな掌が頭頂へと乗せられる。

桜の花と、風と混ざり合った、温かく優しい匂い——穏やかな光を湛たえた柳色の瞳に見つめられ、混ざり合う様々な感情に胸の高鳴りが早くなる。

「いたいのいたいの、とんでいけ。」

まるで年端もいかぬ小さな子どもに対して使うような、痛みを忘れるための『お呪い』。

はつきりと聞こえたその優しい声色に、掌から伝わる心地良い温もりに、そして不思議と痛みが徐々に引いていく感覚に——高杉は、ゆつくりと瞼を閉ざしていった。

* * * * *

「……………ん。」

薄く開いた隙間から、ぼんやりとした行燈あんどんの明かりが入り込む。

チュンチュンと窓の向こうで鳴く雀の声を聴きながら、高杉は微睡まじろむ意識の中で右目を動かす。古びた木の天井、所々破れかかった障子窓、そして……今しがたまで自分が眠っていた布団の横で胡坐あくらを搔く、桂の姿。

ぬゝぬゝと相変わらず不気味な寢息を立てて眠る彼であつたが、時折ズビツと鼻を噉る音が聞こえてくる。行燈に照らされたその顔をよく観察すれば、不気味に開いた両の目からダバダバとまるで滝のように涙が溢れており、寢息と相まつて織り成される薄気味悪い光景に、高杉は顔を顰めた。

「……………ハア、寢起きに嫌なモン見ちまつた。」

吐く息と共に零しながら、高杉は布団から上体をゆつくりと起こす。その時、彼は自身に起きた変化に気が付いた。

「(？……………妙な、やけに体が軽い。)」

昨晚あれだけ苛まれた、呪いによる激しい痛苦。しかしそれらは数刻の時を経た今、この身体のどこにも感じられない。それどころか体調は好調過ぎる程に好調、正に絶好調な状態だ。

……………それに、違和感はそれだけではない。徐々に降下していく高杉の目線は、昨晚負った傷のあるはずの左腕へと落とされる。

「(おおいおい……………幾らサーヴァントつつつたつて、まさかな——)」

寝間着を開けようと自らの襟首に手を掛けたその時、「ぬゝっ！」と一際大きな声を上げたのを合図に、項垂れていた桂が突として面を上げる。涙に塗れたあの不気味な眼でしばし中空を見つめていた彼だったが、ふとその視線が高杉のものと重なると、いつも

の柴色ふしいろの瞳に戻ると同時に意識を覚醒させた。

「んあ？ たかすぎ……ハッ！ 高杉!! おいお前、起き上がって大丈夫なのか!!」

「朝っぱらからでけエ声出すな、頭に響くだろうが……見ての通りだ。もう痛みも不調も無エがどうだ？ お前の眼にや、まだ何か見えてるかい？」

「何かというか……そういえば先程から、視界がぼやけてお前の姿がよく見えんな。それに何だか鼻が詰まって息苦し——はて？ なあ高杉、俺は何故泣いているのだ？」

「そりゃあコツチの台詞だ。いいからさっさと顔中ツラに塗まみれた涕てい洒いし諸々拭いちまいな、見苦しいったらありやしねエ。」

ツラじゃない桂だ！ と返しつつも、桂は布団の傍らに置いてあつた桶の水に掛けてあつた手拭いを浸す。高杉の看病用にと用意してあつたその桶であつたが、元は湯で満たされていた中身も朝方にはすっかり冷たくなつてしまい、その水を吸つた手拭いを頬に当てた桂の口から「ちべたつ」と小さな無意識の呟つぶやきが漏れた。

「というか、号泣してる本人が驚いてるつてどうなんだい？ 泣くほど嫌な悪夢でも見たか？」

くつくつと嗤わらう高杉に、放した手拭いの下から覗いた桂の顔は不機嫌に染まつている。彼は使い終えたそれを乱暴に洗いながら、息を一つ吸い込んだ。

「いいや、悪夢などではないさ……………先生にな、頭を撫でてもらう夢を見たのだ。」
その言葉に、枕元に畳んで置いてあつた自身の着物へと手を伸ばした高杉の動きが不意に止まる。体は硬直したまま右目だけを動かし、瞠目する彼を余所に桂はそのまま続ける。

「いつの頃の思い出かは曖昧なのだが、とても懐かしかった……………夢の中での俺も、お前や銀時も幼い頃の姿のままだな。確か道場で稽古けいこをしていた時に、銀時の竹刀がお前の頭に誤つて直撃して、それを俺が咎とがめていたら先生が——」

「先生が銀時の頭に拳骨喰らわして、その後お前と俺の頭を撫でた……………だろ？」

「……………え？」

己が今まさに続けようとした内容が、一言一句違ひなく高杉の口から紡がれたことに、桂は耳を疑う。二の句が継げないでいる桂の眼前で、高杉は巻いた包帯で左目を覆つていく。

「ツラ、前に藤丸が銀時と喋つてた話、お前も聞いたなら覚えてるか……………？『サーヴァントは夢を見ることは無い。例え何かを見ることがあつたとしても、それは英霊の過去の記録か、或いは記憶の再生か』……………だがこれは、マスターと魔力のパスが繋がつてる奴らに起こる現象だとも聞いている。」

「……………だとするなら、マスターを持たない俺やお前は、一体誰の記憶を夢として覗き見

ていたというのだ？」

「さあな、こればかりは俺も見当がつかねえ……………それとも一つ、お前に確認しておきたいことがある。」

包帯の端を結び終わると、高杉は徐に寝間着の左衽おもむろに手を掛ける。

怪訝にこちらを見つめる桂の前で、高杉は着物を開け左肩を露わにする。そして腕に

巻かれた包帯を解ほどいてみせた時——桂の表情は驚駭きょうがいの色に染まった。

「なっ——！！」

——ひと巻き、またひと巻きと緩められる細い布。

やがてその下から現れた、赤黒い血の染みたガーゼが取り払われる。

そこにあつたのは、やや筋肉質な肌に傷どころか痕あとすらも残ってはいない、彼の白皙はくせきな細い腕。

「ツラ、これを見た上でテメエに改めて問う……………お前が何かしたんじゃねえのか？」
「い……………いや、いや違う！俺ではない！！昨晚貴様にも言っただろう！！俺は治癒や解

呪の類たぐいの術はまだ扱えない、だからこんな………こんな、傷も呪いも痕跡すら残さず癒すことなど、今の俺には到底不可能だ………」

「成程、呪いも消えてんのか………だとしたらお前にしか見えてなかったあの黒い靄もやつてのも、もう見えてはいねえってこつたな？」

着慣れた紅桔梗の着物に袖を通してながら問うと、桂は無言のまま頷く。丸く開いた両の目で宙を睨む彼の眉間には、僅かに皺しわが寄っていた。

「……まあ、そう深く考えるなよツラ。何でかは知らねエが、こうやって怪我も呪いも綺麗さっぱり治ったってんなら万々歳じゃねえか。もしかするとお前さんが夜通し呪詛アウエンジャーの進行を遅らせた成果があったかもしれねえし、案外復讐者の持つ固有能力か何かが働いたつてのも——」

カリカリ、カリカリ、

そこまで述べられた高杉の憶測は、不意に扉の方から聞こえてきた微音によつて言い止さす形となつて終わる。

木の板を爪で引つ掻くような音の後に、続いて聞こえる甲高い鳴き声。扉の向こうの正体にすぐに気付いた両者は顔を見合わせ、先に立ち上がった高杉が扉へと向かい、手

を掛けた取っ手を横に引いた。

「フオウツ。」

そこにいたのは彼らの予想通り、つぶらな瞳でこちらを見上げ、その場にちよこんと腰を下ろすフオウの姿。ふわふわの白い尻尾が揺れる度に、高杉の背後から顔を覗かせた桂が目を輝かせている。

「おおおフオウ殿、今日も何と素晴らしきモフモフだ……もしや、俺に朝の挨拶という名の触れ合いタイムを提供しに来てくれたのか?！」

「おい、人の背中に気色悪い息吹きかけンじゃねえ……どうしたお前さん、腹でも減ったか?！」

鼻息を荒げる桂を一睨みし、高杉はフオウと視線を合わせるようにして身を屈める。するとフオウはそんな彼の着物の袖を小さな口で噛み、ぐいぐいと引つ張った。

「?……何だ、そつちに何か——」

開いた扉から顔だけを出し、フオウの引つ張った方角へと首を動かす高杉——刹那、彼の右目に宿る深碧が、驚愕に見開かれる。

部屋の行燈が僅かに照らす、恒道館の朝明の廊下。

その古びた廊下の壁に背中を凭れ掛け、床に座り込んでいたのは――

「……………松陽？」

その眩きに反応し、桂もまた扉から顔を出す。それと同時に高杉は部屋を飛び出し、座睡している松陽の元へといち早く駆け寄っていた。

「高杉、先生は――」

「……………ああ、ただ寝てるだけみてエだ。」

すやすやと規則正しい寝息を立てているのを確認し、一先ず安堵の息を零す高杉。遅れて桂がフオウと共にやってきたその時、閉じていた松陽の臉が微かに震えた。

「ふあ――はつくしゆん！」

突として込み上げてきたむず痒さを抑えることが出来ず、くしゃみとなつて暗い廊下に響き渡る。それを皮切りに松陽の意識は眠りから覚め、開いた彼の臉下から覗く琥珀色が始めに映したのは、揃つて目を丸くする二人と一匹の姿であった。

「あれ……………晋助、さん？それに小太郎さんも……………ええつと……………」

寝惚け眼を擦り、松陽は忙しなく辺りを見回す。恐らく……………否、ほぼ確実だと思うが、彼は今自分の置かれている状況が把握できていないのだろう。あたふたとする師の姿に悪いと思いつつ窃笑し、高杉は口を開いた。

「松陽、ここはあの眼鏡の家でやつてる道場ン中だ。貴方アンタが城の外で倒れた時、銀時達こゝまで運んできたんだよ。」

「新八君の、お家ですか……？　そういえば私、銀時さんや藤丸君達とあのお城に行つて、それから……あれ？」

「……ああ、まただ。自身が意識を失う前にとつていた行動、そして言動。幾ら懸命にそれらを思い出そうとしても、そがいも阻害するかのようもに霽もが広がり、覆い尽くしていく。」

「松陽殿、無理に思い出さなくともよいのだぞ……それにしても、居間の隣にある寢室にいた筈はずの貴方が、何故こんな所に？」

「えつと……すみません、それも分からないんです……あの、どうやら私、また皆さんにご迷惑をかけてしまったようで……本当ほんとうにごめんなさい……。」

居た堪たまれなさから目を伏せ、緘黙かんもくしてしまふ松陽。その姿に桂かへが周章しゅうしょうしていたその時、彼らの隣の部屋の扉が開かれた。

「ふあくあ……つたくオメーら、朝つぱらから廊下で何騒いでやがんだ。こつちはアストルフオの寝相攻撃のせいで、全然熟睡出来なかつたんですけどコノヤロー。」

「いや、ゴメンね銀ちゃん、僕つてば寝相の悪さはシャルルマーニュ十二勇士の中でも1、2を争うつて言われるくらいだからさ。」

大口を開け、欠伸あくびをする銀時に続いて、愛嬌笑いを浮かべるアストルフオも、揃って寝間着のまま部屋から出てくる。すかさず銀時の足元から頭部へとクライミングを果したフオウは、寝癖で余計に愉快に跳ねた彼の天然パーマにじゃれついていた。

「おお銀時、アストルフオ殿。おはよう、良き朝だな。」

「何？どんな朝だつて？熟睡出来なかつたんだつて今言つたばつかなんだけど、頭ツラなのかな？」

「ツラじゃない地毛だ！じゃなくてカツラ、ううん違つた桂だ！」

お決まりの台詞をややこしい感じで返す桂の陰から、銀時達の声に反応し松陽が面おもてを上げる。するとその視線がこちらを見つめる董色すみれとぶつかり、また松陽の見つめる先を辿たどつた高杉の視線が加わると、アストルフオの表情かおがパアツと華やいだ。

「松陽さんっ！スギつちっ！っ！」

寝癖で跳ねた桃色の髪を躍おどらせ、アストルフオは高らかに名を呼んだ彼らの元へ突っ込んでいく。ポカンとした様子で見上げる松陽の傍らで、回避すべの術も受け止める準備も出来ていない高杉は当然狼狽ろうばいする間もなく、アストルフオからの猛烈なハグを正面から受け、松陽諸共床もろともへと倒れていった。

「うわ〜ん松陽さん！いきなり倒れたからすつごく心配したよ〜っ！もう大丈夫？痛いところかない？」

「え、ええ。大丈夫です………ご心配をおかけしました、アストルフオさん。」

「うんうん、元氣そうならよかったよかった！スギっち、君のほうは？もう怪我は平気なの？」

「ああ、もう何とも無えさ………強しいて言うんなら、たつた今ぶつけた後頭部のほうが痛エんだがな。」

肩に腕を回された状態でアストルフオに頬擦りをされるといふ、カルデアにいるムニエルが見たら喀血かっけつ & 卒倒しそうなシチュエーションにいる約二名。松陽は困ったように微笑を浮かべているものの、その表情には先程までの消沈した様子はもう見られない。顰しかめつ面で天井を仰あおぐ高杉もそんな恩師の変化に気が付き、顔に出さなくとも人心地ひんしんちがついたようだった。

「おう松陽、おはよーさん。もう起きてても平気なのか？」

「あつ、おはようございます銀時さん。今はもうこの通りです………その、昨日は折角お外に連れ出してくださいだったのに、却かえって皆さんの足を引つ張る形になってしまつて、本当にすみませんでした……。」

「んな事いいんだよ、いちいち気にすんなつて………それよりお前、何でこんなところにんの？寝相が悪イにしても程つてモンがあんだろ？」

「ええつと、それが私にもよく分からなくて……。」

漸く床から身を起こし、松陽は眉の端を下げて答える。するとここで「フオウツ」と小さなお手々が銀時の頭の上で拳手をし、皆の注目を集めた。

「もしかして、フオウ君何か知ってるの?」

アストルフオが尋ねると、エツヘンとふわふわの胸を張つてみせるフオウ君。注目を集める中、彼は小さく咳払いをした。

「フオウツ、フオフオウフオウツ、フオフオウフオウ。フオーウ、フオーウフオフオウフオウツ。ンキュキュツ、フオーウフオ、フオフオウ? フオウフオウフオウフオーウツ
!」

「……………あく、えつと。」

時折ジエスチャーも交えながら一通り鳴き終え、もとい説明し終えたフオウは、キリツとキメた顔で一同を向く。どっかに翻訳出来るコンニャクでも落ちてないかな、と銀時が辺りをキョロキョロと見回す一方で、やつと上体を起こした高杉は桂がフオウの説明を終始頷きながら聴いていたのを疑問に思う。

「おいツラ、こいつの言葉が分かんのか?」

「ツラじゃない桂だ。いいや残念ながら、翻訳出来るコンニャクでもない限り俺にも難解だ。しかし一つだけハッキリと言えることがある、それは……………」

「それは……………何ですか? 小太郎さん。」

「それはだな—— フォウ殿が今日も愛らしくモフモフであるということだ！ おお
くよしよしよし！」

「フォウツ!! マジヤメフォウ!!」

「だあアアアやめろ馬鹿ヅラ!! フォウも爪立てんじやねえ痛ててて抜ける抜けちゃうウウツ!!」

銀時に乗ったままのフォウを撫で回し、フォウも剥はがされまいと必死にしがみつぎ、それにより天パを引つ張られた銀時の絶叫が朝つばらの廊下に喧やかましく響く。

腹を抱えて笑い転ころけるアストルフォの隣で、松陽もまた賑やかな彼らの様子にクスクスと笑っている。漸くいつもの朗ほがらかな笑顔を見られたことに、高杉が目を細めた——
——そんな時だった。

『ホゲ~~~~~~~~ツ♪』

突如どこからか響いた、否轟とどろいた最大音量ボリユームMAXの不協和音。

空気を震わせ大地を震わせ、ついでに霊核ハイトまで（危ない意味で）震わせてくるその音に、松陽の耳を咄嗟に覆った高杉を除いた一同はひっくり返る。

「何なに地震!! それとも敵襲!! 大変〜マスター大丈夫かな!!」

「落ち着け、こりやあ災害の類じやねえだろ……いや、ある意味近いような気もしなくはないが。」

襲い来る頭痛に耐えるようにして、高杉の眉間に自然と皺が寄つていく。顔を擧めながらも松陽の耳を塞ぐ手に籠もる力が弱まることはなく、そんな彼の行動に対し松陽は不思議そうに首を傾げるのだった。

「今の方角からだと……ちようど中庭の辺りではないか？」

「フオゥ……フオウフオウ。」

「ったく、しゃーねえなあ。近所から苦情来る前に止めとくか。」

* * * * *

「ふわぁあ……。」

所変わつて、こちらは志村家恒道館の洗面所。

鏡の前に揃つて立つ藤丸と新八は、これまた揃つて大きく口を開けて欠伸をした。

「結局僕ら、かなり遅くまで話しちゃつたね……ふあぁあ。」

「ゴメン、俺も話すと止まらなくなっちゃつて……ふあぁあ。」

「でも、藤丸君の話すつごく面白かったよ。特にあのチエイテピラミット姫路城とか、ずつとツツコミ炸裂しつ放しだったし。」

「アレもまた嘘のようで本当にあつたトンデモ特異点だったからねえ、今となつては懐かしいなあ……………ねえ新八君。」

「ん？どうしたの？」

「睡眠時間を奪つておいて言うのもなんだけど……………新八君の部屋でのお泊り会、すつごく楽しかったよ！もし君がよかつたら、またやりたいな……………なんて。」

「藤丸君……………うん、またやろうよお泊り会！今度はこつそりお菓子とかも用意してさ、あつても姉上には内緒だよ？夜中に間食なんてしたら、物凄い怒られるからさ。」

昨夜のような悪戯つ子の笑みを浮かべる新八に、藤丸も同じように笑つてみせる。彼から手渡されたタオルを広げようとした時、「あれ？」と新八が声を上げた。

「どうしたの？」

「ここに置いてるタオル、昨日のうちに人数分出しておいたと思つただけ……………やっぱ一枚足りないなあ。ちよつと新しいの無いか見てくるから、藤丸君は先に顔洗つてて！」

言うなり洗面所を飛び出していった新八、暗い廊下の奥に遠くなつていく背中を見送つてから戸を閉め、藤丸は蛇口を捻^{ひね}り水を出す。

掌に溜まって水を顔面に掛ければ、その冷たさで残っていた眠気は一気に吹き飛ぶ。繰り返し行つて汚れを落とすと、藤丸は上げた顔にタオルを押し当てた。ふわふわと肌に心地いいそれは紛れもない新品で、新八の心遣いに感謝をしながら水分を拭き終えたその時、先程閉めた戸がガラリと開いた。

「あつ新八君、おかえ——り？」

振り返らずとも、鏡に映つたその人物を確認した藤丸は、思わず声を？む。

そこにいたのは新八ではなく、ガタイのいい一人の男性。首にタオルを掛け、キツチリと着込んだ和服を着込んだその男は、高い身長に蓄えた顎鬚あごひげと、一見から捉えた印象はかなりの強面こわもて。動物で例えるなら、そう……間違いなくゴリラだな。と藤丸は狼狽ろうばいしつつも、内心でそんなことを考えていた。

鏡越しにゴリ……失礼、男性と見つけ合うこと約十数秒。流石に知らない人とこんな長時間目が合うとかマジキツツいわなどと思ひ始めていた時、鏡の中の男性がニカツと笑み顔に変わった。

「おはよう！もしかして君、新八君のお友達かな？」

つい先程まで怖い印象しか抱けなかったその男性だったが、人の良さそうな笑顔と明るい声に、藤丸は思わず拍子抜けしてしまう。

「あ、えーつと……………ソウデス。」

「そうかそうか。あの子はあまり齡の近い子と一緒にいるのを見かけないからなあ……………でも、君のような友達がいてくれたようで俺もお妙さんも一安心だ！これからも新八君をよろしくな！」

「は、ハイ……………」

終始明るい調子で話し続ける男性に圧倒される藤丸だったが、彼が口にした単語を脳内で反芻する。

「（この人、今お妙さんって言ったよな……………？それに新八君のことも詳しいみたいだし、もしかして身内のひとなのかな？）」

「それじゃあ新八君のお友達君、ゆっくりしていつてくれたまえ！ワツハハハハ！」

去りに際に齒を光らせ、解顔スマイルをしていくゴリラ、あつ間違えた男性。ドスドスと足音を立てて暗がり消えていく大きな背中を、藤丸は唾然としながら見送る。

一体何が起きたのか理解が追いつかず、とりあえず冷静になろうと再び冷水で洗顔しまくる藤丸。バシャバシャと半ば躍起やっきになって水を浴びまくっていた時、背後から聞き慣れた方の声が聞こえてくる。

「いやゝゴメンごめん、タオル探すの時間かかっちゃって——って、何してるの藤丸君!!」

新八の驚愕した声に顔を上げると、藤丸は自身が今顔どころか頭や折角着替えた礼装まで水浸しになっていることに漸く気がつく。

「うわあつ!!」、ゴメン……。」

「ああもう、そんなに濡れてちゃ一枚じゃ足りないね。ほらコレ、僕まだ使ってないから拭いて。」

「ううう、ありがとう新八君……。ところで、一つ聞きたいんだけど。」

「なに? タオルなら多めに持ってきたから、別に気にしなくても——」

「新八君の家にさ、おじさんかお兄さんっている?」

「……………え?」

数秒の沈黙の後に次いで出たのは、あまりに素つ頓狂とんきやうな新八の声。呆然とする彼の前で、藤丸は受け取ったタオルで髪を拭きながら続ける。

「いやさつき、君がタオルを取りに行ってる間にさ、初めて見かける男の人がここに来たんだ。背が高くて体格が良くて、顎に髭があつてちよつと強面だったけど気さくに話しかけてくれてさ。その人、新八君やお妙さんのこともよく知ってたみたいだから、てつきりこの家の人かなって……………新八君?」

突然押し黙ってしまった新八を訝いぶかしみ、藤丸はタオルを首に掛けて彼を見る。するとそこにいたのは、つい今しがたまで笑ったり焦ったりを表していた表情筋を完全に停止させ、無表情となつた新八であつた。

「……………藤丸君。」

「え、はっハイ何ででしょうか？」

「そのゴリラ、どつちに向かつて行つたか覚えてる。」

「えっと、確か新八君が来た方向と逆に——つて新八君！」

藤丸が示すや否や、体の向きを180度反転させた新八は、そちらの廊下をスタスタと早足で進んでいく。

何故新八がああ男性がゴリラに似ていることを知っているのか、というか突然態度を変貌にさせた新八に理解がついていかず、暗がりに遠くなつていく新八を藤丸は慌てて追いかけていった。

《《続く》》

【不定期閑話 銀さんと××】

銀さんと藤丸

「はい、という訳で何の前触れもなく唐突に始まりました。『不定期閑話 銀さんとチョメチヨメ』。この閑話では俺こと坂田銀時が、ここに遊びに来るゲスト（お一人様限定）と共にあんなコトやこんなコトをしていく不定期開催コーナーでつす。よろしくね。」

「ちよつとちよつと、銀さん。」

「あ？何だよ藤丸……………あ、コイツは記念すべき第一回目となる今回のゲスト。タイトルに既に名前出てるし、たった今俺も名前呼んだけど、一応紹介しておくか。はいお名前どうぞ。」

「あ、どうも。FGOサイドの主人公、藤丸立香です……………って、そうじゃなくて。何？

「このコーナー。」

「だから今も言ったろ？ 不定期開催閑話だつて。」

「言つてたよ。そして聞いてたよ。でも俺が聞きたいのは、何で本編放つたらかした状態で、唐突にこんなコーナーが始まったのかなんだけど。」

「そりゃあお前、アレだよ。書いてる奴が適度に息抜きしときたいからだろ？」

「息抜きて………更新遅いわ誤字脱字はしょつちゅうだわで、いつでも息抜けてるよ
うなもんなの？」

「藤丸、既に原稿一ページ目が終わりそうなここまで来れば、お前も気付いてるだろうよ。毎度頭を悩みに悩ませて書いてる、そんな地の文もここには無い。今書いてる本編の中身を捻れば捻る程、その分の長考によつて書くペースがどんどん落ちていく………そんな時のほんの息抜きの為に、この『銀さんとチョメチョメ』は始まつた………らしいぞ。このカンペによれば。」

「まあ、言いたいことは何となく理解したけど。要するに秋刀魚のマンマとか、TETS UKOの部屋みたいなモンってことでいいんでしょ?」

「^{マル}○使つて伏せる気も無えな、コイツは………まあ、そんなトコだな。それでゲストとして呼ばれてきた奴と二人で、^{あんなコト}暇潰しや雑談をするってわけだ。」

「ねえ、そういやどうしてゲストは一人だけなの?皆呼んだほうが盛り上がって楽しいんじゃないかな?」

「そこなんだよなあ、俺も同じこと考えてた。二人きりの時より話も弾むだろうし、何より字数も埋められて一石二鳥だと思うんだけどよ………ただ、あんましワチャワチャさせつと、書いてるほうも読んてるほうも分かりにくいだろ?特にお前と新八を並べると書いててどつちがどつちだか、たまに分かんなくなるんだよ。」

「いや、それって銀さんの愚痴じゃなくて書いてる奴の不満だよな?おーいアンタの力量が足りてないだけじゃーんしっかりしろよ。」

「いやあ、何かすいませんね皆さん。こういういい加減で適当な奴に、俺らは話ン中で好き勝手動かされてんです。そんな奴なんかの書いた作品をね、こうして読んでくれるだけでも僕あ幸せだよ。ありがとうございます……っていつも心中で呟きながら眠りについてるみたいよ。」

「それより銀さん……さつきからずつと気になってたんだけど、このコーナーのタイトル、何なのコレ？『チヨメチヨメ』って、如何にも銀さんが誰かといかがわしいコトをシようとしてるようになしか捉えられないんだけど？」

「しくま〜せ〜んっ。この作品はあくまでギャグとシリアスと戦闘と下のネタを兼ね備えたクロスオーバー小説で進めてくんです〜。チヨメチヨメに入るのは卑猥な単語でなくてちゃんとゲストの名前です〜。や〜ねこれだから思春期真っ盛りの男の子hプロツサムツ!!」

「あ〜ゴメンね、つい手が滑ってガンド打っちゃった。テヘツ。」

「怖い！怖いから真顔で『テヘツ』はやめてくんない！！あとお前の打ったソレ、俺の頭頂掠かすってつたんだけど！！」

「わあー銀さんの頭、ガムテープ貼ってそのまま引つpegがしたみたいになってる。この様子を読んでくれてる皆さんに映像としてお届けできないのが大変残念です。具体例としては、そうだな……………史実の沖田さんを画像でググってみてね。」

「ええエエツ！！今の銀さん、頭そんな悲惨な事になってんの！！どーすんだよこれじゃ恥ずかしくて人前出られないよ！！コーナー第一回にして何この展開！！」

「あ、それなら心配いらないよ銀さん。もうすぐこのコーナー終わるみたいだから。」

「へ？」

「ほら、あと30秒ってあのカンペに書いてある。」

「ああっ本当だ！！何で、どうして！！まだ始まったばかりじゃないの！！」

「えーと、何なに………内容の説明が終わったなら、あと今回は適当にぐだぐだやって終わっていい、だつてさ。」

「おiiiiii!!何だよソレ、そんなのつてアリ!!」

「えゝ皆さん、短い時間でしたがお付き合いました。ありがとうございました。今後も本編共々、『Fate/Grand Order 白銀の刃』をよろしくお願いします。それでは今回のゲスト、多分今回を境にしよつちゆう来ることになるであろう、藤丸立香でした。」

「ちよつと藤丸君つ勝手に閉めないでくれないかなあ!!これ俺のコーナーなのにiiiiiii!!」

銀さんと藤丸 其の二

「はい、良い子の皆こんにちは。不定期閑話『銀さんとチヨメチヨメ』、はっじまつるよー。」

「わくパチパチパチ。」

「……ちよつと藤丸君。画面からこつちが見えないからつて、シガレット啜えながらウ○コ座りしてんじゃねえよ。失礼だろ？」

「だつて、このコーナーつい先日始まつたばつかじゃん？不定期つつつたじゃん？少しは間まを開けるとか考えようよ？こんな作品に訪れてくれてる、そんな優しい皆が本当に読みたいのは多分本編なの。こんなぐだぐだした暇潰しじゃないの。アンダースタン？」

「無理して英語使うこたあねえだろ。これ書いてる奴、英検4級だつて取れなかつたよ
うなマダオだぞ？そんなことより、今回のこの暇潰しぐだぐだ回が終わつたらまた本編
書き始めるらしいから、とつとと今日の題目片付けちまおうぜ。」

「ん、それもそうだね。えーと本日の暇潰しは……ズバリ、これだよ。(ドサツ)

「あ？それつて確か、サーヴァントが食うと強くなれるヤツ……。」

「そう、皆大好き金の種火さん。正式名は『叡智えいちの猛火』と言います。」

「ほーん……で、それがどうしたよ？」

「うん、今日は銀さんにコレを食べてもらおうと思つて。」

「え、やだ。不味そうだもんソレ。」

「はい口開けて、あーん。」

「待て待て待った！食いたくねえつつたじゃん！俺の意思はガン無視！！」

「えー、でも食わないと強くなれないよ？強くなって、松陽先生のこと守るんでしょ？」

「ああその通り、その通りだけだよ………食うってまさか、本気でコレを口から摂取すんの？」

「モチのロンよ、ささっどうぞガブリと。」

「いやいやいや、無理でしょコレは。だってどう見ても食い物のビジュアルしてないもん、まさかこの金ピカはコーティングで中身はチョコだとか………ねえな、剥がれないわ。」

「ほら〜遠慮せずにどんどん食べて、日々の周回とイベントで溜めに溜めた剣セイバの種火、倉庫とプレゼントボックスにごっそりしまつてあるから。」

「おおおっ!! 何でそんな山積みなんだよ、つてうわ眩しい!」

「そんな警戒しなくても平気だつて。神樂ちゃんなんか美味しそうに平らげてただから。」

「夜兎を基準にして考えんのやめてくんないっ!! サークヴァントになる以前から化け物級の胃袋持つてんだから! それよりもつとこう、普通の奴……そうだ新八、新八はどうだったんだ?」

「うん、新八君も普通に食べてくれてたよ。まあ流石にきつくなってきたのか、後半は虚ろな目で宙を見つめたまま、ひたすら咀嚼そしゃくしてたけど……。」

「お。おう……とりあえず、新八が食ってたつてことは味に問題は無いんだな。よっし。」

「お? 銀さんイケそう? 箸とか使う?」

「いんや、とりあえずこのまま……どれどれ。」

ガリツ、

ボリ、ボリ……

「……どう？美味しい？」

「ん〜……食感に近いものと、欠き餅に等しいな。だけど美味しい不味い以前の問題だ、味が無え。」

「何と、まさかの無味だと……!!」

「ああ。食べねえことは無いし飽きることもないだろうが、こんな味のないものを延々と食わされりゃ、お前のさつき見た新八みたいになるわ。つーか、神楽はよく完食したな。」

「そういや、神楽ちゃんは種火をどんぶりに山盛りにして、そこに卵乗つけて醤油かけてたっけなあ。」

「卵かけご飯TKGならぬ卵かけ種火TKTだな……にしても、このまま喰い続けんの俺として辛いわ。

おい藤丸、何か上にかけるモン持ってこい。」

「OK！タバスコとハバネロどっちがいい？」

「嫌がらせかつ!? ちげ違ちげうよ銀さんといったら甘いヤツでしょ!? メープルシロップとチョコソースと、あと氷蜜と山盛りの餡子もあると嬉しいな！」

「ったく、糖尿進行しても知らないよ。」

「ああ、食った食った、もう入らねえ……。」

「銀さん、種火撮取終わった？そいじや次はコッチもお願いね。」

「フオウ。」

「フオウフオウ。」

「……え、何？何で両手にフオウを二匹も抱えてんの？そいつ実は分身の術とか出来たのか？」

「違う違う、よく見て。こっちのやたらと尻尾にボリユーム感があるのが、星のフオウくん。そんでもってこっちの角の生えた方が、太陽のフオウくんだよ。」

「フオウフオウツ。」

「フオーウツ。」

「ふーん……で、次はそいつらをどうすりゃいいわけ？」

「うん、食べて。」

「また!! いや、つーか食えんの!! 食ってどうなんの!!」

「FGOはね、種火でステータスを上げる他にこの二種類のフオウ君を取り込ませることによつて、HPとATK値を更に引き上げることが出来るんだよ。さあ食べて食べて、神楽ちゃんと新八君も多少嘸えびきながらだけと、ちゃんと摂取してくれたんだから。」

「んな思いしてまでも強化されたかねーよっ!! つか今腹いっぱいなんだ、少し休んでからにして——」

「フオウツ!」

「フオウ〜ウ!」

「もがっ!! も(い)い(い)っ!!」

「あつコラ駄目だよフオウ君達! 無理矢理口に頭を捻じ込もうとしちゃ……あれ? 銀さん大丈夫? 息してる? 変だな顔色が真っ青に……うわあああしつかりして銀さんっ

！銀さあああんつ
！！」

銀さんと藤丸 其の三&お知らせ

「どーもー、皆の坂田銀時です。今日も不定期開催『銀さんとチヨメチヨメ』、第三回はつじまつるよ。今日のゲストはこちら………え？タイトルにもう名前出てっからいちいち紹介なんて要らない？まあね……でもねツミ、物事にやあ何でもかんでも順序つてモンを踏まえなきやいかんのよ。水泳前の準備体操然り、料理の下拵然り、作品を閲覧する際の注意書きの確認然り、心底面倒臭工と思いつつもきちんと済ませとかねえと、後々惨事になりかねんコトは色々とあるんだぞ？もしも現時点でタイトルをしっかりと確認せずにここに来た、なーんて奴がいるとするなら、そいつは銀さんが誰と話してるんだか終始分らないまままでいることになる。つまりそーいうワケ。分かった？分かってくれたんなら良し。それじゃあ改めてゲストの紹介と今日の内容を………おいおい藤丸君。俺がこんだけ文字と行数を長つたらしく無駄に消費してまで時間を作つてやつてんのに、いつまで床に寝転んでやがんだ。もうとつくにコーナー始まつてんだから、とつとと起きやがれ。」

「だあって〜…………イベント続きで疲労が溜まってんだもん。周回ツカレタヨ〜。」

「しつかりしろって。疲れたつつつてもイベントは楽しめたんだろ？ 長らく更新止めてまで走ってたんだもんなあ。」

「うん、ぐだぐだ帝都大変良かったです。楽しかった。もう聖杯の備蓄すつからかんだけど心はとて晴れやかだよ！」

「へーへー、そりゃあよかったな。よかったついでにいい加減起きやがれ。今回はお願いという名のお知らせがあるんだろ？」

「おっと、そうだった。只のリハビリ短文で終わらせるわけにはいかないよね……………よっと。」

「つたく、漸く本題に入れるぜ……………え〜今しがた述べた通り、今回はこのコーナーを通じてこの作品を読んでくれる皆様様方に、救済という名のお願いがございます。それは……………はい藤丸、お前から言え。」

「ええ、銀さんメインのコーナーなんでしょ？大事なことなんだから、ちゃんと銀さんから言つてよ。」

「仕方ねーだろ。あそこのカンペに書いてあるのだから、お前の名前入つてんだから。ほらさつさと言つた言つた。」

「ぶ〜……ええ実はですね、本日より読んでくださっている皆様より、この作品……『Fate／Grand Order 白銀ノ刃』への素朴な疑問や質問などを募集していきたくと思っています。まあ平たく言うと、この不定期開催コーナーの中で新たにQ&Aの項目を設けたいので、何か質問プリ〜ズ！つてことらしいよ。」

「募集はこのサイトさんの規約に従つて活動報告かメッセージから随時受け付ける、とのこと。違反の対象になるから、感想欄への質問は絶対NGだぜ？銀さんとのお約束だぞ？。」

「えーと、質問等は一定数集まり次第にこの『銀さんとチョメチョメ』の中で銀さんとゲ

ストのキャラクターと共に答えしていきたいと思えます。質問者様のお名前は、基本匿名とさせていただきますので。成程。」

「あと内容だけだな、あまりに過激な内容や催促、ネタバレに関わるモンなんかは除外の対象になるから注意しとけよ。」

「過度な内容って？今のパンツ何色〜とか？」

「そういったセクハラ紛いのモンや誹謗中傷、それと過度な要望なんかもアウトだ。因みに今の銀さんのパンツはお約束のイチゴ柄だぞ。」

「や、別にその情報はいいよ。」

「とにかく、よい子はきちんとルールを守る！つかコレ、いい子悪い子以前に人としての基本だかな。」

「……………ねえ銀さん、こういう応募つてもっと著名な人がやるからこそ集まるモンだよ

ね？こんな趣味全開の弱小物書き野郎の作品なんか、救いの手を差し伸べてくれる寛大な人なんているのかな？」

「言うな藤丸。確かに突発的にこんなコト始めて、「え？更新も遅いくせに何言ってるのコイツ？」なんて思ってる奴もいるかもしんねえ……だがこのQ&Aはなあ、普段こんな作品でも手に取って目を通してってくれる、そんな優しい人達からの素朴な質問に少しでも答えてもつと作品のことを知ってもらいたいっつーのが、書いてる奴の心からの本音なんだ。集まろうが過疎ろうが関係ねえ、ただ少しでも読み手側と交流を持てたらな……なんてことを考えながら、この企画を発案したらしいぜ。」

「まあ、つまりはぐだぐだネタだけだと続かないから質問で埋めようという魂胆なんだよね。」

「おうおう、いつになく辛辣だな……。」

「事情はあれど、俺としても早く本編進めてほしいからね。もたもたしていると新規水着イベント始まってまた更新遅くなるだろうし。」

「まあ、それは最もだな……それじゃ、今回の『銀さんと[×]も、そろそろお別れの時[×]間が迫ったきたな。それじゃ、また次も会おうぜ。」

「登場してるサーヴァントの衣装は再臨何段階目とか、選んだきつかけは何か？ などなど、ちよつとした質問などもどしどし募集してます！ お気軽にどうぞ〜！」

【お知らせ】

こちらで紹介しました質問箱ですが、現在は一時撤去のため受付を終了いたしました。

「マジでかつ!？」

銀さんとアストルフォ 質問回答編

「どーもー。ゲームの周回と執筆の同時作業が全く両立出来ない、そんな駄目駄目な奴が書いてる小説作品の主人公の一人、皆の銀さんでーす。暑さに負けずに今日も不定期開催『銀さんとチヨメチヨメ』、はっじめつるよ。ハイてなわけで、まずは今日のゲストの紹介から。」

「やつほくどうもどうも！暑くても理性がぶっ飛んでるからって全裸にはなりません！ライダーのアストルフォだよっ！」

「あれ？なあ、藤丸はどうしたんだよ？」

「マスターは今、虹色の金平糖を貰うために1. 5章の4つ目と2部の始めを死に物狂いで走ってるよ。今までまともに来れなかったツケが一気に来たって嘆いてた。」

「ったく、だからこまめに進めとけて……にしても今日はお前か、一応言つとくけどはしゃいだりしてあんまし騒がねえよう気をつけ——」

「うわ〜いつ！今日は僕が銀ちゃん独り占めだ！嬉しいなっ嬉しいな！（ギユムツ）」

「んもがつ!!ちよちよつツミい、俺の話聞いてた!!あと無い胸押し付けられてもちいとも嬉しくなつ苦しギブギブギブ！」

「んっふふ〜。それにしても、本当に銀ちゃんだけしかいないんだねこのコーナー。折角だからさ、他の皆も呼ぼうよ？」

「ダメ。この銀さん専用の不定期開催コーナーは、特別な事情が無エ限りは基本ワンツーマンなの。只でさえ書き分けド下手くそだつてのに、あんましごちゃごちゃしてつと呼んでる方も混乱しちゃうだろ？」

「ちえ〜……それで銀ちゃん、今日は何するの？」

「ん？ああ。今日の『銀さんとチョメチョメ』は、前回ここで募集をかけてた質問に対しての回答をしてこうと思ってるんだ。」

「貴重な時間を割いてまで募集コーナーに目を通してくれた人、そして質問をくれた人、本当にどうもありがとうね〜！」

「それじゃ早速始めてくか。何個かあるから、順をおって回答してくぞ。」

「りよーかい！バッチコイだよっ！」

「まず一つ目の質問から、『作中のサーヴァントの衣装は再臨何段階目ですか？』………つと、こりやあお前らに対してのもんだな。」

「おっ？いきなり僕らに関する質問から始まるなんて、幸先いいね〜。えっと、特にこれといって強い固定は無いんだけど、書いてる側はこんなイメージを持つてるよ〜って回答をば。再臨衣装だけど、僕とエリちゃんはよく見かける第二段階だね。段蔵ちゃんとは散々迷いに迷った結果、剣豪のシナリオ中でもあつた第一段階にしてるみたい。」

「え、お前ら他にも衣装変えられんの？」

「F G Oのサーヴァントはね、再臨していく度に衣装もおニューになつてくんだよ。そうだ、銀ちゃんも再臨したら更にカッコよくなつてくんじやない？」

「やくまいったなあ。このままでも充分カッコイイ銀さんが、更に男前増し増しになつちやうの？」

「^{ちな}因みに僕らの他の衣装は、お手元の資料を見ると分かるよ。」

「あれ？いつの間にかこんなモンが……へえ、本当に三段階あるんだな。エリザのヤツなんて何だコレ？最初のはやたらと際どいし、三つ目なんてこれで戦うのかよ？」

「エリちゃん、一か二で迷つてみたいだけど、やっぱりシナリオでもよく見るし安定の可愛さの第二で決めたみたい。あと前に本人から聞いたんだけど、銀ちゃんというそのフリフリピンク衣装は今後どこかでお目にかかれるんだって。楽しみだね！」

「いや、俺は別に……お？段蔵なんて髪下ろしてるじゃねえか、俺こつちのが好みだわ。」

「書いてる人もそれが一番好きなんだって。けど段蔵ちゃんは今後のお話で髪型をそうする時があるらしいから、新鮮味あつたほうがいいかなって。」

「今後っていつよ？」

「それは待つてのお楽しみ。んじゃ、次の質問いくよ。」

「はいはい、つと。次は……『カルデア側のサーヴァントにこの三騎が**抜擢**された理由は何ですか』。またお前らに関する質問だな、アストルフォ。」

「はいはいはい、来ると思ってたよこの質問！こんな時のために回答を準備しておいてよかつた！」

「おっ？お前そんなのも用意してたのか。」

「ううん。これマスターから託されたヤツだから、僕は読むだけ。」

「何だよ……ちよつと関心しちやつたじゃねえか。」

「えつと、まずは僕からだね！何なに……『アストルフオは一番最初に登場を決めました。あの子は持ち前の明るさで皆を照らしてくれる、太陽兼ムードメーカーの役割がびつたりだからです。あと可愛いから。』だって！えへへ何だか照れちゃうなあ。」

「まあ、暗くなりがちな空気をイイ感じに誤魔化すにや適役だもんな。」

「あ、まだ続きがある……『それと、性別詐称被害者は今後も続々現れることになります。お楽しみに。』だってさ。」

「俺も最初はすっかり信じ込んでたがな、割と早い段階で気付けてよかつたぜ。さてさて、次の被害者は誰になるのやら。」

「次はエリちゃんだね、『言わずと知れたスイーツ系アイドルサーヴァント。持ち前の明るさと気丈さ、時にギャグ担当、そして最も注目すべきはその素晴らしい歌声（笑）。それらを見込んでの採用となりました。あと可愛いから。』」

「歌ねえ………そういやアイツの歌、まだ聞いたこと無エなあ。その『（笑）』が気になるところだが、アイドル自称してるってことは相当自信あんだろ？いつか聴いてみてエもんだ。」

「あー、その………あまりおススメしないけどね、僕は。」

「あ？何でだよ？」

「今はまだ言えないけど、もし銀ちゃんがあの娘の歌を聴きたいんなら、必ず周囲に人がいないことを確認してね？約束だよ？」

「お、おう………。」

「よし。じゃあ最後は段蔵ちゃんだ……『彼女は決めるのに一番頭を悩ませました。理由としては丁寧な言葉遣いと物腰の柔らかさ、それと一番大きなポイントは絡繰からくりであるということですね。銀魂においての絡繰の扱いといえば……皆さん大体分かりますよね?』何コレ、最後までいうこと?」

「指から醤油出るフラグがピンピンじゃねえか!!絶対え源外のジジイと絡ませる気満々だよアチコチ改造されるの目に見えてるよっ!!」

「あ、あと最後に一つ、『あと可愛いから。』だつてさ。」

「結局全員可愛さで決めてんじゃねえか!!ほんつとこの作品書いてる奴の趣味丸出しだよなオイ!」

「まあ詳細としては、銀魂サイドで男性キャラが多くなりがちだから、カルデアこっぺあは華やかにしようにって考えての決定らしいからね。あと偶然にも三人とも口調が被らないから書き易いみたいよ。」

「つたく、要は書いてる奴の怠慢じゃねえか……あれ？質問はこれで終わりか？」

「待つて、あと二つあるから。次はと……『今現在登場している銀魂サイドのサーヴァント達には、他にクラスはありますか？』成程ね〜。」

「おお、やつと俺らへの質問がきたか。つて、サーヴァントのクラスつて一個だけじゃねえのか？」

「それでもないよ。例えば僕はライダーだけど、生前の逸話からセイバーとしての適性も持つてるんだ。銀ちゃん達はどうか？」

「あく、詳しいことはよく分かんねえけど……俺は江戸でよく原付乗り回してたし、神楽は今もだけど定春にしよつちゆう乗ってたぞ。とすると、俺にも神楽にもお前と同じライダーの適性はあるんじゃないかねえの？」

「あるかは分からないけど、クラススキルがあるなら『騎乗』は備わってることは確かだ

ね。ヅラ君やスギっちはどうかな？」

「キャスターにアヴェンジャーねえ……ああでも、戦争時は拳こぶつて刀使つてたし、セイバーでもあるかもな。まあ俺らは宝具も判明してねえし、この辺りの設定は後々に明らかになってくるんじゃないかねえか？」

「そだね、きつとその頃にはパチ君のクラスも分かると……いいなあ。」

「ハイハイ、次で最後だろ？さっさと行くぞ。」

「あつうん、それじゃラストの質問！『もしも銀魂サーヴァントが序章から召喚されていって、一緒に人理修復を行っていたら物語はどうなっていたでしょうか』……うわあく何コレ！！わくわくしちゃうねっ！」

「そういうタイプの作品だったら他でも見ることはあるけどな、まあコレ書いてる奴も最初はこんな風にするか考えたことはあるらしいが。」

「質問と一緒に添えられてた『Fate/Gintama Order』っていうのもイよね。毎日がぐだぐだなんて楽しそう！」

「人理の修復ねえ……まあ話だけ聞いてりや悪い気もしねえな。ただ神楽のいること
にや、カルデアの備蓄食糧はあつという間に底をつくぞ。」

「定春君はおつきなワンコ(?)仲間として新宿のワンワンと気が合いそうだし、スギつちもアヴェンジャー仲間だと巖窟王さんと上手くやっていけるんじゃないかな? ツラ君は変わつてるとこあるけど、エリザベスと一緒にジャックやナーサリーと遊んでるかも……ああく考えただけでもウキウキが止まらないやつ! ねえ銀ちゃん! 今からでも皆でカルデアにおいでよ!!」

「待て待て待てつ! そういうコラボ的な事は銀のアタッシユケースに札束詰めて直接運営にだな……とにかく、まずは江戸こっちの異変を解決すんのが先だろうよ。」

「あ、そつかく……そうだよね、残念。」

「まあ何だ、これ書いてる奴も今キーボード叩きながら、『この連載が無事終えたら、そんなIfストーリー書いてみるのもアリじゃね?』なんて思ってたたりするらしいから、希望は持つててもいいんじゃないか?」

「本当!? うわーい楽しみだなあつ! そうと決まれば、いつも以上に更新頑張ってもらわないとね!」

「ま、イベントが始まったりすると多少の遅れも発生しちゃうがな……よし、今回の質問はこれで以上みてえだな。これからもどしどし受け付けつから、気軽に投稿してくれるよな。」

「質問をくれてどうもありがとう! これからも『白銀の刃』とこのミニコーナー、そして僕達の活躍をどうぞよろしくね! バイバ〜イっ!」

「※大事なお知らせ……こちらで紹介しました質問箱は現在撤去し、受付を終了させていただきます。質問などをしてくださった方々、本当にありがとうございます。」

た

銀さんと藤丸＋α 小嘶詰合わせ

三本立てシヨートシヨート、それとおまけ。

【銀さんと藤丸 『よそ見しながらゲームやってると、たまにコマンドカードの選択ミスってることある』】

「なくあ藤丸、戦闘の時に出てくる三種類のカードあんじゃん？俺らの顔がついた、あの赤と緑と青いやつ。」

「ああ、コマンドカードね。それがどうしたの？」

「これってさ、5枚しか装備出来ねえじゃんか？しかもどれが何枚ずつとか、宝具のカードだって種類も最初から決まってるし。枚数は違えど全部均等に入れてる意味ってあ

んのかなくって思ってたよ。そうだ、こうしたら一番強エ組み合わせになるんじゃないやねえの？(サツサツ)」

「……………銀さん、言いたいことはよく分かるよ。でもさ、何も通常から宝具まで全部バスターにするこたないでしょ。見てよコレ真つ赤つ赤じやん。」

「どうせ敵を倒すってんなら、やっぱ大事なのは火力だろ？どんなに強エ奴でもな、ひたすら殴ってりやあ大概は死ぬんだよ。」

「おう、何つー大雑把ギッぱでいい加減なゴリラ的理論……………あのね銀さん、コマンドカードは色だけじゃなくて、それぞれの意味もちやんと違ってるんだから。赤のBussterバスターは火力のメインになるし、緑のQuickクイックはクリティカルの発生率に欠かせないスターを多く生み出してくれる。それに青のArtsアーツだつて、宝具を打つために必要なNPを貯めやすいって具合に、それぞれ大事な役割があるんだよ。」

「ん……………FGOって結構複雑なんだな。ただ敵を倒すだけでいいと思ってたが、ああ〜頭痛くなってきた。」

「別に、頭痛起こすほど難しいゲームでもないと思うけどなあ……あ、じゃあこれならどう？ それぞれのカードを食事のバランスに見立てて覚えるつてのは。Busterがお肉だとすると、Quickは色そのままに野菜、そんでArtsはお魚とか。」

「待て藤丸、肝心なモンが抜けてるぞ。」

「へ？」

「糖分だよ。糖分。歴代続くジャンプ主人公達の中で、初にして唯一の糖尿予備軍であるこの銀さんだぞ？ アレが無きや始まらねエだろ。そうだ、いつそ全部スイーツに変換すりゃ俺もカードの意味合いが理解出来るかもしれねえな！ えーと赤は苺のパフェだとして、緑はメロンパフェ。青いやツはチョコミントで……」

「……………銀さん相手に、まともな食事バランスの理解を求めた俺が愚かだったよ。」

「銀さんと藤丸+マシユ 『歳喰うと胃なんか勝手に弱ってくるもんなんだから、今のうちにカロリーなんて気にしないで食べなさい』」

チーンツ、(焼き上がりを知らせるオーブンのSE)

「いよっし、焼けた焼けた。出来上がりは上々だな、あとは冷めねエうちにアイツらを呼んで——」

「どーもー、たった今そこを通ったら食堂からのいい匂いに誘われた藤丸でっす。」

「お、同じく先輩と廊下を歩いていらしたら、とても香ばしいかお香りについつい足が向いてしまいました、マシユ・キリエライトです！」

「おー、ちょうど呼ばなくても来たな。たった今焼き上がったんだ、食っていけよ。」

「何なに………わあっ！でっかいアップルパイだ！」

「とても美味しそうです………！もしかして、銀時さんがお作りになられたのですか？」

「まあな、糖分王を志す者として、自分の食うスイーツを作ることなんざお茶の子さいさいだぜ。」

「それは凄いです………あのう銀時さん、宜しければ今度私にも教えていただけませんか？」

「おう、構わねえけど………（コソツ）何だあ？藤丸のためにでも作ってやんのか？」

「え、ええっ？！それは、その……。」

「ちよつとー、俺のこと放置プレイして、二人で何をコソコソやってんのさー。」

「ああ悪い悪い。んじゃ、早速食うとするか。」

「先輩、銀時さん。ナイフとお皿をこちらに用意しました。」

「ありがと〜マシユ、それでは僭越せんえつながら俺が切り分けさせて頂きます。」

「ちゃんと均等に分けるよ、後から来る新八達の方も入ってたからな。」

「わーつてまあす。マシユ、このくらいでいい？」

「はい……………あつ、やっぱりもう少し大きめにカットしていただいてもよろしいですか？ 図々しくてすみません……………」

「いーのいーの、マシユはいっぱい食べんさい。ところで銀さんはさつきから、冷蔵庫の前で何をガサゴソしてるんだらう？」

「お、あつたあつた……………おーい切ったか？ なら一緒にこれも乗せてやるぞ。」

「ぎ、銀さん……それは………っ！」

「お徳用のバナライスを、ですか？それをどうされるんです？」

「ふっふっふ、見てろよマシユ。これをこうして………まあく繰り抜いたアイスを、たった今皿に乗せたアップルパイに——ドーンッ！」

「あっ！まだ温かいパイの上に、冷たいバナライスが乗って………！」

「そしてパイの温もりによつて徐々に溶けていくアイスが、香ばしい生地と林檎に絡んでいくんだよ………ああっ何てカロリーの暴力！昨日のトレーニングで消費したエネルギーが、今再び蓄積されようとしているっ！！」

「藤丸、そんなモン気にしないでモノが食える時期なんざあつという間なんだぜ？内臓なかみが若エうちは多少の暴飲暴食しても平気なんだからよ。それとも何か？そんなにカロリーが気になンなら、お前だけアイスは乗せねえけど——」

「わああアア駄目駄目そんなのっ!!お願い銀さんっ、俺にも、俺にもバニラアイスのお恵みをををををっ!!」

「はいはい分かった分かったって。何も目え血走らせてまで頼まなくても………ほらよっ、特別に二個くれてやる。味わって食えよ?」

「はは〜ありがたき幸せっ!!」

「あ、あの……私も頂いてもよろしいですか?」

「おお勿論、マシユにも二個やるよ。ほれっ。」

「わあ……!ありがとうございます、銀時さんっ!」

「んじや、俺のにも追加して、と………おーし食うか!」

「やったー!いっただっきまーす!」

「では、私もいただきます。はむっ。」

「もがもが……うん、流石俺。今回も上出来つてとこだな。どうだくお前ら?」

「むぐむぐ……ん、んんっ!!こ、これは……!!」

「……美味しい。とても美味しいです!サクツとしたパイの食感も、程よい甘さの林檎も、そして調和のとれたバニラアイスの味と冷たさが相俟^{あいま}つて、あの、ええと……すみません、上手く言葉が出てこなくて……。」

「マシユ、こういう時は難しいことは考えず、シンプルな感想が一番なんだよ。ねえ銀さん?」

「藤丸、口の周りパイ滓^{かす}だらけだぞ……まあでも同意見だな。別に凝ったコメントなんかしなくても、素直に美味いって言葉だけで俺あ充分だよ。ほらほら、アイスが溶けきつちまう前に食つちまいな。」

「はいつ、銀時さん！」

「もごもご……それにしても、このアップルパイ本当美味しいよ。何て言うか、食べる度に力が湧いてくるような……よう、な……う？」

「先輩、どうされました？左下の辺りを凝視なさつて。」

「………とここで銀さん、一つ聞きたいんだけど。」

「んあ？どうした？」

「このパイに使った林檎って………もしかして、金色か銀色でなかった？」

「おう、よく分かったな。手頃な材料探して倉庫漁ってたら、美味そうな金色の林檎が山積みになってたからな、何個か拝借させてもらったぜ。」

「あーやつぱり、道理で一口食べる度にAPゲージがものつそい勢いで回復していつて
ると思つたよ。」

「あ、本当ですね。これはもう何段目になるのでしょうか。」

「まつ、いいじゃねーか。食つたらまたクエスト周回頑張れよ、俺らのマスターさん。」

「先輩、私もお手伝いさせていただきますので、頑張りましょう！」

「うんっ！頑張る！（モツシヤモツシヤ）」

【銀さんと藤丸 『絆レベル上昇値が一桁で止まる奴は、手でも握ってほしいんだろ
うか』】

とあるクエストが終了した画面にて。

ピロロン♪

「おつ、絆レベルが上がったか（ガサゴソ）……………ほらよ藤丸、ボーナスの聖晶石だ。」

「わく、ありがとう……………」

「?……………どうしたよ?いつもならもつと馬鹿みてえに喜ぶつてのに。」

「……………ねえ銀さん。」

「ああ?何だよ暗い声で。」

「銀さんはさ……………俺の事、好き?」

「何だよ今更……………なんて?」

「信用してる？信頼してる？俺がマスターでよかつたって思ってる？ねえねえねえ？」

「ちよちよちよつ待て待てつて！何なの唐突に!!そういうジャンルの作品じゃねえつて普段から言つてんのお前だろ!!」

「信頼してるんなら、この勢いで絆レベルあと2、3個くらい上げてみない？ていうか絆レベルが上がる度に右くれるつてことは、サーヴァントは皆あらかじ予め石を懐ひそに潜ひそませてるつてことじゃん？ねえ銀さくん、もつと持つてるんでしょ？ね？ね？ほら跳んでみてよ？」

「ちよつと前のヤンキーみてえなカツアゲしてんじゃねーよつ!!石ならたつた今くれてやっただろーが!!」

「お願いイイイイ先払いでいいから聖晶石こんべいどう恵んでエエエツ!!今回さないと、今ガチャしないと『○○○○○(ここに好きな☆5サーヴァントの名前を入れて読んでね!)』のピックアップが終わつちやうんだよオオオオツ!!」

「知・る・か！大体二周年記念やらメンテの詫びやらでちよくちよく石貰ってんだろ？ソレどうしたんだ？」

「えつと……………ああく……………」

「おい、目エ逸らすんじゃねえぞ……………まさかお前、あんな大量にあつた聖晶石こんべいどうを以てしてまでも、また全部爆死結果に変えたつてののか？」

「あああああやめてエエエツツ!!目の前で溶けていく石が、ピラミッドが作れそうな程に積み重なったマナプリズムの山がああアアアアアツツ!!」

「やくつぱり使い切つてやがったんだな、つくづくガチャ運に恵まれねエマスターだな……………」

「あつ今同情してくれた？同情するなら石をくれつ！」

「それ言いたかつただけだろお前。とにかく絆レベルをちゃんと上げるまで、石はお預

けだからな。主人公なんだからルールはきちんと守れよ。」

「そこをなんとか、ねっ？頼むよ銀さん!! 『○○○○（ここに好きな☆5サーヴァントの以下略）』のピックアップ今日までなんだよっ!! これ以上リアルマネー溶かしたら家賃払えなくなっちゃうウウウウウツ!!」

「カルデアにいるお前が誰に家賃払うってんだっての!! ああもうこの野郎くつついて離れやしねえ! ちよっマシユ、マシユさん! ねえちよつと何とかしてエエエツ!!」

【ちよこつとおまけ・松陽さんとフォウ君、そして+α】

「フォウ。」

「おやフオウさん、どうなさいました？」

「フオウ、フオウツ。」

「えっと、抱っこでしょうか？少し待ってくださいね……よっと。」

「ンキユ、フオウウ。」

「ふふっ、本当に不思議で可愛らしいお声でお話しなさるのですね。何と仰なん おつしやつてらっしやるのか、私にも分かるとよいのですが……。」

「フオウ？」

「そうだ。私もフオウさんのような話し方をすれば、自おのずと言葉の内容が分かるかもしれませぬ！フオウさん、試してみてもよろしいですか？」

「フオウツ。」

「ありがとうございます、では早速……………ふお、ふおう。」

「フオウ、フオーウ？」

「えっ？じゃなくて……………ふおう、ふおう。」

「フオフオーウ、フオウツフオウフオウ、フオ？」

「ふおっ……………ふおうふおうっ、ふおう！」

「フオーウ。フオフオウフオフォ、フオフォオイフォツ、ンキユツ。」

「ふおい!!あの、ふお……………あらら、やっぱり私には難し過ぎたようです。ごめんなさいフオウさん。」

「キユー……………フオーウフォイツ。」

「!.....それはもしや、『どーんまいっ』と仰ってくださいっているのですか?」

「フオウ!」

「やった! やりました! ほんの少しですが、フオウさんのお言葉を理解することが出来ましたよ!」

「フオウフオウ! (ペロペロ)」

「ふふっ、くすぐったいです〜フオウさん。」

「わ〜マスター大変っ! 松陽さんとフオウ君のやり取りを傍観していたら、銀ちゃんだけでなくツラ君とスギつちまでキラキラし始めちゃったよ!」

「アストルフオ殿、これはあまりに尊みが過ぎたばかりに、靈基からだを維持しきれず魂だけが在るべき場所ところへと引き寄せられている………つまり簡潔に言えば、三方とも英霊の座に還りかけている状況にあると、段蔵は認知しております。」

「そんなの長々と説明しなくても見れば分かるわよっ！きゃく黒猫なんて身体半分もう透けてんじゃない!!」

「うわくたたた大変だあつ!!新八君つ神楽ちゃん、止めるの手伝つてエエツ!!」

「わわ分かった!皆さんしっかりしてくださいっ!」

「………あんな仏様みたいな銀ちゃんの穏やかな顔、初めて見たネ。定春もそうだ口?」

「わう?」

銀さん?と藤丸+α 祝・万聖節前夜祭

「いよいよ、わざわざこんな作品トコまで訪れてくれた諸君、祝はっ・万聖節前夜祭びいはろういん！今日も不定期開催『銀さんとチヨメチヨメ』、始まるぜえ……え？本編はまだ初夏だつて？細けエこたあいいんだよ、季節ネタにはこうして乗つかつておかねえと。第一カルデアの、れい……しふと？とか使いやあ、いつの時代どの季節にだつていけんだから。今日が31日つて言えば31日になんの、そういうシステムなの。それよりハロウィンだけハロウィン！仮装すりやどんな奴だつて菓子が貰える、こんな素晴すんばらしい祭りがたったの一日限りだなんてな……よし、この俺が総理大臣になつた暁にや、一週間に一回の割合でハロウィンを行うことを法律で定めてやる！どうだ？」

「クハハハハ！分かつておるではないか銀色の人。吾われとしては毎日がハロウィンでも構わぬのだが、ハレの日があまりに続けば飽いてくるもの、適度にマンネリ化せず週に一度の具合で行うというのがまた味噌よ。さあさあ、吾と共に参れ！奪い、侵し、全ての菓子を狩り尽くしてくれようぞ！」

「ちよちよちよちよ、のつけから主人公差し置いて何勝手におつ始めてんのさ二人共!!
ていうか茨木童子イバラギン、ナチュラルすぎて違和感なかったけど、何でここに?」

「む、決まっておろうマスターよ。ハロウィンといえは吾われ、吾といえはハロウィンよ。既にF G Oあちちらでも一昨年から登場を果たし、そして今年のON I L A N Dにて酒?に似たあの護法少女とも鬼救阿おにきゅうあとして共演を果たしている吾ぞ?こちらの小嘶とて暇潰しにすらならぬものの、ハロウィンと聞いている腰を上げぬわけにもいくまい。それに、いつの間にか吾の隣にしれつといるこの銀色の人とは中々馬が合うのでな、共にハロウィンを蹂躪エンジョイしようとなしがた決めたばかりなのだ。」

「そつかー、二人とも甘いお菓子大好きだもんね〜……………で、銀さん。」

「おう、何だ?」

「楽しみなのは分かるけど、今から仮装するのはまだ早いんじゃない? ハロウィンパーティーは夜からだつてのに、まだ昼過ぎたばっかだよ?」

「クク、よいではないかマスター、固いコトを言うでない。壮丁そうていだろうと童わらわであろうと、祝い事は心躍るものだ……しかし銀色の人、汝なれは一体何の化生の恰好をしておるのだ?額のソレは狐の面か?むむつ、その臀部でんぶから生えている、モフモフとした何とも気持ちのよいモノは、一の二の三……にやんと、九つもあるではないか!!ええい、そんなにあるのなら吾われに一本寄越せつ!(グイッ)」

「痛ででででつ!!ちよつ引つ張んなつて!取れるつ取れちやうつ!!」

「痛い、つて………銀さんまさか、その尻尾本当に生えてんの!!なんで!!」

「おくイテテ、ホントに取れるかと思った………んあ?なんでつて、まあ簡潔に説明すりゃあ、今の俺は本来の霊基クラスとは違エから。要するにアレだ、霊基いじ弄つてみたらクラスチェンジしちゃいましたくつてな。」

「えええええつ!!何してんの勝手にいつ!!」

「だつてせつかくのハロウインだしい？ 仮装しようにも何着るか考えんのも衣装調達すんのも面倒臭エシ、そういや何年か前のアニくじでやった九尾のコスプレを思い出してだな。でもさ、ただ衣装を替えるだけつてのも面白みに欠けるだろ？ だつたらいつそ思い切つたことしてみようかと閃いてな。早速経験のあるサーヴァント連中にやり方聞いてから、ダメ元でちよちよいつと試してみたんだが、これがなんと大成功！ つてなワケ。」

「おおつ、この間の吾われと同じではないか。やはり祭りは一時いっときの昂揚テンションに身を任せてこそ面白い。分かつておるではないか銀色の人！」

「おつとイバラギン、『こつちの』俺のことは銀狐と呼んじやくれねえかい？ 銀色の人だと剣セイバーの俺と混同しちまうからな。」

「全くもう………んで、今の銀さんは何のクラスなのさ？」

「待つてたぜ！ その質クエスチオン。何に見える？ 何だと思う？ なんて文字数稼ぎなことは聞かねえよ。まあ賢い奴あ、九尾の狐つて時点で何となく察しちやいるとは思うがな。」

「あーうん大丈夫、何となくだけど俺も分かるから。」

「うむ、吾も分かったかもしれぬぞ。尻尾の数は異なるが、ここには銀色の……今の銀狐と同じく、尾の多いあの玉藻とかいう女狐もおるからな。」

「それじゃあハイっ、答え合わせ〜!皆様お待ちかね、俺のクラスはだな……その玉藻の姐さんと同じ魔術師だ!とある人間好きの狐と霊基が混ざりあってるんだが、それについて説明はまたの機会にな。もし知りたいって希望がありやあ、書いてる奴がどつかで設定なんか記してくれるんじゃないやねえか?まあそれより、キヤスターにクラスチェンジした俺、通称キヤス銀さんは剣の時より頭も口もよく回るぜ?因みにこの霊基で本編に登場することは無えから。あつ、そこのお前、今ガツガリした?ガツガリしちゃった?そりや悪かったなあ、お詫びに銀さんの尻尾モフるか?ふつかふかだぜえ?」

「剣士に続いて魔術師まで出てくるなんて……このまま増え続けたら、サポート欄全部銀さんで埋められそうだね。」

「むく……しかし銀狐よ、汝は自らを九尾だと名乗っておるというに、肝心の狐要素はその無駄に多い尻尾のみではないか。女狐や玉猫のようにピコピコツと愉快に動く耳は無いのか？」

「無駄じゃないです、靈狐にとつて尻尾の数はそれだけ偉いつて証なんです。耳に關しちゃ再臨すると生えてくるつて設定になつてゐるらしいから、どうしても見たいんならその藤丸にでも頼むんだな。」

「べ、別に吾はそこまで関心があるわけでは……むう、だがしかし気にならないというわけでもない。なあマスターよ？ 汝もそうであろう？」

「はいはい、そうかもしれないけどまた後でね。今は本題に入らなきゃいけないから。さてと、それじゃあ俺と茨木、それに銀さ——」

「キヤス銀さん、な。そこんとこ間違えるんじゃないぞぞ？」

「おお、いつもの銀さんよりぐいぐい来るなこの英霊……ええと、キャス銀さんを入れた俺ら三人は、これからパーティーの準備をしてる皆の様子を見に行くんだよ。勿論、大変そうだったら手伝いもするし。」

「うむう……それもマスターとしての汝の務めなのか? 各々好きにやらせればよいではないか。」

「おんやあ? じゃあイバラギンの出番は、ここでお終いつてことなんだな? 小嘶とはいえ、せつかく登場出来たつてのに残念だなあ。これからお前の好きな甘く菓子を作つてるだろう、あの赤い人のところにも行こうつてのに。もしかすると、味見と称して何か貰えるかもしれねえつてのに——」

「いよーし! マスター、銀狐、何をもたもたしておる! このままここで駄弁つていただけでは、読んでいる側も飽き飽きするではないか! 腹ペコの吾に食い殺されたくなければ、さつさと足を動かせ!」

「……………キャス銀さん、早速茨木の扱い心得てるね。」

「賢くかつこいいキヤス銀さんだからな。ほら、俺らもとつと行こうぜ（フワツ）」

「うわっビックリした。キヤス銀さん、何普通の流れで浮いてんのさ?」

「だってせっかく神通力使えるんだし、あと歩くのダルいし。それに尻尾だつて引きずって汚したくないんだよな、九本もありや手入れが大変なんだよ。つーわけでキヤス銀さんはずつとこの状態で移動し——」

「とーうっ！（ガバツ）」

「のわっ!! おいおいイバラギン、いきなり背中に飛び乗ってくるんじゃねえよ危ねえだろ。」

「クハハハハ！ 何ともよい眺めよな！ 狐を驅る鬼、今の吾は正に茶枳尼天の如しよ！
んん〜フカフカとした尻尾も座り心地がよい。さあ銀狐、吾の指すままに赴くがいい
！」

「つたく、しよーがねーな。そんじゃ行きますかねえつと。」

「茨木、後で写真撮って酒？童子にも見せよつか？」

「うむ！吾の勇ましきこの姿、しっかりと収めるのだぞ！」

* * * * *

「あつ、先輩！それに……………ええと、茨木童子さんが乗っていらつしやるその方は、銀時さん……………ですか？」

「やつほくマシユ、こちらは何かんやあつてキャスターの靈基になった銀さん、通称キャス銀さんだよ。」

「よう、この靈基の俺とは初めましてだな、よろしく。」

「は、はい。マシユ・キリエライトです、よろしくお願ひします………始めは銀時さんの仮装だと思つていたので、そちらの尻尾と浮遊されているのを見ると、やはり劍あざとの銀時さんとは異なるのですね。驚きました。」

「して魔酒マシユよ、貴様は何をしておつたのだ？もし汝なれが困っているようなことがあれば、吾われらは汝を手伝わなければならぬらしいのだ。」

「今の私ですか？私は今しがた『とある方』に作つていただいたこちらの衣装を、今夜のパーティーで着るために合わせてみようかと自室に向かう途中でしたので、お手伝いなどは特には………」

「ハロウインの衣装か………ねえマシユ、因ちなみにどんなの着るの？」

「はい、今年は今まで着たことのないタイプに挑戦してみようかと、思い切つてみました
！」

「思い切つて、つて……………マシユ、一昨年おとしのハロウィンドスケベコスチューム仮装だつてかなり思い切つてたのに……………ハつまさか、あれ以上に思い切るつてことは、今年のマシユはデンジャラス・ビーストを更に上回るドスケベ礼装が、新たに加わつてしまうということか……………!! まま、まさか……………今度はマイクロなビキニ調な衣装ヤツ、だつたり……………ああ駄目ダメ! そんなの(一応)全年齢向けのこの作品で公おおよけになつたら、只でさえ普段からギリギリ運転してゐるつてのにタグ付け替えじゃ済まなくなつちやうウウウツ!!」

「銀狐よ、マスターは先程から何をブツブツ言つておるのだ?」

「気にすんな、年頃の少年にやよくある光景だ。それよりマシユ、どんなヤツ着るのかちよつくら見せてくれよ?」

「ちよちよつと、キャス銀さん!!こんなところで!!」

「はい、実は先輩の分もお借りしてきたんです。これでお揃いのコーディネートが楽しめるんですよ(ガサゴソ)」

「マシユとお揃いかあ、それは嬉しいな……………じゃなくて！思い留まってよマシユ！俺がマイクロビキニなんか着たら、似合う似合わない以前の問題が——」

パンパカパーンツ☆

「どうですか？桂さんとヴラドさんが作ってくださいました、私と先輩のデザインのエリザベスさんの着ぐるみです！」

「……………え？」

「ほうほうコレは、よく見れば頭にちやんと魔酒とマスターの頭髮を被っている……………うむ、中々の完成度ではないか。いいなわれ吾もコレ欲しい。」

「実は、今年は何を着たらいいかずつと悩んでいたのですが、昨日職員の方々やサーヴァントの皆さんが、揃って桂さんとヴラドさんのところに着ぐるみの製作を依頼しているところをお見かけしたので……………ご存知でしたか？今カルデアでは密かに、エリザベスさんブームが起きてらっしやるんですよ？何でも桂さんを筆頭にファンクラブも

「結成されているそうですし、ヴラドさんのお作りになられるぬいぐるみは、人気のあまり只今在庫が全く無いとのこと!」

「え、何その事実。俺全っ然知らなかったんだけど。」

「クツクツク、疎うといな汝なれは。言っておくが吾われは疾とうに知り得ておつたぞ。何せあの酒?が、『なんや、かいらしいアヒルやなあ。歩くたんびにチラチラ目につくあの脛毛すねも好いたらしいわあ。』とベタ褒めしておつたからな!」

「脛毛すねが好ましい、なあ………大鬼様の好むモンなんざ、狐の俺にやよく分からねえこつた。」

「私、今まで着ぐるみを着たことはありませんでしたし、せつかくなので思い切ってお願願いしたんです。それで先程、出来上がったこちらを早速試着してみようと自室に向かつていたところなんです。」

「ああ、思い切つたのつてそういう……。」

「おいおい、他の連中もコレ着てくるんだろ？パーティーの会場オ○Qだらけになんじゃねーかよ、何その悪夢みたいな光景、誰が得するの？あつツラか。」

「あの先輩……すみません、相談も無しに勝手に衣装を依頼してしまつて。もし既に他の用意がありましたら、こちらは忘れて構いませんので……。」

「いや、俺もまだ何の仮装するかも決めてなかったし、寧ろ助かつたよ。俺の分まで用意してくれてありがとう。マシユ、今夜は一緒にコレ着て楽しもう！」

「先輩………はいっ！」

「でもよかつたなマシユ、これなら寒くも無エだろうし、藤丸とも揃いで決められるだろうからな………まあ、この露出0ゼロの恰好じゃあ、一部の男連中はぶーぶー文句垂れてくるだろうが。なっ藤丸？」

「えっ、なな何で俺に同意を求めてくるのさ？！べべべ別にい、助平スケベなもの期待とかしてた

わけじゃないし!変な勘違いしないでよねっもう!!」

「なあマスターよ、先程汝なれが申した『まいくろびきに』とは——」

「へーいイバラギン、お口そのまま開いててね(ポイツ)」

「もがつ………うむ、うむうむ!舌の上でとろけていくこの甘さ、そして中に入っている
焼き菓子ビスケットの程よい歯触り!やはりチョコレイトは至福の味よ!」

「ほらほら茨木、こっちに来ればもっとチ〇ルをあげるよ………それじゃマシユ、俺達
まだ皆の様子見て回らないといけないからさ、俺の分の衣装は部屋マイルームに置いて。じゃ
あまた後で〜。」

「はい先輩、それでは頑張ってください!」

* * * * *

「さて……………どうしたものか。」

「クハハハ！トリツクオアトリート！赤い人よ、お供の狐とマスターと共に吾が参つたぞー！さあ、悪戯をされたくなくば供物を寄越すがいい！」

「んん〜食堂を満たす甘い匂い、嗅いでるだけで涎が出ちゃうな。」

「やつほ〜エミヤ、はかど 携つてる？」

「ああ。茨木童子にマスター、それに……………銀時君、なのか？」

「どうもどうも、ハロウインに浮かれて肖あやかつて靈基を弄つてみた、キャスターの銀さんこ
とキャス銀さんだ。ちよ〜つとばかし悪戯いたずら好きつてとこ以外は、ほぼ 劍あつちの俺と変わん
ねエだろうから、まつよろしく頼むぜ。」

「そ、そうか。しかし九尾とは、君の尾は玉藻かの前と比じよ随分と多いのだな。まあ彼方あちらの
場合は、自らの意思で切り離しているらしいが……………」

「それより赤い人よ、何故眉間に皺しわなど寄せている?今日はハレの日であるというに、何をそんな辛気臭い面つらをしておるのだ。」

「ああ、実はそのハレの日……今夜のハロウィンパーティーに出すメニューについて、少し悩んでいてな。」

「?……なれ汝の作り出す品々は全て美味であろう。何を悩む必要がある?」

「これはこれは、嬉しいことを言ってくれるな………定番の南瓜かぼちゃを使ったお菓子は、既に作って冷蔵庫に入れてある。だがあと一品、皆で摘つまめるような………そうだな、最近冷え込んできたことだし、出来たら温かいスイーツを作りたいと考えているのだが、さて何にしたらいいものか……。」

「温あつたかいもの………焼き林檎、お汁粉、チョコフォンデュ、あとはフルーツグラタンとか?んく何かしつくりこないなあ。」

「ええい、この際しつくりこなくともよいではないか！おい赤い人、今マスターの述べたものではないかんのか？因みに吾はその果実のぐらたん^{われ}とやらが食べてみたいぞ！あとチヨコレイトの滝とやらもな！」

「ふむ、では時間が余ればそれらも作ることにしよう。しかし俺がイメージしている、摘めるものとは遠いな。何というか、こう………手掴みで気軽に食せるものがないのだが、何か良い案はないだろうか？」

「んむむむ………ねえ賢いキャス銀さん、何かいいアイデアは——あれ？銀さん、冷蔵庫の前で何してるの？」

「ああ、ちよつとな。よつと（パカッ）」

「あつ、こら銀時君！摘み食いは許さんぞ！」

「銀狐！貴様、吾を差し置いて抜け駆けなぞさせぬぞ！吾も喰う！」

「こら暴れんなって! たくどいつもこいつも………違えよ、俺は単に冷蔵庫の中に何が余ってんのか見に来ただけで………お、いいモンあんじゃねえか。なあエミヤ、コレ使ったらどうだ?」

「それは………この間使った時に残った、ピザクラフトか?」

「おうよ、これにフォンデュに使うチョコとマシユマロ、あとバナナも乗せて………優秀なコック長さんなら、ここまでくりやあ後は分かんדרろ?」

「! ……そうか、チャンクピザか! 成程、これなら皆で摘める上に温かい。どうして今まで思いつかなかんだ………ありがとう銀時君。」

「チツチツチ、だから違うって。俺はキャスターの坂田銀時、容姿からCVまで同じつつつても俺の方がちいっとばかり頭脳派なの。お分^アかり頂^ダけた^ス?」

「そうだったな………失礼した、キャスターの銀時君。君のお陰で、今夜のパーティーは上手くいきそうだ。」

「ち、ちゃんくぴぎ、とな……？マスターよ、ぴぎはこの前の夕餉ゆうげに酒？と食したのを覚えておるぞ。ちいずといったか？あの牛の乳の塊を熱で溶かしたものを乗せた薄い盆のようなもの、あれは中々に美味かった。しかしこのちゃんくぴぎは、あのちいずを用いたものとはまた異なるのか？」

「チャンクピザってのはね、キャス銀さんがアドバイスしたように、ああしてチョコやマシユマロを乗せて作るんだ。焦げ目のついたマシユマロが熱でチーズみたいになつてね、そこにバナナやオレンジピールなんか加わったりなんてしたら……ああ駄目だ、今から涎よだれが止まらなくなる！」

「な、何と……それほどまでに美味しいのか、あのぴぎは……!! ええい赤い人、吾われに一刻も早くそのちゃんくぴぎを寄越せっ！あんな話をさせられて、夜までなど待てるわけがなからうて！」

「まあ待ちたまえ、茨木童子。そんなに早く食べたいのなら、今からピザを作るのを手伝ってはくれないだろうか？何なら試食として、一足早く君達に焼き立てを食べてもら

「うごとも出来るぞ?」

「うむう、鬼を働かせようとは……しかしその無礼、ちやんくびぎとやらの献上で許してやらんこともない。さあつマスターよ、汝^{なれ}とて焼き立て熱々のびぎを頬張りたいであらう?なれば手を動かさせ、そして吾^{われ}の前に甘いびぎを差し出すがいい!クハハハハ!」

「茨木つたら、やる気満々だなあ……これが甘いモノへの執念か。」

「おうよ、糖分の力つてのは偉大なんだぜえ?甘く見ちやいけねえよ(モツシヤモツシヤ)」

「ああつこらキヤス銀さん!何食べてるの!?!」

「知らねえ知らねえ、俺は冷蔵庫に入ってたマカロンなんてゼーんぜん知らねえよ。」

「そんな栗^り鼠^すみたいに膨らませた頬つぺた、今更誤魔化せないだろ!エミヤ〜キヤス銀さんが〜!」

「銀狐！^{なれ}汝ばかりズルいではないかあ！吾^{われ}にもそのマカロンを食わせるおおオオオツ
！」

「待った君達！それは今夜のパーティーのために用意したケーキのデコレーション用で、数にあまり余裕はつて聞いているのかお前らアアアツ！！こらつマスターまでどさくさに紛れて食べてるんじゃない！キャス銀時君つ狐火でマシユマロを炙^{あぶ}るな！あああ茨木そんなにマカロンを口に詰めては……………っだから！！食うなって！！君達！！頼むからアアアアアツ！！」

* * * * *

「おゝ痛つて、夜になつてもぶたれたトコがまだ痛えや。」

「ぐぬぬ、これほどまでに痛いと思つた拳骨は母上以来だ……………いや、やはり母上のほう

が痛かったかな? うん、やっぱ母上の方が痛かったそして怖かった。」

「でもさ、エミヤのチャंकピザ間に合って本当によかったよ。色々トラブルもあったけど、試食のピザは凄く美味しかったし、最後は『ありがとう』って言ってくれたしさ。」

「うむ、アレは真に美味であった。是非今宵の宴にて酒?にも……………む?とところでマスター、ハロウインの宴はいつ始まるのだ?」

「ええと、ちよつと待つて……………げつ、もう開始の時間過ぎてる!」

「にやにやんとおつ!! いかん、吾^{われ}は酒?と待ち合わせていたのであった! マスターに銀狐、吾は先に会場へと向かうぞ! (ダツ)」

「うん、茨木くまた後でねくあと前見ないと転んじや——」

「(ズシャッ!) へぶつ!!」

「あ、やつぱりコケた。」

「大丈夫だろ、ホラまた起き上がって走ってった。」

「あはは………それじゃキャス銀さん、俺達も準備しようよ。もうマシユ達も会場にいると思うし。」

「あ………その前にさ、藤丸。ちよつと手エ出してくんねえ?」

「へ?はい、何かくれるの?ああ分かった、お菓子かな?」

「ぶつぶー、残念ながら菓子ではないな。」

「えー?じゃあ何を——」

ギユッ

「……………うわ、何!? 令呪が熱く……………っ!?」

「……………うし、これで契約完了つと。これでキヤス銀さんも正式にカルデアのサーヴァントの仲間入りだ。」

「え……………えええっ!? だつてキヤス銀さんつて、元の銀さんが靈基を変えただけの存在じゃあ……………!?」

「ああ、『俺』は銀時の浮かれた心から生まれただけの存在。今日限りのこの祭りが終われば、自動的に消滅するだけの存在だ……………でもな藤丸、お前やイバラギン、それに他の奴等と今日を過ごして思ったんだよ。ああ、やつぱりまだ消えたくないなって。俺の中に居座つてる狐も、俺にしか声は聞こえないだろうが、ずっとそう言ってる。」

「キヤス銀さん……………。」

「だから、強引だがこうしてお前と契約を結ばせてもらったんだ。こうすりゃ俺は魔術師^{キヤスタ}クラスの俺として靈基を確立出来るし、劍^{セイバー}の俺とは別の存在としてここにいら

れるってこった。ここまで無茶苦茶出来んのも、俺と統合してるこの狐の霊力とかの陰らしいけどな。なんせコイツ、徳積みまくって九尾になった上、狐龍とかいう凄え存在になったらしいからよ。」

「別の存在ってことは……………あれ？じゃあ俺の知ってる銀さんの方は——」

「おい藤丸、なあにやってんだお前？もうとつくにパーティー始まってんぞ？」

「あつ、銀さん……………ええと、こっちはノーマルの銀さん……………だよね？」

「はあ？ノーマルじゃねえ銀さんってなんだよ？アブノーマルな俺とか存在すんの？」

「銀さんは元からアブノーマルでしょ。それよりこの人、知ってるよね？あーたから分離した別の霊基の銀さんで、クラスは——」

「何言ってるんだお前……………誰もいねえじゃんか。」

「……へ?やだなあ銀さん、何を言つて——あれ?いない、何で……そんな筈ないよ、だつて銀さんが来る少し前まで、俺と話してて、それに契約だつて……え、あれ?」

「……どうしたんだよ藤丸?ハロウィンだつてのにジャック・オ・ランタンじゃなく、狐にでも化かされたか?」

「狐……その通りかも、しれないね。あ、アハハハ……。」

* * * * *

「よつ、と……うんうん、南瓜なんきんのランタンに灯す狐火も中々乙なモンじゃねえか。」

「え?折角契約もしたのに、マスタ藤丸達に混ざらなくてもいいのか、だつて?いいんだよ別

に、俺賑やか過ぎんのあんまし好きじゃないし。」

「ああでも、どうせならエミヤに稲荷も作ってくれるよう頼めばよかつたなあ。お稲荷さんの中に牡丹餅ぼたん入れるヤツ、俺アレが一番好きなんだよ……あ？そんなゲテモノでなく、稲荷はちゃんとお揚げとして食わせるだど？うっせーなテメエ！狐龍だか何だか知らねえけど、この靈基からだは銀さんのだからね！あんまし我儘わがまま言うど追い出すぞコノヤローツ！」

「……………させてきて、一日限りの万聖節ハロウイーン前夜祭ンも、もうそろそろ佳境だな。祭りの後つてのは何とも嫌なモンだ、何つーかその、ブルーな気分になっちまう…………『お前』も、そう思わねえか？」

「さてさて、次はいつキヤス銀さんに会えるんでしょーか？それは賢い銀さんでも、まだ分かんねえよ……………そうさな、書いてる奴の気紛れ次第つてとこだな。そんな時やまた、『お前』の顔ツラを俺に見せにきてくれよ。俺は気分のままに過すごししながら、この小唄カルテアで待つ

てるから、さ。」

「それじゃ、別れの挨拶代わりにキャス銀さんから、『お前』に一言くれてやるよ。」

「——祝はっ・万聖節前夜祭はろ！なーんつつてな！」

銀さんと万事屋十α ちきちき冬祭り

「えーどうも皆さん、明けましておめでとうございます。この度は万事屋の皆がメインの回になるので、多分出番が殆どないであろう藤丸立香でつす。何で俺が普段滅多に使われない前書きにいるのかと言うとですね、此度の小嘶ではF G O亜種特異点及び二部に伴うキャラクター等のネタバレが含まれているため、その注意を伝えてこいとダヴィンチちゃんより賜ったからなのです。もし1・5部かつ第2部の三章までをを未プレイで、ネタバレなんざクソ喰らえエエエツ!!という方がございましたら、巡回して戻るか今すぐブラウザを閉じて……………あ、マシユが呼んでる。それじゃあこまで飽きずにしっかりと読んでくれた皆さん、今回の小嘶も楽しんでくれると嬉しいな。じゃつまた後で！」

わいわい、がやがや。賑やかな声が溢れる雪祭りの会場内。

カルデアの職員達やサーヴァントの面々の手により、大中小の様々な雪像が造られていくこの場で、万事屋の三名もまた同様に勤し^{いそ}んでいた。

神楽「銀ちゃん、新八。雪持ってきたアル。」

銀さん「おう、サンキュー神楽。」

新八「ありがとう神楽ちゃん、こんなにたくさん大変だったでしょ？」

神楽「ふふん、神楽様にかかればこんなのお茶漬けさらさらネ！」

銀さん「お茶の子さいさいな。とりあえず雪その辺に置いといて、こっちの方手伝ってくれ。」

神楽「あいあいさー。」

新八「ところで銀さん、さつきからずっと気になってたんですけど、どうして今回は^{かっ}この前に名前の表記がされてるんでしょう？本編なら分かるんですけど、ココって書いてる奴の小噺という言い訳を用いた小ネタ帳みたいなコーナーなのは分かるんですけど、いつもはこんな風な形式にしたりなんかしないでしょ？読んでくれる人達もきつ

と首を傾げてると思うんですけど。」

神楽「あ、ホントだ。しかも銀ちゃんだけちよつと違うアル。いいなく私も変えたいヨ！」

銀さん「ああコレか？何でも今回の小嘯はいつもより出てる奴が多いらしくてだな、読んでる方も書いてる奴も混乱いじしないためのモンだそうだ。因ちなみに縮んだダヴィンチ曰いわく、こつちから簡単に弄いじれるつぽいぞ。」

千年に一度の宇宙一チャイナ系美少女銀魂ヒロインの神楽ちゃん「おおつ、コレは面白いアル！」

ルックス身長共に高スペックなカツチヨイイ主人公の銀さん「いいねいいね、これだけ設定つけときや初見の奴らも俺らがどんなキャラか容易にイメージ出来んだろ。」

パチ君「盛りに盛り過ぎだろオオオツ!!アンタら無駄に長エんだよつ!!台詞の前に一々そんな文字数使つてたら、読んでくれる人達も書いてる方も余計面倒くさ……つてアレレエツ!!いつの間にか僕のも変更されてる、つて何コレ!!」

ルックス身長共に高スペックな実写キャストは小○句の元攘夷志士最強白夜叉な銀魂の主人公カツチヨイイ銀さん「あくそれな、お前が「ところで銀さん」の後に長々と台詞が続いてた最中、すぐ横を通りすがつたアストルフオが鼻唄歌いながら書き換えてたぞ。」

パチ君「えつ、アストルフオ君が………んもう、しょうがないなあ。別にこれで僕だと分らないわけじゃないですし、銀さん達みたいにあたらと文字数食うばかりに長つたらしくもないからね。」

千年に一度の傾国の美姫にして宇宙一チャーミングなチャイナ系美少女ヒロインの神楽ちゃん「何だヨ駄眼鏡、可愛けりやナニがあるうが無かるうが見境ねーのか。」

パチ君「いや、別にそういうわけじゃ………とにかく、二人とも早く元に戻してくださいよ。このままじゃ読みづらいつたらありやしない。」

銀さん「ちえー、わあつたよ。」

神楽「ぶく、もつとステータスに色々と追加したかつたアル。」

パチ君「はいはい、また今度機会があればね………あれ？そいういえば神楽ちゃん、定春と一緒にやなかつたつけ？」

神楽「おー、定春なら向こうでロボと赤兎馬と遊んでるネ。ほら、あつちで楽しそうに追いかけてっこしてるアル。」

銀さん「………いやアレな、追いかけてっこじゃなくて馬が獯猛どうもうな二匹の獣から必死に逃げ惑つてんだと思うんだけど。しかしまあ、強者が弱者を喰らい己の糧かてとする、食物連鎖という自然界の厳しさをこんな間近で見られるとはなあ。折角のいい機会だ、お前らもじつくり観察しておけよ。」

パチ君「何呑気なコト言つてんだアンタアアアツ!! 早く赤兎馬さんを助けないと、あの人……いや馬か、が本当に食べられかねませんって!」

銀さん「馬刺しかあ、いいなく最近食つてねえな。」

神楽「私は煮込みが好きアル。お肉と筍たけのこと糸こんにやくをじっくり煮込んだあの残り汁をご飯にかけても最高ネ。」

パチ君「腹の空く話してる場合かアアアツ!! んな呑気なことしてる場合じゃないでしょアンタら! マズいですよアレ、あの二匹の目には赤兎馬さんなんてちよつとすばしっこい桜肉にしか見えてませんよ! 早く助けてあげないとっ!」

銀さん「心配すんなって新八。ほら見ろ、たつた今動物会話持ちのサーヴァント二騎が急いで突つ走つてつたぞ。」

神楽「金時きんちゃんも水着牛若丸ウツシもいることだし、きつと大丈夫アル。ほら、ヘツシーもあんな必死に口ボにしがみついていることだし、後は任せても平気ネ。」

パチ君「そ、そうかなあ……後で赤兎馬さんやヘシアンさん達に、きちんと謝らないと。」

銀さん「それより新八、土台のほうはもう出来たのかよ? ツツコミだけでなく手もちゃんと動かさねえとなんねえぞ。」

パチ君「ちゃんと作業もやってますって、こんな具合でどうですか?」

銀さん「おーおー流石はばつつあん。イイ仕事すんじゃねーか。もうコレ土台だけでグランプリいけんじゃね？」

パチ君「何寝ぼけたこと言ってるんですか、周りよく見てくださいよ。今回の雪祭りはかぶき町で行われてたヤツより、明らかにハードルが高くなってるんですから。それに英^{サリアクト}霊の人達の中には、こういった芸術部門に特化してる人だっているんですし、生半可な作品じゃあ優勝狙うなんてまず無理ですよ。」

銀さん「つたく、どいつもこいつも賞品に目エ血走らせやがって。人間だろうがサーヴァントだろうが、聖杯を欲するってトコだけは変わんねえらしいな。」

神楽「そういう銀ちゃんは、聖杯欲しくないアルか？私に欲しいネ！だって願い事何でも叶うんだヨ、積年の夢だった毎日酔昆布とTKG^{卵かけごはん}食べ放題を實現させたいアル！」

銀さん「おいおい、万能の願望器にかける願い事がソレかよ。つたく、根っからの貧乏性はこれだからよお。何でも叶うつつーんだから、もつとビツクな理想を抱いてもバチなんざ当たらねえだろ。例えばだな、毎日三食高級寿司とA5ランク級の焼肉を食べ放題、あとデザートにはスウィーツバイキングも欠かしちゃんねえだろ。」

パチ君「そういうアンタだって、神楽ちゃんとそこまで大差ないでしょ………と
 いか冒頭からずつと気になってたんですけど、僕ら一体何の雪像を作って——

神楽「銀ちゃーん、玉こんな感じでいいアルか？」

銀さん「おーイイねイイね、それじゃあその間にこの棒を置いて、つと。」

神楽が均等の大きさに作った雪玉、土台の上に間隔を開けて並べられた二つの間に、銀時は担いでいた太くて大きな雪の棒を慎重に下ろしていく。

お分かり頂けたでしょうか、彼らが今作ろうとしているものの応えは、唯一つ――

パチ君「いやこつちの連載も終わるううウウウウツ!!」

敏捷EX並みの速度で銀時の横をすり抜け、新八は渾身の力で片側の玉を蹴り飛ばす。

某稲妻サッカーの必殺技に匹敵するやもしれぬ勢いで飛んでいった雪玉は宙で弧を描き、勢いを殺さぬまま他チームの制作している雪像へと直撃した。

神楽「ああ〜つ何すんだヨ馬鹿眼鏡!!せつかく綺麗に作ったのにいつ!!」

パチ君「作ろうとしてるモンが汚エよつ!!何でFGOこつちの雪祭りでも猥褻物わいせつぶつ拵こしらえよう

としてんだアンタらアツ!!」

銀さん「猥褻物とは失礼だな。お前また勘違いしてるようだから教えてやるけどよ、これは銀魂を知る者ならば誰でも知り得る、そしてD・E・Sの最新アルバムのジャケツトとタイトルをも飾った、かの有名な大砲だぞ。その名もズバリ——」

神楽「ネオアンチクロサイケデリックあん肝砲アル!あれだけ有名だつてのに名前すら思い出せないなんて、オメー何年銀魂にいるんだヨ?また一巻から童貞レベルもーでやり直すか新八イ?」

銀さん「ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だろ、お前も一巻からやり直してこい神楽。」

パチ君「そんなことよりアンタら、ここは僕らのいたかぶき町じゃないんですよ!! あつちじやあ周りでも似たようなかわしいものを作ってたから、僕らのも多少紛れる感じで何とか誤魔化せましたけど、ここでそんなモン作ったら優勝どころか運営側に叱られ——」

??「くおうらアアアアツ貴様らああアアアアツ!!」

銀さん「ん?何だオイ、丸さを増したミ○ユラン○ンが叫びながらこつちに走ってき

やがったぞ。」

神楽「銀ちゃん、ミ○ユランよりベイ○ツクスの近い気がするヨ。」

パチ君「いや、ミ○ユラン○ンでもベイ○ツクスでもなく、白い防寒着を着込んだ新所長さんですよ。何だか凄く怒ってるような……あつ転んだ。」

新所長「あ痛たたた……私としたことが、派手に尻を強打してしまつた……。」

銀さん「大丈夫かよミ○ユラン、あれだけ派手に転んだら尻割れてんじゃねえのか？」

新所長「誰がミ○ユラン○ンだねっ!! 全く君は、初対面の時から本当無礼な男だな。大体サーヴァントとはいえ、いい若いモンがそんな死んだ魚みたいな目をしていたらいかんよ……いや、君なんざに気を遣われなくとも、こう見えて私は結構鍛えてるからね。」

この美尻ヒツブだつて別に何ともな———あ、あれ? 割れてる、私の美尻が真つ二つに……いつ嫌ああアアアツ!! 誰か、誰が急ぎ救護班ををオオオオオツ!!」

パチ君「新所長さん落ち着いてください、尻は元々割れるものですから。」

新所長「ハッ! ししし知つたぞ、そんなコトぐらい! ほんのちよこつと君達の低俗なノりに付き合つてあげようと、寛大な私なりの心遣いだ! 感謝しなさいよっ! フンツ!

神楽「それで、何か用かヨ? ベイのマックス。」

新所長「誰がベイ○ツクスだっ! あと伏せるならしつかり伏せなさいチャイナ娘! 夢の国は相手に回すと本当恐ろしいんだから、ムジーク家の全主力を以ても太刀打ち出来るかどうか……ハッ! いかんいかん、わざわざ私がここまで赴いてきた本当の目的を忘れてしまふところだったよ。では改めて……くおうらアアアツ貴様らあアアアツ!!」

銀さん「あ、そつからやり直すんだ。」

新所長「貴様らのところから飛来してきた雪の弾丸が、我がカルデアチームの制作する雪像に直撃したではないか! 折角私の指揮する元に、ミケランジェロもおつたまげなくオリテイの精巧なムジーク像が、もうじき完成するとこだったというのに!」

パチ君「あ、それ蹴り飛ばしたの僕です……本当にすみませんでした。」

新所長「むっ……うん、まあ。非を認め素直に謝るんなら、許してやらなくもないよ。私の寛容な精神に深く感謝するといいい。」

銀さん「しっかし所長さんよ、また随分とデカイミ○ユラン○ンの雪像だな。あんなん的にしてくださいって存在だけで訴えてるようなモンじゃねーか。」

神楽「違うヨ銀ちゃん、あれはどう見てもベイ○ツクスアル。頭は吹き飛ばされて無いけど、あのずんぐりした体とよく出たお腹、間違いないネ。」

新所長「どつちも違うわ馬鹿共っ!! ムジーク像だつて私さつき言つたじゃん? 聞いてな

かつたの君達イ!! 全く近頃のサーヴアントときたら………つと、こんな所で時間を浪費している場合ではなかった。おいラド○リフ君! 至急ムジーク像の修復に取り掛かってくれたまえ!

ラド○リフ「ダニエルじゃねーよムニエルだつってんだろ!! 性別と眼鏡以外掠りもしてねエじやねーかつ!! 死の呪文唱えてやろうかオツサン!」

新所長「こらああアアアツ!! 私の景仰するハ○ー・ポツ○ーはそんな悪の呪文を使ったりなぞするものかつ!! それでは諸君、くれぐれもまた雪の弾丸を飛ばしてこないようにな、私は忙しいので失礼するよ——つて、オイ何してる貴様らつ!! 修復が面倒だからとムジーク像をドラ○もん改造しようとするんじゃない!! コラツやめんかああアアアツ!!」

パチ君「………行っちゃった。新所長さんも色々大変だなあ。」

神楽「やつた〜! 遂に完成したアル!」

銀さん「一時はどうなるかと思つたがな、ネオアームストロングサイクロン………ああもう、長つたらしくて読むのも書くのも面倒だな。こつからは縮めてNASJA砲と表記させてもらうことにしよう。」

パチ君「つてこつちも大変だああアアアツ!! ちよつと目を離れた隙に猥褻物陳列罪

に即引っかかりそうなトンデモオブジェがとうとう誕生しちゃったよ!! マズいつてコレ、誰かの目に触れる前にまた僕がこの手で——」

?? 「まあまあ、こちらはまた一段と賑やかですこと。私達もお喋りに混ぜてはいただけないかしら?」

突如、背後から掛けられた声に、揃って振り向く万事屋一同。

そこにいたのは、穏やかな微笑みを湛える高貴な身なりの少女。そして彼女の背中に身を隠すようにしてこちらを窺う、銀灰色の髪色の青年。

パチ君 「ええつと………失礼ですが、貴方がたは?」

アナスタシア 皇女 「あら、そういえばきちんご挨拶をしていなかったわね。ごめんなさい………それじゃあ改めて、私はキャスターのサーヴァント・アナスタシア。」「かっこの前の名前に表記されているルビにも、そう書かれているでしょう?」

神楽 「おおつ! もしかしてガチのア○雪アルか?! それならあの歌いながら氷でお城作るヤツ見せてヨ! 最後はちゃんと「少しも寒くないわ」って台詞も忘れずにな!」

銀さん 「バツカおめー、そりゃ妹じゃなくて姉のほうだつつの………で、お前の後ろ

でコソコソしてやがる、その陰キヤが何者だ？」

?? 「……………（コソコソ）」

皇女「ほらカドック、何をそんなに怖気づいてるの？ 貴方もきちんとして挨拶なさいな。」

?? 「……………（サツ）」

皇女「んもう、仕方のないマスターだこと。」

パチ君「あ、あれ……？ ちよつと待つてください。その人がアナスタシアさんのマスター？ つてことは、まさか……!!」

皇女「あら、貴方は私達のことをご存知のようね……ええそうよ。私とマスターである陰キヤと呼ばれた彼、カドック・ゼムルプスは、かつて異聞帯となったロシアを統括していたわ。貴方達カルデアの敵である、クリプターと呼ばれる存在としてね。」

銀さん「ほーん……で、その敵側だった連中が、何で今更こんなトコに現れてんだよ？ 再戦^{リベンジ}でもしに来たのか？」

皇女「あら、そんな無粋な真似事など微塵も考えてはいないし、する必要もないわ。だって私、もう二部^{ほんぶん}からは克蘭クアップした身ですもの。」

パチ君「くくく、克蘭クアップウウツ!! そんな設定アリなんですかあ!!」

銀さん「あのなあ、ぱつつあん。ここは色んな設定やIfが溢れかえった二次創作作

品の中でも、特に何でもアリな無法地帯の小哘エリアだぞ？かつて世界の命運をかけて死闘を繰り広げた相手だろうが、出番が終わりやあ只の一般凡人と英霊だ。互いにかみ合う理由も無くなっちまえば、後は自然と酒でも酌み交わす間柄になるってモンよ。」

皇女「ふふつ、白銀の剣士さんの仰る通りだわ。カドックはまだ出番が残っている身でしょうけど、私はもう自由ですもの。今日はこうしてお祭りを楽しませていただいてます。」

パチ君「そ、そうなんですか………つてことは、アナスタシアさんやカドックさんと同様に、今まで空想切除してきた異聞帯の他のクリプターやサーヴァントの皆さんも、今はここにいらっしゃるってことですか？」

神楽「そういうえば、さつき定春と雪集めに行つた時に、マシユが見たことある奴と仲良さそうに何か作つてたネ。」

皇女「それはきつと、オフエリアと一緒にいたのね。彼女達は大きな雪像は作れないから、小さな雪のウサギをたくさん作るんだって張り切つてたわ………とこころで、ぱつっあんさん達はどのような雪像を作つてらつしやるの？」

銀さん「おうそんなに見たいか？優勝間違いなしの俺達の力作を。」

神楽「仕方ねーな、特別にちよつとだけアルよ？次からは見物料取るからナ？」

パチ君「おわああアアツ!! ややや、やめてくださいよ一人ともつ!! あわわわ、見ちゃ……見ちゃ駄目ですアナスタシアさんつ!! あと僕の名前は志村新八ですつ!!」

皇女「!!——まあ、これは……………!!」

パチ君「あ、あああ〜終わりだ……………こんな猥褻物わいせつを公共の目に晒さらす羽目になるなんて、この作品もう続けていけなくな——」

皇女「ほらカドック、貴方も御覧なさいな。とても見事なネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲、略してNASJA砲だわ。」

カドック「……………ああ、本当だ。中々完成度高けーなオイ。」

パチ君「えっ——ええええええええっ?! ななな、何で知ってんですかアンタらあつ?!」

皇女「あら、ご存知ないかしら? かのロシア革命で起こった内戦時、『悪魔の雷』いかずちとして恐れられ、その名を知らしめた脅威的破壊力を誇る軍事兵器なのよ。あのイヴァン雷帝も感銘を受けて、異聞帯で開発を試みたのだけれど、自身の身体に装備する段階で幾つもの問題が発生したために、計画は中止になってしまったの……………でもまさか、あの『悪魔の雷』がこんなところで雪像という形でお目にかかれるだなんて、とても光栄だわ。」

パチ君「……………あの、因みにイヴァン雷帝さんは、身体のどこにN A S S J A砲を取り付けようとしたんですかね？」

銀さん「んなモン今更聞かなくなつたつて、大体分かんたろーがよ。あの通りの巨体にN A S S J A砲つけるトコつたつたら、もう一箇所しか思いつかな——」

パチ君「やめてええエエツ聞きたくない!! 読んでる側の人達も大凡で検討ついてもかもしんないけど、頭でイメージしたくないからそれ以上言わないでエエエエツ!!」

カドツク「……………(ジー)」

神楽「おい、その厨二患つてそんな陰キャ。さつきからずっとこつちにガンくれてっけど、言いたいことがあるならさつきと言うヨロシ。」

皇女「もうカドツクつたら、彼らに会いに行きたいと言い出したのは貴方でしょう? いつまでもそうしていないで、しっかりなさいな。」

カドツク「う……………うん。」

パチ君「え?カドツクさんが僕らに…………?」

皇女「正確には、その白銀の剣士……………ええと銀時さん、でよかつたかしら?ごめんなさい、カドツクの口から何度も名前を聞いてはいるのだけれど、あまりはつきりと覚えていないもので。」

銀さん「おお、別に間違っちゃいねえけど……………つか、どういう縁でクリプターのそ

「いつが俺のこと——」

カドツク「あつ、あの!!」

銀さん「うおおっビックリした! 何だよ、いきなり大声出して。」

カドツク「えつと、その………何ていうか………」

皇女「ふふつ、カドツクつたら早く仰おっしやつたらどう? 貴方が購読している、週に一度発売のあの雑誌。その中でも特に熱心に読み耽ふけつているお話の主人公が、今日の前にいるのだから。」

カドツク「あつアナスタシア! そういうことは僕が自分の口で………っ!!」

銀さん「ははくん? 何だよそういうことかあ。つまりお前はジャンプの愛読者の一人で、その中でも俺達が活躍してる『銀魂』の、それも主役であるこの俺・坂田銀時のファンってわけだな? んん?」

カドツク「えつ、あの——」

銀さん「いいっていいって照れなくても。今日の銀さん超機嫌いいからさ、普段はお断りだけど今だけ特別に握手してあげちゃう! ハイ手エ出して〜?」

カドツク「あ、ど………どうも………」

神楽「………なあ新八、あのカドツクとかいうヴィジュアル系もど擬き、あんまり嬉しそうな顔してないアルな?」

パチ君「言われてみれば確かに……もしかしてカドツクさん、違う用があつて僕らの所に来たんじゃあないのかな……？」

皇女「そうだわ銀時さん、私もカドツクに雑誌を読ませてもらったのだけれど、貴方達の他にも沢山の方々が登場していらしたと思うの。その方達も今カルデアにはいらつしやるのかしら？」

銀さん「ん？ああそうだな、ツラは向こうでオ○Qの雪像作つてるって聞いてるし、高杉とまだこつちの本編にはまともに出てねえ真選組の連中も——」

カドツク「た、高杉だつて!!それに真選組も、土方十四郎もこの会場にいるのかつ!!」
銀さん「えつ!!あ、え、う、うん……。」

カドツク「そうか、そうなのか……い……ありがとう、その事実を確認出来て本当によかった。GIGAに移籍しても欠かさず読んでるよ、これからも頑張ってくれ!!」

銀さん「あ、はい……。」

カドツク「よし、こうしちやいられない!行くぞアナスタシア!(ダツ)」

皇女「もう、カドツクったら……それじゃあ私達はこれで、グランプリ目指して頑張ってくださいな。」

神楽「……銀ちゃん、元気出せヨ。相手がスギつちやマヨじや仕方ないネ。」

パチ君「そ、そうですね！カドツクさんの推しが高杉さんや土方さんだとしても、銀さんにだつてきつき頑張つてつて言つてくれたんですし！」

銀さん「……もういいよ、そういう中途半端な慰めは却つて傷つくからさ……あゝもう！こんなトコでうじうじしてる暇なんざ俺らには一刻も許されねえ！こうなつたら本気でグランプリ狙つて聖杯ゲットしてやらあ！おい新八っ神楽、この雪像もつとド派手にすつから手伝え！」

神楽「あいあいさー！」

パチ君「ちよつと、もうその辺でよした方がいいんじゃないですか？現時点で放送規制に引っかけりそうだっていうのに、これ以上卑猥度数上がったら僕ら本当にこの作品ごと消されちゃいますよ？」

銀さん「新八、お前は何をそんなに恐れてんだよ？第一公式だつて去年配信した二部の三章、アレも中々下いタイトルだつたじゃねーか。」

神楽「えつと確か、人智統合真国CHIN……だつたつけ？」

銀さん「そうそうCHINだよCHIN。二回言うつとCHINCHINじゃねーか。就学前から小学生までの主に男子が大喜びするワードだなオイ。」

パチ君「CHINじゃねーよSINだよ！！確かにSNSのほうでも散々朕だの騒いでましたけども——」

?? 「む？ 其処そこな童わっぱ、朕を呼んだか？」

「またも背後から突然呼びかけられ、咄嗟に振り向く新八始め万事屋一同。輝かしいオーラを放つてそこに立っていたのは、ド派手………んんっ失礼、絢爛たる装いの男とも女ともつかない一騎のサーヴァント。」

パチ君「つてうわああアアアアアッ?! ししし、始皇帝さんんん?!」

朕「うむ、朕こそ始皇帝であるぞ。」

神楽「なーなーC H I N、その恰好寒くないアルか？」

朕「これこれ、朕のことはC H I Nではなく始皇帝と呼ぶがよい。まあ朕は天子である故な、其方そなたら並のサーヴァント達のように柔やわいものでは………ハ、ハックチョン！」

銀さん「ああもう見てらんねえや、こっちまで寒くなつてきやがる。ほら、銀さんのマフラー貸してやつから巻いとけ。少しは暖あつたかくなんだろ。」

パチ君「始皇帝さん、指の先も真っ赤じやないですか。僕の手袋でよかつたら、どうぞ使ってください。」

神楽「それじゃあ私はこの帽子貸してやるヨ、汚したり穴開けたりすんじやねーぞ？」

朕「うむ、うむうむ……！良いぞ、これは何ともポカポカだな！どれも少々毛玉が立っているのが些か気になるが、凍える大気から朕を防いでくれることに変わりはない。」
 銀さん「へいへい良かったね、ところで始皇帝のアンタがこんなトコで何してんだ？
 いつとくけど、こつちはグランプリも聖杯も譲らねえぜ？」

朕「むつ、其方は確か異世界から来たセイバー……話に聞いていた通りに、不遜な態度の男であるな。そう構えずとも、今の朕は別に聖杯とか欲しくないし。今回は雪祭りの雪像部門に関わる審査員の一人として、こうして会場内を見て回ってただけであるぞ。」

パチ君「ええっ！始皇帝さん、審査員なんですか!!」

銀さん「それならちようどいいや、俺ら万事屋の渾身の作品見てつてくれよ。」

神楽「あまりのクオリティに腰抜かすんじゃないぞ？」

朕「ほう？そこまで自身があると申すのか、朕ちよつとワクワクしちゃうぞ？」

パチ君「やめてエエエエツ!!いくらさつきアナスタシアさん達から絶賛されたからって、始皇帝さんも同じ反応するわけが無いって!!」

朕「!!——な、何とこれは……っ!!」

パチ君「あああもう終わりだ……ましてや審査員の目にこんな猥褻物が触れたんじゃあ、僕ら失格で済まされる話じゃない——」

朕「ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲、略してNASJA砲ではないか！完成度高けーなオイ。」

パチ君「あれええエエエエツツ！デジャヴ！これってデジャヴうううウウツツ！」

朕「朕が異聞帯を統べる始皇帝であつた頃、更なる兵器の製造を試みようとする古の書漁っていたところ、『神々をも恐れる最古の兵器』という肩書と共にこの恐るべき大砲が記されていたのだ。早速韓信らに設計・製造を命じ、朕自身もその解析を試みたもの……長きに亘る歳月をかけても尚、最古の兵器の形すらも生み出すことは叶わなかつた。だがしかし、今朕の二つの眼に映るそのNASJA砲の輝かしい姿、正にあの日あの時朕が文献で見たそのものの姿をしているではないか……！」

パチ君「……銀さん、異聞帯というものが誕生したせいで、人類史がどエライ方向に向かつて行つちやつてるんですけど！」

銀さん「まずいなこりや、このまま行くとどの歴史においても、必ずあのチ○コ砲が絡んできちまう。藤丸達の守ってきた人類史を、あいつ等の未来をチ○コで染めさせてたまるかつてんだ！」

パチ君「とうとうこの人認めたよ！アレがチ○コだと認めちやつたよ!!」

朕「因みに朕がNASJA砲を完成させた暁には、自身のこの躯体に装備させる寸法

であつたのだがな。例えばホラ、ちようど空いてる股間とか。」

神楽「いいなく、私の股間も空いてるからNASJA砲つきたいアル。何かカツケーじゃん？」

朕「そうか、カツケーか……今まで実用性ばかり考えていた故な、そのようなことは考えたこともなかった。よし娘よ、朕がNASJA砲を完成させたその時には、其方にも朕と同じモノを特別に拵えてやろう！どうだく嬉しかろう？」

神楽「キヤツホー！CHIN^{チン}とお揃いアル！」

パチ君「つてちよつとオオツ!! 僕らが離れた少しの間に、こつちの話もエライ方向に行つちやつてるウウウウウツ!!」

??「あついたいた、おーい銀さくん! 皆く!」

銀さん「あ?このどことなく間の抜けた声は……。」

藤丸「間の抜けた声で悪うござんしたね。皆さん冒頭ぶりです、カルデアのマスター藤丸立香だよ。」

朕「ほう其方か、ああもうくそのように顔を真っ赤にして、朕のマフラー（正確には銀時の）使うか？」

藤丸「いいよいよよ、ていうか始皇帝のほうが寒そうだし……ああそうだ、向こうでお汁粉作つたんだって、皆も食べに行こうよ。」

神楽「お汁粉?! 食べたい食べたらい! CHINも早く行こつ!」

朕「はっはっはっ、こらこら急かすでない。」

パチ君「それじゃあ、僕らも少し休憩にしましょうか。」

銀さん「そうだな、お汁粉お汁粉♪」

藤丸「作つたのエミヤだからね、もしかしたら早くしないと売り切れちゃうかも——

銀さん「何イツ?! こうしちやいらんねえ、エミヤ特製の汁粉は俺のモンだあつ!!」

藤丸「ああつ銀さんズルい! 俺だつて負けないんだからつ!」

寒空の下に響く、賑やかな彼らの楽し気な笑い声。

今年もどうか、良い年でありますように——。

銀さん「あれ？　そういや雪像コンテストの結果ってどうなったの？」

藤丸「えっと、あの後何やかんやありまして、銀さん達万事屋チームと僅かな票の差で、ゴルドルフ新所長率いるカルデアチームが作ったドラ○もん像に優勝が決まったよ。」

皇女「あら、これは見事なドラ○もんだわ。」

朕「朕はNASJA砲に票を入れたんだけどなく……うむ、しかしこの全体的にずんぐりとしたフォルム、紛^{まじ}うこと無きドラ○もんであるな。」

新所長^{ゴツフ}「ドラ○もんじゃないってば！　ムジーク像だってば……えっと、そんなにドラ○もんに見えるかな？　私………ねえ？」

銀さん+αと藤丸 カルデアカカオ祭り (I)

【坂田銀時 『銀さんの特製・スイーツビュッフェ』】

2月14日 カルデア・廊下にて

「あついたいた、銀さくん。」

「おう藤丸君じゃねえか、んな走んなくても銀さんは逃げねえぞ。」

「つとと……あれ銀さん、その下げた袋いっぱいに入ったソレはもしや——」

「ふっふっふ……よくぞ気付いたな藤丸、流石は俺のマスターだぜ。」

「いや、そんなデカデカと『糖』なんて書いてる目立つエコバッグをさ、しかもこれ見よがしに突き出してる時点でかなり露骨なんだけど。マスターでなくても分かると思うよ。」

「へっへっ、何とでもいいな。今の銀さんは突如到来したモチ期によって、テンションもNPも浮かれオーバーチャージMAXだからな！」

「凸カレスコ装備してなくてもNPマックスなの？じゃあそのまま周回行こうか？」
「そうしたいのは山々なんだがな、でもホラ今日はバレンタインじゃん？いや、銀さんはンなコトすっかり忘れてたんだけどさ？なくんか歩いて出くわす女子面々が次々にチョコくれるもんだからさあ？それにホラ、まだ銀さんに渡してない子もいるかもしれないしい？そんな子ほっぽってクエストなんてやってらんねーから、悪いけど今日の周回、俺はパスで。」

「ちえ〜……………それにしても、本当に沢山貰ったんだね。エコバックもうパンパンではち切れそう——あつ銀さん、カードが何枚か落ちたよ。」

「え、マジで？アラやだ〜俺への愛のメッセージ達が、藤丸君拾って拾って〜？」

「はいはい、しようがないな……………お、これってブーデイカさんから？こっちは刑部姫からだし、エレシユキガルのもある。ええと何々……………」

「 万事屋さんへ」

この間のおやつパーティー、お菓子作りを手伝ってくれてありがとう！銀時君の作ったお菓子、子ども達もとっても喜んでくれてたよ。またお手伝いお願いすることがあるかもしれないから、その時はよろしくね！
ブーデイカお姉さんより感謝を込めて

「銀ちゃん始め万事屋一同様へ

どもどもくおつきーです ☒ω☒ノ 先日は皆さんで姫の原稿のお手伝い、本当にありがとうございます！共に三徹オールして頂いたお陰で無事脱稿出来まして、誠に申し訳なさと共に圧倒的感謝デス☆多

また原稿間に合わなくなりそうだったらご依頼しますので、その時はまたよろです♪では〜(ーωー)ノ

「万事屋さんへ

この前はサバチューブに投稿する動画の撮影を手伝ってください、ありがとうございます。しました。

ところで次の企画のお話なんですけど、『大激突！夜兔の胃袋VSカルデア料理班！食糧庫が空になるまで終われまTEN！』っていうのを生配信でやるのはいかがですか？

特別ゲストとして神楽のお兄さんのバーサーカー君も呼び出したいのだけれど………どうか検討のほど、よろしく願いますのかわ？

冥界の女主兼最近サバチューバーデビューも果たしたエレシユキガルより」

「これは……銀さんへの愛のチョコというより、今まで銀さん達が万事屋として依頼を引き受けたサーヴァントや職員さん達からの、お礼としての感謝チョコの方が圧倒的に多いのでは……？あとエレシユキガルには後で注意しておこう。」

「藤丸、どした？まさか思わず固まっちゃうほどに熱烈な愛のメッセージでも書いてたかあ？（ニヤニヤ）」

「え？あ、アハハ……う、うん。それにしても銀さん、カルデアに来てからも万事屋銀ちゃんの仕事、結構順調みたいだね？」

「ああ、金集めの為にまた三人と一匹で副業として始めたら、これが忙しいのなんのつて。昨日までだって、女サーヴァント連中にバレンタインの買い出しやら試作品の手伝いやら試食やらでてんやわんやだったぜ。」

「成程ねえ、でもカルデアでも頼りにされてるなんて凄いいじゃない。流石伊達に長いこと万事屋やってるだけあるね。」

「おう。まあ依頼がバンバン来るお陰で、この連中とも早く打ち解けられたつてのもあるからな、万事屋様々つてとこだ……とここで藤丸よお。」

「ん？なに銀さん？」

「さつきからお前がぶら下げてる紙袋、それもお前の今日の戦利品か？」

「おつといけない、忘れるとこだった……はい銀さん、どうぞ。」

【シヤララ〜ンというSE、キラツキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「……………へ？何コレ、お前もくれんの？」

「あ、やっぱり男からだとか嫌かな？何だつたら今からマイルームひとつ走り歩いてきて性別女の子に変更してくるから、もっかいやり直す？」

「いーよ別に、つか女になっても中身がお前だつて知つてちや世話ねえだろ。」

「あはは、それもそうか。」

「つたく……………でもまあ、まさかお前から貰えるとは思ってなかったわ。コレつてアレか？バレンタインに便乗した友チョコ的なやつ？」

「んん、友チョコというかは寧ろ…………サーヴァントの皆の、日頃の頑張りを労う『感謝チョコ』つてやつかな。」

「感謝、か……………まあ、それならありがたく頂いとくぜ。サンキューな。」

「ところで、チョコあげといてなんだけどさ、銀さん他にも貰った分かなりあるじゃん？本当に食べられるの？」

「藤丸君、俺を誰だと心得てやがる？次期糖分王の座に就く資格を持つこの俺が、これし

きのチョコレートを一欠片、いや箱の底に付着したカスの一つも残すことなく平らげややるぜ！ガッツハツハツハ！」

「ははは、流石は銀さん……………じゃあ俺、他の人にも渡してくるから。」

「おお、じゃあな——いや、ちよつと待て藤丸。」

「なに？おかわり分のチョコは無いから渡せないよ？」

「ちげーよ、どんだけ卑しい奴だと思われてんの俺……………まあ何だ。このお返しはちゃんと用意してやつから、期待しててくれよ？」

「？……………うん、じゃあ楽しみに待つてるよ。」

* * * * *

——1か月後、カルデア食堂前。

「銀さんに呼び出されたのはいいけど、何の用だろ……………お？何だか甘くていい香り
が。」

「あつ先輩、いらしてたんですね。」

「あれ、マシユ？てことはマシユも銀さんに呼ばれたの？」

「はい。先程銀時さんに食堂に来るよう言われまして……………それにしても、このいい香りは一体何でしょう?」

「(ヒヨコツ) おつ、来たかお前ら。んなどこ突っ立ってないで早く入れよ。」

「銀時さん!は、はい。では失礼します。」

「ねえ銀さん、一体食堂で何して——って、うわあ!」

目を丸くして驚く、藤丸とマシユ。

二人が食堂で見たものは……………広いテーブル席にずらりと並ぶ、色とりどりのたくさんのスイーツ達。

天高く積まれた、カラフルなマカロンのタワー。それに負けず劣らず聳え立つ、色とりどりのロールケーキ。

デコレーションケーキ、カップケーキ、宝石のように輝かしいフルーツタルトやカラフルなゼリーに、生クリームの乗った大きなプリン。他にもシュークリームやカヌレなどが並ぶ中で、一際目を惹いたのは……………甘い香りと共にチョコレートの滝を生み出す、巨大なチョコレートファウンテン。

そこを囲うようにして、丸いテーブルの上にはカットされたフルーツやカステラ、そしてマシユマロなどが、皿にどっさりと並べられていた。

「す……………すつごおおおい!!」

「驚いたか? 驚いただろ? うんうん、銀さんそのリアクションが見たかったんだよ。」

「えっえっ?! 何なに何なのコレ?! どうしたの銀さん?!」

「これは……………いわゆるビュツフェスタイルというものですね?! それにしても、こんなにかくさんのお菓子が並べられて……………あの、もしや銀時さんが全てお作りになられたのですか?」

「まさか、所々はエミヤにも手伝ってもらったさ。まあメニューの作成やらは、全部俺がやったんだけどな。」

「それにしても銀さん、こんなに張り切っちゃってどうしたの? 今日誕生日の人いたっけ?」

「おー、誰かバースデイの奴がいたら一緒に祝ってやれるけどよ……………あーホラ、今日はその、アレだわ。アレあれ。」

「アレアレ? オレオレの方は知ってるけど?」

「詐欺じゃねえわ鈍朕! じゃなかった鈍チン! 314つつたらさ、バレンタインに受

けた恩やら仇やらを三倍くらいにして返す日に決まってるじゃん！ほんつとお前、まだ若いんだからそういうイベントと自分の誕生日は忘れちゃ駄目だぞ？」

「えっ、てことはこれってバレンタインのお返し？俺あんな少ししかチョコレートあげてないのに、こんな大々的にお返しされたら来年からはトラック一台分くらい用意しておかないと！」

「もしたら来年の銀さんはトラック三台分お返し用意しなきゃならねえからマジでやめて！！別にお前だけについてわけじゃねえよ、そうだったらマシユも呼んでねえからな。」

「あ、そういえばそうか。」

「お前からチョコ貰った後に、マシユからもバレンタイン貰ったからな。ありがとうなマシユ、アレ美味かったぜ。」

「いえ、銀時さんのお口に合うことが出来たのなら私も光栄です！」

「ん？でも二人分にしたって、この量は多過ぎる……もしかして銀さん、これってもしかして。」

「そ。バレンタインデーにチョコくれたヤツら皆への、俺からの細さいやかなお礼ってわけだ………おっと、他に呼んだ奴らもご到着みてえだ。」

「ごきげんよう銀時、ホワイトデーのお茶会にお招き頂いてどうもありがとう！あら、マ

スターとマシユもいらしてるのね？それならよかったわ！私ね、この日の為にとつておきのお茶の葉をデオンと選んできたの。貴方の作った美味しいお菓子と一緒に、皆さんで頂きましょう！」

「クハハハハ！来てやったぞ銀色の人、さあ吾われにどのようなもてなしを——にや、にやにやにやんとオオオオツ！！マカロンの塔、チョコレイトの滝、ぷりんにぜりに……けけ、ケーキまでこんなに……ここはもしや極楽浄土なのでは！！えっ嘘、吾いつの間に死んだの？酒？っしゅてーん！」

「やつほく銀ちゃん！僕もお呼ばれたから来ちゃった！つてわく！わくつ！！すつごいね、まるでお菓子の王国だあ！美味しそ——あり？どしたのサリエリ君、そんな端っこから覗き見なんてしちゃって……ははくん成程、さては君も銀ちゃんのスイーツ達が気になるんだなあ？だったら食べたいって銀ちゃんにお願いしにいけばいいんじゃない？え、恥ずかしいって？そんなの一時の感情だよ。僕なんてさあ、羞恥心どころか理性も吹っ飛んじやってるし？ほらっ僕も一緒に頼んであげるからさ、レッツゴッ！」

「す、凄いです……女性だけでなく男性の方々も、そろそろと食堂に集まってきました！」

「これもきつと、銀さんが万事屋として……ううん、坂田銀時として紡いだ縁なんだろうね………本当、凄いなあ。」

「つたく、何しんみりしてんだよ。そろそろ新八や神楽、それにダヴィンチ達も来る頃だろうし、無くなる前にお前らも早く食っちまいな。」

「はい！では先輩、早速頂きましょう！」

「よしてきた！俺達も行くこう、マシユ——銀さん、最高のお返しをありがとう！いただきますっ！」

「………最高のお返し、か。」

「人理の運命なんかの為に戦って、理不尽に立ち向かって、そんで心も体もボロ雑巾みたいになっちまって………それでも真っ直ぐ前にしか歩いていかねえお前に、俺はこれくらいのことしかしてやれねえけどよ。」

「————やっぱ銀さん的には、そうやって美味しいモン食って仲間と笑ってる時の顔の方が、ガキらしくて安心するぜ。藤丸。」

《礼装解説》

【銀さんの特製・スイーツビュッフェ】

坂田銀時からのバレンタインのお返し。

食堂に赴いたら、そこはスイートなパラダイスだった——。バレンタインに次ぐお菓子のフェスティバルということもあり、いつもより張り切った銀さん。マカロントワ―にチョコレートファウンテン、ケーキやその他諸々も合わせてその品数は十数を超える。しかし流石にしんどかったようで、「暫くは台所立ちたくねえや、周回組に加わってもいいかな……」と零していたとか。

——自身が『白夜叉』と呼ばれていた頃の齡の彼／彼女ら。人理修復という険しい道を駆け抜け、傷を負っても尚足を止めない『彼／彼女』の、ほんの一時の安らぎになれば。

※^{ちな}因みにスイーツは勿論銀さんも食べた。
本人曰^{いわ}く、『やっぱケーキの相棒は、いちご牛乳しかねえよな。』とのこと。流石に皆ちよつと引いてた。

《続く》

銀さん十αと藤丸 カルデアカカオ祭り（Ⅱ）

【志村新八 『侍魂と、マカデミアンナッツチョコ』】

2月14日、（再び）カルデアの廊下にて。

「てなわけで新八君、ハイこれどうぞ。」

【シヤララ〜ンというSE、キラッキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「……………へ？」

「あれ？もしかして新八君、チョコ嫌いだった…………？」

「いや、チョコは好きだしよく食べるけど——ってそうじゃなくて！え、え？チョコレート？僕に？なな、ななな何で!!」

「や、だって今日はバレンタインだし。日頃からお世話になってるサーヴァントの皆にせめてものお礼をしようかと、毎年こうやって感謝チョコをあげてるんだ。ああ別に、そんなに重く捉えなくてもいいよ？要は『友チョコ』みたいなものだしさ……もしかして、迷惑だったかな？」

「いやいやいやいや全然!!ちつとも!!えつと、その……紛らわしいリアクションしちゃってゴメンね。そっか、友チョコかあ……何か嬉しいなあ。毎年バレンタインに貰えるチョコって、決まって姉上からのだけだったからさ。ありがとう藤丸君、大事に食べるね!」

「……………(ジ〜)」

「あれ?ど、どうしたの?」

「いや、新八君のことだからこんな時はてつきり、『ありがとうきびう〇こオオ!!』と叫んでくれるもんだと——」

「アアアア駄目だって!!君はFGOサイドの主人公なんだから、勝手にう〇ことか下品な発言させたら型〇やらデイ〇ライ〇ワー〇スさんに怒られるウウツ!!てか銀さんじゃないんだから、チョコを前にしてう〇ことか言わないでもうっ!!」

「いや〜悪気は無かったんだ、ゴメンごめん。でも貰ってくれて本当によかったよ………それじゃ俺、他の皆にも渡してこなきゃいけないから、またね!」

「うん、藤丸君もチョコ配るの頑張つて。それじゃ！」

「——びつつくりしたあゝ……………!! 確かに藤丸君で、普段からこんな僕にも凄くよくしてくれてるけどさ、今はマスターとサーヴァントの関係なんだし……………でも、でもまさか……………人生でも英^{サーヴァント}霊生でも、初めての友チョコを、藤丸君から貰えたんだなんて……………ハッ!! いかんいかん、呆けてる場合じゃないぞ志村新八! 貰った以上はそれに相応しいお返しをしないと……………でも、藤丸君つて何をあげたら喜んでくれるのかな? 人の良い彼のことだから、何をプレゼントしても笑つて応えてくれそうだけど……………いよっし! こうなったら、普段から藤丸君と仲のいいサーヴァントの人達に色々話を聞いて、それを参考にしてみよう!」

【参考サーヴァントその① マンドリカルド】

「あついたいた、マンドリカルド君!」

「ん……………ああ新八、何か用か?」

「えっとね、話すと長いし行数も文字数も使っちゃうから……………そうだ、実はかくかくし

かじかで。」

「えっ、マスターからチョコを貰ったから？そのお返しに何をあげたらいいか参考にしたいから話を聞かせてくれ、って……あのなあ新八、そんな俺が知りたいくらいツスわ。俺だってマスターに何返したらいいか、チョコ貰った日からずっと考えに考えて夜も碌ろくに寝られてないんだかな……。」

「そ、そんなに悩むものなの？バレンタインのお返しって。」

「悩むよ。俺は超悩む。だってマスターってさ、良すぎってくらい人が良すぎるから大体何あげても笑顔で答えてくれそうじゃん？それにマスターにチョコレートチョコレートの礼がしたいって奴は他にもわんさかいるだろうし、そいつらと極力中身が被らないようにしないとイケねえだろ……？」

「確かに……っていうかマンドリカルド君、そこまで考えてるんだ。流石とか何というか……。」

「当ったり前だろ！あのマスターが俺みたいな陰キャ英霊にまでチョコレートくれたんだぞ？因ちなみに俺はチョコ貰った時、リストラされるんでないかと恥ずかしい勘違いをして身構えたりしてたけど、別にそんなことはなくて心底からホツとしたわ……ああ、ホントよかった。あのままりストラされてたら俺、駆け込んだシヨップに頭から突っ込んでこの身をマナプリズムに変還してるとこだったからさ。」

「どんだけ卑屈になってたんだよ!! 聖杯まで入れてレベルも絆も上げた君がある日唐突にマナプリメロンゼリー×3個になって還かえってきた時のマスターの反応リアクションとか、想像しただけで超胸痛くなるわあつ!!」

「まあとりあえず話を戻して、だ。やっぱり貰ったからには、お返しはちゃんとしてきたいだろ? だから今のところ考えてんのは、その……出来ればあまり邪魔にならない程度の、でもたまの暇な時間にも使ってほしいな、って感じのものにしようかと。」

「成程、形として残せるものか……ありがとうマンドリカルド君、参考になったよ!」
「そっか、それならよかった……マスターへのお返し、お互いちゃんと渡せるといいな、新八!」

「……なーにが『ちゃんと渡せるといいな』だよ、俺ってば。上からモノ言える立場じゃねえだろつつの……はくあ、俺もどうしよっかな。マスターへのお返し。」

【参考サーヴァントその② 清少納言】

「あれくパッチーじゃん! おつおつ!」

「せつ、清少納言さん？あの——」

「あくんもうつ、なぎこさんて呼んでつてば！な・ぎ・こ・さ・ん！ほらほらあ呼んでごらん？せくイ？」

「わわっ近い近い距離が近いいつ!!わ、分かりました、じゃあ……………なぎこさん。」

「そーそー、我ら同じカルデアの同じマスターの為に働く鯖仲間じゃん？呼び方にしろ言葉遣いにしろ堅つ苦しくなくていいからさ、アタシちゃんに対して特に遠慮なんていらねえんだぜ？パッチーよお。」

「はあ……………それじゃ遠慮なく、かくかくしかじかでして。」

「ほえ、ちゃんマスから貰ったチョコのお礼ねえ。ん、そうだなあ……………無難に消えモノのとかがいいんでない？疲れた時に摘めるお菓子とか。」

「お菓子かあ……………でもそれって、他の人達と被ったりしないかな？」

「でもさ、ホワイトデーにあげるものってバレンタインみたくチョコ縛りではないじゃん？アタシちゃんの見解としては、ホワイトデーにお返し持ち寄るここのサーヴァント連中の殆どは、残せるものを持ち寄ってくると思うんだよね。まあ勘だけでも。」

「う、ん……………さつき聞いたのと同じ意見が真つ二つに割れちゃったなあ。残せるものとするもの、どっちがいいか…………。」

「まあまあ、ホワイトデーまで時間だつてあるしさ。とりまゆつくり考えてみてもいい

んじやね？でもアタシちゃんから一つアドバイスをするとしたらさ……そんな深く考えんでも、パッチーがこれこそ自分らしいってモンをちゃんマスに送ればいいんでね？」

「僕らしい、モノ……？」

「そうそう。ちゃんマスが喜ぶモンなんて多過ぎて、いちいち挙げてたらキリなくなっちゃうよ。だったらここはもうパッチーが好きなモンをチョイスしてさ、それをちゃんマスにプレゼントしちやいなよ？そしたら他の奴らと被ることもないと、なぎこさんは思うのでした。」

「そうか………ありがとうなぎこさん、色々と参考になったよ！」

「おうよ！また困った時にはいつでもなぎこさんを頼りな、パッチー！」

【参考サーヴァントその③ 坂田銀時】

「藤丸にやるお返しだあ？んなモン決めるためにあつちこつちのサーヴァントに相談しまくってんのかオメーは………いいかよく聞け新八。お前も男として理解があるだろうが、男同士で送り合って喜ばれるモノつつたら大体相手の嗜好に合わせた十八禁のエロ本って相場が——」

「お約束の回答してんじやねエエエエツ!! ンなモン友チョコのお返しに出来るかアアアアツ!! (ビターンツ!)」

「カカオマスツ!!」

「……………ふう、大分色んな人達から話を聞けたな。銀さんのは参考にならないとして、僕から藤丸君へ送るお返しは——よし決めた、これでいこう!」

——後日、3月14日ホワイトデー。藤丸の部屋。

コンコン、

「——藤丸君、入ってもいいかな?」

「いいよ、どうぞ。」

「ありがとう、それじゃお邪魔します…………。」

「いらっしやう……………それにしても、さっきはどうしたの? 廊下で会うなり、『30分後に部屋で待ってて』だなんて。」

「ごつゴメンね？いきなりあんな事言つて……………えつとき、藤丸君に渡したいものがあつて。」

「俺に？」

「うん、その……………ハイこれ！僕からのバレンタインのお返し！」

【シヤララ〜ンというSE、キラツキラのエフェクトがかかる背景】

【渡されたのは、約1m程の細長いものが包まれた袋と、丁寧に包装された箱】

「わあつ、何だろう？開けてみてもいい？」

「う、うん……………どうぞ。」

わくわくしながら、細長い包みを解いていく藤丸。

そこから現れたのは——1本の竹刀しなであつた。

「これって……………竹刀？」

「え、えっと……………アハハツゴメンねーチョコレートのお返しは竹刀なんて……………でも、僕なりに考えてみたんだ。カルデアに来て、君と出会って、^{マスター}今日まで色んなことがあった。君や銀さん達と笑い合ったり、時には悔しくて泣いたり、どうしようもない壁にぶつかって立ち止まったり……………でも君は、マスターはいつだって前を向いていた。目の前にある現実がどんなに辛い時ほど、マスターは笑って僕らを励ましてくれた。……………その在り方に、君の笑顔に、僕の記憶の中で重なる人がいた——泣きたい時ほど笑う人間は本当に強いんだって、その人は最後の最期に教えてくれたんだ。」

「……………新八君。」

「僕は……………僕は強くなりたい。カルデアのサーヴァントとして、君のサーヴァントとして、そして……………君がいつか心の底から悲しんで、声を上げたい程に泣いてしまったい時が来ても……………そんな君を^{サーヴァント}友として、側で支えてあげられるくらいに——僕も君と一緒に、強くなっていきたいんだ。」

「……………。」

「……ええと、ゴメンね？若干シリアスな空気にしちやつて……だからその、もし藤丸君がよかつたら、いつか暇なときにも一緒に劍の稽古けいこなんてどうかな、と思つて……迷惑、かな？」

「……ううん、全然……決してそんなことはない——ありがとう新八君、大切にに使わせてもらうよ。」

「あ……えへへ、どういたしまして！」

「ところで……こっちの箱は何が入つてゐるんだろう（ガサゴソ）……『ワイハー星名物・マカデミアンナッツチョコ』？」

「えつとそれは、その……疲れた時に摘めるおやつ、的てきな？ああつてもバレンタインでチョコなんて飽きる程食べてるよね?! ゴメンよ僕つたら、本当に気が利かな——」

「うんうん、美味しいねこのチョコ！確かに摘めるおやつには最適かも。」

「つてもう食べてるし?!」

「ほら、せっかくだから新八君も食べようよ？こんなに美味しいと俺このまま全部食べ

ちやうかも、ンンンやめられない止まらない（パクパクツ）」
「ああつ藤丸君たら、そんなに一気に頬張って…………ちよつと待っててね、今お茶煎れるから。」

「（よかった…………受け取ってくれて本当にありがとう、マスター藤丸君。）」

【神楽 『うさぎとパンダのチョコ、あと酢昆布』】

2月14日早朝、藤丸の部屋。

「くかく…………すやあ…………。」

「フオウ…………プウ、プウ…………。」

……………
ドドドドドドドドドド、

「キュ……………フオウ？」

「ふがつ……………んん、何……………何の音？」

……………ドドドドドドドドドドドド
!!

「えつ……………えつえつ何なに？地震!!」

ドンドン!!ドンドンドンドン!!

「ぶくじくまぐるウウウウウウツ!!」

ドゴオオオオオンツ!!

「おわああああああつ!!とつ扉がアアアツ!!」

「フオウフオウツ!!」

「(ヒョコツ) いよくお藤丸！カルデアの雌共からバレンタインチョコわんさか搾取出来るアルか？」

「か、神楽ちゃん………おはよう。」

「あれ？チヨコらしきものが全然無いヨ、今年は収穫ゼロアルか？」

「神楽ちゃん、時計見て時計………まだ寝惚け頭の俺だけどき、時刻はまだ朝4時前に見えるんだけどなあ。今しがたまでまだ布団の中でグースカしてただけどなあ………ふあゝあ。」

「フオアゝア………」

「マジでか（チラツ）………あつホントだ、まだお日様も昇らない時間だったアル。朝起きたら藤丸に一番に渡しに行こうと思つて、張り切つて早起きし過ぎたヨ。ごめんナ？」

「まあ、こうして君に扉壊されるのも一度や二度じゃないし………でも次からは4トトラックが突つ込んでくるような勢いでノックするのはやめてね？」

「分かったアル！じゃあ次からはキックにするヨ！」

「ノックもキックもやめて？あとちゃんと勢いは殺してね………それで神楽ちゃん、こんな早朝にどんな用得？」

「フオウ？」

「おつとそうだった、えつとお（カサゴソ）………よし、箱はそんなに潰れてないアルな。ハイ藤丸、ありがたく受け取れヨ！」

【シヤララ〜ンというSE、キラッキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、不器用にリボンが施された可愛らしいラッピングの箱】

「これって……………バレンタインのチョコ？」

「それ以外に何に見えるネ？ いいから早く開けてみるヨロシ！」

「えっ今なの？」

「モチのロンヨ！ 自信作なんだから、まず見てほしいアル！」

「どれどれ、それじゃあ早速——」

リボンを解き、所々やや凹んだ箱を開けると……………カラフルなアルミカップに並べられているのは、やや歪いびつながら可愛らしいウサギとパンダのチョコレート。

「わあっ、可愛い……………！」

「フオーウ！」

「ふふん、スゲーだろ？ 昨日ナーサリーやアビー達と皆でたつくさん作ったアル…………… たつくさん、20個くらい作ったんだけど。」

「？……………んだけど？」

「その……ちよつとずつ味見してたらあんまり美味しくて、止まらなくて……気付いたら、ウサギもパンダも一個ずつしかいなくなつてたヨ。」

「フオーウ……。」

「そ、そつかあ……でも嬉しいよ。そんな美味しかったチョコを俺に2個も残しておいてくれたんでしょ？ありがとう神楽ちゃん。」

「！——え、エへへ……そうアル！神楽ちゃんに感謝しながらありがたく食べるヨロシー！」

「うん！じゃあ後で頂くから、とりあえず一旦机の上に——」

「あつ、待つてヨ藤丸！ええと（ガサゴソ）……はい、コレも上げるネ！」

「これつて……神楽ちゃんがよく食べてる、酢昆布？」

「お前^まにあげるチョコほとんど食べちゃつたからな、その足りない分アル。今日一日でカカオに塗れた口の中のリフレッシュに食べるといいネ。それじゃあな！」

タツタツタツ……

「……行っちゃつた。」

「……フオーウ。」

「…………壊れた扉、どうしよつか？」

「フオウ、ンキュツ。」

「…………そうだね、明るくなったら万事屋呼んで直すの手伝ってもらおうか。」

「フオウ、フオウフオーウツ。」

【定春 『背中に乗せてお散歩してあげる券』】

2月14日、（もはや恒例の）カルデアの廊下。

「はい定春、君にもバレンタインプレゼントだよ。」

【シヤララ〜ンというSE、キラツキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「わう?！」

「ワンちゃんにチョコレートはNGだから、代わりに美味しいビーフジャーキーにした

んだ。いつも本当にありがとう、よかったら食べてね。」

「ワンツ！ワンワンツ！（ガバツ）」

「うわっ！ちよつ重い……アハハ！くすぐつたいよ定春、つてギヤアアア涎よだれがっ涎よだれが服の中にイツ！！」

「あれゝ定春、その啜くわえてる包みどうしたアルか？」

「ワンワン！」

「んん……？コレと同じの、銀ちゃんと新八も持ってたネ。もしかして藤丸から貰ったバレンティンアルか？」

「わうっ！（コクリ）」

「どれどれ中身は……おお、ちゃんと定春に配慮したジャーキーが入ってるネ！流石は藤丸、気遣いも出来る私らの頼れるマスターアル！」

「わんっ！……くうーん。」

「ん？どしたの定春？」

「わう、わうう……。」

「……もしかして、藤丸にジャーキーのお礼したいアルか？」

「わんっ（コクリ）」

「よっし！それならホワイトデーまでに、藤丸が喜びそうなこと沢山考えるアル！」
「ワンワンッ！」

——後日、3月14日。

「ワンワッンッ！（ドンッ！）」

「おっふ！！痛たた………どうしたの定春？」

「わんっ！ワンワンッ！」

【シヤララッンというSE、キラッキラのエフェクトが（以下略）】

【そして渡される、黄色いリボンの（以下略）】

「これは………でつかい肩たたき券？いや違うな、何か書いて………『背中に乗せてお散歩してあげる券』？」

「わんっ！」

「あ、手紙が添えてある。これは神楽ちゃんからかな……」

【藤丸へ】

定春にもバレンタインプレゼントありがとナ。お返し何にしたらいいか二人で考えた結果、私の特等席である定春の背中に特別に乗せてあげる券にしました。使い方は定春に許可を取ってから、券に肉球でスタンプを押ししてもらえばいいはずなので。どうか楽しく使ってください 神楽より

P・S ジャーキーなかなか美味かったアル。次は私の分も用意しとけよナ。」

「って君もジャーキー食べたんかいっ!!もう神楽ちゃんたら、定春の分だっていうのに……。」

「わふっ（グイグイ）」

「うわっ……もしかして定春、早速この券使ってほしいの?」

「ワンッ!」

「………そっか。じゃあ今からダヴィンチちゃんのところに行つて、どこか走り回れそうな広い場所のシミュレーターでも起動してもらおう!」

「ワンッ!ワンワンッ!」

《礼装解説》

【『侍魂と、マカデミアンナッツチョコ』】

志村新八からのバレンタインのお返し。

マスターに渡した竹刀は、彼のいた家が経営する道場『恒道館』にて日々の鍛錬として使用していたのと同じものであり、初心者でも扱いやすい。

……マスターの、大切な友からの贈り物に対する最高のお返しをする為にと、日々頭を悩ませてきた新八が答えとしたのは——この竹刀と、共に込めた己の『侍魂』。

これから訪れるであろう苦難も、耐えられない程の悲傷も乗り越えていける強い心を、マスターと共に築いていきたいという願いと共に送られた一品。

剣の振り方の指南であればお任せあれ。この恒道館道場・天堂無心ビームサーベ流跡取りである志村新八が、その真髓を一からご教授致しますよう。

因みにマカデミアンナッツチョコは普通に美味しい只のおやつ。新八に頼まれて取り寄せを行ったダヴィンチもこのチョコ菓子を大層気に入り、彼女の工房に高々とその箱が積まれている光景が暫く見られたとか。

【『うさぎとパンダのチョコ、あと酢昆布』】

神楽からのバレンタインチョコ。

カルデアの女の子友達と皆で楽しく作った、ウサギとパンダの形をした可愛いチヨコレート。可愛く美味しく、何よりマスターが喜んでくれるようにと想いを込めて作られた一品。

しつかり味見をするために、一口。思いのほか美味しく出来たのが嬉しくて、もう一口。マスター喜んでくれるアルかな、またまた一口……あれ？20個ほど作ったはずのウサギとパンダが一匹ずつしかいなくなってるヨ？何で、味見するとチョコ無くなってしまうん……？などというプチャプニングを経て、漸くマスターの元へと届けられた生き残りの二匹のチョコ達。部屋の扉を直した後に、無事美味しく頂かれた。

困ちなみにおまけとして渡された箱入り酢昆布は、彼女が言ったようにカカオの甘味で満たされたお口のリフレッシュに最適だった模様。ノンツ程よく酸っぱい。

『背中に乗せてお散歩してあげる券』

定春からのバレンタインのお返し。

普段は飼い主である神楽しか乗せることのない、そんな彼の背中に乗れるという特別なチケット。使い方は簡単で、使用したい旨むねを伝えて券を呈示ていじすればよい。定春が了解すれば、その証として券に彼の大きな肉球スタンプが押され、これで完了。後はシミュ

レーシヨンなりレイシフト先なりで、定春の大きくてモフモフな背中に乗ってお散歩を
楽しめるのだ。

ただし、安全ベルトの類は存在しない上に、定春は容赦なくスピードを上げたり急旋
回しなりなどするため、振り落とされないようにするにはしっかりと掴まるか、また安全
策として乗り慣れている神楽にも同乗してもらうことを強くお勧めする。

《続く》

銀さん+αと藤丸 カルデアカカオ祭り（Ⅲ）

【桂小太郎 『雪白片吟・絶対障壁（レプリカ）』
イザベラ ブロックリエ】

2月14日、（もはや恒例の）カルデアの廊下にて。

ツターンツ、ツターンツ（床を蹴るSE）

「んんん♪フフフフ……♪」

「（……あからさまに上機嫌な桂さんが、向かいから軽快なスキップと共にやってくる。）」

「ん？……おおつマスターではないか。いやいやこれは、恥ずかしいところを見られてしまったな。」

「こんにちははツラさ……桂さん、随分ご機嫌みたいだけど、何かいい事でもあつた？」

「ふっふっふ……今何か言い掛けたような気もするが、気分がいい俺の耳には入らなかったことにしよう。実は先程まで食堂にいたのだが、何やら今日は何時いつにも増して賑やかでな。折角なのでその場にいたモフモフ系サーヴァントや胸キュンアニマルの

面々との歓談や触れ合いに、楽しく時を過ごしていたのだ。しかもここに来る途中も運のいいことにドウムジ殿と出くわしてだな、あの黄金に輝く羊毛をモフモフさせてもらって……ああ、思い出すだけで何という至福！」

「あの桂さん、涎よだれが凄いことに……。」

「むっ、いかんいかん（ゴシゴシ）……しかしマスターよ、カルデアとは誠に素晴らしい場所であるな。様々な時代の様々な英雄や偉人達、果ては神仏までもが同じ空間に存在し、彼らと語らうことが出来るなど、正に奇跡と言っても過言ではない……それに、それに何より、だ。」

「何より……？」

「……マスター、俺は貴方きみに感謝かんしゃをしている。銀時や高杉、新八君にリーダーに定春君、そして……こんなにも嘗て縁ゆかりを結んだ者達と、こうして英霊サーヴァントという形となつて巡り合えたこと。そして同じ目的や使命を全うする『同志』なかもとして、彼らと再び肩を並べられたことが出来たのも……全て君のお陰だ、本当にありがとう。」

「……桂さん……。」

「さて、では俺も行くとするか。この後『カルデアもふもふ愛好同盟』の会合があるのでな。失礼するぞマスター。」

「うん——って、待って待ってちょっとだけ待って!!（ガッシイ）」

「痛だだだだっ!! どうしたマスター、何故俺なにゆえの髪を引つ張って痛い痛い抜けちやう抜けちやうっ!!」

「あ、ゴメンごめん……………えつとき、桂さんに渡しておきたいものがあつて。ハイこれ。」

【シヤララ〜ンというSE、キラッキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「……………マスター、これは?」

「ほら、今日はバレンタインでしょ? 男から渡されても嬉しくないと思うだろうけど……………それは普段お世話になってるサーヴァントの皆にも渡してる感謝の印、まあひらたく言えば、感謝チョコってやつかな。」

「感謝の、チョコレート……………マスターが俺に……………。」

「(あれ……………沈黙しちやった……………)も、もしかして迷惑だった? ゴメンね、いきなり引き留めておいてこんなの渡しちやって……………」

「ハッ! すまない、あまりの驚きに固まってしまっていたようだ……………迷惑なものかマスター、礼を言いたいのはこちらの方だというに……………ありがとう、大切に頂くとしよ

う。」

「よ、かったあ〜……こちらこそ、お口に合えば何よりだよ。それじゃツラさん、会合楽しんできてね！（ダツ）」

「あつ待てマスター！ツラじゃなく桂、でなくてだな——ああ、行つてしまつた。」

「……日頃の感謝の形、か。ならば俺も、これに込められた想いに、形として応えねばな。」

* * * * *

——1か月後、マスターの部屋。

「失礼する、マスターはいるか？」

「ハイハイいますよ〜……つてツラさん？」

「フオウ、フオウ。」

「おおっフオウ殿！今日も素晴らしきモフモフ……ンンツじゃなくてだな、まずツラ

じゃない桂だ。してマスター、今は時間があるだろうか？」

「うん。見ての通り暇を持て余してフオウ君にマツサージを施ほどこしてるところだから、どうしたの？」

「いや何、その……まずは先に礼の言葉を言わせてくれ。先月に君から貰ったあのチョコレート、大変美味であつたぞ。横から銀時やリーダーに何度も奪われそうになりながらも、自分の分はちゃんと完食出来たからな……あれだけ想いの籠かごもつた菓子、食べきつてしまうのが勿体無もったいいくらいだった。本当にありがとう、マスター。」

「いやあ……そこまで感謝されちゃうと、何か照れ臭いな。でも食べてくれて嬉しいよ、こちらこそありがとう。」

「うむ………して今日はアレだ、『ホワイトデー』というバレンタインに受けた恩やら仇やらをすっかり耳を揃えた上に三倍にして返す、という日なのだろうか？なので俺も、君に贈りたいものを用意してきた。どうか受け取つてほしい。」

【シヤララ〜ンというSE、キラッキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋——と同時に、突如暗くなる藤丸の視界】

「ふがつ？！もいもい……!!」

「ドツフオウ!! フオーウツ!!」

「どうだマスター、着心地は問題無いか?」

「『着心地つて……あれ? 何このプラカード、そして何この会話形式(・・?)』」

全身が何かに覆われる違和感に、藤丸は近くにあつた鏡を恐る恐る覗く。

——そこに映っていたのは、自分の髪形と揃いの桂、ではなくカツラを頭頂に装備し、自身の口から出る筈の台詞が記されたプラカードを掲げるエリザベスの姿。

「『な——なんじゃこりやアアアアアツ!! Σ(。∩。)』」

「うむ、やはりヅラはあつたほうがいいな。いやヅラとは俺のことではなくカツラのこと
でな、因みに俺はカツラでなく桂だ。」

「『いや知ってますけど、てかコレ何?! 前にもこんなコトなかつたつげ!! (・・;)』」
「フオフオーウ!」

「ふふん、その通りだ。マスターは以前にもこのエリザベスを着用したことがある
……この度俺が君に用意したものは他でもない、俺の宝具の一つである『雪白片吟・
ブルークリエ』……その複製品だ。」

「『ほ、宝具の複製品……ですと(？―？)』」

「ダヴィンチちゃん殿を始めウラド三世殿やミス・クレーン殿、それに最近仲良くなったハベにゃん殿にも協力を頂いてな。レプリカといえど俺の宝具の着ぐるみと変わらず、繊維一つ一つに魔力を丁寧ニに編み込んである。性能は宝具と同様に外気温への変化と対応、また耐久度の向上に加え呪詛返しも健在だ。しかしそれだけではないぞ？何とこのレプリカ、魔力をチャージしておけば例え俺が側にいなくとも、ある程度の時間は自立行動が可能なのだ！これなら万が一レイシフト先で俺達とはぐれる事態に陥おちいったとしても、コレを被っておけば例え敵に襲われようが隕石が降ってこようがマグマの海にダイブすることになるうが、絶対に君の身の安全を保証してくれることだろう。」

「『す……凄いつ!!Σ(・ω・ノ)ノ!』」

「フォーウー・スツゲエフォーウー!」

「ハハハ、そうだろうそうだろう凄いだろう………実を言うと、このレプリカの作成はバレンタインよりずっと以前から、ダヴィンチちゃん殿と合同で行っていたものでな。カルデアの崩壊に始まり、発生した特異点や異聞帯の攻略は日々苛烈を極めている。いつ命の危機……いや、前触れのない突然の死が訪れるやもしれないこんな状況下にあるからこそ、マスターを——藤丸立香を、そんな理不尽や災厄から少しでも遠ざけられたいと、そう願いを込めて作らせてもらった。バレンタインのお返し、という形になっ

てしまったが………どうか受け取ってはくれないだろうか、マスター。」

『桂さん………勿論だよ！わざわざ俺のために、本当にありがとう！（*・^）』

「………そうか。俺も、喜んでもらえてよかった………休息中に邪魔をしたな。他にもバレンタインのお返しを持ってくるサーヴァントも訪れることだろうし、俺は退室するでしょう。ではなマスター、それにフォウ殿。」

『うん、バイバイ（^・^）／＼』

「フォウフォウイ。」

『………ところでフォウ君（・ω・）』

「キュ？」

『この着ぐるみなんだけどき………どうやって脱げばいいんだろう（；・ω・）』
「マジフォウウツ！」

【高杉晋助 『胡蝶の簪』
かんざし】

2月14日の朝、（お決まりの）カルデアの廊下にて。

「あつ、高杉さんおはよう。随分早起きだね？」

「ん……………ああ、お前さんか。」

「今高杉さんが出てきたところって、教授……………モリアーティのバーだよな？もしかして朝になるまで銀さん達とお酒飲んだの？」

「いや、銀時の野郎は先に酔い潰れて、ツラととづくに部屋に帰ってつたぜ。今にも吐きそうなヤツの顔とツラの狼狽あわてつぷりときたら……………ククツ、お前にも見せてやりたかったな。」

「もう、笑つちや悪いよ……………それじゃあ、今までバーには一人で？」

「いや。途中から来た他のサーヴァント連中に絡まれてな、そこからずっと？んだり駄弁だべつたりを繰り返して、今しがた解散したつてとこだ。」

「へえ……………（ジ〜）」

「……………おい、言いてえことがあんならさつきと言いな。」

「えつ、ああつゴメン！気を悪くしないでクダサイ……………何ていうか、高杉さんつてカルデアに来てサーヴァントの皆と積極的に話してるところってあまり見かけなかったし、一匹狼なイメージがあつたからさ。ちよつと意外だなんて思つて。」

「別に驚くほどのことでも無エだろ。好き好んでこっちから慣れ合わねエってだけで、わざわざ声掛けてくる奴の厚意は無下にはしねえさ……………約一騎を除いてな。」

「約一騎?」

「あのライダー……………バーソロミューとか名乗ってたな。今更だが何なんだ奴やつさんは? 初対面の時から俺を見かけてはやたらと近寄ってきやがって、やれメカクレが何だのと騒ぎやがる。頭にきたから左目覆ってる包帯取っ払ってやったら、今度は呼吸荒げて余計に興奮する始末だ。」

「あ……………確かにそれは余計にメカクレ度が上がっちゃうだけだから、火に油どころか火事場にダイナマイト突っ込むようなものでもないなあ。」

「とにかくだ、マスターとしてお前さんからも奴に注意しておいてくれ。でないとな俺の周りを飛び回ってる炎こいつの蝶ちょうが、いつカルデアを火の海にするか分からねエからな……………」

「あわわっ、嚴重に注意しときますんで! だから今はちようちよ抑えてっ!!」

「フン、精々よろしく頼むぜマスター。それはそうとお前さんこそ、こんな早朝から出歩いてどうしたんだい?」

「おっとそうだった。実はその……………こちらをお渡ししたくて。」

【シヤララ〜ンというSE、キラツキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「……………あ？」

「どうぞ！高杉さんのお口に合えばよいのですが……………!!」

「口に、つてことは消えもの…………菓子たぐいの類か。何でまた俺に……………ああ成程、そういうことか。なんせ今日はバレンタインデーだもんなア？」

「うん、その通り……………中身は俺からのチョコレートで、日頃のお礼を込めた感謝チョコっていうか……………ああでも、もし高杉さんが甘いもの得意でなかったら他のものも用意するし、そのチョコは処分するなり銀さんちゃんにあげるなりしても構わないから。」

「阿呆、誰がそんな勿体無エことするかよ。銀時ヤツほどじゃねえが、俺も嗜む程度には甘味くらい摂るからな……………にしてもバレンタインか、鬼兵隊でも毎年この時期になると、また子が律儀に渡してきたっけな……………ともあれコイツはお前さんからの折角の気持だ、ありがたく受け取らせてもらうぜ。」

「う、うん！貰ってくれてありがとう、高杉さん！」

* * * * *

——1ヶ月後のホワイトデー、マスターの部屋。

「おう、邪魔するぞ。」

「ハ〜イ……………つて高杉さん？俺の部屋まで来るなんて珍しいけど、どうしたの？」

「ほらよ、やる。」

【シヤララ〜ンというSE、キラツキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、シンプルなデザインの小さな紙袋……………が宙^{ちゆう}へと放られる】

「えっ、わっわわ！おっとと……………ふう、間一髪で間に合った。」

「ククツ、大分反射神経が良くなってきたじゃねえか。これも日頃の訓練^{たまもの}の賜^{たま}つてやつか？」

「もうっ、笑ってる場合じゃないでしょ……………というか、コレは何？」

「おいおい、今日が何日も忘れちまったかい……………前の月の今頃、お前さんから貰った感謝^{きんしゃ}の細^こやかなお返しだ。」

「お返しって……………わざわざ俺の部屋まで届けにきてくれたの？つてかそんな大事なもの

の放り投げたら駄目でしょ！折角のお返しに何かあったらどうすんの!!」

「悪い悪い。だがお前さんから貰ったモンに比べりや、大した礼になるかは分からねえがな。気に入るかどうかはマスター次第だ。」

「もう……………それじゃ、早速開けさせてもらってもいい?」

「ああ、構わねえよ。」

高杉の了承を得て、開封されるプレゼント。

明らかに高価な桐箱を開けると、そこに入っていたのは――

「うわあつ……………凄く綺麗な蝶々の、これつて簪?」
かんざし

「ああ、簪だ。とある手先の器用な英^{サーヴァント}霊に協力を依頼してな……………何でも自分^{てめえ}でもよくは分からねえが、どうしても髪飾りを作つてやりたい相手がいるんだとよ。俺がデザインやら装飾やらを手伝つてやるのを条件に、そいつも拵^{こしら}えてもらったつてわけさ。」

「その英霊つて……………いや、今は何も言わないでおくよ。でも高杉さん、こんな素敵な贈り物嬉しいけど、俺結えるほど髪長くないからなあ……………そうだ、いつそこれを機に伸ばしてみようかな?」

「まあその辺はお前に任せるが、何も簪の役目は髪に差すだけじゃあねえさ―――」

れ、貸してみろ。」

「うん——つて近！急に距離が近い!!」

「おつ丁度いいな、このストール借りるぞ………簪つてのはな、こうやって首に巻いたストールやらマフラーやらを留めておくのにも使えんだよ。あとは服の胸ポケットに挿しといたり、帽子がありやあそこにもアクセントとして——おい、聞いてんのかマスタ—？」

「アツゴメンナサイ、何力緊張シチャツテ……。」

「落ち着け。顔も口調も銀時ンとこの下の店にいた猫耳天人みてえになつてんぞ………それよりどうだ？鏡見てみろよ。」

「あ、ありがとう………おおく！いつも巻いてるだけのストールがお洒落な感じに！」

「飾り一つあるだけでも違うだろ？人理を守るのも大儀なことだが、たまにはこうやって着飾ることを楽しみにすんのもいいんじゃないやねえか？」

「うん、凄くいいよ！ありがとう高杉さん！でもこんなに綺麗な簪だから、気をつけててもうっかり壊したりしたら嫌だなあ……。」

「その辺は心配いらねえさ、例え象に踏まれても飾り一つ取れねえくらい頑丈にしといてくれつて頼んどいたからな。」

「ええ……嬉しいけど、俺つてそんなにおつちよこちよいに見えるかな？」

「俺から見りゃあ人類最後のマスターなんてのも、ガワを剥ぎやあ只の生意気なガキつてことに変わりやしねえさ……それに、壊れにくくしたつてのにもちやんと理由だつてある。」

「理由つて、どんな？」

「いいかよく聞け……簪つてのはなあ、昔から暗器としてもよく使われてる代物だ。もしお前さんが連れのサーヴァントとはぐれた先で、もしもならず者に襲われたなんてことになつたんなら……躊躇うこたアねえ、こつちが殺られる前に 簪で目ん玉だの喉笛だの、迷わずぶつ刺しちまいな。」

「え——ええええエエエツッ!」

「クククツ……何だアその間抜け面? 安心しな、ほんの戯事だよ。第一過保護なカルデアの連中のことだ、一秒一瞬でもお前さんを一人にしておくわけがねエだろうからな。」

「あ、アハハ、そつかあく冗談かあ……あはは、は……。」

「(……………ああビックリした。高杉さんが言うのと、全然冗談に聞こえないんだもんなあ……………)」

「おまけの特別ゲストサーヴァント」

2月14日、深夜のキッチンにて。

「いよつし、チョコ作り無事終わり〜！」

調理台の上に所狭しと並べられたチョコレート達。各サーヴァントや職員達へ贈る分も含め、その数も凄まじい。

「ふあくあ……………さて、後は全員分の包装を——」

「よ〜つすマスター、こんな夜中に何やってんだよ？」

「つぎよわああアアアアアツ!!でで、出たアアアアアツ!!」

「うわ声デツカ……………流石にこんな時間に騒いじや安眠妨害なんじやねーの?」

「あつゴメン……………つていうか銀さん、そもそもアンタがいきなり天井から逆さまになつて登場してきたからでしょ!」

「ハハハ、悪イ悪イ。たまたま厨房の前通りがかったら、俺のよく利く鼻が甘〜いスイー

ツな匂いを感じしたもんでな。」

「全く……………あれ? ていうか銀さん、色々疑問に思うところはあるんだけどさ……………さつきから浮いてない? 物理的に。」

「うん、浮いてっけど。だって今お前の眼の前にいんのはさあ、銀さんは銀さんでも——
——白面銀毛のお狐さん、だかんな。」

ニヤリと不敵に嗤う銀時。

一本、二本と増える尾が広がり——遂には九本、銀色の九尾が藤丸の眼前でゆらゆらと揺れる。

「……………やつぱり、『キヤス銀さん』か。」

「そ。劍セイバーの俺よりちよつとだけ悪戯好きで、ちよつとだけ口も頭も回る賢いキヤスターの銀さんでつす。「え? 誰この亜種銀さん?」とか思ったそのお前、詳しくは『銀さん? と藤丸+α 祝・万聖節前夜祭』を読んでくれよ。にしても本当久しぶりだよなあ、出番としちや4年振りか?」

「だねー、この作品の更新が停滞してる間も含めたらそれくらい——」

「お〜お〜、にしても美味そうなチョコだな、どれ一個いただきっ (パクッ)」

「つてちよつと！何もう食べちゃつてるのさ!! あくあもう、せつかく綺麗に包装してからあげようと思つたのに……………」

「え、そうなの？悪かつたつてマスター、そんな落ち込むなよ。でもほらこのチョコ、すんげえ美味えぞ。」

「本当？味見もまだだつたから自信無かつたけど、それならよかつた。」

「でもよマスター、何でこんな大量のチョコプレート作つてんだ？小さな洋菓子店でも開く気なら、キヤス銀さん通つちやうけど？」

「違うよ、これ全部バレンタインの贈り物だからね。」

「バレンタイン？バレンタインねえ……………ああ、確か日頃の感謝やら情愛やらを菓子と一緒に送り合うイベントだろ？玉藻の姐ねえさんから聞いたことあるぜ。つてことはこのチョコ、キヤス銀さんのも入つてたつてことか？」

「モチのロンよ。でもたつた今その自分の分は食べちゃつたじゃない？だからキヤス銀さんのはそれつきり、おかわりとかはないんだからね！」

「ちえ……………まあいいか美味かつたし、ごちそーさん。」

「もう、本当は日頃の感謝とか色々と述べてからきちんと渡したかつたのに……………」

「いやゝあまりに美味そうで我慢出来なくてさ。でもホラ、時計見てみろよ。」

「時計？……………マジでか、もうとつくに日付変わつちやつてたよ。」

「な？てことはだよ、今日はもうとつくにバレンタインデーじゃねえか。つまり俺は誰よりもどのサーヴァントよりも早く、マスターからのチョコを貰えたってわけだ。いや〜お前にぞつこんなサーヴァント連中がこのこと知ったら、嫉妬の炎でこんがりフランべされちやいそうだわ。お〜怖っ。」

「怖いと言いつつ笑顔なところが、流石キヤス銀さんだよね……。」

「よくしそれじゃ、お前からのハジメテも頂いたことだし？邪魔にならないうちにキヤス銀さんは撤退するとすつか。」

「おいいい方。それ他に誰かいる前で絶対言わないでよホントに。」

「そうだ。確かバレンタインチョコって貰ったら、一月後の同じ日に何か返さねえとなんねえんだろ？えつと確か……ホワイトデーつつたか？」

「いいよ別にお返しなんて、俺が日頃の感謝として皆に送ってたかっただけだし。」

「いいやそうはいかねえ。受けた恩も恨みもキツチリ返すのが獣の矜持きやうじだって、光と闇のコヤン姐さん達からも日頃から言われてっからな……いよっし、こうなったらキヤス銀さんもホワイトデーに向けて何か考えておかねえとな。じゃあマスター、邪魔したぜ〜（ポンツ）」

「えっ？あちよつとキヤス銀さ——つてもう消えちゃった。まあともあれ、チョコレートは渡せてよかったな……さーて日付も変わっちゃったし、包装頑張るぞお！」

* * * * *

——1か月後のホワイトデー、マスターの部屋。

「(ヌツ) よろっすマスター、邪魔するぜ。」

「のわぎやああアアアアアツ!! 出たアアアアアツ!!」

「おいおい、キャス銀さん先月もその反応見たような気がすんだけど。デジャヴ?」

「だからもうっ!! 天井からいきなりヌルツて登場してくんのやめてっば! 心臓止まりそうになった、ていうか一回止まったんじゃねコレ!」

「ハハハ、悪かったって。まあそうプリプリすんなよマスター、いいモン持ってきてやったんだからさ。ほらコレ、お前にやるよ。」

【シヤララ〜ンというSE、キラッキラのエフェクトがかかる背景】

【そして渡される、黄色いリボンの赤い袋】

「これって……………もしかしてホワイトデーの?」

「そ。あれからキャス銀さんが回る頭を更に回転させて、俺中の狐龍バアちゃんとも考えた逸品だぜ。」

「へえ…………でもキャス銀さんの考えることだから、袋開けたらお化けとか飛び出してくるとかは無い？」

「ナイナイ。ほらほらいいから開けてみるよ、キャス銀さん早くお前のリアクションが見たいなあ。」

「それじゃあ遠慮なく…………お、また袋が出てきた。中に何かコロコロ丸いものが入って……………」

布袋の中身を手に取り、まじまじと観察する。

透明なセロファン紙に包まれたそれは、小さな紅い飴玉。照明に掲げてみると、中で揺らめく光が、まるで炎を彷彿ほうふつとさせた。

「わあ…………綺麗！」

「だろ？名付けてキャス銀さん特製・九尾の天眼キャンデーだ。味は断固イチゴ味、これだけは銀時オリンナルからの受け売りで譲れねえさ。」

「九尾の天眼って、凄いなーミングだね…………まあ確かにこんなに綺麗だし、食べちゃうの勿体無いくらいだよ。」

「おつと実はそのキャンディー、只の飴ちゃんじゃあないぜ？伊達に九尾の天眼なんて大それた名前をつけたわけじゃねえからな。」

「只の飴じゃないって、どういふこと？」

「マスター、『天眼通』って知ってるか？一切の事物を見通しちゃう能力でな、所謂千里眼ってやつだ。カルデアにいるサーヴァントだと、花の魔術師の兄さんとか眉間に皺寄せてる王様が持つてるみてえだがな。俺と霊基が混ざってるこの九尾がその天眼持ちのすっげえ狐様でさ、まあその影響でキヤス銀さんも色々と視えちゃうんだけど……とまあそんなチートな九尾の天眼をちよいとばかり体験できるようにしてみたら面白くないじゃねえかと思つてな、んで作つたの。」

「作つたって……じゃあこの飴、千里眼になつてること？」

「千里眼つってもお試し版だけだな。そいつを包みから出して光に透かせば、少し先の未来が覗けるって仕組みさ。まあ本物ほどじゃねえから、数秒か数分先の出来事が見えるってだけなんだがな。使い終わつたら只の飴ちゃんに戻るから、美味しく食べてくれよ。」

「す、凄い……何かチョコレートのお返しとはいえ、とんでもないもの貰っちゃったよな……………」

「マスターからの愛の籠もったチョコを一番乗りに頂いちゃったからなあ？お返しも張

り切らせてもらったぜ？」

「あ、愛つていうか感謝つていうか……でも、ビックリしたけど嬉しいよ。ありがとう
キャス銀さん。」

「うんうん、喜んでもらえてキャス銀さんは感無量だ。閑話の方でしか出番が無い身だ
が、これからもよろしくな？ 藤丸。」

《礼装解説》

【雪白片吟・絶対障壁（レプリカ）】

桂小太郎からのバレンタインのお返し。

彼の宝具の一つである『雪白片吟・絶対障壁』の模造品。要はエリザベスの着ぐるみ
礼装。

レプリカといえどその性能は宝具と同様で、衝撃への耐性は勿論のこと耐熱・耐冷に
も優れ、呪いや毒も弾き返してしまう。また水の中でも一定時間の生存が可能で、更
には大気圏突入も一回までなら耐えられるチート要素てんこ盛りな着ぐるみなのだ。

………強いて弱点を挙げるとすれば、この着ぐるみは着用した後さあ脱ごうとなつて

も、そこに誰かもう一人がいなければ脱げない。否、誰かしらの手を借りないと一人で脱ぐことが出来ないというデメリットが存在してしまっている。

(※ちな因みにあの後マスターはフォウ君に呼ばれて駆けつけたマシユに手伝ってもらい、何とか事なきを得たのだとか)

【胡蝶の簪かんざし】

高杉晋助からのバレンタインのお返し。

マスターの瞳の色の石を蝶の羽部分にあしらった、お洒落な金色の簪。

『とある英霊』の協力の元に作られ、強度にも優れちよつとやそつとのことでは壊れない逸品。因みにデザインを手がけたのは高杉自身でもあり、その『とある英霊』が『ある人物』に送りたいと望んでいた髪飾りのデザインにも携たずさわったのだとか。

結わえた髪に挿すのは勿論のこと、帽子にアクセントとして付けたりマフラーやストールの留め具として使用するなど、男女兼用で楽しめるお洒落アイテム。

——とところで一説によると、簪をプレゼントする際に込められる意味には魔除けの他に、『貴方／貴女を守ります』という強い想いもあるのだとか。

それを知つてのことか、はたまた敢あえて口から告げないのか………伊達男は素知らぬ

顔で燃える蝶の灯りの元、今日も煙管を吹かしていることだろう。

【九尾の天眼キャンディー（イチゴ味）】

キヤスター・坂田銀時ことキヤス銀さんからのバレンタインのお返し。

自身の着物と同じ素材の布袋に入れられた、透き通った深紅の飴玉。中を覗くと炎の揺らめきのように光が躍わどっている。

この飴玉、何と彼の中に宿る九尾の能力である『天眼』を実際に体験出来るというト
ンデモスイーツになっている。何てモノ作り出してるんだこの銀さんは。

といつても所詮はお菓子、遙か未来の予知などという大それたことは不可能であり、
精々数秒・数分先の世界が覗けるか、後は今日の運勢を朝一に占うくらい。それでも
充分凄いのだが。使用した後は能力は消失するので、只の美味しい飴ちゃんに戻る。味
はキヤス銀さんも大好きなイチゴ味。美味しく食べてね。

実を言うと、キヤス銀さんに本当はイチゴミルク味にしたかったそうなのだが、乳
成分を入れるとどうしても白く濁ってしまい、『折角の千里眼もこれじゃまるで意味無
いじやろがい』と内なる狐龍様にお叱りを受けた模様。

《おしまい》